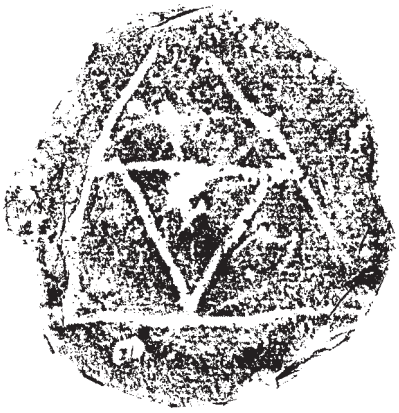
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1086 集

博多（はかた） 135

博多遺跡群第 172 次調査報告



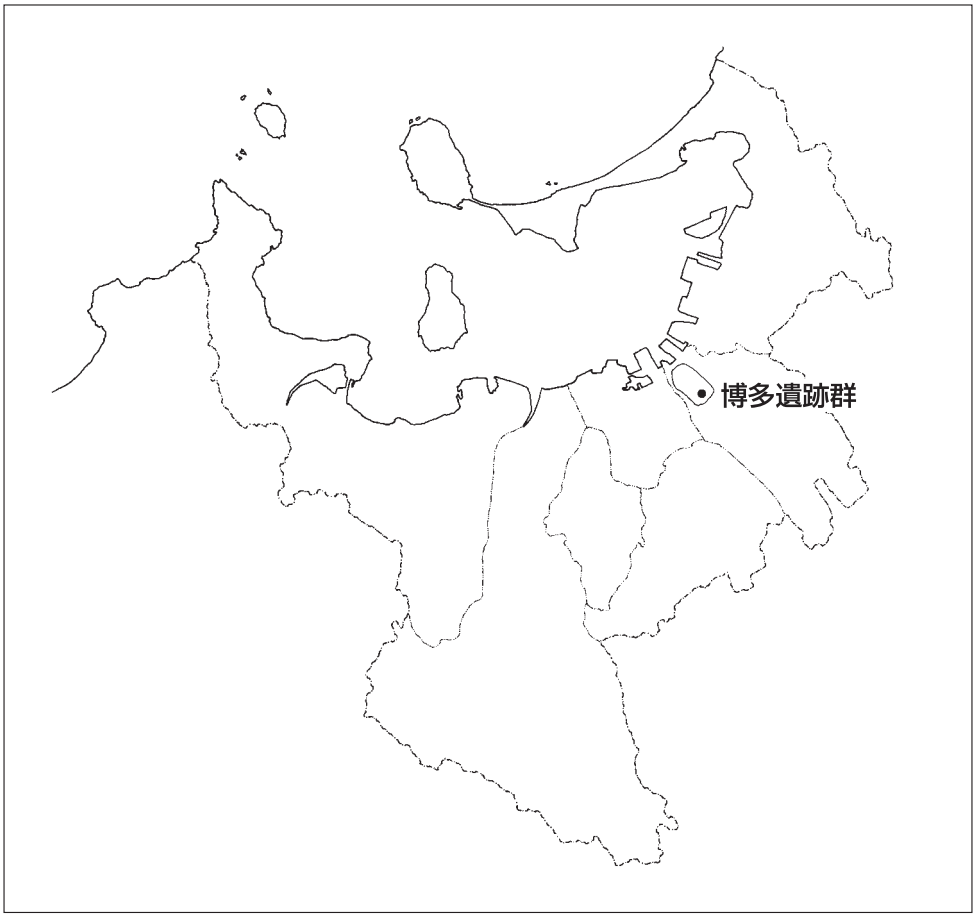
２０１０

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1086 集

博多（はかた） 135

博多遺跡群第 172 次調査報告



調査略号　HKT-172
調査番号　0705

2 0 1 0

福 岡 市 教 育 委 員 会

巻頭カラー１　博多遺跡群全景（上空から）

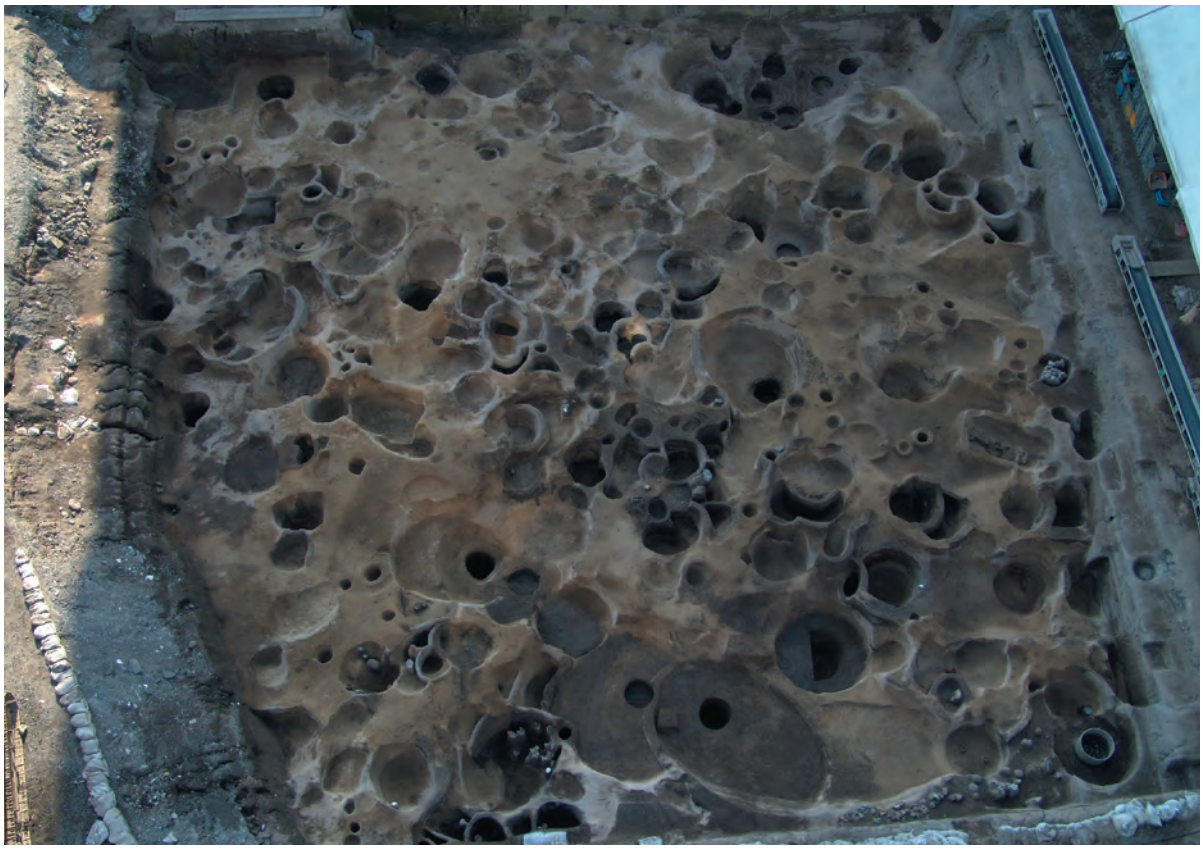
巻頭カラー２　博多遺跡群第 172 次調査地点全景（南西から）

巻頭カラー３　AB 区検出区画溝（北東から）

巻頭カラー４　Ａ区第３面全景（南西から）

巻頭カラー５　Ｄ区第１面全景（北東から）

巻頭カラー６　Ａ区第２面検出土師器廃棄遺構（東から）



巻頭カラー７　Ｃ区第３面全景（北東から）

大内氏の菱紋（左）
北条氏の三つ鱗紋

SK309 粉青沙器壷

SD264 朝鮮陶磁器

SK168 出土陶磁一括

巻頭カラー８　出土遺物１

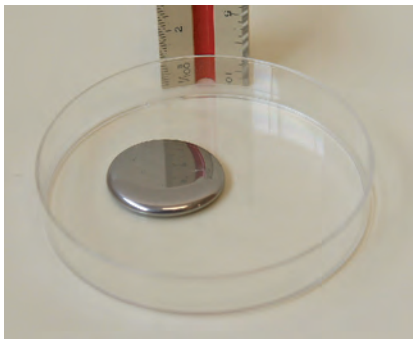
D 区 SK-961出土　弥生土器鉢

D 区 SK-229 出土　刀子

D 区 SK-961 出土
磨製石剣未製品

D 区 SK-998
出土　鉄剣

D 区 SK-229 出土　古瀬戸柄付片口



D 区 SE-842 周辺出土　水銀

C 区 SE-686 出土 石製筐

巻頭カラー９　出土遺物２

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを後世に伝え残していくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の都市部周辺における開発事業の増加に伴い、止むを得ず失われていく埋蔵文化財の発掘調査を実施し、失われていく遺跡の記録保存に努めているところです。

本書は、博多遺跡群第172次調査の成果を報告するものです。本調査では弥生時代前期から中世にかけての集落遺跡を調査し、博多遺跡群の初期の様相と連綿と継続する中世都市「博多」の全容を知る上での多くの貴重な成果をあげることができました。また、調査で発見された多種多彩な貿易陶磁器は、「博多」が一大貿易都市であったことを如実に物語るものです。

本書が、市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、費用負担をはじめとする御協力を賜りましたクールスプリングインベストメント特定目的会社の皆様をはじめ、多くの方々のご協力とご理解に対し、心からの謝意を表します。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長　山　田　裕　嗣

例　　言

1．本書は、福岡市博多区冷泉町63番地内おけるオフィスビル建設工事に先立って、福岡市教育委員会が平成19・20年度（2007・2008年度）に実施した博多遺跡群第172次調査の発掘調査報告書である。

2．本書の執筆・編集には池崎譲二・本田浩二郎があたった。

3．本書に使用した遺構実測図は池崎・本田・立石真二・林田憲三・谷直子・中村理・保元良美・山口朱美が作成し、製図した。

4．本書の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北であり、真北より6°21′西偏している。
　なお、本書に使用している座標は、国土座標第Ⅱ系を用いている。

5．本書に使用した遺物実測図は池崎・本田・松尾奈緒子・撫養久美子・立石・絹畠歩が実測した。なお石器の一部については山口譲治、鉄器については福岡市埋蔵文化財センターの石井千絵里が処理および実測を行った。遺物実測図の縮尺は土器類を1/3・1/4、銅銭を1/1に、石器・金属製品等については1/1・1/2の縮尺を基本としている。縮尺については図中に示した。

6．遺構は種別を問わず、調査時に検出順に通し番号を付し管理を行った。

7．銅銭・銅製品・墨書土器については、大庭智子が処理と整理の一部を行った。ガラス製品については文化財整備課の比佐陽一郎と石井千絵里が整理と報告の一部を行った。なお、自然科学分析については株式会社古環境研究所に委託し、魚骨などの動物遺存体については山崎純男・奈良崎和典が報告を行った。

8．本書で使用した遺構写真は池崎・本田が撮影した。

9．本書での陶磁器の分類は「大宰府条坊跡XV　陶磁器分類編　太宰府市の文化財第49集　2000年」に拠った。

10．本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

遺跡調査番号	０７０５	遺跡略号	ＨＫＴ172
調査地地番	福岡市博多区冷泉町63番	分布地図番号	千代・博多48
開発面積	3,384.06㎡	調査面積	2540㎡
調査期間	2007,05,28 ～ 2008,05,16	調査原因	オフィスビル建設

本文目次

博多遺跡の立地と環境 …… 2
第一章　はじめに …… 4
（一）調査にいたる経緯 …… 4
（二）調査体制 …… 5
第二章　発掘調査の記録 …… 6
（一）調査の概要 …… 6
（二）基本層序 …… 8
（三）遺構と遺物 …… 10
各調査面の概要 …… 10
第1面の調査 …… 10
第2面の調査 …… 12
第3面の調査 …… 14
第4面の調査 …… 16
A・B区調査の概要 …… 19
1．調査区の位置と土層・調査面の設定 …… 19
2．各調査面の概要 …… 19
3．遺構と出土遺物 …… 25
1）近世・近代の遺構と遺物 …… 25
2）中世の遺構と遺物 …… 26
溝 …… 26
土坑 …… 50
井戸 …… 85
集石遺構 …… 95
墓 …… 98
便所遺構 …… 102
3）弥生時代の遺物 …… 105
4）遺構外出土遺物 …… 105
4．A・B区調査のまとめ …… 109
C・D・E区調査の概要 …… 119
1．各遺構面の概要 …… 119
第1面 …… 120
第2面 …… 122
第3面 …… 124
第4面 …… 126
E区の概要 …… 128
2．古代以前の遺構と遺物 …… 129
（一）弥生時代・古墳時代の遺構と遺物 …… 129
その他の出土遺物・古代以前 …… 138
（二）古代の遺構と遺物 …… 143
a．井戸 …… 144
b．住居 …… 149
その他の出土遺物・古代 …… 163
3．中世の遺構と遺物 …… 165
a．井戸 …… 166
b．墓 …… 189
c．土坑・住居・溝 …… 191
その他の出土遺物 …… 254
（四）その他の出土遺物 …… 264
a．ガラス・ガラス製作関連遺物 …… 264
博多遺跡群第172次調査出土のガラス関連資料について …… 269
b．墨書土器 …… 272
c．銅銭 …… 291
第三章　まとめ …… 297
博多遺跡群第172次調査における自然科学分析 …… 311

博多遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに近現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄界灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西を博多川（那珂川）、東には江戸時代に開鑿された石堂川（御笠川）、南は石堂川開鑿以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって画されている。

博多遺跡群内での遺構の初現は、弥生時代前期後半の集落・甕棺墓である。これらの遺構群が検出される範囲は遺跡群の南半部に集中し、中期・後期以降も永続的に存続する。

古墳時代には砂丘面上に集落が広範囲に展開し集住が始まり、前方後円墳や方形周溝墓などが出現する。５世紀代には集落は縮小し、墳墓のみが点在する傾向を見せるが、６世紀代には竪穴住居の検出数は増加し、集落は再び盛行を見せる。

律令時代になると、九州の政治・軍事的中心地となる大宰府が設置され、博多湾岸には博多遺跡群と入り海ひとつ隔てた西の丘陵上に、対外交渉の拠点として鴻臚館が置かれた。博多遺跡群内に官衙が設置されたという文献記録はないが、石帯・銅製帯金具・墨書須恵器・須恵器硯・皇朝銭・鴻臚館式瓦・老司式瓦などの特殊な遺物が出土し、遺跡範囲の南部域に東西・南北方向の区画溝が方一町の規格性をもって掘削されることから､律令官人とそれに伴う支所施設等が存在していたことが分かる。

平安時代後期になり律令体制が弛緩すると、対外貿易の管理も中央政府の直接的な管理･掌握から、大宰府を通じての管理に変質し、大宰府官人による蓄財のための私貿易の拡大をもたらす。このような時勢の流れの中で、11 世紀には博多において宋商人らの居留が本格的に始まる。博多遺跡群が本格的に繁栄・展開するのは 11 世紀後半に入ってからで、埋め立てによる居住域の拡大が開始され、該期の膨大な量の輸入貿易陶磁器などが出土することから流通形態が確立した時期と考えられている。

さらに、12 世紀末から 13 世紀前半にかけては、聖福寺・承天寺が博多在住の宋商人綱首の援助のもとに、相次いで建立され周辺の都市化が急速に進行し、遺跡縁辺では筥崎宮周辺に展開する箱崎遺跡や住吉神社遺跡と共に中世都市群として有機的に発展したことが調査成果より知られている。

鎌倉時代には、二度にわたる元寇で博多付近一帯は戦場となり一旦は荒廃するが、13 世紀末には鎮西探題が博多に設置され、博多は貿易の中心地だけでなく、九州の政治的中心地という役割を持つようになる。調査成果から 13 世紀末から 14 世紀初めには、各所に道路遺構が整備され、それらは戦国期まで存続する。これらの道路・街区は必ずしも統一された規則性を持つわけではないが、中世後半期の博多の都市景観はここに確立されたといえよう。

室町時代後半の博多は堺と並んで自治都市として有名であったが、度重なる兵火によって焼亡している。この時期に博多遺跡群南端には房州堀が設けられ、1586 年には中国の毛利氏の軍と対峙した薩摩の島津氏によって焼かれ灰燼と帰する。しかし、翌年には豊臣秀吉によって復興される。これが太閤町割であり、この時点で鎌倉時代以降続いていた博多の街区・道路のほとんどは廃止され、博多全体は長方形街区と短冊形地割で再整備され、中世都市博多は近世都市博多として再生された。江戸時代の鎖国政策で貿易都市としての博多は幕を下ろし､商人町博多として明治維新を迎えたのである。

昭和 52 年の高速鉄道（地下鉄）の調査より始まった博多遺跡群の発掘調査は､平成 22 年 3 月現在、第 189 次調査（地下鉄・築港線を含めると 223 次）を数える。

博多駅新規開業を控えて、公共事業を原因とする大規模な開発から民間主導の小規模な開発へと転換期を迎えているが、中世都市「博多」は「記録保存」という名の破壊と引き換えに当時の様相を着実に明らかにしつつある。

Fig.1　博多遺跡群内調査区位置図（S=1/8000）

第一章　はじめに

（一）調査にいたる経緯

平成19年1月26日、クールスプリングインベストメント特定目的会社より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区冷泉町63番地内におけるオフィスビル建設予定地内に関しての埋蔵文化財の有無についての照会（事前審査番号18-2-918）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群内に位置しており、平成元年には現地で試掘調査が実施されており、申請地内に良好な状態で埋蔵文化財が存在していることが確認されていた。また、申請地の周辺では数次の発掘調査がこれまでに行われており、弥生時代から中世まで高密度に埋蔵文化財が存在していることが知られており、申請地内の未試掘範囲においても良好に遺構が存在していることが推測された。しかしながら、本申請での建物建築予定範囲内については埋蔵文化財の有無について不明確な範囲が存在していたため、これを受けて埋蔵文化財第1課は改めて平成19年3月14日に現地での試掘調査を実施した。その結果、現地表面から100～150cmほど掘り下げた黄灰褐色粘質土層面上において中世から近世にかけての井戸、土坑などの遺構と該期の大量の遺物の存在を確認した。試掘調査により遺構面は複数存在し、これらの遺構面上には濃密に遺構が遺存していることが確認された。建設工事に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、工事によって止むを得ず破壊される部分については全面に発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。調査面積が都市部での発掘調査としては広大であることから、調査体制の拡充による調査工程の効率化を図り安全管理に努めることとなった。

発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課がこれを行うこととなり、平成19年5月28日に着手し、平成20年5月16日に終了した。整理・報告書作成業務については、検出遺構・出土遺物が膨大であるため2カ年でこれを行うこととし平成20年4月1日に着手し、平成22年3月23日の報告書刊行をもって終了した。

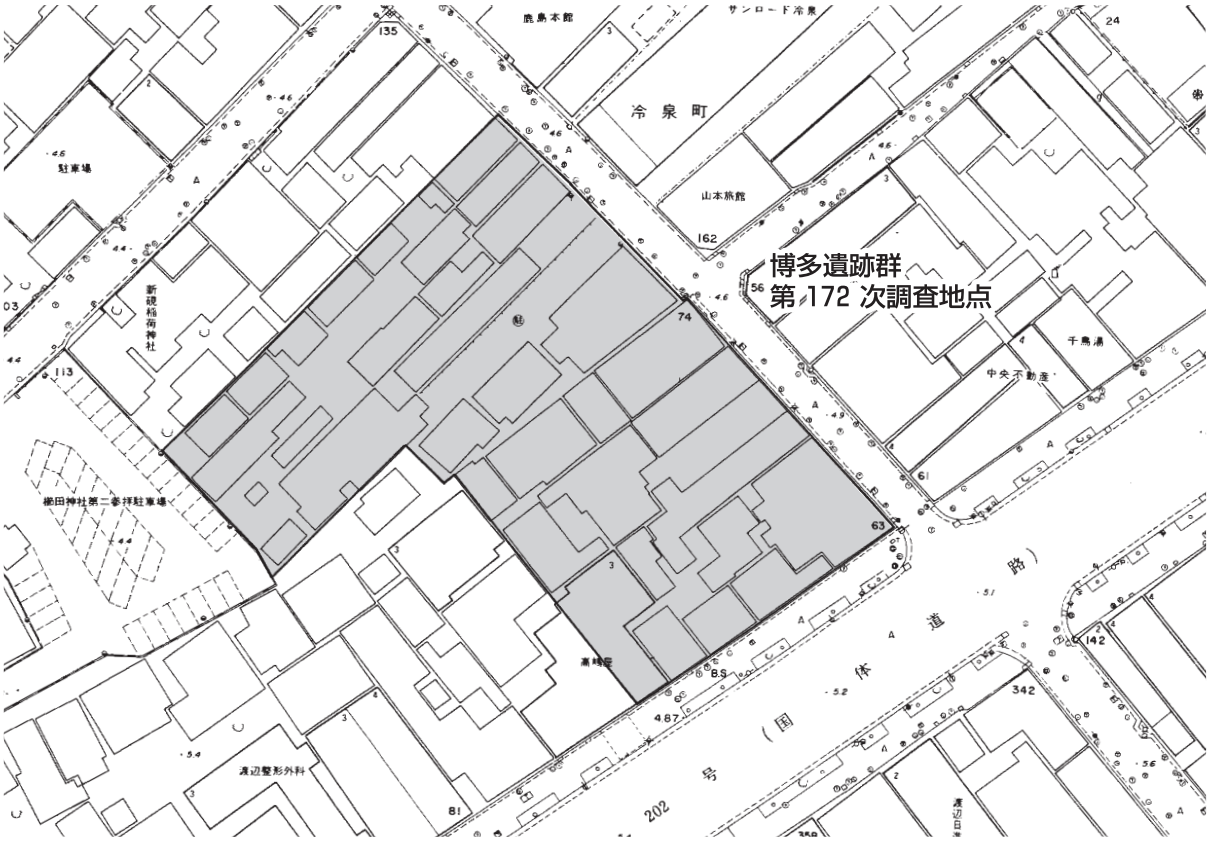


Fig.2　調査区位置図（S=1/1000）

（二）調査体制

調査委託	クールスプリングインベストメント特定目的株式会社	代表取締役	須貝　信
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	植木　とみ子（調査年度）
			山田　裕嗣（報告年度）
調査総括	同　文化財部	部長	矢野　三津夫（調査年度）
			宮川　秋雄（報告年度）
	同　埋蔵文化財第１課	課長	山口　譲治（調査年度）
			濱石　哲也（現任）
	同　埋蔵文化財第１課	調査係長	米倉　秀紀
調査庶務	同　文化財管理課		鈴木　由香
			古賀　とも子
			山本　朋子
調査担当	同　埋蔵文化財第１課	調査係主任文化財主事	池崎　譲二
	同	文化財主事	本田　浩二郎

調査補助　林田 憲三　立石 真二　山口 朱美　中村 理　谷 直子　保元 良美　金 信恵

調査作業　青木 和代　青木 眞孝　阿部 孝行　新垣 誠　粟田 基　安東 昌信　石川 幸子
伊藤 美伸　今村 良輔　岩崎 良隆　岩本 三重子　上野 照明　牛尾 成正　大庭 智子
大庭 義久　大穂 栄子　尾崎 裕光　小野山 次吉　片岡 博子　唐島 栄子　川田 強司
草場 恵子　桑野 孝子　小出 義之　小島 君子　許斐 拓生　近藤 澄江　斉馨 純子
酒井 康恵　坂下 達男　坂梨 美紀　佐藤 直利　静 啓子　渋谷 一明　清水 明
定直 康浩　須佐 恵司　芹川 淳子　染井 美保子　尊田 絹代　高瀬 州　高瀬 美代子
為房 紋子　知花 繁代　塚副 義一郎　塚本 よし子　堤 篤史　土斐崎 初栄
徳山 孝恵　富岡 洋子　中島 道夫　仲野 正徳　中村 桂子　西納 富士夫
西村 寿美江　布江 孝子　野中 佳子　服部 弘勝　花田 直文　濱 フミコ　原 勝輝
原 恵子　原 幸子　播磨 博子　福嶋 大　福田 操　藤野 幸雄　古山 昭　前田 和之
増田 ゆかり　松尾 千寿　松岡 久行　松下 さゆり　御手洗 あい　三村 悦子
牟田 邦博　村田 敬子　森田 祐子　山下 智子　山田 美恵子　結城 フヂコ
脇田 誠二

整理作業　佐々木 涼子　吉盛 泉　松下 伊都子　有島 美江　冨田 文代　宮崎 由美子
平井 宏美　田中 朋香　長澤 順子

調査期間中には条件整備や工程調整など多岐にわたり三井不動産レジデンシャル株式会社や株式会社西興の皆様に多くの配慮を賜った。また、近隣住民の皆様には騒音・砂塵などで多大なご迷惑をおかけした。記して感謝申し上げる次第である。また福岡市教育委員会埋蔵文化財第１・２課の同僚諸氏からは多くの助言・指導を頂いた。深く感謝する。

第二章　発掘調査の記録

（一）調査の概要

博多遺跡群は、福岡平野北側の博多湾岸に位置し、那珂川と御笠川（石堂川）の河口に挟まれた三角州平野上に形成された遺跡群である。博多遺跡群の立地する砂丘地形は、南から大きく「博多濱」と「息浜」（おきのはま）の二つに分けられ、「博多濱」はさらに二つの砂丘から形成される。現在の「博多」の街並みは、この砂丘地形上に人工的な整地層が２ｍ～５ｍ程度搬入された土砂が盛土されて形成されたものであるが、現状でも埋没した旧地形の起伏を比較的よく反映していることが、これまで行われた発掘調査の成果より判明している。

今回報告を行う、博多遺跡群第 172 次調査地点は遺跡範囲の南西部に位置しており（Fig.1）、調査地点の現状は立体駐車場であった。試掘調査の成果では現地表面から 100 ～ 140cm ほど掘り下げた暗灰褐色土層面上で遺構が検出されており、これに基づいて調査着手以前に近代から現代までの整地層約１ｍを重機により掘削し、発生した排土については場外へ搬出し、遺構検出を開始した。部分的に近代以降の整地層が厚く残っており 30㎝程度改めて掘り下げを行い遺構面の設定を行っている。なお、調査地点の現地表面の標高は 6.40 ｍ前後で北側に向かい緩やかに傾斜する。

発掘調査は作業の効率性と、遺構の掘り下げにより発生した排土を場外へ搬出する工程上の都合からＡ～Ｄ区の４地点に分割し、Ａ区・Ｃ区の調査から着手した。調査期間中に予定建物に付随する地下構築物が設計変更により追加されたため、この追加範囲（約 40㎡）についてはＥ区として設定しＤ区調査終了後に調査を実施している。

博多遺跡群の基盤層である砂丘砂層面までの深度が現地表面から４ｍ以上と深いことから、壁面に接して検出された井戸遺構等の掘削深度が深いと予想される遺構については一部を除き完掘は行っていない。調査区周囲には鋼矢板による土留め工事が施されているが、調査期間が長くまた近隣建物に近接していることから少なからず影響が懸念されたからである。

調査は各調査区を実測用紙（縮尺 20 分の１で縦７ｍ×横 10 ｍ範囲を一単位として実測）の範囲毎に区分し、実測基準線は各調査区共通として設定した（Fig.3 参照）。各遺構面以下への掘り下げ時にもこの区分に従い出土遺物の取り上げを行っている。実測基準線上の基準点には、周辺に打設されている都市基準点から国土座標値を移動し、調査区内の複数の基準点の国土座標での位置を求めている。

遺構実測は縮尺 20 分の１を基本として行い、遺物出土状況図・木棺墓等の重要な遺構については縮尺 10 分の１で実測作業を行っている。

遺構・遺物写真は 35㎜カメラおよび６×７判カメラ、デジタルカメラを使用して撮影を行った。

第 172 次調査では、弥生時代前期後半の土坑を初現として、古代の集落･中世の廃棄土坑や井戸遺構、区画溝遺構、不定形土坑、柱穴群などの多数の遺構と数 cm 単位で行われた整地土層面を検出した。また遺構としては検出できていないがガラス製品や坩堝等のガラス製作関連遺物が多数出土しており、これに関わる工房等の存在が推定される。各区第１面の遺構検出や攪乱孔からは博多人形や博多火鉢などが多数出土しており、近世以降には手工業が盛んな場所であったことが分かる。

遺物は弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、緑釉陶器、瓦器、多種多彩な貿易陶磁器、国産陶器等の土器類と、人骨、イルカ・鯨・馬・牛・鹿等の獣骨、銅銭・銅鏡・銅鏃・刀子・鉄製鋤先等の金属製品、磨製石剣・石包丁・石斧・黒曜石剥片等の石器類などがコンテナケース 1570 箱分（深コンテナ）が出土している。

Fig.3　各調査区配置図(S=1/400)

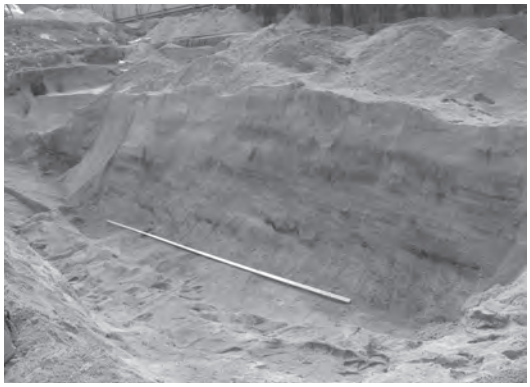
（二）基本層序（Fig.4）

第 172 次調査地点は、博多遺跡群が立地する砂丘の南側列 (博多濱) 上に位置している。正確には南側砂丘列は更に二つの砂丘に分けられており、本調査区はこの内の南側砂丘（砂丘 1）の頂部から北側斜面上に位置する。調査の成果より北側に位置する AB 区と南側の CD 区の間に大きな地形変換点が存在しており、CD 区については砂丘斜面から頂部付近、AB 区については砂丘北側斜面から砂丘背面に形成された鞍部（谷地形）であったことが分かる。この砂丘背面に形成された谷地形は現在の櫛田神社方向に向けて広がるもので、A区付近はその谷頭付近に位置する。

これより報告を行う各遺構面の他にも複数の遺構面（生活面）・整地層面が掘り下げ時に確認されたが、調査では試掘調査の成果に基づき設定した主要な１～４面の遺構面で遺構検出・調査を行い、各整地土層面は土層断面上で記録するに留めた。

本調査地点の現地表面の標高は 5.20 ～ 5.00 m前後を測り、北側に向けて緩やかに傾斜する。調査地点の現状は立体駐車場で、平成元年の立体駐車場建設にあたって北側部分は嵩上げが行われている。標高 4.00 m付近の第１面までは黒灰色砂質土の近現代の整地層が堆積していた。

申請地内の数カ所で実施した試掘調査の成果より、第１面は標高 4.00 m前後の灰褐色砂質土の整地土層面上で設定した。第２面とした遺構面は暗褐色砂質土を主体とするが、各区によりその堆積状況は大きく異なり、部分的に暗黄褐色粘質土による整地土層が確認できる。第３面は暗褐色砂層面上で設定した遺構面である。博多遺跡群で行われる発掘調査の多くの場合では、この暗褐色砂層面を古代の時期の鍵層として認定する。第４面は博多遺跡群の基盤層となる砂丘砂層面で設定している。砂丘砂層面も各区では状況が異なりＡ・Ｂ区では白色砂層、Ｃ・Ｄ区では褐色砂層となる。各遺構面を構成する堆積土層については各区各遺構面の報告を参照されたい。



Ph.1　C 区深掘トレンチ　土層断面

Ph.2　C 区深掘トレンチ　土層断面

Ph.3　土層断面・C 区

Ph.4　土層断面 ·A 区南端部

なお、本調査地点での涌水は、近辺の調査区と同様に基盤層である褐色砂層から２ｍほど掘り下げた標高１ｍ前後の地点で認められた。

Ｃ区の調査が終了した段階で、砂丘砂層の堆積状況を確認するために一部深掘りトレンチを設定して掘り下げを行い、土層断面図の観察および実測図の作成を実施した（Fig.4）。

トレンチはＣ区№７中央部で南北方向に設定した。掘り下げは砂丘砂層以下への掘削であるため人力では行わず、重機を使用して掘り下げた。各遺構面を設定した堆積層は北側へ緩やかに傾斜している状況が確認できた。Ｃ区第３面は褐色粗砂層面上で設定し、第４面は重複する遺構について設定したものであるため、Ｃ区基盤層は砂丘砂層面である褐色粗砂層となる。これ以下の堆積状況を見ると、鉄分の沈着層が観察できる粗砂層・粗砂層・細砂層。白色砂層が互層となって堆積する。各堆積層は南側に存在する博多濱南側砂丘列（砂丘１）頂部に向かって堆積する。標高 1.20 ｍ付近では堆積層の断絶が見られる。これは一旦形成された堆積砂層が何らかの潮汐作用で削平を受け、改めて砂丘形成が再開したことを示すものである。

鉄分沈着が著しい褐色粗砂層は含水層であったことを示すものであり、Ｃ・Ｄ・Ｅ区で検出された各井戸遺構はこの層位まで掘削されていたものが多い。現在は湧水レベルが低下しているためこの層位からの湧水は認められない。重機による掘削は標高 1.00 ｍ付近まで行い土層断面の作成を行った。その後部分的に標高０ｍ～ 50㎝程度まで掘り下げを行ったが、湧水が激しく噴出し周囲土層が大きく崩落する危険性が生じたためそれ以下の掘削は行っていない。標高 50㎝付近では固く締まる灰色粘土層が検出され、それ以下では暗黄褐色粘質土層が部分的に確認できた。これらの堆積層は上層の砂層とは異なり、ほぼ平坦な状況であることを確認している。

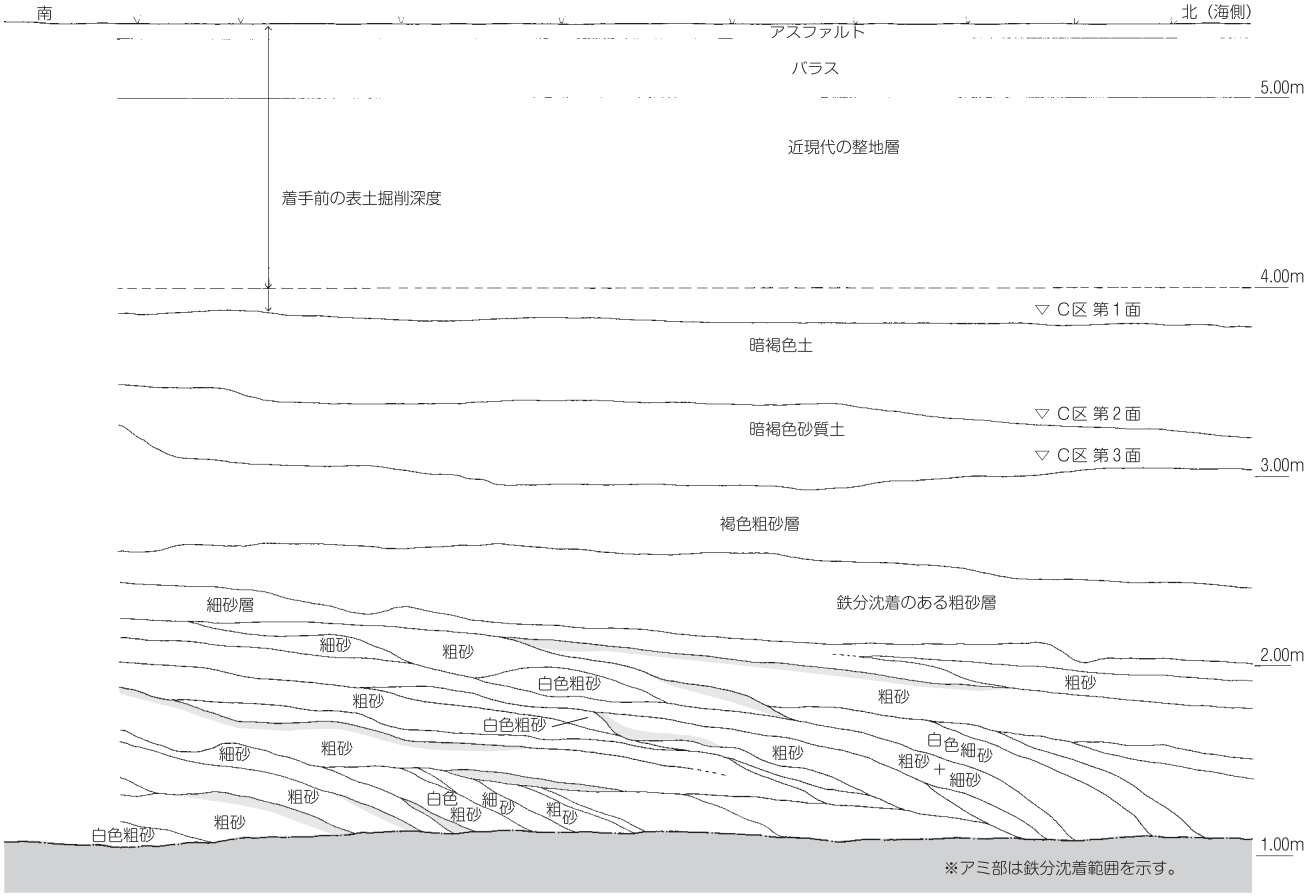


Fig.4　調査区土層模式図（S=1/40）

（三）遺構と遺物

各調査面の概要

第１面の調査（Fig.5　付図１・５）

博多遺跡群第172次調査地点は国体道路の北側、博多濱南側の一角に位置する。周囲では79・103・117・118・133・180次等の多くの調査が行われている。申請地・調査対象範囲ともにＬ字形の敷地となり対象面積が約2500㎡と広いことから、調査区を４分割しＡ～Ｄ区から着手した。

調査前に行った鋤取り面で遺構検出を行ったが、北側のＡ区では部分的に近現代の整地層が20cm程度残っており、改めて重機により遺構面まで掘り下げを行い遺構検出を行った。

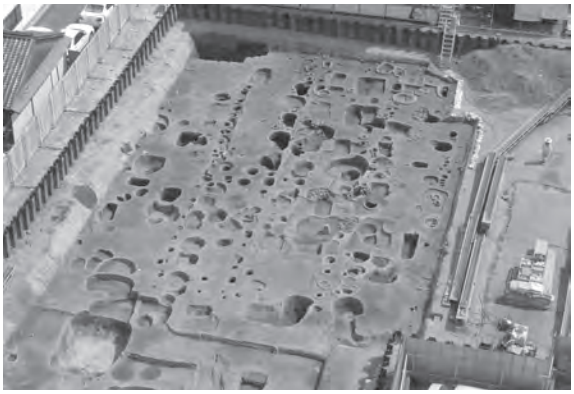
Ａ区は、現地表面から140～250cmほど掘り下げ中世末～近世にかけての時期と考えられる遺構群を確認した。第１面では、現在の町割りと同方向の建物跡や正体不明土坑・井戸などが規則正しく並んでいる状況が確認できる。検出されたこれらの柱穴列・溝・方形土坑は太閤町割以後に掘削されたもので短冊形の町割りに並んだ状況で検出される。これは調査前の町割りとほぼ同一方向の地割りを採るもので、中世末から町割り自体はほとんど変化していないことがわかる。Ｃ区でも同様に中世末の方形土坑・溝などの遺構が検出されるが、Ａ区で検出される遺構の主軸方向からはわずかに東側に振れている。第１面で確認した遺構群は主に中世末～近世にかけてのものであるが、遺構面自体は14世紀代の遺物を含む整地土層となっている。Ａ区調査終了後にＢ区の調査を開始したが、遺構面の状況はＡ区と同様であり、Ａ区の調査成果を元に掘り下げを行った。

Ａ区第１面の標高は3.6ｍ～3.0ｍを測り北側に緩やかに傾斜している。調査区西側部分は標高2.8ｍ前後で櫛田神社のある西側方向に向けて落ちていく状況が観察できる。遺構の掘り下げ状況やトレンチの土層観察からＡ区の基盤層となる白色砂層の砂丘面は2.0～1.0ｍ付近で北西側方向に向けて緩やかに落ちていくことが判明した。

Ｃ区第１面の標高は4.0ｍ前後を測り、南側の国体道路側に向けて高くなる。トレンチの観察から基盤層である砂丘面は3.4ｍ～3.0ｍと比較的浅く、北側に向けて緩やかに落ちていくことが分かる。Ｃ区第１面とした遺構面においては主に14世紀代と16世紀末の遺構を検出した。16世紀末の遺構群は現在の町割りとほぼ同一の主軸方向を採るものである。第１面以下への掘り下げでは20cm程度で基盤層の褐色砂層が確認できる部分もあり、砂層上で８～９世紀代の土坑や中世前半期の廃棄土坑、方形土坑などを確認した。掘り下げでは調査区南側に白磁等の遺物が集中して出土した。

Ｄ区第１面の標高は4.0ｍ程度で、攪乱坑内で観察した土層断面では基盤の砂丘面が3.5ｍ付近で確認できる。Ｄ区では溝・土坑に大量の土師器が投棄された土師器廃棄遺構を３基検出した。３基のうち２つの廃棄遺構は直線上に並ぶため同一遺構の可能性も考えられた。

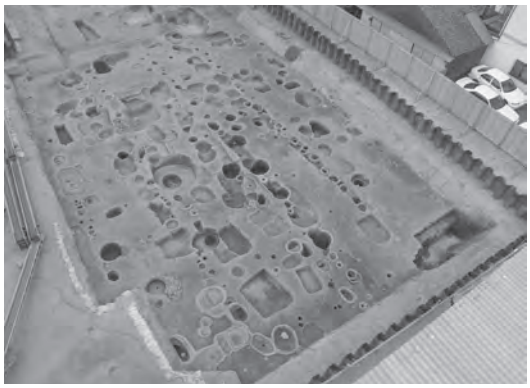
Ph.5　第１面遺構検出状況



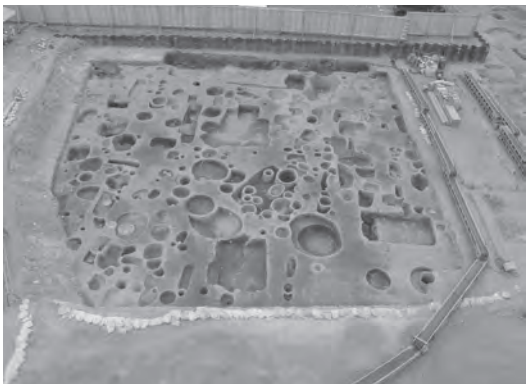
Ph.6　Ａ区北半部第１面遺構検出状況

Fig.5　博多遺跡群第 172 次　第 1 面
遺構実測図（S=1/400）

Ph.7　D 区第 1 面遺構検出状況



Ph.8　A 区北半部第 1 面遺構検出状況



Ph.9　C 区第 1 面遺構検出状況

第２面の調査（Fig.6　付図２・6）

Ａ区第２面では15世紀代の溝状の土師器廃棄遺構を主体として12世紀代の白磁廃棄土坑等の遺構を検出した。この溝状遺構は第１面で検出された町割りを示す遺構群とは異なる主軸方向を採り、現在の国体道路と近い方位を採る。西側隣地の第103次調査でほぼ同一方向の主軸を採る溝遺構が検出されている。第１面からの掘り下げ時には京都系土師器皿などが出土した。また、これらの遺構群とは別に14世紀代の溝遺構がＡ区西側で確認された。第２面以下への掘り下げ時には甕棺の破片や須恵器の大型破片が出土しており近接して遺構が存在する可能性が考えられた。Ａ区では方向を示す溝遺構や柱穴列の検出が多く、中世後半～近世の町割り復元に多くの手掛かりとなる。

Ａ区の北東部で検出された遺構群は12世紀代～13世紀代にかけてのもので、白磁四耳壺・白磁碗などを一括廃棄した廃棄土坑や井戸遺構などがある。Ａ区中央部では第１面に引き続き土坑墓が数基確認されており、屋敷地内の一角に営まれた屋敷墓が形成されていたことが分かる。

Ａ区西半部については主軸の異なる溝遺構を数条検出した。出土遺物より14世紀後半から15世紀代のものと考えられるもので、これらの溝遺構に切られる廃棄土坑・井戸遺構なども検出される。

廃棄土坑には白磁四耳壺・白磁碗等が一括廃棄されていた。この範囲で検出された井戸遺構および廃棄土坑については12世紀代の遺構が多い。

Ｂ区第２面はほぼ全体が15世紀代の土師器廃棄溝にかかるため、この他の遺構は検出されていない。各調査区の遺構面の関係から、Ｂ・Ｃ区間に地形の大きな変換点が存在することが判明するが、この土師器廃棄溝は地形傾斜変換点付近に掘削された遺構であることが分かる。

Ｃ区第２面とした遺構面は中世前半期を主体とし、12世紀代の廃棄土坑・井戸群などを検出した。調査区南側の一部では基盤層となる砂丘面が検出でき、砂丘砂層からは古代の須恵器や古式土師器甕などが出土する。調査区西側では井戸が集中して掘削された箇所が検出され、地形の落ち際に良好な水脈を求めたことが分かる。第２面では区画を示す遺構の検出は多くないが、整地土層が幾筋かの方向を示しており、これらが12世紀から13世紀の町割りの方向を示すものと考えられる。

Ｄ区第２面とした遺構面は標高3.8ｍ前後の暗褐色砂質土層で、部分的に縞状堆積が見られる。第１面と比べやや遺構密度は薄くなるものの、東側の一部には廃棄土坑の集中区が検出された。廃棄土坑は直径１ｍ程度の円形のものが多いが、遺物がほとんど出土しない土坑もあり遺構の性格には疑問点が残る。これらの土坑は列状に検出されるものもあり、その配置から当時の町割りが復元できる。第２面では11世紀末～12世紀代の遺構が多く検出されるが、一部第１面で検出しきれなかった方形土坑・溝遺構などがあり、これらは13世紀後半から14世紀初頭の時期のものとなる。土師器廃棄溝と同一主軸を採る方形の廃棄土坑からは、刀子２点、三巴紋の軒丸瓦などが出土した。

Ph.10　Ａ区第２面遺構検出状況

Ph.11　Ｃ区第２面遺構検出状況

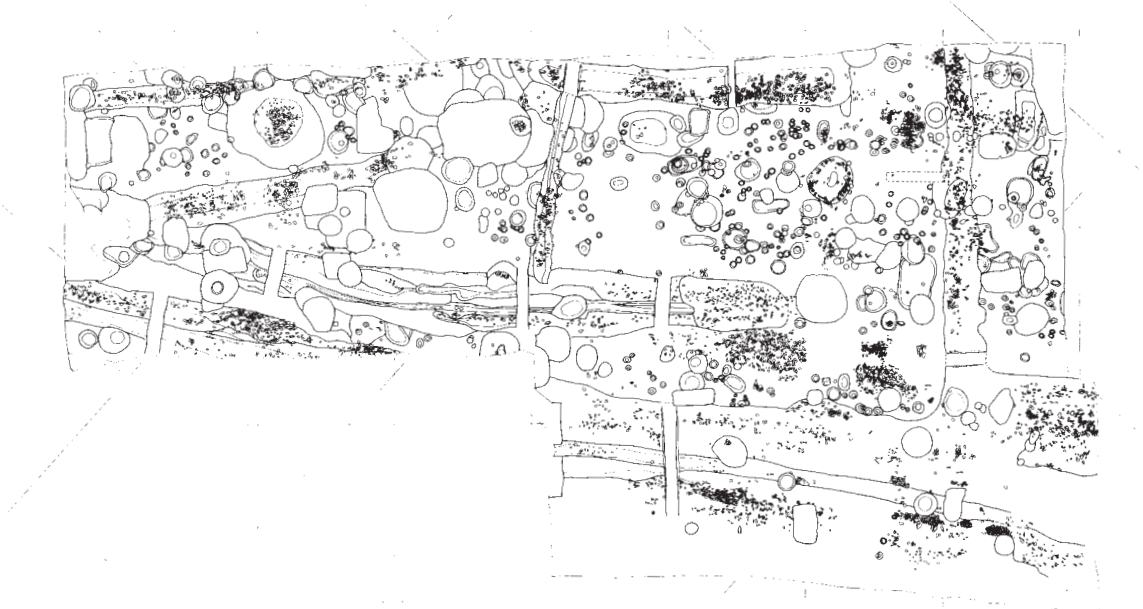
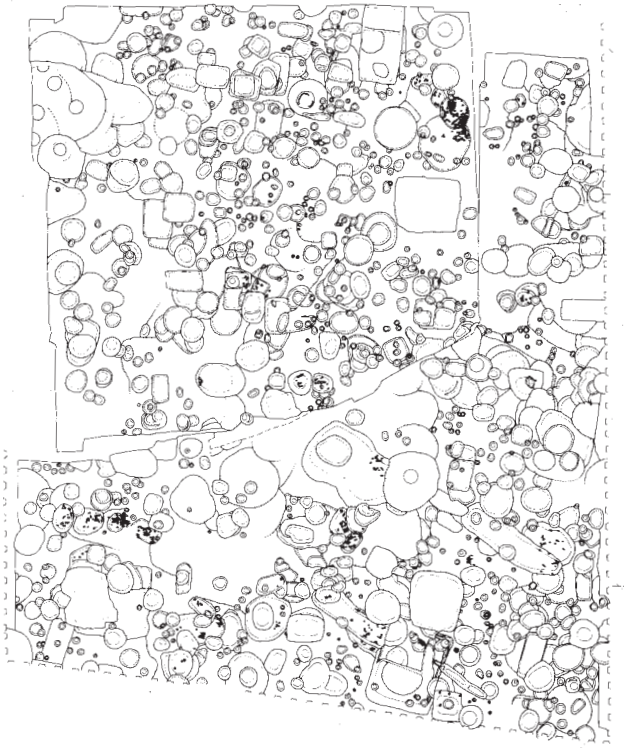
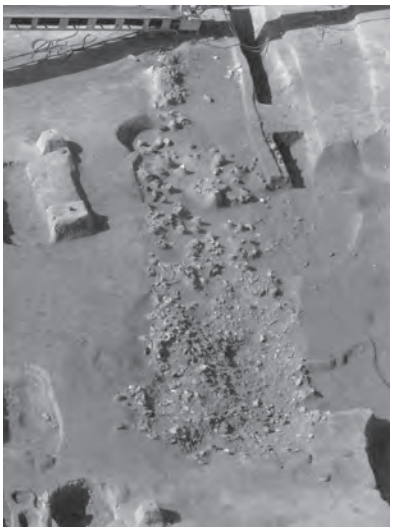
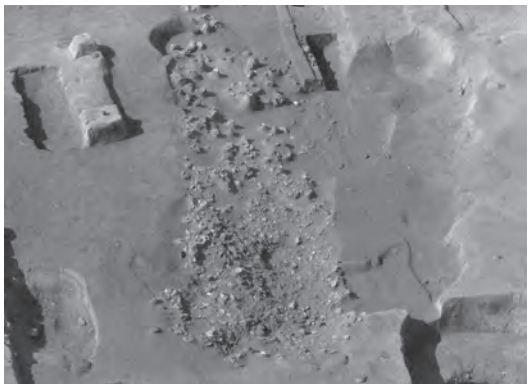


Fig.6　第２面遺構実測図（S=1/400）

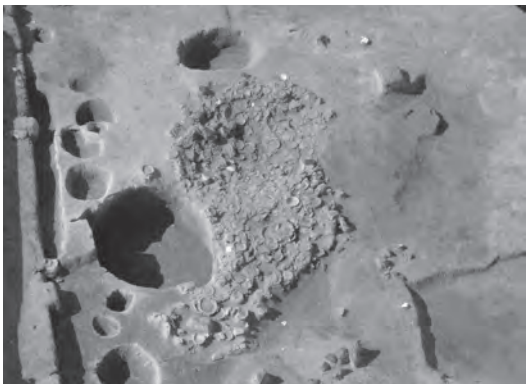




Ph.12　A 区土師器廃棄遺構全景１



Ph.13　A 区土師器廃棄遺構全景２



Ph.14　A 区土師器廃棄遺構全景３

第３面の調査（Fig.7　付図３・7）

Ａ区東端部では現在の地割に近い主軸の溝遺構とこれに直行する溝遺構が検出される。この溝遺構は15世紀代と考えられる。溝脇の土坑からは粉青沙器瓶が出土した。また第２面で検出された白磁廃棄遺構の付近に同様の白磁廃棄遺構が確認された。この他ガラス製の壺やガラス玉等の遺物が出土している。第３面とした遺構面は博多遺跡群の基盤層となる砂層面で設定した遺構面であるが、直上には弥生時代～古代の包含層が形成されている。遺構自体は上層から掘削されたものが主体となり、古代以前に遡るものは少ない。包含層を形成する堆積物はＣ区のある南側方向より押されたものと考えられる。Ａ区西側では砂層面の掘り下げを行い古代以前の遺物を含む包含層を確認した。包含層中には弥生時代の遺物等が含まれているが、この時期の遺構は確認されない。基盤となる砂層は褐色砂層ではなく灰白色細砂層となる。包含層自体は南側の砂丘高位面を地下げした際に形成されたものと考えられる。このような大規模な造成自体は古代末から中世初頭に行われたものと考えられる。

Ｂ区南側で検出される溝遺構は戦後まで存続していた用水路に連続する遺構である。掘り下げ時に出土する遺物は中世後半まで遡るものが主体となり、溝の掘削年代は14世紀代である可能性も考えられる。Ａ区では遺構面の掘り下げ時に、坩堝として転用された中国陶器水注やガラス素材等とともに未製品・ガラス玉などの製品が多く出土しておりガラス製作工房が存在していたことが分かる。このようなガラス片が付着した坩堝片はＣ区・Ｄ区においても出土しており、複数の工房が同時に操業していた可能性も想定された。

Ｃ区第３面とした遺構面は、基盤の砂丘面となり北側に緩やかに傾斜する。第３面への掘り下げでは北西部付近から集中して弥生土器や須恵器などが多数出土した。調査では廃棄土坑が多く検出され朱墨で墨書された白磁碗などが出土した。遺構の多くが12世紀代のもので、中世前半期に大きく地形を改変した可能性が考えられる。Ｃ区で検出した木棺墓は棺材の一部が残存しており、使用された棺材の法量が復元できる。棺内で検出された人骨は膝下のみで、土師器坏・小皿が副葬されていた。

Ｄ区第３面とした遺構面は標高3.5ｍ前後の暗褐色砂層面上で設定した。調査では第２面に引き続き11世紀後半から12世紀前半の遺構群を検出した。これらの遺構に切られる状況で古代の時期と考えられる方形住居等の一部が検出されたが、これらの住居の掘り下げは第４面で行った。また、調査区の数カ所で井戸遺構が集中して検出された。これらの井戸遺構は掘削深度が深いため、掘方の平面形の確認と１ｍ程度の掘り下げのみ行った。遺構面となる暗褐色砂層の年代は古代の時期である。

Ｄ区では第２面で南側方向に砂丘が落ちる状況が確認されており、現在国体道路付近に想定される砂丘頂部は本来はやや北側に存在していたことが想定され、南側で実施された第180次調査地点との間の国体道路下には小さな鞍部が存在するようである。

Ph.15　AB区検出　区画溝

Ph.16　第３面遺構検出状況

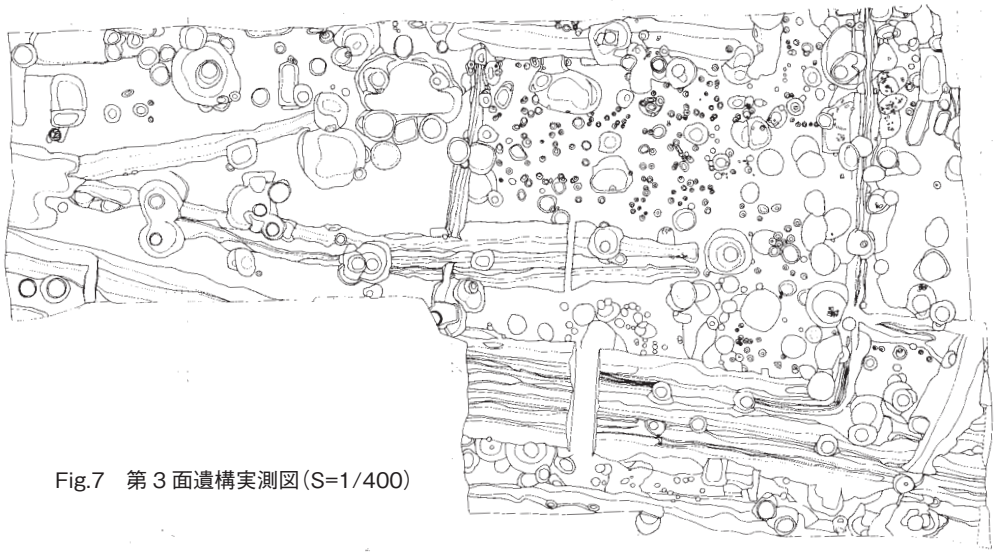
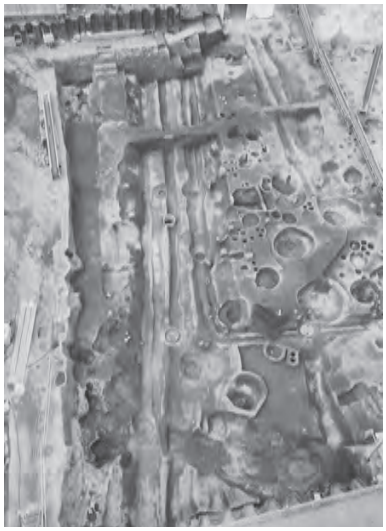
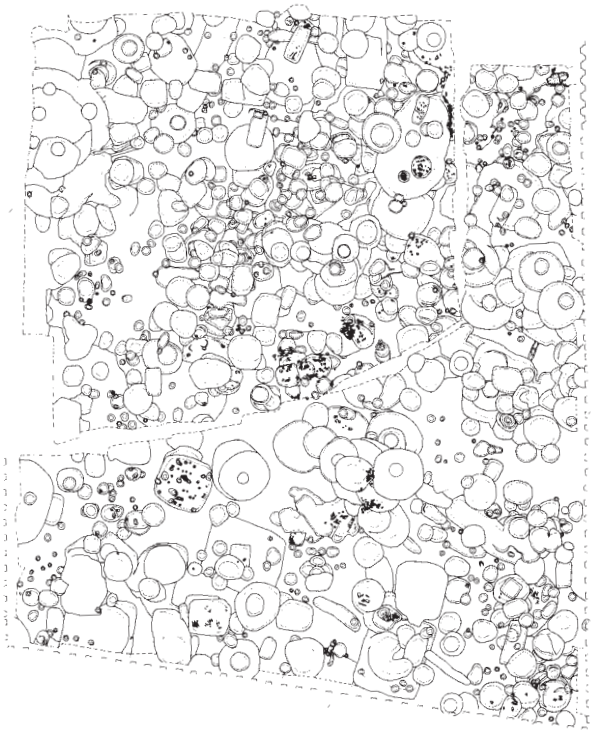
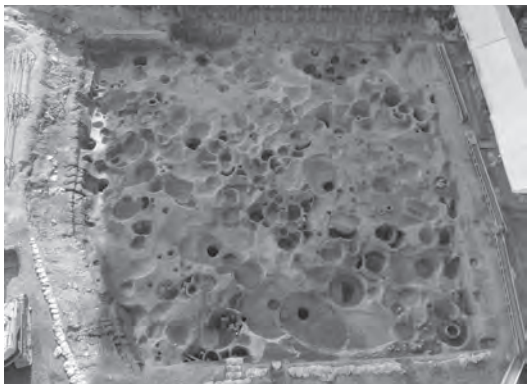


Fig.7　第３面遺構実測図（S=1/400）



Ph.17　AB 区検出　区画溝





Ph.18　C 区第３面全景

Ph.19　D 区第３面遺構検出状況

第４面の調査（Fig.8　付図４・８）

Ａ・Ｂ区の第４面は砂層面を遺構面とするが、Ｃ・Ｄ区で確認された褐色砂層ではなく水性堆積とみられる灰白色砂層が基盤層となる。遺構密度はやや薄く、上層から掘削された井戸遺構や大型の廃棄土坑等が多く検出される。Ｂ区では中世後半期の時期と考えられる溝が数条が検出され、ひとつはＡ区方向に直角に曲がり、方形区画をなす。これらの溝遺構に切られた状態で井戸遺構が数基検出された。これらの井戸遺構の年代は12世紀代の時期となる。Ｂ区掘り下げ時に縄文時代後期の時期と考えられる三角鏃が一点出土した。

Ａ区東側では三基の土坑が並んで検出され、堆積埋土の観察より便所遺構である事が判明した。上部構造は不明であるが､三基の円形土坑を連接して掘削し便槽として使用していた状況が想定できる。底部付近には円形の曲げ物が残り、白色粘土と砂の交互堆積物が検出される。この堆積土層中からは小魚の骨や種子などが検出される。遺構の年代としては12世紀前半代と考えられ、博多遺跡群の調査でも比較的検出例の少ない遺構であり、この時期の食生活等を復元する上で重要な資料である。

遺構・遺物の様相もＢ区で検出された溝遺構（砂丘の傾斜変換点付近を東西方向に伸びていく）を境に大きく異なり、空間利用の目的や方法が全く異なっている点が興味深い。調査成果よりＡ・Ｂ工区付近は砂丘間の低湿地または後背地に位置していることが判明し、この高低差を解消するために周囲の高位面の土砂を用いて埋立造成を行ったものと考えられる。この造成土からは古墳時代～平安時代の土器等の遺物が多く出土する。Ａ・Ｂ工区東側については第４面上でも遺構が濃密に確認されており、櫛田神社方向に開く谷地形の谷頭付近に位置するものと推測される。

Ｃ区第４面では第３面で検出できなかった土坑等の遺構を検出し、井戸遺構などの完掘を行っている。井戸遺構の多くは標高1.5ｍ前後で検出される粗砂層まで掘削され、井筒には結桶を使用するものと曲物を使用するものが確認できる。この粗砂層は厚さ30～50㎝程度を測るが、全体的に鉄分沈着が認められ中世の時期には豊富な水量のある含水層であったことが分かる。現在の調査地点付近の湧水レベルは標高80㎝～１ｍ前後となり、水位が大きく下がったことが分かる。

Ｄ区第４面では弥生時代前期後半と中期前半の土坑や古墳時代初頭の土坑などを確認している。弥生時代前期後半の時期と考えられる土坑からは磨製石剣の未製品および剥片・叩き石・砥石と無頸壺が出土した。剥片は石剣未製品に接合するものもあり石器製作工房であった可能性が考えられる。この土坑の近くからはほぼ同時期の甕等も出土する。古墳時代初頭の土坑は周囲を他の遺構に切られるため正確な平面形は捉えられないが、残存部分より長方形土坑であることが推測された。土坑底面からは鉄剣が出土しており、土坑墓である可能性が考えられる。弥生時代前期後半の遺構は博多遺跡群内では初めての検出であり、博多湾岸の弥生時代前期の様相を検討する上で重要な資料となった。

Ph.20　AB区　区画溝検出状況１

Ph.21　AB区　区画溝検出状況２

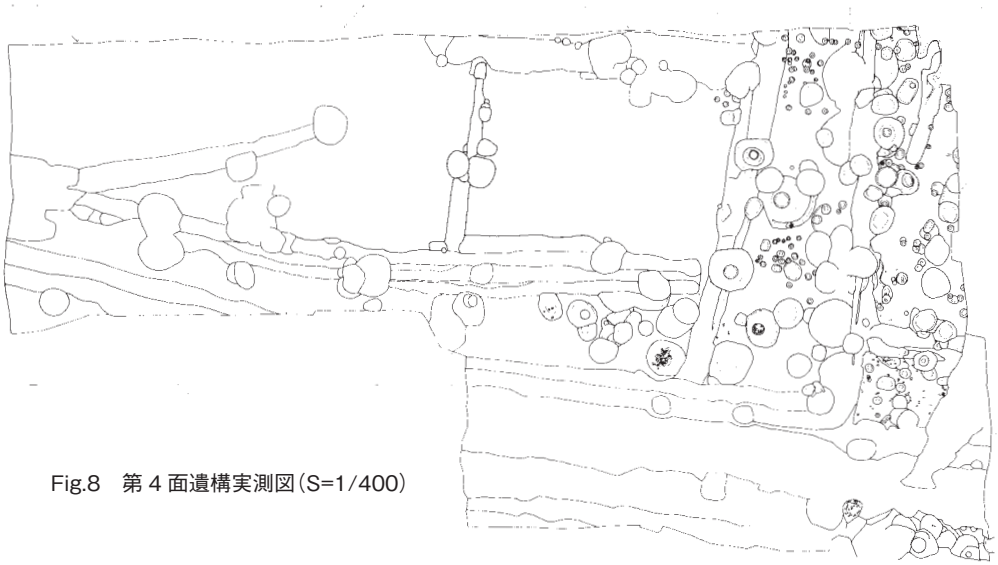
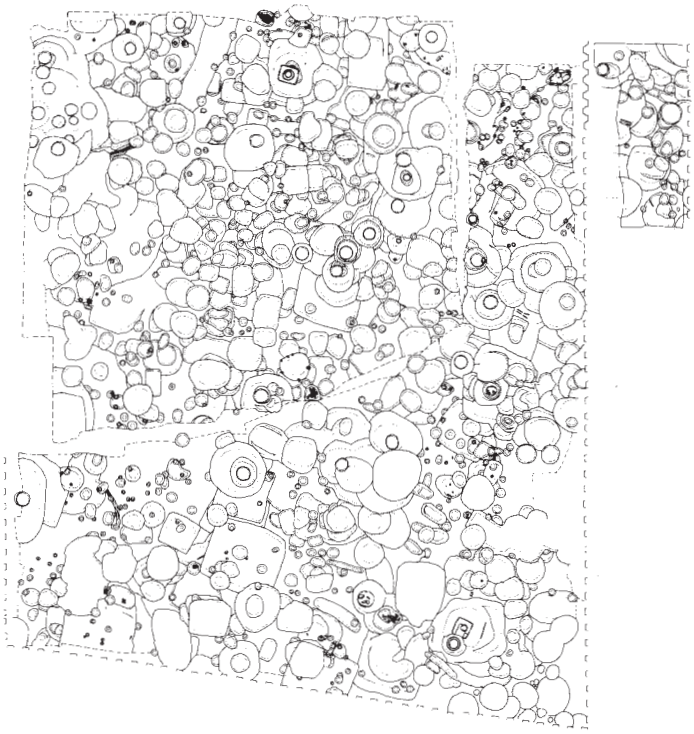


Fig.8　第４面遺構実測図（S=1/400）



Ph.22　AB 区　区画溝検出状況３

Ph.23　第４面調査状況・全景

Ph.24　D 区第４面調査状況

この他の遺構としては、８世紀代の方形竪穴住居・井戸遺構を中心とした集落を検出した。各住居はほぼ同一主軸方向を採るもので、Ｃ区で検出された古代の区画溝に規制されたものであることが分かる。砂丘砂層中に掘削された竪穴住居であり、周囲が軟弱な砂層であることからカマドに敷設される煙道は複数の土師器甕を転用して作られている。

第４面で検出された各遺構の残存状況から古代前後の時期に砂丘頂部を大きく削平し、北側の谷部（鞍部か）を埋立造成していることが分かる。削平の規模としては弥生時代前期後半の遺構の残存状況や遺物の出土状況より、本来の高さからは１～２ｍ近く切り下げられていることが想定できる。

Ｂ区で検出された東西方向の溝遺構を挟んで南北では砂丘を形成する堆積層が大きく異なる状況となっており、この地点に大きな地形変換点が存在していたことが分かる。

Ｄ区第４面の調査終了後に追加調査区であるＥ区について土留め・表土掘削を行い着手した。建物に付随する地下施設のために設定されたＥ区は40㎡の調査対象面積となる。表土掘削の結果、北側半分には地下室状の攪乱があり、基盤層である砂丘砂層直上まで大きく攪乱されていたため遺構面は１面（Ｃ・Ｄ区の第４面に対応する）のみの設定となった。狭長な調査区内からは井戸遺構４基、廃棄土坑10基、建物としてはまとめられない柱穴が検出された。隣地のＤ区と同様に砂丘面は3.25ｍ付近で検出され、北側に緩やかに落ちていく。この調査区ではコンテナ10箱程度の遺物が出土した。遺構の主体は11～14世紀代で、古代以前の遺構はなく遺物のみが出土する。

第172次調査では、博多遺跡群内の近年の発掘調査では数少ない大規模な面積での調査であり、遺構の繋がりや弥生時代からの現代に至るまでの地形の変化をダイナミックに捉えられており、博多の地理的な変遷を考える上で重要な成果を上げることができた。

Ph.25　調査風景１

Ph.26　調査風景２

Ph.27　調査風景３

Ph.28　調査風景４

Ａ・Ｂ区調査の概要

１．調査区の位置と土層・調査面の設定

博多遺跡群はおおむね３列の砂丘列から成り立っているが、一般に陸側の砂丘１・２を「博多浜」、海側の砂丘３を「沖（息）の浜」と呼んでいる。博多浜の１・２列間には、御供所町東長寺付近を谷頭とし、西側櫛田神社・博多川方面に開析する谷がみられる。博多 172 次調査地点のうち、Ａ・Ｂ区はこの谷底付近、Ｃ・Ｄ区は砂丘１の海側に下がる斜面に相当する。これは土層柱状図（Fig. ９）で、Ａ区北西側土層では基盤の黄白色砂層（箱崎砂層）が東から西にかけて徐々に下り、同じく北東側土層では南側から北側にかけて下っていることが観察できる。

現在の地表面の標高はほぼ 4.7 ｍで、試掘調査の結果から GL.-1.00 ｍまでは攪乱層であり事業者側で除去したのち調査を開始した。しかしまだ中世遺構面にはまだいたらず、さらに中世遺構面が検出されるまで機械掘削し、以下を精査することとした。その結果、北東側では標高４ｍ付近で中世遺構面が確認されたが、南西側では 3.0 ～ 3.4 ｍ付近で確認でき、この面を第１面として調査を始め、以下 30 ～ 40cm ごとに調査面を設定し第２～４面とした。その結果遺構面の厚かった北東側は４面の調査となり、薄かった南西側は３面の調査となった。廃土置場確保の関係からＡ区の北東側を１区、南西側を２区として先行着手し、A2 区終了後Ｂ区に着手することとした。以下各調査面の概要を述べるが、面が必ずしも遺構の同時代性を示すものではないことをあらかじめ断っておく。

２．各調査面の概要（付図、全体図参照）

第１面（Fig.10）

最初の中世遺構検出面であるが、近世～現代を通して博多人形、小鍛冶等の手工業が盛んだった地域で、それに関係する廃棄物処理のため攪乱土坑が多く掘られ、特に短冊形街区の道路に面しない奥まった地域（Ａ区南西半分）に集中しており、中世遺構としては、Ａ区北東半分とＢ区で中世末の太閤町割を示す柱穴（柵）列４条と溝ＳＤ 345 が検出された。この柱穴列と溝は現在の地籍図と完全に一致し、また繰り返し杭列は作り替えられ、溝も長期の使用により厚く酸化鉄が沈着するなど、現在の町割りが太閤町割を長期にわたって忠実に踏襲していることがわかる好資料である。柱穴列間の間口は２間、３間半、２間半と狭く、まさに短冊形を呈している。柱穴列には脇に併行して瓦組井戸、土坑、粘土貼り土坑、便槽として使われたと思われる埋甕が配置され、さらには馬など家畜の遺骸が埋葬（ＳＫ 114、129 等）されるなど、街区の道路に面しない奥側には、当初畑が営まれそれに関係する施設が作られていたものと思われる。しかし、その後先述したように、手工業廃棄物処理スペースとして利用された。溝ＳＤ 345 と南側の区画は海側柱穴列と若干方位に違いがあるが、Ａ・Ｂ区の谷部分と砂丘１の斜面部分を区別する地形上の理由によるものであろう。近代遺構として特筆しておくべきものに、第２次世界大戦時の防空壕と考えられる竪穴ＳＸ 343 がある。２×７ｍの長方形で、長辺の壁際に土留め横板の押さえを兼ねた柱列がある。

第２面（Fig.11）

太閤町割以前の 15 ～ 16 世紀段階の遺構群を中心とする。埋没段階で多量の陶磁器、瓦、礫が廃棄された 10 条ほどの溝が縦横に検出された。これらの溝には作り替えなど数次にわたる変遷がみられるものもあり、街区の変遷を知る上で好資料である。とりわけＢ区を縦断し、Ａ区南西隅に延びるＳＤ 007 は規模が大きく、少なくとも３回の掘り直しがみられる。この溝も砂丘１の斜面裾を意識したもので、太閤町割の溝ＳＤ 345 にほぼ踏襲される形となっている。また、大量の土師器皿を廃棄した

４カ所の大規模な土師器溜まりが、Ａ区北東半の一部の区画を囲むような形であった（ＳＫ 134、135、159、ＳＤ 240）。この区画の北東側を画するＳＤ 264 のからは、湯釜、挽き臼、李朝の茶碗など茶の湯に関係する遺物が多数出土している。この溝周辺ではＳＫ 309 でほぼ完形に近い粉青沙器壷が出土するなど、李朝陶磁器が多い。この区画の中に８×４ｍほどの範囲で 14 基の墓が確認された。太閤町割の区画に規制されておらず、町割り以前のもである。また、周辺からは宝篋印塔、五輪塔などの供養塔破片も多く出土しており、中世後半期のある時期に墓域が形成されていたものと思われる。このほか井戸、廃棄物処理土坑も多い。柱穴も多数検出されているが組織的に把握できない。性格は明らかでないが敷石遺構、集石遺構、石積みを持った土坑などもみられる。

第３面（Fig.12）

第２面で遺構上部を確認し、それを掘り下げた状況の遺構も多いが、掘り下げ後あらたに検出した遺構も多い。溝のうちＳＤ 007 はＳＤ 264 とＢ区内でほぼ直角に繋がり、ある区画の東隅を示していたが、後この区画の北東溝ＳＤ 264 は廃止され、ＳＤ 007 は南東側に移動し直線的な溝ＳＤ 411 に作り替えられ、さらにＳＤ 379 に作り替えられ、太閤町割段階でＳＤ 345 に代わるという一連の流れが見て取れる。

この面では、ＳＫ 147、168、241 等の 11 世紀末～ 12 世紀初頭の白磁一括廃棄土坑や桶や曲げ物を井側とした井戸が多数検出される。また、Ａ区北東側半分を中心に柱穴群もみられるが、組織的把握は出来ない。Ａ区南西側半分ではすでに中世遺構面下の古代・弥生時代の包含層である茶褐色砂層に達している。古式土師器、甕棺等の破片が含まれるが、遺構はなく砂丘１側からの流れ込みであろう。

第４面（Fig.13）

中世遺構面が厚かったＡ区北東半側のみで調査をおこなった。

新たに井戸が数基が検出された。一部は古代のものである。小規模な土坑であるが石製巡方を出土した土坑ＳＫ 522 もあり、古代の溝ＳＤ 471 もみられた。この面で特筆すべきものとして便所と考えられる２基の遺構がある（ＳＸ 433、546）。詳細は本文中で述べるが、隣接する二つの遺構は 11 世紀末～ 12 世紀初頭のもので博多遺跡群で確認された当該期の便所遺構としては初例である。最下面の古代・弥生時代の包含層である茶褐色砂層からは弥生時代甕棺も比較的大きな破片で出土しているが、明確な遺構をともなっておらず、原位置をとどめているとは思われない。砂丘３側からの流れ込みであろう。

以上、簡単に各調査面の状況を述べたが、コンテナ 2,000 箱を優に超す膨大な量の遺物と遺構の数に、限られた紙数ではとうてい網羅できるものではなく、次項で述べる遺構と遺物については主たるものについて取り上げることとする。

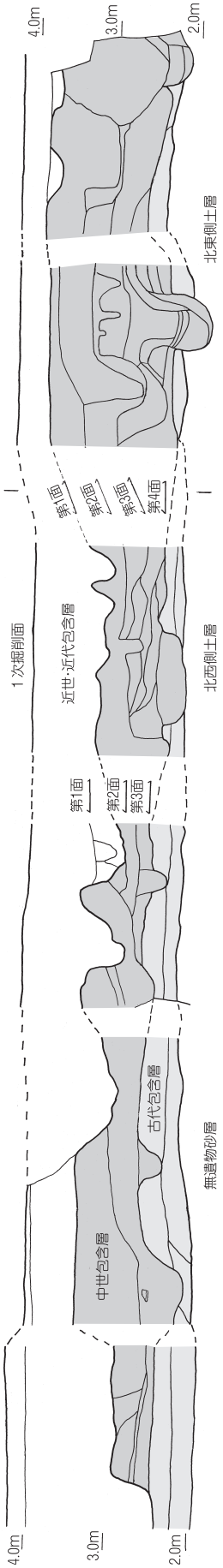


Fig.9　Ａ土層模式図と調査面の設定

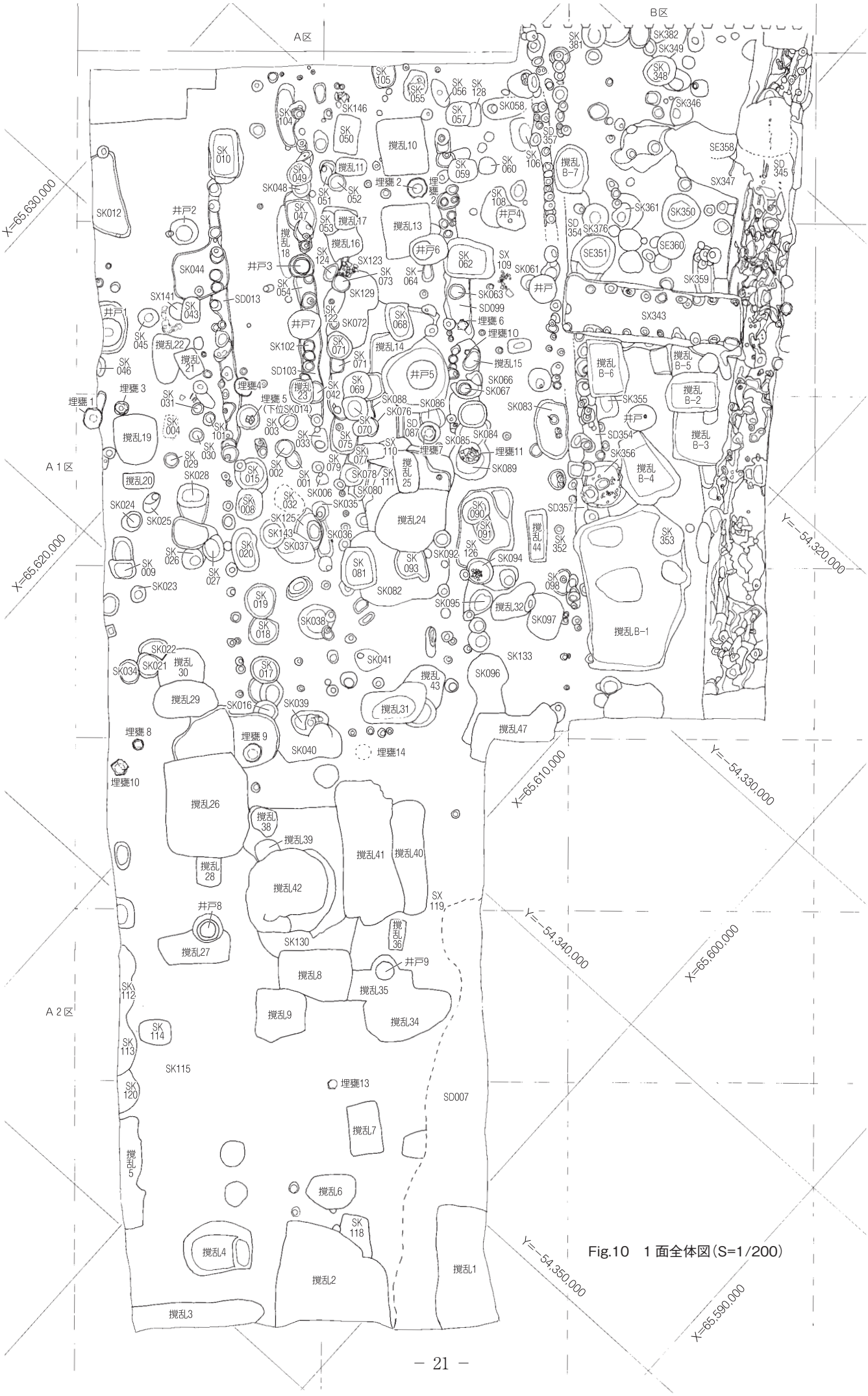


Fig.10　1面全体図(S=1/200)

Fig.11　２面全体図（S=1/200）

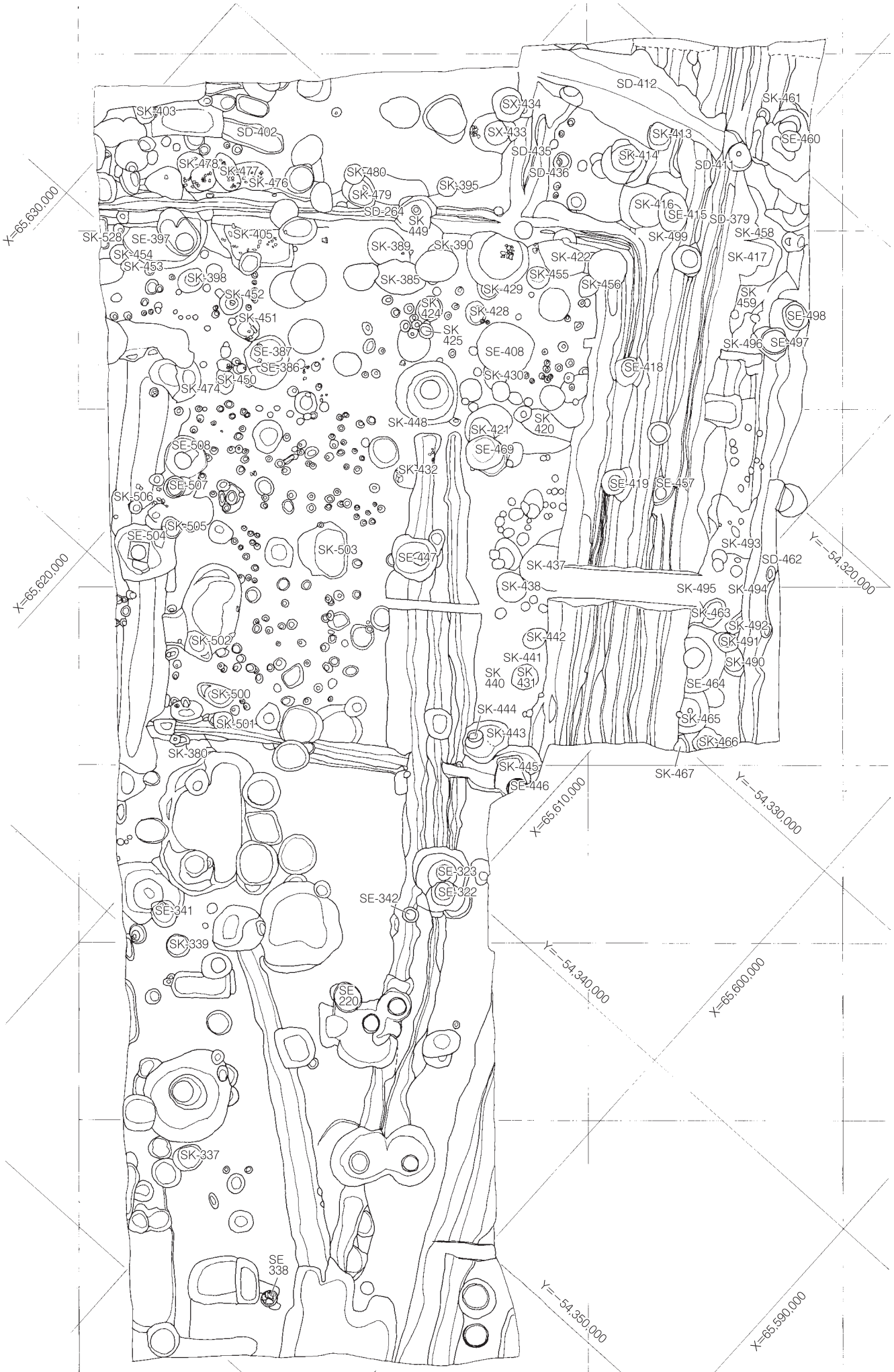


Fig.12　3面全体図(S=1/200)

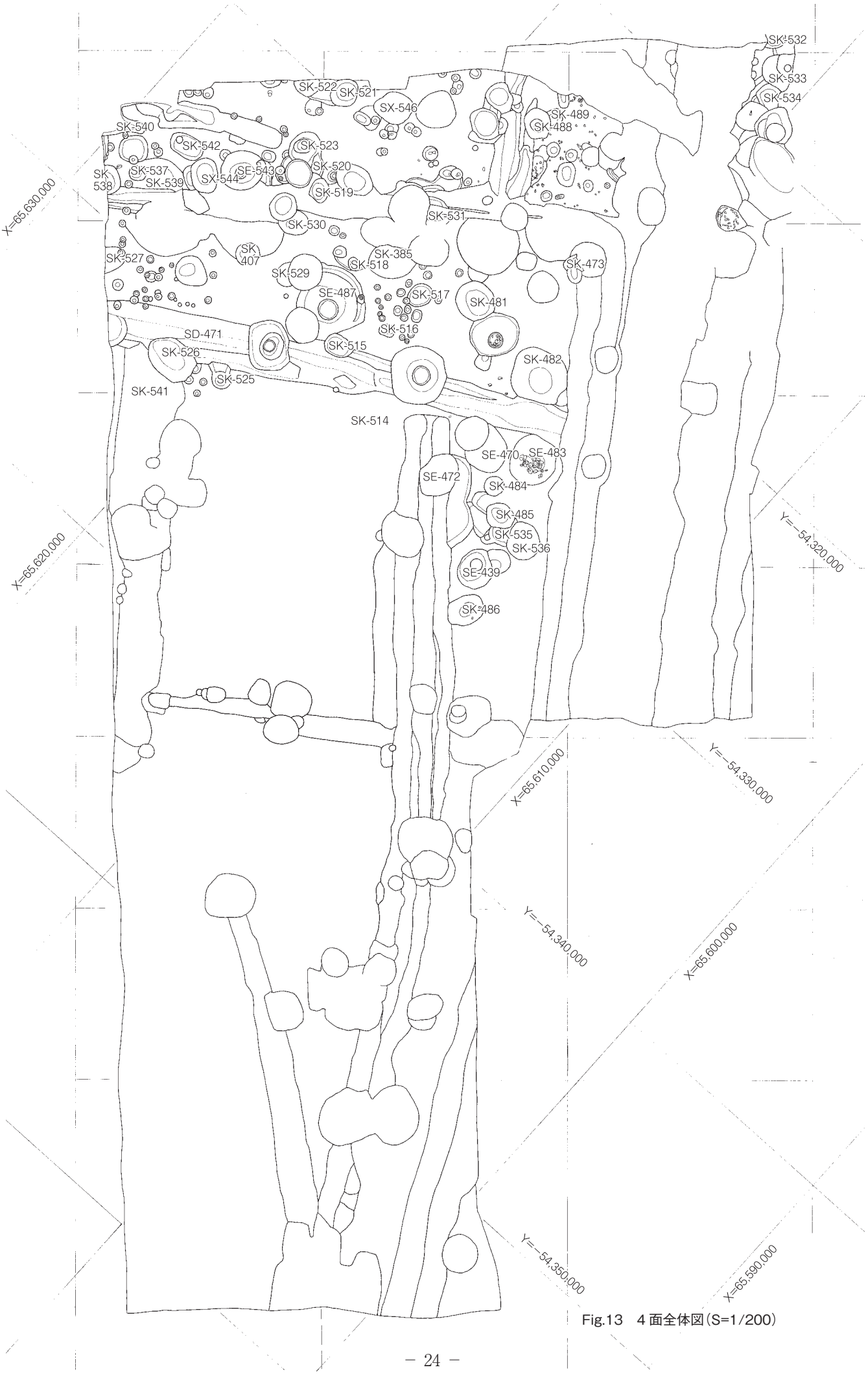


Fig.13　４面全体図（S=1/200）

3．遺構と出土遺物

1）近世・近代の遺構と遺物（Fig.14）

第１面の概要で述べたとおり、中世末の太閤町割を踏襲する区画の柱穴列と溝、その区画内に営まれた遺構である。便槽である埋甕が14基検出された。瓦質、陶質で内面に結晶物が付着している。粘土貼り土坑は、ＳＫ010のように長方形土坑の内面を３～４cm厚さで粘土貼りしたもので、砂地での水溜めだったと思われる。馬の埋葬遺構（ＳＫ114、129、234）もあり、農耕や商品運搬に使用されたものであろう。図示した遺物は、いずれも攪乱土坑から出土したもので、１が中国製かと思わ

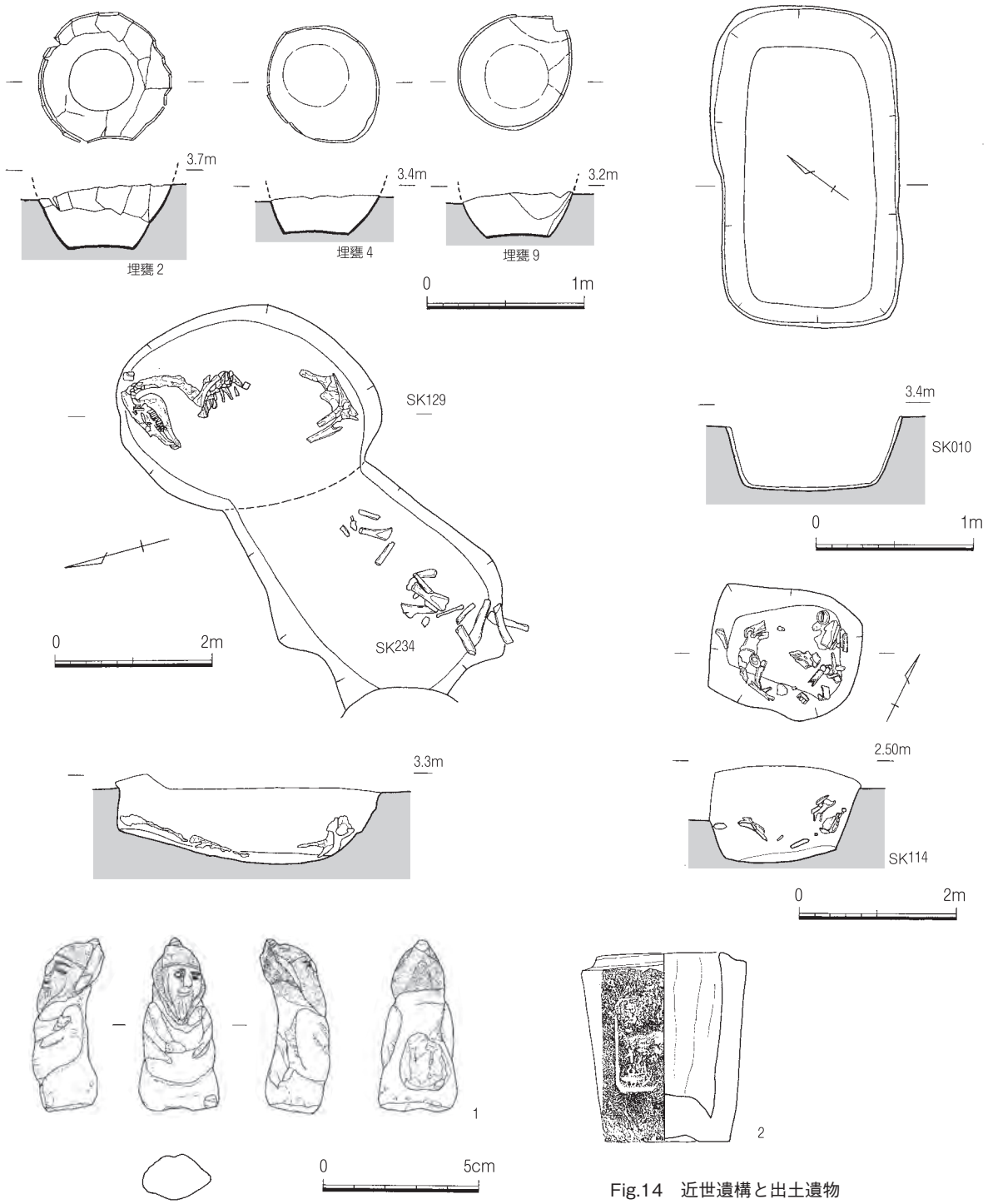


Fig.14　近世遺構と出土遺物

れる磁質の胡人人形で、２が側面に「堺伊織」と印刻した焼塩壺である。近世・近代の廃棄物処理土坑には、博多の特産品である博多人形関係や小鍛冶関係の遺物も多く出土しており、当該期の博多の産業を知る上で重要な資料ではあるが、今回は割愛しいずれ機会を得て紹介したい。

２）中世の遺構と遺物

検出した遺構は、中世博多のエネルギッシュな活動を裏付けるように多様、多岐にわたり、また出土遺物も膨大な量にのぼる。調査区内の近世以降攪乱の具合によって、中世遺構面（包含層）の厚さが違い、調査面ごとで検出遺構の年代は必ずしも一致しない。このため、ここでは遺構の性格によって溝、土坑、井戸、集石遺構等、墓、便所に区分し、それぞれの遺構についてまとめて記述し、その中で検出調査面を記すことにする。

溝

溝は排水の用途のみならず、土地区画を示す遺構である。また人為的に変更された溝の変遷は、土地区画の変遷を示すものであり重要である。Ａ・Ｂ区では、Ｂ区のほぼ全体を占め、Ａ区の南隅をかすめて東西に延び、砂丘１と谷とを区切るメインの溝（ＳＤ 007、379、411）と、これに併行する溝（ＳＤ 211、225、240 これとほぼ直角に接し海側に延びる溝２条（ＳＤ 161、264、211、213、326）がある。これらはほぼ 15 ～ 16 世紀のものであるが、これらより一時期古い溝（ＳＤ 412）がＢ区東側を斜断する形であり、さらに古代の溝（ＳＤ 471）もＡ・Ｂ区を横断しＣ区まで延びている。以下各溝の状況と出土遺物について述べ、Ａ・Ｂ区のまとめの項で溝による区画の変遷を総括する。

ＳＤ 007（Fig.15 ～ 18）

Ａ区南西半分は、近世・近代の廃棄物処理が活発に行われ、中世遺構面（包含層）が浅く、また調査の段取り上最初に着手したため、ＳＤ 007 は第１面の段階で、溝の海側斜面に廃棄された多量の瓦片の堆積によって確認できたが、その東側部分の延長ラインはＢ区着手以降確認することができた。Ｂ区では第１面で太閤町割によるＳＤ 345 が確認され、第２面で初めにＳＤ 379 が確認され、第３面に至ってＳＤ 007、411 が確認できた。Fig.19 の土層断面図でもわかるように、これらの溝の前後関係はＳＤ 007 →ＳＤ 411 →ＳＤ 379 →ＳＤ 462 →ＳＤ 345 であり、その都度溝が砂丘３側に移動していることがわかる。また、ＳＤ 007 はＢ区途中でＳＤ 264 とほぼ直角に繋がり、ある時期の区画の東隅を形成していたが、ＳＤ 411 の段階でこの区画は廃され、さらに北東側に区画が延びていることがわかる。

出土遺物は多量で、特にＡ区では二次被熱を受けた瓦破片を中心に海側から投棄され、火災後の跡地整理に起因するものであろう。以下図示した遺物について述べる。

１～９は土師器皿で、２は「て」の字口縁の近畿系、３・８・９は大内系か。以外は在地のもので、径８cm ほどの小型のものと 12.5 ～ 13cm の中型がある。10 は土師質土錘、11 は瓦質火舎で側面に渦巻き連続印文を持つ。12 ～ 14 は三つ巴文軒丸瓦、15 ～ 17 は唐草文軒平瓦でいずれも二次的に被熱している。21 ～ 48 はいずれも中国磁器、陶器である。21 は見込みに花卉文を描く明染付、22 ～ 26 は外面に細い蓮弁文を持ち、見込みに印花文を持つ龍泉窯青磁碗、27 ～ 29 も龍泉窯青磁碗である。30 は内面に印花文を持つ青白磁皿で墨書があるが判読できない。31 は龍泉窯系青磁壷で外面を縦に面取する。32、33 は白磁皿で、33 は高台を４カ所アーチ状に抉り、外底に「徐」の墨書がある。34 ～ 36 は龍泉窯系青磁壷で、34 は体部を瓜割り形にする。37 は白磁碗の高台脇を打ち欠き「瓦玉」状の円盤に加工したものである。38 は青白磁梅瓶で櫛描きの渦巻文を施す。39 は青白磁大皿で体部は

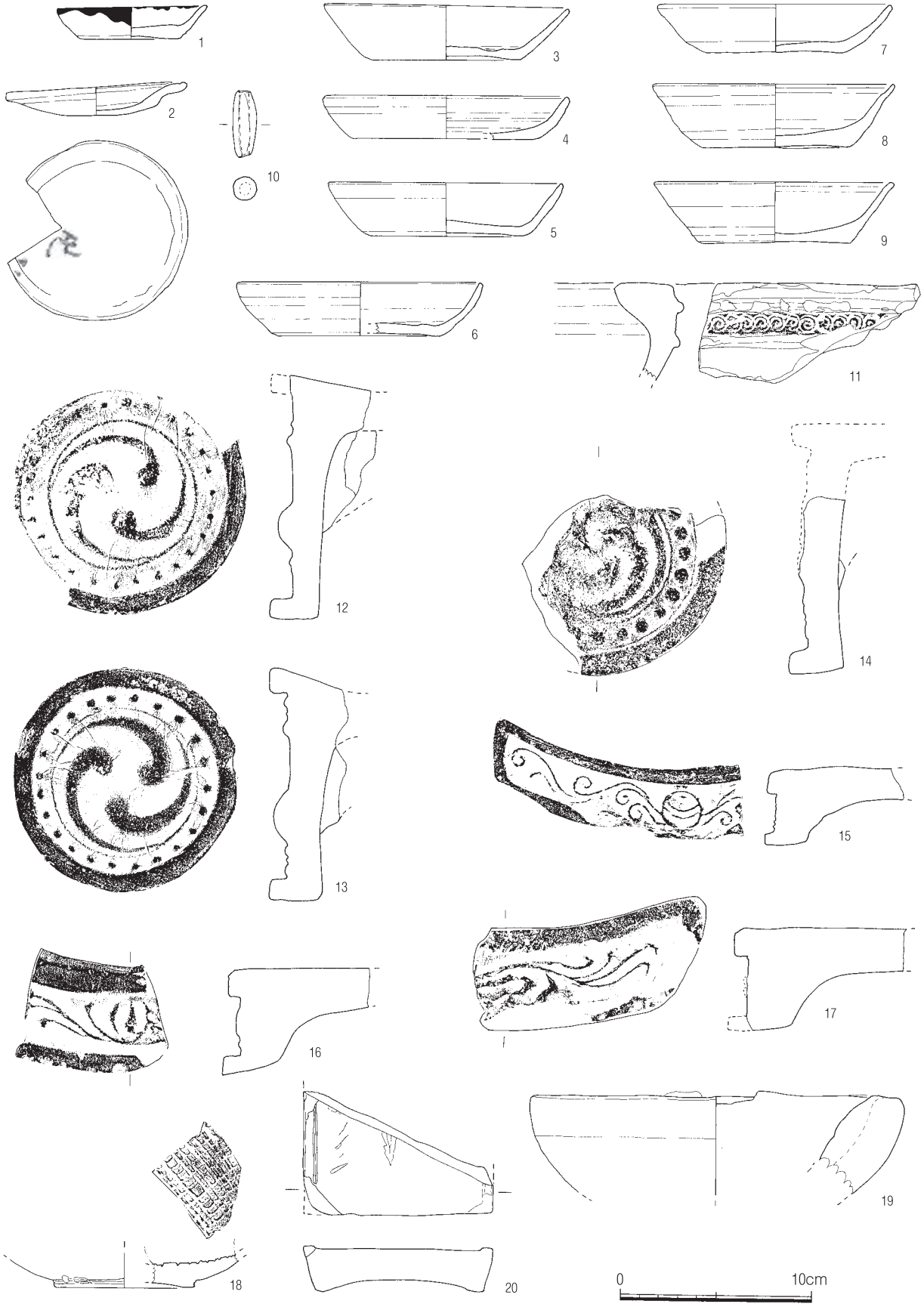


Fig.15　S D 007 出土遺物(1)

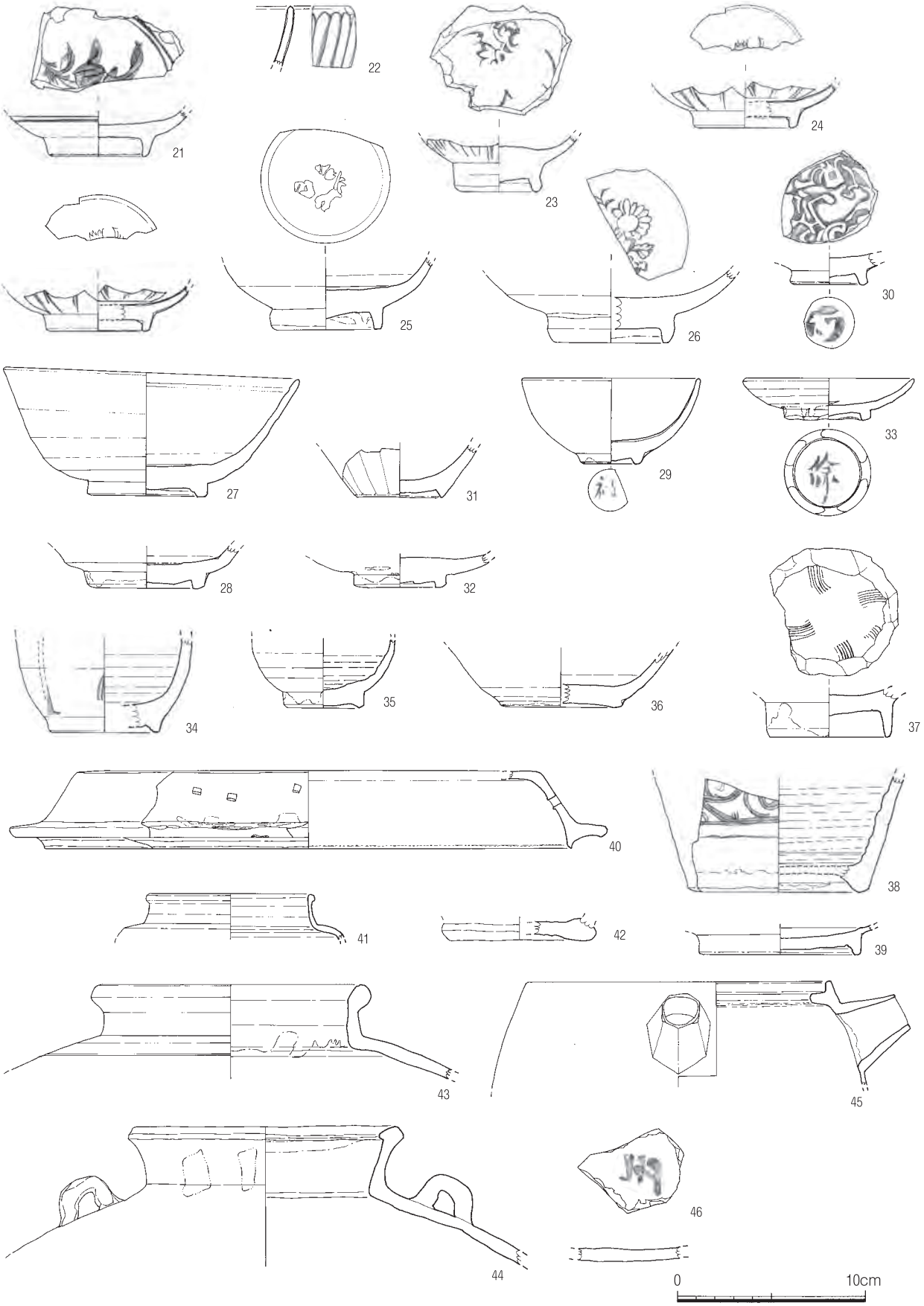


Fig.16　S D 007 出土遺物(2)

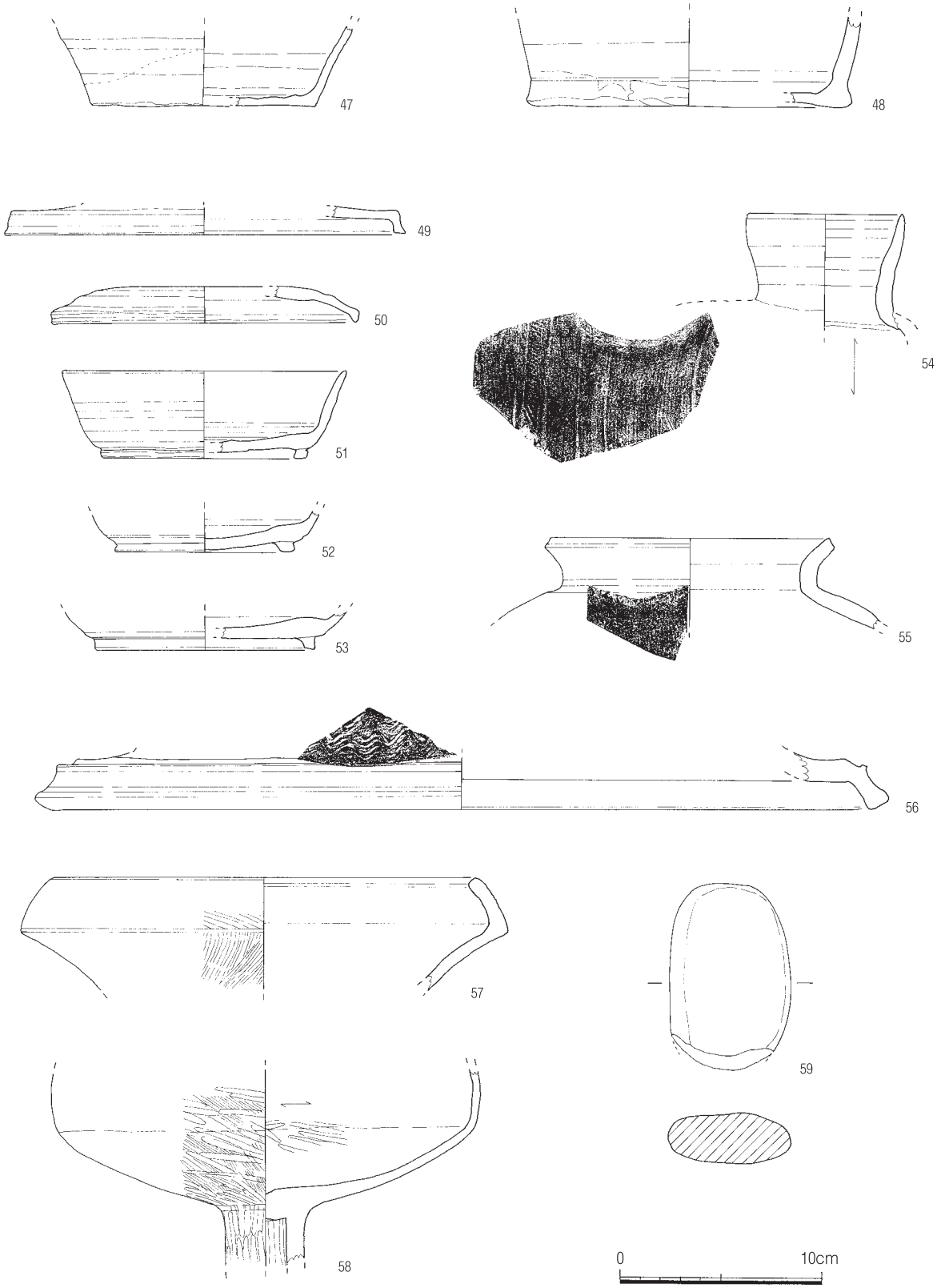


Fig.17　ＳＤ 007 出土遺物(3)

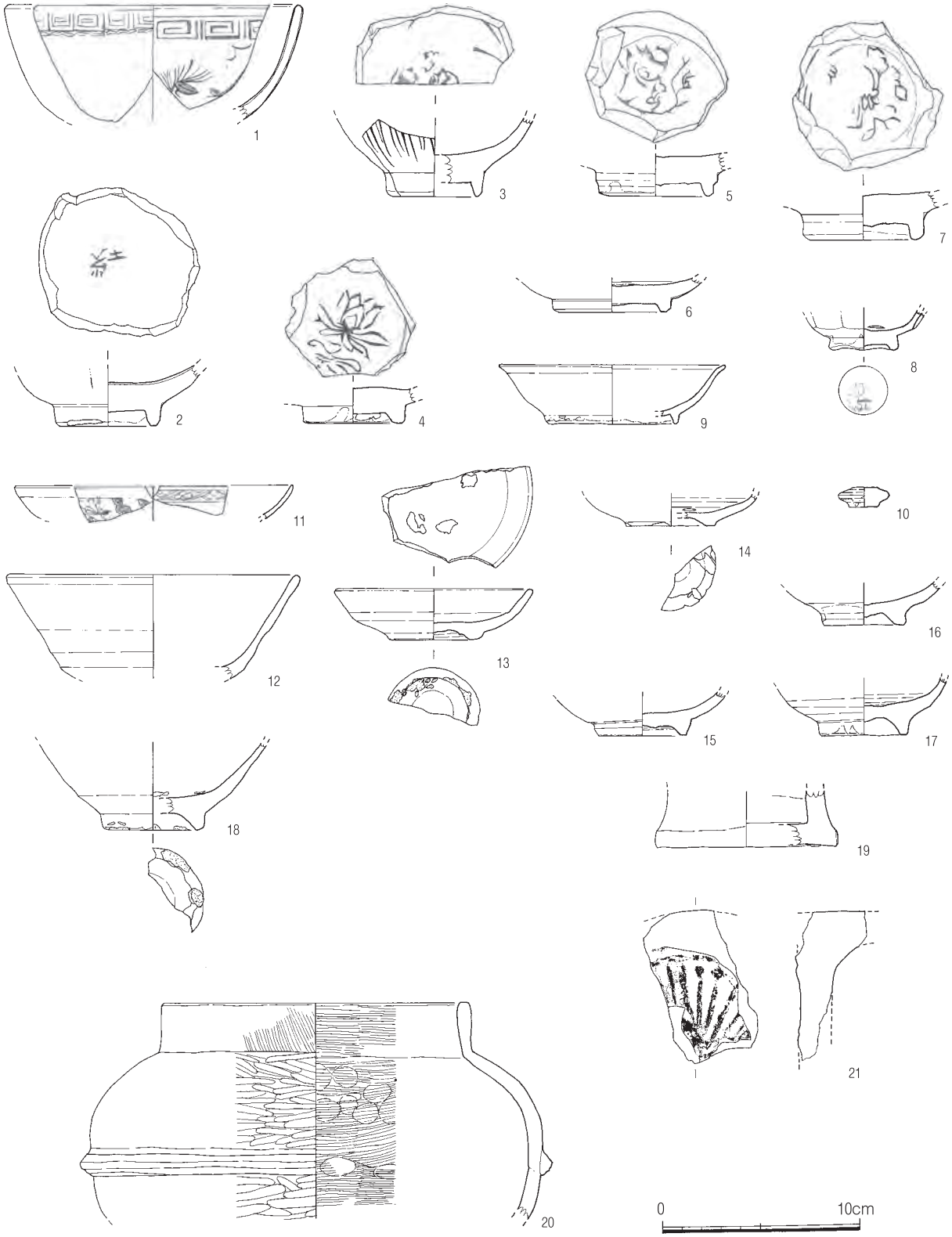


Fig.18　ＳＤ 007・379 出土遺物

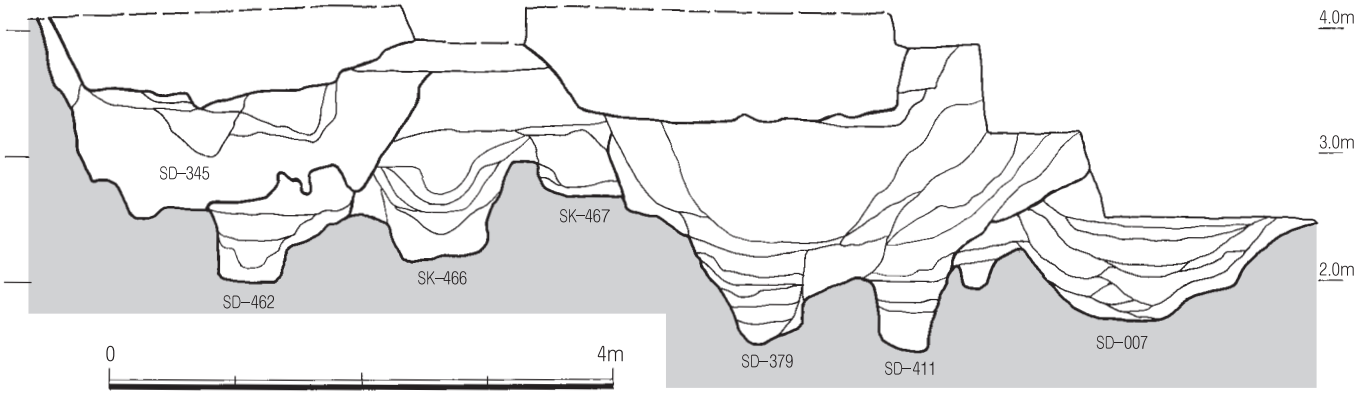


Fig.19　B区南西側土層図

薄く、繊細な作りである。40 ～ 48 は中国陶器である。40 は外面に黄釉を施した大型の蓋で、側面に箸状の刺突具で外からの穿孔がある。胎土、釉ともに黄釉鉄絵盤と同じで、その蓋と思われる。41 は小豆色の精良な胎土で、黒釉を施す薄胎の壷、42 は盤口水注の底部破片で、ガラス坩堝に転用され内面に水色のガラスが付着している。43・44 は褐釉陶器四耳壺、45 は面取された注口をもつ片口である。46 は詩文を書いた黄釉鉄絵盤の底部破片で、「王」の文字が見える。47 は白化粧した黄釉薄胎の壷底部、48 は黄釉を施した長沙窯の水注である。

ＳＤ 007 は弥生～古代の包含層を掘り込んで作られているため、それらの遺物も混在する。49 ～ 56 は須恵器である。49･50 は坏蓋、51 ～ 53 が高台付坏、54 は横瓶である。55 は甕、56 は蓋である。57・58 はそれぞれ弥生後期の壷・高坏で、58 は瀬戸内系のものであろう。59 は硬質砂岩礫の叩き石で叩打痕を持つ。

Fig. 6 の遺物は、Ｂ区でのＳＤ 007 延長部調査の当初、ＳＤ 379 との区別が出来なかったため両方の遺物が混在するものとして取り上げたものである。１～７は龍泉窯系青磁碗である。１は口縁部の内外直下に雷文の印文を施すが、外面雷文の直下には花弁文もある。内面体部には印花がある。２～７は外面に細い線描き蓮弁を持ち、見込みに印花文を持つものである。２には文字、４には蓮華文があり、６には見込み中央部の釉を掻き取っている。８～ 10 は白磁で、８が高台をアーチ状に削り出す六角杯、外底に墨書があるが判読できない。10 は小壷蓋である。11 は明染付である。12 ～ 18 は李朝の陶磁器で、17 のみが磁器、他は陶器である。12・18 は胎土の粗い井戸茶碗風の碗である。19 は黄緑釉を施した瀬戸の瓶である。20 は瓦質の湯釜で、李朝の茶碗と併せて、茶の湯との関連が想起される。21 は中国系の花卉文軒丸瓦であるが、溝よりも古い時期のものである。

これらの出土遺物から、遺構の年代はほぼ 15 世紀代に位置づけられる。

ＳＤ 157（Fig.20）

Ａ区西隅で検出したもので、ＳＤ 225 が埋没し、その最終段階の溝である。礫、瓦、陶磁器片が多数廃棄されている。ＳＤ 212 と同一の方位をとり、北側は同様に中途で収束するものと思われる。図示した遺物は、１が龍泉窯青磁皿で見込みに印花文を持ち、体部内外にヘラ描き文を施す。厚く青緑の釉がかかる。２は高い高台を持つ李朝の白磁碗で、胎・釉ともに精良である。見込み・高台に目跡が残る。15 世紀代には埋没したものと思われる。

ＳＤ 161（Fig.20）

Ａ区中央部を横断する形で検出した。北東側のＳＤ 264 とほぼ平行し、南東側ではＳＤ 007 に繋がる。規模が小さく、ＳＤ 007・264 による 15 世紀段階のある一時期の大区画を、さらに細かく区画する溝であろう。ＳＤ 211・213・326 の溝に切られる。他の溝と同様、多数の礫が廃棄されている。図

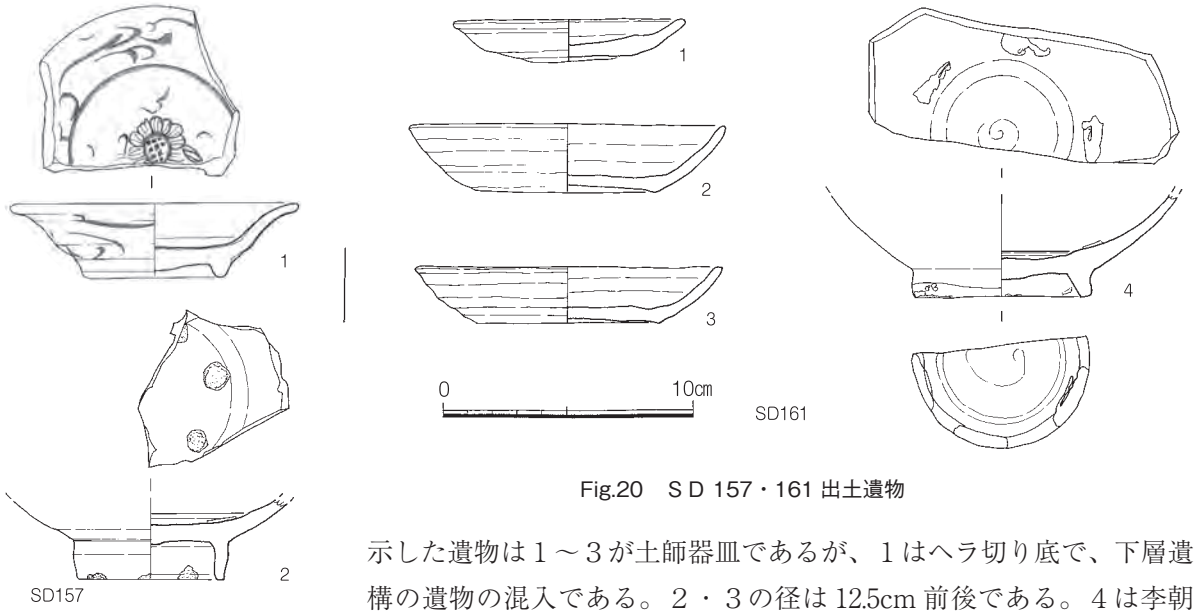


Fig.20　ＳＤ 157・161 出土遺物

示した遺物は１～３が土師器皿であるが、１はヘラ切り底で、下層遺構の遺物の混入である。２・３の径は 12.5cm 前後である。４は李朝の陶器碗で、緑褐色透明釉が内外面にかかり、畳付の釉を拭き取る。内底と畳付に目跡が残る。

ＳＤ 211・213・326（Fig.21・22）

Ａ区北半の途中から南西方に途中やや湾曲して流下する。この３条の溝は作り替えによるもので、本来一連の溝である。Fig. 追加分の土層断面図で確認できるように、ＳＤ 213 →ＳＤ 326 →ＳＤ 211 の順番で作られている。これらの溝はＳＤ 161 を切って掘り込まれており、それより新しい。また、北東端部分では埋没最終段階で、大量の礫や供養塔破片、人骨片、陶磁器等が廃棄されたＳＫ 131 となっている。別項で述べるが、この溝の北東端部の西側に接して墓地があり、これらの溝を掘り込む段階で墓地の一角を壊しており、ここで出土する人骨や供養塔はこの墓地に由来するものであろう。この溝の北東端部の方位は太閤町割に由来する柱穴列と同じで、柱穴列はこの溝を意識的に避けるように掘られており、太閤町割自体がこの溝の方位を生かす形で行われた可能性を指摘できよう。太閤町割直前の遺構の一つである。図示した遺物は１～４がＳＤ 211、５～ 14 がＳＤ 213 出土である。１～３は供養塔でいずれも砂岩製である。１・２は宝篋印塔の相輪の一部で、１が宝珠をうける請花部分、２が九輪の一部と請花、伏鉢部分に当たる。３は五輪塔の宝珠、受花部分すなわち空風輪である。４は紡錘車と思われる滑石製品で、表裏面に車輪状の線刻を施している。５～７は土師器で、いずれも糸切り底。６は体部が丸みを持つ碗で本来は、高台があったものと思われる。７は灯明皿である。８・９は中国製品で、８が見込みに印文のある龍泉窯青磁碗、９が内外面印花の鉢で鮮やかな青釉がかけられている。10・11 は遊具で、10 が丁寧な叩打によって球形にした砂岩製の石球、11 が土製円盤である。12 は三つ巴文の軒丸瓦。13 は銅製の笄で、両端をわずかに欠き、幅広の部分に樋状のくぼみがあり銀が象眼されている。14 は大型の瓦質土器火舎で外面口縁部直下の２条の突帯間に５弁の印花文が施されている。

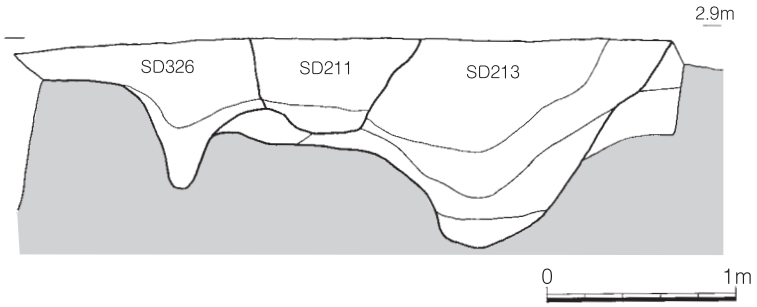


Fig.21　ＳＤ 211・213・326 土層図

ＳＤ 212

Ａ区南半で検出した溝で、軸線をＮ-45°-ＥにとりＳＤ 157・225 の軸線と似るが、他の溝とは異なる。北

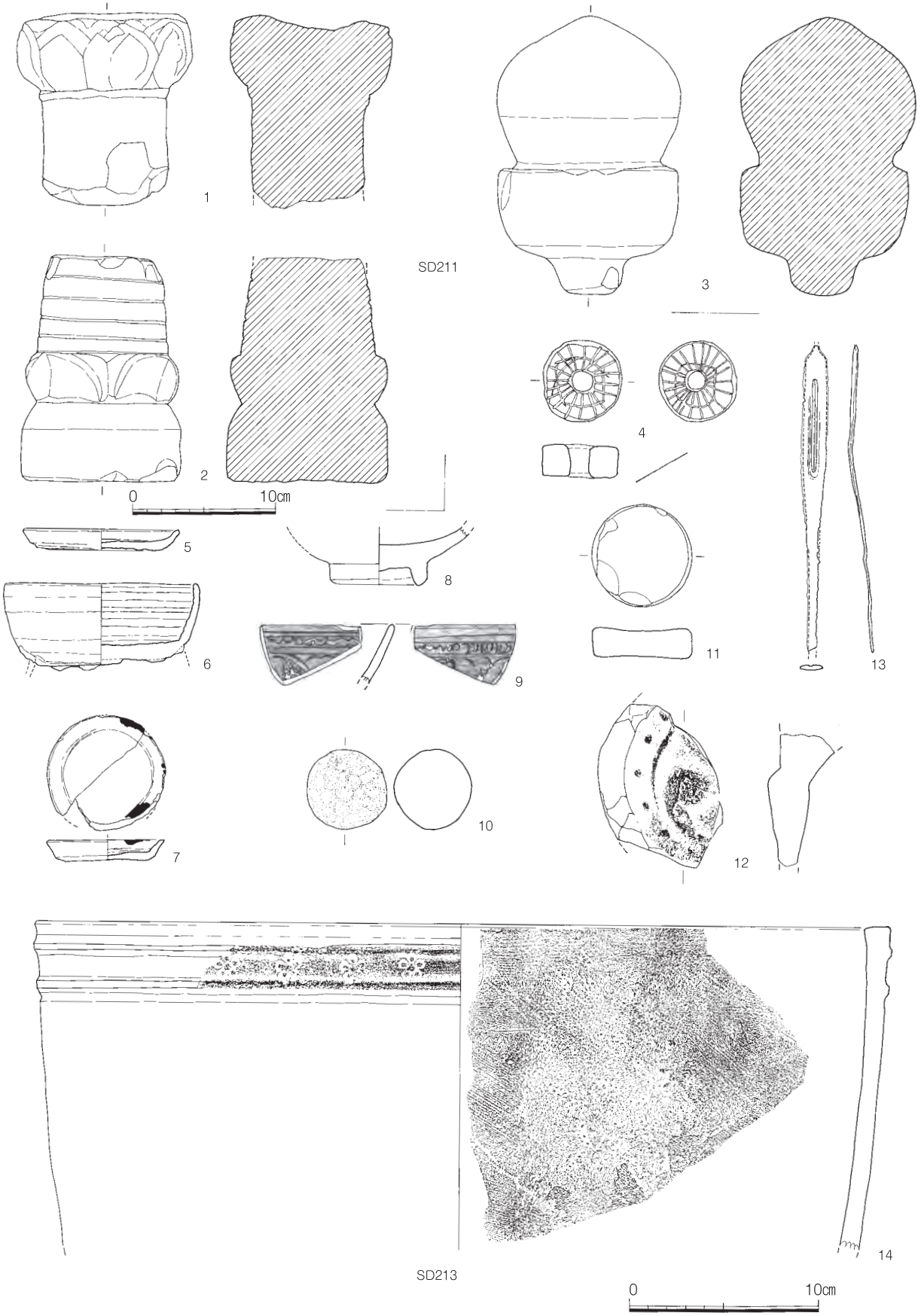


Fig.22　ＳＤ 211・213 出土遺物

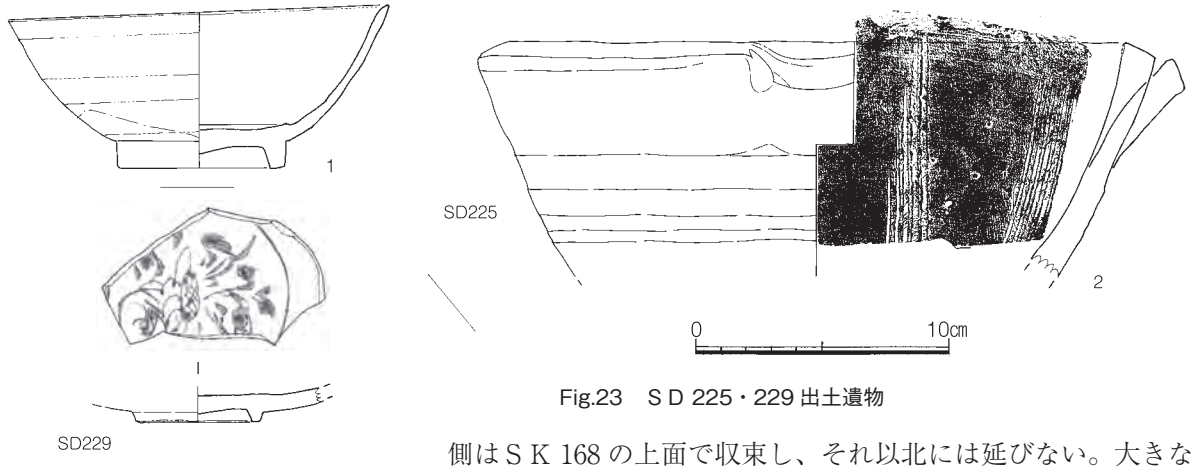


Fig.23　ＳＤ 225・229 出土遺物

側はＳＫ 168 の上面で収束し、それ以北には延びない。大きな礫が廃棄されているが、出土遺物は小片が多く図示していないが、明染付や李朝陶磁器がみられず、龍泉窯青磁碗で細身の鎬蓮弁文を持つもの、口禿白磁皿などがあり、14 世紀代の遺構であろう。

ＳＤ 225（Fig.23）

Ａ区南半の北西壁に接して検出した溝で、ＳＤ 157 の一段階古いものである。軸線はＳＤ 212 とほぼ同じである。出土遺物は小片で、図示しうるものは少ない。１は体部が丸みを帯び、幅広の高台を持つ白磁碗で、２は須恵器に近い硬い陶質で東播系と思われる片口擂鉢である。内面に５条の卸目が、間隔をあけて施されている。遺物は古いものが混在するが、遺構年代は 14 世紀後半であろうか。

ＳＤ 229（Fig.23）

ＳＤ 264 の最上部堆積の一部である。図示した遺物はベトナムの染付で高台付の皿である。見込みの圏線内にくすんだ青の花文が描かれているが、溜まり部分は褐色に発色し、その周辺は緑を帯びる。また、外底露胎部には鉄漿がかけられ、赤褐色を呈する。

ＳＤ 240（Fig.24 ～ 27）

Ａ区北東半の北西壁際で検出した溝で、長さ 16.5 m、深さ 0.6 m前後、幅 1.5 ～ 2.0 mで、断面形はＵ字形を呈す。両端ともに収束しており、排水を主たる目的とした溝ではない。ＳＤ 211・213 とほぼ同じ方位をとる。他の溝と同様に埋没段階で、多量の礫、陶磁器が廃棄されているが、特に最下面で床面、壁に張り付くような形で、大量の完形土師器皿が廃棄され、その量は深さ 10cm のコンテナで 38 箱にも及ぶ。当初から土師器皿を廃棄する目的で作られたのであろう。直に近い壁も崩れはなく、長期間使用されたものではない。これらの土師器皿の集積は大きく４カ所のまとまりがあり、南側からＡ～Ｄ群と呼ぶ。Fig.25 に示した遺物は下部土師器溜まり以外の出土である。１～ 26 はいずれも糸切り底の土師器皿で、口径 6.2cm 前後、器高 1.8cm のもの（１・２）、口径８～９cm、器高 1.2 ～ 1.5cm のもの（３～ 17）、口径 12 ～ 13cm、器高３cm 前後のものの３グループに大きく分けられる。このうち、１は焼成後に底部穿孔があり、22 は口縁に煤が付着し灯明として使用されたものである。27 は黄釉を施した瀬戸卸目皿の体部上半～口縁部破片で、下位に卸目の線刻がある。28 は薄胎の中国褐釉陶器広口壷で、茶入れか。29 は同安窯系青磁皿、30 は三角玉縁の白磁碗で、見込みにハマ痕跡が残る。31 は白磁合子蓋、32 が薄胎の青白磁大皿で、見込みにヘラと櫛による花文が描かれ、透明釉が薄くかかる。33 は平高台の龍泉窯系青磁小碗であるが二次被熱で釉はくすんでいる。34 は褐釉の鉢で口縁部外面にフリルのある突帯がある。35 は李朝陶器碗で見込みに目跡が残る。36 は磁竈窯の注口付鍋破片で、円筒形の把手が付く。37 は中国製焼絞め陶器甕の底部で、胎土、表面ともに赤褐色の発色をしており、丁寧な器面調整を行っている。

Fig.26 の１～ 20 は、最下面土師器皿廃棄のＡ群出土遺物で、いずれも糸切り底である。口径７～

Fig.24　S D 240

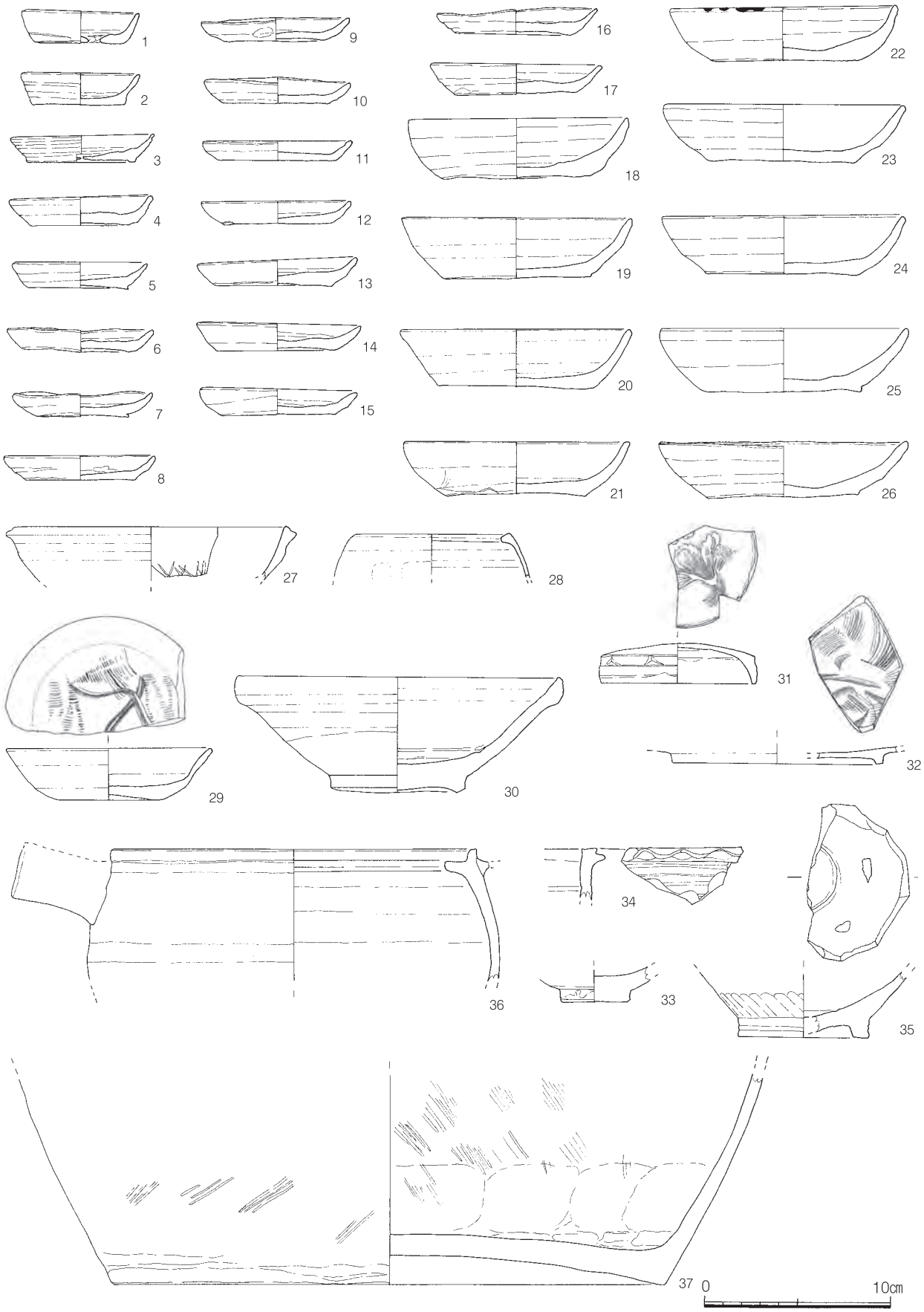


Fig.25　ＳＤ 240 出土遺物(1)

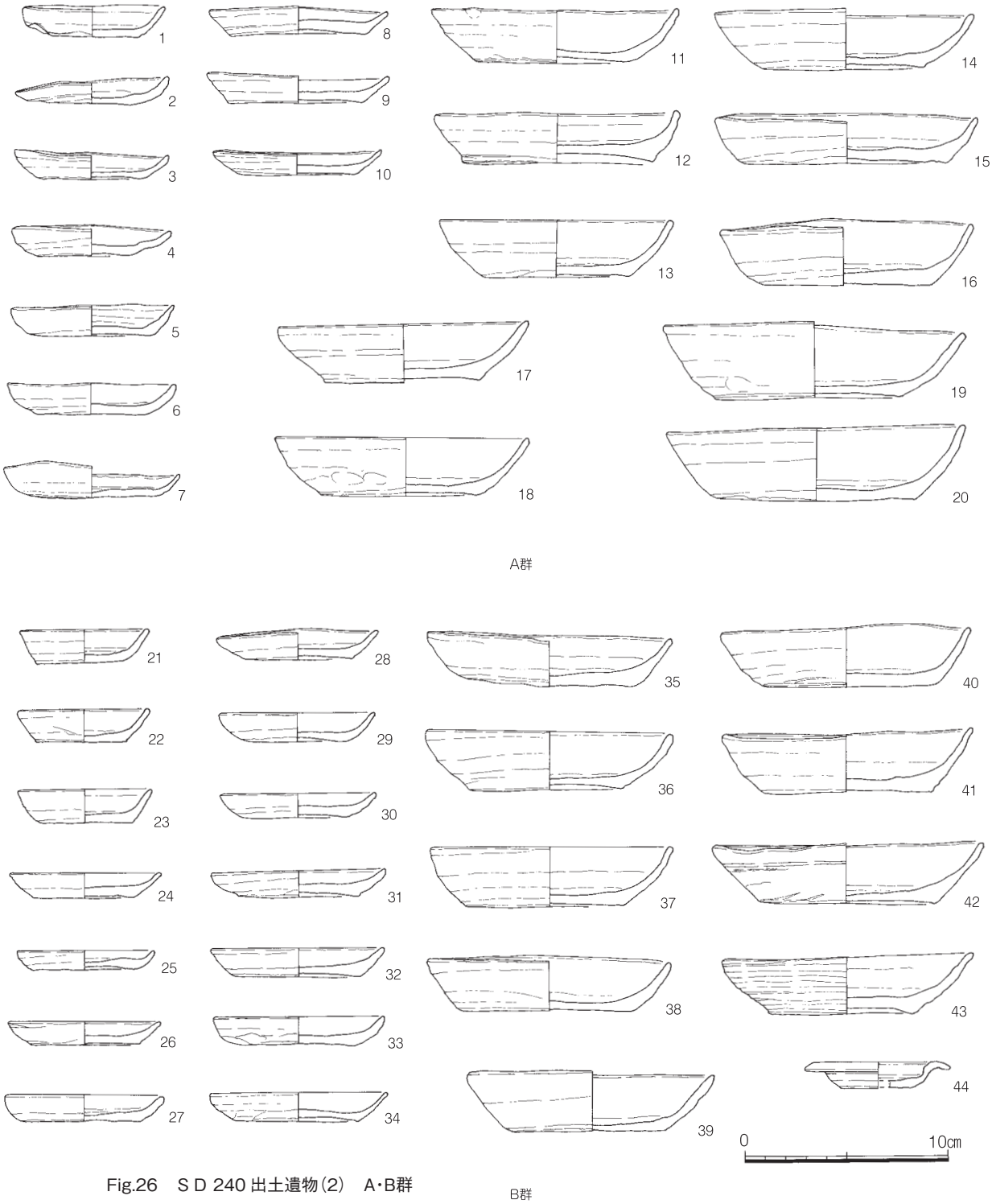


Fig.26　ＳＤ 240 出土遺物(2)　A･B群

９cm、器高１～1.5cm の小型のもの（１～10）、口径 12 ～ 13cm、器高 2.5 ～ 3.0cm のもの（11 ～ 16）、口径 15cm、器高 3.5cm の大型のもの（19・20）の３グループに大きく分けられる。

Fig.26 の 21 ～ 44 は、最下面土師器皿廃棄のＢ群出土遺物である。土師皿はいずれも糸切り底である。口径６cm 強、器高 1.6cm のもの（21 ～ 23）、口径８～ 9cm 強（25 のみ径 7cm）、器高 1.3cm 前後のもの（24 ～ 34）、口径 12 ～ 13cm、器高 2.5 ～ 3.0cm のもの（35 ～ 43）に分けられる。44 は黒褐釉が上面にかかった薄胎の陶器壷蓋で、磁竈窯の製品であろう。

Fig.27 の１～ 27 は､最下面土師器皿廃棄のＣ群出土遺物である。土師皿はいずれも糸切り底である。口径８～ 9cm 強、器高 1.3cm 前後のもの（１～ 16）、口径 12 ～ 13cm（20 のみ径 10.8cm）、器高 2.5

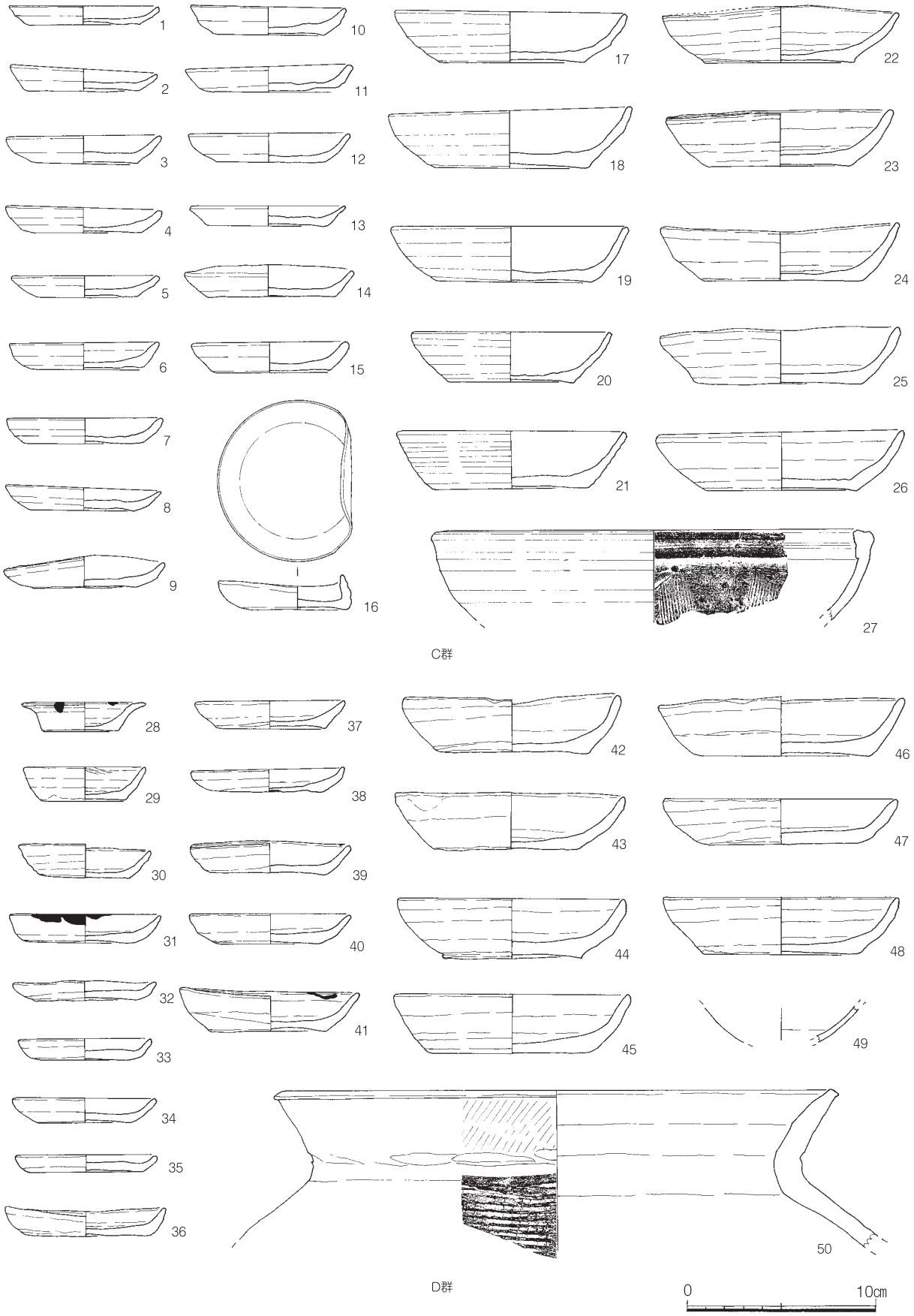


Fig.27　ＳＤ 240 出土遺物(3)　C･D群

～ 3.0cm のもの（35 ～ 43）に分けられる。16 は耳皿で、一側だけを折り返している。27 は中国製黒褐釉陶器擂鉢で、内面に幅の狭い櫛目が間隔をあけて施されている。

Fig.27 の 28 ～ 50 は、最下面土師器皿廃棄のＤ群出土遺物である。土師皿はいずれも糸切り底である。口径 7cm 弱、器高 1.5cm 前後のもの（28 ～ 30）、口径 8 ～ 9cm 強（33 のみ 7cm）、器高 1.3cm 前後のもの（31 ～ 40）、口径 10cm、器高 2.0cm のもの（41）、口径 12 ～ 13cm、器高 2.5 ～ 3.0cm のもの（42 ～ 48）に分けられる。１は口縁部が外反し、口唇上面にわずかな沈圏線を巡らすもので在地の器形ではない。49 は磁州窯系の黒釉磁杯である。50 は須恵質の甕で在地系のものであろう。

これらの土師皿の器形に特段の差異はなく、一時期の廃棄であると認められるが、その年代はおおむね 14 世紀後半代であり、また上面出土の溝廃棄段階の土師皿にもほとんど差異はみられない。このことから、溝の継続期間はきわめて短かったものと思われる。また出土遺物に李朝陶磁器、明染付はみられない。方位はＳＤ 211 に近いが、両者間には時期差があり同時併存ではない。直接は繋がっていないが、ＳＤ 225 の延長ライン上にあり、これと同時併存した可能性が高い。

ＳＤ 264（Fig.28 ～ 31）

Ａ・Ｂ区の北東側を区画する溝で、南東隅でＳＤ 007 と繋がる。また、Ａ・Ｂ区境付近で北東側に分岐しＳＤ 435・436 となる。他の溝と同様に溝廃棄段階で、大量の礫とともに大量の陶磁器類が廃棄され、その量はコンテナ 29 箱に及ぶ。ここでの出土遺物の傾向には湯釜、擂り鉢、李朝陶磁器が多いという特徴がある。以下図示した遺物について述べる。

Fig.28 の１～ 19 は土師器皿でいずれも糸切り底である。口径７～８cm、器高 1.5 ～２cm のもの（１～６）、口径９cm、器高 1.4cm のもの（７・８）、口径 11 ～ 13cm、器高 2.4 ～３cm に分けられる。19 は内面邸に菊花の印文が押されている。20 ～ 23 は瓦質陶器の湯釜である。20 は球形の胴部に直立する頸部を付け、肩の２カ所に耳を付け、胴部下半に幅広の鍔をつける。内外面をハケ目調整の後ヘラ研磨を行っている。鍔の下半には煤が厚く付着している。21 も同様の器形であるが、鍔が小さく体部中央よりやや上に付く。耳の上面には櫛の刺突文が施されている。鍔より下はハケ目調整のままであるが、鍔より上はナデ調整である。鍔の下半には煤が付着している。22 は平底の土鍋で、鍔の下半には煤が付着している。23 はやや厚めで粗い胎の土師質に近い湯釜の肩部である。２条の沈線内に四つ菱の印文を施した文様帯がある。24 と Fig.29 の１・２は土師質土鍋でいずれも内面と外面底部はハケ目調整で、外面全体に煤が付着している。２は体部上半をわずかに外反させている。３・４は土師質の擂鉢である。３は二次被熱による剥落がひどく櫛目はみられない。２・３の破片はＳＸ 258、４はＳＫ 228 と接合関係にあり、同時期の遺構である。５は備前焼の擂鉢である。６・７は大内系土鍋の脚である。８は滑石製石鍋の再加工品で、平坦面に線状の刻みのある菱形の浮文を持つ。石鍋の鍔部分に当たる背面突起には穿孔がある。瓦質土器用の印文原体か、あるいは根付等の装飾品であろうか。Fig.28 の 23 の四つ菱文や Fig.29 の６・７などとともに大内氏との関係を彷彿させるものである。９は花崗岩製の挽き臼で、擂目は使用により摩耗が進んでいる。精巧な作りで茶臼か。二次被熱を受け割れたものである。11 は軒平瓦で唐草文がある。10 は砂岩製の石球。12 は「８」の字形の銅製品で、２カ所の孔が開けられている。紐の留め具か。13・14 は中国系の瓦で、13 が花卉文を持つ軒丸瓦、14 は下面を波状にする軒平瓦で、いずれも下層からの混入遺物である。

Fig.30 は中国陶磁である。１は龍泉窯青磁皿で外面に蓮弁文、内面に双魚文の浮文を持つ。２は龍泉窯青磁八角杯である。内面をヘラ描き沈線で縦に区画し、区画上面にヘラ描き雷文を、外面に片切彫りの蓮弁文を施す。緑味の強い透明釉が厚くかかる。３は龍泉窯青磁碗で、見込みに印花文を持つ。外底高台内の釉を輪状に拭き取る。褐緑色透明釉が厚くかかり、大きな貫入がある。４は青磁碗であ

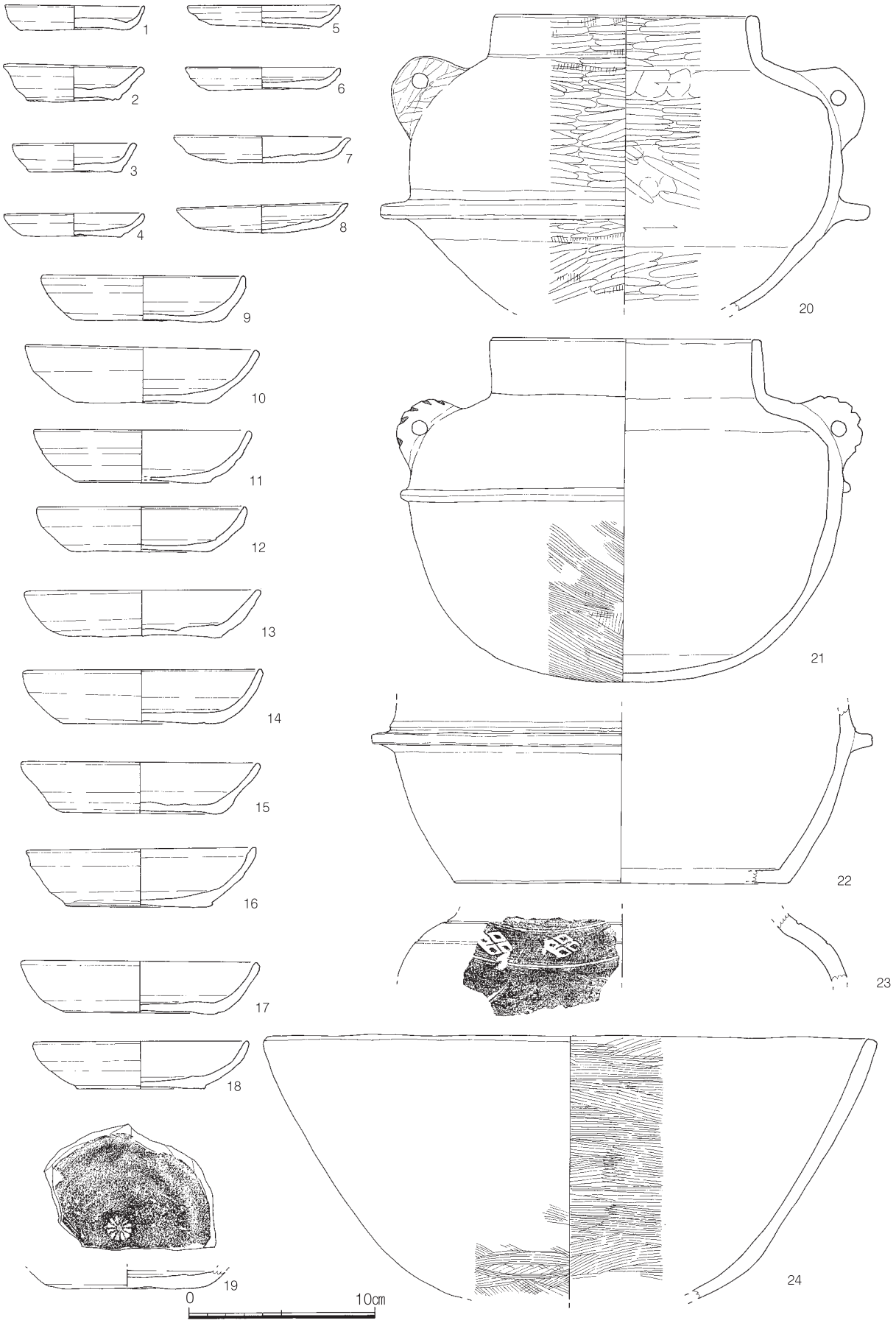


Fig.28　ＳＤ 264 出土遺物(1)

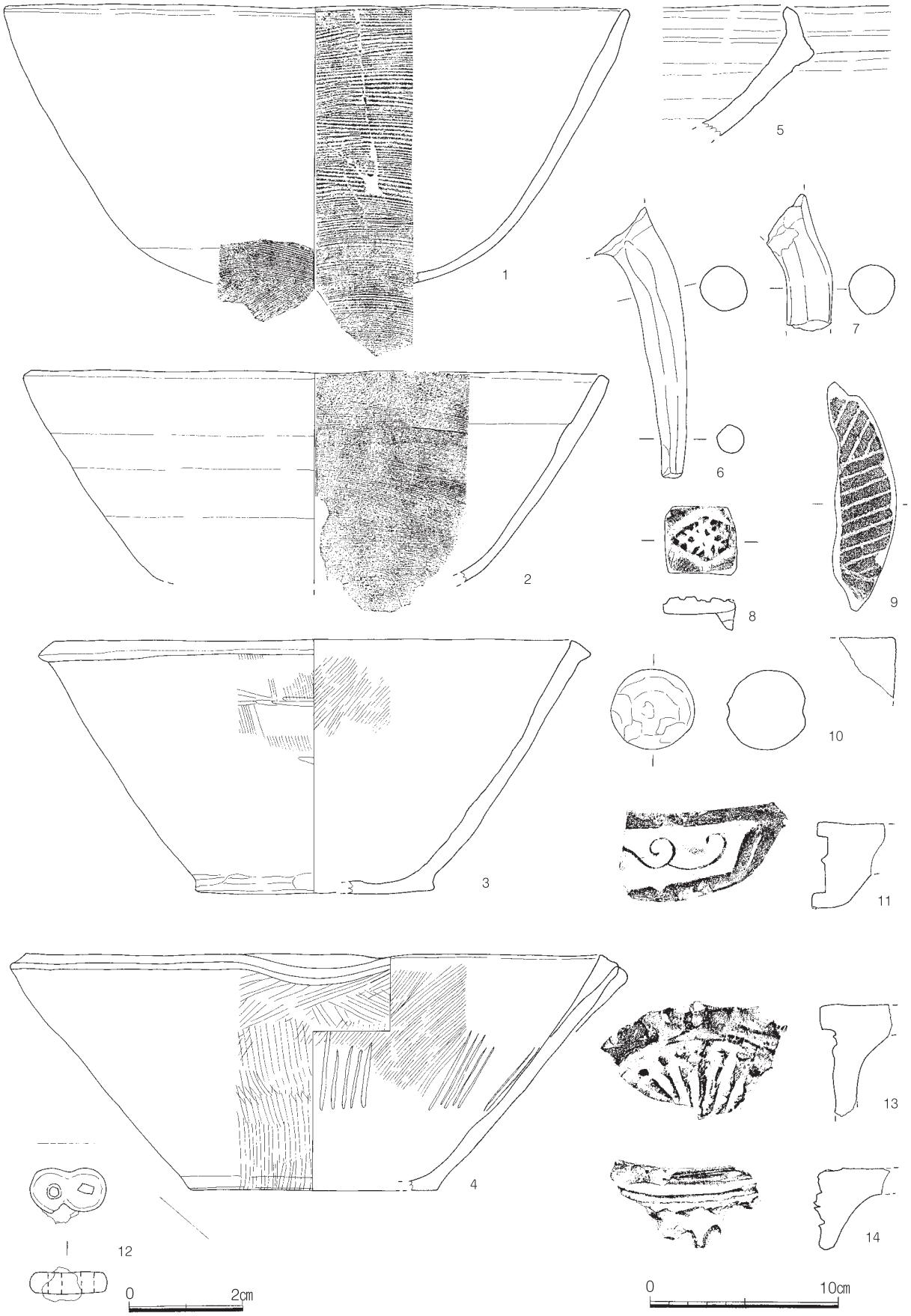


Fig.29　ＳＤ 264 出土遺物(2)

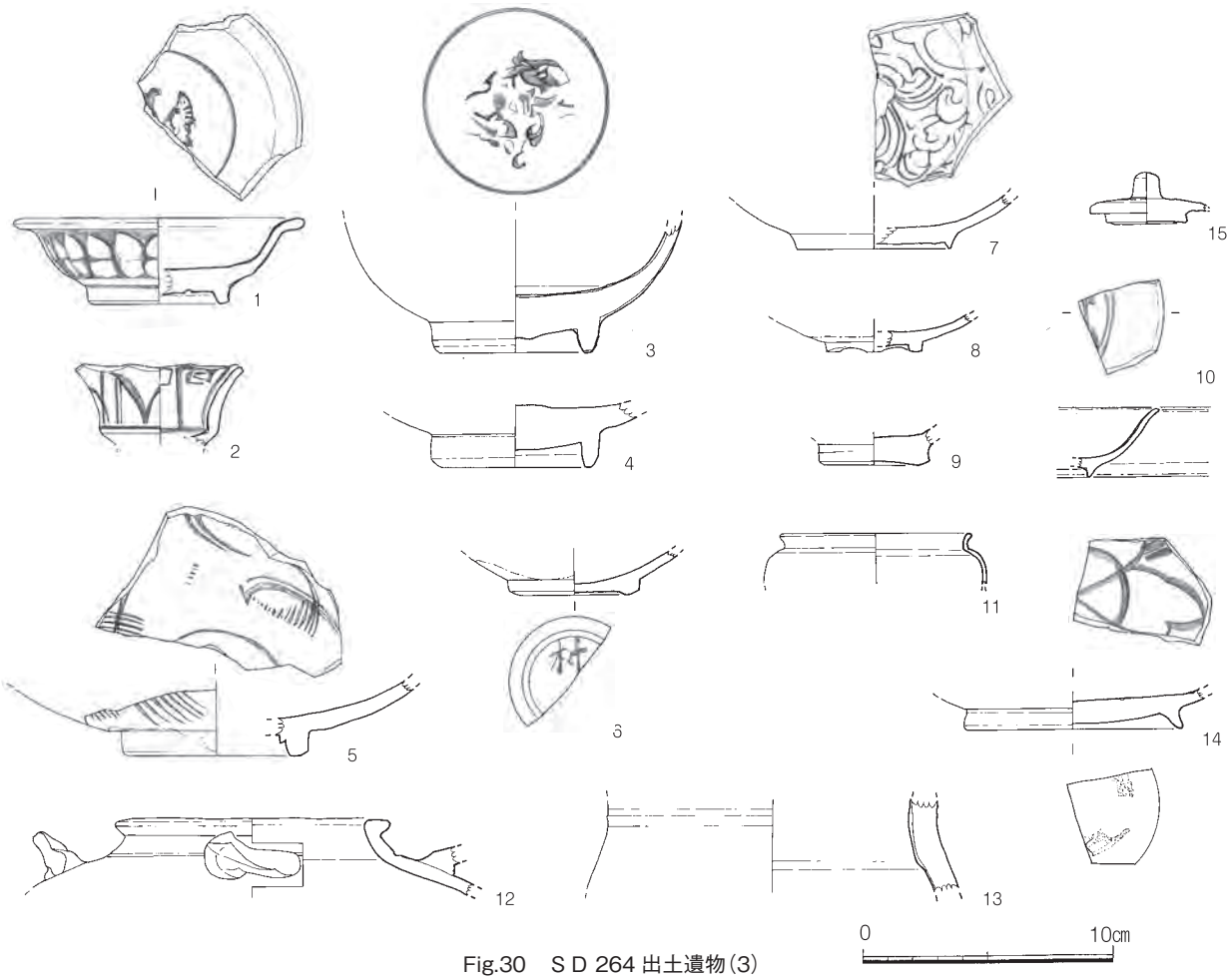


Fig.30　ＳＤ 264 出土遺物(3)

るが、胎が粗くやや濁った青緑色釉が高台内をのぞいて全面にかかる。高台内露胎部は赤褐色に発色し、あるいはベトナム産か。５は青磁鉢で、粗い赤みを帯びた肌色の胎土でくすんだオリーブ色の釉がかかる。内外面に櫛描きがある。６はベージュの発色をした白磁皿で外底に、「林」の墨書がある。７は景徳鎮系の白磁で､内面のヘラ切り花文を描く。高台内釉を円形に掻き取る。ハマの痕跡が残る。８は白磁皿で高台を４カ所アーチ状に抉るものである。９は天目碗で高台脇を加工し円盤形にしたものである。国産の可能性もある。10 は明染付皿である。11 は薄胎の黒褐釉陶器の茶入れである。12 は褐釉陶器四耳壺で、13 は盤口壺を利用したガラス坩堝で、内面に溶解したガラスが付着している。14 は越州窯青磁碗である。内面にヘラ切りの蕉葉文を描く。高台は貼り付けで外に開く。薄いオリーブ色透明釉が全面にかけられ、高台内に目跡が残る。15 は小壷蓋である。無釉で土師器のような低温度での焼成であるが、在地土師器のような金雲母を含まず、生焼けの陶器かと思われる。これらの内５～７、12 ～ 14 は遺構年代とは直接関係なく、下層遺物の混入である。

Fig.31 に示したものは李朝陶磁器である。先にも述べたが、この溝をはじめとして李朝陶磁器の出土量が、博多遺跡群の他地点と比べ格段に多く、本調査地点の特別な性格を物語っている様である。１は三島手の粉青沙器碗で、白化粧土で見込み中央に渦巻き、周辺に櫛描き列点文、体部内外に横方向の沈線文に刷毛目白化粧が施されている。胎土は灰色でザックリしている。高台は大きくひずんでいる。内底に目跡が残る。２は井戸茶碗で、高台脇から外底内にかけて釉が縮緬状に縮む。高台と内底に４カ所の砂目跡が付く。３井戸茶碗風の胎土、釉を持つ皿で、内底に６カ所、高台に７カ所の砂目跡を持つ。４は灰色で硬質の胎土を持ち、青みを帯びて発色する透明釉がかけられ、内底に６カ所の砂目跡が残り、高台畳付の釉は拭き取られている。５も井戸茶碗で、やや小振り、灰色と肌色を呈

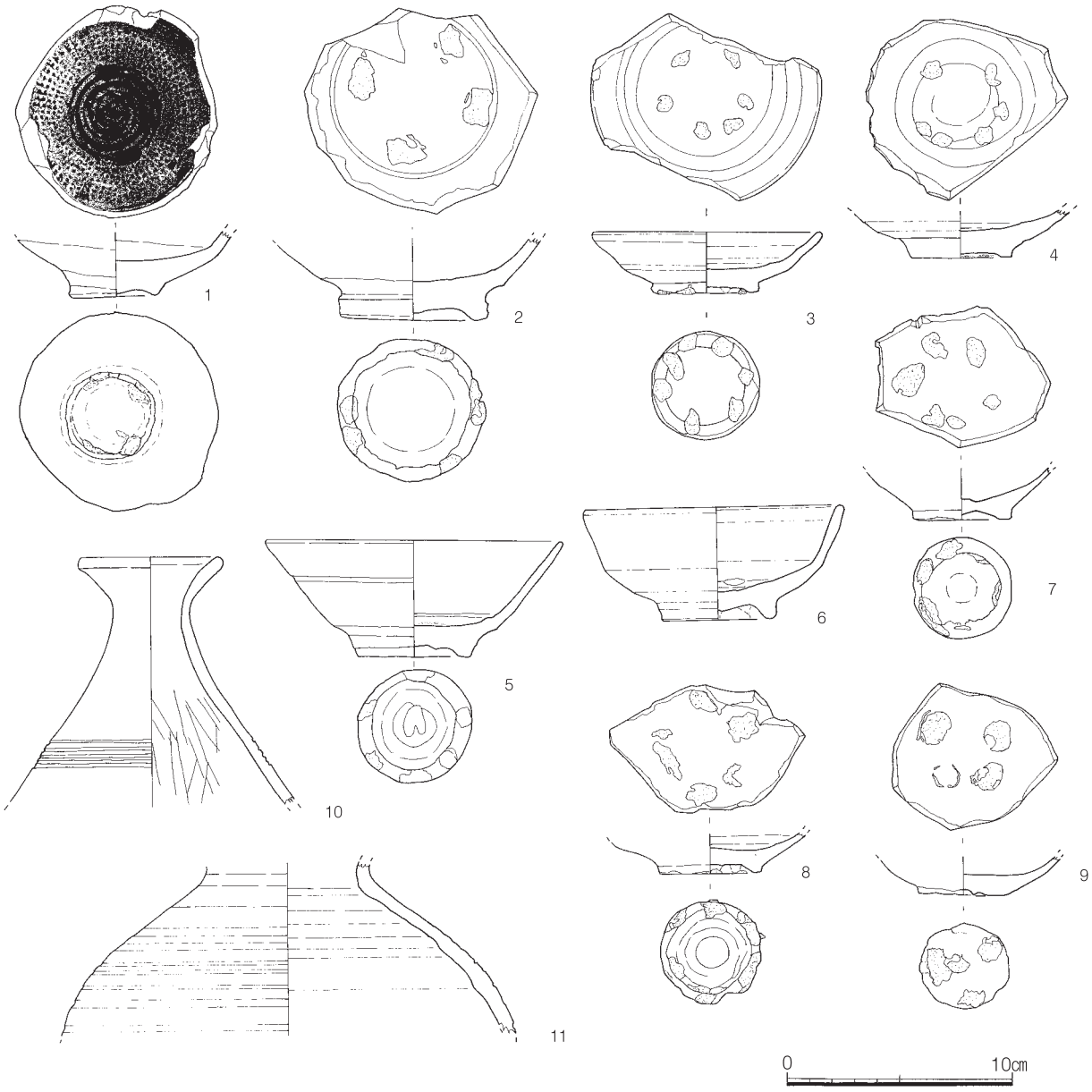


Fig.31　ＳＤ 264 出土遺物（4）

す。透明釉が薄くかかる。６は胎土が赤身の強い肌色の発色をする碗で、腰で内側に屈折する。やや白みを帯びて発色する透明釉が薄くかかり、高台脇から外底は釉が厚く縮緬状となる。内底には粘土の目跡が残る。７は赤褐色の胎土を持つ皿で茶褐色を呈し、釉溜まり部分が白く発色する。砂目跡が内底・外底に６カ所残る。８は黄白色を呈し、透明釉が薄くかかる皿である。内外底に６カ所の砂目跡が残る。９は灰色の硬質の胎土で、薄く釉がかかり全体的に灰色を呈する皿であるが、内外面の釉垂れ部分のみ白色を呈す。内底に４カ所、外底に３カ所の胎土目跡がある。10 は薄胎の褐釉陶器壷で頸部上面が小さくすぼまり、内面には縦方向のしわが見える。頸部下半には４条の沈線を施す。頸部から下半部にかけて滑らかにふくらむラッキョウ形をなす。11 は緑褐釉の壷で頸部と片部が明瞭に分かれる。

ＳＤ 345・ＳＤ 462（Fig.10・12・19）

Ｂ区とＣ区の境で検出されたものである。ＳＤ 462 は太閤町割の際の溝で中世末に位置づけられ、ＳＤ 345 はそれを踏襲して作られたもので近世以降ののものである。ＳＤ 345 は第１面で、ＳＤ 462 は３面で調査を行った。特にＳＤ 345 は下面を厚く酸化鉄が覆っており、現代まで現役の溝として使

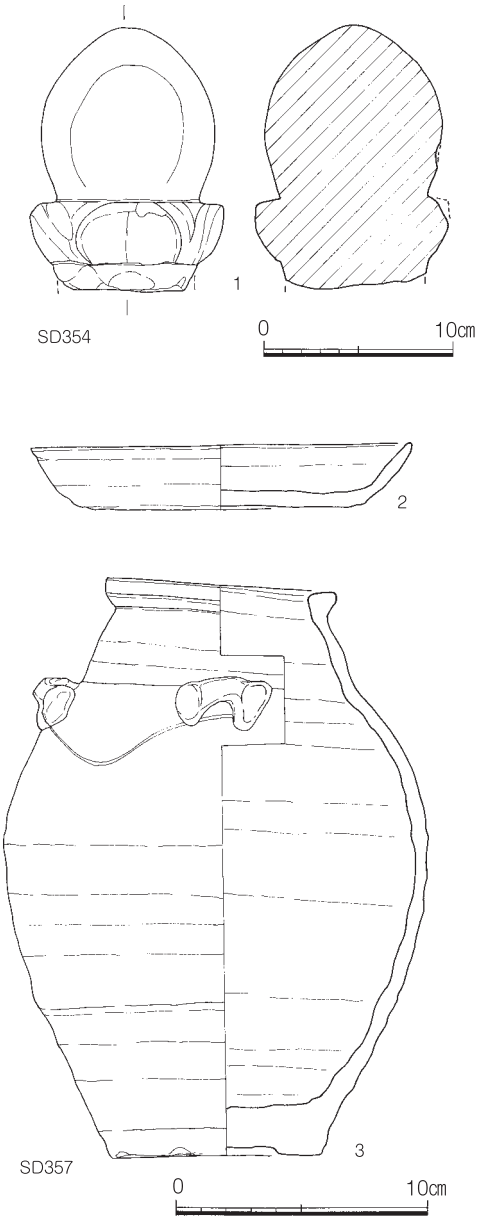


Fig.32　ＳＤ 354・357 出土遺物

われ、きわめて重要な溝であったことを物語っている。この溝は、隣接するＳＤ 007 →ＳＤ 411 →ＳＤ 379 と作り替えられていった溝と方位を同じくし、太閤町割にもこの軸線が生かされている。砂丘１と谷部とを区画する地形上重要な変換線だったのであろう。

ＳＤ 354・ＳＤ 357（Fig.10・32）

第１面検出の太閤町割による区画柱穴列の布掘りである。両者は隣接して平行しており、２列併存したのか区画の変更によるものか不明である。同様の区画柱穴列の布掘りはさらに海側の柱穴列にもみられる（ＳＤ 013、099、103、）。

Fig.32 に示した遺物は、１がＳＤ 354 出土の石製宝篋印塔の相輪上部で、宝珠と請花部分である。周辺でも供養塔破片が多くみられ、Ａ区第２面で営まれていた墓などに由来するものであろう。２・３はＳＤ 357 出土遺物で、２が口径 15cm、器高 1.4cm の大型の糸切り底土師皿で、３がほぼ完形に復元された褐釉陶器四耳壺である。これらは遺構年代とは必ずしも一致しない。

ＳＤ 379（Fig.33 ～ 37）

Ｂ区の第２面から第３面にかけて検出した溝である。ＳＤ 007 の項で述べたように、ＳＤ 379 はＳＤ 007 →ＳＤ 411 →ＳＤ 379 と作り替えられていった一連の溝である。この溝は最終的には中世末の太閤町割の溝、ＳＤ 462 さらにはＳＤ 345 へと変化していくものと考えられる。ここでは 16 世紀後半すなわち太閤町割直前の遺物群が、多量出土している。

Fig.33 に示した遺物は、１～９が土師器皿である。口径７cm、器高 1.6cm のもの（１～３）、口径８～９cm、器高 1.0cm 強の薄いもの（４～８）、口径 15.5cm、器高 3.5cm の大型のもの（９）がある。９は体部が外に大きく開くもので、大内系のものか。10 ～ 14 は備前焼擂鉢で、15 は備前焼大甕の口縁部である。16 は肩部に細かい格子と車輪文の押印を持つ大甕の破片で、常滑焼であろう。17 は瓦質擂鉢である。18 は内外面を丁寧に銀黒色に研磨したもので土鍋であろう。胎は赤褐色を呈し、土師質である。外部下半は被熱により剥落が目立つ。Fig.34 に示したものは国産陶器・瓦類である。19・20 は瓦器湯釜である。19 は内外面に丁寧なへら磨きを施し、一対の耳がつく。20 は頸部と肩部との境に三つ巴の印文を持つ。21・23 は瓦質陶器火舎である。21 は内面を丁寧な刷毛目調整を行い、外面口縁下、２条の突帯間に４弁の印花文がある。22 は角形で外面口縁下に雷文の印文がある。23 は同じく外面口縁下に車輪文の印文がある。24 は三つ巴文軒丸瓦、25 は唐草文の軒平瓦である。26 は国産の天目茶碗で赤味の強い鉄釉をかけている。27 は土製円盤である。28 は須恵質に近い陶器の土鍋で薄胎、口縁部が外側に屈折し、蓋の受けを作り出している。29・30 は中国系瓦である。29 は花卉文の軒丸瓦、30 は波状文の軒平瓦である。31 は口径 20cm の大型の高台付き土師器皿である。29 ～ 31 は下層遺構に由来するものでＳＤ 379 と同一年代で

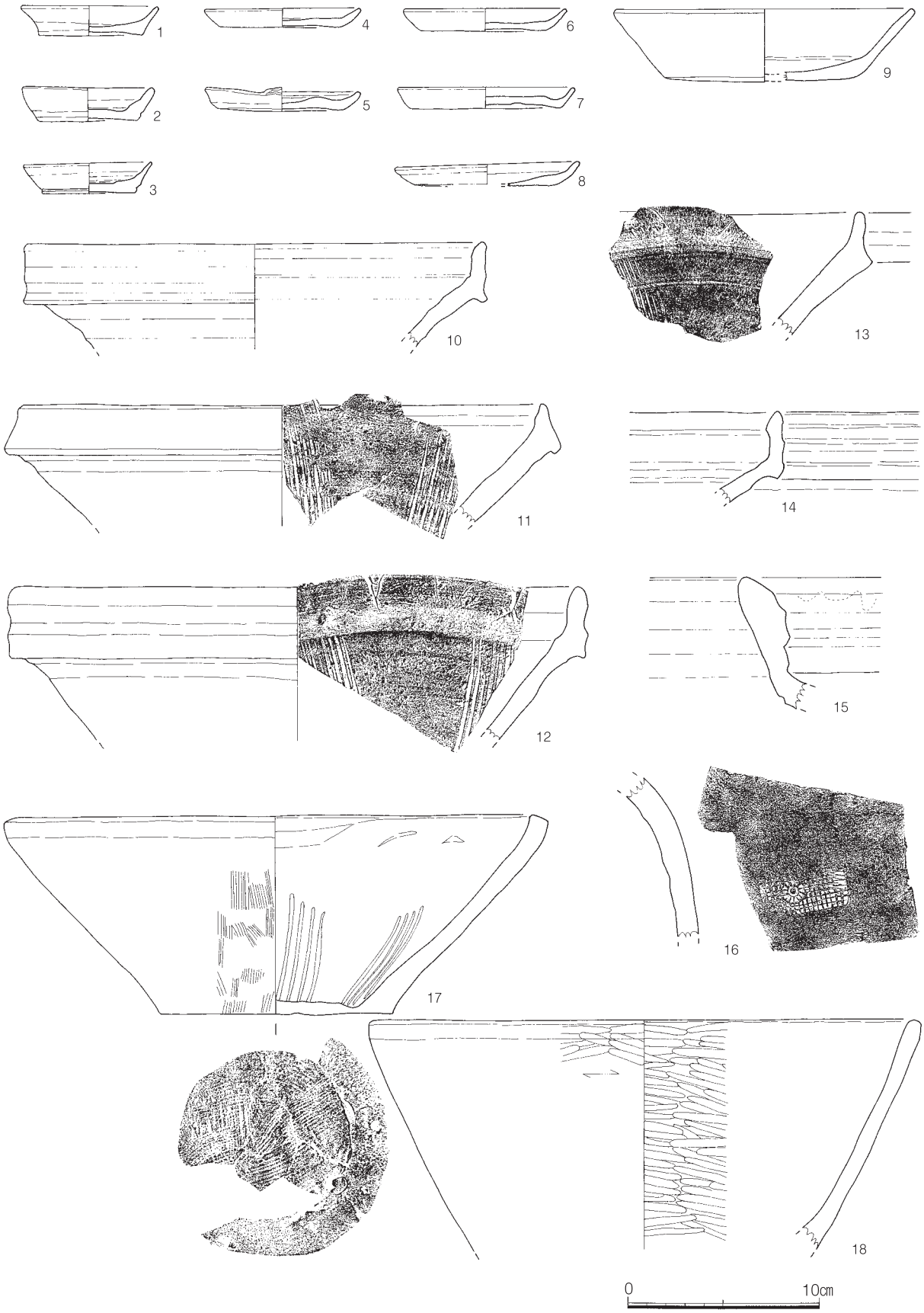


Fig.33　ＳＤ 379 出土遺物(1)

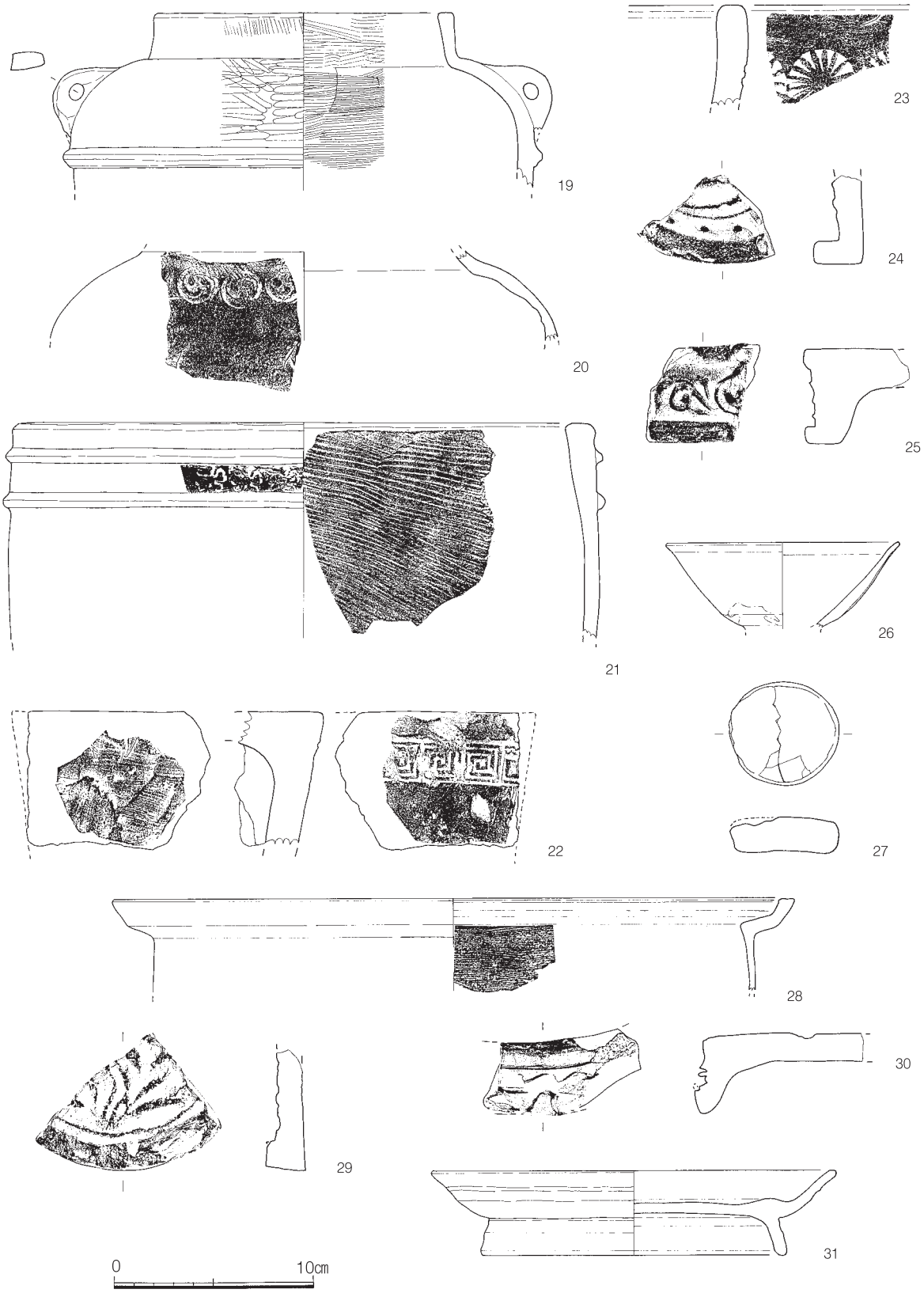


Fig.34　ＳＤ 379 出土遺物(2)

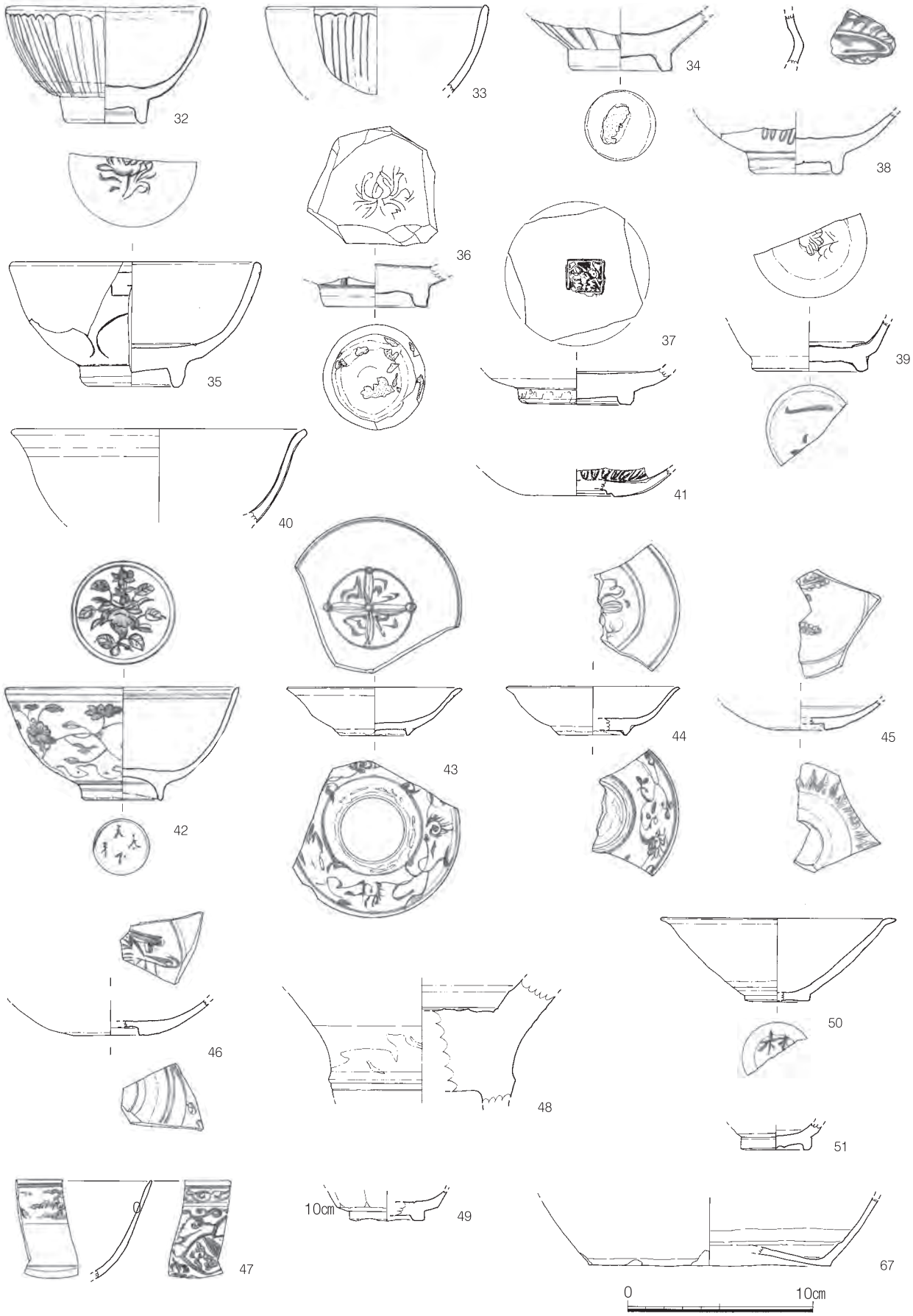


Fig.35　ＳＤ 379 出土遺物(3)

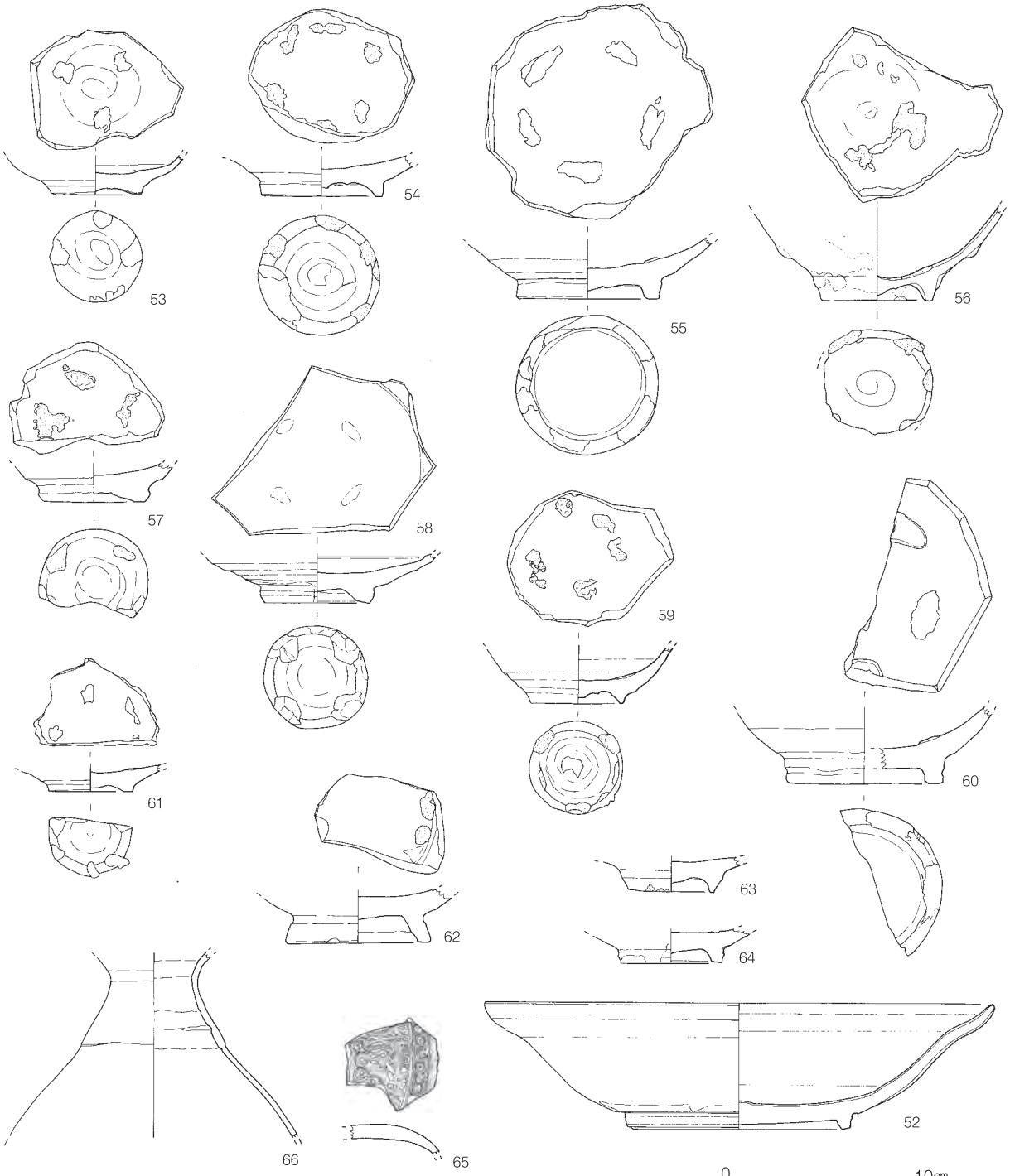


Fig.36　ＳＤ 379 出土遺物(4)

はない。Fig.35 に示したものはいずれも中国製品である。32 ～ 34 は外面に小さな剣先形連弁を持つ龍泉窯青磁碗、35 ～ 36 は見込みに印文を持つ龍泉窯青磁碗である。35 は外面に雷文と幅広の蓮弁をヘラ描きし、見込み印文は花文である。36 は蓮華文の印花を持ち、37 は「金玉満堂」の浮文印文である。38 は龍泉窯系青磁碗で外面に櫛描き文を持つ。39 は龍泉窯系の腰折れ青磁碗で、見込みの釉を輪状に掻き取り花文をヘラ描きする。外底に「一□」の墨書がある。41 は内面菊花文の青磁皿で碁笥底である。42 は東南アジア産と思われる小豆色の胎土をもつ陶器壷の破片で、外面に白化粧を黄釉をかけている。沈線で魚文を描くが沈線部分は紫色の澱青風の発色をする。42 ～ 46 は明染付である。42

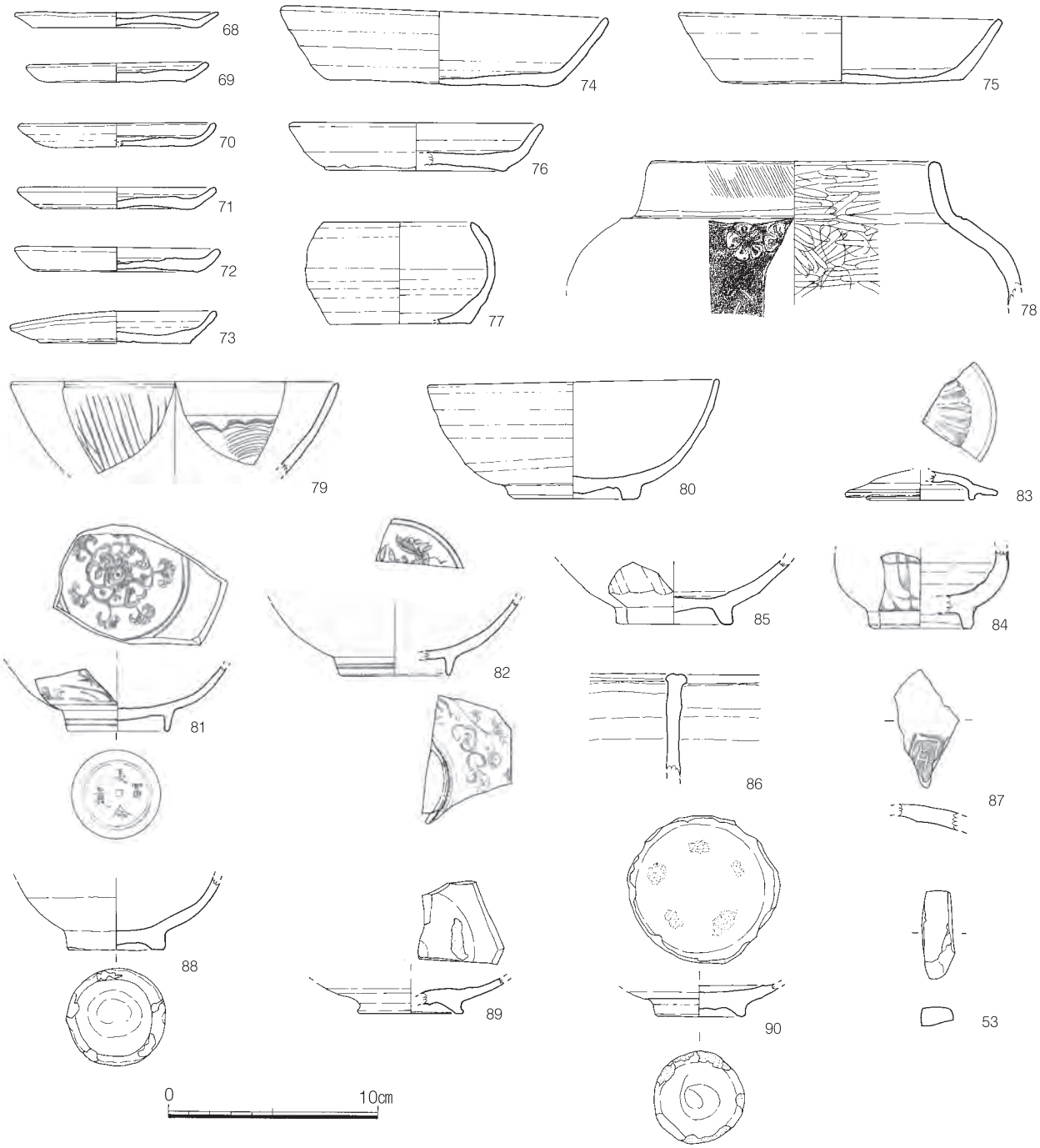


Fig.37　ＳＤ 379 下層出土遺物

は饅頭心の碗で見込みに花卉文、外面に花卉唐草文、高台内に「天下太平」の文字を描く。43・44 は口縁部を外反させる高台付皿で、いずれも外面に花卉唐草文を描く。45・46 は碁笥底の皿で、それぞれ外面に蕉葉文、花卉唐草文を描く。47 は口縁部がわずかに外反する碗で外面に細かい複雑な文様が描かれている。48 は白磁四耳壺で分厚い底部の破片である。49 は高台をアーチ状に抉る白磁六角杯である。50・51 は天目碗で、50 は鼈口にならず口縁部が外反する。外底に「林□」の墨書がある。51 は高台の削り出しが通例より強い。52 は黄味の強い釉がかかる大皿で見慣れない器形であるが中国の製品であろうか。Fig.36 に示したものはいずれも李朝陶磁器である。53 ～ 64 は碗・皿の類で 58・62・64 が磁質、他は陶器である。胎土・釉様々で 53・54・59・61 は生地の灰色を見せる透明釉、58・

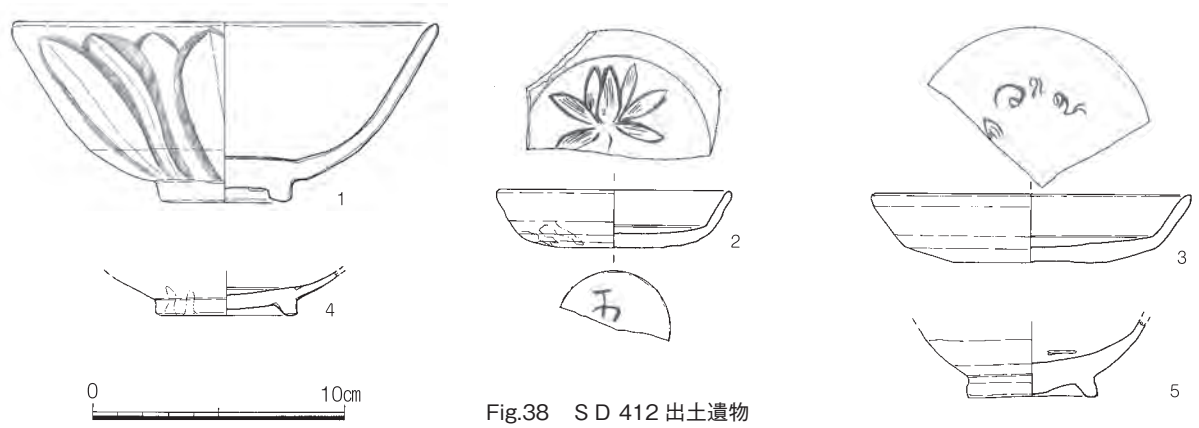


Fig.38　ＳＤ 412 出土遺物

62・64 は青みを帯びた透明釉、56 は青みを帯びた粘性の強い不透明釉、55・60 はオリーブ色の不透明釉がかけられている。いずれも見込みと高台に目跡がある。65 は合子蓋と思われる白色土象嵌の青磁で、下部同心円の中心点にのみ黒色土が象嵌されている。66・67 は薄胎の褐釉陶器徳利形壷で、それぞれ頸部と底部である。Fig.37 に示した遺物はＳＤ 379 の下層出土遺物である。68 ～ 77 は土師器である。皿は口径９～ 10cm、器高１cm 前後の薄手（68 ～ 73）、口径 12cm、器高 2.2cm（76）、口径 15.5 ～ 16cm、器高 3.2 ～ 3.5cm（74・75）の３種類に区分できる。77 は口縁が大きく内湾するもので小壺というべきものであろう。78 は瓦質陶器湯釜で肩に５弁の印花文がある。79 は初期の龍泉窯青磁碗で内外面に櫛掻き文を持つ。80 は無文の青磁碗で淡い水色の釉が高台脇までかかる。81・82 は明染付で 81 の外底には「富貴長命」の銭形文が描かれている。83 は青白磁小壷蓋、84 は外面に蓮弁文のある龍泉窯青磁小壷、85 は高麗青磁でオリーブ色透明釉がかかる。86 はザックリした胎土に薄い灰色の釉がかかる李朝陶器壷の口縁部である。87 は中国陶器で茶釉がかかり印文の一部「玉」が見える。88 ～ 90 は李朝陶器でそれぞれ不透明白釉、灰色透明釉、緑味を帯びた灰色不透明釉がかかっている。91 は弥生時代の扁平片刃石斧の破片である。

ＳＤ 412（Fig.38）

Ｂ区第３面の北東端で調査区を遮断する形で検出された。幅３ｍを超す大規模なもので、ＳＤ 411・379 に切られそれらより古く、14 世紀後半から 15 世紀初め頃の溝であろう。１は幅広の鎬蓮弁文を持つ龍泉窯青磁碗で青みを帯びた灰色透明釉がかかる。２～４は白磁皿で、２は見込みにヘラ切り蓮華文、３は不明瞭ではあるが印花文を持つ。４は硬質で青味がかった不透明釉が全面に厚くかかる。５は李朝陶器碗で青味がかったオリーブ色不透明釉がかかる。

ＳＤ 471（Fig.13）

第４面でＡ区を横断する形で検出された。Ｂ区ではＳＤ 007・411・379 の溝で壊されているが、Ｃ区まで延びている。出土遺物はいずれも小破片で図示していないが、８世紀代の須恵器、土師器が埋土の茶褐色砂から出土している。

土坑

各調査面で夥しい数の土坑が見つかっている。主に廃棄物処理のためのものであるが、その内容も多岐にわたる。白磁（白磁溜まり）、土師皿（土師溜まり）、礫、組み合わせを持つ陶磁器、生活残滓、動物遺体などの廃棄があり、その形態にも意図的に土坑を掘ったものや溝の埋没過程の窪みを利用したもの、埋納または祭祀にともなうものなど様々である。限られた紙面ではそれらすべてを示せず、以下主たる土坑について述べることとする。

ＳＫ 008（Fig.39）

第１面検出の太閤町割の区画柱穴列脇に作られた粘土貼り土坑のうちの一つである。近世・近代遺構の項で述べたＳＫ 010 と同じ形態である。図示した遺物は高麗青磁碗の優品で、小さな高台に均整のとれた体部を持つ。赤味がかった胎に薄く釉がかかり、オリーブ色に発色する。

ＳＫ 020（Fig.39）

第１面検出の太閤町割の区画柱穴列脇に作られた土坑である。図示したように焼塩壺の身と蓋が対で出土している。印文は不明。近世遺構である。

ＳＫ 105（Fig.39）

Ａ区１面北東壁際で検出した小土坑で、滑石製石鍋破片を再加工した線刻文様を持つ石製品が出土している。中世末～近世遺構である。

ＳＫ 108（Fig.39）

Ａ区１面で検出した土坑で、浅い皿状の窪みに焼けた礫がぎっしりと廃棄されている。近世井戸によって切られている。図示したものは「道妙ヵ」の文字が彫られた墓石の一部とおもわれるものである。中世末～近世のものである。

ＳＫ 113（Fig.39）

Ａ区第１面南半北西壁で検出した近世の廃棄物処理土坑である。土人形などが廃棄されており、博多人形に関わるものであろう。図示したものはてづくねの猿形土製品で下部が欠損している。

ＳＫ 131（Fig.40・43）

Ａ区第１面で上面を確認し、第２面で遺構の掘り下げを行った。ＳＤ 211・213・326 の溝が廃止された段階でその窪みを廃棄物処理用に利用したものである。ＳＫ 303 が当初の廃棄段階のものであるが、ＳＫ 131 はその最終段階の廃棄である。図示した遺物は、１が鬼瓦の下端の破片で側縁に円の印文がある。２は小型の軒丸瓦で、瓦当面に「櫛田宮」の文字が陽刻される。谷地形末端部に位置する櫛田神社に由来するものである。３は砂岩製の一石五輪塔で空・風・火輪と水輪の一部が残る。４は高麗青磁の優品で体部は端正に外反し、内面には線描き花文が描かれている。やや青味を帯びた薄い緑の釉がかけられている。５は

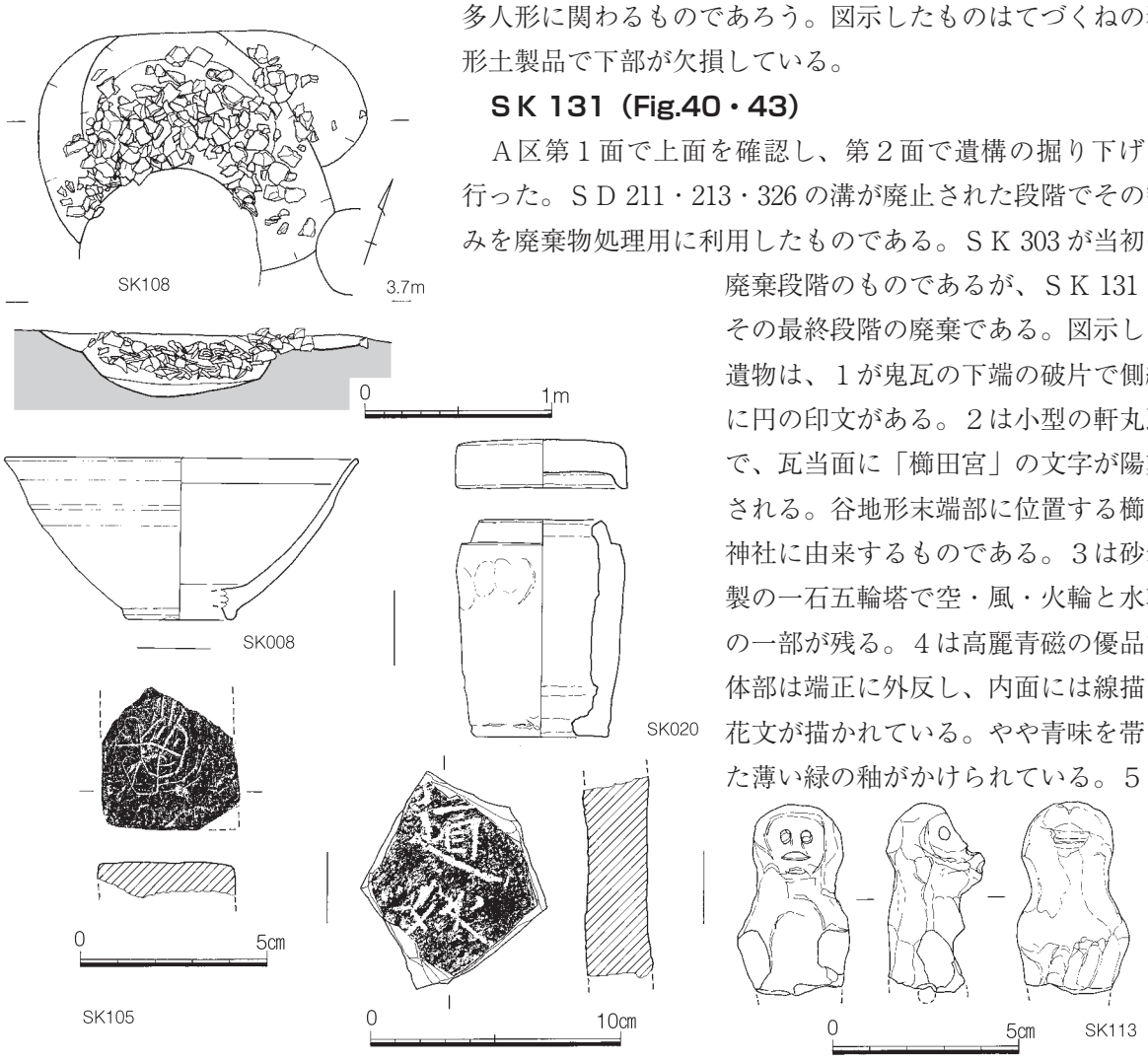


Fig.39　ＳＫ 108 とＳＫ 008・020・105・108・113 出土遺物

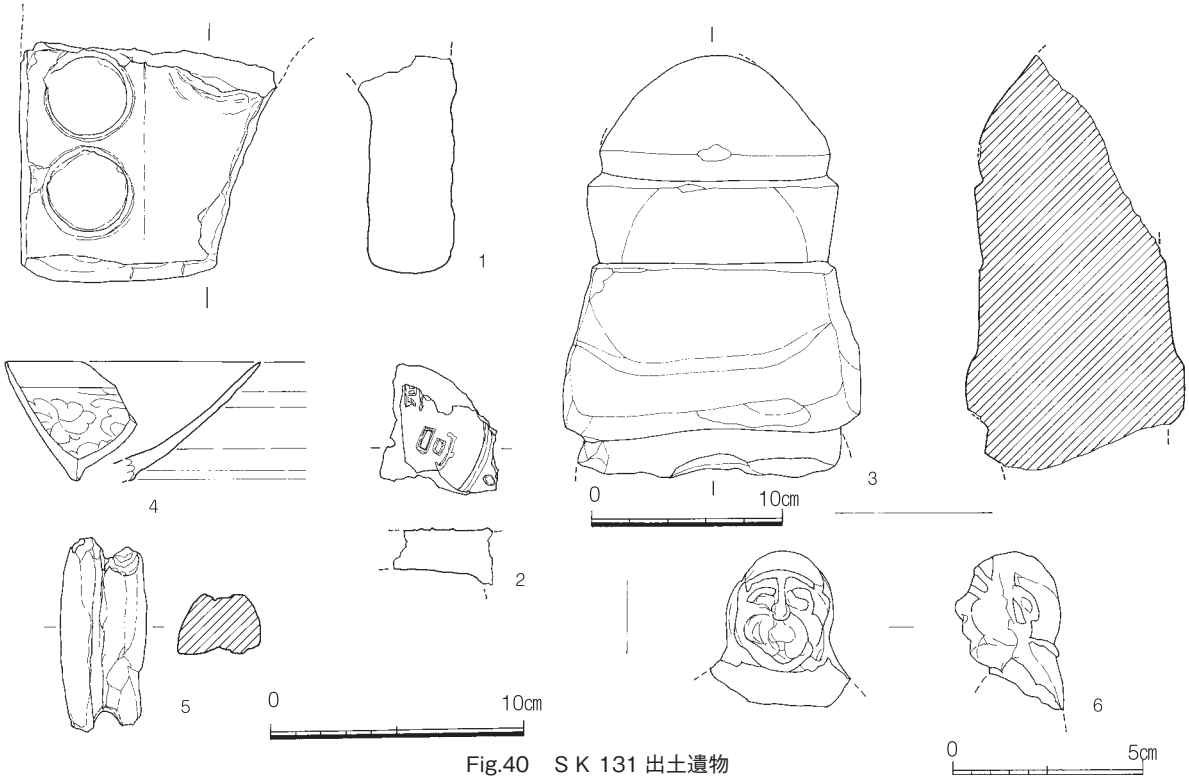


Fig.40　ＳＫ 131 出土遺物

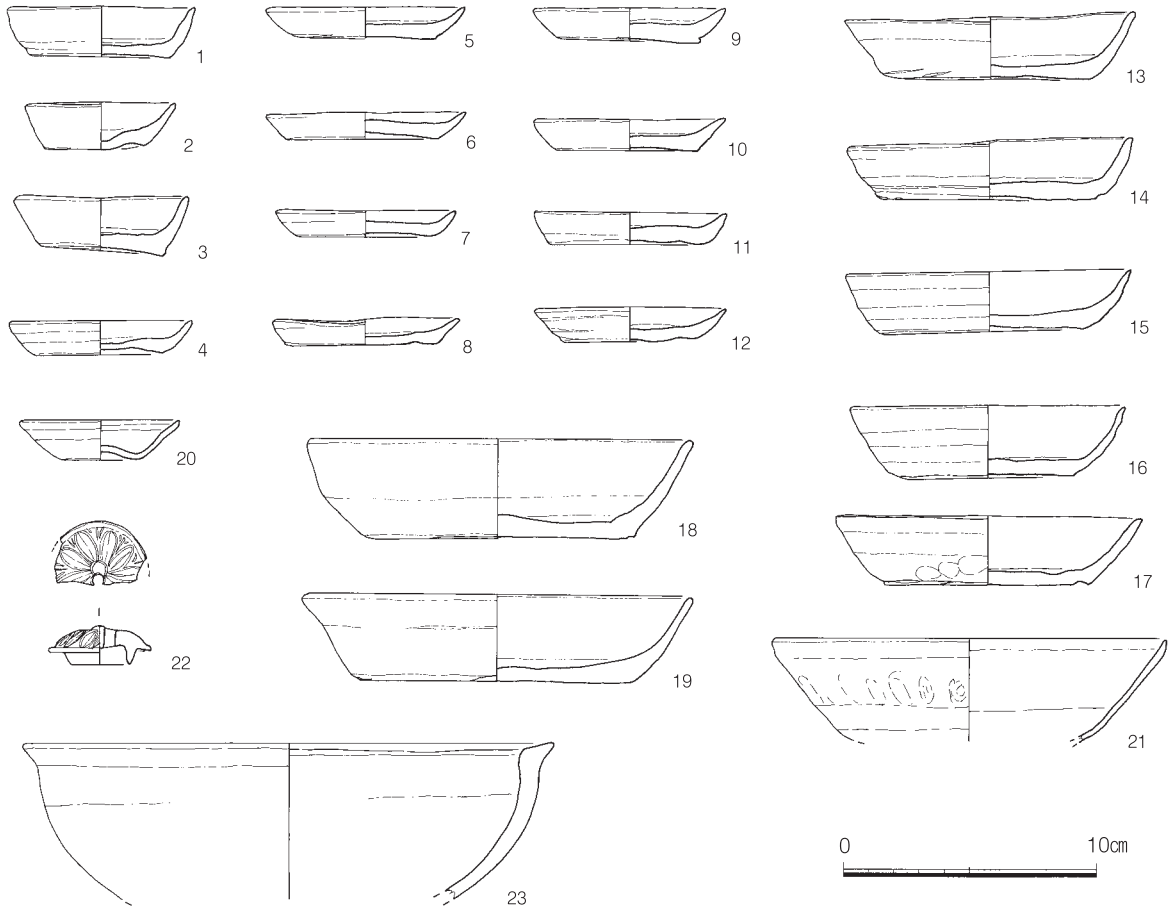


Fig.41　ＳＫ 134 出土遺物

滑石製石鍋破片を再加工した石錘、６は磁質の胡人人形の頭部破片である。太閤町割直前の遺構である。

ＳＫ 134（Fig.41・42）

ＳＤ 007 とＳＤ 264 によって形成される区画の東隅内側に位置する第２面検出遺構である。長軸 3.65 m、短軸 2.0 mの長円形の浅い皿状の窪みにコンテナ 16 箱に及ぶ大量の土師器皿が投棄されている。近代井戸に切られる。出土した土師皿は大量であるが、おおむね図示したとおり口径６～７cm と小さく、器高が２cm と高いもの（１～３）、口径が７～８cm、器高が１cm 前後のもの（４～12）、口径が 11 ～ 12cm、器高が 2.5cm 前後のもの（13 ～ 17）、口径 15,5cm、器高 3.5 ～ 4 cm の大型品に分けられるこれら在地系の土師皿に混じって、白味の強い焼成で手づくねの底部の「て」の字口縁のへそ皿（20）や、おなじく白味の強い焼成で、薄い胎で体部が大きく開く大型の皿（21）など京都系、または大内系の土師器も混在している。22 は青白磁小壷の蓋である。23 は中国泉州付近の産と考えられる焼絞め陶器捏ね鉢で、体部は上部にいくにしたがって厚みを増し、特に口縁部は肥厚し外反する。体部の内外面上半には緑褐釉がかけられている。通例の中国泉州の捏ね鉢とは器形が違い時期的に新しいタイプのものであろう。15 ～ 16 世紀代の遺構である。

この遺構の西側には軸線の重なる土師器溜まりＳＫ 135 がある。これらの遺構は、あまりにも土師皿の重なり合いが多く実測が煩雑だったために、ラジコンヘリを使用して航空写真測量を行った。

ＳＫ 135（Fig.43・44）

第２面検出遺構で、長軸８ｍ、幅 2、8 ｍで検出面からの深さ約 70cm の皿状の広い窪みを呈しており、意図的な掘り込みを行ったのかかどうかは明瞭ではない。コンテナ 53 箱に及ぶ大量の土師皿を投棄している。ＳＫ 134 と軸線を同じくし、その西側に近接している。北西側に接してＳＤ 211・213・326 の埋没過程の窪みを利用した廃棄物処理遺構ＳＫ 131・303 がある。本遺構はそれらに切られており、それより古いものである。また、この遺構の直下にＳＥ 344 があり、それを切っている。図示した遺物は１～ 37 が土師器皿である。口径６～７cm と小さく、器高が 1.5cm と高いもの（１～７）、口径が７～８cm、器高が１cm 前後のもの（８～ 20）、口径が 11 ～ 12cm、器高が 2.5cm 前後のもの（21 ～ 28）、口径 15,5 ～ 17cm、器高 3. ５～４cm の大型品（29 ～ 33）の大きく３グループに分けられる。これはＳＫ 134 と同様である。特殊なものとして口径 18.5cm、器高４cm の特大で、見込みに三個の車輪文をスタンプするものもある（34）。これらのうち、１・27・28・32 には焼成後底部に叩打による穿孔があり、２には焼成前にあけられた穴がある。また、これら在地系の土師皿に混じって、白味の強い焼成で手づくねの底部の「て」の字口縁のへそ皿（35）や、おなじく白味の強い焼成で、薄い胎で体部が大きく開く大型の皿（36･37）など京都系、または大内系の土師器も混在している。この状況もＳＫ

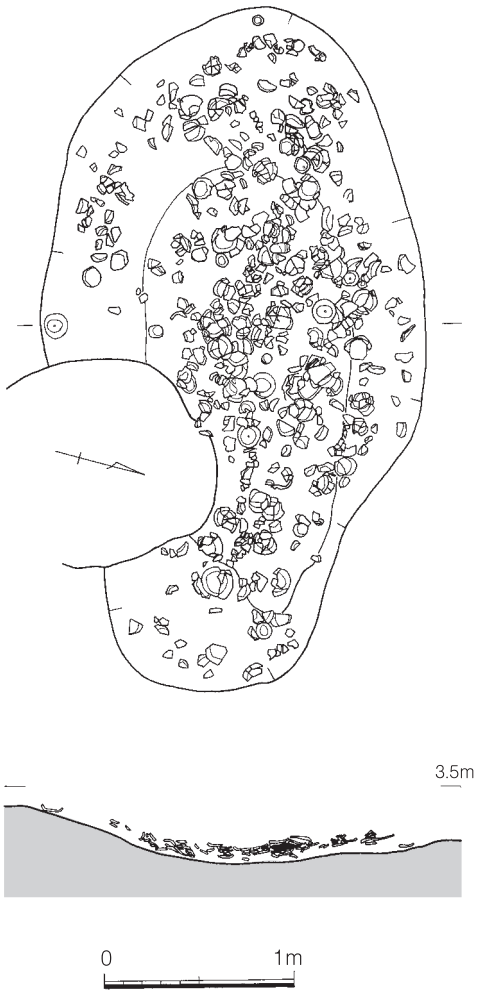


Fig.42　ＳＫ 134

Fig.43　S K 131・303・135

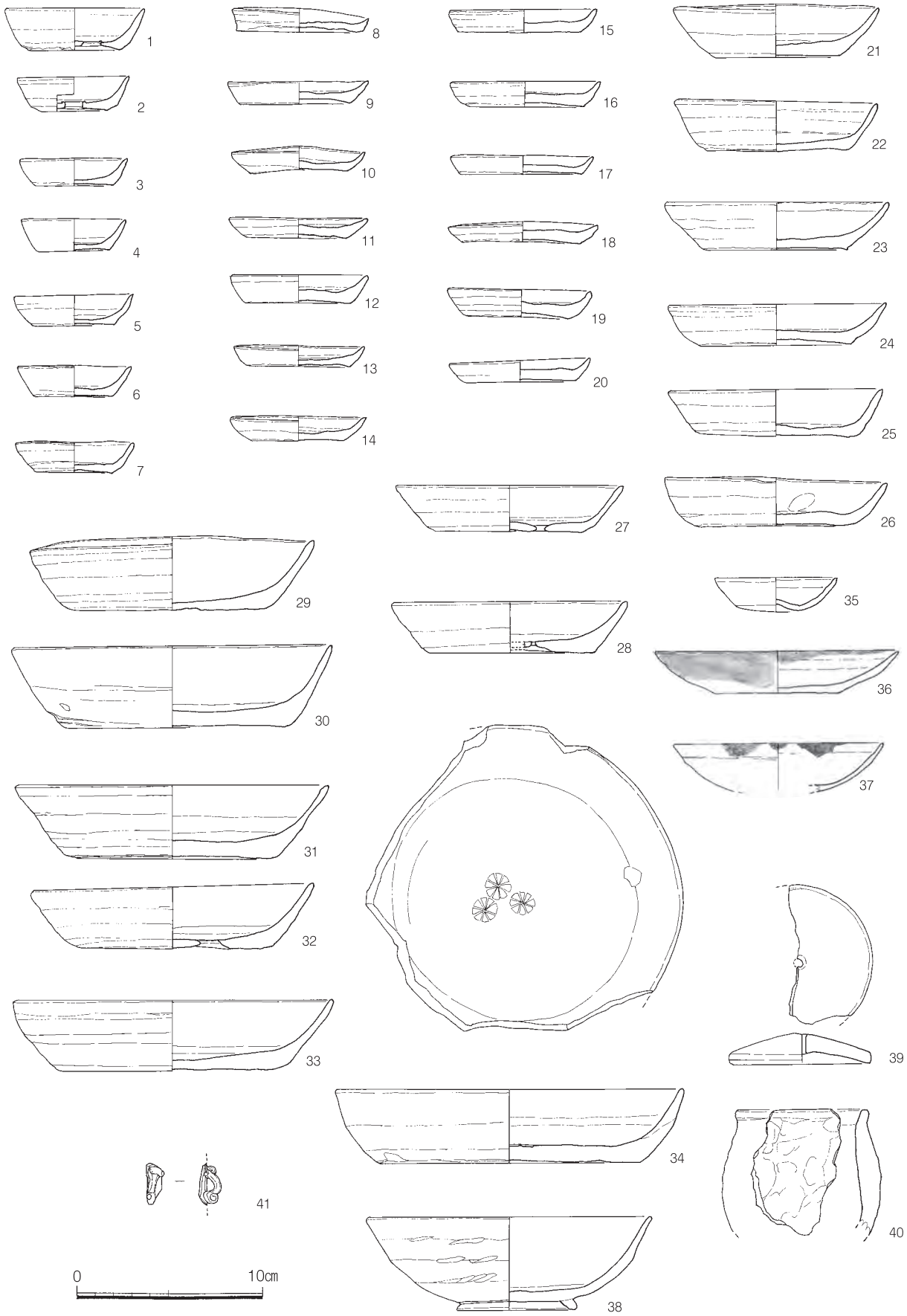


Fig.44　ＳＫ 135 出土遺物

134 と同様で、両遺構ほぼ同時期のものといえる。36 は表面が燻され黒みを帯びているが基本的に土師器である。37 は口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用したものである。38 は土師器の高台付碗で内外面を丁寧にヘラ研磨したものである。下部遺構からの混入である。39 は瓦器質の土製品で分厚い笠形をなし中央部に焼成前に開けられた孔がある。器面は黒色に研磨されている。紡錘車あるいは蓋であろうか。40 は蛸壺である。内外面指押さえによる調整で、体部は分厚い。古墳時代のものであろう。41 は青白磁の小さな把手で、香炉の一部であろうか。

ＳＫ 138（Fig.45・46）

長軸 2.2 m、短軸 1.95 mのややいびつな円形の掘り方を持ち、その内側に 1.7 m、1.4 mほどの石組みを持ついわゆる石積み土坑である。しかしながら、石積みの石材が小さいために崩壊が進んでおり、一部のみ石積みがみられる。中央部の深さは 60cm で皿状の窪みになっており、最終的に廃棄物処理用に使用されている。出土遺物は様々で、まさに生活残滓の様相を示す。図示した遺物は、１～４が土師器皿で、口径が７cm の器高の高いもの（１～３）、口径 10cm、器高 2. 5cm のもの（４）がある。５・６は国産の天目碗である。５はザックリした粗い胎に鉄錆色を呈する天目釉が厚くかかる。６は粗い胎に黒褐色透明釉がうすくかかる。７～９は瓦質土器の湯釜である。７は肩の屈折するもので頸部直下にコンパス文の印文がある。８は体部下半の破片で幅広の鍔を持つ。９は頸部直下に円文、その下に６弁の花文を印花する。10 は備前焼大甕の肩付近の小破片であるが、ヘラ書き文字があり「弐石」の部分であろう。11 ～ 13 は軒平瓦で唐草の瓦当文を持つ。14 は挽き臼の上半で多孔質の火成岩が使用されている。15 は鉄製の鉸具である。16 は鞴の羽口で角柱状のものである。17 ～ 22 は中国製陶磁器である。17 ～ 20 は明染付で、17 が碗、18 ～ 20 は低い高台を持つ皿である。21 は焼締めの陶器四耳壺、22 は磁竈窯系の胎土の陶器で壷または甕の破片である。獅子と思われる獣面のレリーフが貼り付けられ、緑褐釉がかけられている。このほか動物骨小片なども多く出土している。

ＳＫ 147（Fig.47 ～ 50）

Ａ区北東端部で第２面で輪郭が確認できた。第３面にかけて精査を行っている。博多遺跡群を特徴づける遺構、中国陶磁の一括廃棄土坑である。同じく中国陶磁の一括廃棄土坑であるＳＫ 241 が東に隣接する。長径 2.1 m、短径 1,3 mの不定長円形で、深さ 0.9 mの断面擂鉢形の土坑に大量の白磁、青白磁陶器が廃棄されている。これらは二次的に被熱しており、焼け割れた破片の状態で廃棄されている。火災での被熱により商品価値を失ったものを処分したものであろう。また、出土する陶磁器には一定の器種が数種類まとまっており、おそらく梱包状態で被熱したもので、この周辺に所在したとされる「博多津唐房」、「宋人百堂」の宋商人に由来するものである。また、この遺構の直下に井戸状の掘り方を持つ便所遺構ＳＸ 546 があり、出土遺物から両者ともに 11 世紀末～12 世紀初頭に位置づけられ、時間差はほ

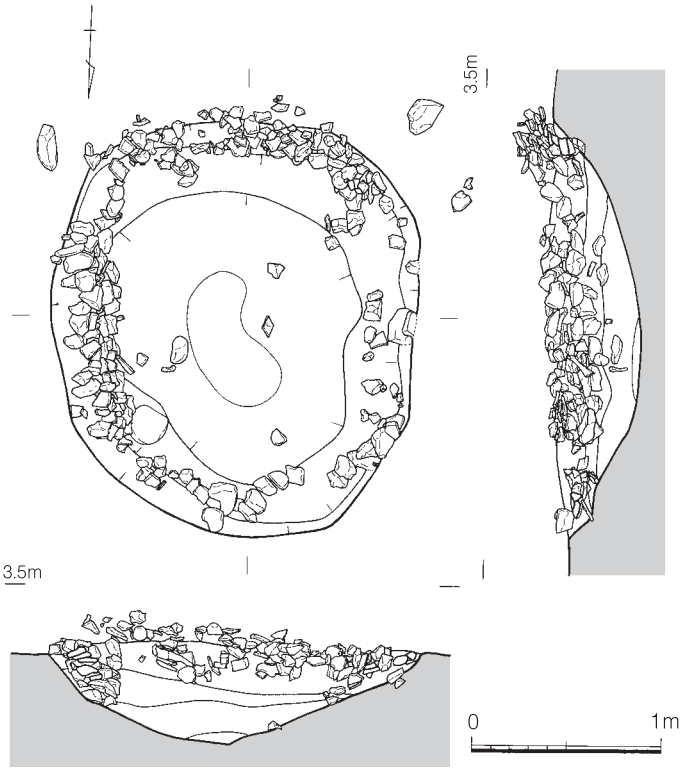


Fig.45　ＳＫ 138

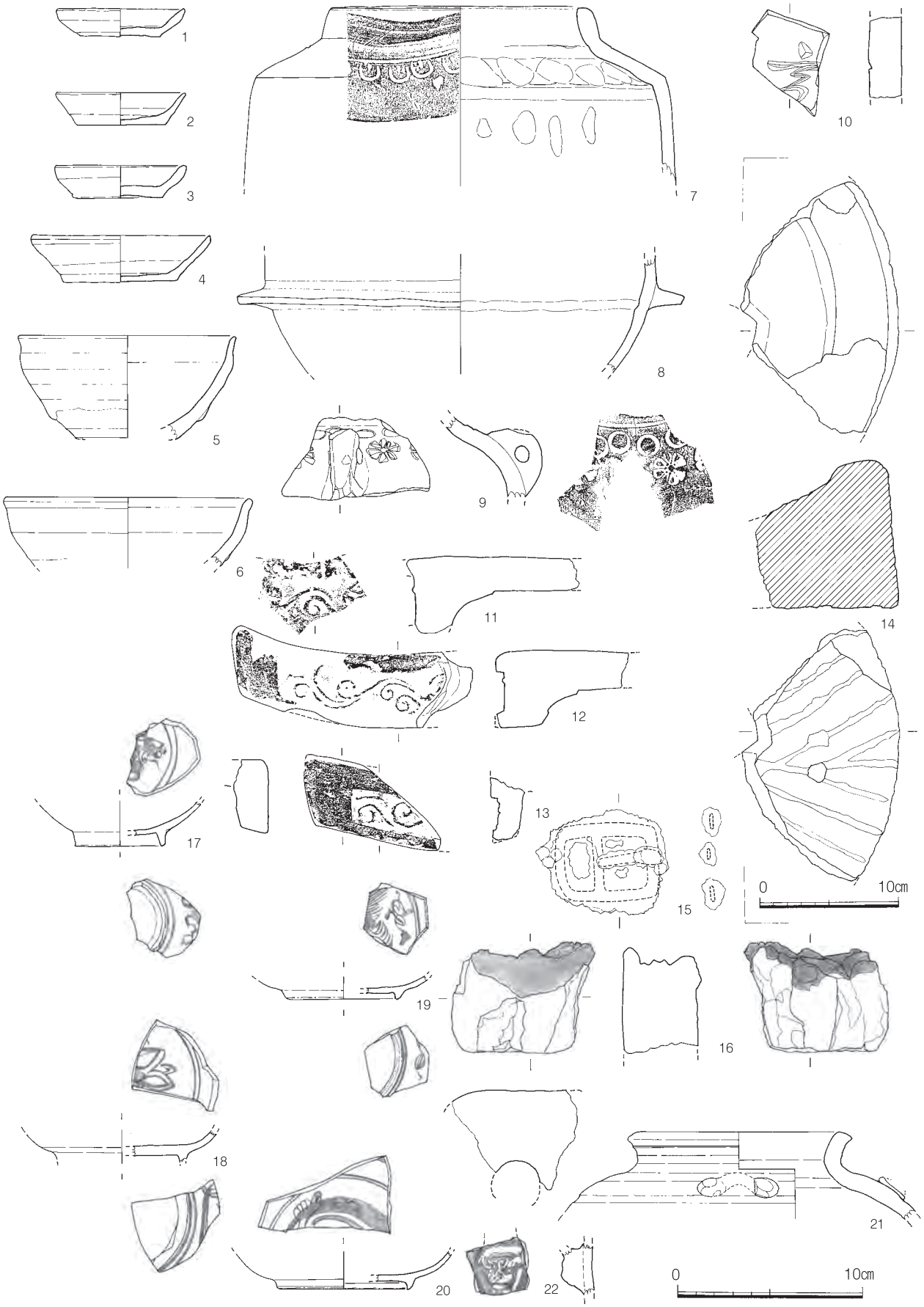


Fig.46　ＳＫ 138 出土遺物

とんどない。ＳＫ 546 の遺構上部が廃棄土坑として利用された可能性が高い。

Fig.47 に図示した遺物は国産遺物である。１は有孔の土製円盤である。上下両面に線刻文様がみられ、片面に菱文が刻まれている。紡錘車か。２は土錘である。１・２ともに検出時の周辺出土遺物である。Fig.48 に示したものはいずれも白磁碗である。３～ 10 は白磁Ⅱ－１類とされる碗で口縁に小さな玉縁をもち、体部は丸みを帯び台形の高台を削り出す。コンテナ１箱ほどの量が出土している。11 ～ 21 は白磁Ⅳ－２類とされる碗で、口縁部に折り返しの三角玉縁をもち、体部は直線的で外底を浅く削り低い高台を作り出す。内底に沈圏線を持つ。量的に多くコンテナ６箱分が出土している。Fig.49 に示したものは 22 ～ 29 が白磁碗である。22 ～ 24 はⅦ－１－ｃ類と分類 されるもので、高台が高く内面に櫛描き文様を持つものである。25 ～ 29 はⅥ類と分類されるもので、高台が高く内面に櫛描き文様を持たないものである。図示していないが、口唇部が平坦で外に開くＶ類と分類されるものもある。Ⅴ・Ⅵ・Ⅶに分類される白磁碗はコンテナ１箱分である。30 ～ 39 は白磁皿Ⅱ類に分類される一群である。コンテナ２箱分が出土している。40 ～ 45 は中国製陶器四耳壺である。40 ～ 44 は陶器Ｂ群とされる横耳をもつもので耳の高さに波状の沈線を施し、茶緑色もしくは褐色を呈する釉が施される。45 は縦耳を持つもので、長胴大型のものである。褐釉が施され内面にも薄くかけられている。46 は土製ハマである。白磁等が窯出しされた状態で梱包されたため、それらに付着したまま運ばれてきたものであろう。Fig.50 に示したものは 47 ～ 75 は青白磁、76 が青磁、77 ～ 80 は特殊な器形の白磁である。青白磁はコンテナ１箱分あり、博多での中国陶磁一括廃棄遺構の中で、これだけ青白磁がまとまって出土するのは極めて珍しいことである。47 ～ 59 はいずれも合子の身と蓋である。いずれも型作りで体部を菊花状にし、蓋の天井部には様々な意匠の花文が浮文となっている。57 ～ 59 は大型の合子蓋である。60 ～ 66 は小壷の身と蓋である。60・61 は天井部を放射状に片切り彫りして花文を作り、頂上部に小さな環状のつまみをつける。62 ～ 66 は外面体部に片切り彫りの蓮弁を松かさ状に重ねているものである。67 ～ 74 は薄胎の皿で、内面底部に片切り彫りと櫛掻きで花文を描いている。75・76 は碗である。75 は厚い底部をもち、体部は外方に直線的に延び、内面に片切り彫りの文様を施す。76 は薄胎で体部は丸みをもち口縁部とその直下内外面を露胎とし、以外に青白釉釉をかけるものである。77 は初期龍泉窯系青磁小碗で、この時期の青磁としては希有な例である。78 は白磁袋物の頸部破片であるが、全体形は不明である。78 は珍奇な器種で、肩部に４カ所の小さな注口を持つ白磁多嘴壺である。直立する頸部をもち、丸みを帯びた胴部は大きく薄くヘラ彫りし瓜割り状にする。底部は厚く、削り出しで低い高台を作っている。内面体部に錆びた銅線状のものが付着している。79 は潮州窯系の白磁皿で、内面底と体部にヘラ切りの蕉葉文を描いている。80 は白磁碗０－Ⅰ類とされるもので、体部は丸みをもち、口縁部が外に開く。内面体部に白色堆線を施し、それに対応して

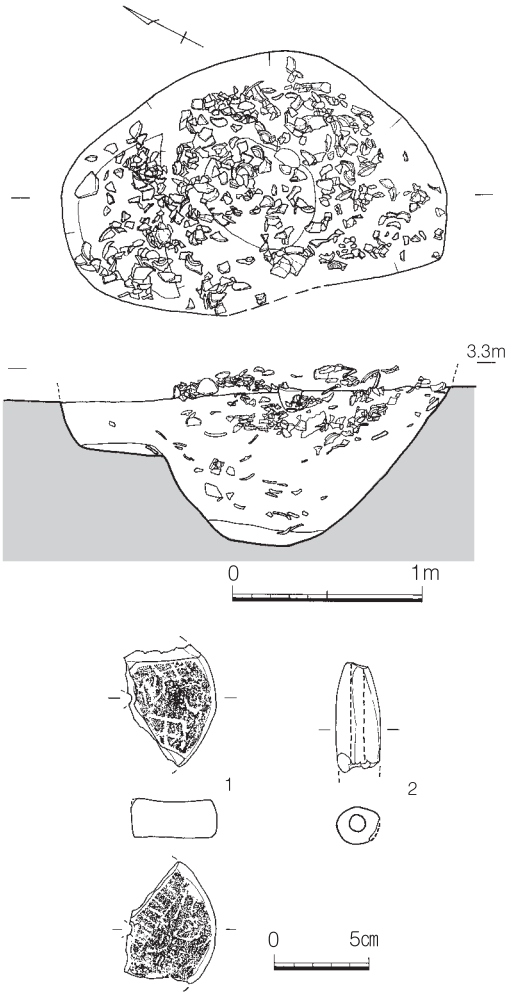


Fig.47　ＳＫ 147 と周辺出土遺物（1）

口唇部に外から刻みを施して五輪花を表現しているものである。

ＳＫ 150（Fig.51）

Ａ区南西側２面検出遺構で、明染付などが出土している中世後半期の廃棄物処理土坑である。図示したものは陶質の馬形土製品である。四肢を欠くが、背面にはたてがみと鞍が表現されており、頭部には目、口も表されている。鞍の後ろにも何らかの造形物が貼り付けられていた痕跡がある。胴部には小さな櫛状施文による連続列点文が施されている。尻から体内方向へ串穴が空けられている。表面は灰色を呈するものの、内部胎土は小豆色をしている。朝鮮半島の陶質土器製品と考えられ、古代にもたらされたものであろう。下面包含層からの混入したものである。

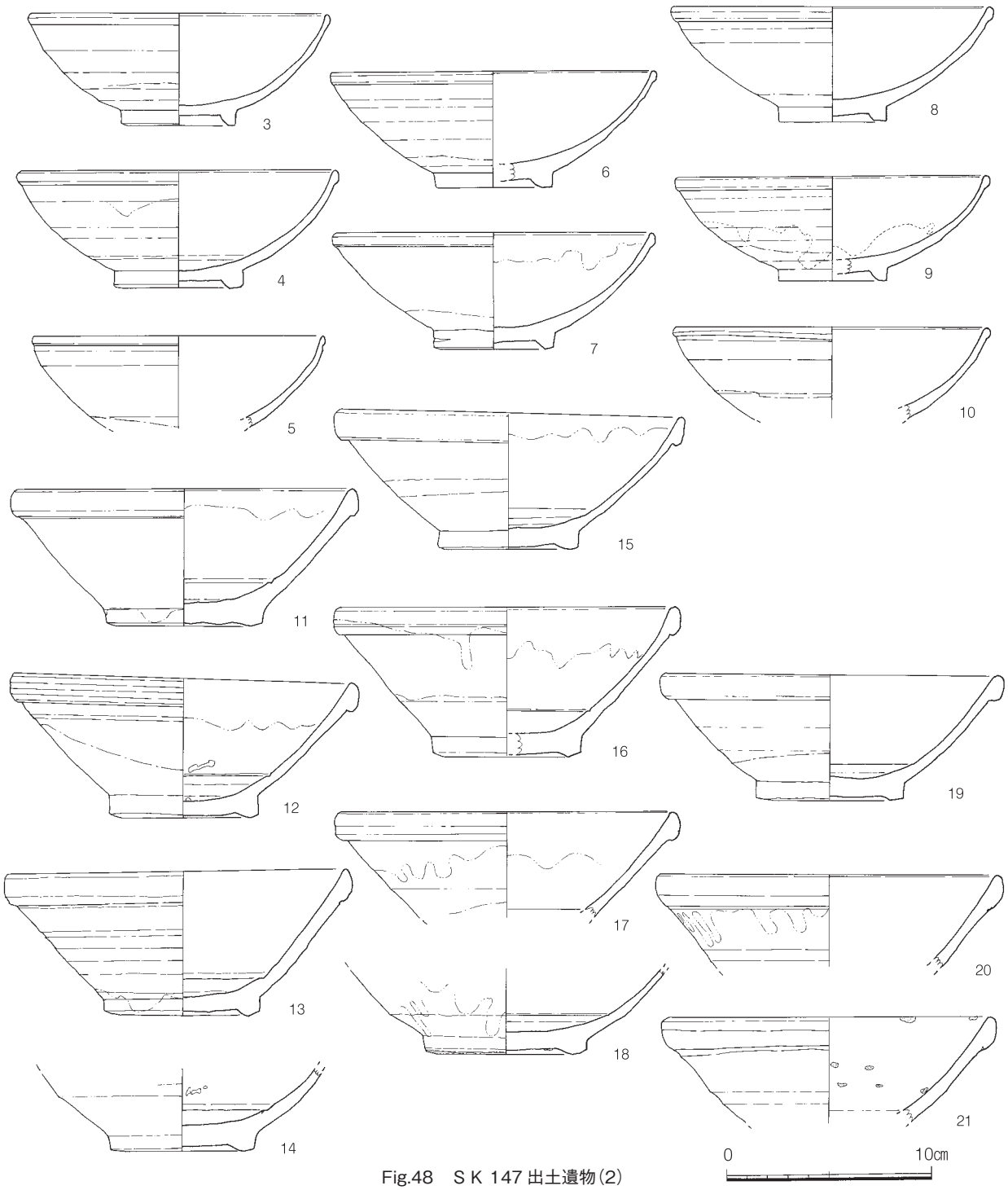


Fig.48　ＳＫ 147 出土遺物(2)

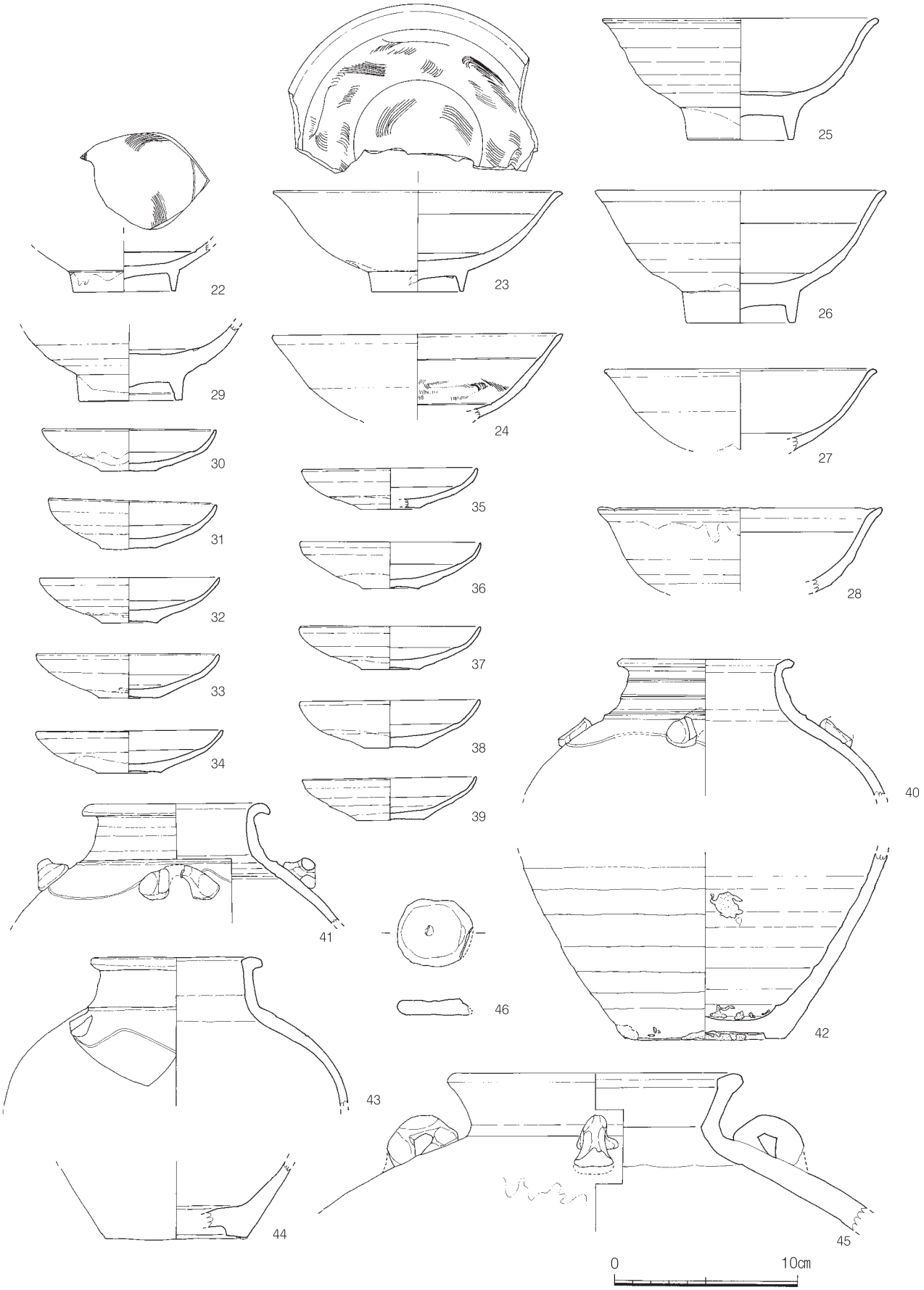


Fig.49　ＳＫ 147 出土遺物(3)

Fig.50　ＳＫ 147 出土遺物(4)

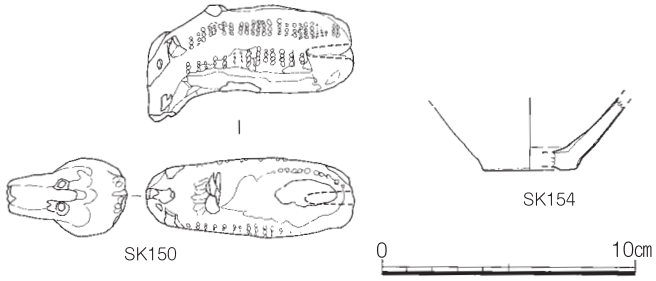


Fig.51　ＳＫ 150・154 出土遺物

ＳＫ 154（Fig.51）

Ａ区第２面検出の浅い土坑で上面に礫が廃棄されている。ＳＤ 161 に切られている。図示したものは高麗青磁碗の優品で、蛇の目高台をもち体部は直に開く。胎は明るい灰色であるが、青緑色のガラス質透明釉が厚くかけられ、大きな貫入がある。畳付の釉は拭き取られ目跡が残る。下面遺構からの混入したものであろうか。

ＳＫ 159（Fig.52・53）

Ａ区第２面検出の長軸３ｍ、短軸２.3m の不整形の廃棄物処理土坑で、深さ 0,9m の断面深皿形をなす。ここでは下面に多くの礫や陶磁器類が廃棄されているが、埋没途中に土師皿のみが廃棄される土師溜まりの状況があった。土師器皿はコンテナ７箱分が出土している。

Fig.53 に示したもののうち１～ 21 は土師器溜まり状態の出土品で土師器皿である。これらは口径７cm 前後、器高 1.5cm の小型品（１・２）、口径 7.5 ～ 8 cm、1.2 ～ 1.5cm の薄手（３～８）、口径 12cm、3.5cm のもの（９）、口径 12.5 ～ 13cm、器高３cm 前後のもの（10 ～ 14・21）、口径 16 ～ 17cm、器高４cm 前後 のものに分けられる。これらのうち 14 は口縁部が一部打ち欠かれ灯明皿として使用されたもの、21 は底部に叩打による穿孔がある。22 ～ 24 は捏ね鉢である。22 は瓦質で内面を丁寧な刷毛目調整、外面を指押さえ整形を行っている。23・24 は東播系の製品である。25 は土師質土鍋で半球形の丸みのある器形である。口縁部を外反させ鍔となす。外底、内底ともにハケ目調整を行い薄手に仕上げている。外面下半には煤が付着している。26・27 は瀬戸焼の小皿で大小２種類がある。体部を外面から押しつけ、８弁の輪花形をなす。外底は糸切りである。口縁部付近のみに自然釉がかかっている。28 は白磁碗でⅥ－３－ｃ類とされるものである。高い高台に丸味のある体部をもち、外面に片切り彫りの捩花文様を密に描く。淡オリーブ色の透明釉が薄くかかる。本遺構の廃棄年代はおおむね 14 世紀後半代であろうか。

ＳＫ 168（Fig54 ～ 56）

Ａ区南西半第２面で遺構正面が確認できた。ＳＤ 212 の北端部で遺構上面が切られている。また近世攪乱で一部東壁が切られているが、長軸 1.7 ｍ、短軸約 1.3 ｍの長円形の土坑で、深さは検出面から１ｍをはかる。本遺構の特徴は、通例の白磁廃棄土坑のように、限られた器種の破片が雑然と廃棄されるものではなく、中国陶磁器の一定の組み合わせを持った器種が土坑床面に一括廃棄されていることである。ある生活の中で使用された器種

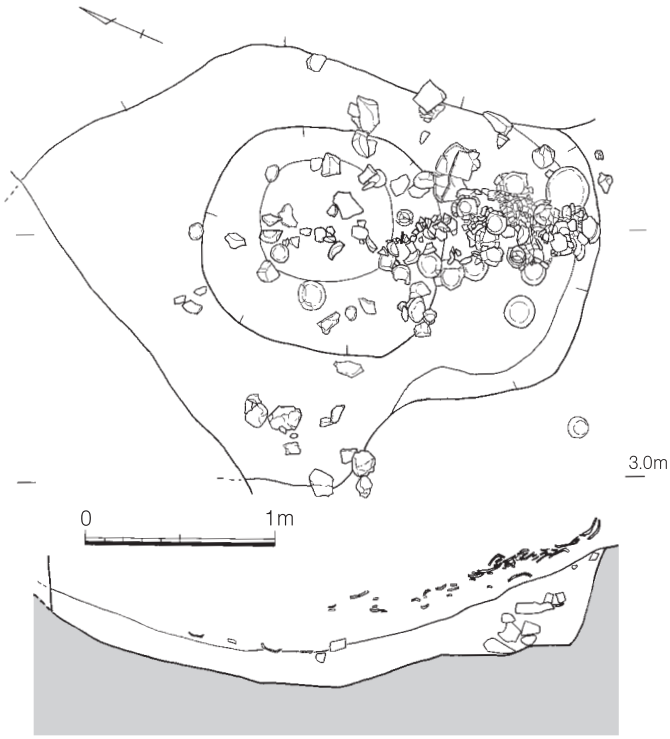


Fig.52　ＳＫ 159

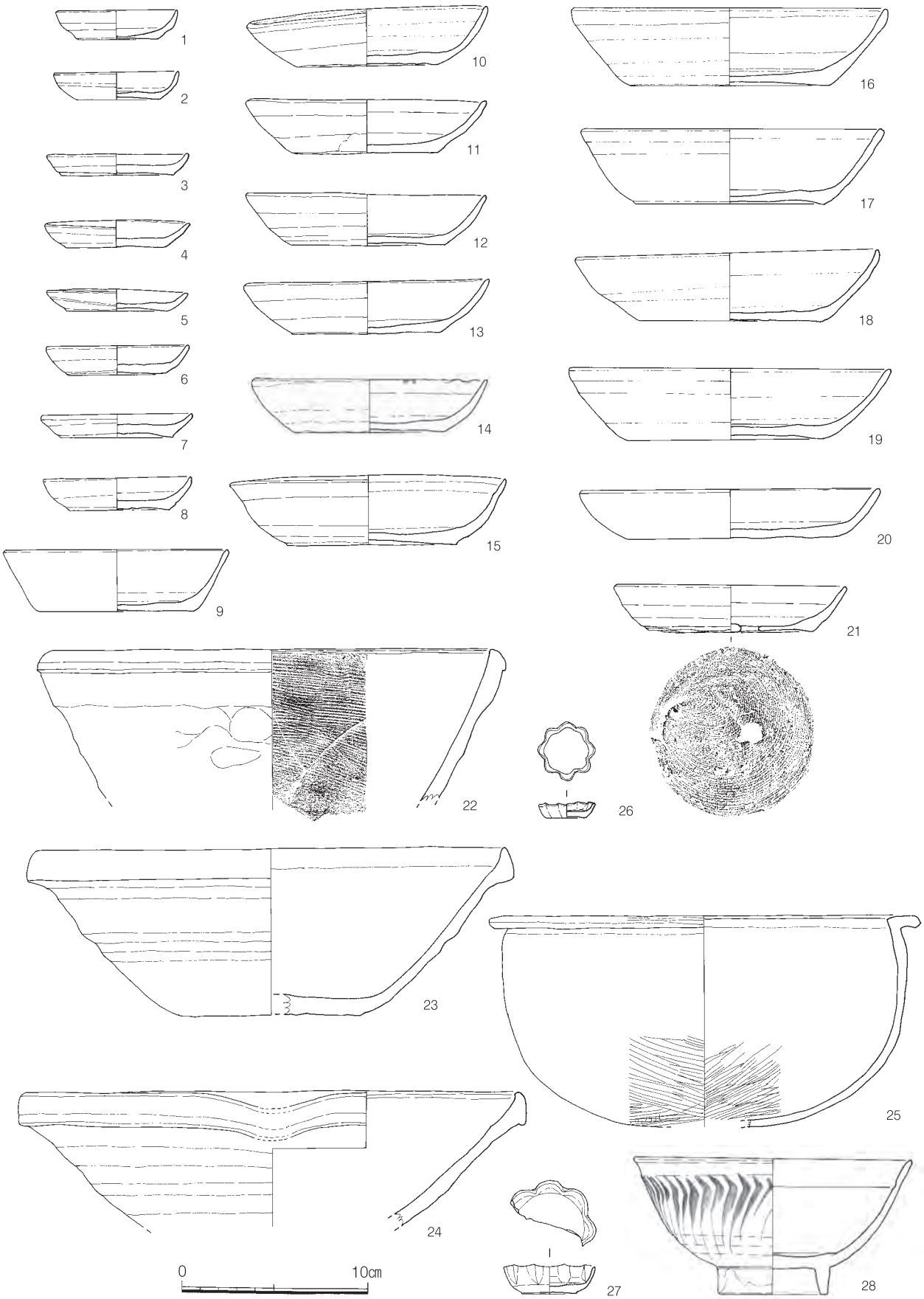


Fig.53　ＳＫ 159 出土遺物

の組み合わせが、そのまま廃棄されたものと考えられる。ただし、陶器などの大型品は大きな破片として埋められており、いわゆる埋納ではなく、火事で被熱し機能を失った遺物の廃棄と考えるべきであろう。

出土遺物について述べる。Fig.54 の１は、器高 60.5cm と背の高い陶器四耳壺で、胴部最大径は 41.1cm、口径 16cm である。中国陶器準Ａ群と分類されるもので、縦耳をもつ。外面に茶褐釉がかけられているが、二次被熱により部分的に釉がはげている。内面にも茶味の強い釉がまばらに薄くかけられている。大きな破片で横に寝た形で出土したが、破片は周辺に散らばっており、完形で置かれたものではない。２は鉄製刀子で壁際に刃先を下にして立った状態で出土している。刃部は反りがあり 13.5cm、茎部 6.5cm である。Fig.55 の３～ 15 は白磁碗である。３～５はⅣ類、６・７はⅡ類に分類され７は口縁部が内側にすぼまる形態を持つ。８はⅥ－３－ｃ類で外面体部に細かい沈線を施すもの、９は低い高台を持つⅣ－３－ａ類である。10 はＶまたはⅥ類、11 は細い高台を持つＶ類である。12 は未分類のもの低い高台であるが、Ⅵ類に類似するか。外底に墨書があるが判読できない。13 ～ 15 はⅥ類に包括されるもので器高が低く、内面に櫛描き文が施されている。15 には外底に墨書があるが、判読できない。16 はⅦ－ｂ類の、口縁を輪花にし内面に櫛描き文を持つもの、17 はⅧ－０類で内面に櫛描き文を持つ。18 ～ 20 は白磁皿である。21 は白磁の蓋で、軟質のクリーム色の胎をもち内外面の天井部のみに施釉される。22 は白磁小壷、23 は白磁香炉の蓋の部分で多くの透かしが空けられている。24 は高麗青磁の皿で茶色の発色をする胎に透明釉が薄くかけられている。外底をわずかに削

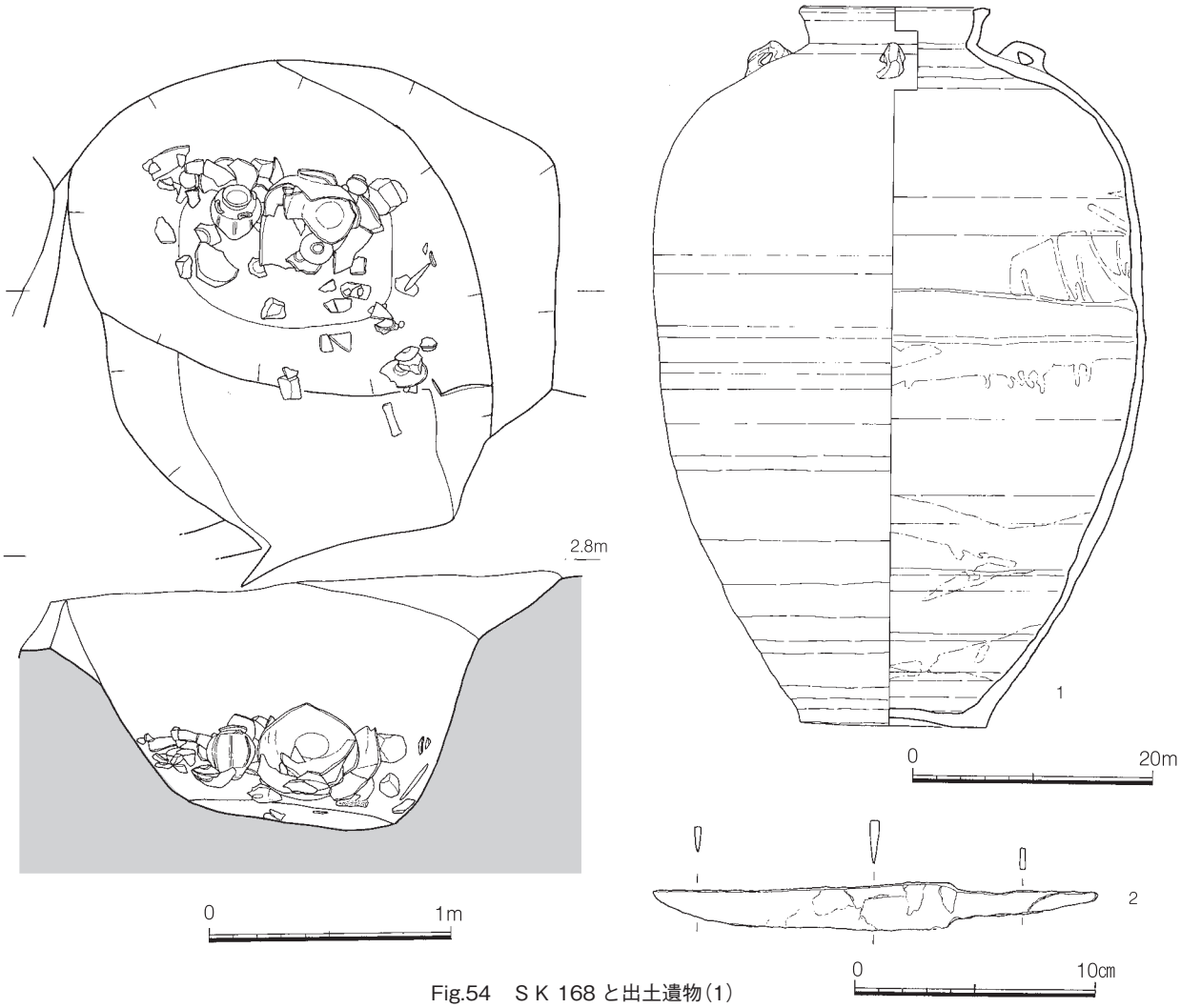


Fig.54　ＳＫ 168 と出土遺物（1）

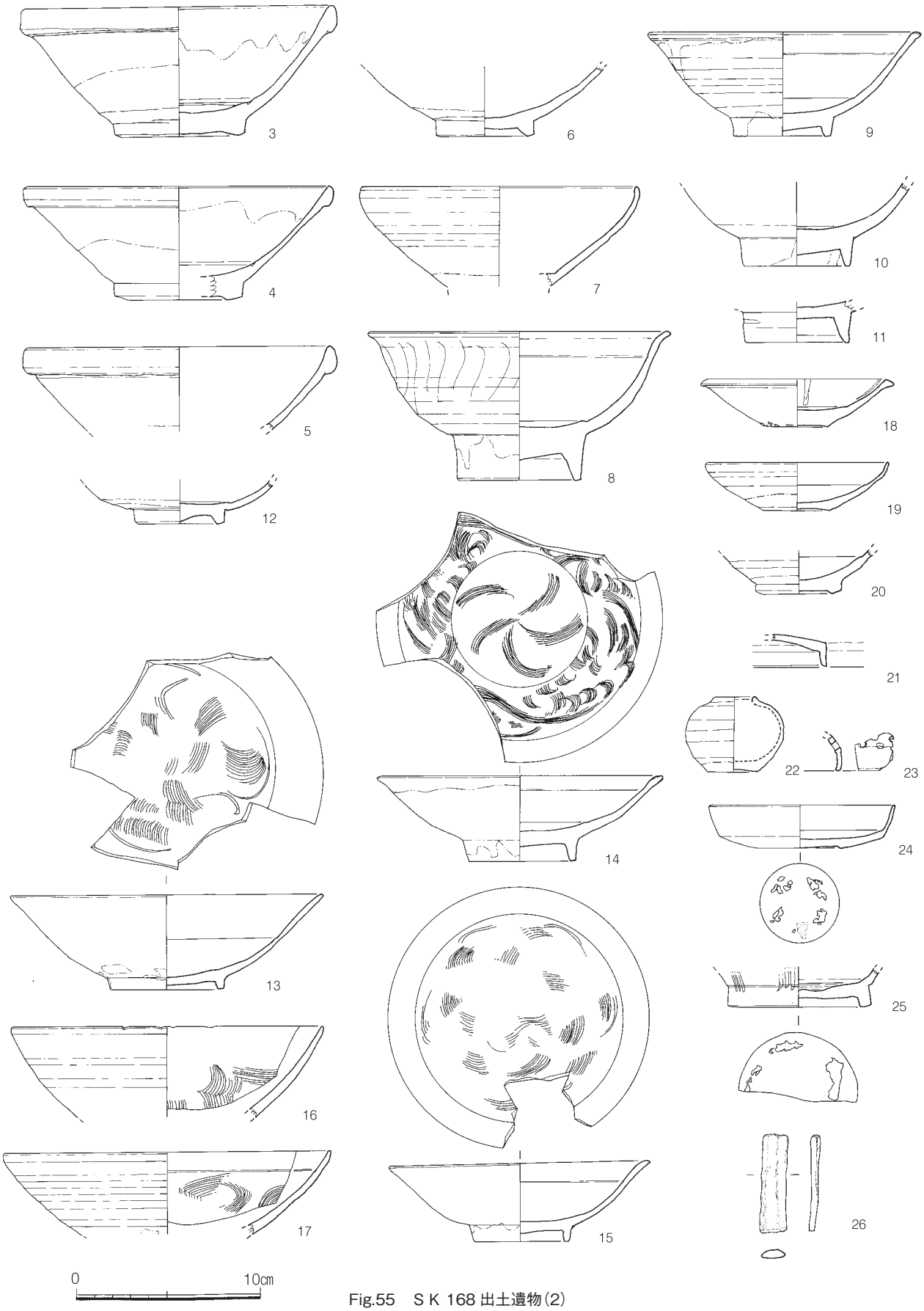


Fig.55　ＳＫ 168 出土遺物(2)

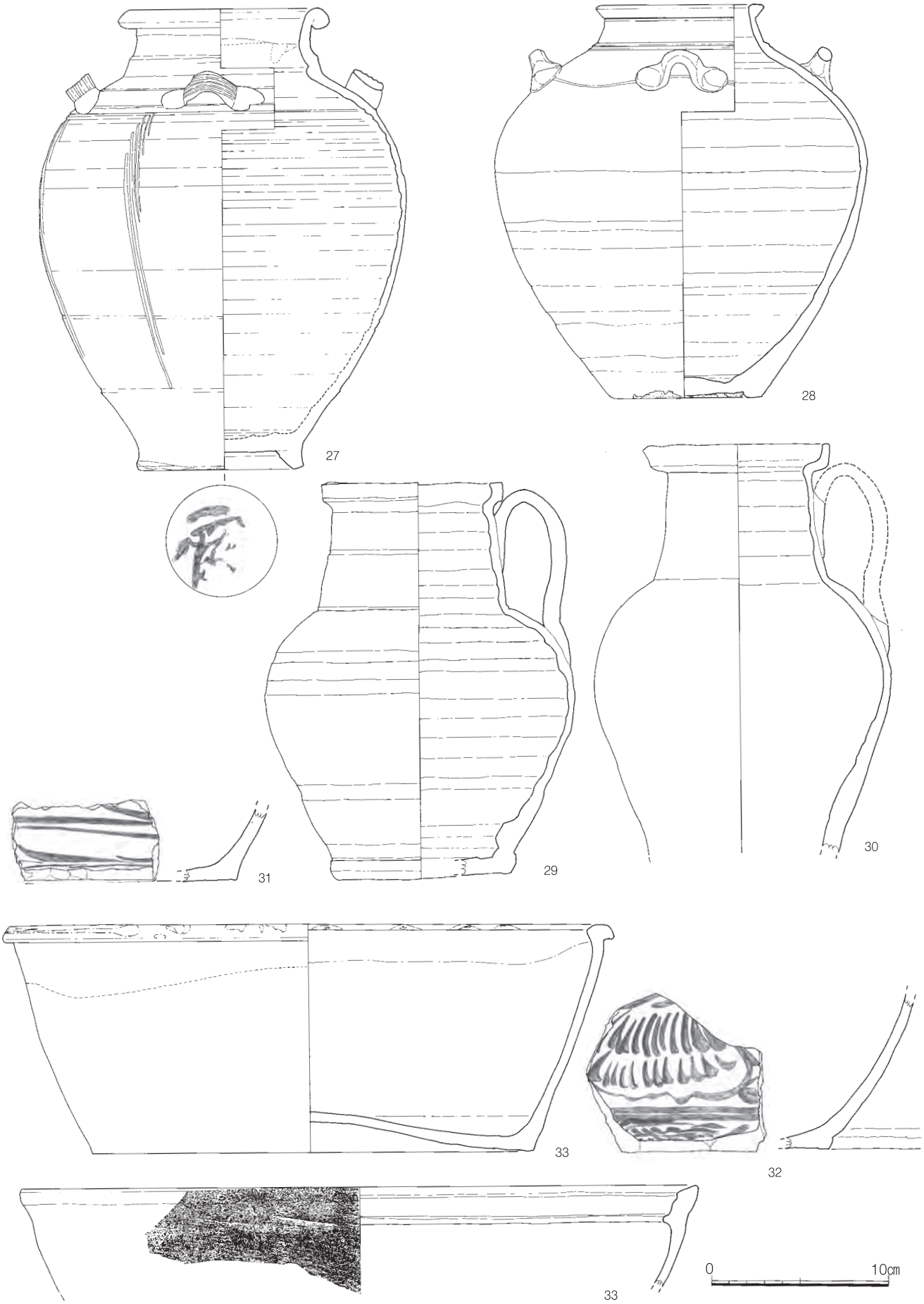


Fig.56　ＳＫ 168 出土遺物(3)

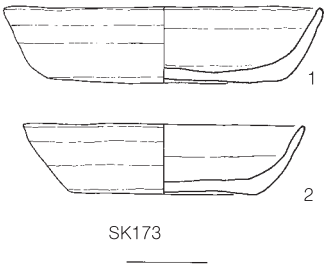
り碁笥底をなし、目跡が残る。25は高麗青磁もしくは越州窯系青磁の壷または水注の底部破片である。外面底部の中心部を平らに削り高台を作り出す。高台内には目跡が残る。体部には高台脇から3条の櫛描き文がたてに引かれ、瓜割り形をなす。わずかに青味がかったオリーブ色透明釉が内外全面にかけられている。26は鉛のインゴットである。この遺構ではFig.56の30のようにガラス坩堝が出土しており、鉛ガラスの原料の一部であろうか。Fig.56の27は白磁四耳壺である。薄胎の軟質の胎土でやや黄味のある透明釉がかけられている。ひび割れてはいたもののほぼ完形で、立った状態で出土している。焼け歪みがあり、また一部破片が欠損していることから、二次被熱による破損品として廃棄されたものであろう。外底に墨書があるが、判読できない。28は茶緑釉のかかる陶器四耳壺で耳の高さに波状沈線を巡らす。一部を欠く。29・30は焼締めの無釉陶器盤口水注である。29は底部の一部を欠くがほぼ完形である。30はガラス坩堝に使用されたもので、内面に銀化したガラスが全面に張り付いている。外面は高熱により灰色に変色している。31・32は磁竈窯の陶器黄釉鉄絵盤である。33も磁竈窯系陶器の器高の高い盤である。口径34.2cm、器高12.8cmで完形に近いが、一部欠損する。内面には口縁部を除き緑味のある黄釉がかけられ、内面と外面体部上半に白化粧がされている。口縁部には目跡が付く。34も無釉の磁竈窯系陶器捏ね鉢である。この遺構からは龍泉窯系の青磁が見られず、12世紀前半代の一括資料として重要である。

ＳＫ 173（Fig.57）

ＳＫ168の西に隣接する小規模な廃棄土坑である。遺物量は少ないが、完形の土師皿が出土している。図示したものは1が口径12.8cm、器高3cm、2が口径11.2cm、器高2.8cm、いずれも糸切りである。

ＳＫ 174（Fig.57）

ＳＫ168の東に隣接する長軸1.5ｍ短軸1.3ｍのほぼ円形で深さ1ｍの掘り方をもつ廃棄土坑である。図示した遺物は1～3が土師皿で、



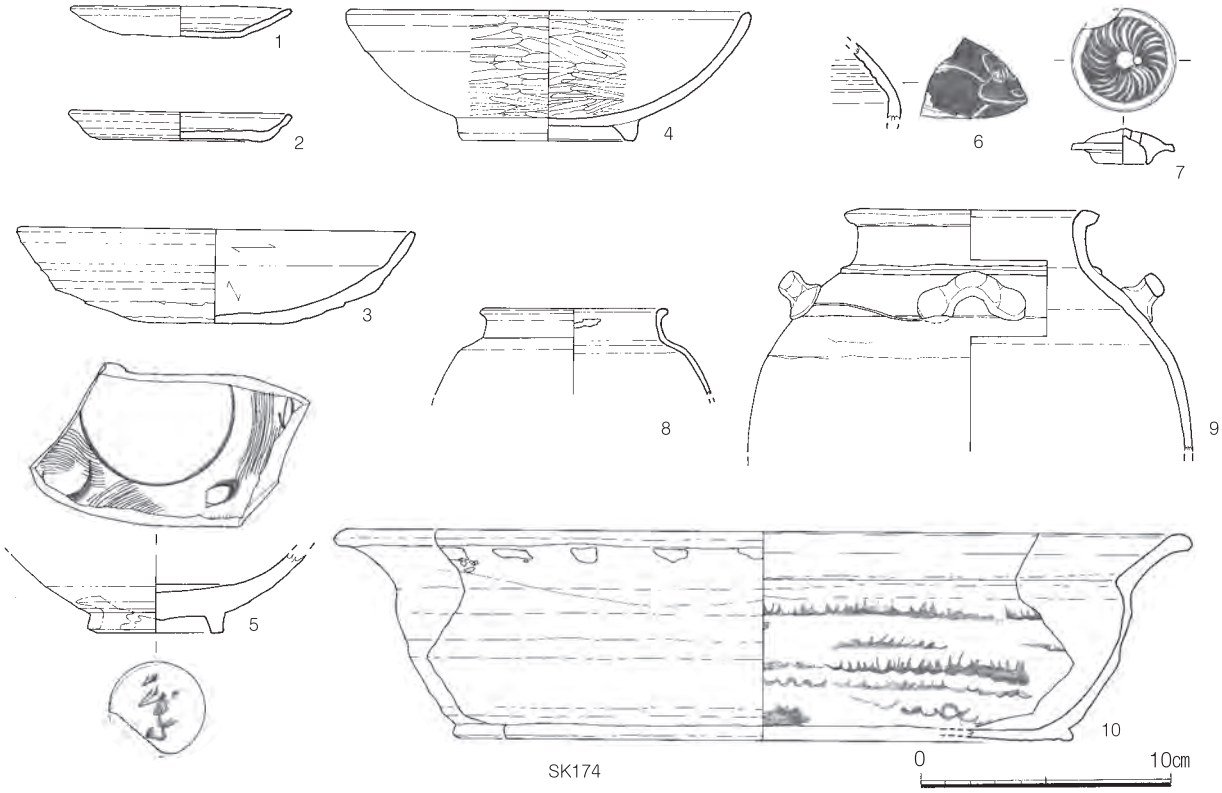


Fig.57　ＳＫ 173・174 出土遺物

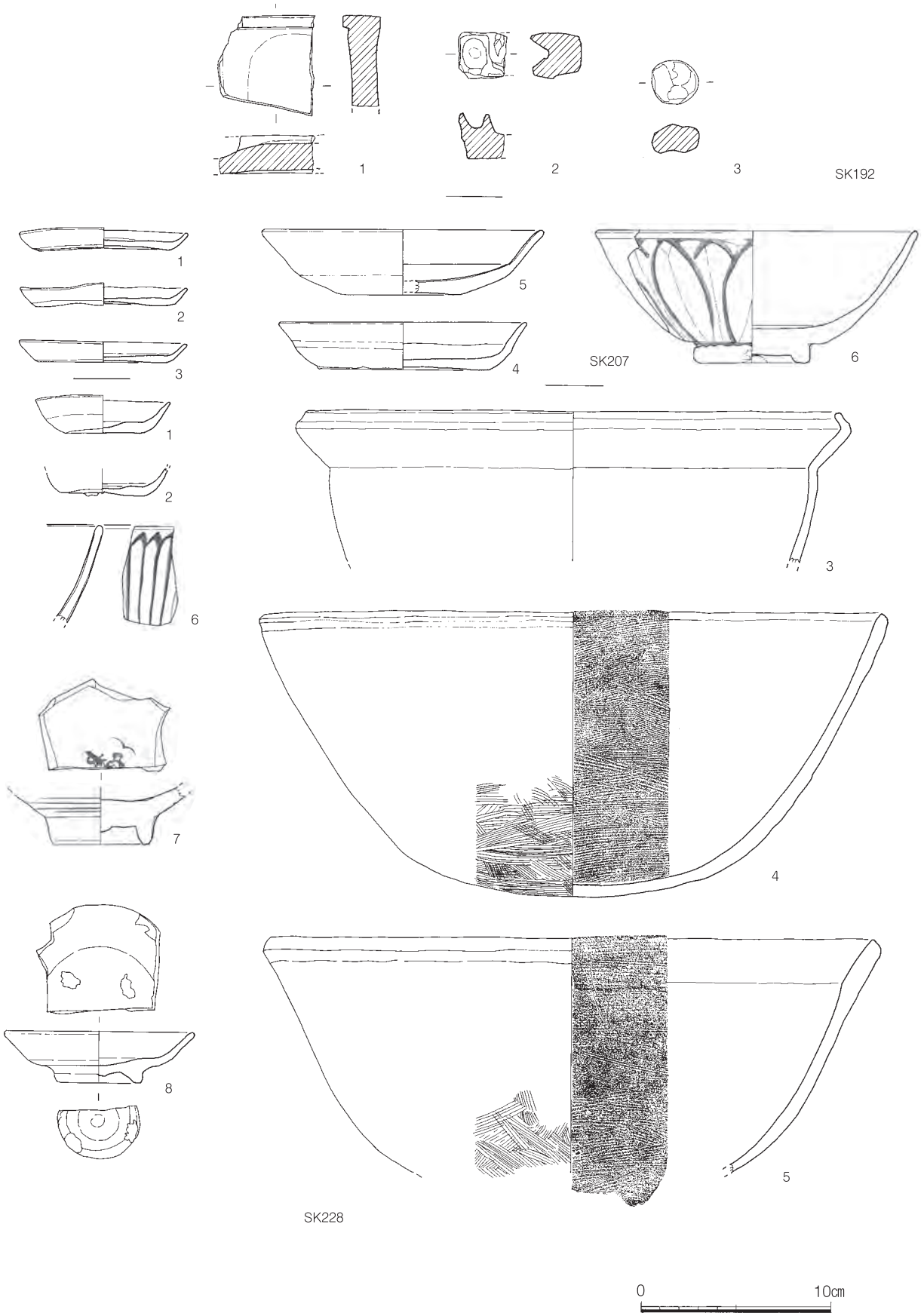


Fig.58　S K 192・207・228 出土遺物

１・３がヘラ切り、２が糸切りで、両者が混在する。４は瓦器碗である。６～10は中国製品である。５は初期龍泉窯青磁碗で、外底に墨書が見られるが判読できない。６は磁州窯製品で白地黒釉掻落の壷肩部破片である。生地に厚く白化粧を施し、その上に黒釉をかけている。７は上面に型押しの捩花文を持つ青白磁小壷蓋である。軟質の胎で上面にガラス質の透明釉がかけられ、天井突起脇に穿孔がある。８は薄胎の鉄釉がかかる陶器で茶入れである。９は茶褐釉がかかる陶器四耳壺、10は磁竈窯陶器黄釉鉄絵盤である。図示していないが瓜破の白磁壷破片も出土している。おおむね12世紀前半代に位置づけられよう。

ＳＫ 192（Fig.58）

Ａ区第２面の小規模な遺構で、石製品が出土している。１は輝緑凝灰岩を素材にした硯外面底部をアーチ状に抉っている。２は滑石製石鍋の鍔の部分を加工したもので、２カ所に穴が空けられている。２穴の石製品は通例見かけられるが用途は明確ではない。３は砂岩製の石玉であるがやや扁平で側面が磨かれている。

ＳＫ 207（Fig.58）

Ａ区第２面の小規模な廃棄土坑である。完形の土師皿が４点出土しており、口径９cm前後、器高１cm前後のもの（１～３）と口径13cm、2.5cmのもの（４）がある。いずれも糸切りではあるが、その後ナデの処理をして滑らかにしているものである。５は白磁皿である。６は鎬蓮弁文の龍泉窯青磁碗で濃いオリーブ色の透明釉がかけられている。

ＳＫ 228（Fig.58）

Ａ区２面北隅付近で検出した土器の集積である。ＳＤ 264に接し、一部遺物にその埋没期遺物と接合関係があり、同時期のものである。１・２は土師器皿で口径７cm、器高２cmの小型品である。３～５は土鍋で、３は瓦質で指押さえとナデ調整をし、外に開いた口縁部をさらに内側に折り曲げている。４・５は土師質で内面と外底を丁寧なハケ目調整を行っている。４は体部が直線的に開くが、５は上部でわずかに外反する。いずれも外面は煤が付着しいる。６・７は龍泉窯青磁碗で６は剣先形の

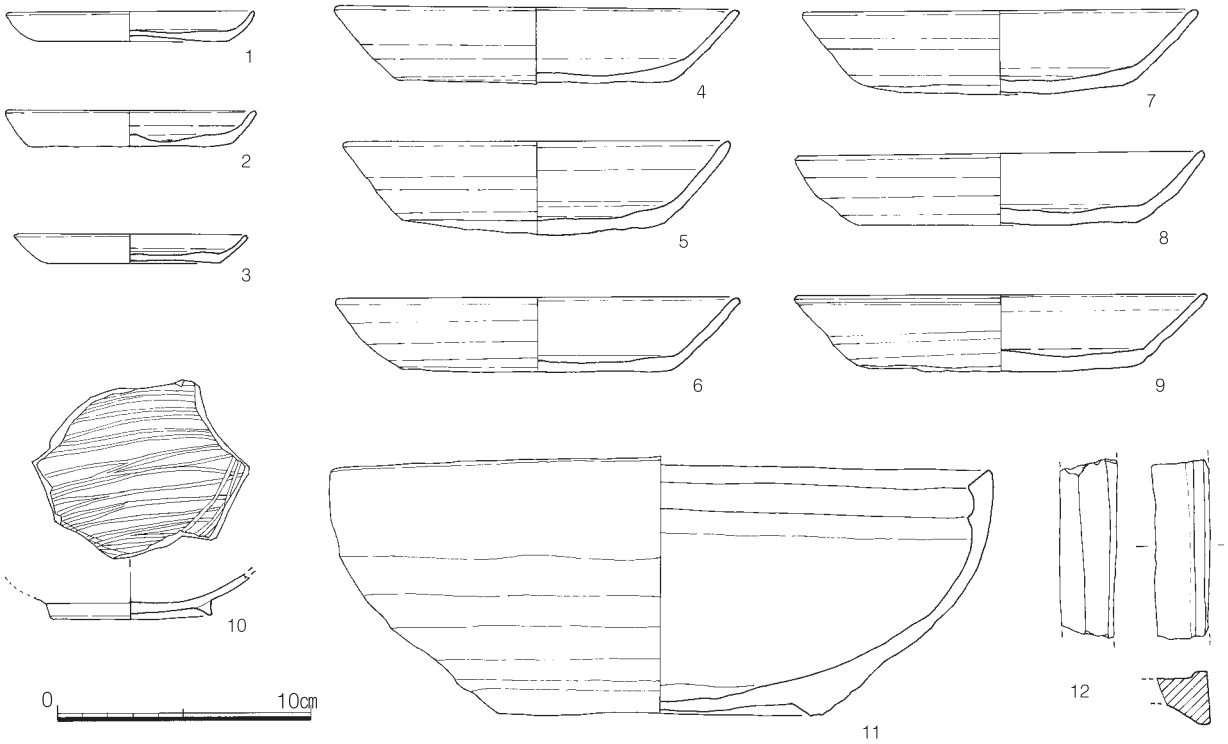


Fig.59　ＳＫ 235出土遺物

細い蓮弁を持つもので、７は内面底に印文を持つものである。８は李朝白磁皿で、粗い胎土であるが青みを帯びた透明釉が厚くかかり、内底と高台にそれぞれ４カ所の目跡が残るものである。

ＳＫ 235（Fig.59）

Ａ区２面北隅付近で検出した小規模な土師器皿の集積である。土師器はいずれも糸切り底で、口径 9.5 ～ 10cm、器高１cm 強のもの（１～３）と、口径 15.5 ～ 16cm、器高３cm 強の大型品（４～９）に分けられる。10 は瓦器碗で丁寧なヘラ磨きが施されている。11 は胎土の粗い磁竈窯系陶器の捏ね鉢である。12 は砂岩製の硯で外底部をアーチ状に抉り込んでいる。

ＳＫ 241（Fig.60 ～ 62）

Ａ区第２面北東隅部で検出した白磁一括廃棄土坑である。同じ白磁廃棄土坑であるＳＫ 147 に隣接しており、両者間には出土遺物の接合関係がみられることから、同一原因による廃棄であり、11 世紀末～ 12 世紀初頭の同時期に行われたことが明らかである。径２ｍほどの不整円形で深さ 0.8 ｍ深鉢形の堀方を持ち、その底部にコンテナ５箱分の白磁を中心とした陶磁器が出土している。ＳＫ 147 より遺物量は少ないが、同様に二次被熱により破砕したものである。Fig.61 に示したものはいずれも白磁である。１～８は皿である。１～７はⅡ類とされる平皿で７のみが体部が直に広がる。８は高台付きの皿である。９～ 14 は大きな三角玉縁口縁をもつ碗Ⅳ類で、15 ～ 23 は体部に丸味をもつⅡ類碗で 15 を除き小さ な玉縁口縁を持つ。24 はⅥ類とされる浅碗内面に櫛描き文を持つ。25 ～ 27 は高い高台を持つⅤ類碗、28 は四角の浅い高台をもち内面に櫛描き文を持つものである。白磁碗・皿の器種の傾向もＳＫ 147 に同じである。Fig.62 に示したものについて述べる。29 は磁州窯系白磁の托である。30 ～ 35 は青白磁である。30・31 は淡いブルーの釉をかけた小皿で内面に櫛描き文を持つ。32 は釉がわずかに青味がかるが皿であるが、内面に櫛描き蕉葉文があり、白磁皿Ⅶ類のものであろう。33 は体部が丸味をもつ端反りの小碗である。34・35 は合子の身である。36 は白磁小碗で見込みに小さな茶溜まりを持つ。37 は広東系の白磁鉢で幅広の丸味のある玉縁をもち、内面体部にヘラ描きの文様を持つ。淡い青緑味を持つ透明釉がかけられている。38 は耀州窯青磁碗である。体部は直線的に開き、内面に片切り彫りと櫛描き文が施され、外面には細いヘラ描きがある。濃いオリーブ色透明釉がかかる。39 ～ 41 は中国陶器である。いずれも磁竈窯系の胎土の粗いもので、38 は捏ね鉢とセットになる蓋である。40 は内面に緑黄色の釉をかける深い盤である。41 は焼き締めの盤口水注であるが、ガラス坩堝に使用されており内面にガラス滓が付着し、外面は灰色に変色している。42 は朝鮮半島の陶質土器大甕で胎土は小豆色である。43 は高麗青磁皿で緑灰色の透明釉が厚くかかり、大きな貫入がある。44 ～ 49 は土師器皿で 44 のみ糸切り、他はヘラ切りで、47 ～ 49 は内外面に丁寧なへら磨きを施す。50 は瓦器碗である。

SK244（Fig.63）

Ａ区第２面南西隅で検出した土坑で、両側を攪乱土坑に切られ全体は不明である。遺物量は少ないが、図示した類例の少ない器形の白磁碗がある。高い高台をもち丸味のある体部で口縁部直下にくびれがあり、端部を小さく外反させるものである。高台脇まで黄味のある透明釉が薄くかかる。白磁小碗ＸⅡまたはＸⅣ類とされるものであろう。

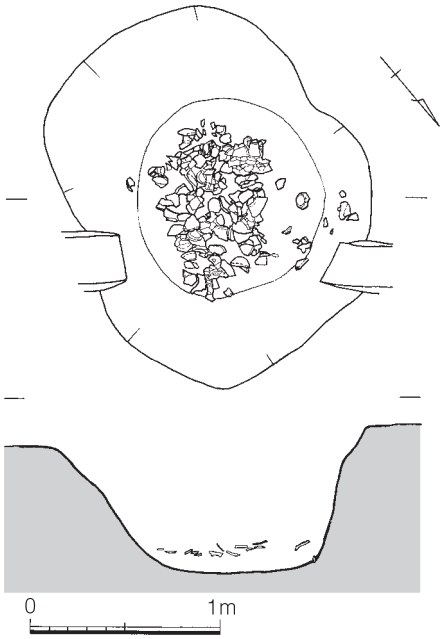


Fig.60　ＳＫ 241

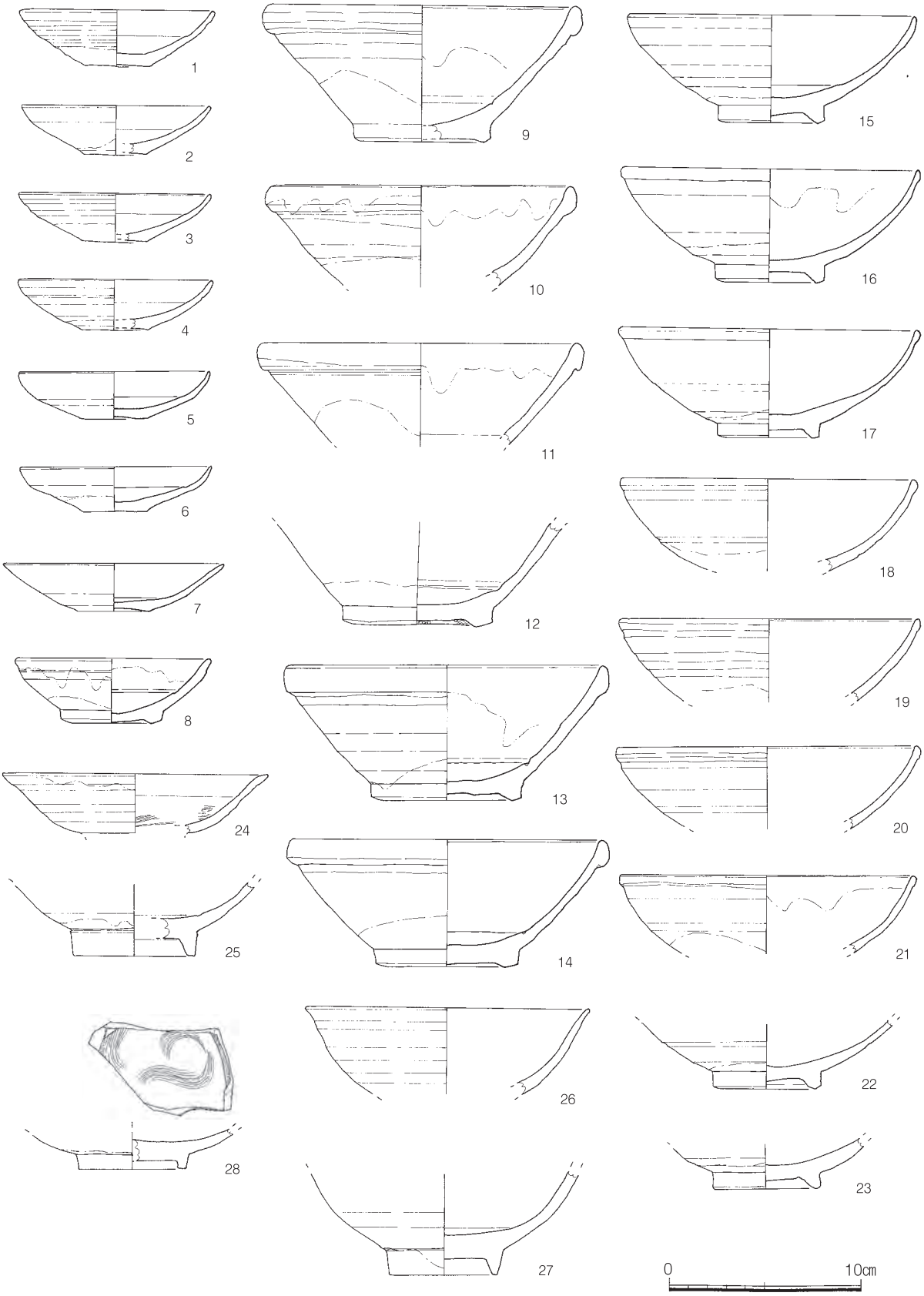


Fig.61　ＳＫ 241 出土遺物(1)

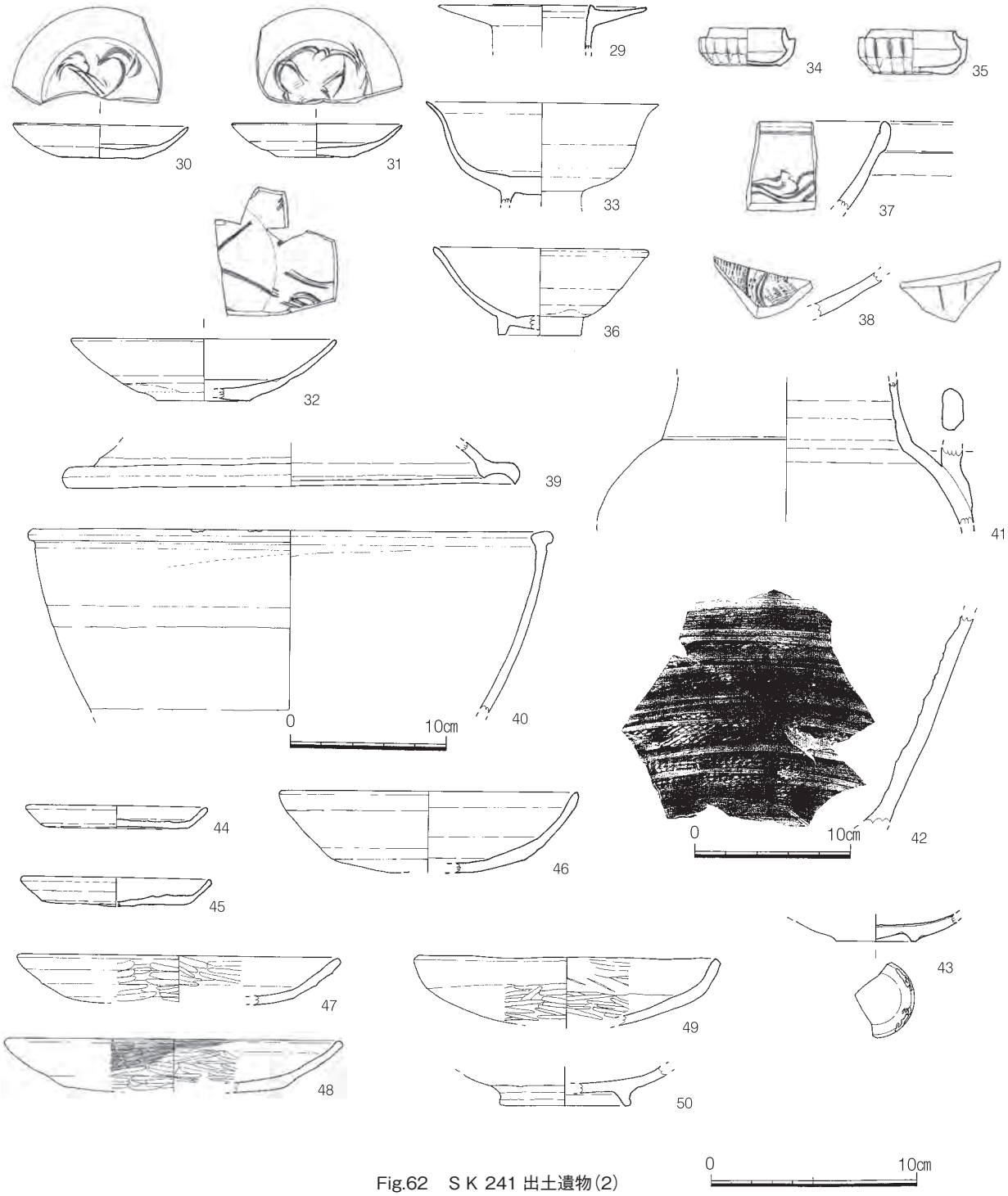


Fig.62　ＳＫ 241 出土遺物(2)

SK253（Fig.63）

Ａ区第２面で検出した径 1.2 ｍのほぼ円形、深さ 90cm の掘り方で、焼土、灰、木炭、砂がＵ字状に縞状に堆積する。数次にわたって火を焚いたものであろう。遺物の量は少ないが、図示した遺物は１～３が土師器皿で、１・２が口径 9cm 前後の小型品、３が口径 15cm の大型品で、１・３はヘラ切り底、２は糸切りである。４は器高の高い白磁皿で、縮緬状の乳白色釉が厚くかかり、貫入が目立つ。５・６は滑石製品で、５は石鍋破片にＶ字状の穴を大小２カ所穿ったもの、6 は丁寧な削りで胴部にくびれを作り、Ｕ字形の穴を穿ったものである。12 世紀初頭の遺構である。

SK260（Fig.63）

小さな廃棄物処理土坑で、図示した遺物は白磁皿Ⅱ‐1aとされるものである。この他骨片・へら切り土師皿・玉縁白磁白磁皿などが出土している。

SK265（Fig.63）

Ａ区第２面中央部で検出した土坑である。遺物量は 少なく青磁を含まず白磁破片が多く出土している。図示したものは１がⅣ類白磁碗、２がⅡ‐２a類白磁碗、３がⅡ類白磁皿である。４は李朝の陶器皿で、淡茶色の釉がかけられ、内底に胎土目が残る。

ＳＫ 266（Fig.64）

Ａ区第２面中央部で検出した一辺1.2ｍ程の不正方形の土坑である。図示した遺物は、１が口径15.8cmのヘラ切り土師皿、２がⅣ類白磁碗、３がⅡ-1類白磁碗、４が胴を瓜破にする白磁小壷、５は白磁水注の頸部で把手は接合部を除き欠失するが､側面２カ所に印花のある小さな耳をつけている。6・７は李朝の陶器碗である。６はオリーブ色透明釉が縮れ粗質であるが、７は磁質に近く優品である。

ＳＫ 288（Fig.64）

Ａ区第２面中央部で検出した一辺1.2ｍ程の不正方形の土坑である。遺物量はコンテナ３箱であるが､12世紀初頭頃の遺物がまとまって出土している。１は瓦器皿､２は白磁碗Ⅳ類のもので外底に「安置する」の意味がある「貼」の墨書がある。３は磁州窯系の白磁碗で軟質の胎に白化粧を施し、透明釉をかけている。４は広東系の白磁鉢で内面にヘラと櫛による粗い花文を描いている。５は磁州窯系の白磁托で白で地に黒の花文が描かれている。６は内外に濃いオリーブ釉をかける陶器広口壷で高麗の製品か。７は高麗青磁碗の優品で、底作りが薄くわずかな高台をもち、畳付を除いて青みを帯びたオリーブ色透明釉が厚くかけられている。貫入が見られず艶やかである。８は在地系の須恵質大甕で

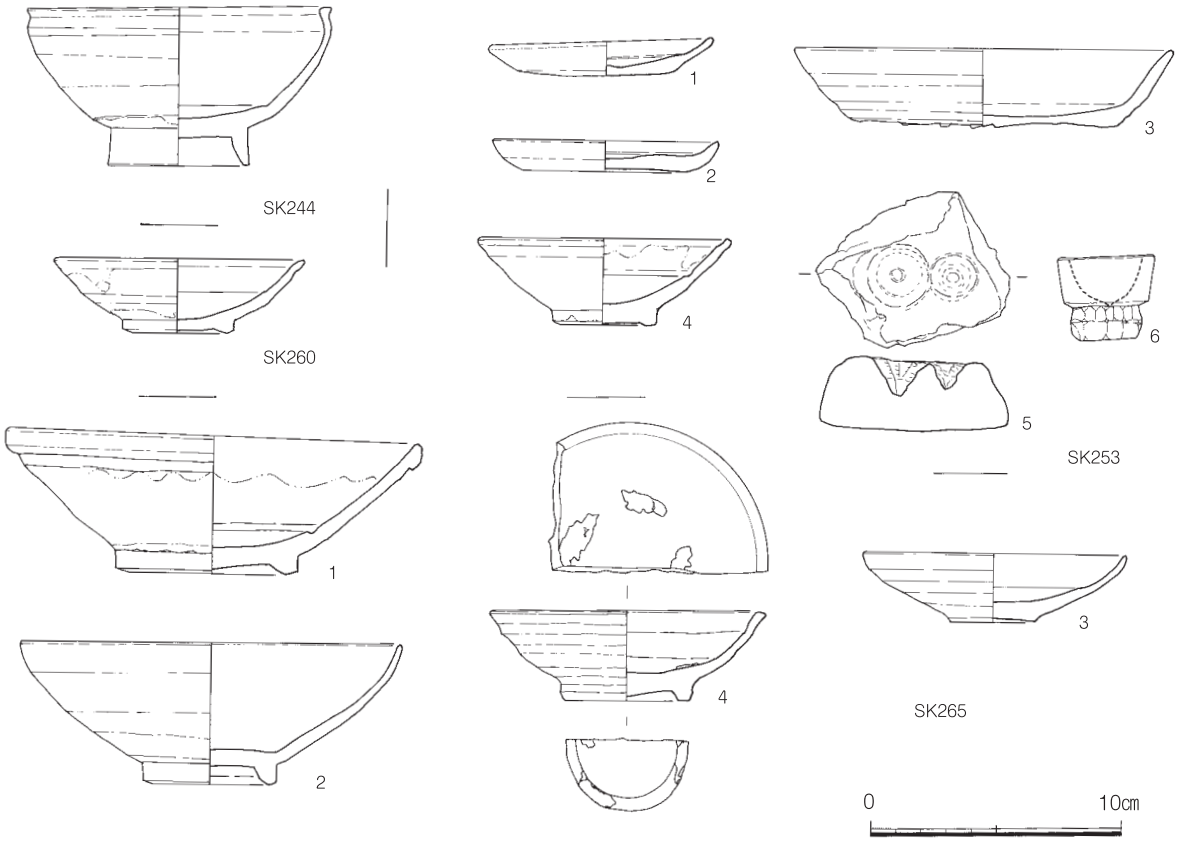


Fig.63　ＳＫ 244・253・260・265 出土遺物

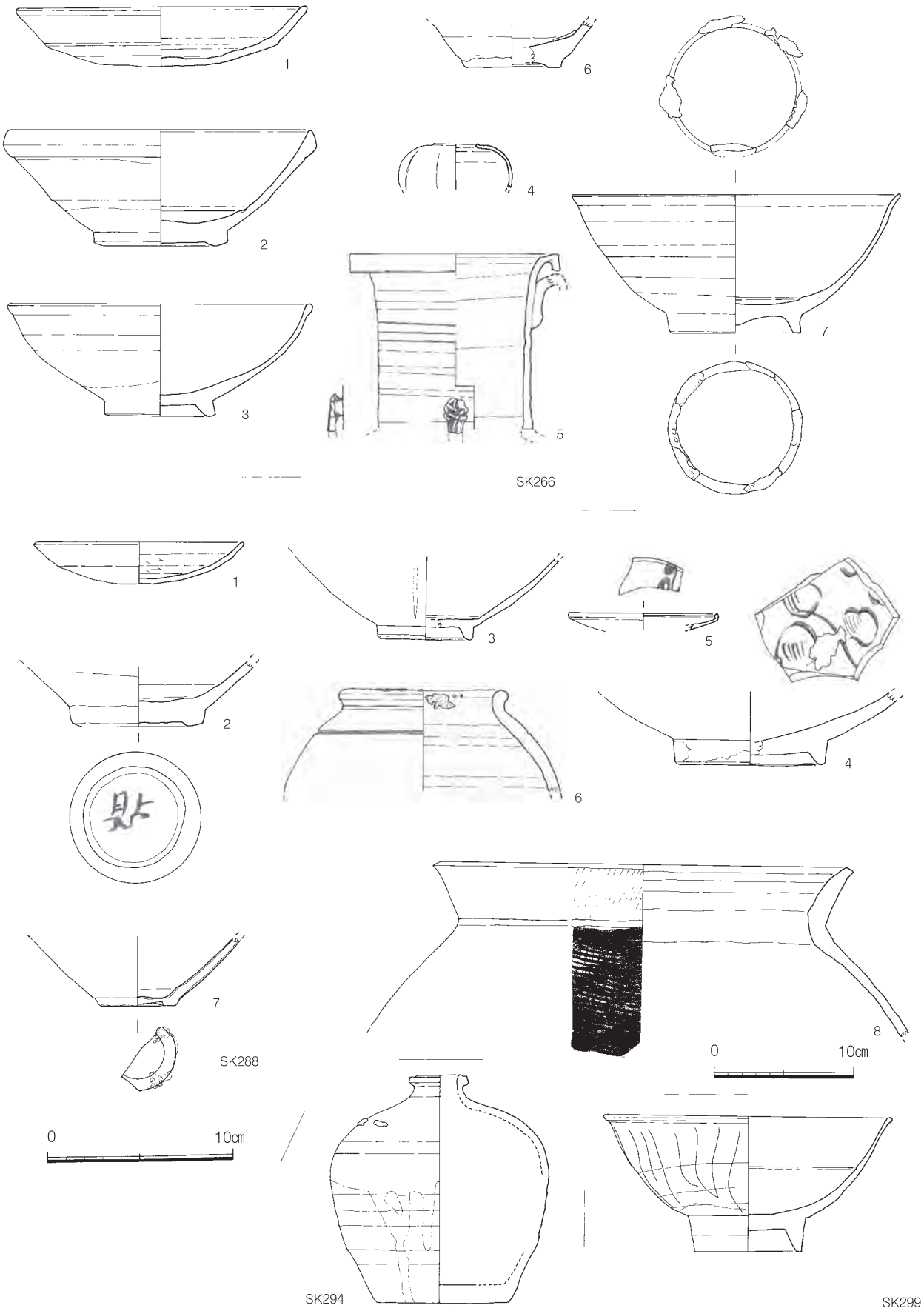


Fig.64　S K 266・288・294・299 出土遺物

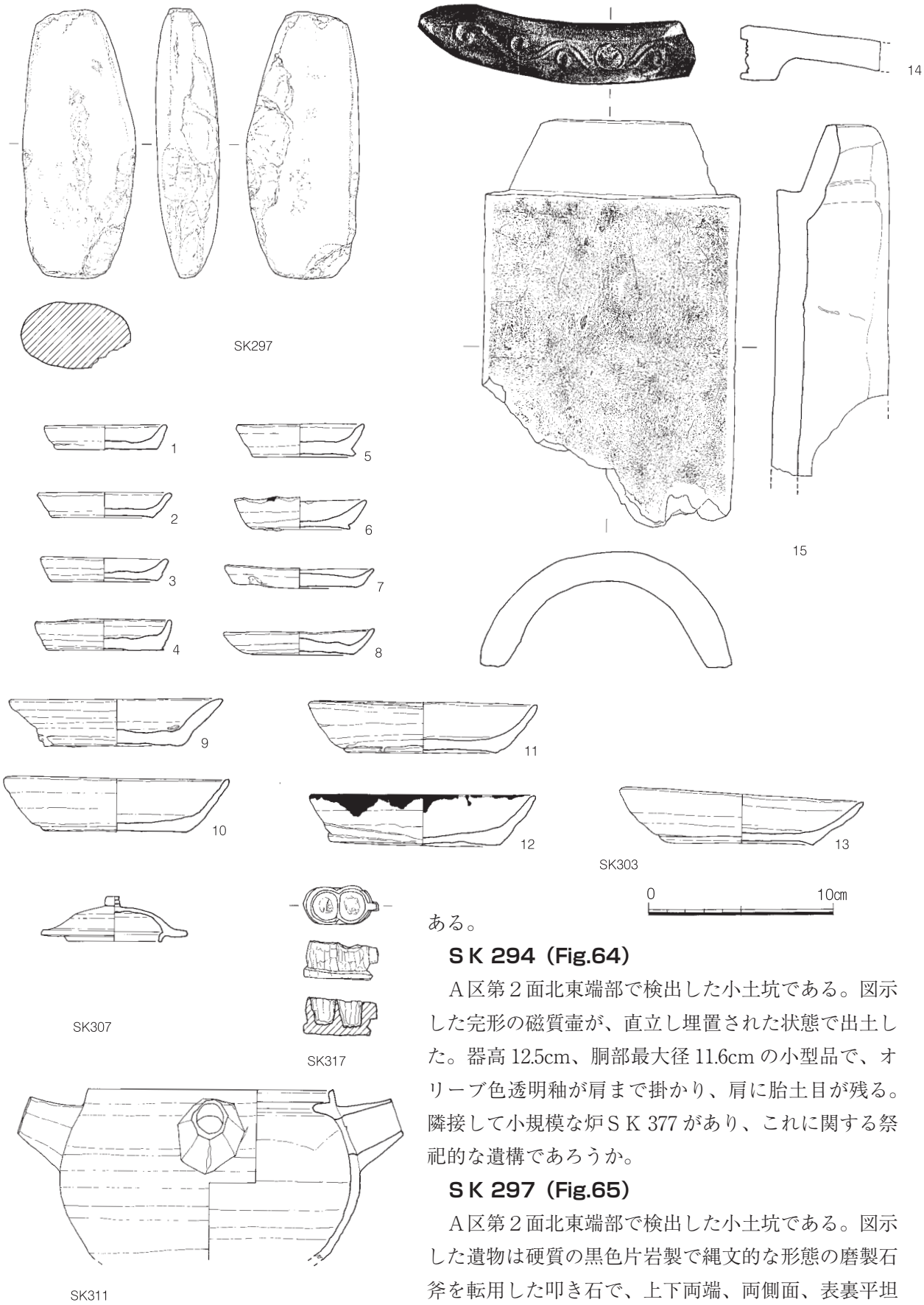


Fig.65　ＳＫ 297、303、307、311、317 出土遺物

ある。

ＳＫ 294（Fig.64）

Ａ区第２面北東端部で検出した小土坑である。図示した完形の磁質壷が、直立し埋置された状態で出土した。器高 12.5cm、胴部最大径 11.6cm の小型品で、オリーブ色透明釉が肩まで掛かり、肩に胎土目が残る。隣接して小規模な炉ＳＫ 377 があり、これに関する祭祀的な遺構であろうか。

ＳＫ 297（Fig.65）

Ａ区第２面北東端部で検出した小土坑である。図示した遺物は硬質の黒色片岩製で縄文的な形態の磨製石斧を転用した叩き石で、上下両端、両側面、表裏平坦面に叩打痕が残されている。

ＳＫ 299（Fig.64）

Ａ区第２面中央部で検出した小土坑である。遺物量は少ないが図示した白磁碗Ⅵ-2 類が出土した。外面に細い線描きを持つ。二次被熱により、高台露胎部には全面煤が付着している。

ＳＫ 303（Fig.43・65）

ＳＫ 131 として上面を調査し、下面をＳＫ 303 として精査した。ＳＫ 303 が当初の廃棄段階のものである。ＳＤ 211・213・326 の溝が廃止された段階でその窪みを廃棄物処理用に利用したものである。図示した遺物は１～ 13 が土師器皿で、口径７cm 前後、器高 1.5cm 前後のもの（１～６）、口径８cm 前後、器高１cm 前後の薄手のもの（７・８）、口径 12 ～ 13cm、器高 2.5cm 前後のもの（９～ 13）に分かれる。いずれも糸切りで、６・12 は灯明皿として使用している。14 は軒平瓦で、瓦当文様は中心飾を宝珠とする唐草文である。15 は丸瓦で縄目叩きの痕跡がわずかに残る。

ＳＫ 307（Fig.65）

Ａ区第２面検出の小土坑である。ＳＫ 256 に切られる。遺物量は少ないが、図示したように青白磁小壷蓋が出土している。天井頂部に円筒形のつまみを貼り付けている。

ＳＫ 309（Fig.66）

Ａ区第２面北東隅検出の小土坑である。この遺構では、図に示した口縁部をわずかに欠く粉青沙器印花文壷が横に寝かされた状態で検出されている。体部中央に二段に分けた列点文、上部に縦方向の沈線文、下部に横位の沈線文がある。

ＳＫ 310（Fig.66）

ＳＫ 309 の南西に接する。径１ｍ程、深さ 60cm の円形土坑で中には焼土、木炭、灰、砂が互層になって堆積しており、繰り返し火が焚たかれたことを示している。ここではガラス小玉が出土している。

ＳＫ 311（Fig.65・282）

Ａ区第２面北東隅検出の土坑である。調査区壁面に接し全体形は不明。ここでは Fig.282 に示したように、大粒の球形ガラス玉に２個の小さなガラス玉を穿孔部が直交するように付けた異形ガラス玉

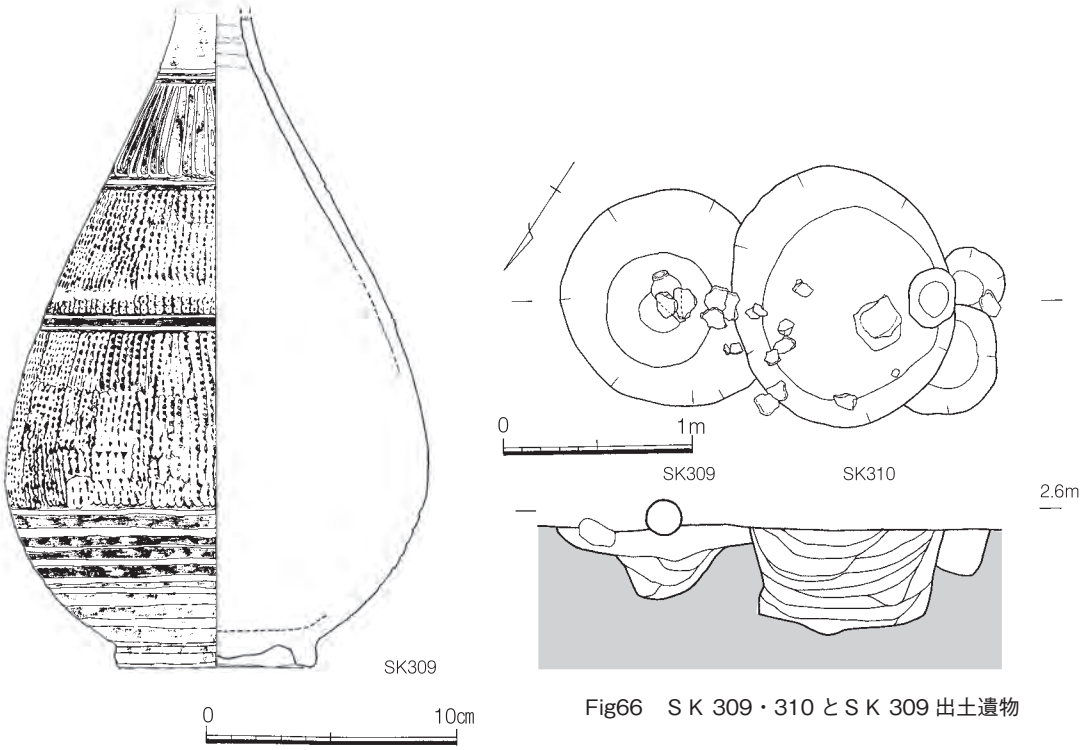


Fig66　ＳＫ 309・310 とＳＫ 309 出土遺物

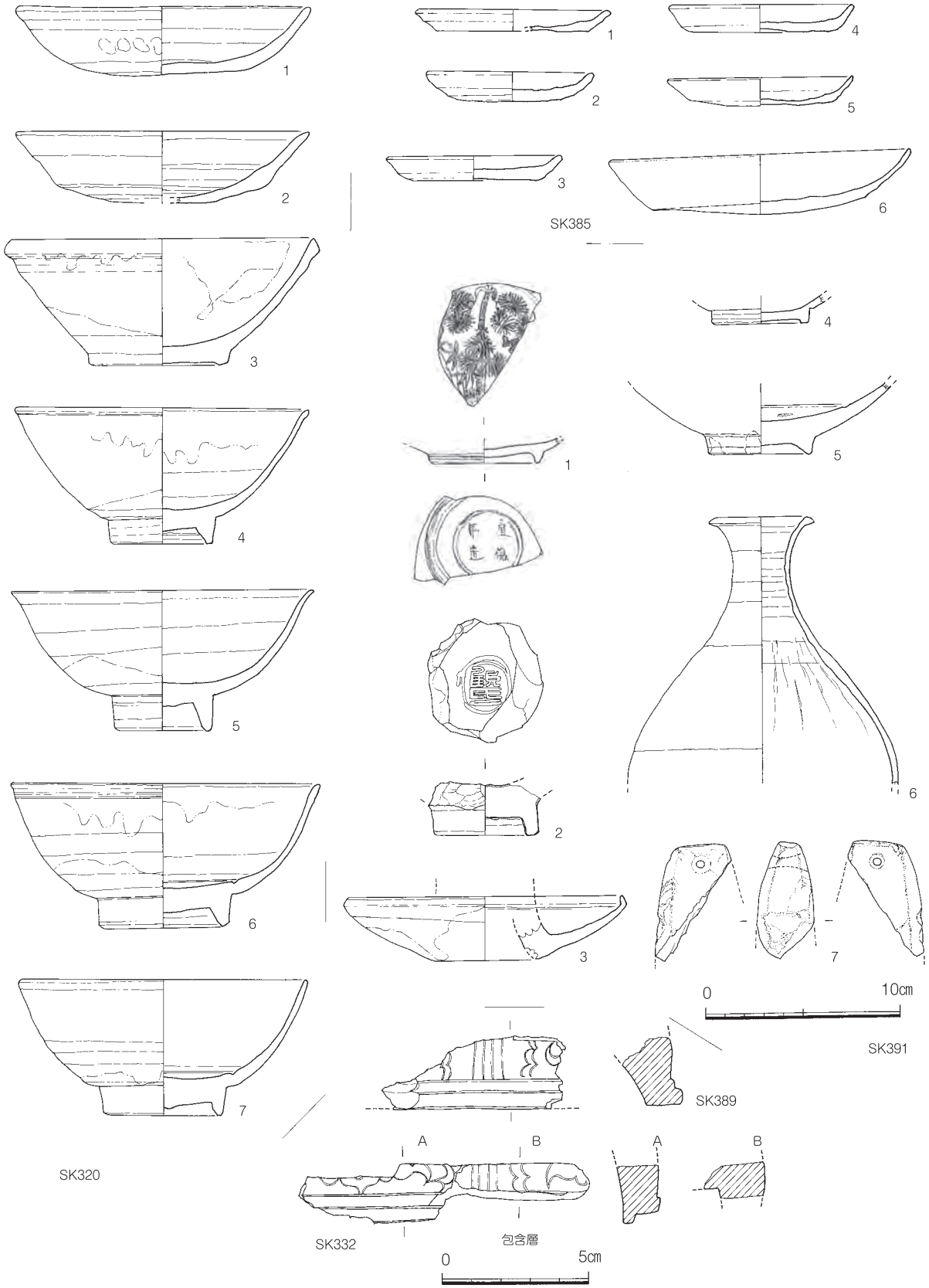


Fig.67　ＳＫ 320・385・391・332・389・包含層出土遺物

が出土している。 Fig.65 に示したものは磁竈窯系陶器の把手付片口である。注口部分の破片で反転実測している。注口部分は七角形に面取している。内面にのみ茶褐釉がかけられている。

ＳＫ 317（Fig.65）

Ａ区第２面南西側検出の土坑である。遺物量は少ないが、図示したように滑石製石鍋を再加工した双口の石製品が出土している。片側に把手状の耳をつくりだしている。類例は比較的多く見られるがその用途は明確ではない。

ＳＫ 320（Fig.67）

Ａ区第２面南西側検出の 0.9 × 0.6 ｍの長円形の掘り方を持つ小土坑である。量は少ないが時期的にまとまりのある一括遺物が出土している。図示した遺物は１・２がヘラ切り土師皿でいずれも口径 15cm、器高 3.5cm のものである。３は白磁碗Ⅳ類に属するもので、見込みに沈圏線が見られないものである。４～７はいずれも白磁碗類に属するものであるが、４は見込みに沈圏線が見られず、口縁端部を小さな玉縁風に肥厚させるものである。５は口縁をやや外反させ、見込みに沈圏線が見られず、外底高台内と見込みにハマの付着痕跡が残るもので、淡オリーブ色の透明釉がかかっている。６・７は高台がやや浅く、内底に沈圏線をもつものである。11 世紀末～ 12 世紀初頭の遺構であろう。

ＳＫ 332・389（Fig.67）

それぞれＡ区第２・３面検出の小土坑である。これらの遺構からそれぞれ１点特殊な形の石製品が出土しており、周辺包含層からも同一個体の破片が検出されている。片岩製で外面に線刻文様がある。４本の縦線で区画を作りその中に同じく線刻で花文を描く。仏教的なモチーフであり、その用途を示唆している。内側はアーチ状に削られている。仏舎利容器などに利用される函であろうか。

ＳＫ 378（Fig.68・69）

Ｂ区第２面検出の大きな廃棄物処理土坑で、北東部は調査区外に延びている。現存長で 4.1 ｍ、幅 2.9 ｍをはかる。焼けた礫とともにコンテナ 12 箱分にも及ぶ陶磁器類が出土している。Fig.69 に図示した遺物について述べる。１～ 20 は土師器皿で、口径７cm、器高２cm の背が高いもの（１）、口径８cm 前後、器高１cm 強の薄手のもの（２～７）、口径 11.5 ～ 13cm、器高 2.5 ～３cm のもの（８～ 18）、口径 16cm、器高 3.5 ～４cm の大型品の４つのグループに分けられる。いずれも糸切り底である。21 は龍泉窯青磁高台付き皿で、外面にヘラ切り連弁文を持つ。22 は同じく鎬連弁文を持つ龍泉窯青磁碗で、小振りの高台を持つ。23 は外面体部上半に薄いオリーブ色透明釉をかけた青磁すり鉢で、露胎の内面にヘラの線彫り擂目がある。24・25 は中国製白磁で、それぞれ碗、さらである。いずれも見込みに輪状の釉の掻き取りがある。26 は李朝陶器皿の底部破片で高台脇周辺を打ち欠き、瓦玉としている。畳付き４カ所と見込みに砂目跡がのこり、高台内に李朝陶磁器としては珍しく墨書があるが判読できない。花押か。27 も李朝陶器碗である。全面に灰青色不透明釉がかかり、畳付に砂目跡が付く。28 は李朝陶器皿で、オリーブ色透明釉がかかり、畳付は拭き取っている。内底と畳付に胎土目跡が付着している。29 は土師質土鍋でである。内面と外底はハケ目調整、外面体部は指押さえで整形しており、外面には煤が付着している。30 は瓦質湯釜で、頸部と外面下半はハケ目調整、以外は横ナデである。胴部中央に鍔状の突帯があり、その直上に刷毛目施文具の端部を使った刺突文様がある。内面には指押さえの痕跡が明瞭である。31 は円盤形の滑石製品で中心部に同心円の小さな窪み状の穴があけられ、平坦面は丁寧に研磨されている。表面には回転削りの小さな溝があり、背面には中心からずれた位置に２個の小穴があって、旋盤の止め部分かと思われる。装飾品であろうか。32 はサスカイト製の石鏃で縄文時代遺物の混入である。この遺構年代はＳＤ 007、264 とほぼ同時期、15 世紀代に位置づけられよう。

ＳＫ 385（Fig.67）

Ａ区第３面北東側検出の２ｍ× 1.5 ｍの長円形土坑で、中でたびたび火を焚いた痕跡がある。遺物量は少ないが、図示したようにまとまった土師皿が完形で出土している。１・３は静止糸切り、２・45 はヘラ切りの小皿である。６は径 16.5cm の大皿で、静止糸切りの後内底を押しだし、底に丸味を与えている。12 世紀初めのものであろう。

ＳＫ 391（Fig.67）

Ａ・Ｂ区境第２～３面検出の廃棄物処理土坑である。Fig.67 に示した遺物は、１が明染付皿で内面に花文を持ち、外底高台内に「宣徳年造」の文字が記されている。２は龍泉窯系青磁碗で内底に「顧氏」銘の印文を持つもので、高台脇から全周に加工を施し、瓦玉となしている。３は緑褐釉をかけた中国製陶器の灯盞破片で受け部分のみが残る。４は浅い底作りの黒釉陶器碗で、内面に黒斑のある黒鉄錆色の釉がかけられている。高台内には鉄漿がかけられている。ベトナム製品であろう。５は李朝陶器碗で、乳白色の不透明釉が全面に施釉されており、内底と高台畳付き４カ所に砂目跡が残る。６も李朝陶器細首壺で、小豆色の胎で内外面に茶褐釉が薄くかかっている。７は滑石製権破片である。上部に双方向から穿たれた穴が貫通している。

SK414（Fig.70・71）

Ｂ区第３面検出の土坑である。径 1.2m 程の円形で深さ１ｍの掘方を持つ。井戸掘方にも似るが木質は残存していない。遺物量は多くないが、Fig.71 に図示した遺物は、１が口径 9.2cm のヘラ切り土師皿で、２は口径 4.2cm の白磁小杯である。３は青磁壺の蓋で、わずかに青緑を帯びた釉が外面天井部にかけられている。４は白磁皿で、内面に線描きの花文を持ち、淡いベージュ色の透明釉が外底をのぞきかけられている。11 世紀末～ 12 世紀初頭の遺構である。

SK416（Fig.71）

Ｂ区第３面検出の土坑である。出土遺物のうち Fig.71 に示したものは、1．2が糸切りの土師皿で、それぞれ口径 9.8cm、15.2cm のものである。３は白磁碗Ⅵ類のもので、４は外底高台内に「九郎置ヵ」の墨書があり、５は高台付き白磁皿で、内底を輪状に掻き取り、外底には「林綱ヵ」の墨書がある。

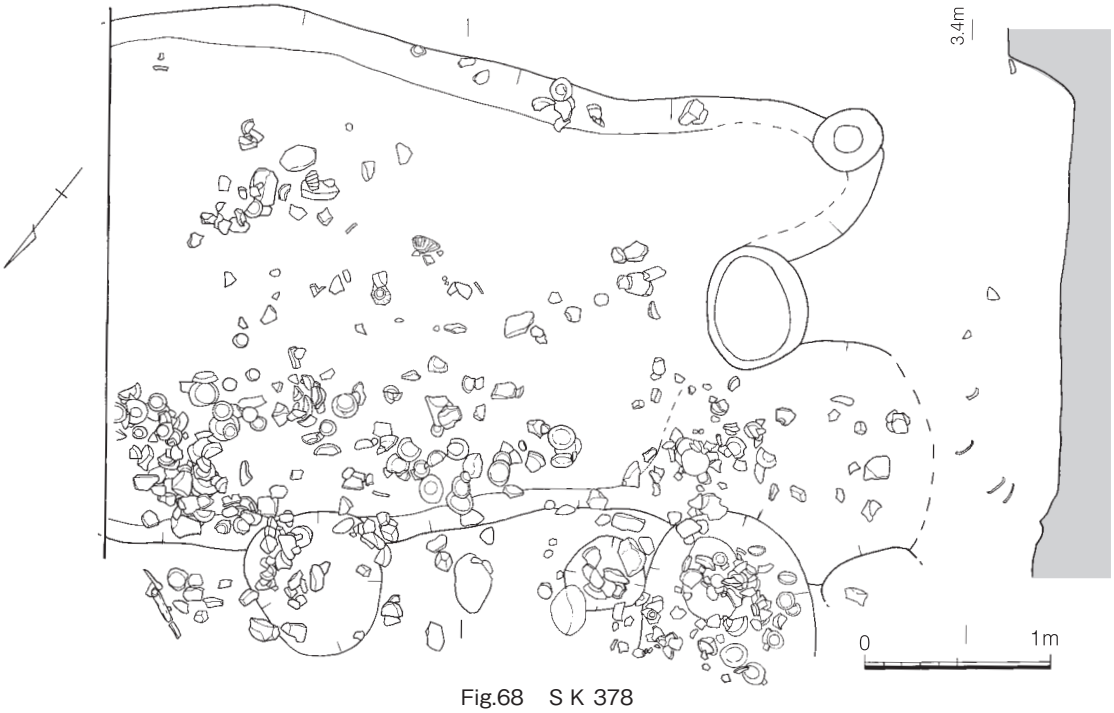


Fig.68　ＳＫ 378

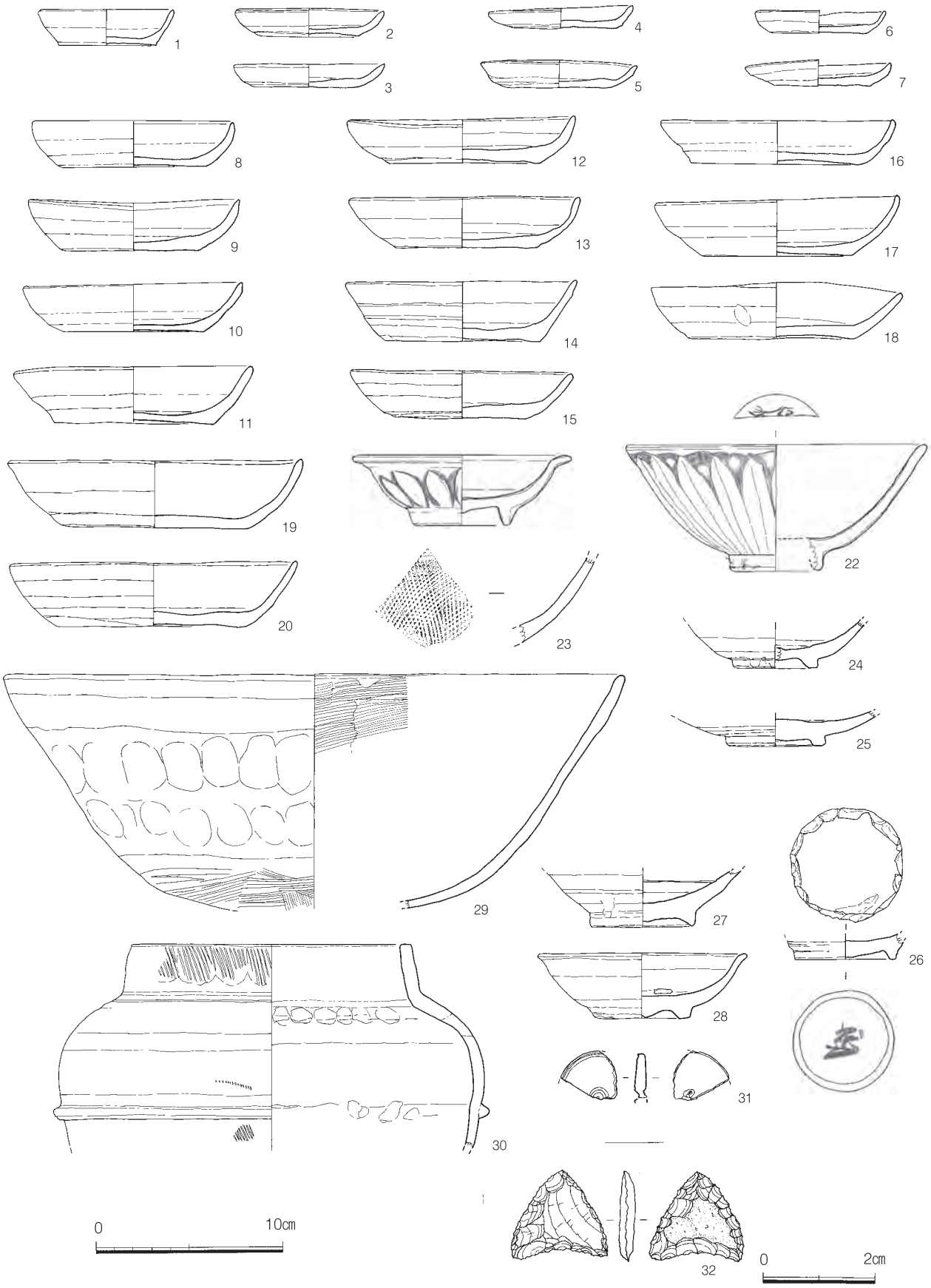


Fig69　ＳＫ 378 出土遺物

SK417（Fig.70・71）

Ｂ区第３面検出の土坑である。16世紀代の溝であるSD３７９に切られ、掘方は一部しか残らないが、一角から比較的まとまった遺物が出土している。Fig.71に示したものは、１～５が糸切りの土師皿で、口径9cmの小型のもの（１．２）、口径16cmの大型のもの（３～５）がある。６は高麗の粗製青磁の鉢で、ザックリした粗い胎土にくすんだオリーブ色不透明釉が全面にかかり、内底に砂目跡が残る。７は中国製青磁の小碗または小壺で、丸みのある体部を持ち、内面と外面体部上半にわずかに緑味を帯びた透明釉がかけられている。８は同安窯青磁碗で内外面に櫛描き文をもつ。９・10は青白磁である。９は内面に櫛描きと片切彫りの文様を描く碗で、10は合子蓋である。13世紀代の遺構であろう。

SK422（Fig.71）

Ｂ区第３面検出の土坑で、SD264に切られ全体形は不明である。遺物量は多くないが、12世紀初頭と思われる土師器がまとまって出土している。図示した遺物は、１が口径13cmの糸切り土師皿で、灯明皿として使用され体部上面に煤が付着している。２は高台付きの土師器灯明皿で、ヘラ切り土師皿に開いた脚部と杯形の上部を貼り付けたものである。３は高台付きの土師器碗で、内外面を丁寧なヘラ研磨調整をしているものである。

SK431（Fig.72）

Ａ区第３面検出遺構で、直径1.1mのほぼ正円形で90cm程の深さを持つ。形状から井戸の可能性もあるが、井側などの木質は確認できない。検出面付近でまとまって遺物が出土している。図示した遺物は、１～５は土師器皿で、口径８～９cmの小皿（1・2）と口径15～16cmの大皿（3・4）、口径19cmの高台付き大皿（5）である。５のみヘラ切りで他は糸切りである。６～８は白磁皿で、それぞれ皿Ⅲ類、Ⅴ類、Ⅵ類とされるものである。８は内面に線彫りの稚拙な蕉葉文を描く。９は高い高台を持つⅤ類白磁碗、10・11はⅣ類白磁碗である。12は磁竈窯黄釉鉄絵陶器大盤で、同一個体の破片である。内面底部に漢詩文が書かれ「・・離海上・・」の文字が読める。11世紀末～12世紀初頭の遺構である。

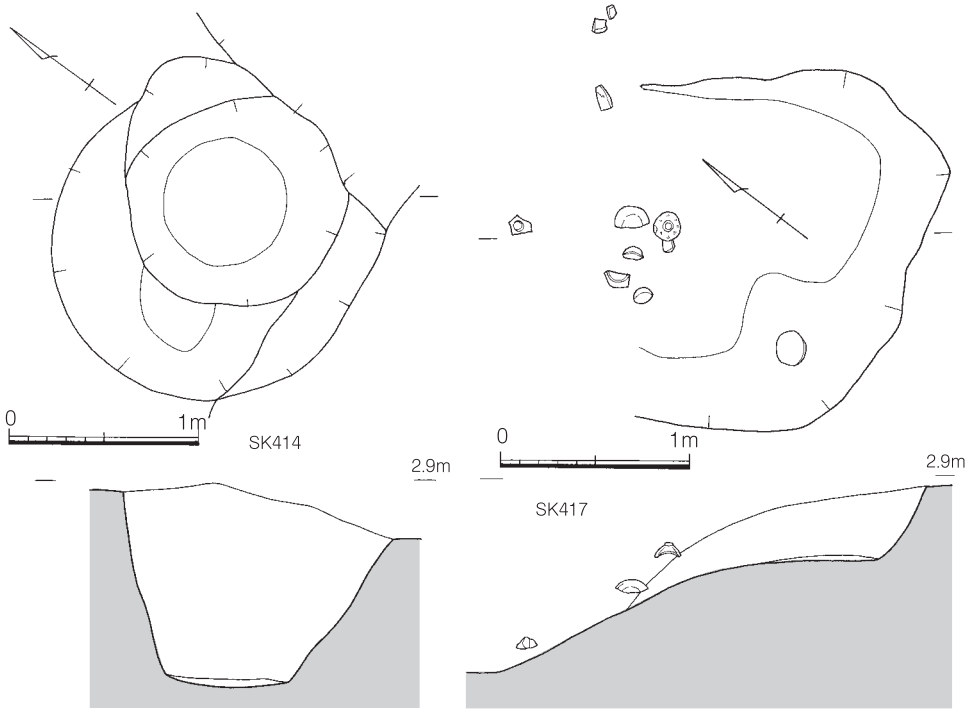


Fig.70　ＳＫ 414・417

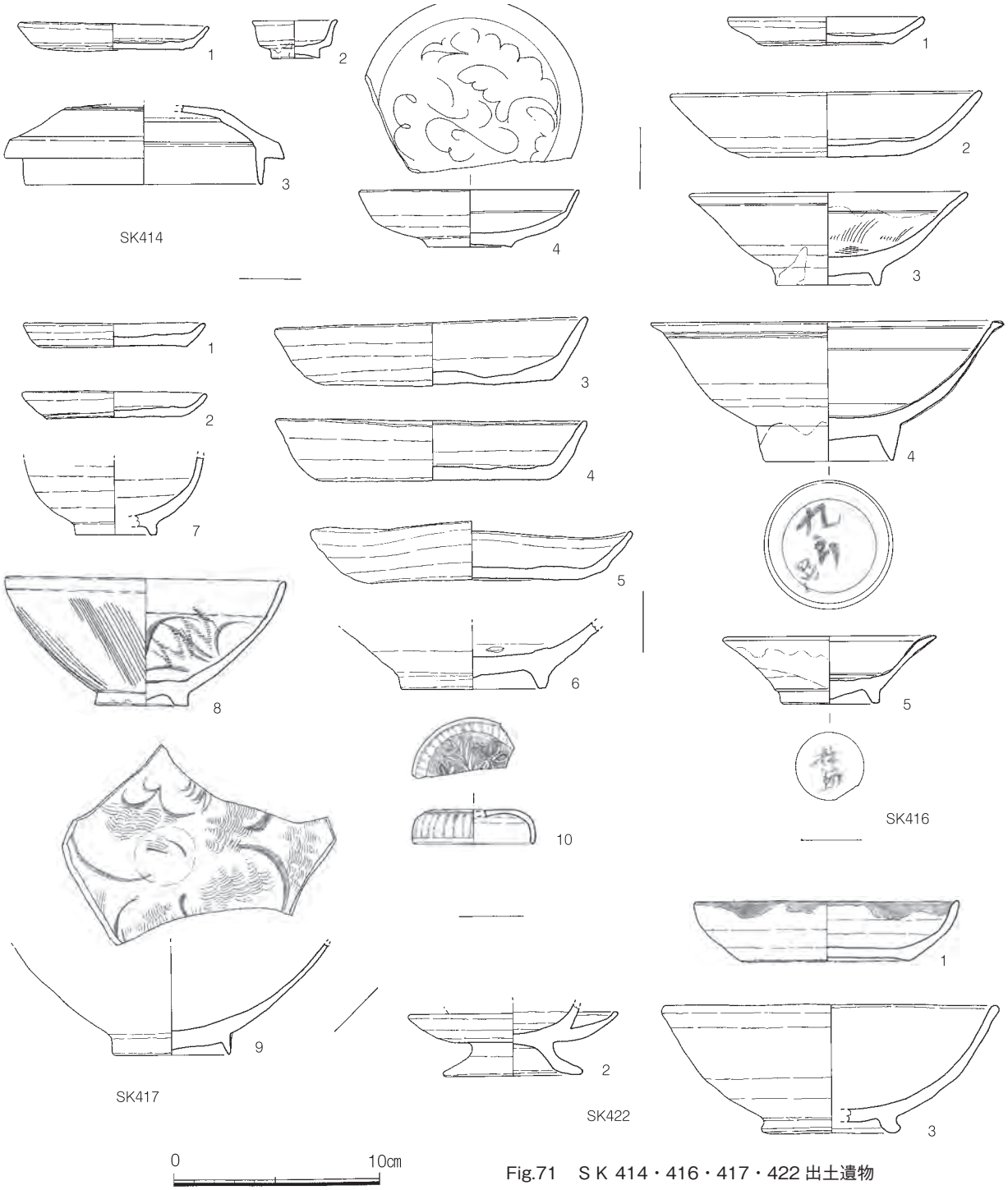


Fig.71　ＳＫ 414・416・417・422 出土遺物

SK437（Fig.73）

Ａ区第３面検出の径 1.5m 程の不整円形土坑で、1.1m 程の深さを持つ。埋土中に焼土、灰など火を焚いた痕跡があり、その中から図示したような遺物が出土している。１は磁竈窯系陶器の土鍋で、７角形に面取された取手と注口が付けられている。取手の上面にはさらに柄を留めるための穴が開けられ、内面にのみ茶褐釉が施されている。２は同じく磁竈窯陶器の黄釉鉄絵盤で、内底に右向きの龍が描かれている。この絵に類するもので、左向きの龍文盤が博多駅･築港線第２次調査で出土している。11 世紀末～ 12 世紀初頭の遺構である。

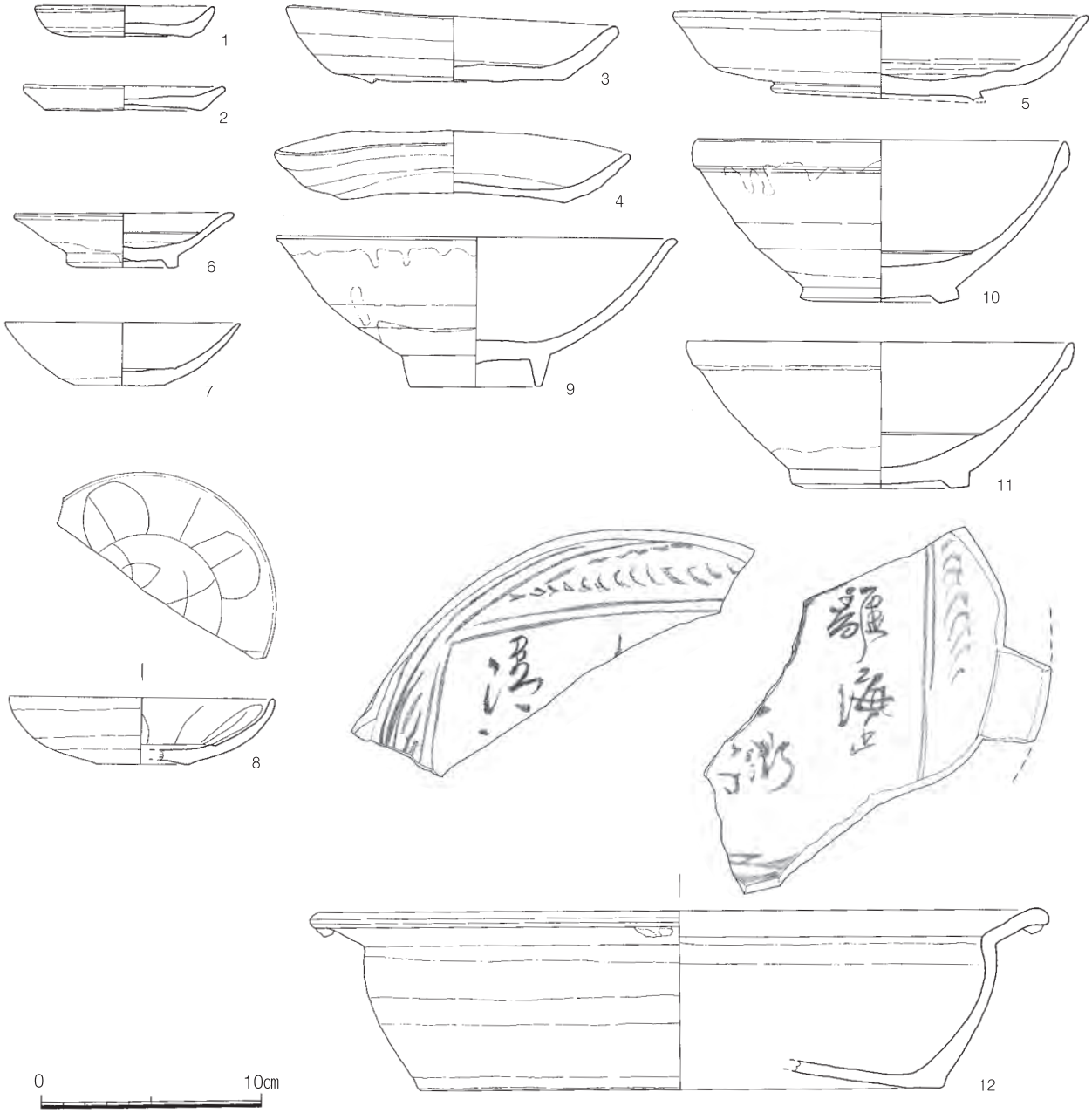


Fig.72　ＳＫ 431 出土遺物

SK484（Fig.73）

Ａ区第４面検出の径 0.8m、深さ 0.6m のほぼ正円形をした土坑で、遺物量は少ないが古代のものが中心である。図示した遺物は新羅陶質土器盤口壺で、胎は薄く、表面は黒灰色で瓦のような艶をもつが、胎の中心部は小豆色を呈している。

SK520（Fig.74）

Ａ区第４面検出の土坑で、周囲を他の遺構に切られ掘方は不明瞭である。図示したほぼ完形の土師器杯が出土している。内底を押し出して丸みのある底を作り出し、外面体部下半から外底にかけて丁寧なヘラ研磨を施している。古代の遺構である。

SK522（Fig.74）

Ａ区第４面の調査区北東端壁に接して検出されて土坑である。遺物量は少ないが、ここからは 11

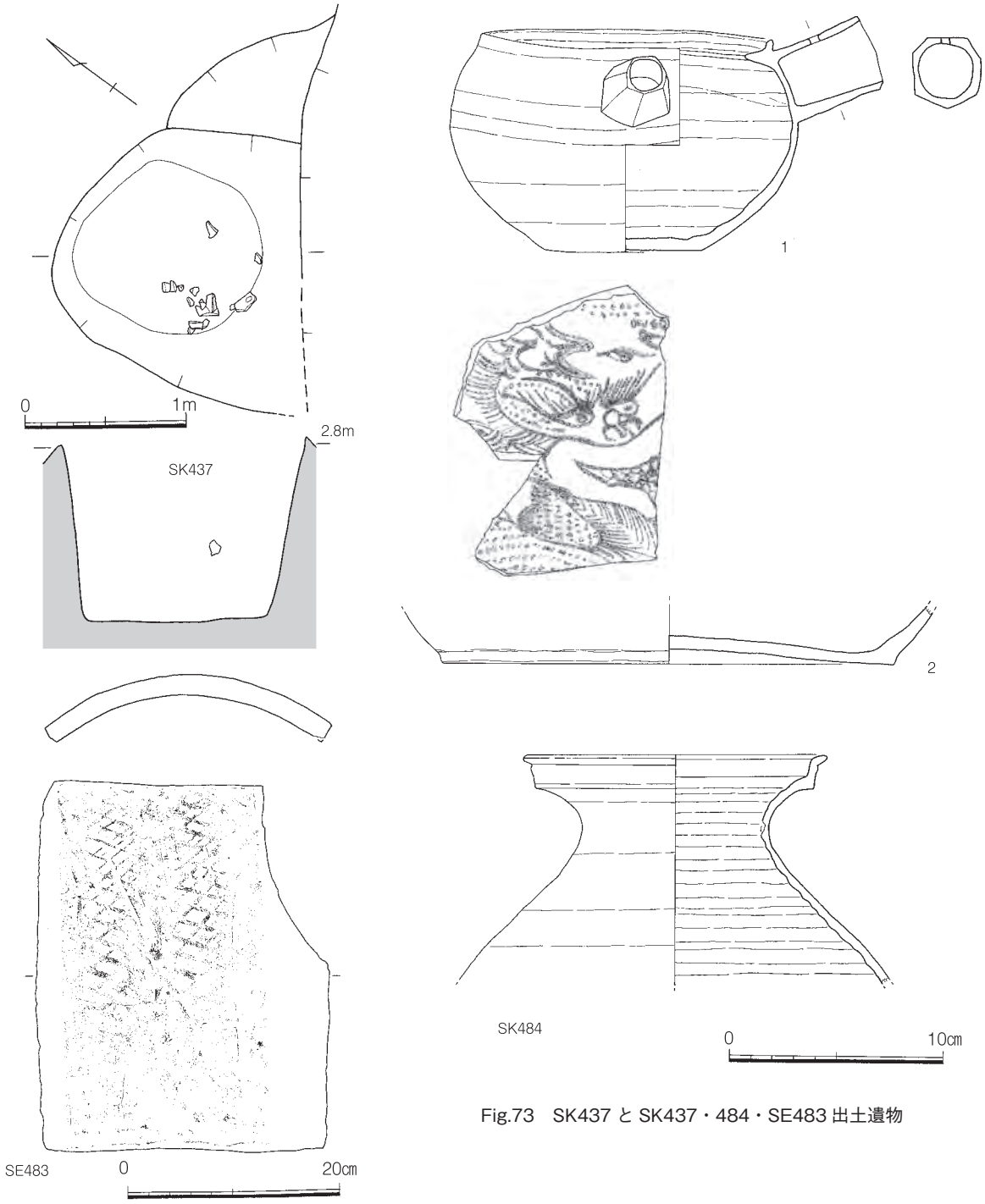


Fig.73　SK437 と SK437・484・SE483 出土遺物

世紀末～ 12 世紀初頭の遺物に混じって、図示した石製巡方が出土している。黒色の石材を用い、4.2 × 3.85cm、厚さ 0.7cm の長方形で、角の部分はすべて面取され、下半に裏面から幅の狭い溝状の穴があけられている。表面は丁寧な研磨でタイルと見まごうような光沢を持つ。上下両面も丁寧な研磨がなされているが、裏面と両側面は粗い研磨のままである。裏面には双方向からあけられた着装用の綴じ穴が四隅にある。きわめて精巧なものである。

調査地点に近い祇園町交差点を中心とした地域は、古代の官衙域と考えられており、この資料もそれ傍証するものである。

SK530（Fig.74）

A 区第 4 面検出の長径 1.2m、短径 1.0m、深さ 0.8m の土坑である。遺物量は少ないが、図示した 2

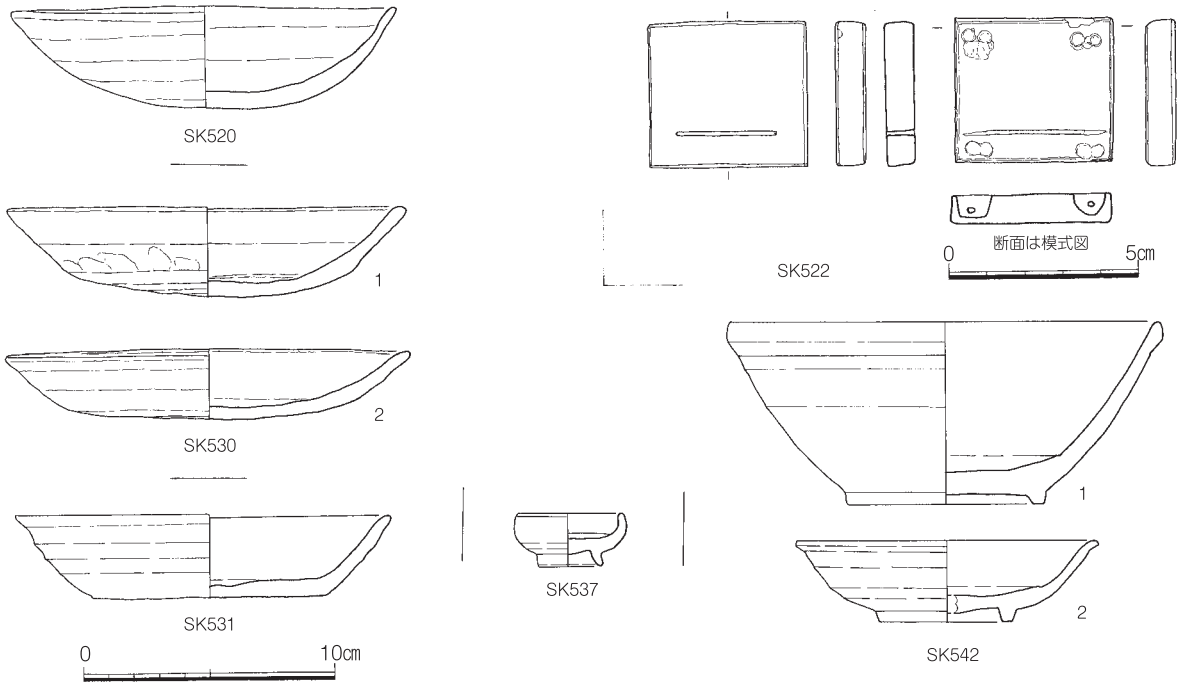


Fig.74　ＳＫ 520・522・530・531・542 出土遺物

点の完形の土師器皿が出土している（１・２）。いずれも口径 16cm のヘラ切り底で板目が残り、内底を押し出すように整形し丸みを持つ。両者ともに内面を丁寧に研磨し、ヘラ状工具の痕跡が放射状に残っている。古代の遺構である。

SK531（Fig.74）

A 区第４面検出の土坑である。SD264 に切られ全体形は不明であるが、ほぼ長径 1.2m の円形で、深さ 20cm ほどと浅い。遺物量は少なく底面から１点の完形の土師器皿が出土している。口径 14cm で糸切り底である。

SK537（Fig.74）

A 区第４面検出で、径 0.6m、深さ 0.4m の円形小土坑である。遺物量は少なく、図示した白磁小杯が出土している。

SK542（Fig.74）

A 区第４面検出で、長軸 1.3m、短軸 0.9m、深さ 0.4m の長方形の土坑である。遺物は少なく、図示したⅣ類白磁碗（１）、白磁皿（２）が出土している。

井戸

博多遺跡群では長期にわたる人々の生活の結果として多くの井戸が掘削され、狭い範囲の調査でも相当数の井戸が検出されるのが常である。A・B 区でも確認できた井戸だけで 56 基ある。また井筒の木質が確認できなかったり、井戸崩壊時のくぼみが廃棄物処理に使用された場合、廃棄物処理土坑と誤認する場合もあり、井戸の実数はさらに多いものと思われる。ここでは、瓦組、コンクリート枠の近世・近代の井戸をのぞき、それ以前のものについて述べる。

SE149（Fig.75・76）

A 区第２面西側で検出した。径５ｍを超す大きな掘方を持つ。井側構造は結桶で、最下段の径 82cm の結桶のみが残る。最下面の標高はほぼ１ｍである。井戸内には焼けた礫や瓦が大量に廃棄され、火災後の跡地整理に利用されたと思われる。隣接する SD007 でも焼けた礫や瓦の大量廃棄がみられ

15 世紀代のある時、周辺で大きな火災があったことを示している。Fig.76 に図示した遺物は、１～11 が糸切り土師皿で、口径 7.5 ～ 9.0cm の小皿（１～４）と 12.0 ～ 13.0cm のもの（５～ 11）である。11 は灯明皿として使用している。12・13 は唐草文を持つ軒平瓦、14 は三つ巴文の軒丸瓦である。15 は白磁碗の底部破片で高台脇を打ち欠き瓦玉としており、高台内には「謝□」の墨書がある。16 は明染付の大皿破片である。17 は李朝青磁の碗で、灰色硬質の胎に、畳付きをのぞきオリーブ色の不透明釉がかけられ、見込みと畳付きに砂目跡が残る。18 は板状の滑石製品で両面の中央に浅い溝を作っている。碇石のミニチュアであろうか。

SE160（Fig.77）

A 区第２面西側で検出した。攪乱土坑２６に大きく切られ、径 1.0 ～ 1.1 mのほぼ円形の掘方を持ち、井側の木質は遺存していなかったが、結桶だったと思われ、最下面は円形で径は 80cm である。最下面の標高は 1.3 mである。図示した遺物は、１が土師質に近い陶器で、高い高台を持ち開き気味に立ち上がる体部に透かしが空けられているものである。火舎または風炉の類であろう。２は底径 5cm の糸切り底の土師器であるが、器高が 3.5cm と高く、体部は丸みを持って口縁部にかけてすぼむ。

SE219（Fig.77）

A 区第２面西側で検出した。上面を攪乱土坑７と SD213 に切られ、SE253 に隣接する。検出面での井側径は 0.9m、最下面で 0.7m の円形で、最下面標高は 1.05m である。井側の構造は結桶で、木質の一部が遺存していた。最下面に完形の天目碗（４）が置かれた状態で出土し、破片で出土した白磁（１～３）も完形に接合できた。井戸廃棄に伴う祭祀であろうか。１がⅤ類白磁碗、２がⅣ類白磁碗、３がⅥ類白磁皿で口縁の欠損部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものである。また、この皿の外底には「楊」と思われる墨書がある。４は体部が直線的に外方に開く天目碗で、黒釉をベースに茶褐色に発色した禾目が全体を覆う。このほか「陳」の墨書がある白磁碗、土錘などが出土している。11 世紀末～ 12 世紀初頭の遺構である。

SE257（Fig.77）

井側は直径 0.65m の小型の結桶で最下面近くに木質が遺存している。井側最下面の標高は 1.2m である。図示した遺物は、井戸本体最下面から出土したものである。1 が薄胎の青白磁碗で、内面に櫛描き、片切彫りの細かい文様を持つ。２・３は糸切り土師皿完形品で、口径 9.2cm の器高が低いものである。４は磁州窯白磁小杯の底部破片で、見込みに黒の捩花がえがかれている。５は白磁小壺の蓋、６は厚みのある土師器皿で、外面は明肌色であるが胎の内面は黒色を呈す。外底に明瞭な墨痕があるが判読できない。12 世紀前半の井戸である。

SE283（Fig.78）

A 区第２面検出である。近代コンクリート枠井戸７に切られている。結桶と思われ、径 0.7m の円形を呈す。湧水のため最下面までの掘り下げはできなかった。図示した遺物は掘方から出土したヘラ切りの高台付き土師皿である。

SE322、323、342（Fig.78）

A 区第３面検出で３遺構が隣接している。SD211、213 に切られる。それぞれ 0.9m、0.6m、0.4m の円形井側を持つ。いずれも結桶構造と思われ、SE322 と 342 には木質が残る。最下面標高はそれぞれに 1.2m、1.4m、1.5m である。

SE338（Fig.78）

A 区第３面検出で上面は削られ、最下面のみ遺存している。径 0.58m の結桶構造で、遺存状況は悪いが木質が確認できた。内面には大礫が遺棄されている。最下面標高は 1.35m である。

SE386（Fig.78）

A 区第 4 面検出で、古代溝 SD471 を切る。2.1 × 1.6m の掘方を持ち、径 45cm の結桶と思われる井側構造と思われるが、木質は遺存していない 。最下面標高は 1.1m である。

SE388（Fig.79）

A 区第 3 面検出で、北東側を SD264 に切られるが、径 2.5m の掘方に径 55cm の結桶の井側構造を持つが、遺存状況はよくないものの木質が確認できる。最下面標高は 1.0m である。内面には大礫が遺棄されており、最下面から図示した遺物が出土している。1 は銅製十一面観音像で鋳造した本体に精巧な彫りが加えられ、蓮座には銀象眼がみられる。2 は輝緑凝灰岩の硯で、硯面には墨が付着して

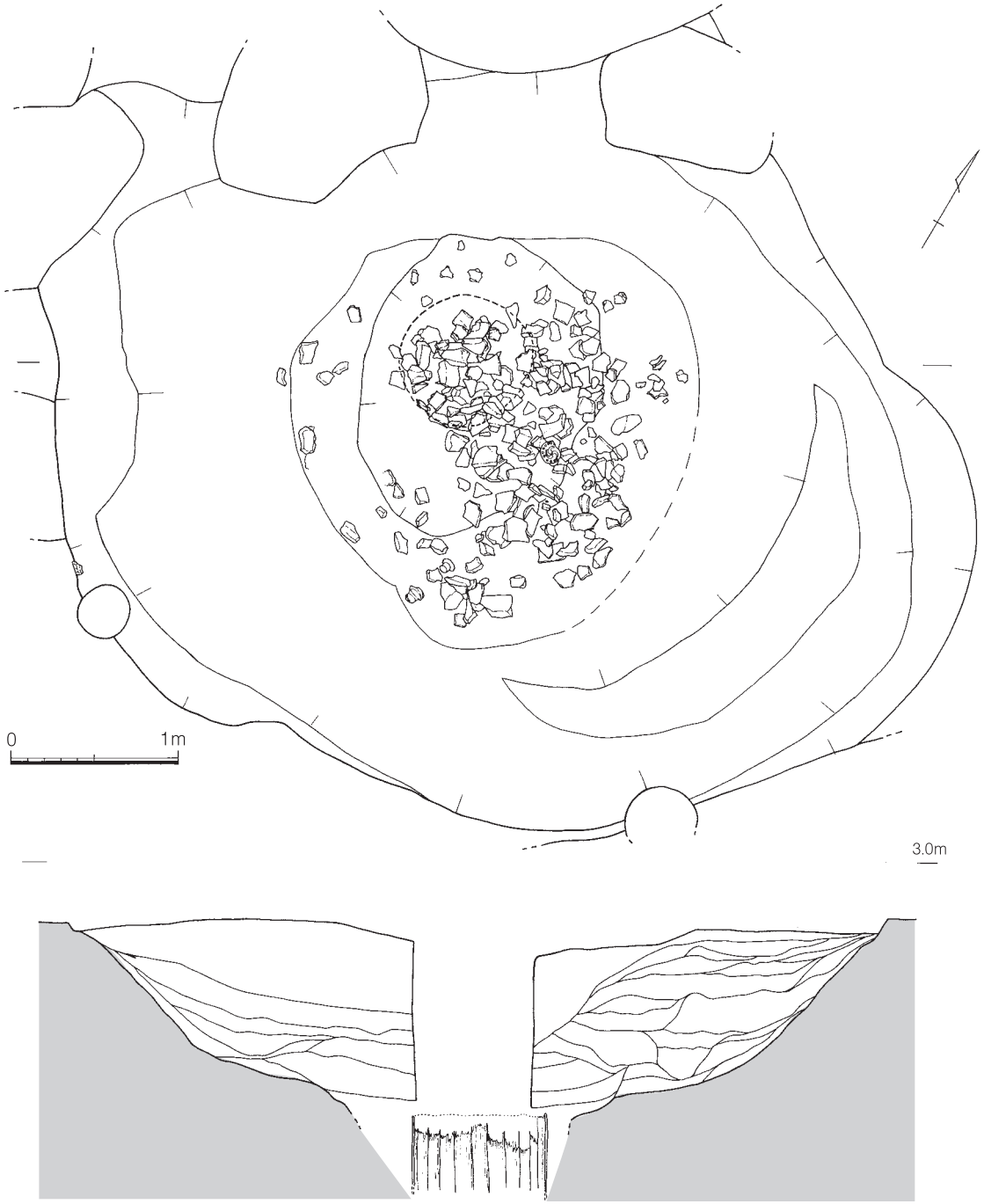


Fig.75　S E 149

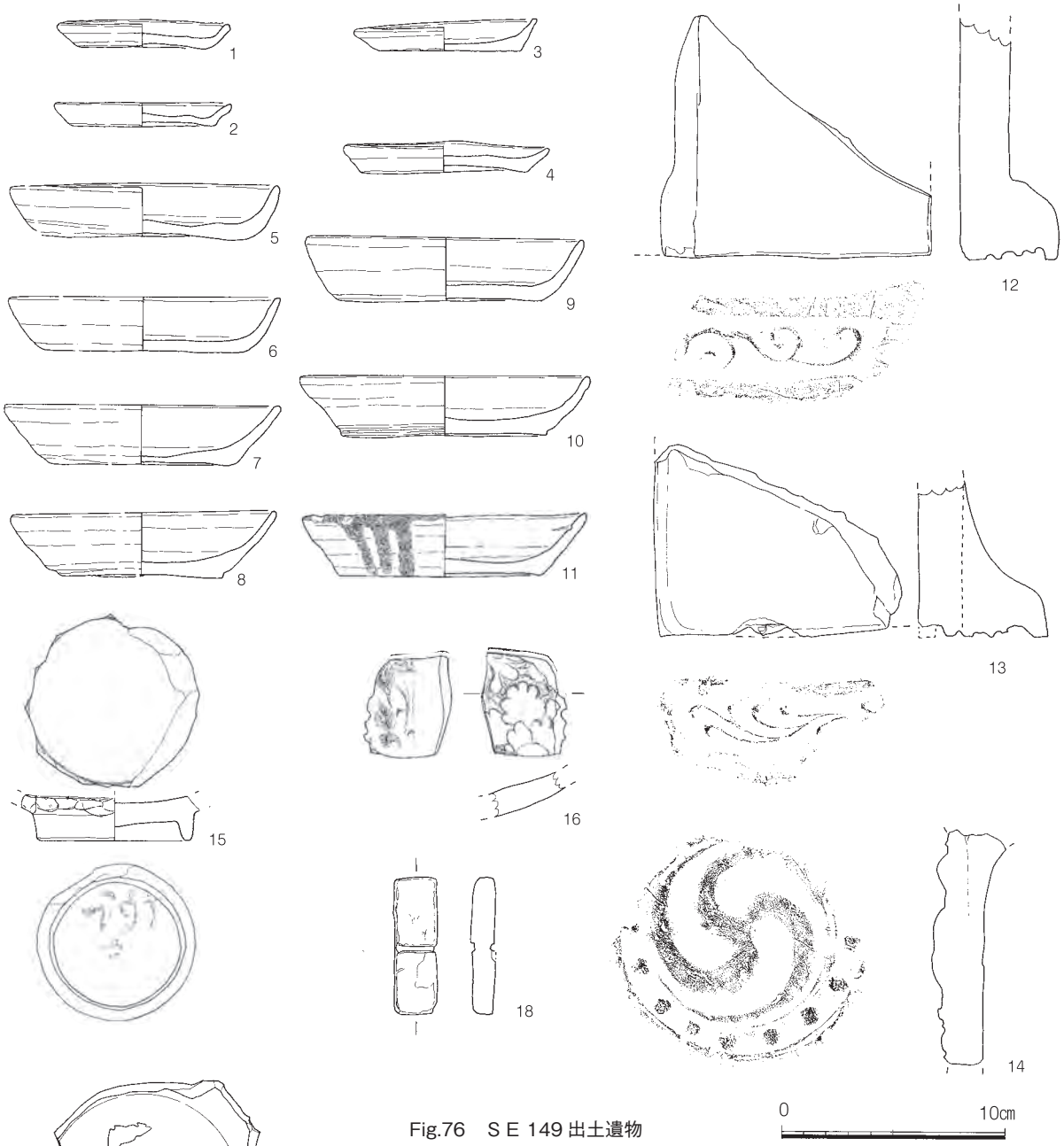


Fig.76　ＳＥ 149 出土遺物

いる。３は黒褐釉の広口壺で頸部下に沈圏線があり、口縁と外底に目跡が残る。小破片のため図示していないが龍泉窯蓮弁文碗などもあり、14世紀代の井戸か。

SE397、SE408、SE418（Fig.80）

それぞれに 65cm、60cm、70cm の結桶の井側構造を持ち、最下面標高は 0.8m、1.15m、0.9m である。SE397、408 は遺存状況はよくないものの木質が確認でき、内部に大礫が遺棄されている。SE397 で礫に混じって龍泉窯青磁碗破片などが出土しており、13 世紀代に位置づけられる。SE408 の最下面からは図示した無文の龍泉窯青磁皿（１）と口禿の白磁皿（２）の完形品が出土している。１は灯明皿として使用され、口縁部の小さな破面に煤が付着している。14世紀代に位置づけられる。SE418 の最下面からは図示した茶褐釉の双耳壷の完形品が出土している。12 世紀前半代の遺構か。

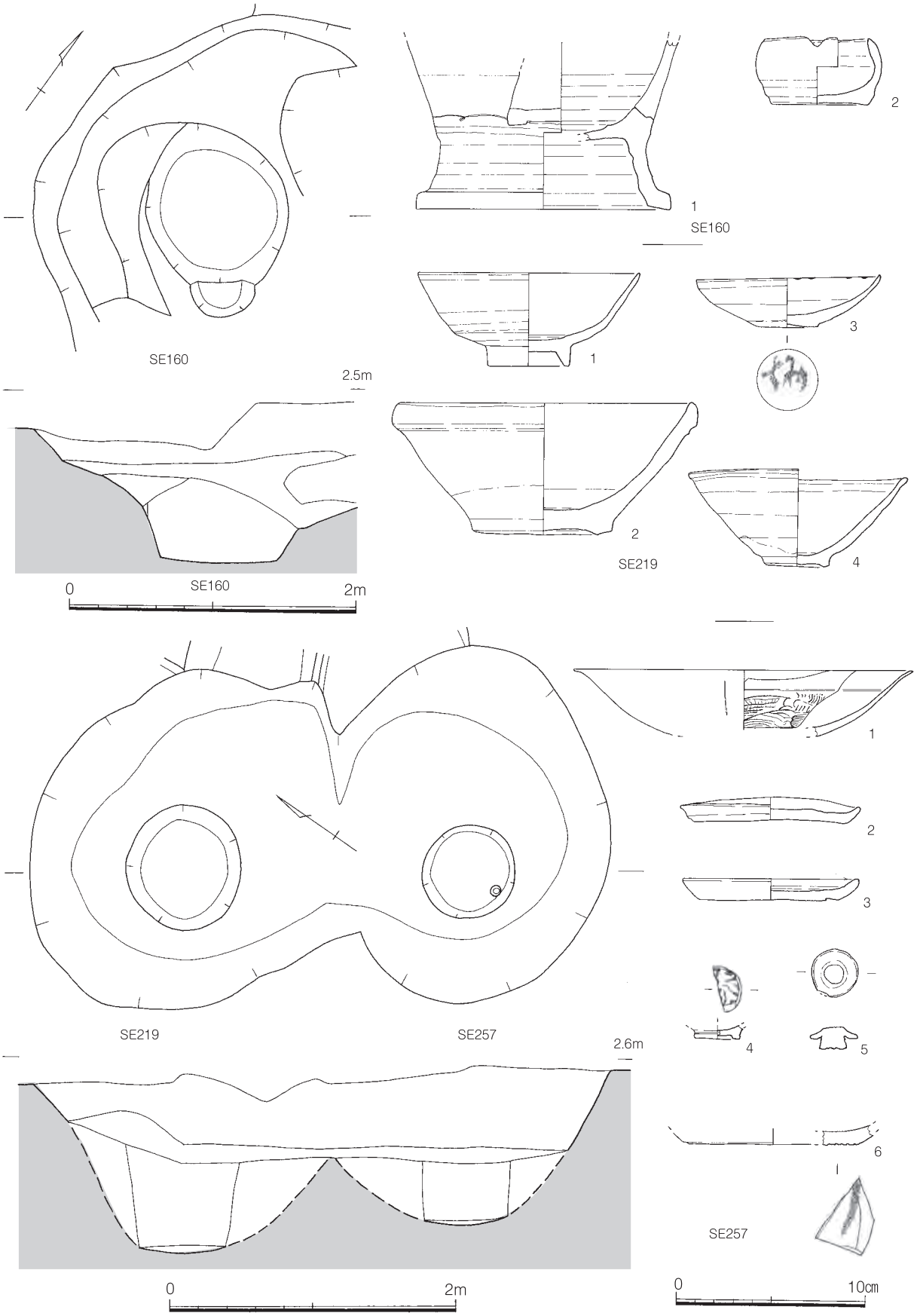


Fig.77　ＳＥ 160・219・257 と出土遺物

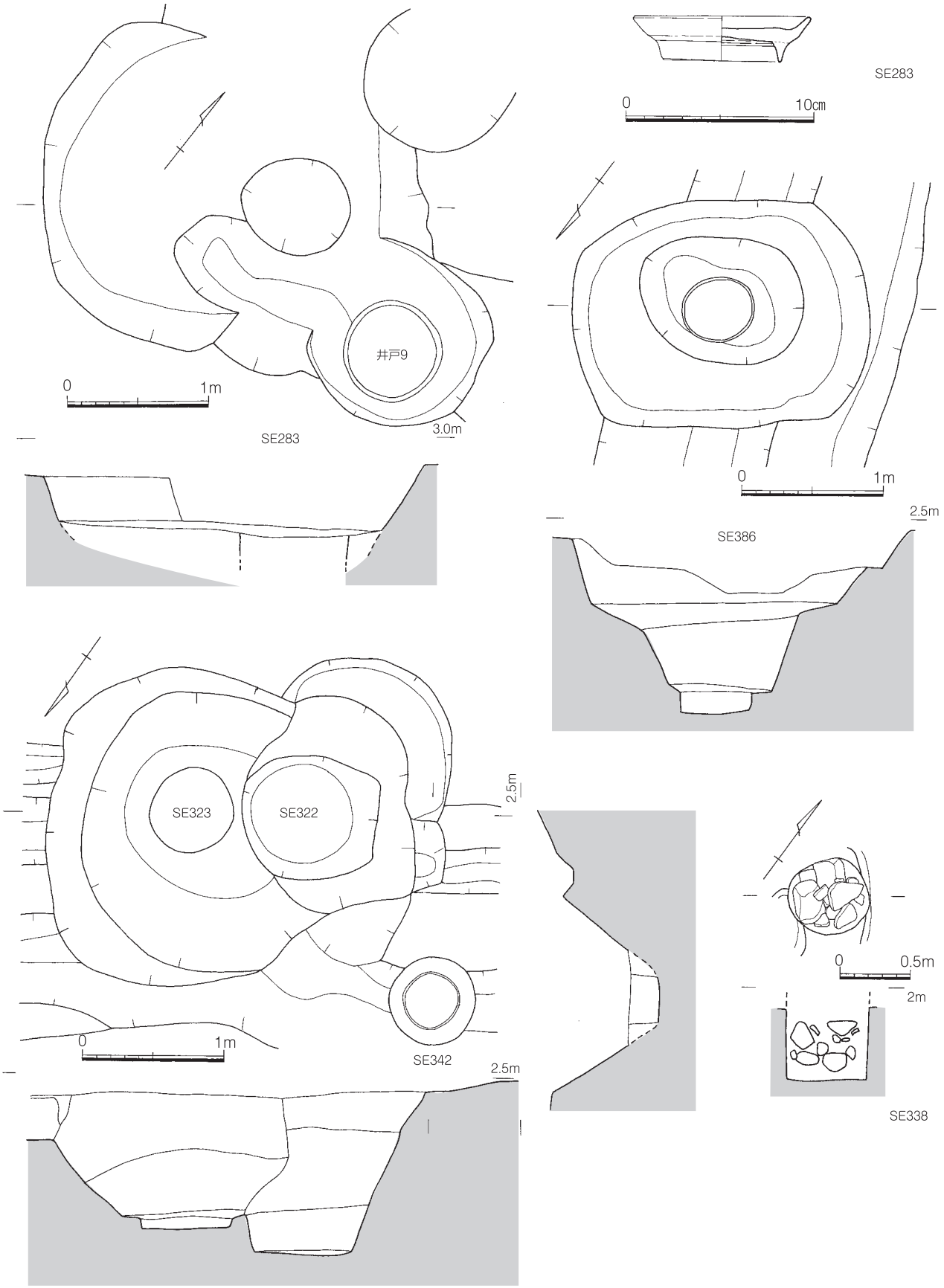


Fig.78　ＳＥ 283・322・323・338・386 とＳＥ 283 出土遺物

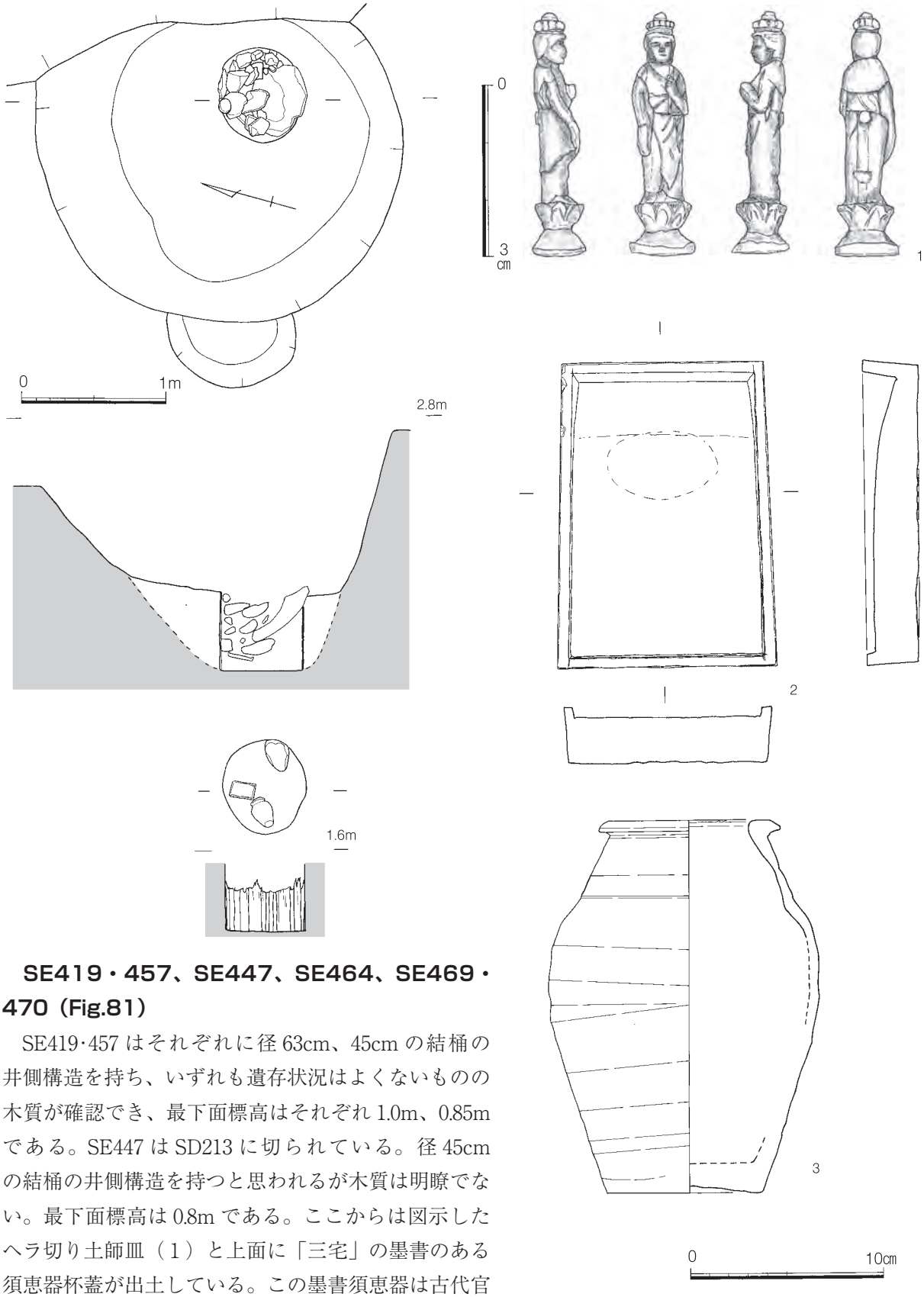


Fig.79　ＳＥ 388 と出土遺物

SE419・457、SE447、SE464、SE469・470（Fig.81）

SE419･457 はそれぞれに径 63cm、45cm の結桶の井側構造を持ち、いずれも遺存状況はよくないものの木質が確認でき、最下面標高はそれぞれ 1.0m、0.85m である。SE447 は SD213 に切られている。径 45cm の結桶の井側構造を持つと思われるが木質は明瞭でない。最下面標高は 0.8m である。ここからは図示したヘラ切り土師皿（1）と上面に「三宅」の墨書のある須恵器杯蓋が出土している。この墨書須恵器は古代官衙との関連を彷彿させるものである。SE464 も径 0.7m の結桶の井側構造を持つが木質は明瞭でなく、内部に礫が遺棄されている。最下面標高は 0.8m である。

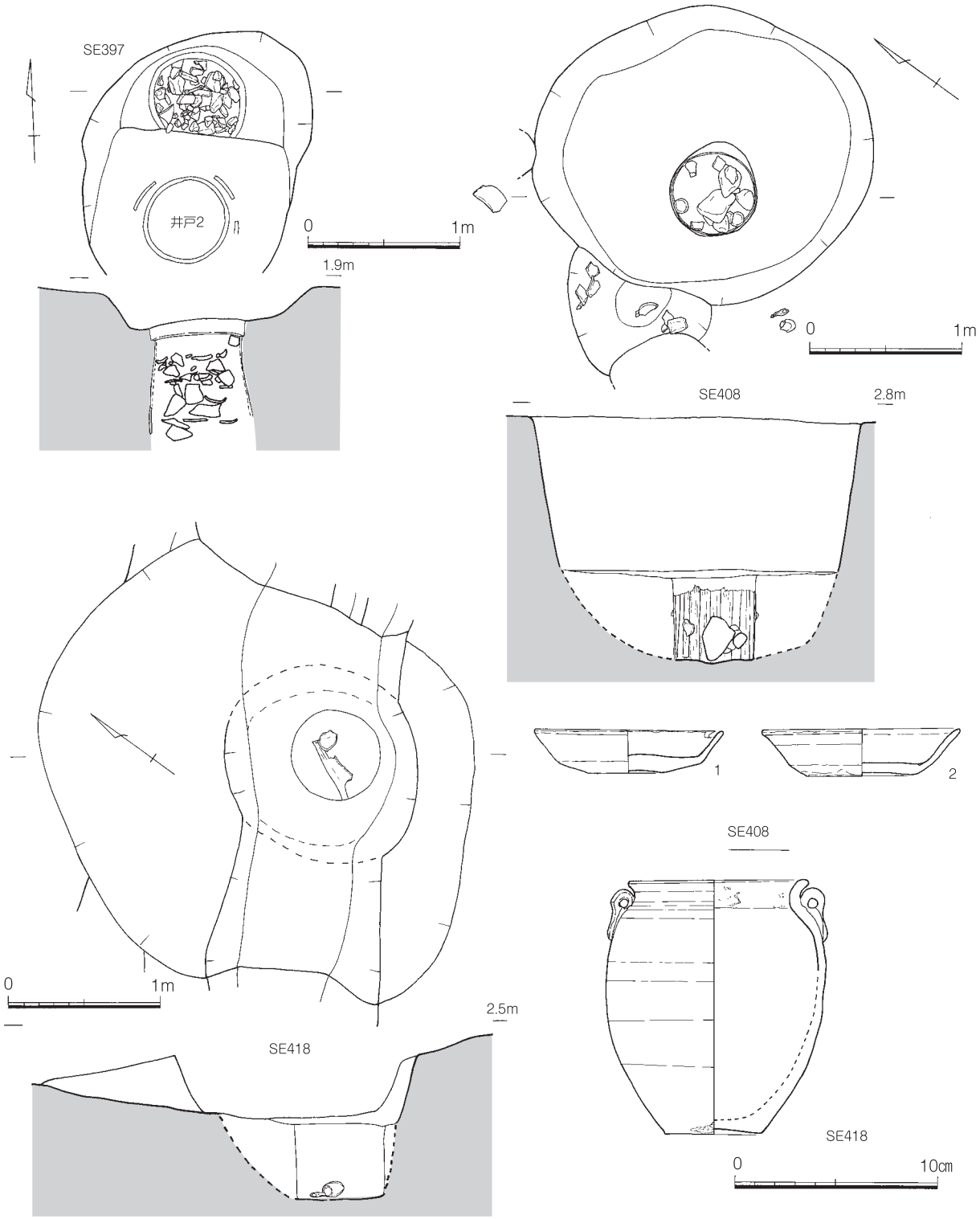


Fig.80　ＳＥ 398・408・418 とＳＥ 408・418 出土遺物

SE469 も径 60cm の結桶の井側構造を持つと思われるが木質は明瞭でない。最下面標高は 1.35m である。SE470 は SE469 に切られる。SE470 も径 60cm の結桶の井側構造を持ち木質は残る。最下部水溜には曲物が使用されている。最下面標高は 1.5m である。

SE483、SE497・498、SE504、SE507・508（Fig.82）

SE483 はすり鉢状の掘方最下面に曲物を使用したものである。上面に Fig.73 に示した格子目叩き平瓦と礫が廃棄されている。最下面標高は 1.5m である。SE497･498 はともに結桶の井側構造を持ち、

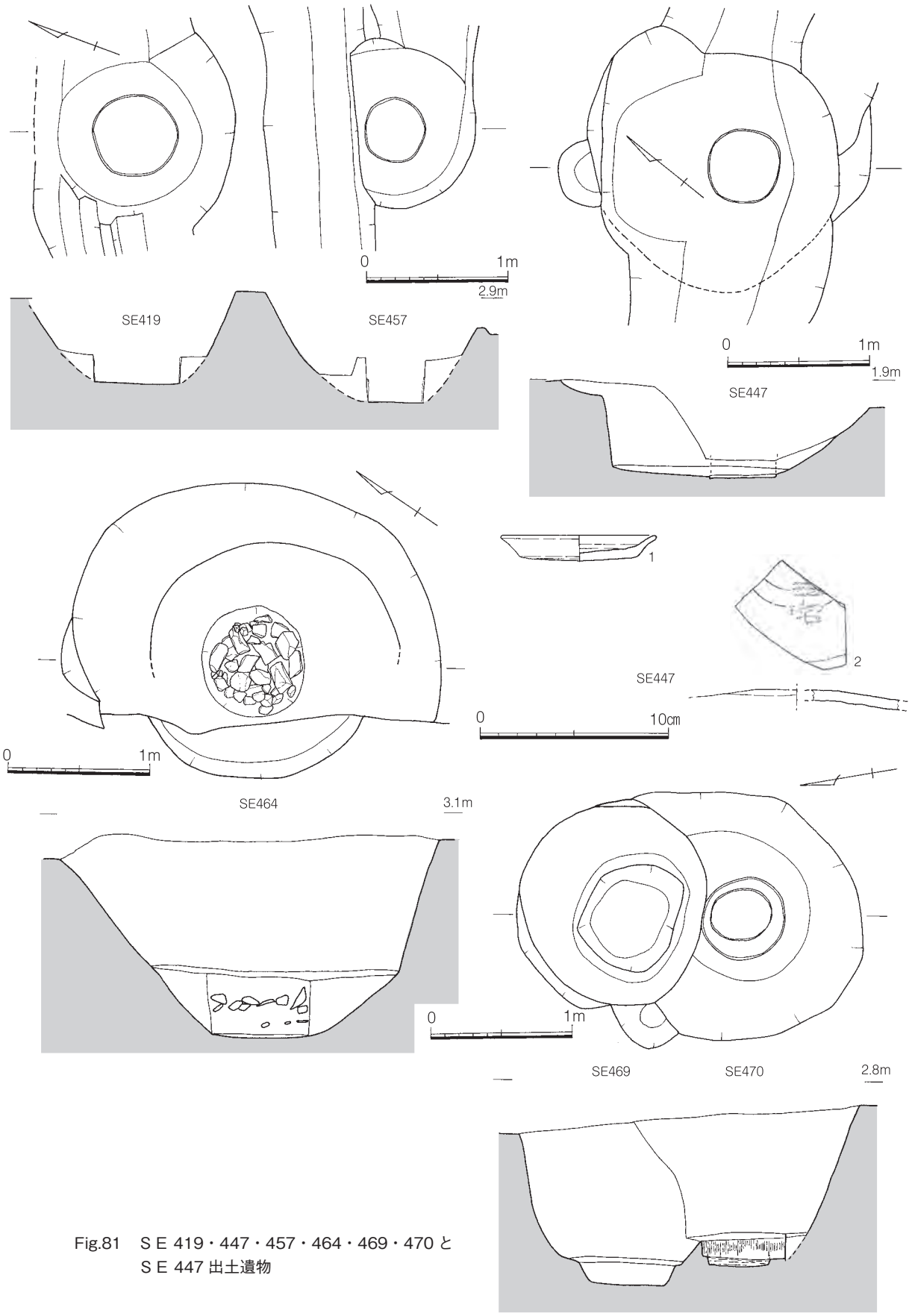


Fig.81　ＳＥ 419・447・457・464・469・470 と
ＳＥ 447 出土遺物

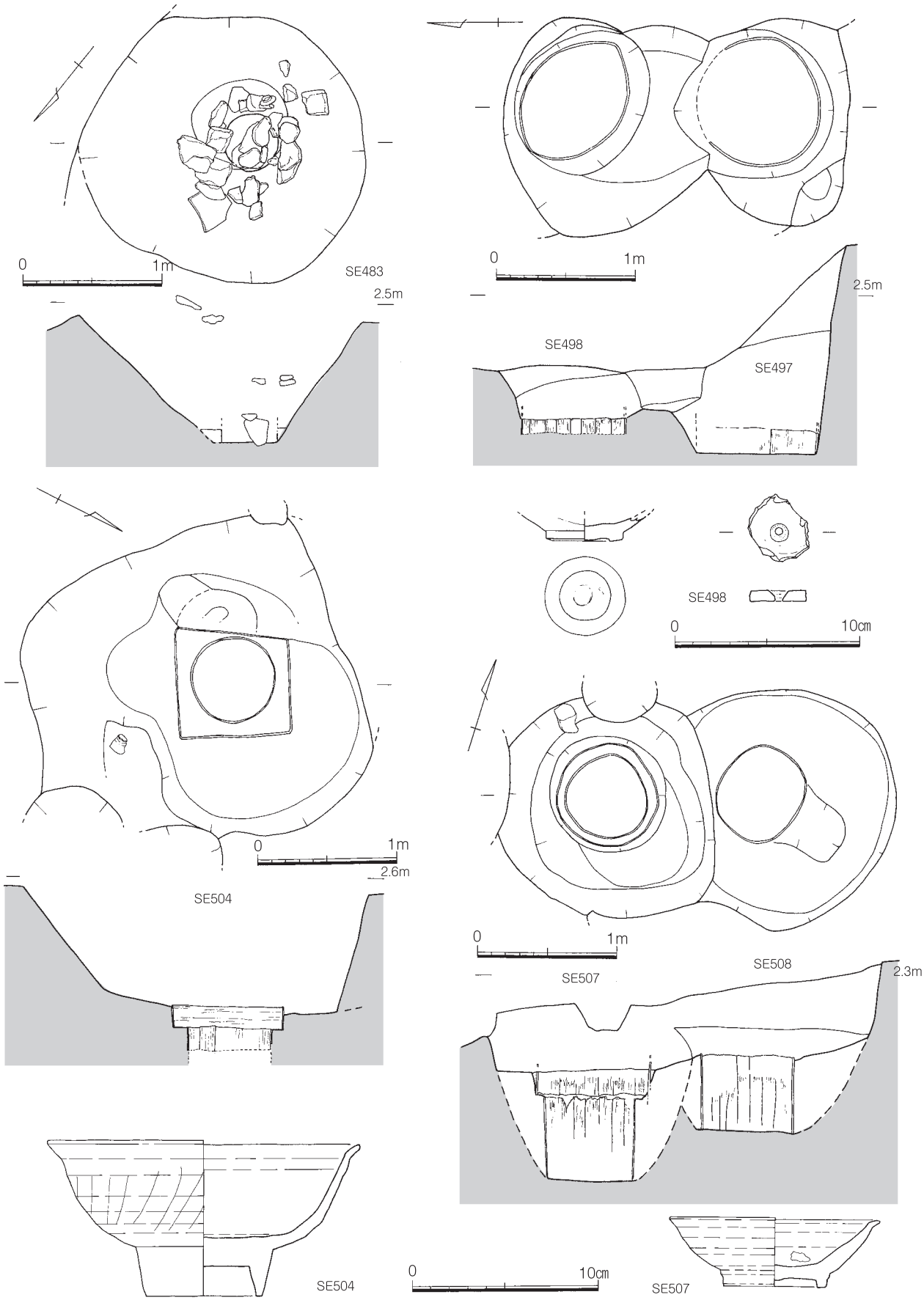


Fig.82　ＳＥ 483・497・498・504・507・508 とＳＥ 498・504・507 出土遺物

いずれも遺存状況はよくないものの木質が確認でき、最下面標高はそれぞれ 1.35m、1.5m である。SE498 からは「○」の記号を墨書した白磁皿（1）、土師皿片を利用した有孔円盤（2）が出土している。SE504 は方形井側の下面に結桶を置く構造で、Ⅴ類白磁碗が出土しており 12 世紀前半の井戸であろう。SE507･508 はともに結桶の井側構造を持ち、いずれも木質が確認でき、SE507 は２段目までの結桶が確認できる。最下面標高はそれぞれ 1.2m、1.6m である。SE507 の最下面からは図示した粗製高麗青磁皿が出土しており、艶やかな濃いオリーブ色が畳付をのぞき全面にかけられ、内底と畳付に各４カ所の砂目跡が残されている。

集石遺構

礫等を大量廃棄した遺構は多いが、土坑中に廃棄したものは土坑として処理しており、ここでは掘込を持たずに平面上に置かれたものを集石遺構として取り上げる。

SX226（Fig.83・84）

A 区第２面検出である。径 70cm の円形に扁平な円礫を整然と平坦に並べ、その周辺に破砕礫等が集積されているものである。礎石もしくは根固め石か。隣接して糸切り・ヘラ切りの土師皿が重なって出土しているが、この遺構と直接の関係はないものと思われる。図示した遺物は、李朝陶器碗で全面に透明釉が薄くかかり、赤みの強い茶色に発色する。

SX227（Fig.83・84）

A 区第２面検出である。３m × 1.5m 程の範囲で雑然と大小の焼礫が集積されているものである。礫に混じって陶磁器類も多く出土している。Fig.84 に示した遺物は、１～５が龍泉窯青磁で、１・２がともに無文の碗、３が碁笥底の菊花皿、４・５が平皿である。６・７は磁竈窯系の陶器皿で、内面と外面上半に茶褐釉がかかる。８は砂岩製の薬研である。これらのほか同安窯系青磁碗等も出土している。13 世紀後半～ 14 世紀前半の遺構か。

SX238（Fig.84）

A 区２面検出の 1.8 × 1.25 mの範囲に小振りの焼礫が集積されたものである。１は東播系の瓦質土

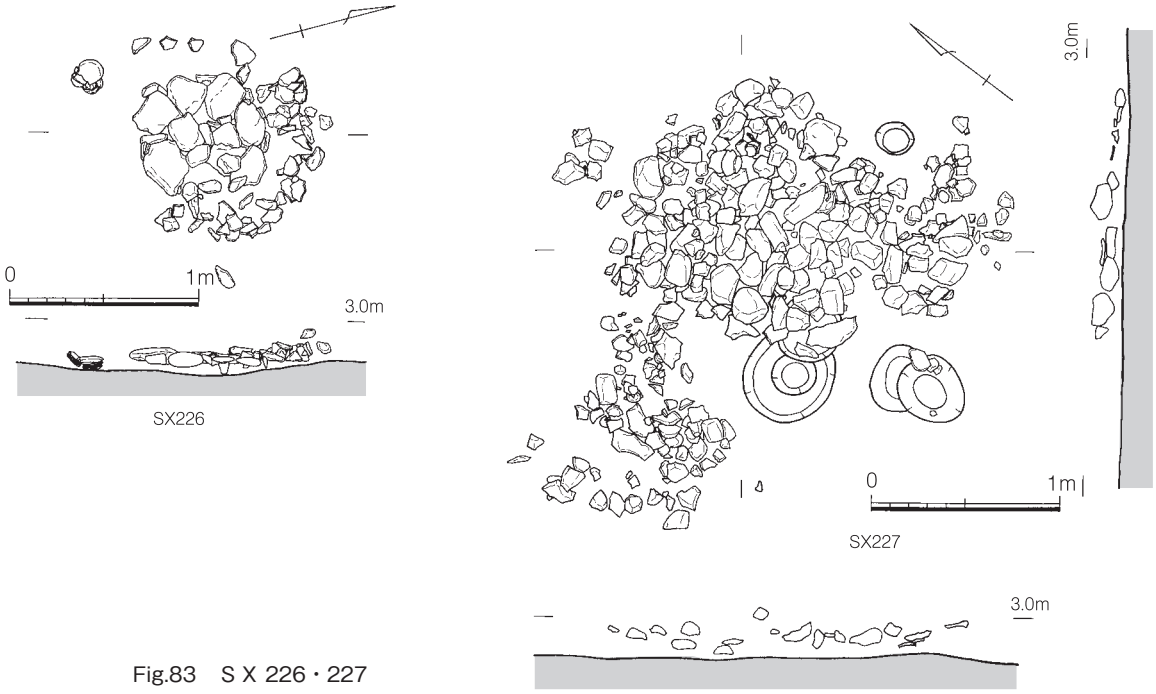


Fig.83　S X 226・227

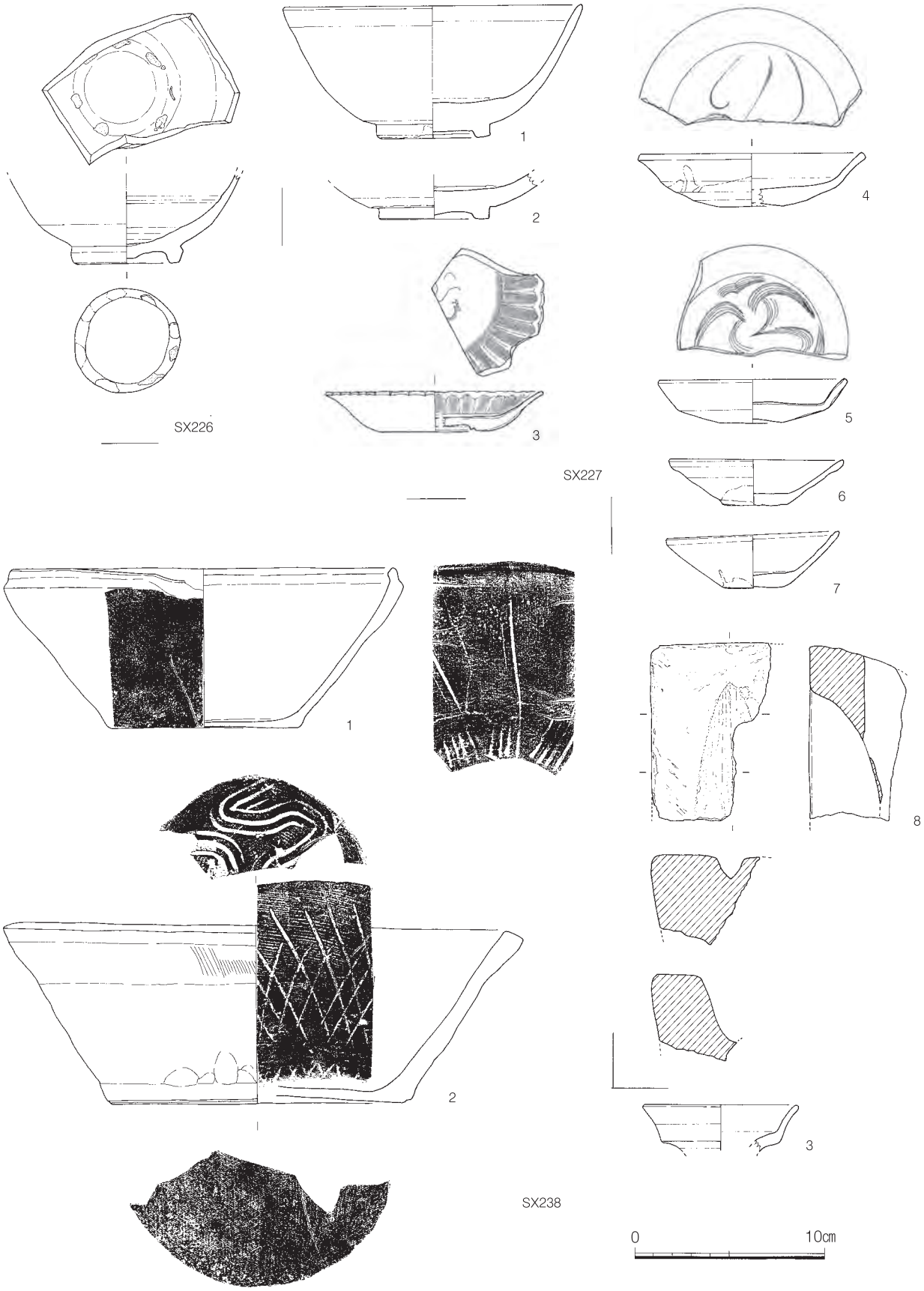


Fig.84　S X 226・227・238 出土遺物

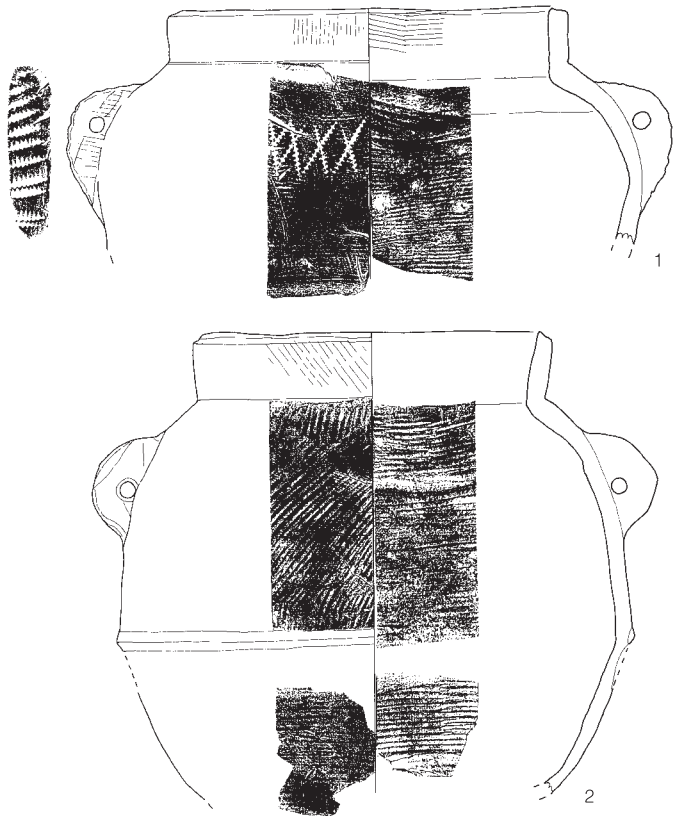
器擂り鉢であるが、二次被熱により赤化している。使用による内面の摩耗が著しい。２は瓦質擂り鉢で底径 16cm に比べ器高が低く、平たい印象を持つ。刷毛目調整の内面には網目状に交差する擂り目を作り、内底にも波状の擂り目を作っている。特異な例である。３は高麗青磁盤口瓶の口縁部破片である。15 世紀代の遺構か。

SX258（Fig.85）

SD264 の埋没過程最終段階の浅いくぼみに廃棄された焼礫群で、出土遺物の傾向も SD264 と類似する。1・2は瓦質湯釜で、いずれも短い頸をもち肩に２カ所の縦耳がつき、内外面刷毛目調整を行う。１の耳と肩部には調整具の小口を押圧した文様が施されている。３は土師質土鍋で外面を刷毛目、内面をナデ調整する。いずれも外面に煤が付着している。４は白磁壺の横型の耳破片で貼り付け部分の上面に３カ所竹管状の押文をしたものである。この破片は前時代の遺物の混入である。

SX384（Fig.85）

B 区第２面で検出した石垣状の石積みである。幅約 1m、高さ 0.5m が遺存していた。SD379 に沿っており、本来この溝の護岸であったものか。石積みの中から銅製の錠前鍵（１）や滑石製の把手付小鍋（２）が出土している。



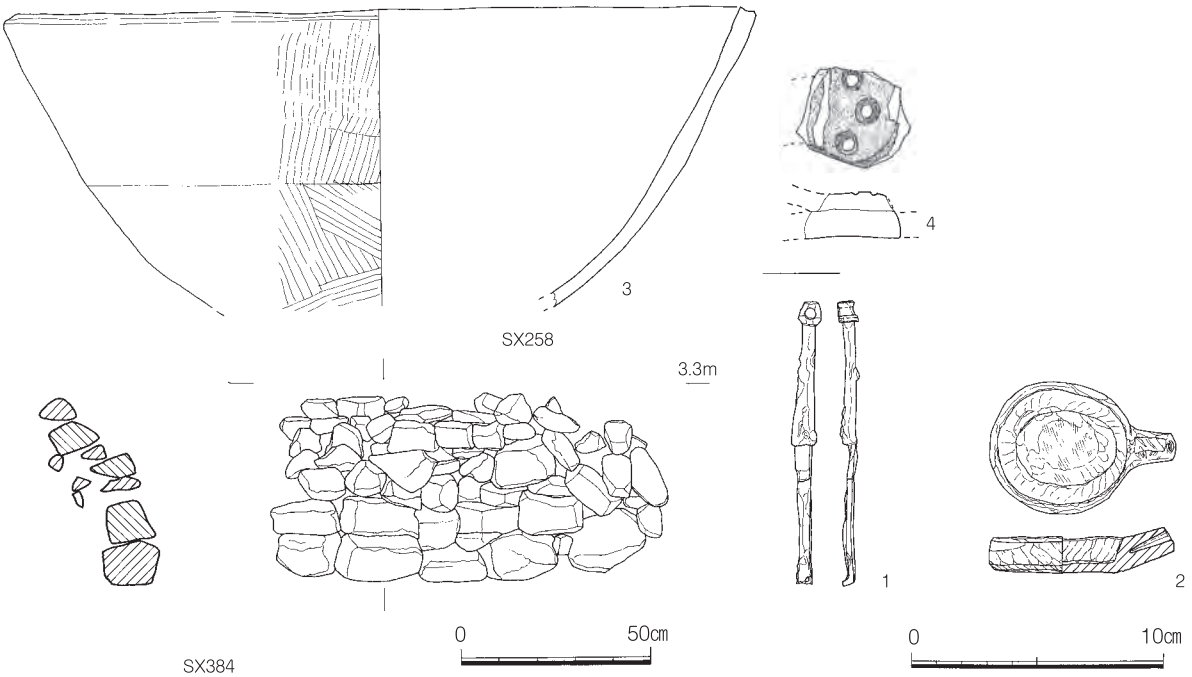


Fig.85　ＳＸ 384 とＳＸ 258・384 出土遺物

墓

A 区の第１面から２面にかけて、ほぼ 10 × 5 m の範囲に 14 基からなる墓が検出された。周辺の SK131、303 などから人骨片、供養塔が出土していることから、後世の土地整理で一部の墓は壊され、また、墓坑上面も欠失し掘方最下面のみが残っており、遺存状態は良好ではない。本来の墓域は検出範囲よりも幾分広かったものと思われる。Fig.86 のように太閤町割りの柱穴列も墓域を全く意識しておらず、中世末には通常の土地と化していたものと思われる。これらの墓の造営は、副葬銭から 15 世紀後半代に求められ、また大内系の土師皿が副葬品にあることから、当時博多を支配した大内氏に関わる墓地であろう。以下各墓について述べる。

SK001（Fig.87）

0.75 × 0.55m の長円形の墓坑で、頭骨の一部と四肢骨の一部が残るのみである。副葬品は検出されておらず、一隅に一辺 20cm ほどの平石が置かれている。

SK002（Fig.87）

直径 0.7m の円形墓坑で、桶を用いた座棺と思われる。頭骨、四肢骨が遺存している。図示した遺物のうち１は白磁小壺の蓋であるが、副葬品ではなく混入したものであろう。２は副葬品で体部が大きく開く大内系の土師皿である。

SK003（Fig.87）

直径 0.7m の円形墓坑で、桶を用いた座棺と思われる。頭骨、四肢骨が遺存している。３枚の大内系土師皿（１～３）と「永楽通寶 」４点、「皇宋通寶」１点が副葬されていた。

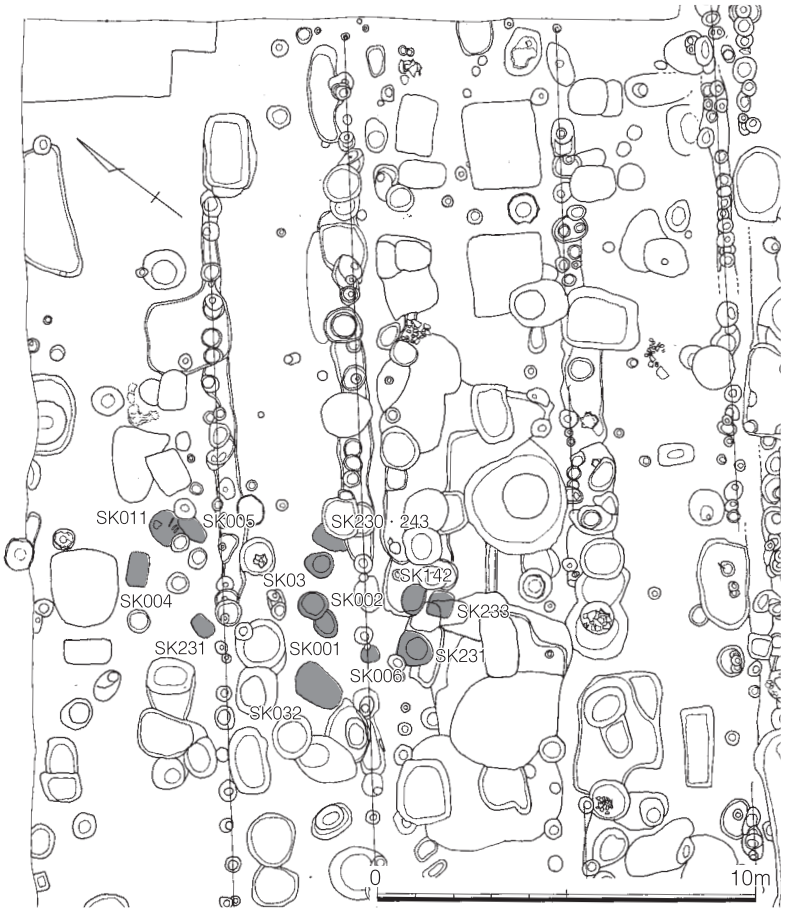


Fig.86　A 区中世墓の分布

SK004（Fig.87）

1.05 × 0.8m の長方形墓坑で、下肢骨のみ遺存している。土坑墓か。副葬品は検出されていない。

SK005（Fig.87）

0.7 × 0.55m の長円形の墓坑で、下肢骨の一部が残るのみである。副葬品は検出されていない。

SK006（Fig.88）

0.65 × 0.4m の長円形の小さな墓坑で、頭骨の一部と下肢骨の一部がわずかに残るのみである。副葬品は検出されておらず、瓦小片が出土している。

SK011（Fig.88）

0.85 × 0.65m の長円形墓坑で、浅い皿状のくぼみをなす。横臥屈葬で頭骨、四肢骨が遺存している。土坑墓か。副葬品として漆器碗１点があるが、漆膜

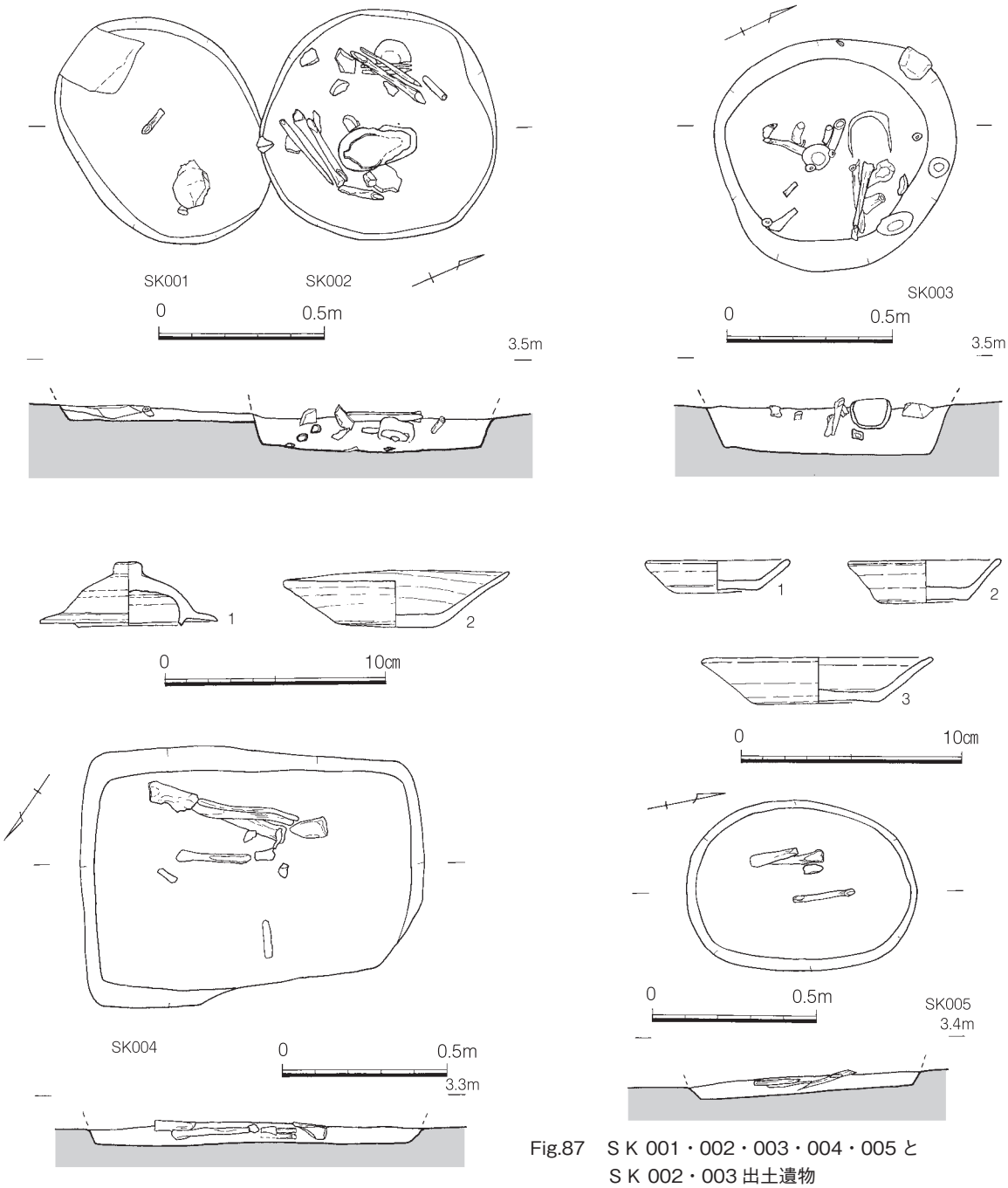


Fig.87　ＳＫ 001・002・003・004・005 と
ＳＫ 002・003 出土遺物

のみが残るだけである。

SK032（Fig.88）

1.5 × 1.2m の長円形墓坑で、浅い皿状のくぼみをなす。伸展葬の土坑墓か。頭骨の一部と下肢骨の一部がわずかに遺存している。副葬品は検出されていない。

SK142（Fig.88）

墓坑は確認できず、四肢骨だけの検出である。副葬品として骨の重なりの中から「熙寧元寶」、「元□通寶」、「咸平元寶」、不明銭各１点が出土している。

SK142（Fig.88）

墓坑は確認できず、頭骨の一部と下肢骨の一部だけの検出である。副葬品として骨の脇に４点の銅銭が検出された。「紹聖元寶」、「洪武通寶」各１点と不明銭２点である。

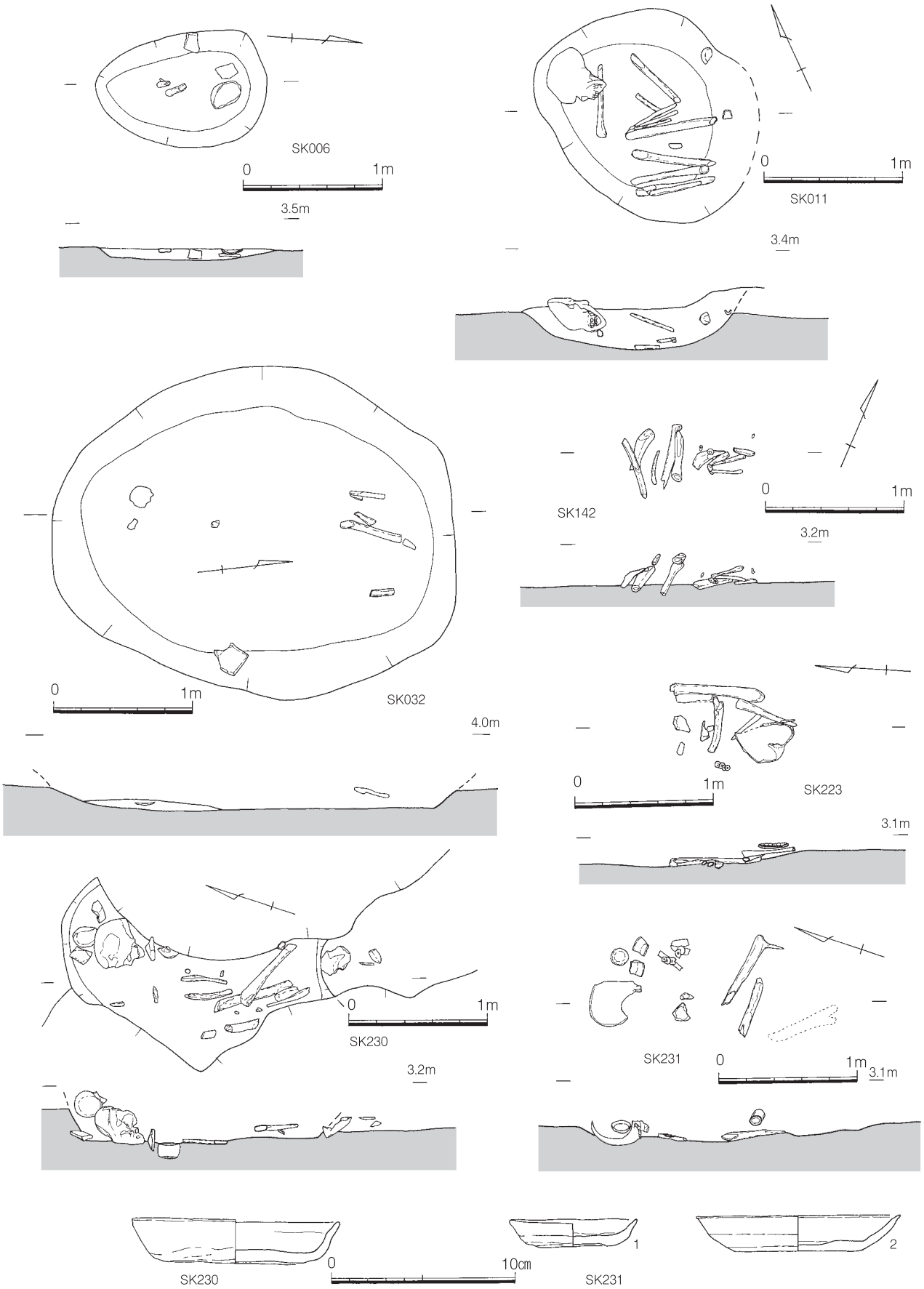


Fig.88　ＳＫ 006・011・032・142・223・230・231 とＳＫ 230・231 出土遺物

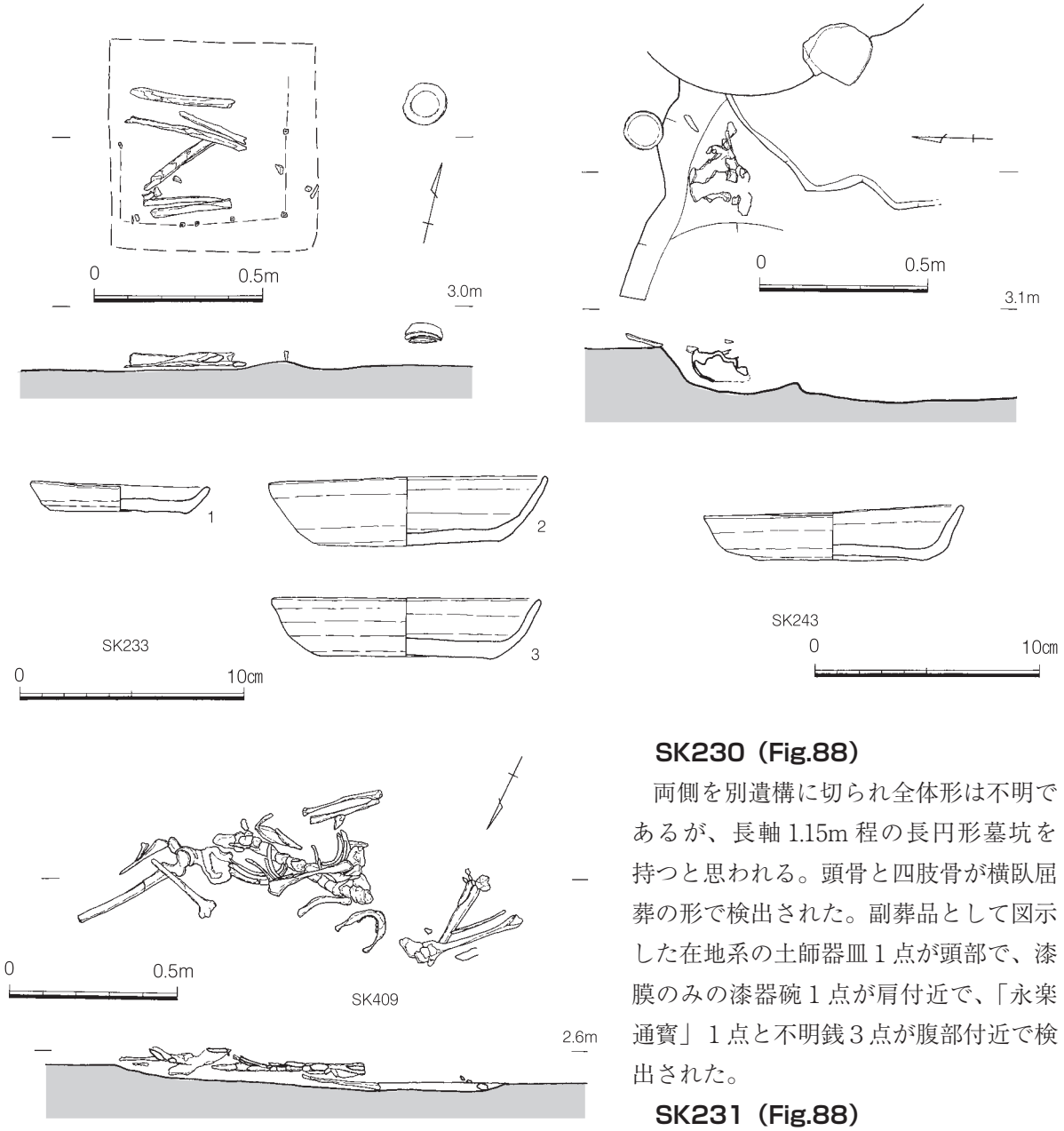


Fig.89　ＳＫ 233・243・409 と出土遺物

SK230（Fig.88）

両側を別遺構に切られ全体形は不明であるが、長軸 1.15m 程の長円形墓坑を持つと思われる。頭骨と四肢骨が横臥屈葬の形で検出された。副葬品として図示した在地系の土師器皿１点が頭部で、漆膜のみの漆器碗１点が肩付近で、「永楽通寶」１点と不明銭３点が腹部付近で検出された。

SK231（Fig.88）

墓坑は確認できず、頭骨の一部と下肢骨の一部だけの検出である。横臥屈葬と思われる。副葬品として頭部付近で土師器小皿の灯明皿(1)、大内系と思われる土師皿（２）があり、肩付近に「至和通寶」１点、無文銭２点、不明銭１点があった。

SK233（Fig.89）

明確な墓坑は確認できないが、一辺 0.7m の掘方があったものと思われ、その中に一辺 0.4 ～ 0.5m の鉄釘の並びが確認できた。箱形の木棺を埋めたものであろう。下肢骨だけの検出である。隣接した位置で伏せて置かれた三枚重ねの土師器皿（１～３）が検出された。副葬品であろうか。

SK243（Fig.89）

SK230 の直下で検出された。頭骨の一部のみが遺存している。SK230 と頭の位置も近いが明らかにずれており、別遺構であることが確認できる。頭位に土師皿１点が副葬されていた。

SX409（Fig.89）

B 区第 2 面の検出で、SD411 の埋没過程で溝の中に遺体を廃棄したものと思われ、厳密には墓ではないが、ここで取り扱っておく。主要な骨格はそろっているものの位置にやや乱れがあり、頭蓋骨はないことから水流等で一部の骨は動いているものと思われる。

溝中から人骨をはじめ馬、イルカなど大型動物遺体も出土しており、このような廃棄は日常的に行われていたものであろう。また、墓に由来すると思われる土地整理で遊離した人骨なども、単発的に溝や土坑から出土する例も多い。

便所遺構

今回の調査では２基の便所と思われる遺構が確認された。これまで博多遺跡群での中世便所遺構の検出例は少なく、石積土坑に消臭や消毒のためかと想定される藁灰や木炭を入れたもの、木組土坑の中に蛆遺体が多数みられるものなど数基の遺構を便所の可能性があると推定しているにすぎず、細か

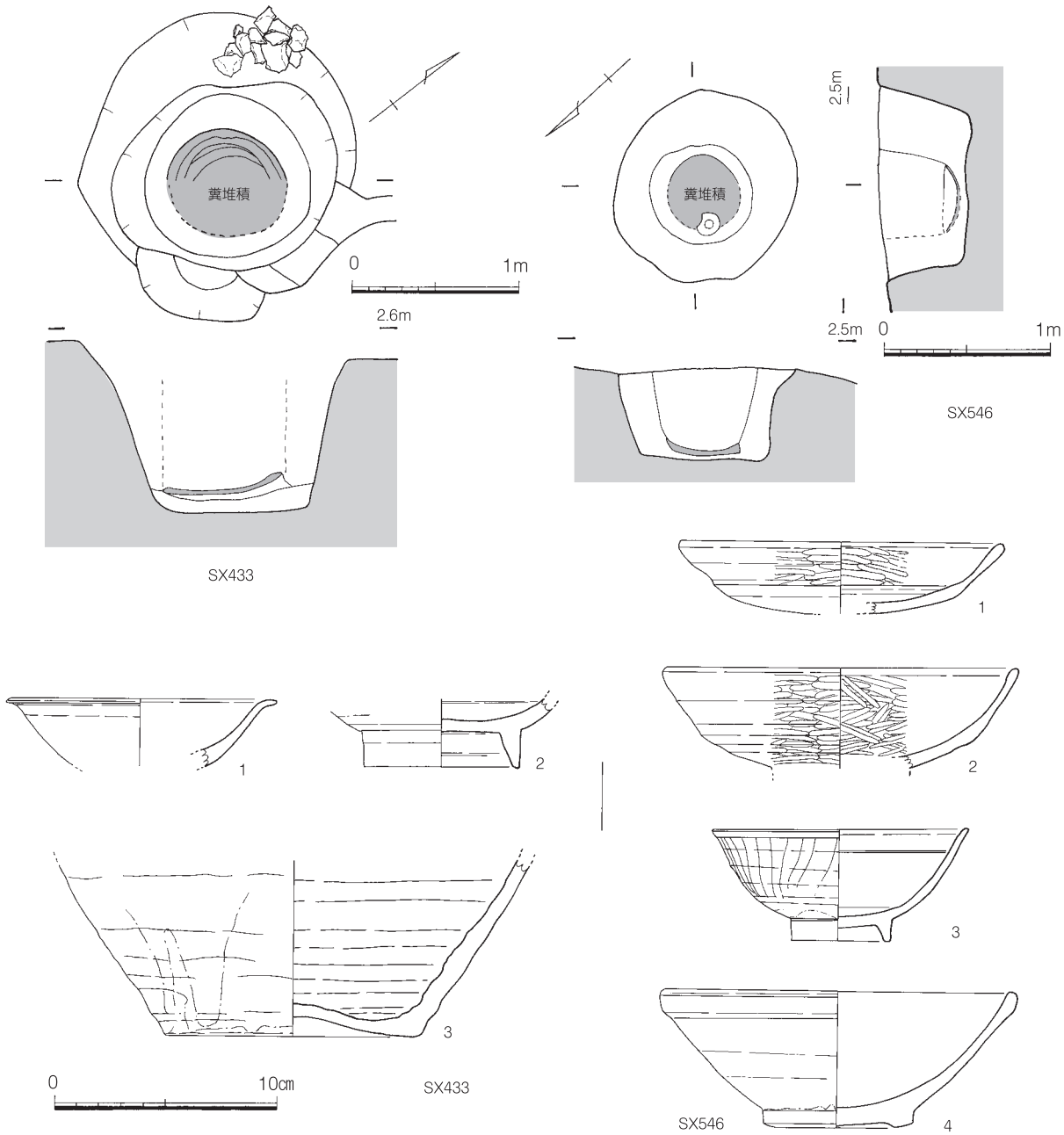


Fig.90　ＳＸ 433・546 とＳＸ 433・546 出土遺物

な自然科学分析で明らかにした例はない。中世博多勃興前の交流拠点である鴻臚館遺跡では、８世紀代の鴻臚館第Ⅱ期の南館・北館で、それに付随するそれぞれ２基の便所遺構が見つかっており、自然科学分析が行われている。今回検出した便所遺構は 11 世紀末に位置づけられるもので、鴻臚館が機能停止し、かわりに博多部が対外交流拠点として勃興した段階にあたり、両者の比較は重要であると考え、自然科学分析を実施した。その結果については巻末に付編として掲載している。

今回の２基の便所推定遺構 SX433、SX546 は A 区の北東端部で確認され、第３面から第４面にかけて調査を行った。両遺構の間隔は 2.5m しかなく、ほとんど隣接している状態である。

SX433（Fig90）

径 1.7m 程の円形掘方を持つ土坑で、検出面から最下面までの深さは 1.1m、最下面標高は 1.4m である。通例の井戸遺構と類似しているため検出当初井戸と考えていたが、掘方最下面中央部に径 0.85m の数個の輪状の白味を帯びた堆積物を検出した。見慣れぬ堆積物であったために、簡単な水洗選別を行ったところ微細な魚骨、植物種子が検出でき、白色堆積物が糞堆積であろうと考えるに至った。白色堆積物は間に黒色砂を挟んで数枚の重なりがみられ、籾殻も確認されていることからることから、砂や籾殻等をかぶせる行為があったと思われる。また掘方最下面中央部に正円形に堆積していることから、木質は遺存していないものの結桶が構造物として使用されていたと思われる。出土遺物は小破片で量も少なく、一部しか図示していないが、１は口縁を外反させた白磁皿、２は白磁碗Ⅱ類の胎土と釉を持つが高い高台を持つ例外的なもの、３は黒褐釉陶器底部破片で壺であろうか。これらの遺物から 11 世紀末頃の年代が与えられる。

自然科学分析の結果、この遺構白色堆積物からは回虫卵などの寄生虫卵と、食用にされたと考えられるシマサルナシの種子・微細魚骨が多数検出されることから、便所および糞便の堆積物と判断された。

SX546（Fig90）

白磁廃棄遺構である SK147 の直下で検出された。SK147 は SK546 の遺構上部が崩壊した跡のくぼみを廃棄土坑として利用した可能性が高い。SK546 は径 1.5m 程の円形掘方中央に径 0.6m の円形構造を持つ土坑で、通例の井戸遺構と類似している。木質は遺存していないものの結桶が構造物として使用されていたと思われる。最下面標高は 1.75m である。通例の井戸遺構最下面標高より遙かに高く、湧水レベルには達しておらず、井戸ではないことが明らかである。円形構造物最下面に SK433 と同様の白味を帯びた堆積物を検出した。構造物内からは図示したような遺物が出土している。１・２が瓦器碗で内外面を丁寧に研磨したもの、３が白磁小碗Ⅵ類とされるもので、４が白磁碗Ⅳ類で内底に沈圏線を持たないものである。この遺構の年代は、11 世紀末～ 12 世紀初頭と考えられる SK147 の直下で検出されており、それよりも古いが、大きな時期差はなく、SX433 と同様 11 世紀末と考えたい。自然科学分析の結果、SK546 からは寄生虫卵は検出されなかったが、花粉群集の特徴が SX433 と同様であること、種実同定で栽培植物のイネとアワが認められること、リン・カルシウム分析でリン酸やカルシウムの蓄積が認められること、食用にされたと思われる微細魚骨が検出されることから、本遺構も便所であった可能性が高い。

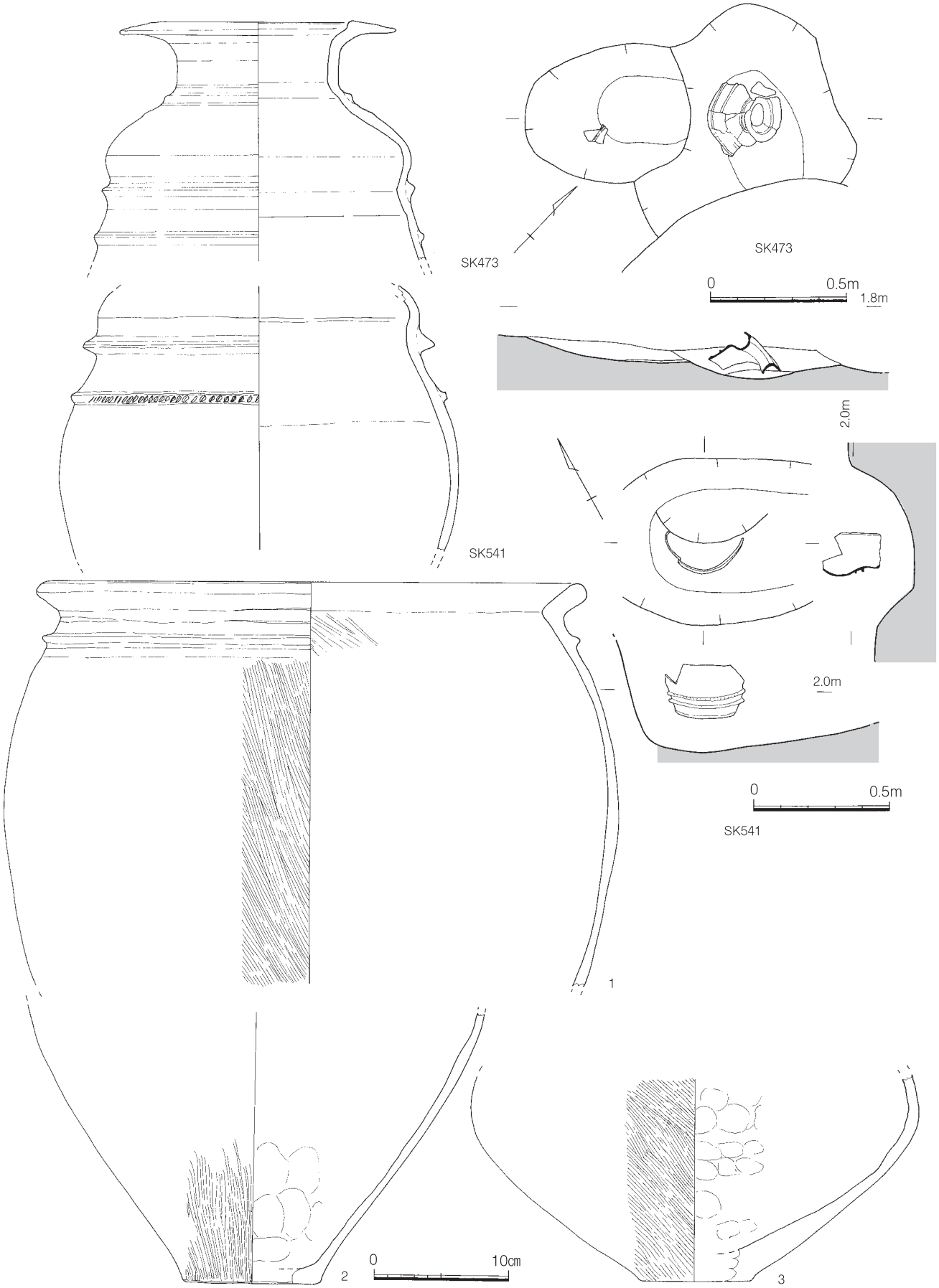


Fig.91　ＳＫ 437・541 と包含層出土甕棺

３）弥生時代の遺物

中世遺構からも弥生時代の包含層に由来する弥生土器片等が少量ながら混在する。これまでの発掘調査の成果によると、弥生時代の甕棺墓をはじめとする遺構は、砂丘１と砂丘２間に形成された谷を挟んで砂丘上にのみ営まれている。谷部に位置するＡ・Ｂ区では、最下面に古代・弥生時代の包含層を形成し、弥生時代甕棺も比較的大きな破片で出土しているが、明確な遺構をともなっておらず、原位置をとどめているとは思われない。いずれも砂丘１側（Ｃ・Ｄ区側）からの流れ込みであろう。

SK473（Fig.91）

浅いくぼみのなかで検出した瓢形の壺形土器の上半部の破片である。胴上部がくびれ、頸部下に１条、胴部に２条の三角突帯を巡らす。本来丹塗りだったと思われるが、長期間地表面に露出していたもので、器壁が荒れ丹は確認できない。本来の位置をとどめたものではない。

SK541（Fig.91）

SK473同様の瓢形の壺形土器の肩から胴部にかけての破片である。胴部に台形の突帯を２条巡らし、下の突帯には刻み目を施す。突帯より上部は丹塗りである。倒立した状態で出土しているが、本来の位置をとどめたものではない。

その他１・２の中型の甕、３の壺も包含層中から出土している。いずれも甕棺として使用したものである。これらの遺物は弥生中期後半から後期前半までのものである。

４）遺構外出土遺物（Fig.92 ～ 94）

包含層、遺構検出時に出土した遺物は多量に及ぶが、以下図示したものについて簡単に述べる。

１はSD326脇で出土した一石宝篋印塔である。２は石塔の蓮座の一部である。３は挽き臼、４～７は滑石製品で、４は片面を鋳型風に、もう片面を硯風に削りだしたもの、５が権、６が双口の器、７がバレン状の石製品である。これらは第２面検出である。８～12は第４面包含層出土で、８・９が白磁碗、10･11がヘラ切り土師皿、10は灯明皿として使用している。12は半島系の陶質土器である。13は京都系土師器で灯明皿として使用したもの、14は瀬戸の鉄釉小壺、15が高麗青磁の鉢、16が磁竈窯の緑釉盤、17が白磁碗、18が古式の同安窯系青磁碗、19が明染付碗、20が高麗青磁の碗の優品で青緑色透明釉が厚くかかる。21は白磁皿で、口縁を打欠き灯明皿としたもの。22は青白磁の座像の一部である。23は白磁小杯、24は碁笥底の明染付皿である。25・26は白磁の犬で、それぞれ頭部と下半身である。釉薬に違いがあり、別個体である。隣接する６次調査では完形品が出土している。27は塔形の青白磁で蓋のつまみであろうか。28は瓦質の小型火舎で体部上面に菊花状の印文を持つ。29は役行者と思われる陶質像で鉄釉がかかる。30は上部に亀を乗せた銅製品で飾り金具か。31は銅製鈴。32は鉛のインゴットでガラス製作の材料の一つか。33は土製円盤で上下両面に、北条氏の家紋である「三つ鱗文」を線刻したもので、鎌倉時代末調査区周辺にあったと推定されている鎮西探題との関わりがあると考えられるもので、まとめで再度触れる。34は土錘。35は砂岩の砧状製品で、側面を研磨し、下面の平坦面を叩打もしくは砧として使用したものであろう。最下面包含層出土で弥生時代のものか。36は須恵器円面硯である。37は瑪瑙製の勾玉である。古墳時代のものであろう。

Fig.94に示したものは試掘および土層確認トレンチで出土したものである。38が輪花、白堆線を持つ白磁皿、39・40が白磁碗、41が古式の同安窯系青磁碗、42が青白磁小碗、43が高麗青磁小碗の優品である。44は黒褐釉陶器広口壺、45・46は黄瀬戸皿で内面体部を菊花にしたものである。47は白磁碗、48は陶器捏ね鉢である。

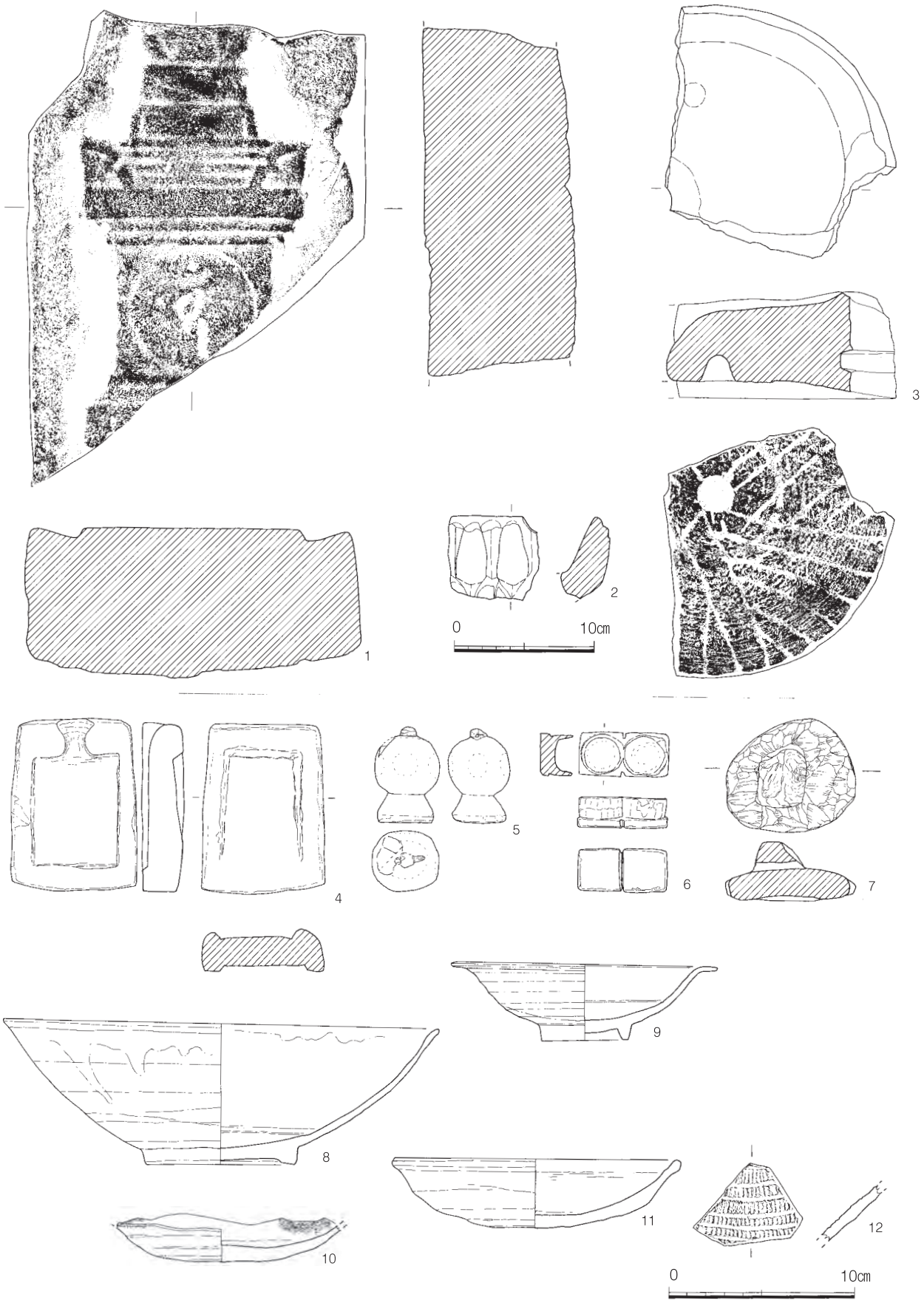


Fig.92　遺構外出土遺物(1)

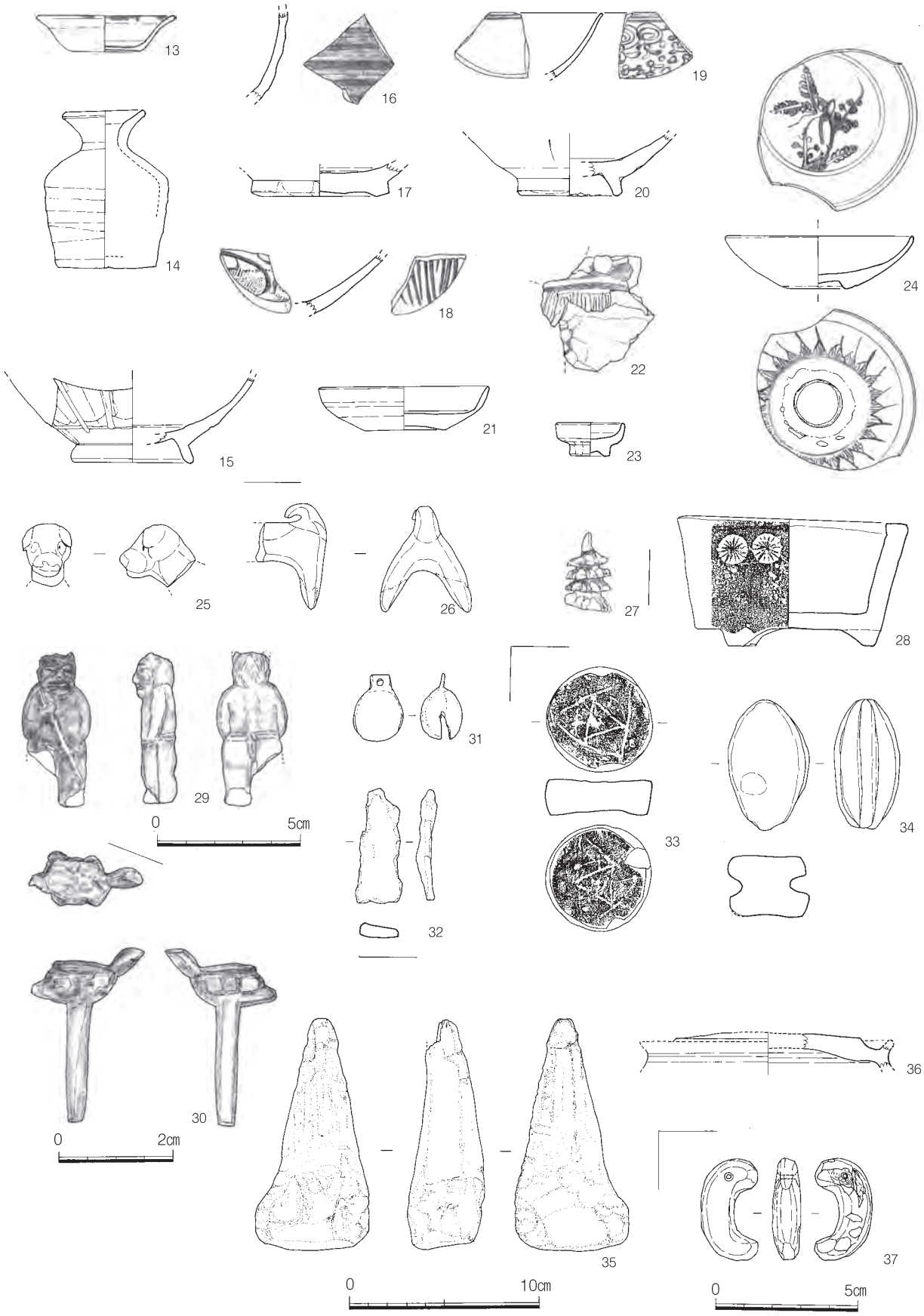


Fig.93　遺構外出土遺物(2)

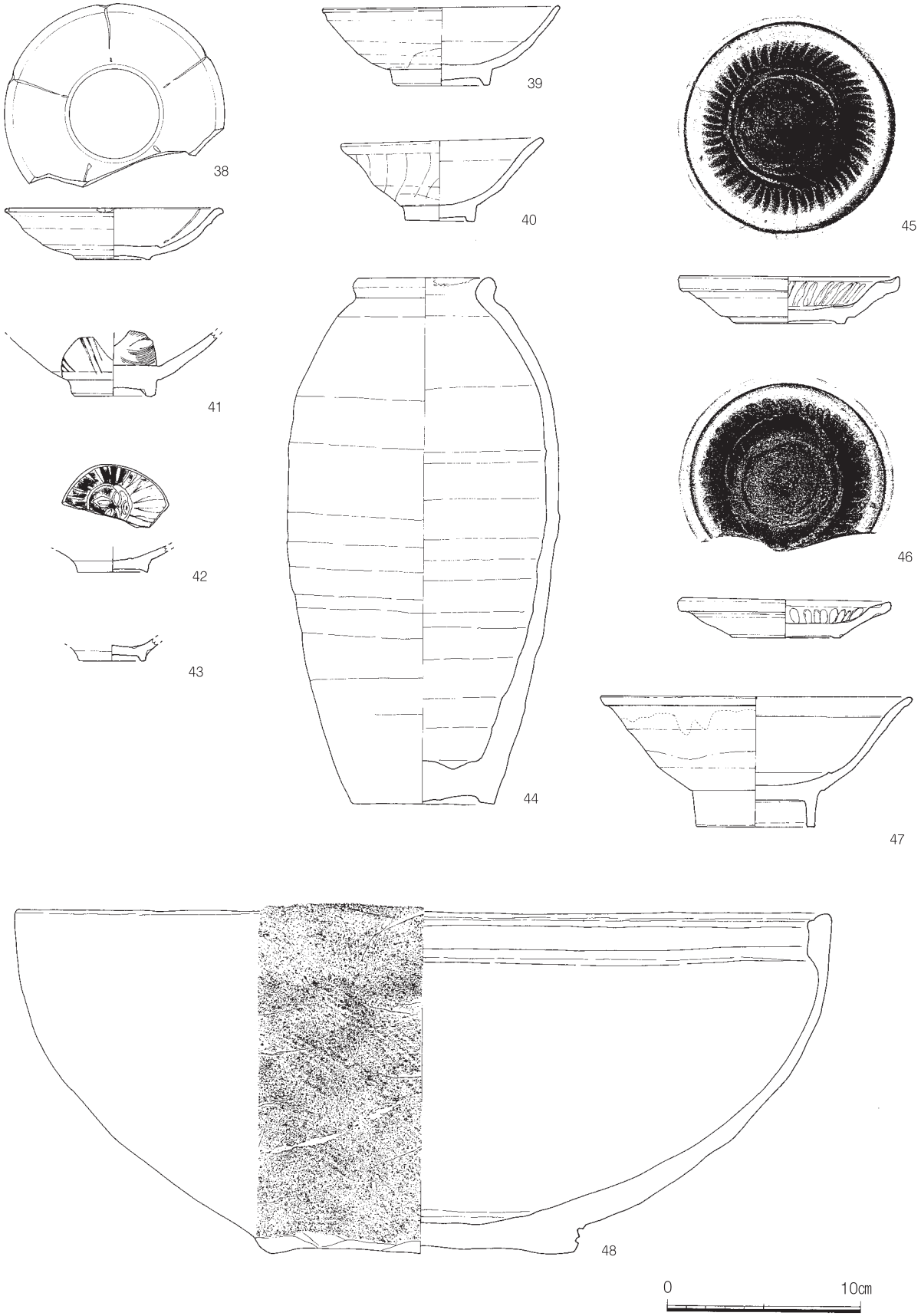


Fig.94　遺構外出土遺物(3)　試掘、土層確認トレンチ等

４．Ａ・Ｂ区調査のまとめ

博多遺跡群が立地する３列の砂丘列のうち一般に陸側の砂丘１・２を「博多浜」、海側の砂丘３を「沖（息）の浜」と呼んでいる。博多浜の砂丘１・２間には、御供所町東長寺付近を谷頭とし、西側櫛田神社・博多川方面に開析する谷があり、博多172次調査地点のうち、Ａ・Ｂ区はこの谷底付近、Ｃ・Ｄ区は砂丘１の海側に下がる斜面に相当する。

このような地形にあって、Ａ・Ｂ区には弥生時代・古墳時代には遺構は営まれず、Ｃ・Ｄ区側（砂丘１側）または谷頭側からの流れ込みによって堆積した遺物包含層が形成されるのみである。

古代に至って、溝・井戸・土坑等が作られているがその密度はまだ薄い。本地点にほど近い祇園町交差点を中心とした地域に、東西南北の区画を持つ官衙域が想定されているが、SK522から出土した石製巡方や、SE447から出土した「三宅」の墨書がある須恵器などはそれとの関わり合いが強いものである。

対外交流拠点として機能した鴻臚館が11世紀半ばにその役割を失い、代わりに宋商人たちは寺社、荘園などの権門に保護され博多に住みつき、「宋人百堂」、「博多津唐房」と呼ばれる居住区を形成し「住蕃貿易」を開始する。この地域もその一角を占め、この時期にいたって多くの遺構が営まれ、膨大な量の遺物が出土するようになる。膨大な量の中国陶磁器が出土するのは、博多遺跡群の通例であるが、本地点ではSK147、SK241のような11世紀末から12世紀初頭にかけての白磁等一括廃棄遺構が検出され、宋商人たちのエネルギッシュな貿易活動を物語っている。これらは二次的に被熱しており、焼け割れた破片の状態で廃棄されている。火災での被熱により商品価値を失ったものを処分したものであろう。また、出土する陶磁器には一定の器種が数種類まとまっており、おそらく梱包状態で被熱したものである。隣接したSK147、SK241間には遺物の接合例があり、同じ火災による処理土坑である。両遺構の遺物量はコンテナ20箱に及ぶものである。

本地点での調査で、特筆すべきことの一つにSX433、SX546の２基の便所遺構が確認されたことがあげられる。この便所遺構は白磁等一括廃棄遺構SK147、SK241の位置と時期が重なり、中でもSK147はSX546の直上にあり、SX546の便所が崩壊した際のくぼみを使用したものと思われる。このことから、この便所遺構は宋商人の倉庫を含む居住区の中に営まれたものであるといえよう。中世博多勃興前の交流拠点である鴻臚館遺跡でも、８世紀代の鴻臚館第Ⅱ期の南館・北館で、それに付随するそれぞれ２基の便所遺構が見つかっており、自然科学分析が行われている。その中で寄生虫卵に混じりシマサルナシの種実が多く検出されている。SX433の自然科学分析でも同様に寄生虫卵とともにシマサルナシの種実が多く検出されており、中国商人たちの食の嗜好も含めて興味深いものがある。また、これまで博多遺跡群での中世便所遺構の検出例は少なく数基の遺構を便所の可能性があると推定しているにすぎず、細かな自然科学分析で明らかにした例はない。今後の発掘調査で留意すべき点である。

鎌倉時代の13世紀末には、元の襲来に備え九州の御家人を統括するために、博多に鎮西探題が置かれた。探題には鎌倉幕府の執権北条氏の一族が任命され、幕府の出先機関として九州を統括した。また、元弘３年（1333）、鎌倉幕府滅亡の動乱の中で鎮西探題はついに滅亡することとなった。その鎮西探題の位置については、肥後の菊池武時が探題館を襲撃した様子を記した「博多日記」などの記述から、祇園町交差点から櫛田神社にかけての付近と推定されているが、これまでその具体的な遺構、遺物は見つかっていなかった。今回の調査で、きわめて興味深い遺物が検出されている。Fig.93の33に示した土製円盤で、上下両面に北条家の家紋である「三つ鱗文」を線刻したものである。Ａ区

第 2 面の遺構検出時に遺構外から出土したものである。この資料が鎮西探題の絶対的な位置を明らかにするものではないが、少なくとも本地点も含めた周辺に所在したことを傍証するものであろう。しかしながら本地点での 13 世紀末から 14 世紀代にかけての遺構・遺物は少なく、大量の土師皿を廃棄した SD240 をのぞくと大きな遺構はみられない。

14 世紀の空白期を経て、15 世紀代に入り遺構・遺物は格段に増加する。

室町・戦国期の博多において山口を拠点とした筑前守護大内氏の影響は大きい。大内氏の博多支配は 15 世紀半ば教弘が筑前守護になったことを画期とし、さらに文明 10 年（1478）大内政弘が小弐を駆逐したことにより、大内氏の博多支配はさらに画期的に進展する。その後、大友氏との博多支配を巡る抗争を経ながら、天文 20 年（1551）、大内義隆が陶隆房に襲われ自殺し、大内氏の博多支配は消滅した。A・B 区の 15 世紀半ばから 16 世紀半ばまでの遺構・遺物のあり方をみるとその縮図を見る思いがする。

15 世紀代に入り A・B 区では明確な区画溝が作られ、その一角に墓地が形成されている。墓の副葬品の中には大内系土師器が目立ち、被葬者が大内家と関わりのある人たちであったことを示している。区画溝は作り直され次第に位置を変えていくが、廃止された溝には多量の遺物が廃棄されている。その中には大内氏が好んで使用したといわれる京都系土師器や、大内氏の家紋である菱文のある湯釜（Fig.28 － 23）、滑石製品（Fig.29 － 8）、土製円盤（Fig.47 － 1）などがあり、博多遺跡群の他地点に比べて朝鮮陶磁器が格段に多く、さらに茶の湯関係遺物も多い。これらのことに加え、この地点では土師器溜まりが多く検出されており、山口の大内館の特徴である土師器の使用・廃棄の際だって多いというところにも共通点がある。これらのことから、本地点は大内氏の博多における屋敷地の一部ではなかったかと推定される。

16 世紀の半ばに大内の博多支配は終焉を迎え、その後戦国争乱の中、博多は戦国大名の覇権争いの渦中に置かれることになり、たびたび戦火を被ることとなる。天正 15 年（1587）、島津氏を逐って九州を平定した太閤豊臣秀吉は、焦土と化した博多の町を再興し、大規模な区画整理すなわち太閤町割を実施した。今回の調査では中世の区画から太閤町割に至る、一連の流れが把握できた。この一連の区画の移り変わりについては別項で紹介する。

A 区 1 面全景（南から）

A･C 区 1 面全景（南から）

A1 区 1 面全景（東から）

A1 区 1 面全景（南から）

A2 区 1 面全景（南から）

A1 区 2 面、2 区 3 面全景（南から）

A2 区 3 面遺構全景（南から）

A2 区 3 面遺構全景（西から）

B 区２面全景（南から）

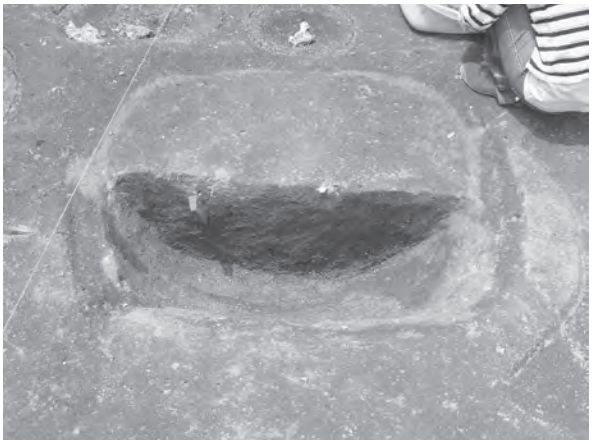
B 区２面全景（北東から）

A･B 区３面全景（南から）

B 区２面全景（西から）

B 区３面溝全景（北東から）

B 区１面 SX343（南東から）



SK008 粘土貼り土坑

SK129 馬埋葬土坑

B 区 SD345（南から）

A1 区 SD264 遺物出土状況（北西から）

A2 区 SD225（南から）

A2 区 SD007（西から）

B 区 SD462 全景（北東から）

A1 区 3 面 SD264（北西から）

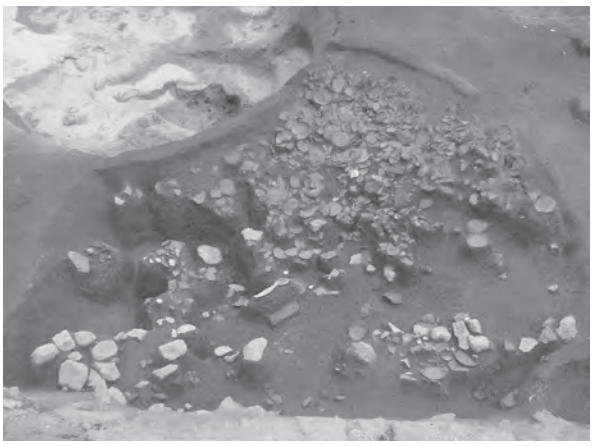
A1 区 2 面 SD240C・D 群全景（北から）

A1 区 2 面 SD213,211,326（南から）

A1 区２面 SK134（北西から）

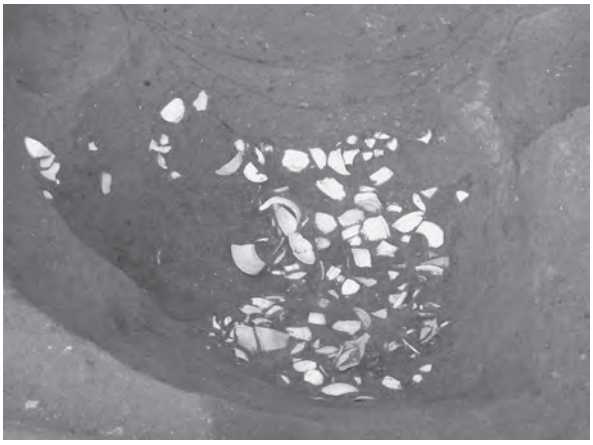
A1 区２面 SK135（西から）

A1 区２面 SK138（西から）

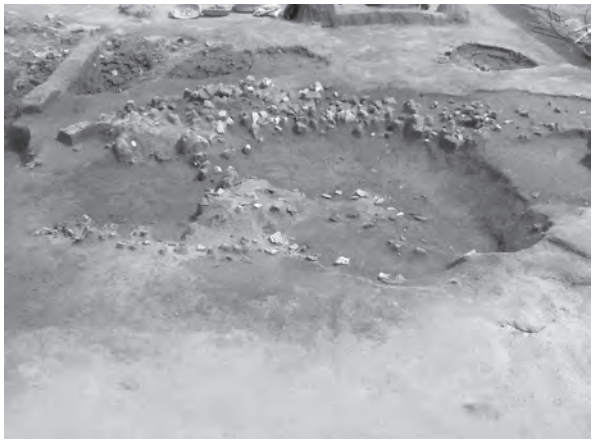


A2 区２面 SK159（西から）

A2 区２面 SK168（東から）

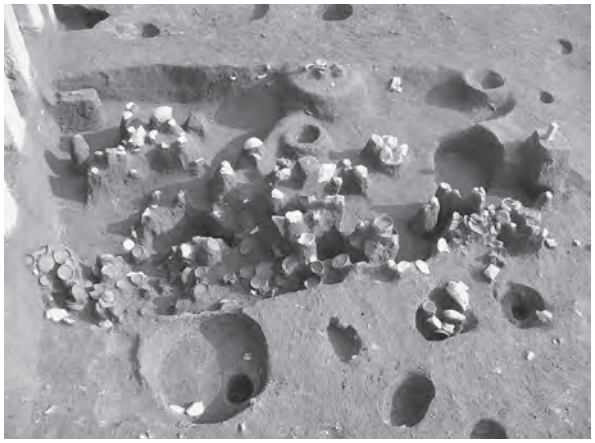


A1 区２面 SK241 白磁溜まり（南西から）

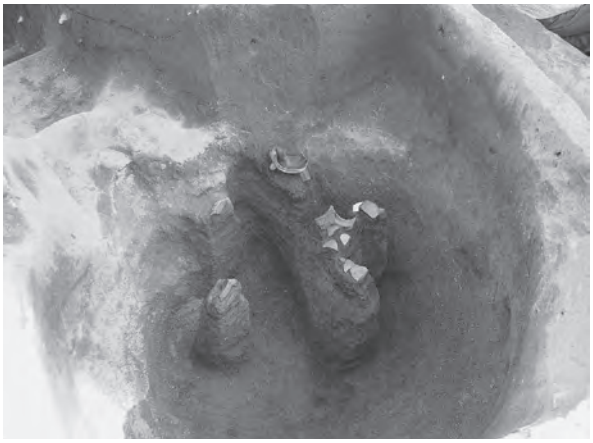


A1 区２面 SK303（西から）

A1 区２面 SK309 出土状況（東から）



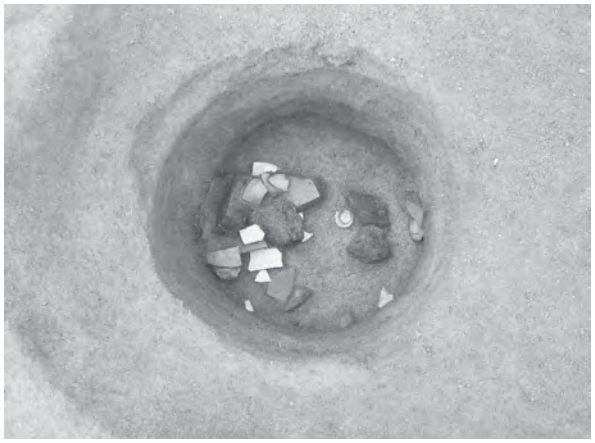
B 区 2 面 SK378（北西から）



A 区 3 面 SK437（北から）

A2 区 2 面 SE149 土層断面（南東から）

A2 区 2 面 SE149 下部（南東から）



A2 区 3 面 SE338 井筒最下面（東から）

A1 区 3 面 SE447（北西から）

B 区 3 面 SE497 と SE498（東から）

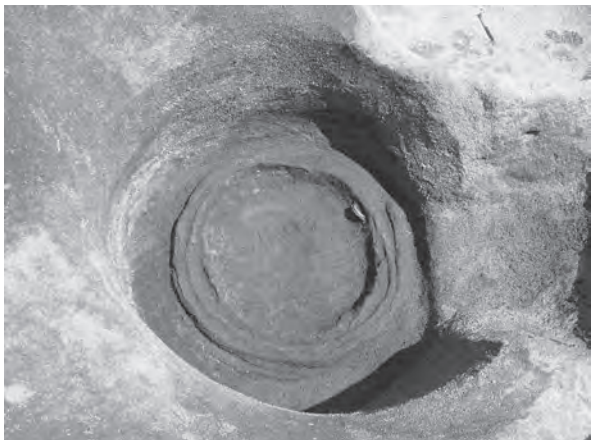
A1 区 3 面 SE504（南東から）

A1 区 3 面 SE507 と SE508（東から）

A1 区 2 面 3SX226 石敷き（西から）

A1 区 2 面 SX227（北西から）

B 区 2 面 SX384（南から）



A1 区 4 面 SX434 便所遺構（北西から）

A1 区 4 面 SX433 便所遺構（南東から）

A1 区 4 面 SX546 便所遺構（北西から）

A1 区 4 面 SX546 便所遺構（北西から）

A1 区 2 面 SK032 中世墓（南東から）

A1 区 2 面 SK032 中世墓（南東から）

A1 区 2 面 SK011 中世墓（南東から）

A1 区 2 面 SK142 中世墓（西から）

A1 区 2 面 SK223 中世墓（西から）

A1 区 2 面 SK233 中世墓（東から）

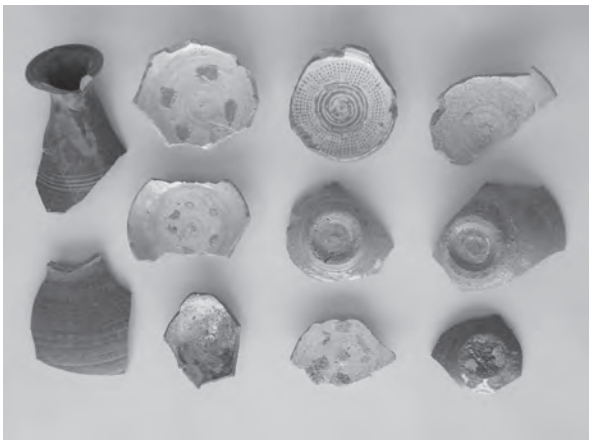
A1 区 2 面 SK230 中世墓（南東から）

B 区 SX409（北から）

A 区 4 面 SX473 瓢形壷

四つ菱紋と三つ鱗紋

SK309 出土粉青沙器



SD264 出土朝鮮陶磁器

SK168 出土遺物（1）

SK168 出土遺物（2）

SK147 出土陶磁器

供養塔類

Ｃ・Ｄ・Ｅ区調査の概要

１．各遺構面の概要

第一章で説明したように調査区は排土処理と工程の効率化のためにＡ～Ｄ・Ｅ区と細分して設定している。これは全調査期間のうち前半部では場外に排土を搬出して処理することとなっていたためであり、A･C 区の調査から着手し、排土を場内で処理することととなった後半でＡ区の残りとＢ区･Ｄ区の調査を行った。

Ｃ・Ｄ・Ｅ区の調査では弥生時代前期後半の遺構を初現として、古代の住居群と区画溝で構成される集落・中世前半期の廃棄土坑をはじめとする遺構群・規則性を持って検出される中世中頃の土師器大量廃棄遺構などの遺構を検出した。

Ｃ・Ｄ区内における各時期の遺構の分布状況は大きく異なり、中世前半期の遺構だけが両区を通じて濃密な密度で検出される。この遺構の検出状況の違いは、大きく分けて地形的な要因と人為的な要因の二つから生じたものであることが推測できる。

地形的な要因としてはＣ・Ｄ区境界が砂丘地形の傾斜変換点上に位置していることが挙げられる。第 172 次調査地点は博多濱南部の南側砂丘列（以下、砂丘１とする）の北側（海側）緩斜面上に位置してるが、今回の調査範囲の中では地形変換点が複数存在している。最も顕著なものがＡ･Ｂ区とＣ･Ｄ区を画している溝遺構（Ｂ区検出 SD-007）が存在している箇所である。この部分は砂丘地形が砂丘鞍部に形成された谷地形に連接する場所であり、遺構面を構成する堆積層も大きく変化を見せる。調査区の分割においては、偶然にもこの変換点上に区境界を設定したため、わずか数mの距離でありながら遺構面は大きく異なる様相をみせる。Ｃ・Ｄ区内の地形変換点は砂丘の傾斜変換点であり、地形的には大きな変化ではないが、各時代の遺構面の形成にあたっては大きな影響を与えていたことが推測される。調査区付近は弥生時代前期の段階では陸地化した後であるが、いまだ海からの風濤を直接受ける場所である。この段階では砂丘上と前面に広がる砂浜という位置関係となり、遺構造営に際しては砂丘上が選択されるのは当然の結果といえよう。古代の時期には砂丘１に官衙関連施設が造営される。本調査で検出した古代の住居群は、これに接するように付随して営まれた集落域であることが想定できる。集落造営に際しては、ある程度の規模の広い平坦地が必要とされる。居住地の選別にあたり低地・谷部を避け安定した高所に生活空間を求めるのは現在も変わらない。人の増加に伴う居住域の拡大には更なる土地の造成が伴うものであり、これがＣ・Ｄ区の遺構の残存状況にも影響を及ぼしているのであろう。

人為的な要因としては調査区付近一帯に占地したであろう施設の性格や歴史的背景が挙げられる。これについては第三章で詳しく述べるが、調査区一帯から現在の櫛田神社付近にかけては鎮西探題の推定位置として挙げられている。これまで周辺で行われた発掘調査の成果からも、これを傍証する状況証拠や資料が積み上げられている。

Ｃ区では４面（基本的に３面であるが一部を４面として調査している）、Ｄ区でも４面（部分的に５面の遺構面を設定している）の遺構面を設定し、それぞれ調査を行った。各区の遺構面は便宜的に第１～４面と呼称しているが、これは時期的に対応するものではない。

以下に各区各遺構面の説明を行い、各時代毎の遺構と遺物について報告を行う。

第１面（Fig.95）

Ｃ・Ｄ区の第１面はともに標高4.00ｍ前後で設定した遺構面であるが、検出される遺構の時期は大きく異なる。Ｃ区で検出される遺構の多くは現在の町割りとほぼ同一の主軸を採るもので、15世紀代に属するものが多くを占める。Ｄ区においてはこの主軸方向を採る遺構はほとんど検出されておらず、また遺構の主軸方向はＣ区のそれと異なりN-76°-E方向を採るものが多く、検出される遺構の多くが14世紀前半代に属するものとなる。

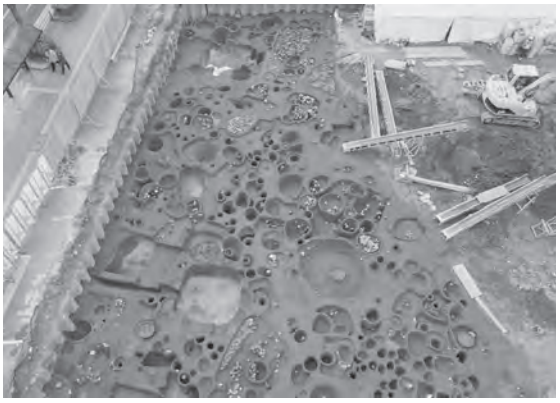
第172次調査の東側で行われた第79次・第178次の調査成果からは、調査区一帯は14世紀前半を境に遺構が全く見られなくなる範囲に含まれる。しかしながらＡ・Ｂ区の調査成果やＣ区の遺構検出状況からは、遺構の密度は薄くなるものの連続して遺構が営まれている状況がみられ、前述の傾向とは異なる様相となる。Ｄ区については確かに14世紀中頃以降の遺構は全く検出されず、14世紀前半代で遺構が断絶し、再び人が居住するのは16世紀末以降という様相となる。

また、Ｃ区においては第２面以下においてもＤ区で検出されたような土師器大量廃棄遺構は検出されず、14世紀代前半に属する遺構はわずかなものとなる。区画溝のような明瞭な区分が存在するわけではないが、Ｃ区とＤ区とでは土地利用の目的が大きく異なるようである。これがどのような意味合いを持つのかは、調査区一帯の性格を考える上では重要な要素である。

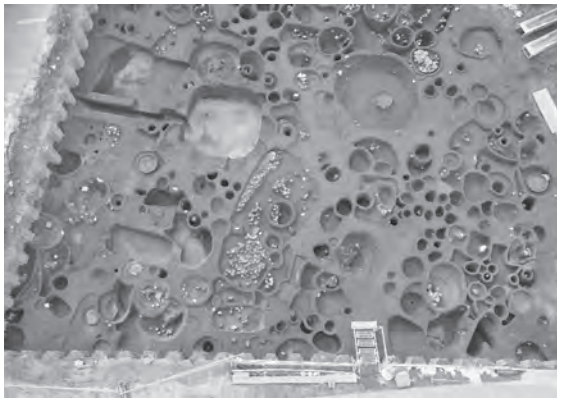
なお、Ｃ区で検出される現在の町割りと同一の主軸は太閤町割りに由来するもので、現在の地積図とほとんど一致する区画を示す。Ａ・Ｂ区で検出されるものとやや主軸を異にするが、これも地積図に記されており、近世以降町割りがほとんど変化していないことが分かる。また、Ｃ区第１面で検出れさる整地層もこの主軸方向に沿うように整えられるものが多く、整然と立ち並ぶ町屋が復元できる。

Ph.93　Ｃ区第１面全景

Ph.94　Ｃ区第１面全景



Ph.95　Ｄ区第１面全景



Ph.96　Ｄ区第１面全景・部分

Fig.95　C・D・E 区第 1 面遺構実測図（S=1/200）

第２面（Fig.96）

標高 3.70 ～ 3.50 mで設定した遺構面であり、遺構面自体が北側に向けて緩やかに傾斜する。C・D 区ともに第 1 面から続く遺構の掘り下げと、第 2 面で新たに検出した遺構の調査を行った。

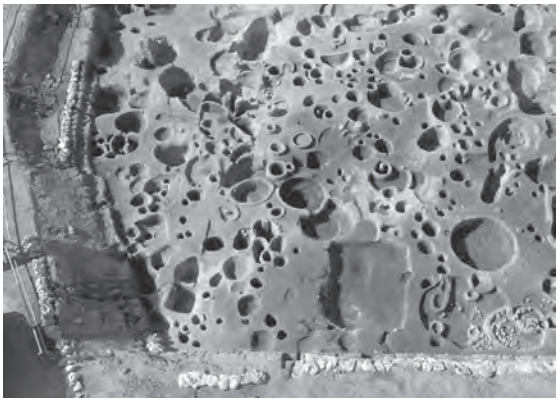
C 区では井戸遺構以外は大型の遺構はあまり検出されず、主に柱穴群が調査の対象となった。これらの柱穴群は建物としてはまとめられないものが多く、遺構の主軸方向にも規格性は見られない。遺構の時期は 14 世紀前半のものが散見されるが、12 世紀代の廃棄土坑なども検出されるなど混在した状況となる。調査区の北側範囲では広範囲に焼土･炭化物を含む黄褐色粘土による整地層が確認され、この整地土層中からは 13 世紀後半から 14 世紀初頭の遺物が出土する。概ねこの時期の生活面であることが推測される。

D 区では引き続き 14 世紀前半の遺構を検出し掘り下げを行った。新たに検出した 14 世紀代の遺構としては SC-719 とした住居や SK-495 とした廃棄土坑群がある。これらの遺構のほかは 12 世紀代に属する廃棄土坑群が濃密に分布していることが確認された。遺構面の時期をあえて限定するのであれば 12 世紀代となろう。D 区第 2 面の調査では C 区で検出される粘土を用いた広範囲の整地層は見られない。遺構検出面は西側部分ではやや粘性を帯びる暗褐色土層面となるが、東側部分では暗褐色砂質土となり一部では暗褐色砂層面が検出される。

地形的には C・D 区の境界付近に傾斜変換点が存在しており、これを境に遺構の在り方も違いを見せる状況である。第 3 面以下の掘り下げで確認したことであるが、基盤層となる砂丘砂層もこの周辺に傾斜変換点が存在していることが分かった。この変換点以南は砂丘を削平して平坦面を造成しており、これによって発生した土砂は A・B 区の埋め立てに使用されたことが分かる。

Ph.97　C 区第 2 面全景

Ph.98　C 区第 2 面全景



Ph.99　C 区第 2 面全景・部分

Ph.100　A･C 区第 2 面全景

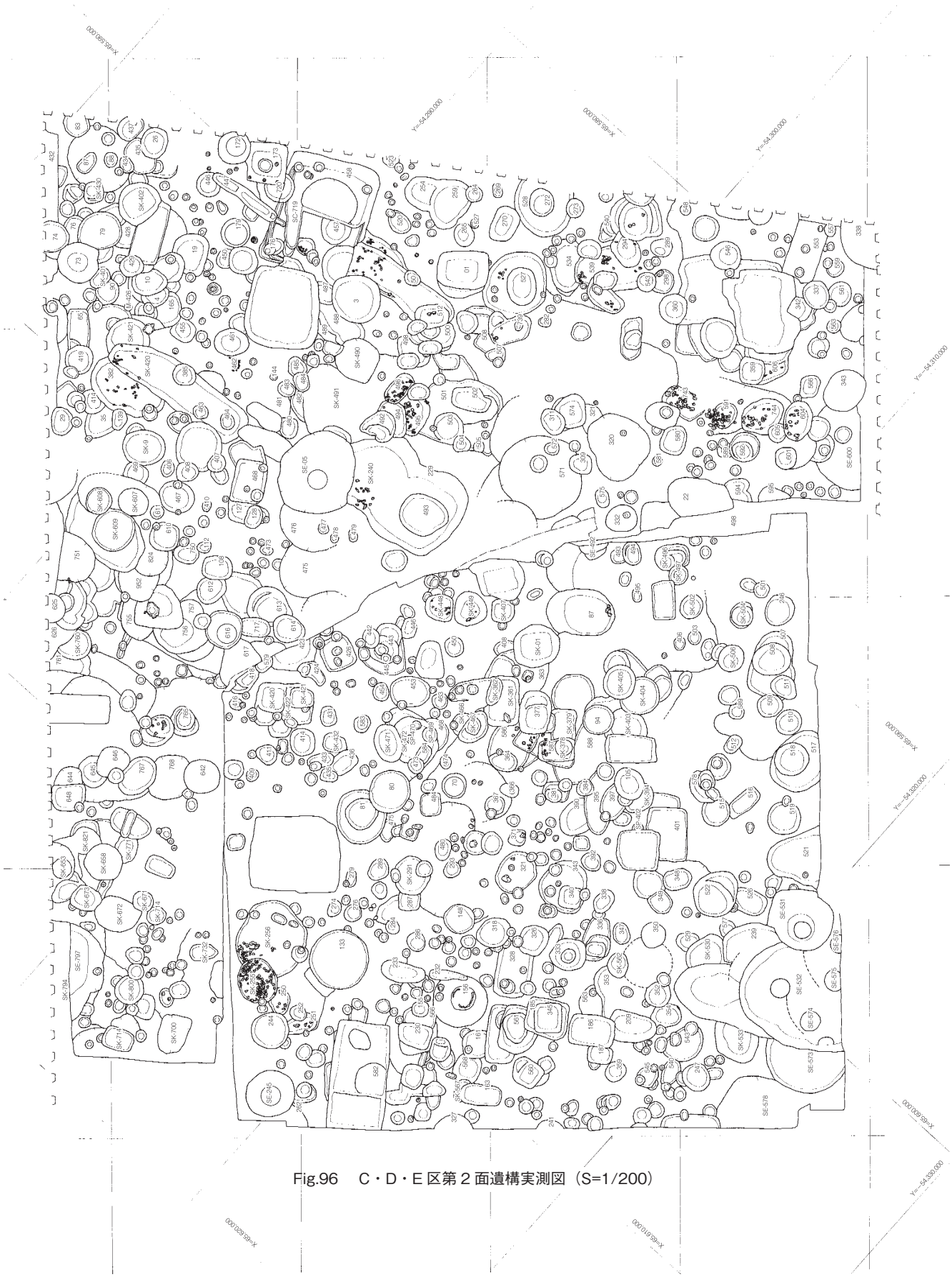


Fig.96　C・D・E 区第２面遺構実測図（S=1/200）

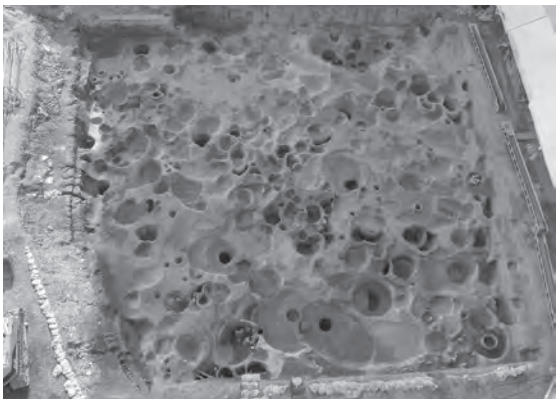
第３面（Fig.97）

Ｃ区では標高 3.30 ～ 2.90 ｍで設定した遺構面で、Ｄ区では標高 3.50 ｍ前後で設定した。Ｃ区においても当初 3.50 ｍ付近で遺構面を設定し遺構精査を試みたが、遺構密度が濃密であったためか遺構の平面形と切り合い関係の把握が困難であった。特にＣ区中央部付近は粘性を帯びた黒褐色土が広範囲に堆積している状況であり、遺構の平面形が断片的にしか検出できない状況であり、さらに掘り下げを行って遺構面の設定を行っている。結果的にＣ区の第３面とした遺構面は暗褐色砂層～褐色砂層面となった。第３面への掘り下げ時にはＣ区№4 付近から弥生土器・古墳時代の遺物が多く出土した。Ｃ区第３面で検出した遺構は概ね 12 世紀代～ 13 世紀代の遺構であるが、古代に遡る遺構も褐色砂層面上で検出している。

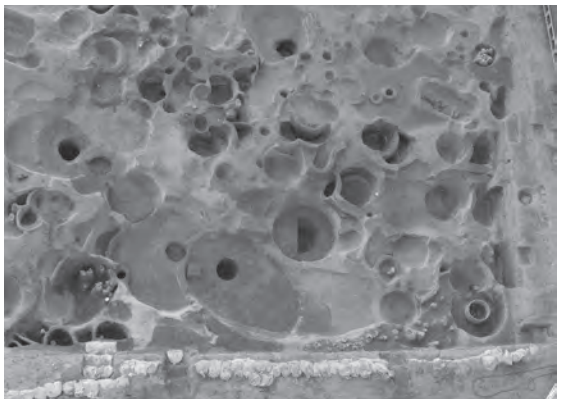
Ｄ区は標高 3.50 ｍ前後を測る暗褐色砂層面上で遺構面の設定を行っている。第３面への掘り下げ時には東側部分で濃密に遺構が検出される範囲が確認されたため、この範囲については別に遺構面を設定し掘り下げを行った。このためＤ区東側の範囲については計５面の遺構面を設定したことになる。この中途の遺構面で検出した遺構については、遺構の時期を特定したのち第３・４面の調査成果に反映させている。

Ｄ区第３面では第２面から続く遺構の掘り下げと、11 世紀末の方形住居や古代の住居群を新たに検出した。遺構面の年代としては８世紀から９世紀代があてられよう。

第３面の調査で特筆することとしては、Ｄ区での水銀の出土である。これまで実施された発掘調査においても水銀の出土はわずかなものであり、中世期の「博多」の手工業の実態を明らかにするためには重要な資料であろう。

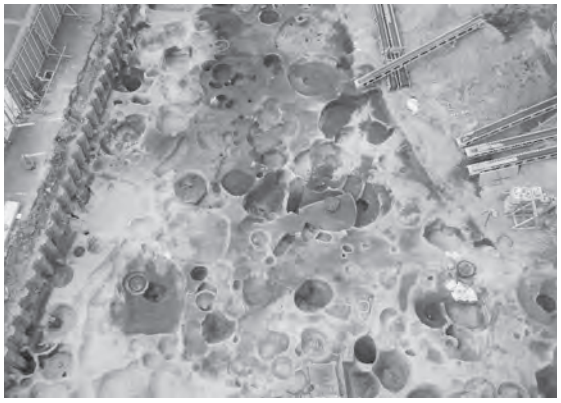


Ph.101　Ｃ区第３面全景



Ph.102　Ｃ区第３面全景・部分

Ph.103　Ｄ区第３面全景



Ph.104　Ｄ区第３面全景・部分

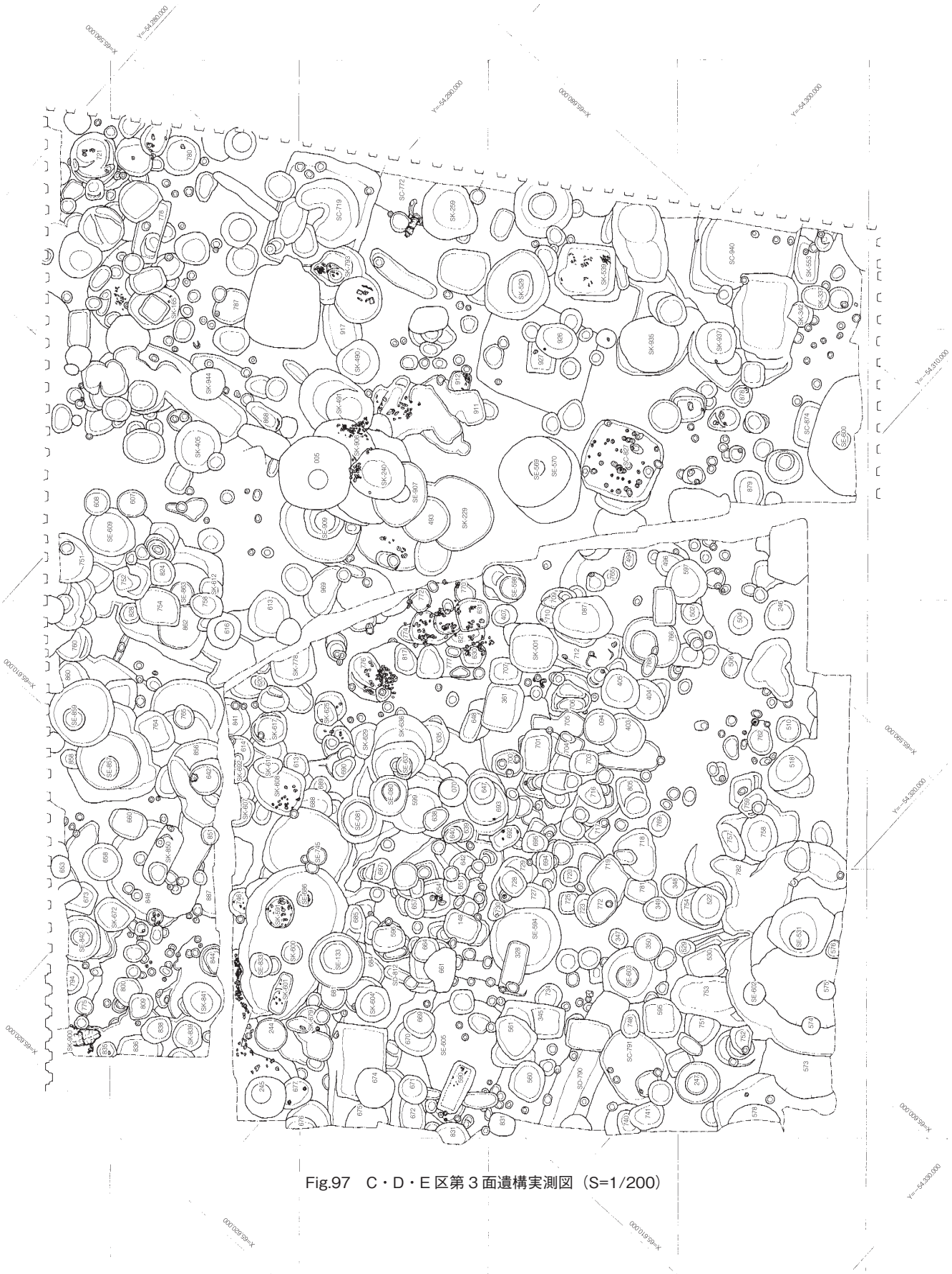


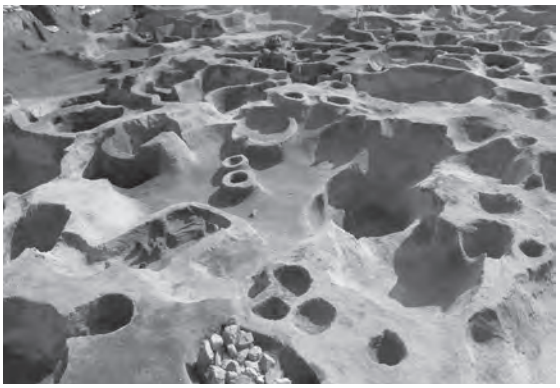
Fig.97　C・D・E 区第３面遺構実測図（S=1/200）

第４面（Fig.98）

Ｃ区では調査区の一部が遺構の激しい重複により第３面では全容を確認できなかったため、数カ所の範囲について掘り下げを行い第４面として調査を行った。また、第３面で完掘できなかった井戸遺構群の完掘作業を行っている。新たに検出した遺構としてはSK-800・803・806等の土坑とSE-605・SE-686等の井戸遺構、SK-791とした方形土坑等がある。これらの遺構の検出時には８世紀代の須恵器や弥生時代後期の土器などが出土した。これらの土器は複数の箇所に集中して出土するため本来は該期の遺構が展開していたものと考えられる。中世の井戸や廃棄土坑群の掘削に伴い失われたものか。Ｄ区では第３面で一部確認していた古代に属する住居群の完掘と井戸群の完掘作業を行い、全体的に掘り下げを行った。第４面で新たに検出した遺構としては弥生時代前期後半の土坑や中期の土坑、古代の方形井戸（SE-896・897）等がある。弥生前期の土坑からは磨製石剣の未製品と剥片・叩き石・砥石などが一括して出土しており、石器製作工房等の用途が想定できる。Ｄ区第４面で確認された古代の住居は８軒を数え、Ｃ・Ｄ区で合わせると10軒以上の住居群が検出できた。これらの住居群で構成される集落はほぼ同一主軸を採り規則的に配置されており、第172次調査地点東側に想定される「官衙域」に付随する居住域であった可能性が考えられる。

地形的にはＤ区南側に砂丘頂部が位置し、Ｃ・Ｄ区全体が砂丘北側緩斜面上に展開する形となり、これを追従するようにＣ・Ｄ区間で砂丘の地形変換点が確認されＣ区全体が北西側に向かい緩やかに傾斜していく状況が確認できた。Ｄ区で検出された遺構の残存状況より南端部では１～２ｍ程度古代前後に大きく削平し、北側の谷部を埋め立てて居住域･活動領域の拡大を行っていることが分かる。

Ｄ区で検出された弥生時代前期の遺構群は博多遺跡群内においてもっとも古い段階の資料であり、弥生時代の空間利用のあり方について貴重な資料を得ることができた。



Ph.105　Ｃ区第４面遺構検出状況

Ph.106　Ｃ区第４面遺構検出状況

Ph.107　Ｄ区第４面遺構検出状況

Ph.108　Ｄ区第４面調査状況

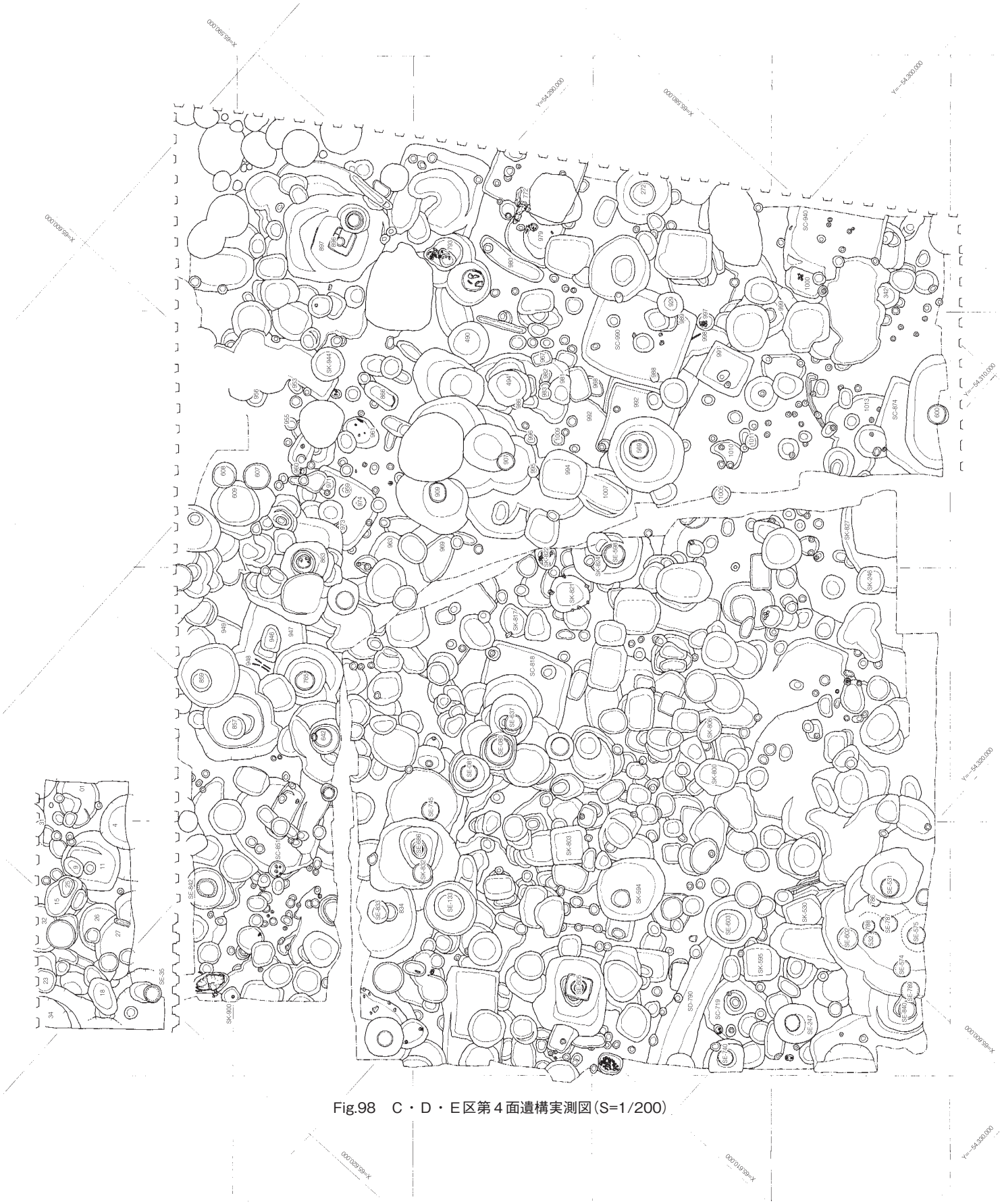


Fig.98　C・D・E区第４面遺構実測図(S=1/200)

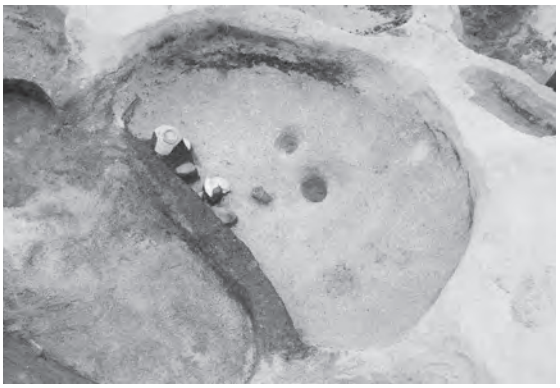
E区の概要（Fig.98）

E区とした調査は、本体建物に付随する地下埋設物の工事範囲について行ったもので、調査期間後半に追加された調査区である。排土搬出と工事行程の都合からD区調査終了後に土留め工事と表土掘削作業を実施し調査を行った。調査対象面積は約40㎡を測る。表土掘削の結果、基盤層である砂丘砂層直上まで地下室状の攪乱孔が存在していたため一面のみの調査を行った。検出された砂丘砂層面は標高3.25ｍ前後で、調査区内ではA・B区方向の北側へ緩やかに傾斜する。砂丘頂部へ向かう南側方向は古代以降の開発行為により大きく削平を受けているのかなだらかな平坦面となる。調査区内南北での比高差は30㎝前後を測る。検出した遺構は、井戸4基・廃棄土坑10基・柱穴などである。検出した井戸遺構は1基をのぞき掘方のみの検出であり、井筒の確認は行えていない。調査区内で井筒の確認できた井戸遺構（SE-35）は直径70㎝程度の結桶を井筒に転用したものである。位置的にB区で検出された溝遺構（SD-007）の延伸方向に当たり、調査区北端部土層断面でこれを確認した。廃棄土坑は直径1～2ｍを測る円形のもので、検出面から底面までの深さは1～1.5ｍを測る。埋土からは土師器坏・瓦器椀・白磁碗などが出土し、その概ねの年代観は11世紀後半から12世紀代のものと考えられる。E区とした調査区全体でコンテナケース10箱の遺物が出土した。隣接するD区北端部ではSK-900とした弥生終末期の甕棺墓が検出されており、これに関連する遺構・遺物等の検出が予想されたが、確認できなかった。注目される遺物としては皇朝十二銭の一つである延喜通寶が遺構検出時に出土した（Fig.303）。また狭小な調査範囲であったが墨書土器が8点出土した（Fig.300）。

古代以前に属する遺物は出土するものの遺構としては検出されなかった。中世の廃棄土坑・井戸の掘削により消失してしまったものと考えられる。遺構としては11世紀後半から14世紀代のものを検出し、他の調査区と同様に中世期の活発な活動の痕跡を確認した。

Ph.109　E区全景

Ph.110　E区全景



Ph.111　E区遺構検出状況

Ph.112　E区井戸遺構完掘状況

２．古代以前の遺構と遺物

（一）弥生時代・古墳時代の遺構と遺物

博多遺跡群内において最も早い段階の遺構が確認されていたのは博多濱南側砂丘列である砂丘１の西端部（現在の祇園町）の砂丘南側斜面付近で検出された弥生前期後半の甕棺墓である。中期になると博多濱全域で遺物が検出されるようになるが、集落の主体としては砂丘１の頂部から南側斜面付近を中心とした範囲内で収まることが想定されている。後期から終末期にかけては活動領域が博多濱全域に及ぶことが知られている。古代以後の開発に伴う削平の影響を受けにくい砂丘鞍部で実施される調査では東海系や畿内系の土器が出土しており、活発な交流が行われていたことが分かる。古墳時代には砂丘１に大集落が営まれ鉄器の製造が行われる。古墳時代中期には前方後円墳が砂丘上に築造されるなど、海上交易での重要拠点であったことが知られている。

第 172 次調査地点は砂丘１の頂部付近から北側斜面上に位置していることや中世前半期の遺構群が濃密に分布していることが知られていたことから、古代以前の遺構については良好な状態での検出は難しいものと予想していた。しかしながらＤ区の遺構検出および各遺構面掘り下げの結果、弥生時代前期後半から中期にかけての遺構が検出され、弥生前期段階の活動域が砂丘１の部分的なものではなく広範囲にわたるものであったことが判明した。とりわけＤ区で検出した SK-961 とした土坑は石剣未製品と叩き石などの工具が同時に出土していることから磨製石剣の製作工房である可能性が考えられ、限定的にしろ砂丘１の北側緩斜面上で定住が行われた傍証ともいえる。また SK-960・1000 とした土坑からは博多遺跡群内でも早い段階の土器が出土しており、この時点では風濤にさらされていた砂丘１に活動域を求めた人々の生業を理解する上で貴重な資料を得ることができた。今後行われるであろう周辺調査での類例の増加が望まれる。Ｃ・Ｄ区では中期・後期前半の遺構はあまり見られないが多くの土器が出土しており、継続的に活動域の含まれていたことが分かる。後期～終末期の遺構としては SK-900 とした甕棺墓が検出された。本調査区を含む博多濱中央部から北半部（現在の冷泉町一帯）では終末期から古墳時代初頭にかけて甕棺墓が単独の状態で検出される事例が多い。砂丘南部域の集落域に伴う墓域としての空間利用がなされていたことが想定できる。

遺物としては弥生土器・蛸壺・黒曜石の石核、石錐、剥片・片刃石斧、石包丁、叩き石や砥石等の石器等が博多遺跡群内の調査としては珍しくまとまった量で出土した。

古墳時代に属する遺構としてはＣ・Ｄ区においては SK-997 や SK-998 とした土坑墓などが検出されたにすぎない。しかしながら古墳時代前期に属する土器が遺構面の掘り下げ時にまとまって出土した。本調査地点東側 50 m地点で実施された第 175 次調査ではこの段階の集落が検出されており、砂丘頂部付近から南側緩斜面に占地して集落が営まれていたことが分かり、砂丘北側緩斜面にかかる本調査地点は集落の縁辺であったこと可能性が想定できよう。

Ph.113　Ｄ区　SK-900 甕棺墓

Ph.114　Ｄ区　SK-961 検出状況

SK-961（Fig.99）

D 区第 4 面№3 で検出した土坑である。長軸 1.5 m×短軸 1.1 mを測る楕円形土坑で、検出面から土坑底面までの深さは 40㎝を測る。平面形検出時に磨製石剣未製品・叩き石と無頸壺が確認できた。土坑墓である可能性も考えられたが、掘り下げの結果土坑埋土から未製品と接合する剥片や砥石・叩き石・黒曜石剥片などの工具や甕口縁部片が出土したため、石器製作工房の一部と判断した。埋土は暗褐色砂で土坑底面には柱穴などの痕跡は確認できない。

出土遺物を Fig100 に示した。

1 は無頸壺である。底部は平底で円盤状の底部に粘土紐を巻き上げて成形する。外面には指頭圧痕と刷毛目調整が残り、口縁部はナデ調整される。内面はナデ痕跡が明瞭に残る。焼成は良好で色調は褐色を呈し、一部に赤色顔料が残る。2 は磨製石剣未製品である。石材は安山岩質凝灰岩ホルンフェルスで、埋土からは敲打で剥離した剥片数点が出土する。いずれも接合できる。大剥離と小剥離を使い分けて、刀身中心線を微調整する。一部に研磨痕が残るが、製作途中で埋納・廃棄されている。

3 は花崗岩製の磨り石である。

4 は敲石である。花崗岩製で両端部と両側面に敲打痕が残る。5 は敲石である。両端部に敲打による剥離痕が残る。6 は砥石である。細流砂岩製で、両面が砥面として使用される。この他には扁平片刃石斧や黒曜石剥片などが出土した。

出土遺物より弥生時代前期後半に属する遺構と考えられる。初現期に石器の粗加工を目的とした工房が存在していたことは、博多湾岸沿いの石器素材の流通形態と経路を復元する上で重要な資料となろう。

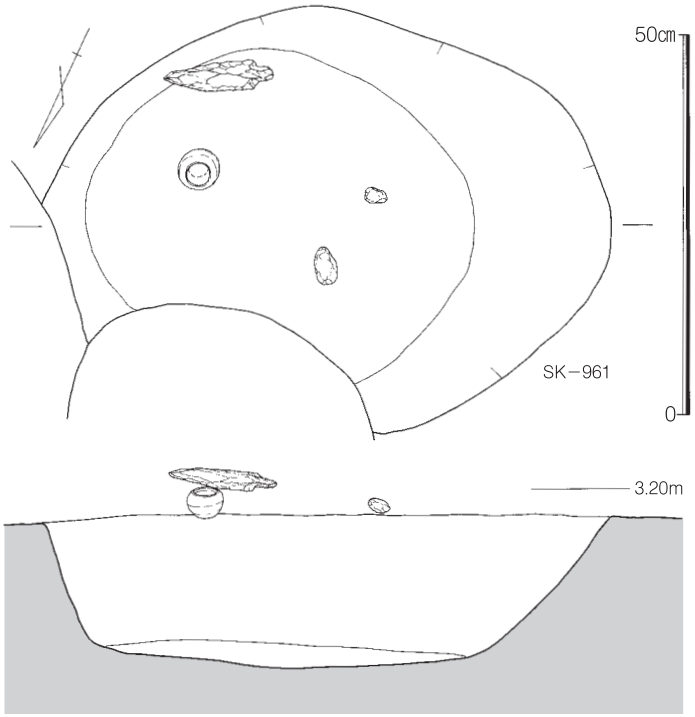


Fig.99　D 区 SK-961 遺構実測図（S=1/10）

Ph.115　D 区　SK-961 掘り下げ状況

Ph.116　D 区 SK-961 遺物出土状況

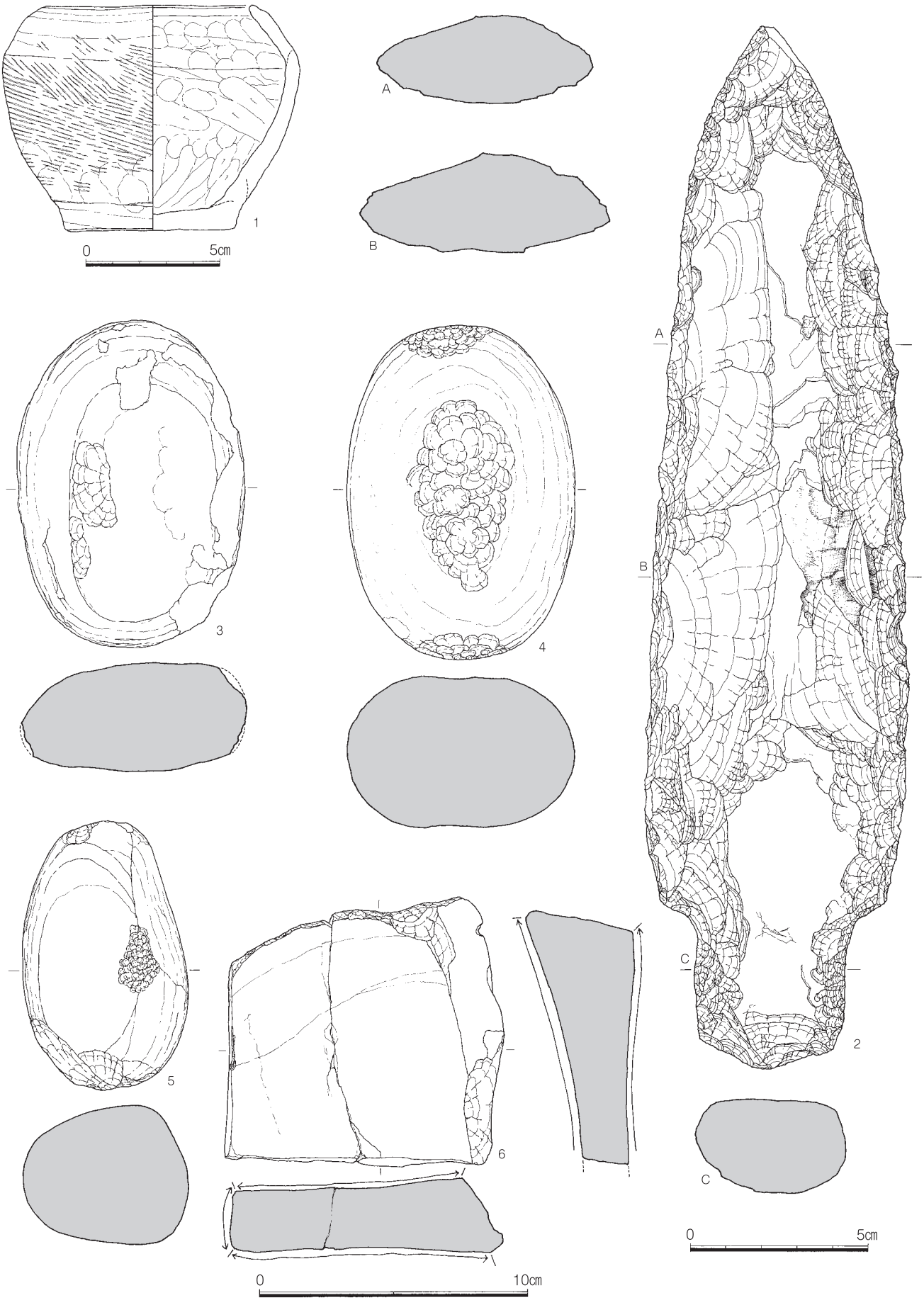


Fig.100　D区 SK-961 出土遺物実測図（S=1/2，2/3）

SK-960（Ph.117）

D 区第 4 面№3 の SK-961 近くで検出した土坑である。他の遺構に切られており、全容は不明確であるが、円形土坑であったと考えられる。土坑内からは弥生時代前期の甕がつぶれた状態で出土した。出土遺物を Fig102 に示した。

１は弥生土器甕である。如意形の口縁部を持つ甕で、口縁端部に刻み目を施し、頸部には浅い段を持つ。密な刷毛目調整が施され、内面はナデ調整される。２は弥生土器壺である。文様帯を沈線文で画し、内部に貝殻腹縁部による羽状文を施す。文様帯以外の外器面はヘラ磨きが施される。弥生時代前期後半の遺物である。

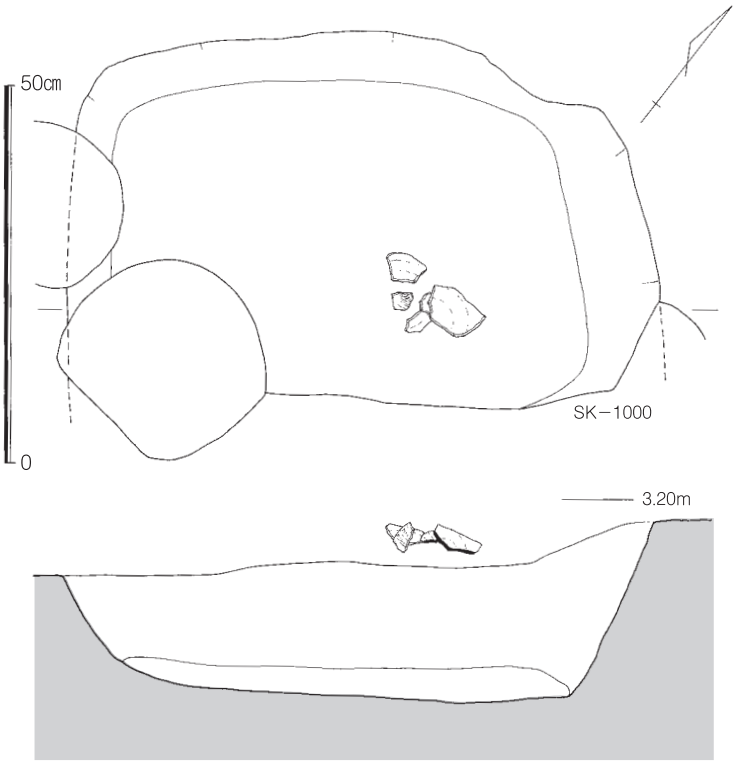


Fig.101　D区 SK-1000 遺構実測図（S=1/10）

SK-1000（Fig.101）

D 区第 4 面№8 で検出した方形土坑である。土坑南側を SC-940 に切られるため全容は不明確であるが、長軸 1.5 m前後の規模が復元できる。検出面から底面までは 50cmを測り、底面はほぼ平坦となる。埋土は汚れた褐色砂で、埋土上層から壺が潰れた状態で出土した。出土遺物を Fig.102 に示した。

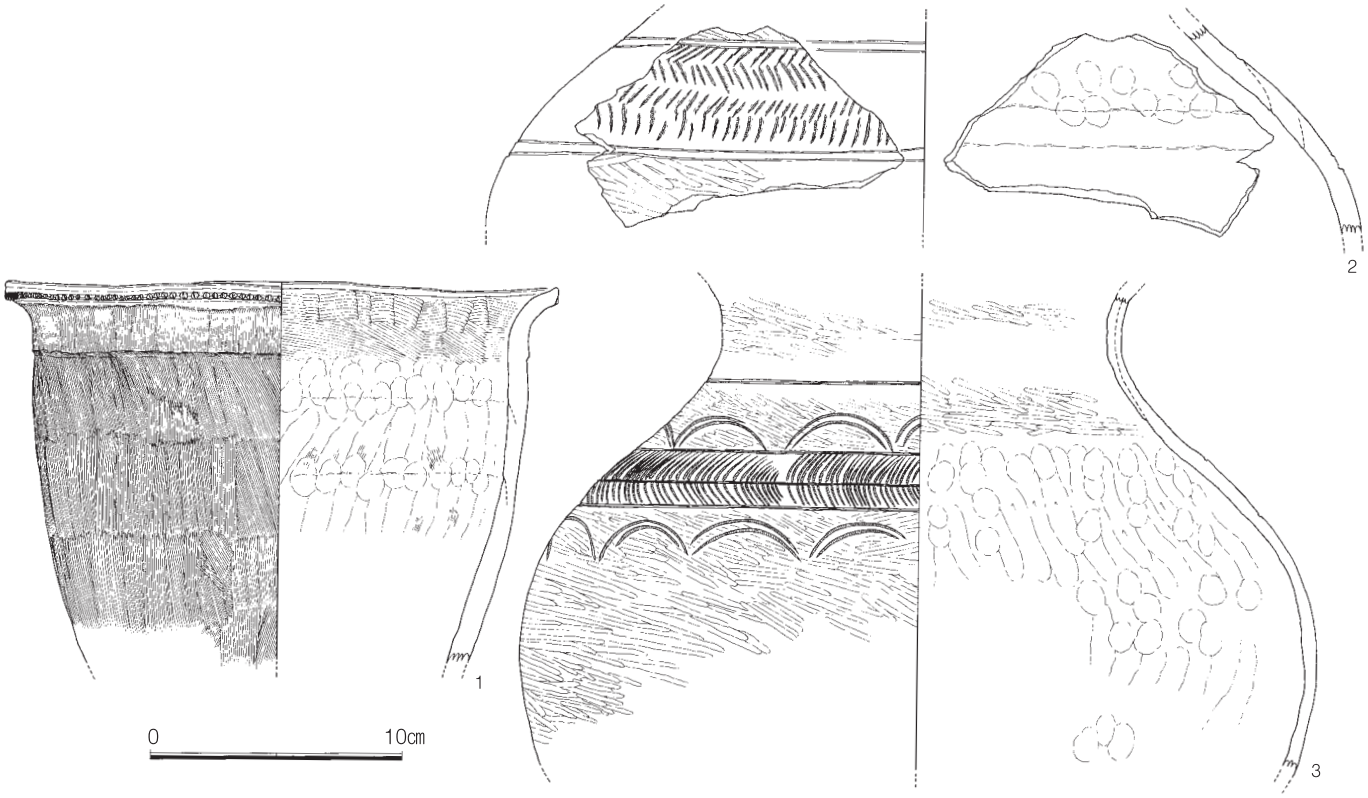


Fig.102　D区 SK-960・1000 出土遺物実測図（S=1/3）

Ph.117　D 区 SK-960 遺物出土状況

Ph.118　D 区 SK-997 遺物出土状況

３は弥生土器壺である。口縁端部を欠損するが、頸部下に沈線を一条巡らせ沈線文により画された文様帯には貝殻腹縁部による有軸羽状文を施す。文様帯の上下には重弧文が施される。体部にはヘラ磨きを施す。内面には指ナデ痕とヘラ磨き痕が観察できる。

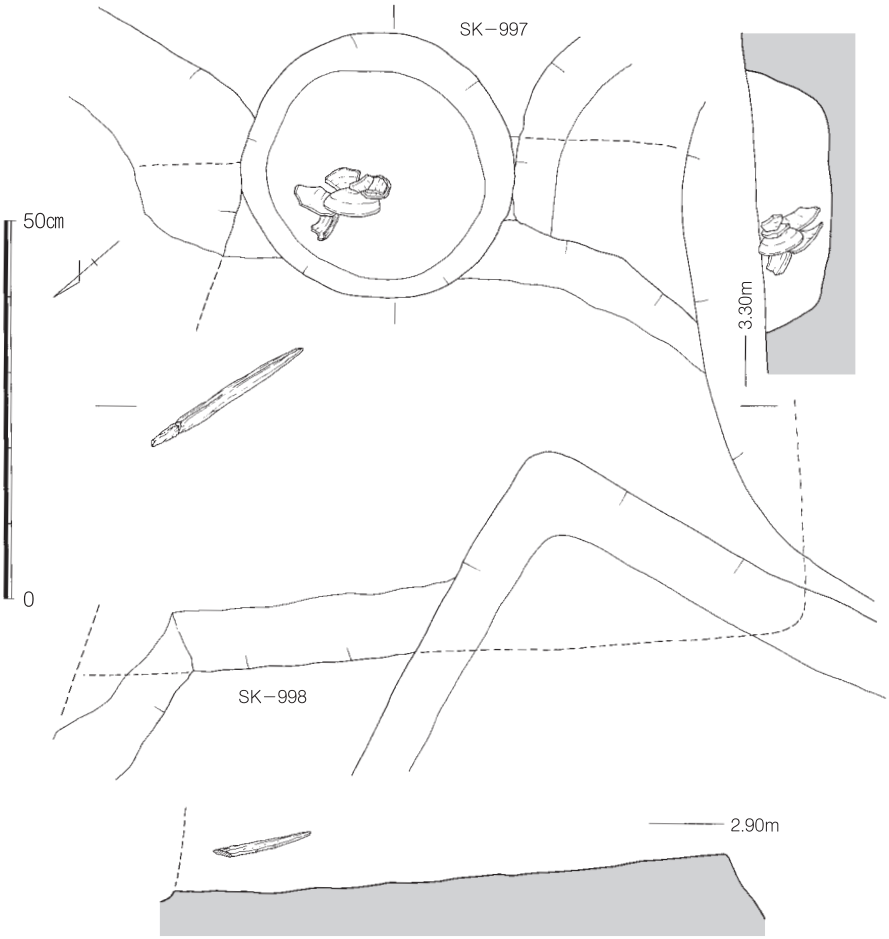


Fig.103　D区 SK-997・998 遺構実測図（S=1/10）

SK-997（Fig.103）

D 区第 4 面№6 付近で検出した直径 70cm程度の円形土坑で土坑内からは土師器蓋と破損した複合口縁壺が出土した。出土遺物を Fig.104 に示した。

１は土師器複合口縁壺である。口縁端部と底部を欠損する。残存高 58cm、胴部最大径 34cmを測る。胴部中程に刻み目を施す突帯を巡らす。刷毛目調整は原体の広いものと狭いものを併用して調整する。色調は橙色を呈し、頸部に赤色顔料が残る。２は土師器の蓋である。口径 16.6cm、器高 5.8cmを測る。焼成は良好で色調は橙色を呈する。外面は荒い刷毛をナデ消し、天井部はヘラ削りで調整する。内面はクモの巣状に刷毛目調整を施す。これらの遺物より弥生時代終末期から古墳時代初頭の時期が考えられる。

SK-998（Fig.103）

D 区第 4 面№6 付近で検出した土坑であるが、SC-991・992 等の遺構に周囲を切られるため正確な平面形をとらえることができなかった。南側で直線的な掘方が確認できたことから長方形土坑と考えられる。土坑底面から 10cm程度浮いた状態で鉄剣が鋒を南に向けた状態で出土した。SK-997 に切ら

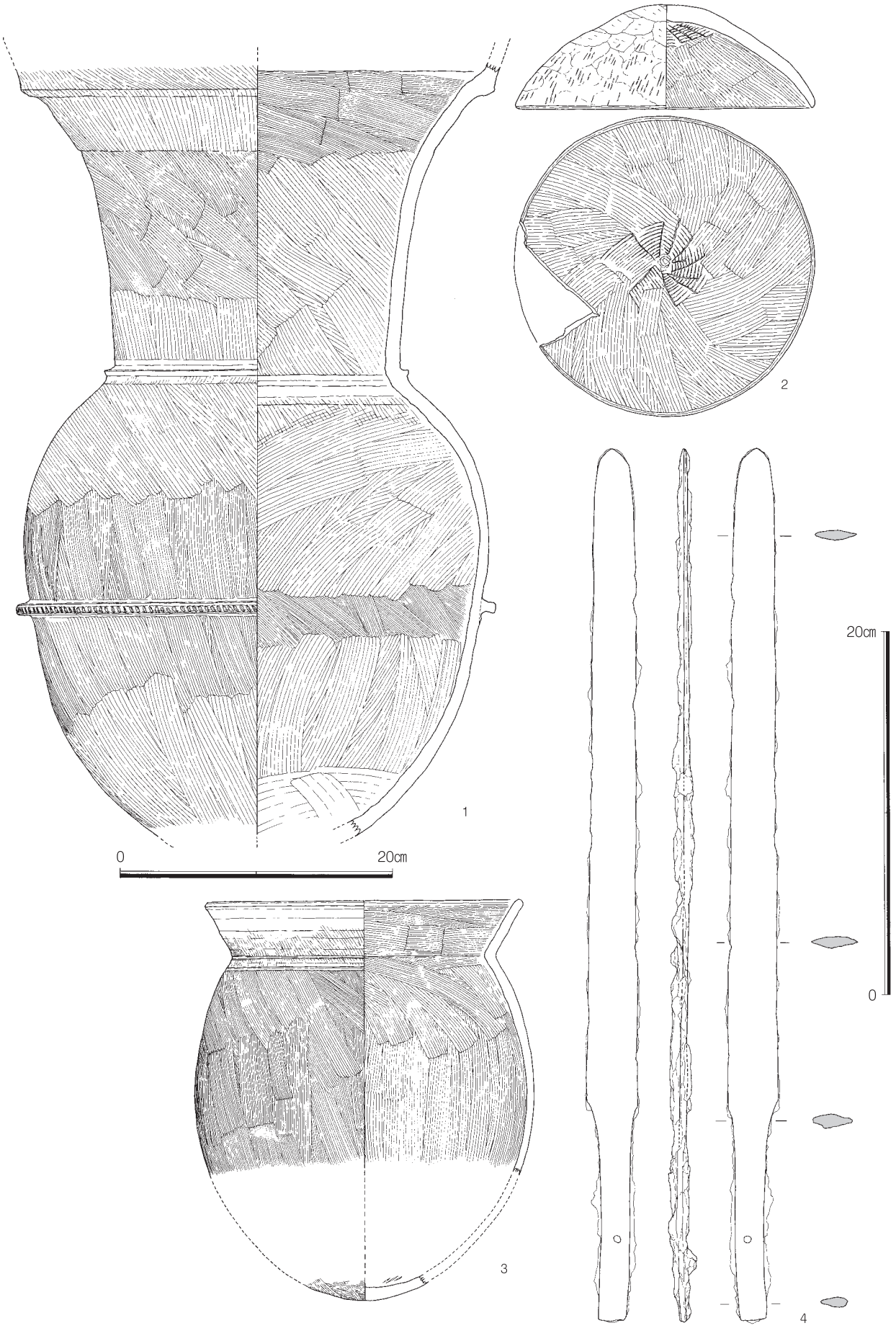


Fig.104　D区出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

れる遺構であることから古墳時代初頭の土坑墓と考えられる。埋土は暗褐色砂で底面は南側に向けてわずかに高くなる。土層断面の観察を行ったが明確な層位の差異を確認することはできなかった。出土遺物を Fig.104 に示した。

３は土師器壺である。頸部下に浅い沈線を一条巡らせる。底部は欠損範囲が多いが丸底を呈する。内外面ともに密に刷毛目調整を施す。

４は鉄剣である。錆による浸食が進み目視による観察は難しいが、X 線により柄部に目釘孔が残ることが判明した。弥生時代後期後半から終末期の遺構と考えられる。

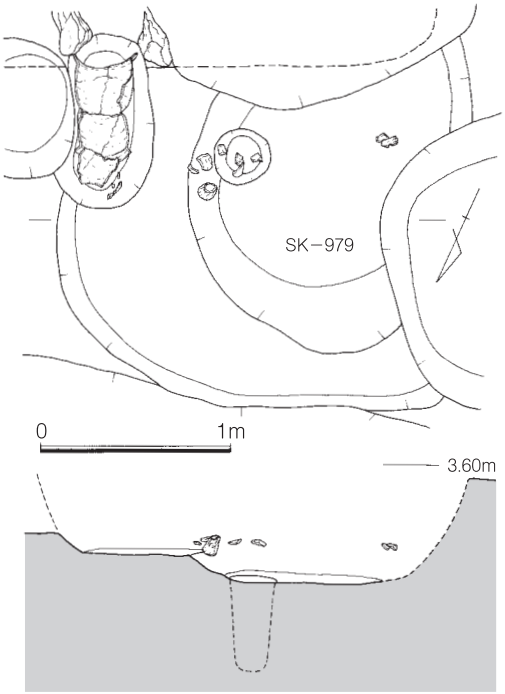


Fig.105　D 区 SK-979 遺構実測図（S=1/40）

SK-979（Fig.105）

D 区第 4 面№4 で検出した土坑である。SC-772 や他の土坑に切られるため全容は不明確であるが、楕円形土坑と考えられる。土坑内部は一段低くなり、この段付近から蛸壺や土器片が出土した。

出土遺物を Fig.106 に示した。１は弥生土器の鉢である。指押さえで成形したあとに刷毛目調整で整える。２・３は蛸壺である。４は弥生土器器台である。被熱により破片は細かく破損する。ナデ調整と指押さえで成形し、幅の広いナデ調整で整える。これらの出土遺物より弥生時代終末期の時期が考えられる。蛸壺などの漁労具の出土からこの時期の生業の一端を垣間見ることができる。

Ph.119　D 区 SK-998 鉄剣出土状況

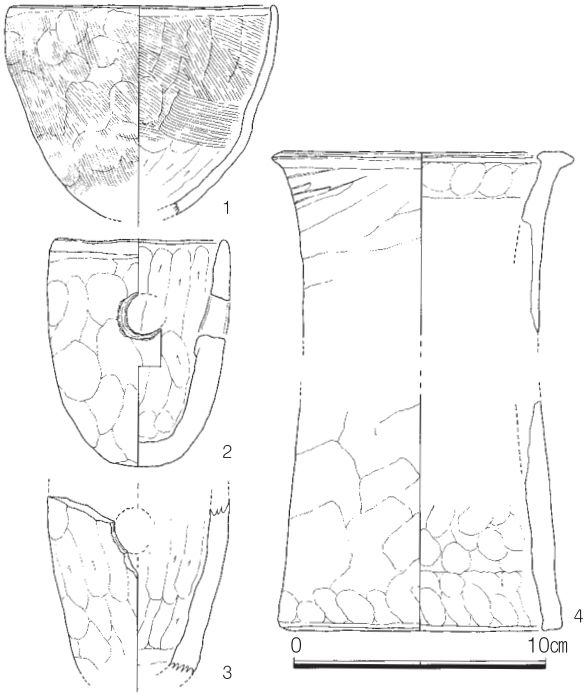


Fig.106　D 区 SK-979 出土遺物実測図（S=1/3）

Ph.120　D 区 SK-979 遺物出土状況

SK-900（Fig.107）

D 区北端部である№.15 で検出した甕棺墓である。中世段階の土坑掘削などに大きく削平を受け、上甕・下甕ともに上半部が欠損する。後世の土坑掘削などにより掘り起こされた甕棺の破片が、周辺に散乱した状況で出土した。合口式であるが、上甕の口縁部と底部は打ち欠かれており、下甕に差し込まれて埋葬されたことが分かる。上甕底部の打ち欠いた穴を高坏坏部で蓋をしており、３つの土器を使用した甕棺墓である。

第２面遺構掘り下げ時に柱穴底面から甕棺の一部確認されていたため、第３面への掘り下げ時には墓坑の検出を同時に行ったが、墓坑自体は南側の一部を除いて消失していた。検出面の標高は 3.10 m前後を測り、墓坑底面の標高は 2.65 m前後となる。墓坑上面は大きく攪乱されているため正確な平面形は把握できないが、底面の形状から長軸 1.90 m×短軸 0.90 mの楕円形が復元できる。

甕棺の埋葬主軸は N-19°-E 前後の方向を採り、約 18°の傾斜で甕棺が検出される。

Fig.10 に出土遺物を示した。

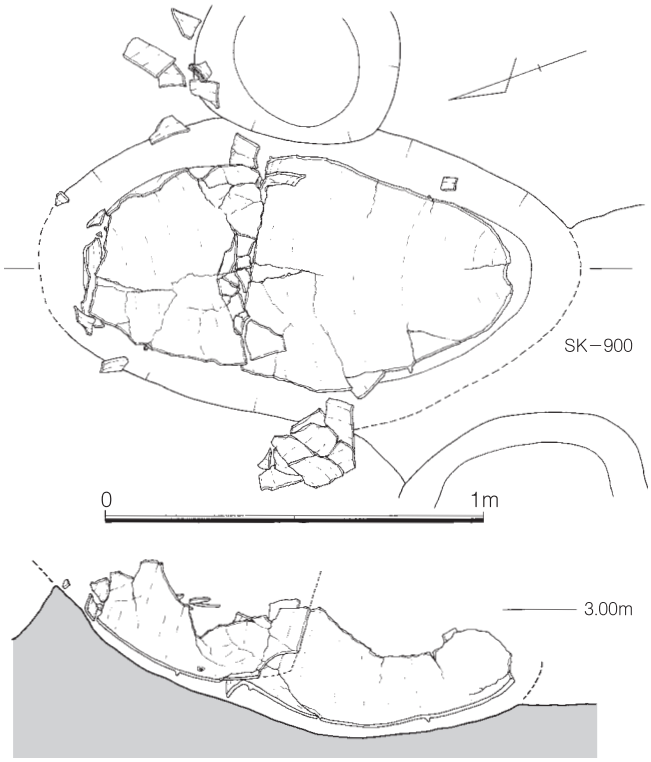


Fig.107　D区 SK-900 遺構実測図（S=1/20）

１は下甕に使用された甕である。頸部と胴部下半に断面形が台形の突帯を巡らす。突帯にはヘラ状工具突端部で斜行する刻み目が施される。外器面には上部方向への刷毛目調整が施される。内器面は粘土の接合痕跡が明瞭に残り刷毛目調整でも解消されていない。胴部下半部に内面方向から穿孔される。焼成は良好で色調は暗褐色～褐色を呈する。

２は上甕に使用された甕である。口縁部と底部付近は埋葬にあたり意図的に打ち欠かれている。頸部と胴部下半部に突帯を巡らす。頸部下の突帯は断面形が三角形を呈し、横長の刻み目が施される。胴部下半の突帯は断面形が台形を呈し、縦長の刻み目を施す。内・外器面ともに幅の広い刷毛目調整で大まかな器面調整を行ったのち、細かい刷毛目調整で微調整を行っている。胴部中程に外面からの穿孔を施す。

Ph.121　D区 SK-900 掘り下げ状況１

Ph.122　D区 SK-900 掘り下げ状況２

3は上甕底部を塞ぐために用いられた高坏坏部片である。復元口径22.2cmを測る大型の高坏で、蓋として使用するに際に脚部が存在していたかは不明である。内外器面ともに密なヘラ磨きが施される。焼成は非常に良好で、胎土は精緻なものが使用される。色調は橙色を呈する。

なお、甕棺内からの人骨・副葬品の出土はなかった。

前述したように博多濱で検出される弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての甕棺墓は単独で埋葬されるものが多く、墓群を形成しないことが傾向としてあげられる。また埋葬形態も単棺で木蓋などの有機物を使用するものが多いことも特徴として挙げられる。

この時期の甕棺墓の分布状況を見てみると博多濱北側砂丘列に点在して埋葬されたことが分かる。集落内からの墓域の分離と、集団墓から個人墓への転換期にあたるのであろう。

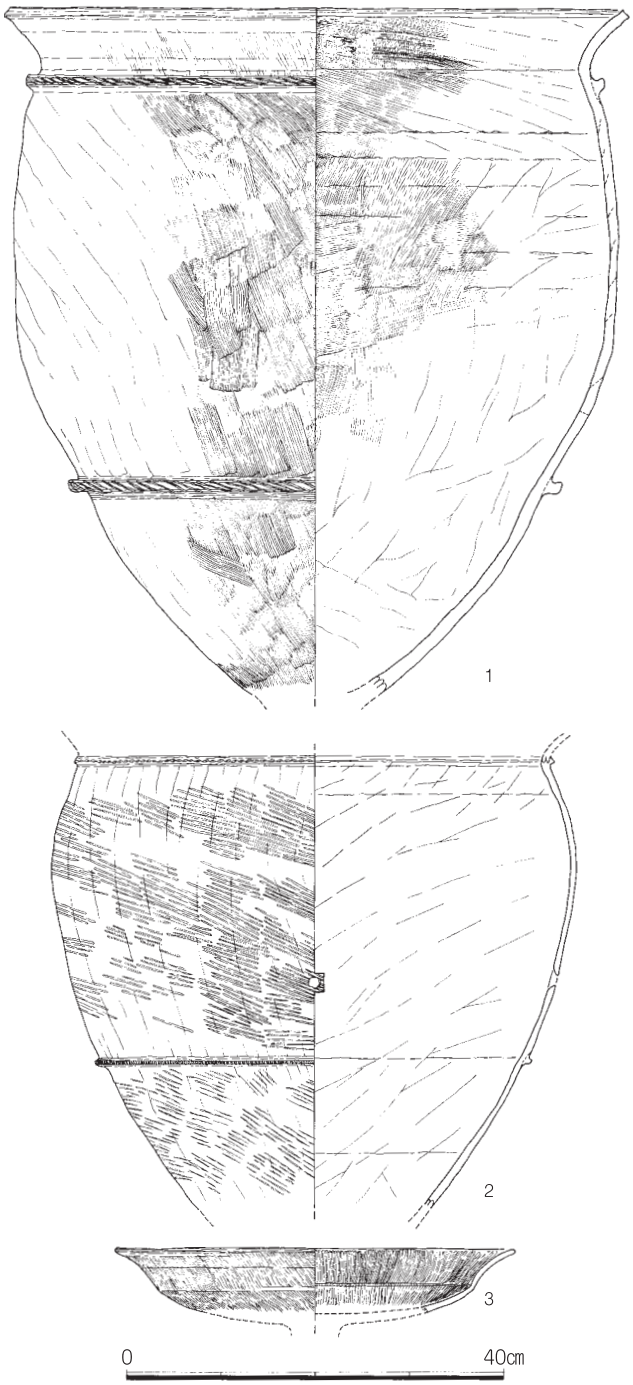


Fig.108　D区 SK-900 出土遺物実測図(1/8)

Ph.123　D区 SK-900 掘り下げ状況3

Ph.124　D区 SK-900 掘り下げ状況4

その他の出土遺物・古代以前（Fig.109 ～ 112）

第 172 次調査では大量の中世の遺物に混じって弥生時代・古墳時代の遺物が出土した。これらの遺物の中には弥生時代前期後半に属するものがあり博多遺跡群で出土する遺物の中でも早い段階に位置づけられ、弥生時代集落の動向を探る上でも貴重な資料である。これらの出土遺物の中でも特に重要と思われるものについて説明を行う。1 ～ 25 はＣ区、26 ～ 56 はＤ区の出土遺物である。

1 はＣ区 2 面下掘り下げ時に出土した弥生土器複合口縁壺である。波状文が施された口縁部と肩部を持つ壺で、非常に精緻な胎土を持つ。2 は弥生土器壺頸部片である。9・16 は弥生時代中期に属する土器でＣ・Ｄ区では出土数はわずかである。25 は土製品である。種子を模したもので用途不明。26 は終末期の複合口縁壺である。28 は波状文を施す弥生後期の壺口縁部片である。30 ～ 36 は弥生時代前期後半の甕である。Ｄ区の№.2 と№.6 付近から集中して出土したもので、この付近に住居等の遺構が存在していたものと考えられる。41 はＤ区 SK-495 出土の土師器高坏である。44 はＤ区 2 面下掘り下げで出土した製塩土器脚部片である。

Fig.111-1 はＣ区 SK-777 出土の石剣未製品である。安山岩質凝灰岩ホルンフェルスが用いられる。2 はＣ区 1 面下掘り下げ時に出土した黒曜石製の石鏃である。3 はＤ区 2.5 面下掘り下げ時に出土した方柱状片刃石斧である。4 はＤ区№.1・3 の 3.5 面下掘り下げ時に出土した頁岩製の扁平片刃石斧である。5 はＤ区 SK-320 出土の方柱状片刃石斧である。6 はＣ区 SK-492 から出土した方柱状片刃石斧または抉入方柱状片刃石斧である。石材は黒灰色頁岩である。7 はＣ区№.1 付近 3 面下掘り下げ時に出土した頁岩製の扁平片刃石斧である。8 はＤ区№.8 付近の 3 面下掘り下げ時に出土した頁岩製の扁平片刃石斧である。9 はＤ区 SP-223 出土の凝灰岩製の棒状蛤刃石斧である。10 はＤ区 SK-885 出土の黒曜石製のスクレイパーである。11 はＣ区 1 面下掘り下げ時に出土した黒曜石製剥片石器である。12 はＣ区№.11 の 3 面下掘り下げ時に出土した頁岩の剥片である。13 はＤ区№.3 の 3 面下掘り下げ時に出土した黒曜石製のスクレイパーである。14 はＣ区 SK-587 出土の石包丁未製品である。安山岩質凝灰岩製の 15 はＤ区 SD-24 出土の滑石片岩製の石錘である。16 はＤ区 SK-07 出土の片刃石斧である。17 はＣ区 1 面下掘り下げ時に出土した舌状石製品である。

18 はＣ区 2 面下掘り下げ時に出土した石包丁である。19 はＤ区 SC-992 出土の石包丁片である。

20 はＣ区 SK-473 出土の石包丁片である。21 はＣ区 SK-827 出土の石包丁未製品である。18 ～ 21 はいずれも安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製である。

22 はＤ区出土の石製品である。23 はＤ区 2 面下掘り下げで出土した石包丁である。24 はＤ区 SC-940 出土の石包丁である。25 はＣ区 1 面下掘り下げ時に出土した板状石製品である。

26 はＤ区 2 面下掘り下げで出土した石包丁である。

27 はＣ区 SK-746 から出土した磨製石器である。28 はＤ区 SK-259 から出土した滑石製紡錘車である。古墳時代に属する遺物である。29 はＣ区 2 面下掘り下げで出土した安山岩製の擂石皿である。

これらの弥生時代～古墳時代に属する遺物を概観してみると、弥生時代前期後半の古い段階のものが多くを占め、中期段階になると遺物は減少する。集落の主体が砂丘 1 の東側に展開していくことに関わりを持つのか。後期には再び遺物量が増加する。搬入品も多く見られ、交易の重要拠点として活発化した段階である。古墳時代初頭の時期も同様の傾向が見られ集落域の一部として取り込まれていたことが想定される。古墳時代中期には博多遺跡群内から集落が見られなくなるように、遺物の出土も極端に減少する。ふたたび人々の活動の痕跡が見られるようになるのは古墳時代後期以降のことで、古代には官衙が設置されるなど拠点的な集落が連綿と存在していたことが分かる。

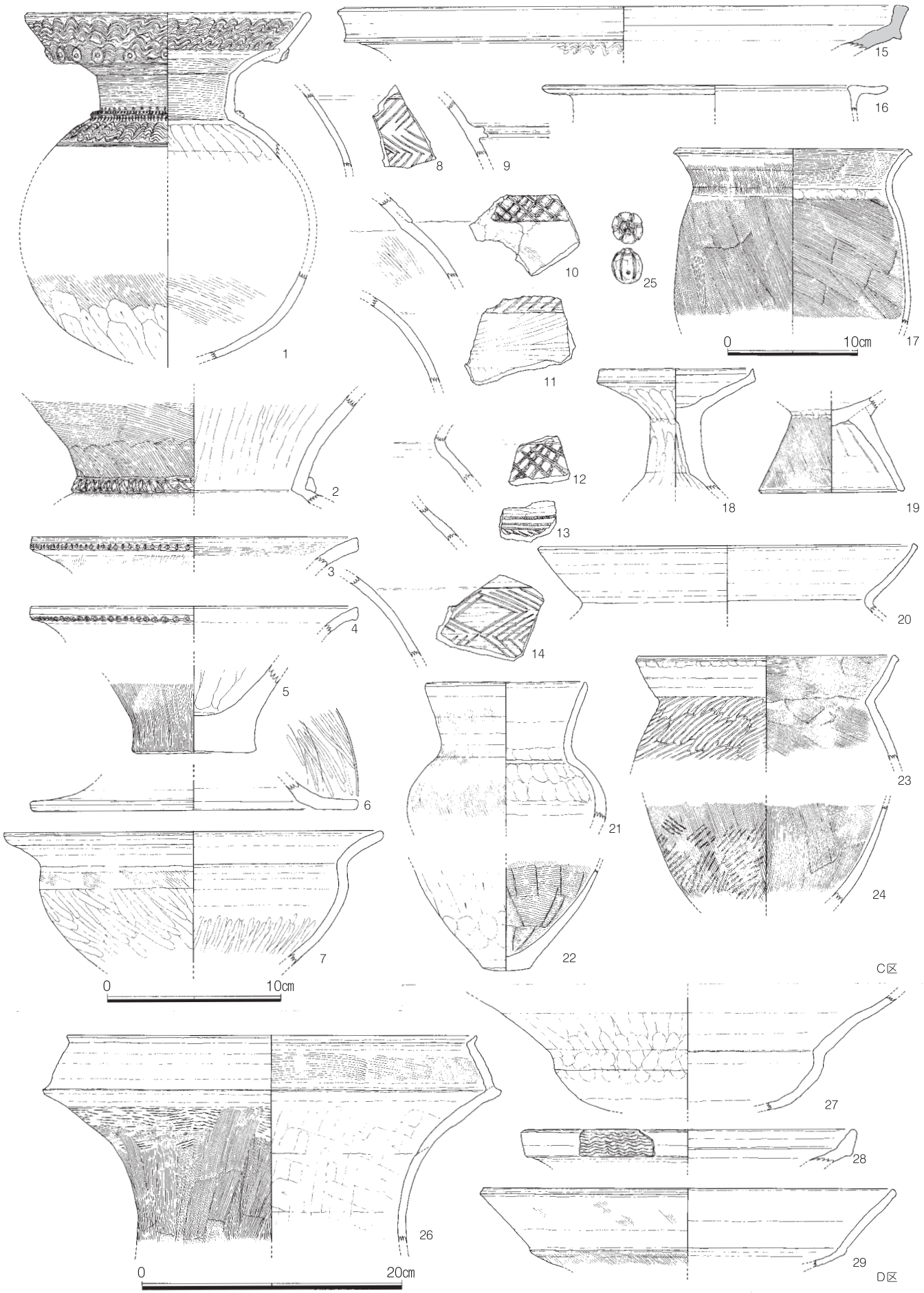


Fig.109　C・D区その他の出土遺物・古代以前１（S=1/3・1/4）

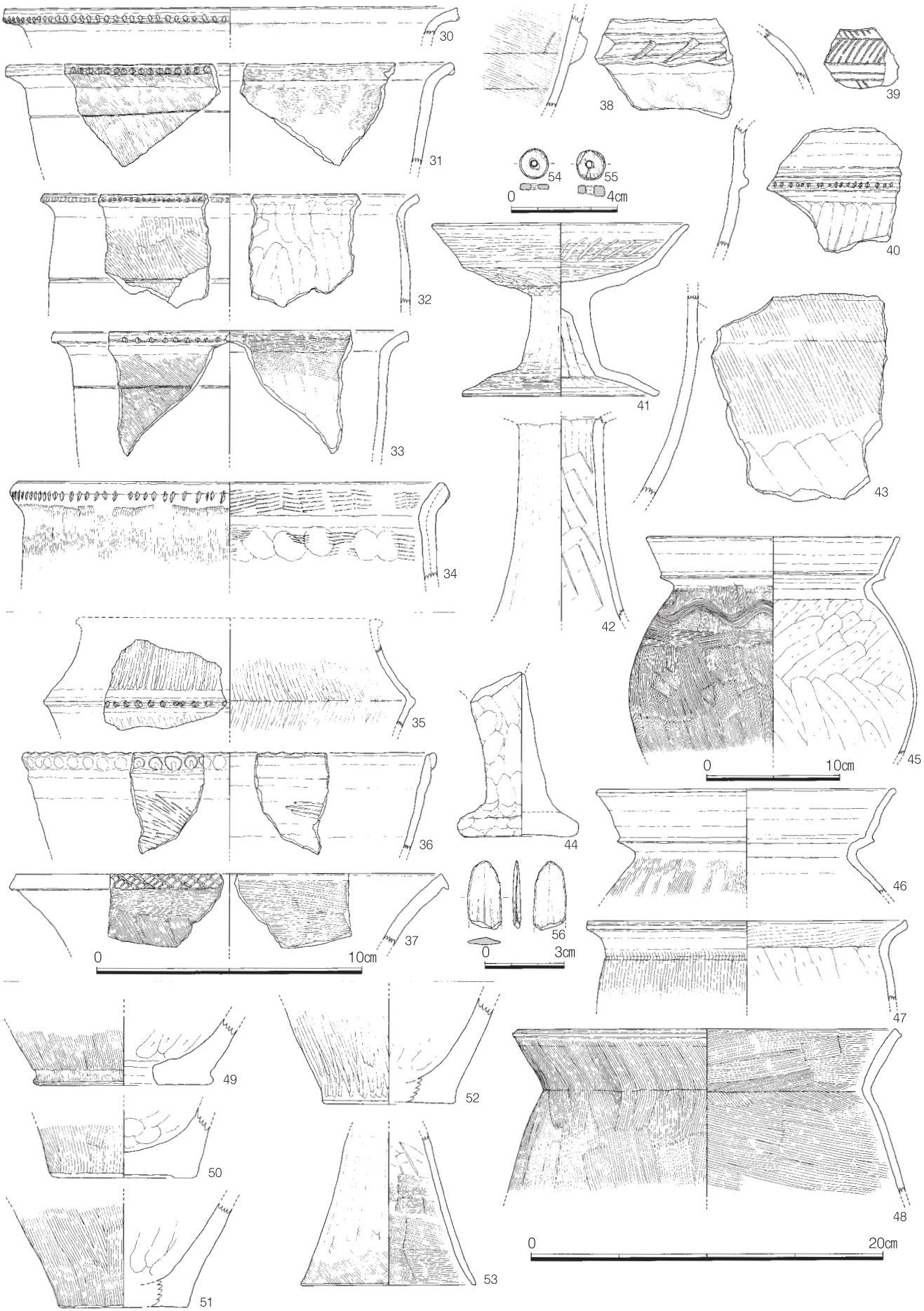


Fig.110　C・D 区その他の出土遺物・古代以前２（S=1/2・1/3・1/4）

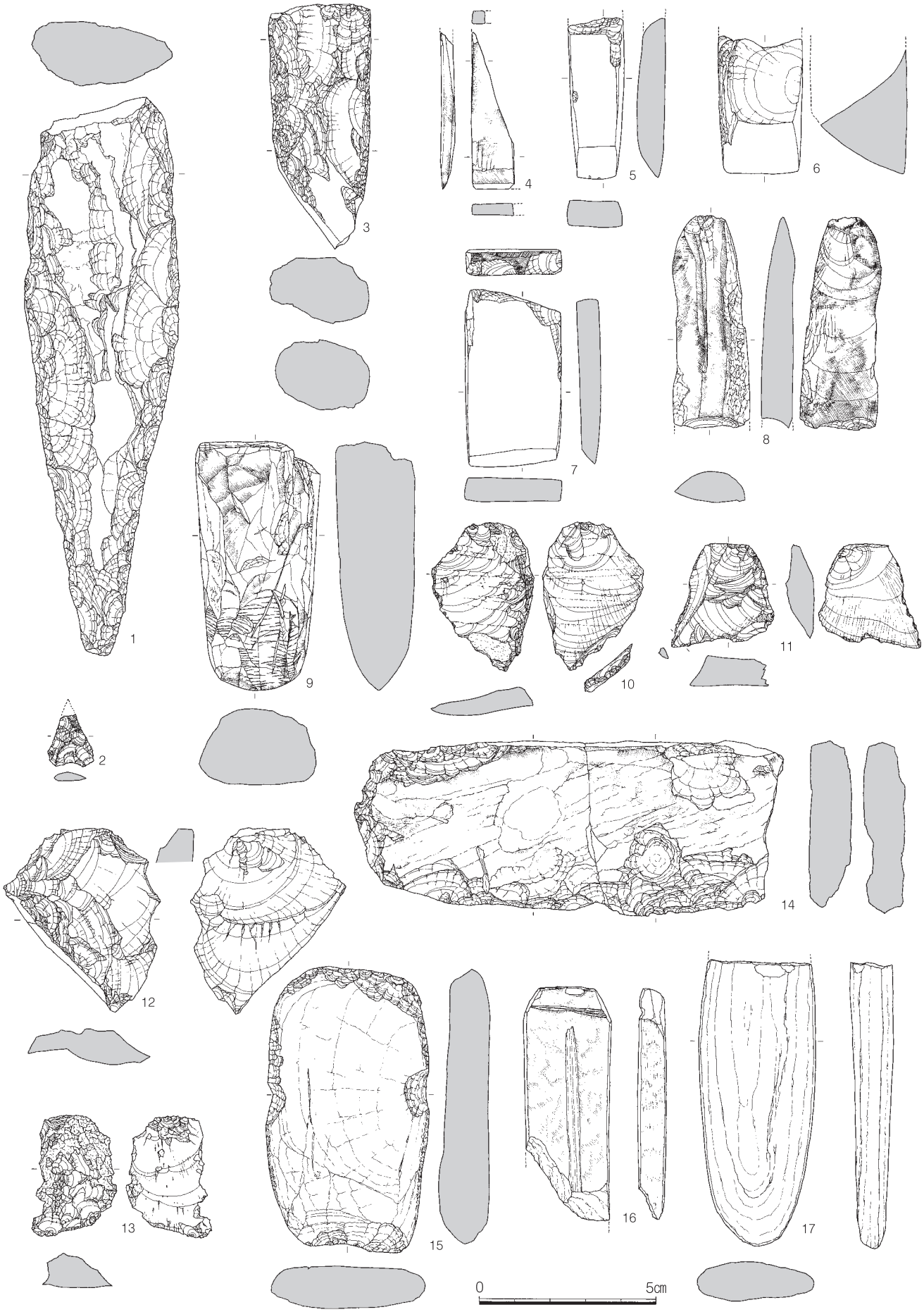


Fig.111　C・D・E区その他の出土遺物・石器１（S＝2/3）

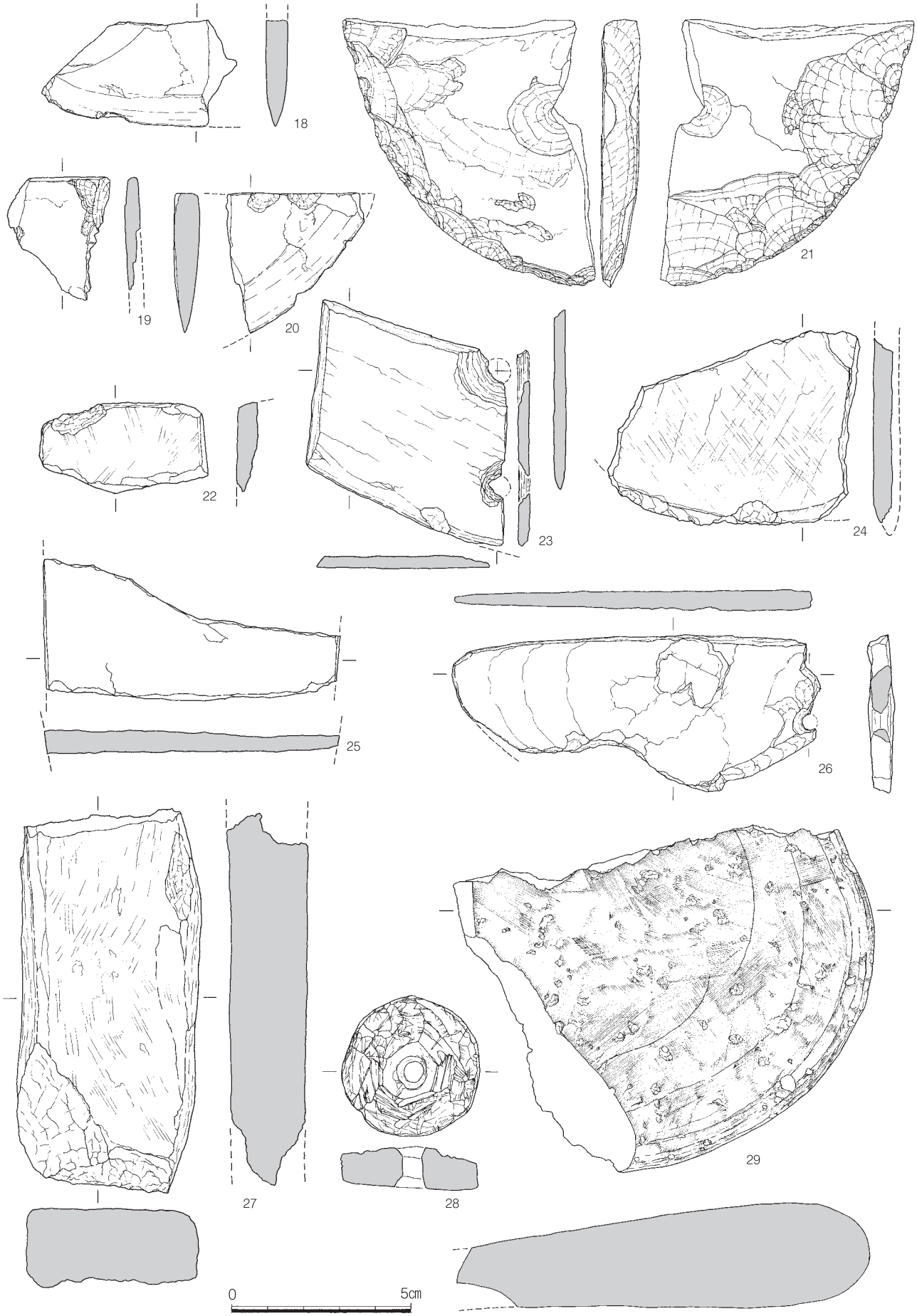


Fig.112　C・D・E区その他の出土遺物・石器２（S＝2/3）

（二）古代の遺構と遺物

C・D 区では第 3 面以下での調査で、古代に属する遺構を検出した。

C 区の調査では古代の時期に属する遺構は、中世前半期の廃棄土坑群や井戸遺構により大きく攪乱されている状況が見られた。第 1・2 面での中世期の遺構掘り下げ時には須恵器や古代の土師器が多く出土していたため、古代遺構の残存状況は良好ではないといえる。本来は検出された以上の遺構が存在していたことが推測できる。C 区においては区画溝・住居・井戸等の古代に属する遺構を検出し調査を行った。

C 区の調査成果から砂丘頂部に近い D 区においては、基盤層である砂丘砂層面が浅く検出されることや、中世期の遺構群が濃密に検出されたことから、大きく攪乱されて残存していないことが予想されていた。掘り下げの結果、竪穴住居群と井戸遺構、これに伴う土坑などを検出し予想外の成果を得ることができた。検出された竪穴住居群はほぼ同一の主軸方向を持つもので、その遺構配置にも規則性が見られる。検出された住居でカマドが残存していたものは 1 軒とわずかではあるが、土師器甕を転用して煙道とする事例は注目される。砂丘砂層面上に掘削された煙道は、素掘であれば簡単に崩落してしまうためで、麦野遺跡等で検出される同時期の住居には見られない特異な構造である。

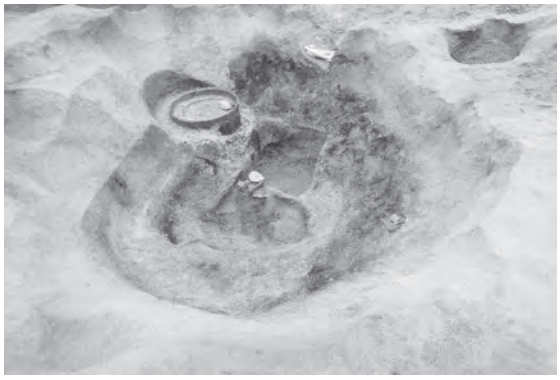
これらの住居とともに検出・調査した井戸遺構（SE-896・897）も C 区で検出した SE-605 と同様の主軸で掘削されており、区画溝の内側に住居・井戸が整然と配置された集落の様相を想定できる。なお、この区画溝は A 区においてもその延伸部分が検出されており、調査区全体では約 35 m分を検出したことになる。A・B 区の第 4 面は古代の遺構面であるが、住居等は検出されていない。A・B 区と C・D 区の間には砂丘地形と谷地形との変換点が存在しており、遺構の在り方も大きく異なっている。区画溝で画された同一敷地内での空間利用の差異なのか。

古代の時期の遺物としては、須恵器・土師器等ともに銅製巡方や鉄製鋤先等が出土した。また、古代の時期に属する墨書土器も出土しており注目される。

本調査地点は博多濱南側中央部にその存在が想定されている「官衙域」に近接しており、文献記録には記されていない官衙施設に勤める官人階級の居住域または官衙施設に付随する施設が存在していた可能性が考えられる。

古代の時期に属する墨書土器としては Fig.285 に示しているが、「三宅」や「長」等の墨書須恵器の存在は官衙官人の存在を示唆するものとして注目されよう。また E 区では遺構検出時に皇朝十二銭の一つである延喜通寶が出土しており、これも注目される遺物の一つであろう。

Ph.125　D 区古代遺構検出状況



Ph.126　D 区 SE-867 全景

a．井戸

本調査では古代に属する井戸遺構を複数検出しているが、C・D・Eにおいては３基の井戸が確実に古代の時期に属するものである。これら井戸について説明を行う。

SE-605（Fig.113）

C区№3で検出した井戸遺構で、第３面で掘方の一部を検出し第４面で完掘した。掘方の平面形は第３面では長軸3.50 m程度の楕円形を呈するが、第４面での平面形は南北方向に伸びる長方形となる。掘り下げで確認した井戸掘方壁面からも本来の掘方は長辺3.00 m×短辺2.50 m程度の長方形であったことが分かる。第３面検出面の標高は3.20 m付近で、検出面から井戸掘方底面までは1.20 mの深さを測る。掘方底面も長方形を呈し、2.20 m×1.50 m程度の平坦面となる。この掘方中央部で方形の井側を検出した。井側として使用された板材などは腐食のため遺存していなかったが、土圧で内面に歪む状況が見られ、板材などが存在していたことが分かる。方形井側は一辺90cm程度を測り、中央部に直径60cmの井筒が検出される。井筒には曲げ物が転用されており、さらにこの内部に直径35cm程度の輪状の痕跡が検出される。掘り下げた結果、曲物の一部が壁面に残っていることが確認され、大小二個体の曲げ物を井筒として使用していたことが分かった。

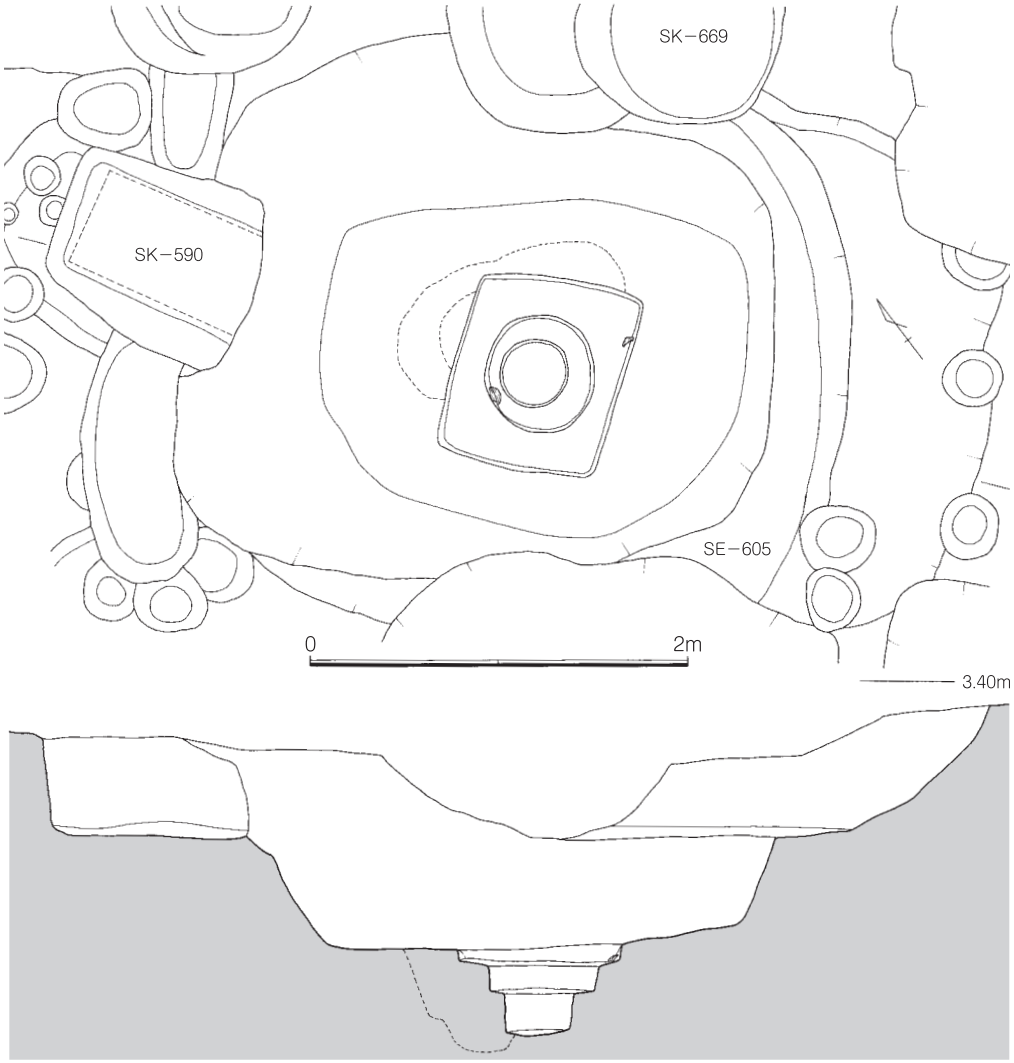


Fig.113　C区SE-605遺構実測図（S=1/40）

一段目の曲げ物は高さ15cm程度で、二段目の曲げ物は20cmの高さを測る。一段目の井筒内からは須恵器坏などが出土する。井戸掘方および井側内からは須恵器・土師器等の遺物が出土した。井戸井筒完掘後に精査したところ底面で不定形の土坑を確認した。掘り下げを行ったが遺物などの出土はなかった。井筒底面の標高は1.50 mを測り、鉄分が沈着する粗砂層に達している。

出土遺物をFig.115に示した。

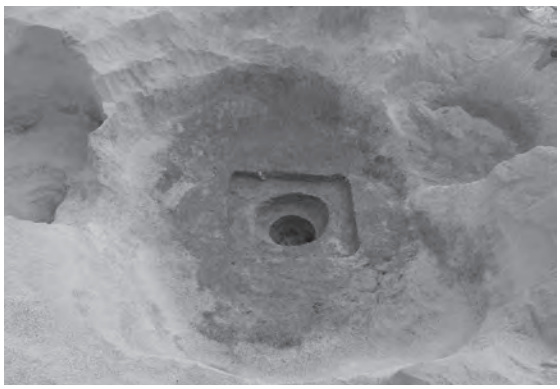
1は土師器坏である。底部はヘラ切り調整されるもので、色調は褐色を呈する。2は須恵器蓋である。天井部をヘラケズリで調整する。色調は黒灰色を呈する。3・4は須恵器坏である。底部はいずれもヘラ切りされる。3は井筒内から出土した坏である。5・6は須恵器碗である。高台断面形はいずれも方形を呈し、底部端部に接合される。焼成は良好で、色調は黒灰色～暗灰色を呈する。22は土師器甕である。これらの出土遺物よりこの井戸遺構の年代は9世紀の年代と考えられる。

SE-896・897（Fig.114）

D区№4第4面で検出した井戸遺構である。SE-179とした近世瓦井戸が南側に重複して掘削されており、この範囲については掘方が消失する。検出面での掘方平面形は不整形であるが、底面の形状から本来は長方形を呈していたことが想定できる。検出面の標高は3.20 m付近である。掘り下げの結果、検出面から1.10 m程度の深さで方形の井側（SE-896）を検出した。またこの井側に切られる別の井戸井側（SE-897）が検出されたため、SE-896完掘後にSE-897の調査を行った。

SE-896とした井戸は一辺80cm程度の板材を用いて井側を組み、内部に直径30cm程度の曲げ物を井筒として据える。井側の板材は腐食のためスポンジ状になるが高さ70cm分が観察できた。井筒底面は標高1.40 mまで掘削され、底面は厚く鉄分が沈着する粗砂層となる。

Ph.127　C区SE-605井筒検出状況



Ph.128　C区SE-605全景

Ph.129　D区SE-867掘り下げ状況

Ph.130　D区SE-867全景

SE-897 とした井戸遺構は一辺 1 m程度の板材を横方向に組み上げた井側を持ち、板材の一部が確認できた。井側は高さ 50cm分が確認でき、中央部に直径 50cm程度の井筒の痕跡が残る。曲げ物が転用されたものと考えられるが、腐食のため遺存していなかった。これらの井戸遺構は主軸方向を N-62 ～ 65°-E か、またはこれに直交する方向に採るものである。完掘後に下層の堆積状況を確認するため掘り下げを行い、標高 1.20 mで黒色粗砂層を確認、標高 85cmで湧水を確認した。井筒底面からは 60 ～ 70cm程度掘り下げて確認した湧水であり、井戸使用当時からは水位が大きく変化していることが分かる。

井戸埋土からは須恵器・土師器等などの遺物が出土した。Fig.115 に出土遺物を示した。

7 は井戸掘方壁面から出土した須恵器坏である。9 は白磁小皿である。10 は青磁碗である。12 世紀代の遺物で掘方内に掘削された遺構の遺物である。8 は須恵器碗である。高台断面形は方形である。焼成は良好で色調は黒灰色～暗灰色を呈する。

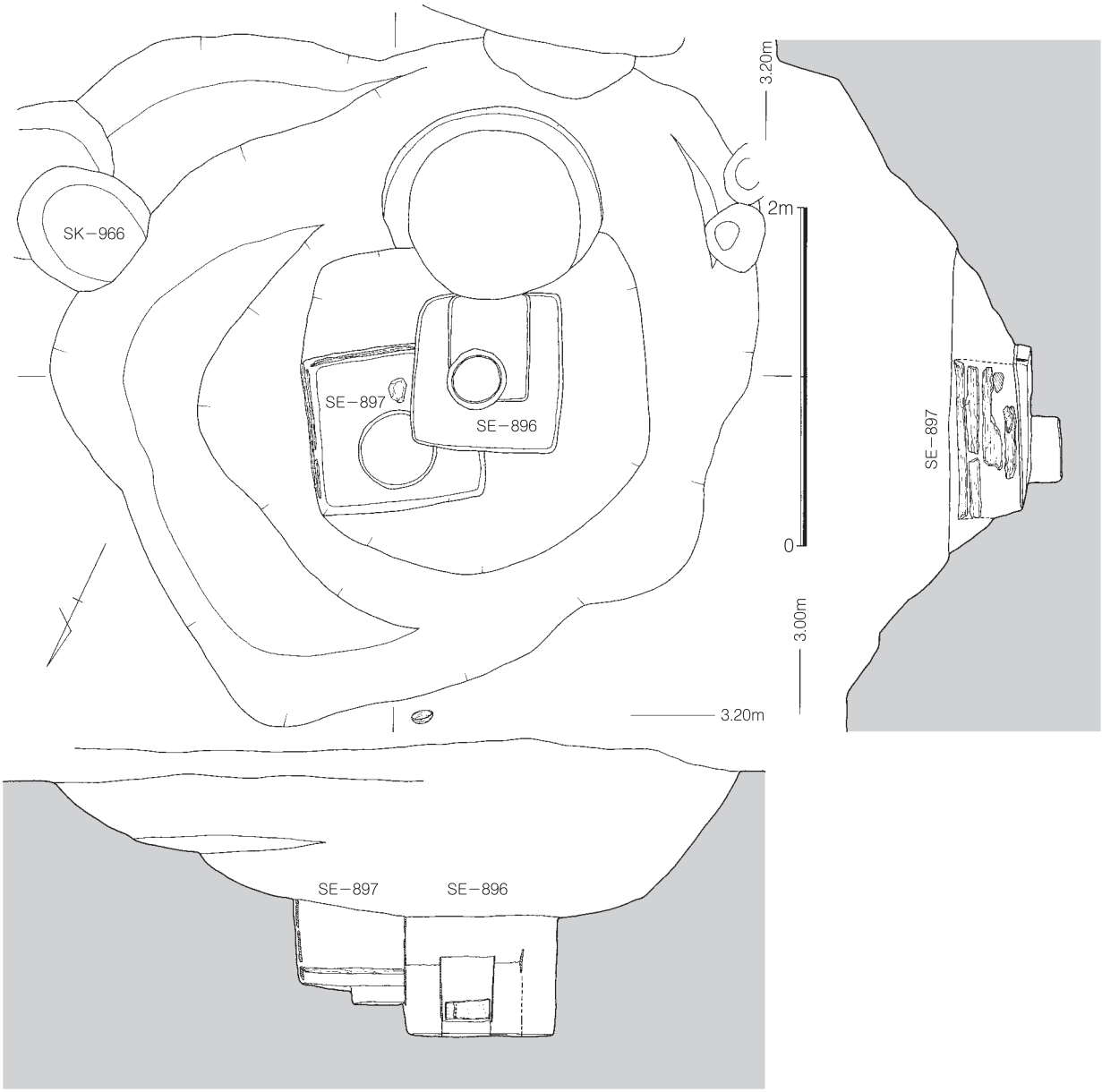
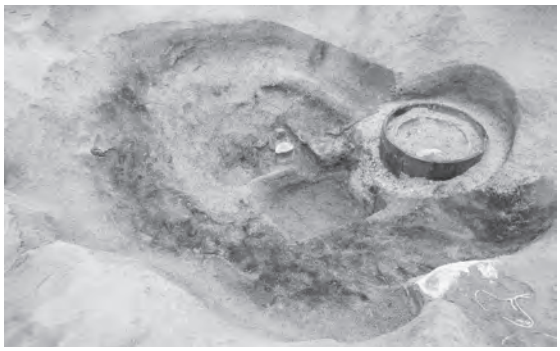


Fig.114　C区 SE896・897 遺構実測図（S=1/40）

11 ～ 20 は SE-897 の出土遺物である。11 は須恵器坏である。底部はヘラ切りされる。色調は黒灰色を呈する。12 は須恵器碗である。13 は山茶碗である。14 は須恵器蓋である。15 はヘラ切りの土師器坏である。16 は土師器高坏坏部片である。17 は須恵器蓋である。天井部はヘラケズリで調整され、宝珠型の摘みを貼り付ける。18 は須恵器壺胴部片である。外器面には叩き目が残り、内器面にはナデ痕と当て具痕が残る。色調は黒灰色を呈する。19・20 は土師器壺胴部片である。19 は刷毛目調整が全面に残る。内面はヘラケズリで調整する。20 は下半部に叩き目が残り、上半部はナデ調整される。いずれも色調は褐色を呈する。 21 は掘方内から出土した土師器甕胴部片である。これらの出土遺物から SE-896・SE-897 とした井戸の年代は 8 世紀後半から 9 世紀前半と考えられる。



Ph.131　D 区 SE-867 掘り下げ状況

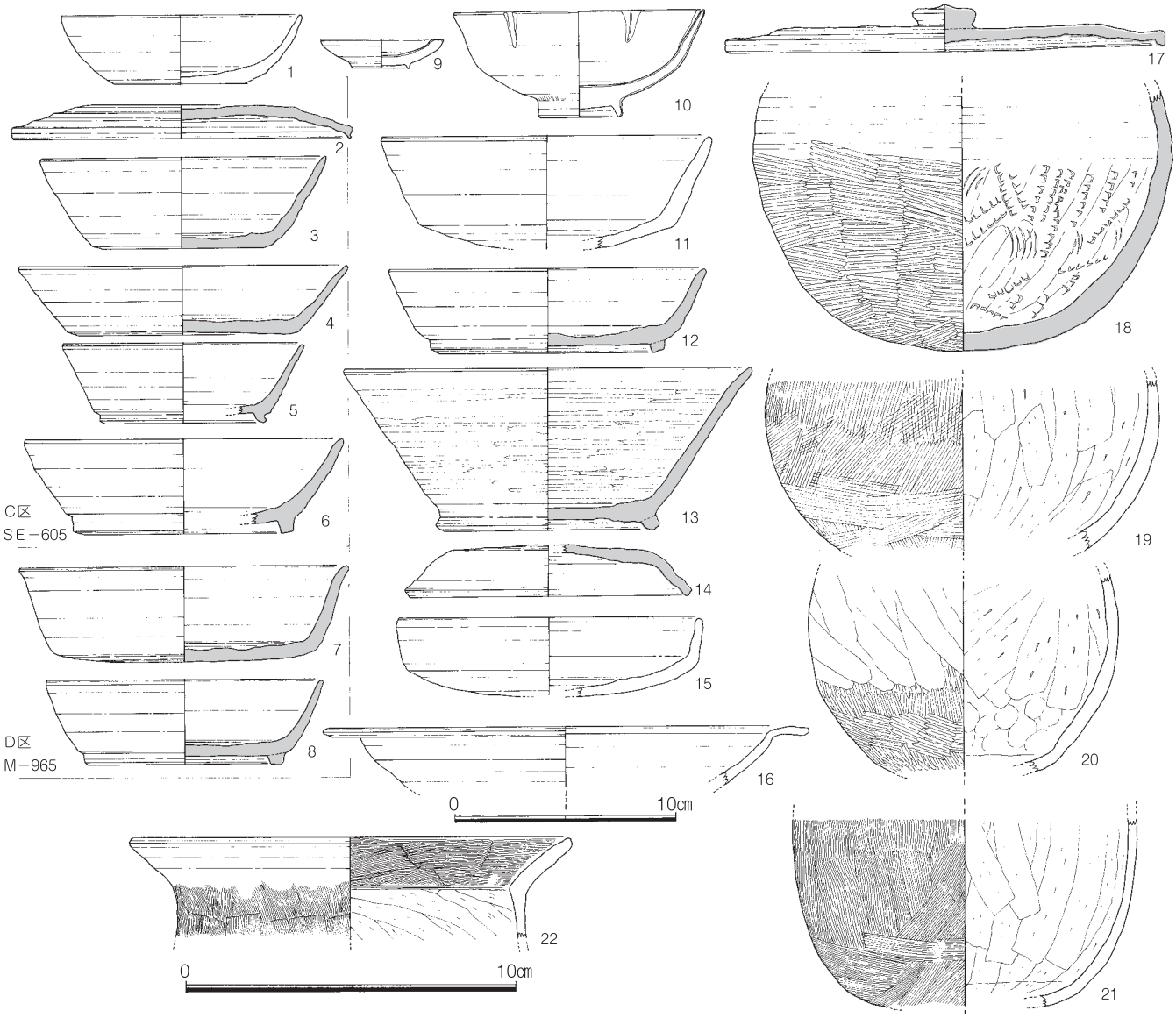


Fig.115　C区　SE605　D区　SE896・897、M 965 出土遺物実測図（S=1/4・1/3）

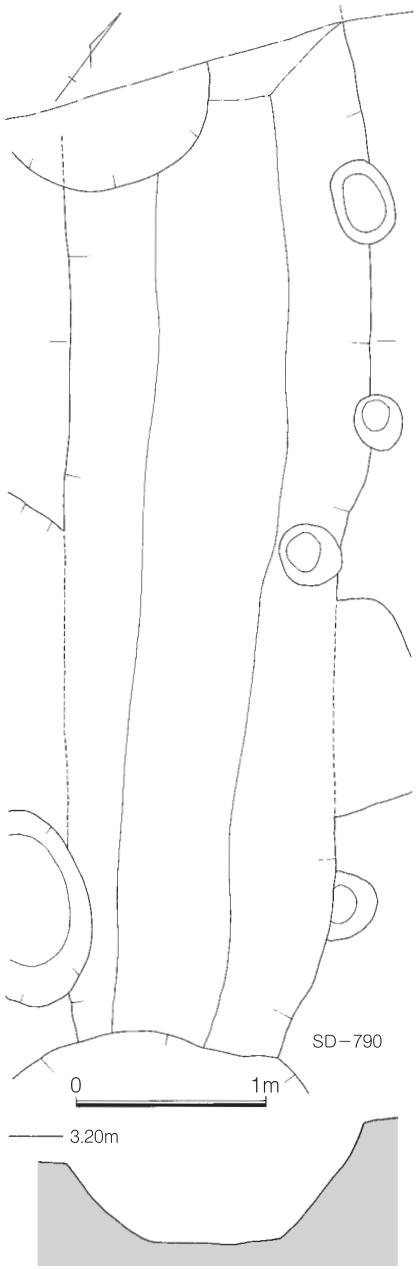


Fig.116　C区 SD-790 遺構実測図（S=1/40）

SD-790（Fig.116）

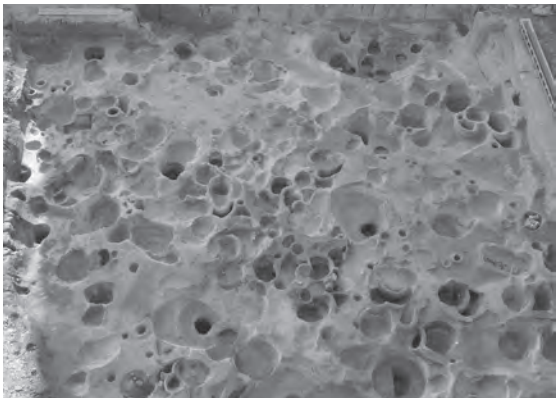
C区№3・4第3面で検出した溝遺構である。溝の南側延伸部分は調査区内では後世の遺構掘削により既に失われている。

A区第4面で北側の延伸部分（SD-471）が検出されており、ほぼ直線的に掘削された区画溝である。C区で検出された範囲では上面の幅が1.60 m、下場での幅は35㎝前後を測る。溝の断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは30㎝前後を測る。検出面の標高は3.15 m付近で、検出面は基盤層である褐色砂層面上である。溝の主軸はN-30°-Eの方向を採る。この主軸方向はC・D区で検出される古代の時期に属する遺構の主軸とほぼ同一のものであり、調査区一帯に展開する古代の遺構の配置の基幹となった区画溝であったことが分かる。

なお、本調査点の西側部分では約100 m四方の範囲で東西・南北方向の溝が検出されており、大型の掘方を持つ掘立柱建物等も調査されている。文献史料には記録されていないが、現在この範囲内には官衙に相当する施設が設置されていたことが確実視されており、本調査で検出される古代の遺構群はこの一帯に居住した下級官人の集落であった可能性が考えられる。

溝の埋土からは、ヘラ切りの土師器坏や須恵器壺の口縁部片などの遺物が出土した。これらの出土遺物より、この区画溝の時期は8世紀後半頃と考えられる。

Ph.132　C区 SD-790 全景


Ph.133　C区 SD-790 全景

b．住居

SC-791（Fig.117）

C 区№4 で検出した方形土坑で東側を SD-790 に切られる。一辺 2.50 m を測り、検出面の標高は 3.20 m付近である。検出面から土坑底面までは 50㎝程度の深さを測る。遺構の埋土は暗褐色砂で、遺構自体は基盤層である砂丘砂層中に掘り込まれる。

遺構の主軸は N-20°-E、またはこれに直交する方位を採る。遺構底面上で柱穴が数基検出されるが、この土坑に関連するものかは不明確であが、遺構の平面形と規模から竪穴住居と考えられる。

遺物は埋土中から土師器・須恵器などの細片資料が出土するが遺構の時期を特定できるものはなかった。

SD-790 に切られていることから、これ以前の遺構であることだけは確実である。

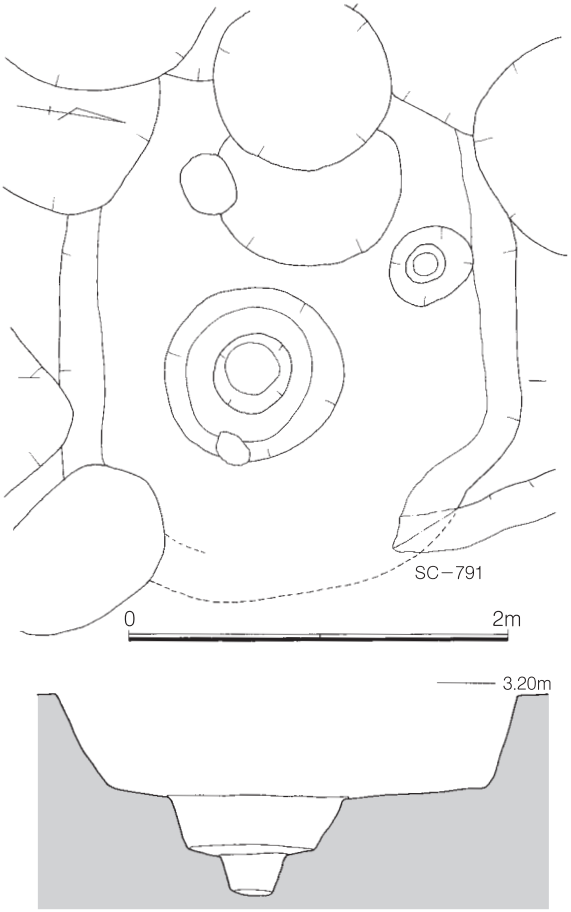


Fig.117　C区ＳＫ -791 遺構実測図（S=1/40）

SK-794（Fig.118）

C 区№4 第 3 面で検出した方形土坑である。遺構の大部分を SK-530 とした方形土坑に切られ、南側については井戸群の掘方により大きく切られる。調査では壁溝状の浅い溝を検出したにすぎないが、埋土が暗褐色砂であることと埋土中から須恵器碗・ヘラ切りの土師器坏の細片が出土したことから古代の住居と判断した。遺構の主軸は N-20°-E の方向を採る。

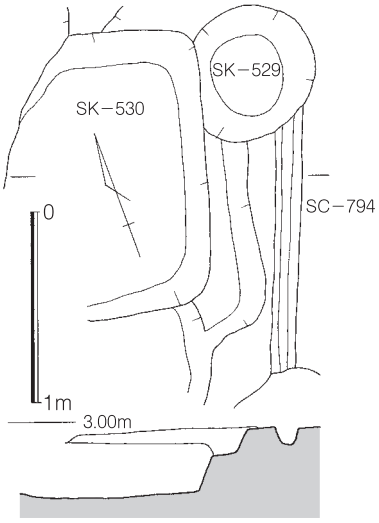


Fig.118　C区 SK-794 遺構実測図（S=1/40）

Ph.134　C 区 SK-791 全景

Ph.135　C 区 SK-791 全景

SC-816（Fig.119）

C区№6第4面で検出した方形住居である。遺構の南東側が調査区外へと伸びるため、全体の平面形は不明確である。D区で延伸部分を検出する予定であったが、中世の土坑群により大きく掘り下げられていたため検出はできなかった。

調査では西側隅部と北西側壁を検出したのみである。検出面の標高は3.20 m付近で、検出面から底面（床面）までは25～30㎝程度の深さを測る。埋土は暗褐色砂であり、埋土中から土師器・須恵器の細片資料が出土する。検出される北西側壁から分かる遺構の主軸はN-11°-W、またはこれに直交する方位である。

出土遺物をFig.120に示した。

1は土師器埦である。高坏坏部片である可能性もある。口縁部は端部でわずかに内側に折り返す。外面には密な横位のヘラ磨きを施し、内面はナデ調整を施す。焼成は良好で色調は橙色を呈する。2は白磁平底皿である。住居埋土中に掘削された中世遺構の遺物である。3は須恵器蓋摘み片である。4は土師器甑把手片である。5は土師器甕胴部片である。外器面は密な刷毛目調整が施され、全面に炭化物が付着する。

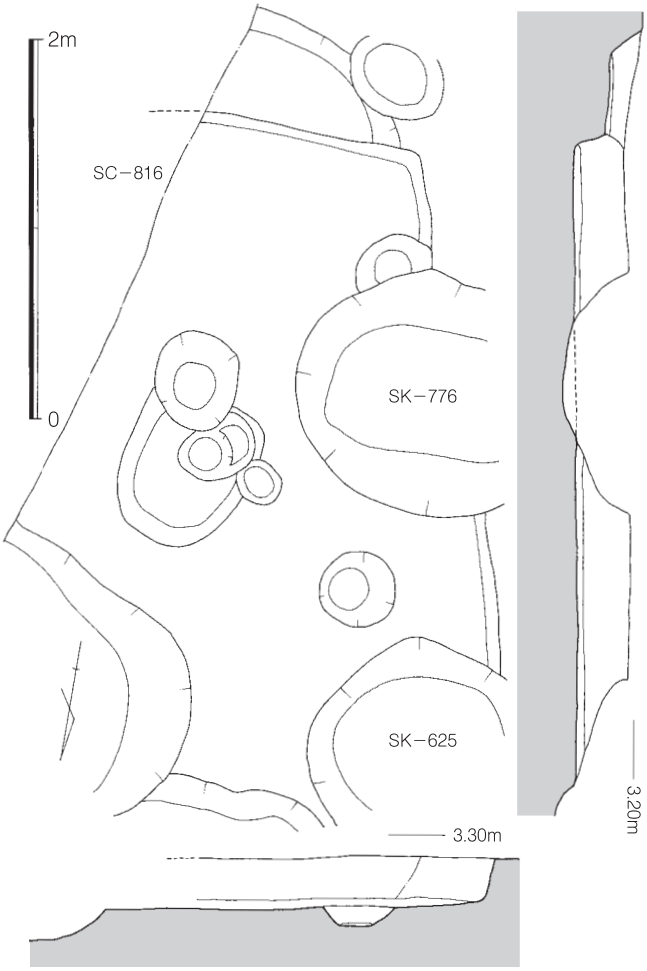


Fig.119　C区SC-816遺構実測図（S=1/40）

Ph.136　C区第3面遺構検出状況

SC-818（Fig.121）

C区№6第4面で検出した方形住居である。住居北側部分を井戸掘方によって大きく切られるため、遺構全体を検出できていない。

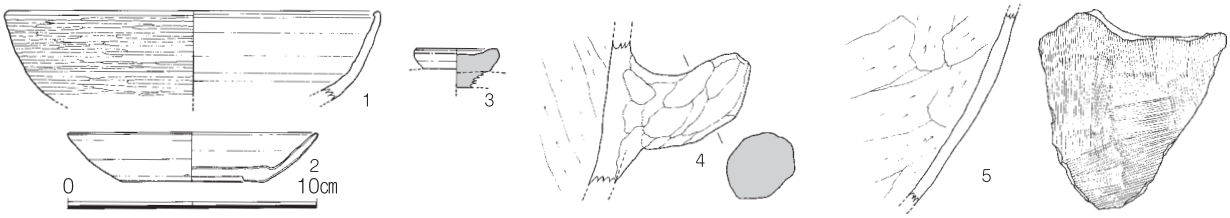


Fig.120　C区SC-816出土遺物実測図（S=1/3）

住居の南側部分のみの検出で検出された範囲から一辺3.50m前後の方形住居であるとこが分かる。検出面の標高は3.20m付近で、検出面から住居床面までの深さは30cm程度を測る。住居埋土は暗褐色砂で、部分的に炭化物が含まれる。住居主軸はN-58°-E、またはこれに直交するN-32°-Wの方向を採る。

住居床面上で柱穴を検出したが、住居に関連するものではない。主柱穴は住居外に掘削されたのか。住居埋土からは土師器・須恵器の細片資料が出土した。

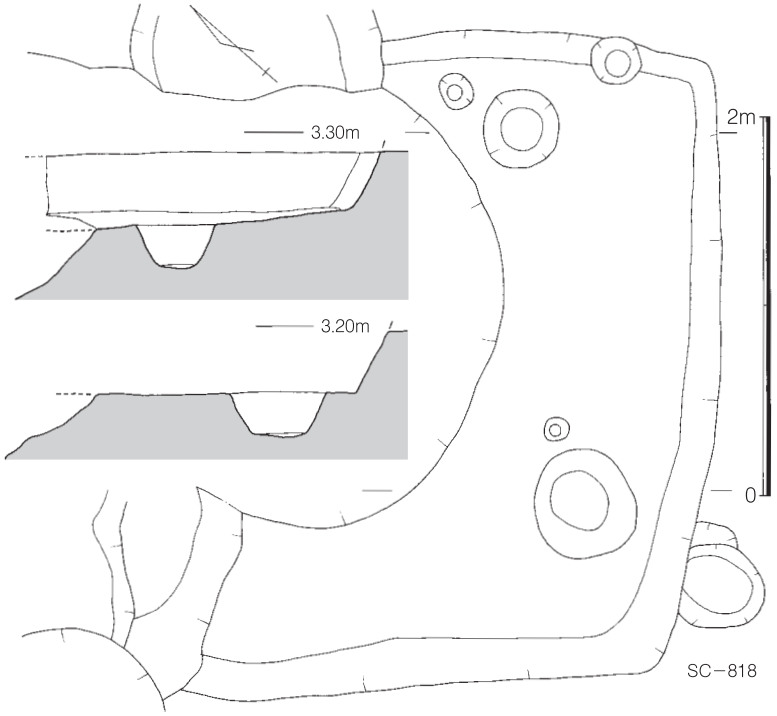


Fig.121　C区 SC-818 遺構実測図（S=1/40）

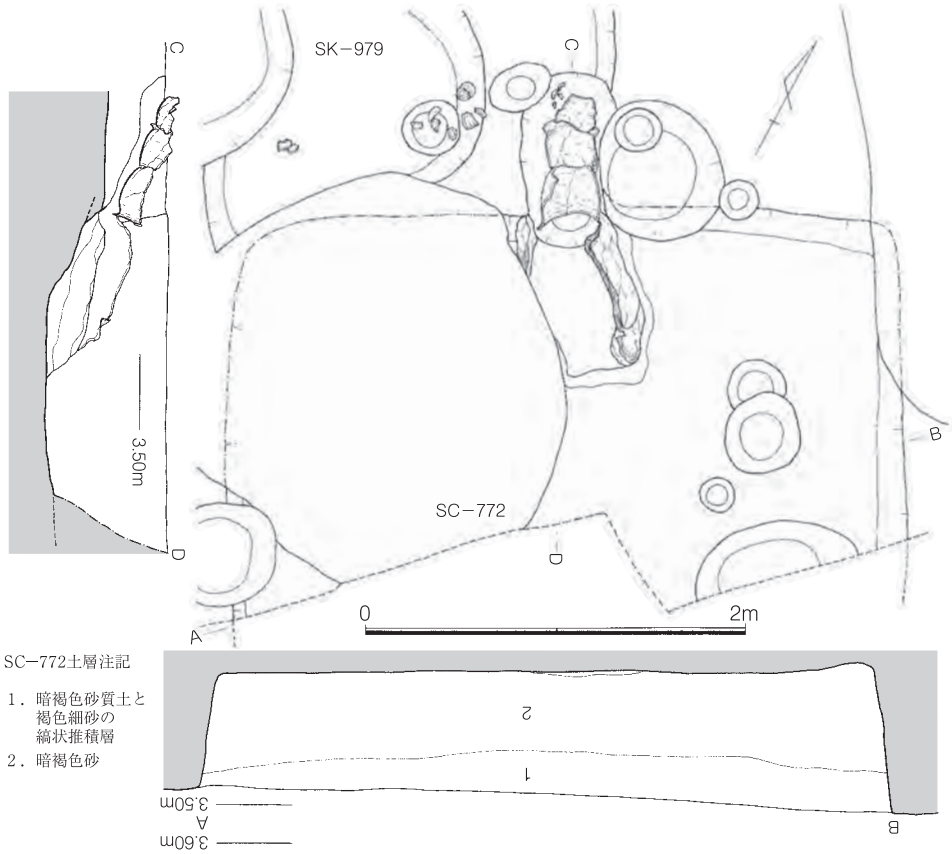
SC-772（Fig.122）

D区№4第3面で検出した方形住居である。第2面の調査で三連の土師器甕を検出し土器棺である可能性が考えられたため、掘り下げを行ったところ三連の土師器甕がカマドの煙道であることが確認された。住居は南側が調査区外に伸びるため全体を検出していないが、検出された北側部分から一辺3.50 mの方形住居であることが分かる。検出面の標高は3.80 m付近で埋土は上層が黒褐色土を縞状に含む暗褐色砂質土となり、下層には暗褐色砂が堆積する。

カマドは住居北側壁中央部に設置されている。白色粘土で壁体と両袖部を造り、煙道部に土師器甕を転用する。住居廃絶後にカマド本体は破壊されているため、上部構造は欠損するがカマド内には焼土・炭化物などが厚く堆積する。煙道に転用される土師器甕は土圧で破損するがほぼ原位置を保っている。底部を打ち欠いた甕を連結して長さ70cmの煙道とする。本来は埋設されていた煙道であり、これから住居として機能していた時期には、検出面から50cm以上高い位置に地表面が存在していたことが分かる。この場合、住居は1.30 m以上の深さであったことが分かる。

Ph.137　C区 SC-818 検出状況

Ph.138　D区 SC-772 検出状況



住居主軸はN-28°-W前後の方向を採る。

住居埋土とカマド内から土師器・須恵器などの遺物が出土した。

出土遺物をFig.123に示した。

1～3はカマド煙道に転用された土師器の甕である。1・2は外器面に刷毛目調整が施され、内器面はヘラケズリで調整される。色調は暗橙色を呈する。3は外器面の刷毛目調整が一部ナデ消しされる。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。外面にはオコゲが垂れる。4は土師器甕である。5は古墳時代の甕である。6～8は土師器甕である。

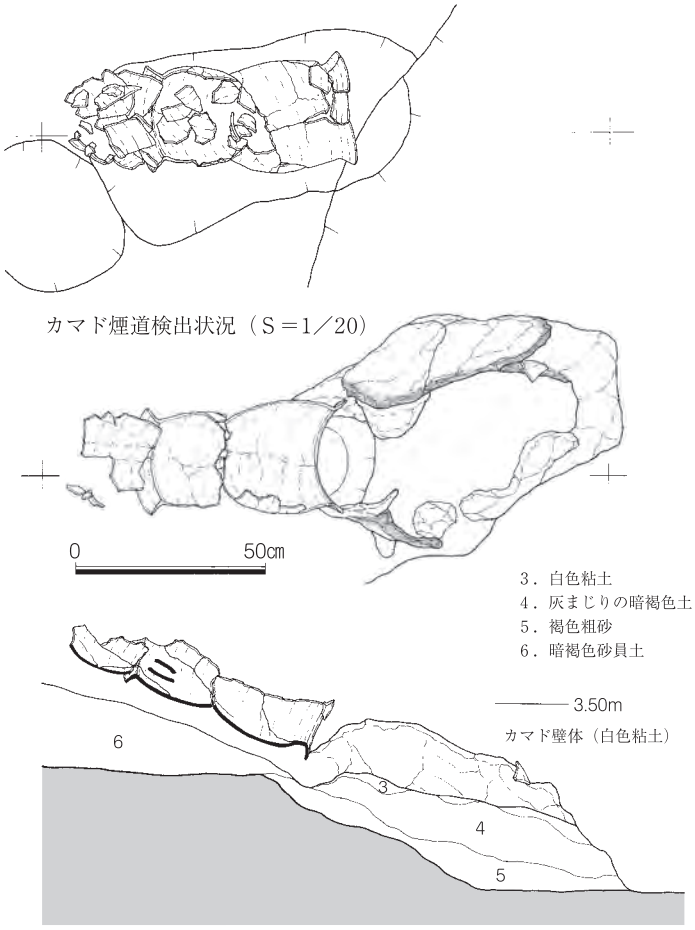


Fig.122　D区SC-772遺構実測図（S=1/20・1/40）

Ph.139　D区SC-772カマド検出状況

Ph.140　D区SC-772カマド煙道

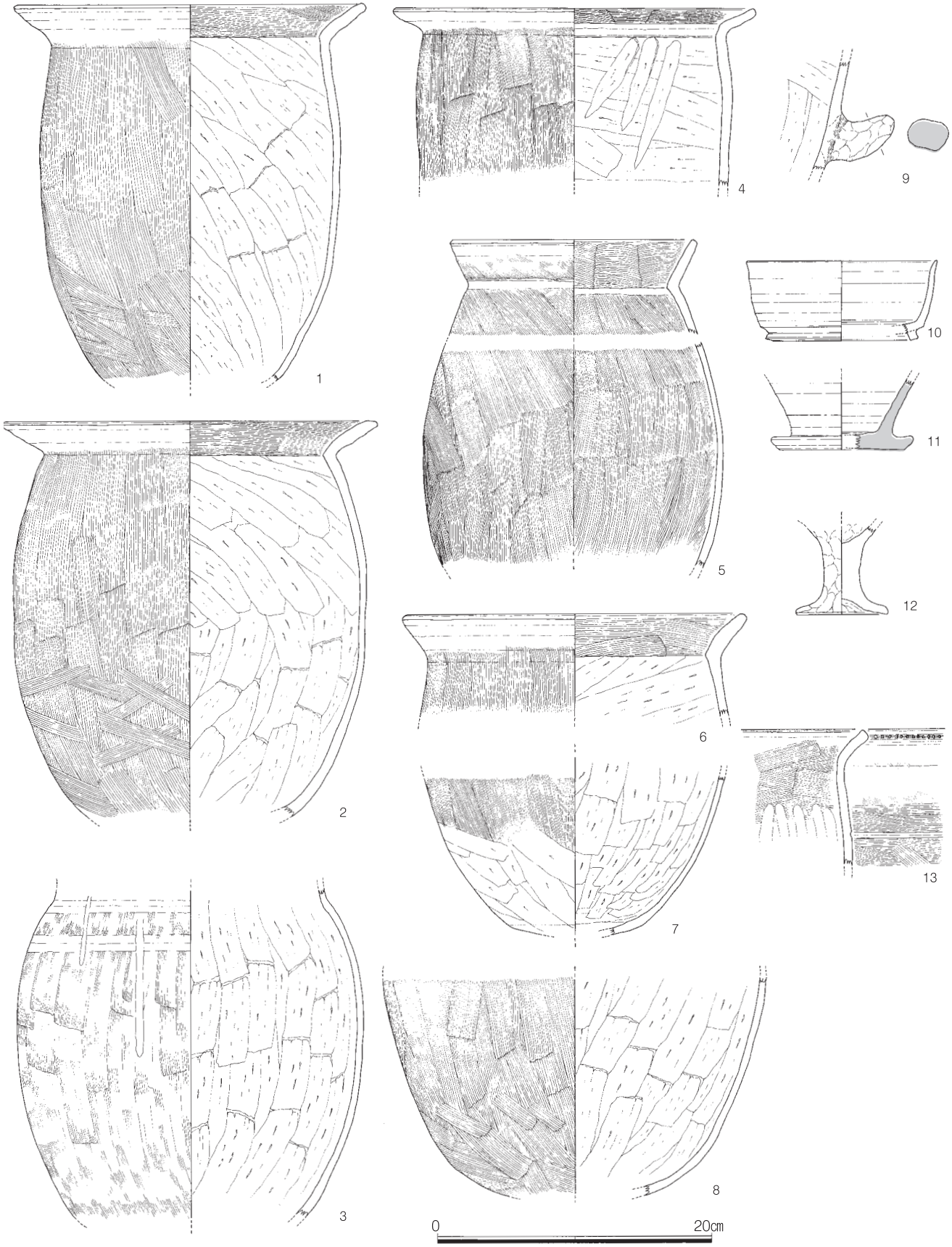


Fig.123　D区 SC-772 出土遺物実測図（S=1/4）

9 は土師器甑把手である。把手は差し込み式で、色調は橙色を呈する。10 は須恵器碗である。高台断面形は方形で、色調は灰色を呈する。11 は須恵器鉢である。12 は製塩土器脚部である。13 は弥生土器甕口縁部片である。口縁端部には刻み目を巡らせ、頸部下に沈線を一条巡らせる。前期後半に属する土器である。

出土遺物より、この住居の時期は 8 世紀後半頃と考えられる。

SC-852（Fig.124）

D 区№13 第 3 面で検出した隅丸の方形住居である。遺構の周囲に中世の廃棄土坑などが多く掘削されており、正確な平面形は把握できない。検出された範囲から一辺 3.30 m前後の規模が復元できる。検出面の標高は 3.20 m付近で検出面から底面までは 50cmの深さを測る。住居内中央部には床面から深さ 60cm、直径 50cm前後の柱穴が検出されるが上面に SK-850 とした方形土坑が掘削されており、住居との関連性は不明確である。住居の主軸は N-18°-W 前後の方向を採る。遺構の埋土は暗褐色砂で、埋土中からは須恵器碗・土師器甕・ヘラ切りの土師器坏が出土する。

出土遺物を Fig.127 に示した。1 は土師器坏である。ヘラ切りしたのちナデ調整で底部を整える。色調は橙色を呈するものである。出土遺物より 8 世紀後半頃の住居と考えられる。

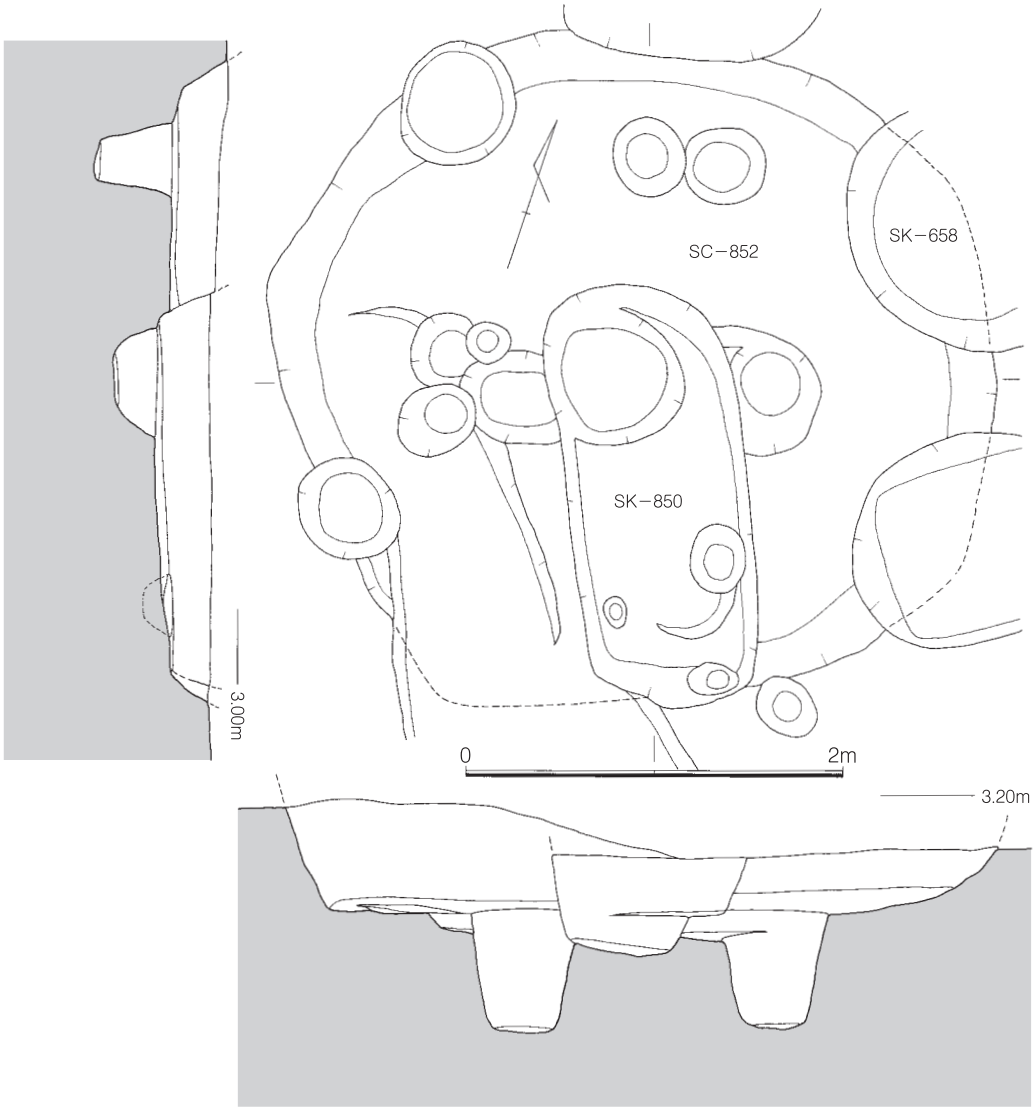


Fig.124　D区 SC-852 遺構実測図（S=1/40）

SC-874（Fig.125）

D 区№9 第 4 面で検出した方形住居で、遺構西側を SE-600 に切られ東側半分のみを検出したにすぎない。検出された範囲から一辺 3.0 mの規模であることが分かる。住居の主軸は N-60 ～ 65°-E、またはこれに直交する方向を採る。

検出面の標高は 3.20 m 付近で、検出面から床面までのは 50cm程度の深さを測る。検出された範囲内では床面上からのは柱穴・カマド等の検出はなかった。

住居埋土は暗褐色砂で、須恵器碗・土師器甕等の遺物が出土した。

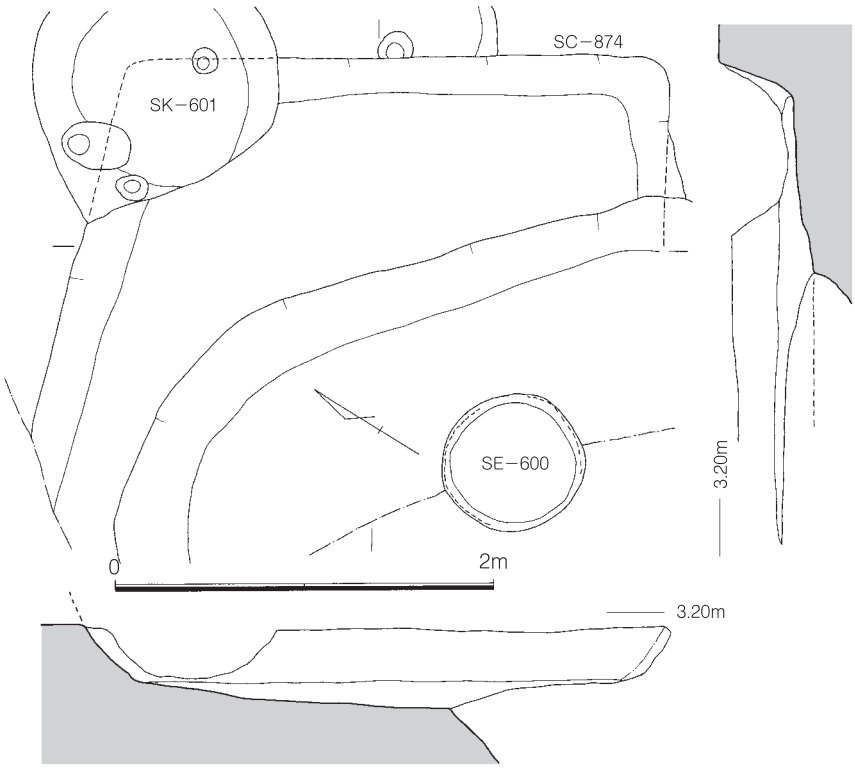


Fig.125　D区 SC-874 遺構実測図（S=1/40）

SC-940（Fig.126）

D 区№8 第 3 面で検出した方形住居で、第 4 面で完掘した。住居南側は調査区外に伸びるため住居全体の完掘はできていない。また住居北西側を攪乱で大きく切られるため東西壁を確認しただけである。検出された範囲から一辺 4.0 mの規模が想定できる。検出面の標高は 3.20 mで、検出面から住居床面までは 50cm前後の深さを測る。住居床面上で柱穴を検出した。各柱穴の直径は 20 ～ 30cm前後で床面から 30 ～ 50cmの深さを測る。各柱穴間の距離は 80cmと上部構造を支える主柱穴としては規模が小さく、住居内の保管施設等に関連するものであろう。住居埋土は暗褐色砂を主体とするが、部分的に黒褐色砂がベルト状に堆積する（Ph.145 参照）。住居の主軸 N-65°-E 前後、またはこれに直交する方位を採る。住居内からはカマド等の検出はなかった。

Ph.141　D 区　SC-852 検出状況

Ph.142　D 区 SC-874 検出状況

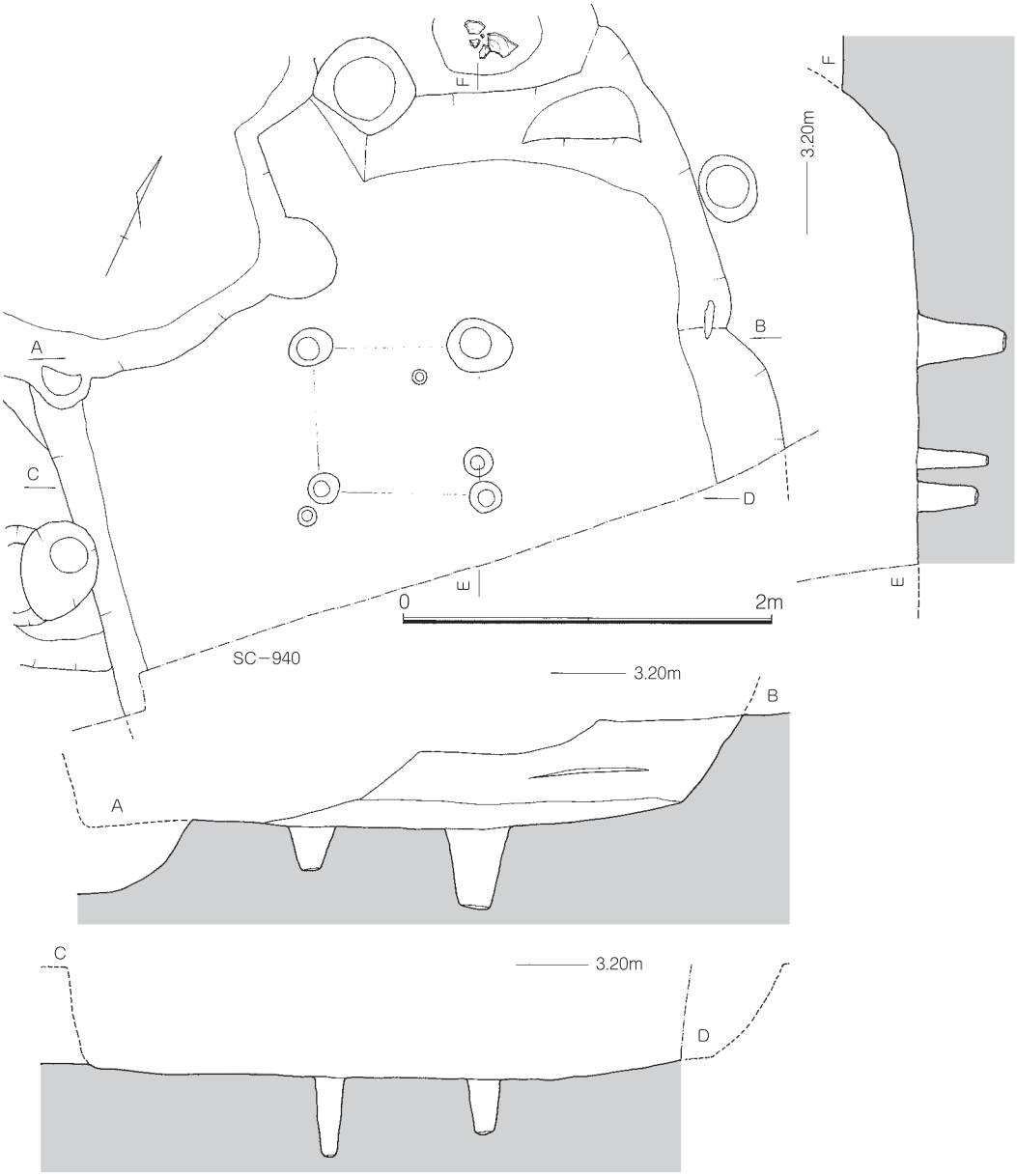


Fig.126　D区 SC-940 遺構実測図（S=1/40）

Ph.143　D区 SC-940 検出状況

Ph.144　D区 SC-940 土層断面

住居埋土から土師器坏・須恵器碗・土師器甕などの遺物が出土した。

Fig.127 に出土遺物を示した。

2 は土師器小皿である。底部はヘラ切り調整される。焼成は良好で色調は褐色を呈する。3 は須恵器蓋である。4 は須恵器坏である。底部はヘラ切り調整され、色調は灰色を呈する。

5 は須恵器碗である。高台断面形は方形を呈する。6・7 は黒色土器である。いずれも内器面に炭素を吸着させる内黒埦である。外器面には指頭圧痕が残り、内器面にはヘラ磨きが施される。

8 は緑釉陶器碗である。9 は越州窯系青磁碗である。内面見込み周囲に目跡が配される。10 は土師器甕である。11 は住居東側壁から出土した刀子である。掘り下げ時には確認できなかったが、Ph.145 に示したように住居東側には土坑が切り込んでいる。このため住居東側壁が一部外側にふくらむ箇所があり、この土坑中に含まれる遺物であった可能性が考えられた。出土時は錆で大きく膨らんでおり、錆取り後に刀子であることを確認した。全長 25.2㎝で、柄の断面形は長方形を呈する。

これらの出土遺物からこの住居の時期は 9 世紀初頭頃の年代と考えられる。

Ph.145　D 区 SC-940 土層断面・拡大

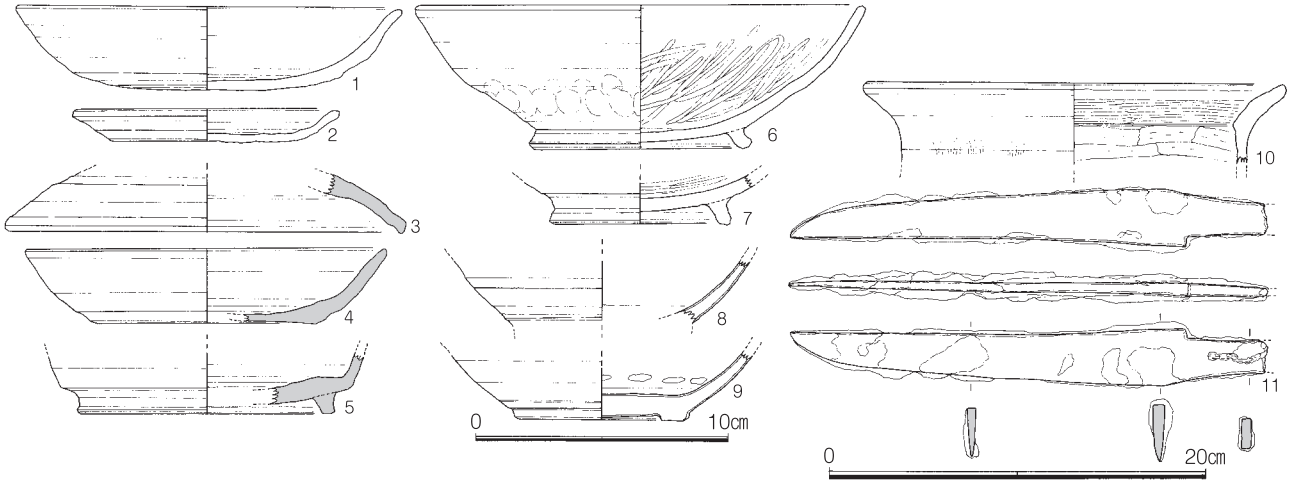


Fig.127　D 区 SC-852・874・940 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

SC-990（Fig.128）

D 区№6 付近で検出した方形住居である。第 3 面で平面形を確認し、第 4 面で完掘した。住居の東側隅部を SK-529 に切られるが、ほぼ全体を検出できた住居である。一辺 3.70 ～ 4.00 m を測り東西方向にやや長い長方形を呈する。検出面の標高は 3.10 m付近で、検出面から住居床面までは 45cmの深さを測る。住居の主軸は N-65°-E の方向を採る。

住居床面上で四本の柱穴を確認した。柱穴は各隅部付近に配されており、直径は 30cm前後を測る。床面から深さ 50 ～ 60cmの深さまで掘削されている。各柱穴間の距離は 2.5 m前後を測る。カマドなどの施設は検出されなかったが、床面上からは石皿などが検出される。住居の埋土は暗褐色砂を主体とし、土師器・須恵器などの遺物が出土した。

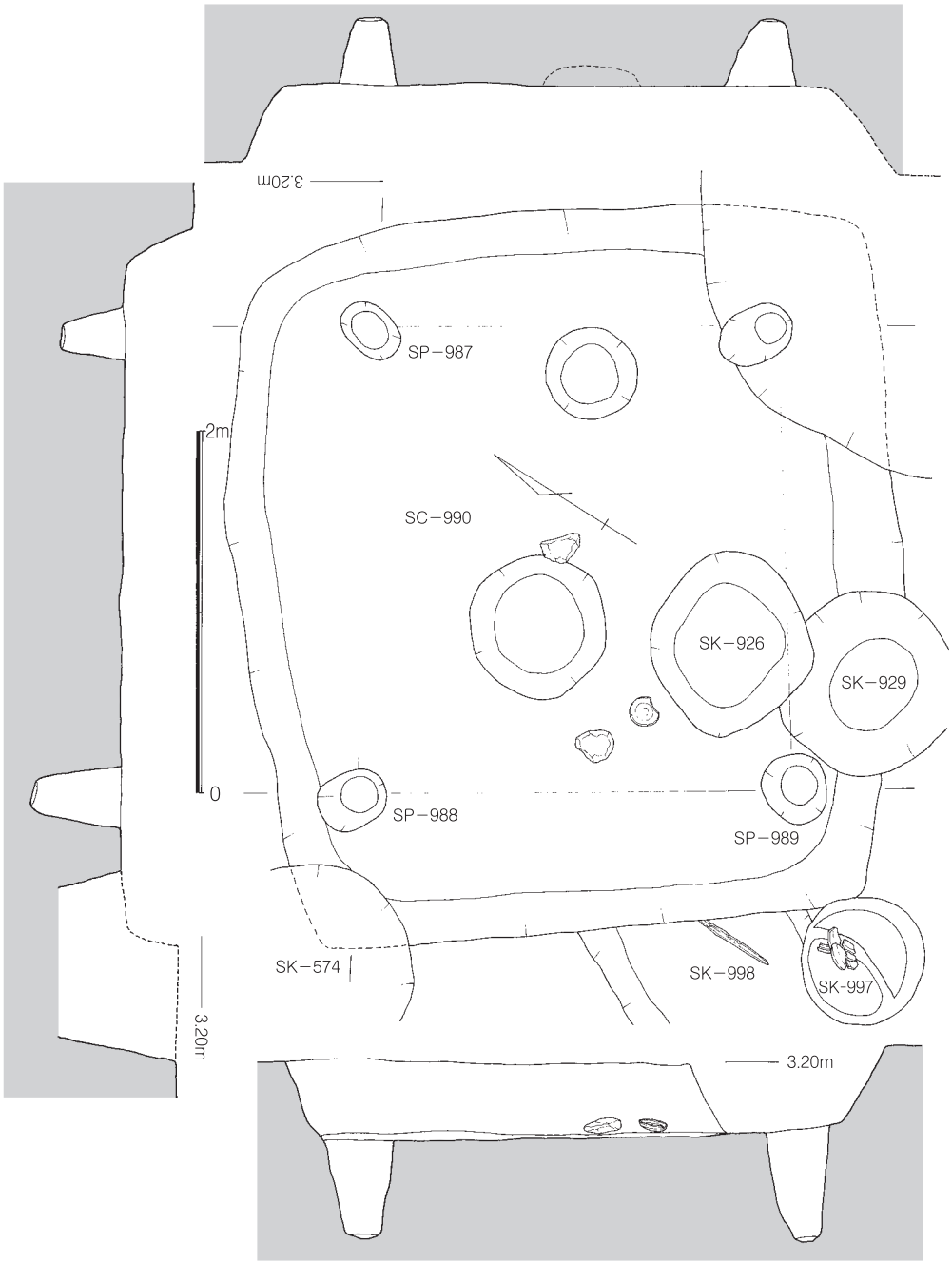
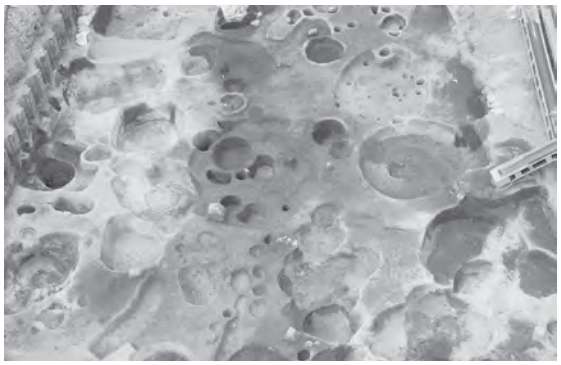


Fig.128　D区 SC-990 遺構実測図（S=1/40）

Ph.146　D 区 SC-990 検出状況



Ph.147　D 区第 3 面住居群検出状況

出土遺物を Fig.129 に示した。

1 は土師器坏である。体部は明瞭な屈曲部を持ち、底部はヘラ切り調整されたのちにナデ調整が加えられる。2 は柱穴から出土した土師器坏である。口縁端部で外反し、体部中程に沈線が一条巡る。底部はヘラ切り調整されるもので色調は橙色を呈する。3 は須恵器高坏脚部片である。4 は須恵器碗高台部片である。5 は須恵器碗である。外反する体部を持ち、高台断面形は台形を呈する。色調は暗灰色を呈する。6・7 は土師器坏である。底部はいずれもヘラ切り調整されるもので、焼成は良好で色調は褐色～橙色を呈する。8 は須恵器壺口縁部片である。9 は赤焼須恵器の提瓶胴部片である。11 は土師器甕である。

これらの出土遺物よりこの住居の時期は 8 世紀中頃の年代と考えられる。

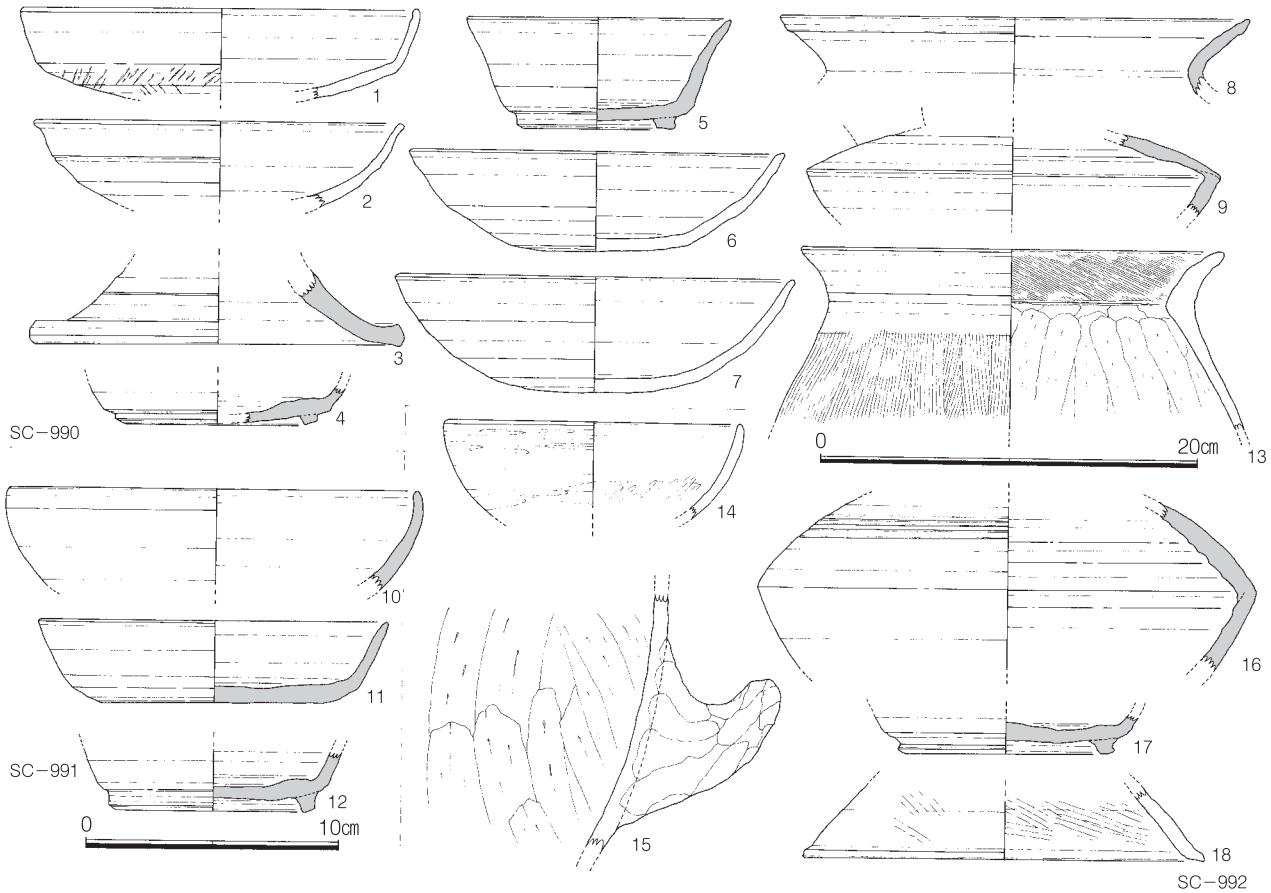


Fig.129　D 区 SC-990・991・992 出土遺物実測図（S=1/3）

SC-991（Fig.130）

D 区№6 付近で検出した小型の方形住居である。一辺 1.70 m程度のもので、検出面の標高は 3.20 m を測る。住居の主軸は N-65°-E の方向を採る。検出面から土坑底面までは 40cm程度の深さを測る。住居としては小規模なものであり、その性格には疑問が残る。

床面上には北寄りの箇所に長軸 50cmの楕円形土坑が検出された。床面から土坑底面までは 50cmの深さを測る。埋土は暗褐色砂で、埋土中からは土師器・須恵器などが出土した。

出土遺物を Fig.129 に示した

10 は須恵器鉢である。内傾する体部を持つもので、色調は暗灰色を呈する。11 は須恵器坏である。底部はヘラ切りされ、色調は濃灰色を呈する。12 は須恵器碗である。高台断面形は方形を呈し、底部端部近くに接合される。遺構の性格としては住居に伴う倉庫などの施設である可能性も考えられた。

出土遺物より 8 世紀中頃の時期の遺構と考えられる。

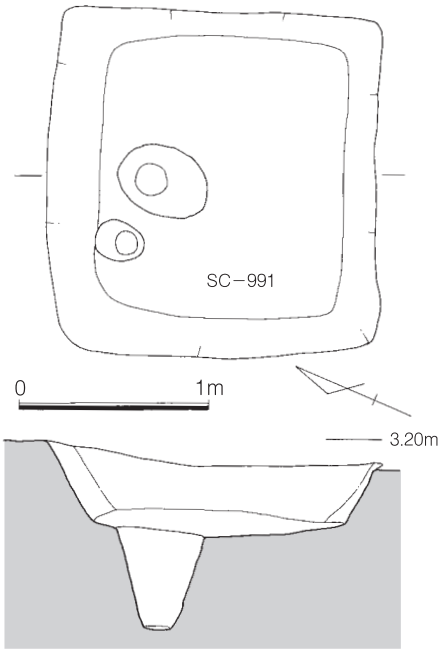


Fig.130　D区 SC-991 遺構実測図（S=1/40）

SC-992（Fig.131）

D 区№6 付近第 4 面で検出した方形住居で、南側を SC-990 に、北側を SE-569 掘方に切られる。北側隅部を確認し、住居東側壁を検出した。一辺 3.00 m前後の規模を測る住居で、検出面から床面までは 30cm程度の深さを測る。住居の主軸は N-32°-W、またはこれに直交する方位を採る。

残存する床面上の東側隅部で柱穴を検出した。直径 30cm前後を測り、床面から 30cm前後の深さを測る。これに対応する柱穴は北側隅部では検出されず、住居主柱穴ではないものと判断される。

埋土は暗褐色砂で、部分的に黒色砂が含まれる。埋土から土師器・須恵器などの遺物が出土した。

Fig.129 に出土遺物を示した。

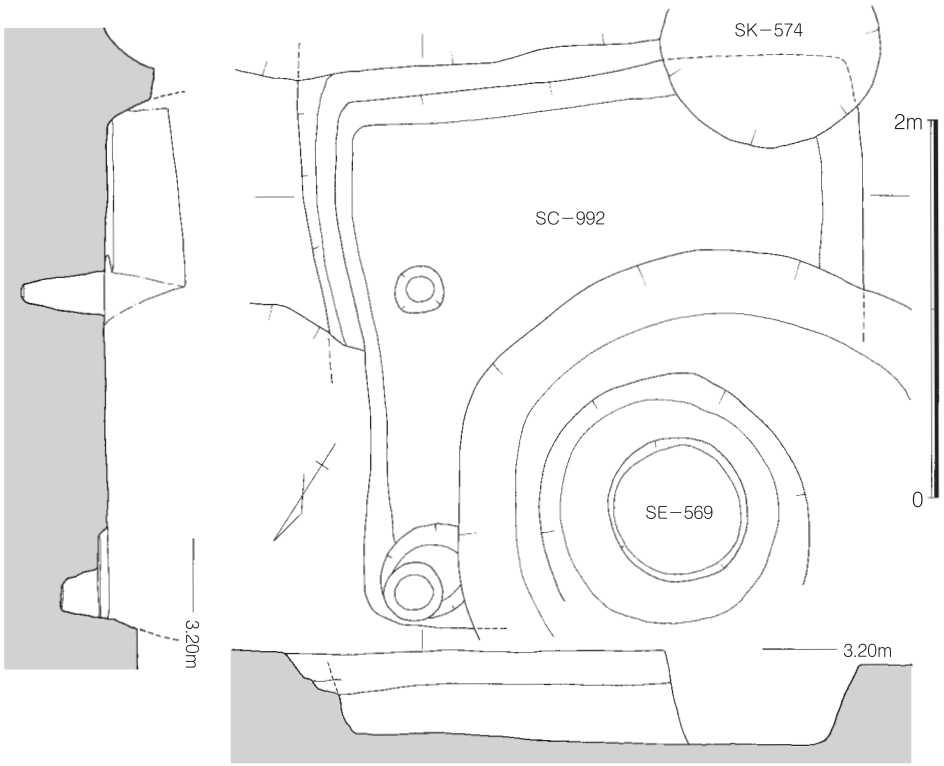


Fig.131　D区 SC-992、SE-569 遺構実測図（S=1/40）

14 は土師器埦である。内傾する体部を持つ埦で、内外面の一部にはヘラ磨き痕が残る。色調は橙色を呈する。15 は土師器甑把手片である。手捏ねで成形された把手は直接胴部にナデで貼り付けられる。内面はヘラケズリで調整される。16 は須恵器長頸壺胴部片である。胴部復元最大径は 20cmを測り、色調は黒灰色を呈する。17 は須恵器碗である。高台断面形は台形を呈する。18 は土師器高坏脚部片である。内面には刷毛目調整が残る。色調は橙色を呈する。

これらの出土遺物より、この住居の時期は 8 世紀前半の年代と考えられる。

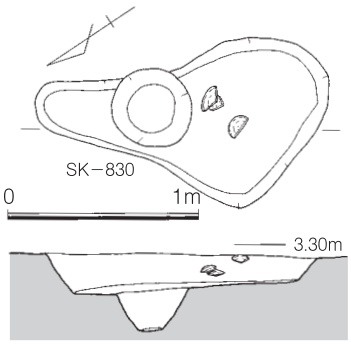


Fig.132　D区 SK-830 遺構実測図（S=1/40）

SK-830（Fig.132）

D 区№2 第 3 面で検出した土坑である。平面形は不定形で、楕円形土坑に足が生えたような平面形となる。検出面の標高は 3.30 m前後で、検出面から土坑底面までは 20cmの深さを測る。遺構埋土は暗褐色砂質土で、埋土中から須恵器・土師器等の遺物が出土する。

Fig.133 に出土遺物を示した。

1 は土師器甕である。口径は 12.5cmとやや小型のもので、刷毛目調整が施される。色調は暗褐色を呈する。

2 は須恵器蓋である。天井部はヘラケズリで調整され、条線状のヘラ記号が刻まれる。色調は黒灰色を呈する。3 は赤焼須恵器の高台付皿である。口径 23.0cmと大型のもので、外器面にはヘラ磨きが施される。

Ph.148　D 区 SC-991 検出状況

Ph.149　D 区 SC-991 検出状況

Ph.150　D 区 SC-992 検出状況

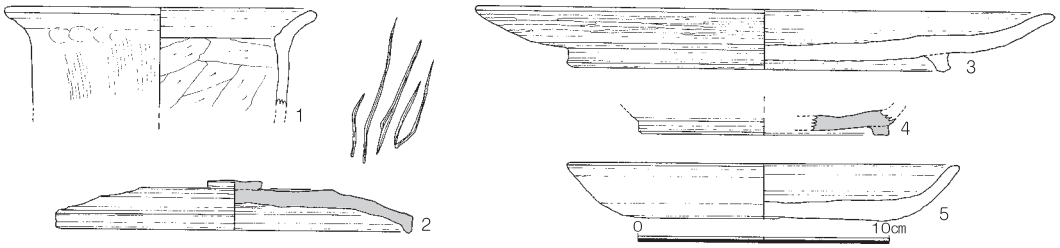


Fig.133　D区 SK-830、SC-959 出土遺物実測図（S=1/3）

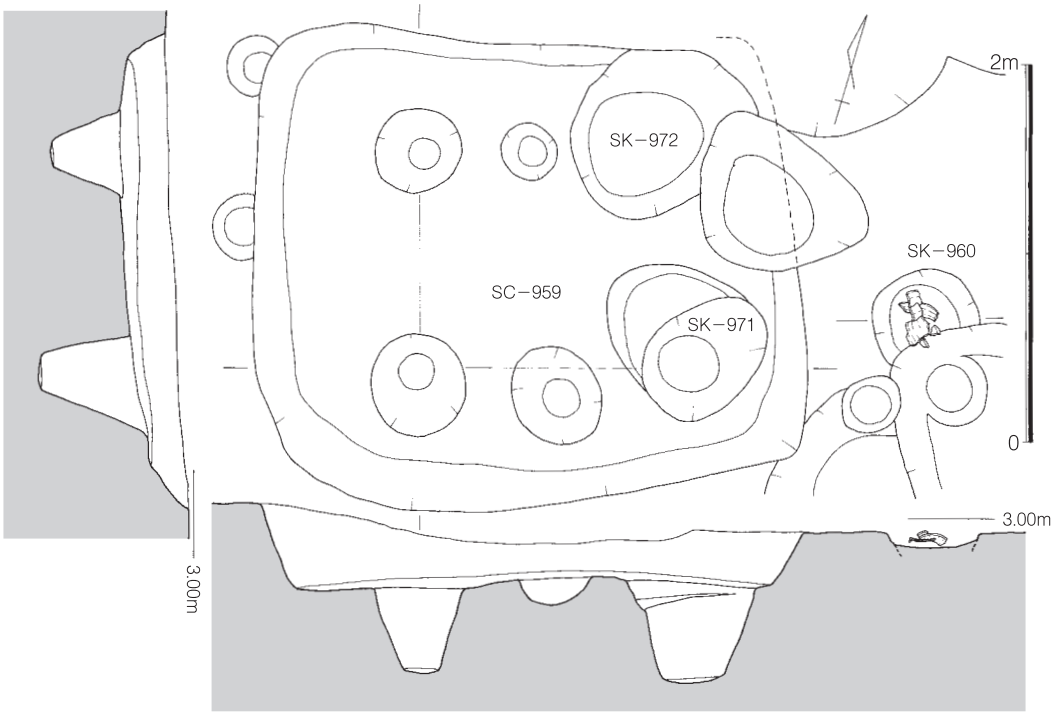


Fig.134　D区 SC-959 遺構実測図（S=1/40）

SC-959（Fig.134）

D 区№2 第 4 面で検出した方形住居である。長辺 2.90 m × 短辺 2.30 mを測る長方形の住居で、住居の主軸は N-17°-E、またはこれに直交する方向を採る。検出面の標高は 2.90 mで、検出面から住居底面までは 40cmの深さを測る。住居の埋土は暗褐色砂で、床面上で柱穴を検出した。柱穴は直径 50 ～ 80cmの円形～楕円形で、床面から 50cmの深さを測る。住居埋土からは須恵器・土師器等の細片資料が出土した。

Fig.133 に出土遺物を示した。

4 は須恵器碗である。高台の断面形は台形を呈し、底部端部に接合される。色調は暗灰色を呈する。5 は土師器坏である。底部はヘラ切り調整され、ナデ調整が加えられ整えられる。焼成は良好で色調は橙色を呈する。

Ph.151　D 区 SC-959 検出状況

Ph.152　D 区 SC-959 遺構検出状況

その他の出土遺物・古代（Fig.135）

C・D・E 区の調査では中世遺構の掘り下げ時にも多くの古代に属する遺物が出土した。本来は検出された以上の遺構が存在していたものと考えられる。以下に重要と思われるものについて説明を行う。

1 ～ 3 は C 区 SK-778 の出土遺物である。1 は須恵器坏である。2 は須恵器坏である。いずれも底部はヘラ切りされるもので、色調は灰色を呈する。3 は須恵器碗で高台断面形は台形を呈する。4 は C 区 2 面下掘り下げで出土した須恵器碗である。5 は C 区 SK-491 出土の土師器甑把手である。6 は C 区 SK-428 出土の製塩土器である。外器面には指頭圧痕が残り、内面には刷毛目調整が残る。7 は D 区 SK-495 出土の須恵器蓋である。復元口径 22.2cmを測る。天井部はヘラケズリで調整される。

8 は D 区 SK-494 出土の須恵器蓋である。天井部には円柱状の摘みが接合される。9 は D 区 SK-264 出土の土師器甑把手である。甑体部にナデ調整で接合される。把手は手捏ねで成形される。

10 は D 区 SK-494 出土の土師器高坏脚部片である。11 は D 区 SK-891 出土の土師器坏である。
12 は D 区 3 面下掘り下げ時に出土した都城系土師器坏である。外器面は密なヘラ磨きが施され、内器面には放射状の暗文が施される。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。
13 は D 区 SK-863 出土の須恵器甑把手である。須恵器甑の出土例は多くはない。把手は土師器甑の例と同じく手捏ねで成形され、体部にはナデ調整で接合される。体部内面には同心円文の叩き目当て具痕が残る。色調は灰色を呈する。14 は D 区 SK-1005 出土の須恵器高坏脚部片である。
15 は D 区 SK-951 出土の須恵器碗である。高台断面形は方形を呈し、色調は黒灰色を呈する。16 は D 区 SK-935 出土の土師器甕である。17 は C 区 2 面下掘り下げで出土した土師器移動式竈である。部分的な出土であるが、前面の庇部分である。18 は D 区 SK-491 出土の土師器甕である。19 ～ 21 は D 区 SK-494 出土の土師器甕である。外器面には縦位の刷毛目調整が施され、口縁部下には煤が付着する。22 は D 区 SK-935 出土の土師器甕である。23 は C 区 SK-806 出土の土師器甑把手である。

24 は D 区№4 第 3 面で出土した鉄製鋤先である。遺構からの出土ではないが、古代の堆積層（暗褐色砂）中から出土したもので、儀礼に用いられたものか。錆で本来の形状は把握しがたいが、断面形は三角形で、木製の基部を差し込めるようにソケット状になる。全長 23.6cmを測る。

25 は D 区第 1 面遺構検出時に出土した銅製巡方である。一辺 2.7cmの方形を呈するもので四隅には固定用の鋲の痕跡が残る。断面形と側面の調整から本体の裏蓋と考えられる。

本調査地点を含む博多濱で実施された調査では、これまで多くの官衙関連遺物が出土している。特に博多濱南部（砂丘 1）に推定される官衙域とその北側に推測される居住域からの出土例が突出している。

Ph.153　D 区遺物出土状況

Ph.154　D 区鉄製鋤先出土状況

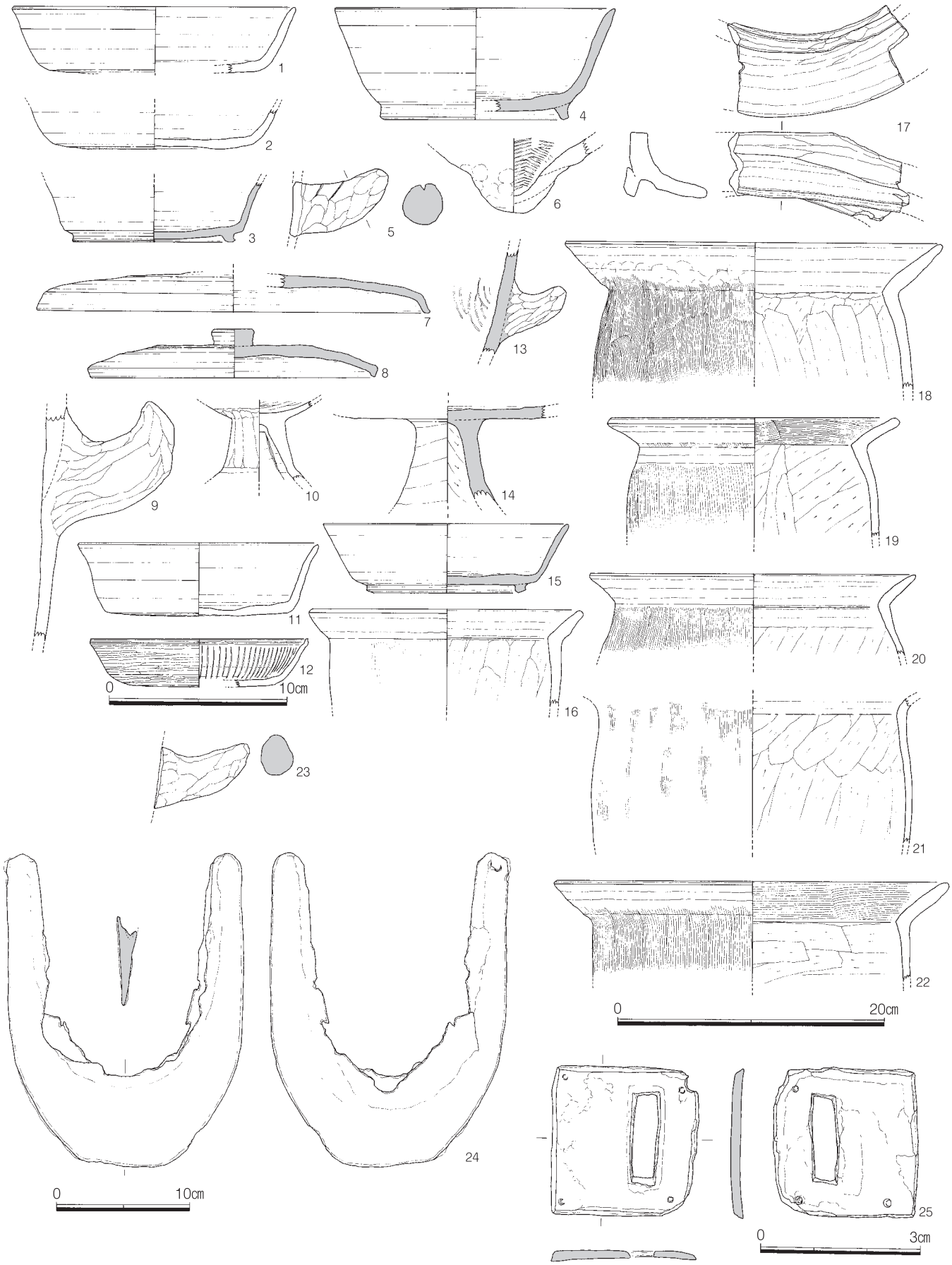


Fig.135　C・D 区その他の遺構出土遺物実測図・古代（S=1/1・1/3・1/4）

３．中世の遺構と遺物

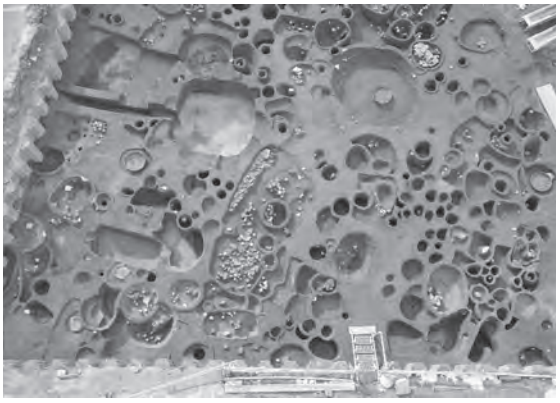
Ｃ区第１面では現在の町割りに近い主軸を持つ土坑群を多く検出した。これはＡ・Ｂ区の調査と同様に太閤町割以後に掘削されたもので、現代まで存続する地割りに基づいて町割りが連綿と継続されてきたことを示すものである。砂丘頂部に近いＤ区ではこの中世後半から近代にかけての層位は過去の開発行為によりほとんど失われていた。Ｄ区第１面とした遺構面は14世紀代の遺構が多く検出され、Ｃ区第２面に相当する遺構面である。Ｃ区第１面の標高は4.00ｍ～3.90ｍ前後を測り、北西側に向けて緩やかに傾斜する。Ｄ区第１面も標高4.00ｍ程度であるが、Ｃ・Ｄ区の境界付近から20㎝程度一段低くなり、Ａ・Ｂ区方向へ緩やかに傾斜する。

検出された遺構は廃棄土坑を中心に井戸・方形住居・木棺墓・溝などがあるが、Ｄ区においては大量の土師器坏を廃棄する溝・土坑が複数検出された。これらの大量廃棄遺構は一定主軸に沿って配置されたもので、これらの遺構配置から当時の施設配置の一端を垣間見ることができる。Ｃ区ではこのような大量廃棄遺構は検出されておらず、空間利用の差異が見て取れる。Ｃ・Ｄ両区で検出される廃棄土坑は円形のものが多く、近接した時期と考えられるものが濃密に分布する。このような土坑内には土師器坏などに混じって馬・鹿やイルカ等の獣骨が検出される。饗宴に際して食料として提供されたものであろう。

遺構の時期としては、中世前半期に属するものが圧倒的に多く、多種多彩な貿易陶磁等が出土している。磁州窯系の絞胎土器や高麗青磁盞托、龍泉窯系青磁の香炉卓等は、これまで大量の遺物が報告されている博多遺跡群においても珍しいものである。調査地点一帯は中世前半期には宋商人の居住域と推定される範囲に含まれており、彼の地から調度品として持ち込まれたものであろうか。

Ph.155　Ｃ区第３面中世遺構検出状況

Ph.156　Ｃ区第３面中世遺構検出状況



Ph.157　Ｄ区第１面中世遺構検出状況

Ph.158　Ｄ区第１面遺物出土状況

a．井戸

本調査では多くの井戸遺構を検出・調査した。C・D・E区においては近世の瓦井戸等を合わせると50基以上の井戸を確認した。近世以降の瓦井戸については掘削深度が深いため一部除き掘り下げは行っていない。井戸の多くは結桶を転用して井筒として使用している。使用時からは水位が変化しているためか、これらの桶の遺存状態は不良なものが多い。井戸は標高1m前後の褐色粗砂層まで掘削されるものが多い。標高1m前後で検出される褐色粗砂層は鉄分沈着が顕著に認められる含水層位で、相当量の水量が湧出していたものと考えられる（Fig.4参照）。

井戸の構造としては砂質土層を主体とするという軟弱な環境であったことから、直径2m前後の掘方を擂鉢状に掘削して底面中央部付近に井筒を据えるものが多い。今回の調査で検出された井戸遺構の多くは掘方底面に平坦面を持つものがほとんどである。

SE-247（Fig.136）

C区№4第2面で検出した井戸遺構である。検出時は円形廃棄土坑との認識で掘り下げを行っていたが、第3面遺構検出作業時にに井戸掘方を検出したため、井戸遺構であることを確認した。井戸の掘方はほぼ正円形で、直径1.8mを測る。検出面から深さ1mで掘方底面となり平坦面となる。底面のほぼ中央に直径60cmの結桶を転用した井筒を据える。井筒として使用される桶は高さ30cm程度が残存するが、下端部は腐食のため遺存状態は不良である。井筒内埋土と掘方埋土からは土師器坏・瓦器椀・白磁碗などの遺物が出土した。

Fig.137に出土遺物を示した。

1は白磁小碗である。高台部上まで施釉される。2は青白磁蓋である。上部に紐通しの部材が接合される。口縁部下からは露胎とする。釉調はエメラルドブルーを呈する。3・4は糸切り底部の土師器小皿である。いずれも焼成は良好で、色調は褐色を呈する。5・6はヘラ切りの土師器小皿である。7は土師器坏である。底部は糸切り調整されたのちナデが加えられる。8～11は瓦器椀である。

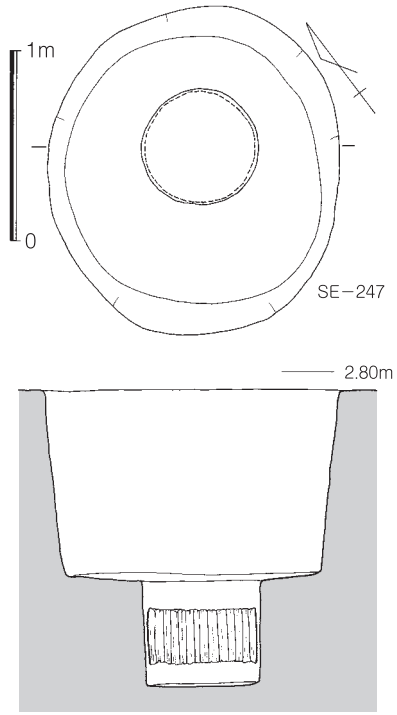
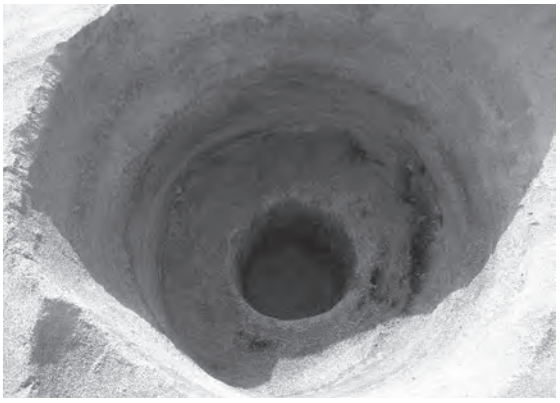


Fig.136　C区SE-247遺構実測図（S=1/40）



Ph.159　C区SE-247掘り下げ状況

Ph.160　C区SE-247全景

12 は白磁碗である。やや小振りの碗で口縁端部でわずかに外反する体部を持つ。体部下半部まで施釉され、以下を露胎とする。13 は白磁碗である。外器面には櫛描文が施され、体部下半まで施釉する。14 は白磁碗である。内器面には鉄絵で装飾を配する。15 は褐釉陶器の四耳壺である。粘土紐を三重に折り曲げた耳を横位に貼り付ける。これらの遺物とともに朱墨で墨書された白磁碗が 2 点と通常の墨書土器 1 点が出土した（Fig.290 参照）。これらの墨書土器は「＊」と「一」を高台内に朱墨で記されたもので、荷分け作業時に記された記号と考えられる。これらの出土遺物より SE-247 とした井戸遺構の時期は 12 世紀前半代と考えられる。

SE-531（Fig.138）

C 区№4 第 2 面で検出した井戸遺構で、掘方は長軸 2.5 m × 短軸 2.2 m の楕円形を呈する。検出面の標高は 2.80 m前後で、検出面から 1 m深さで平坦面となり底面中央部付近に井筒を据える。井筒の直径は 60cmを測り、掘方底面から 80cmの深さで掘削される。井筒として使用された桶は腐食のため遺存せず、壁面にスポンジ状の痕跡が残るのみである。SE-531 周辺では連続して掘削された 11 基の井戸遺構が集中して検出されるが、この井戸が最終段階で掘削された遺構である。

出土遺物を Fig.139 に示した。1 は白磁合子蓋である。2 は青白磁合子蓋である。3 は青白磁双魚文皿である。4 は福建連江魁岐窯の青磁碗である。5 は白磁平底皿、6 は白磁口禿皿である。7・8 は同安窯系青磁平底皿である。9 は緑釉陶器碗である。10 は白磁碗である。

SE-532（Fig.138）

C 区№4 第 2 面で検出した井戸遺構で、掘方は他の井戸遺構との切り合いから確認できなかった。

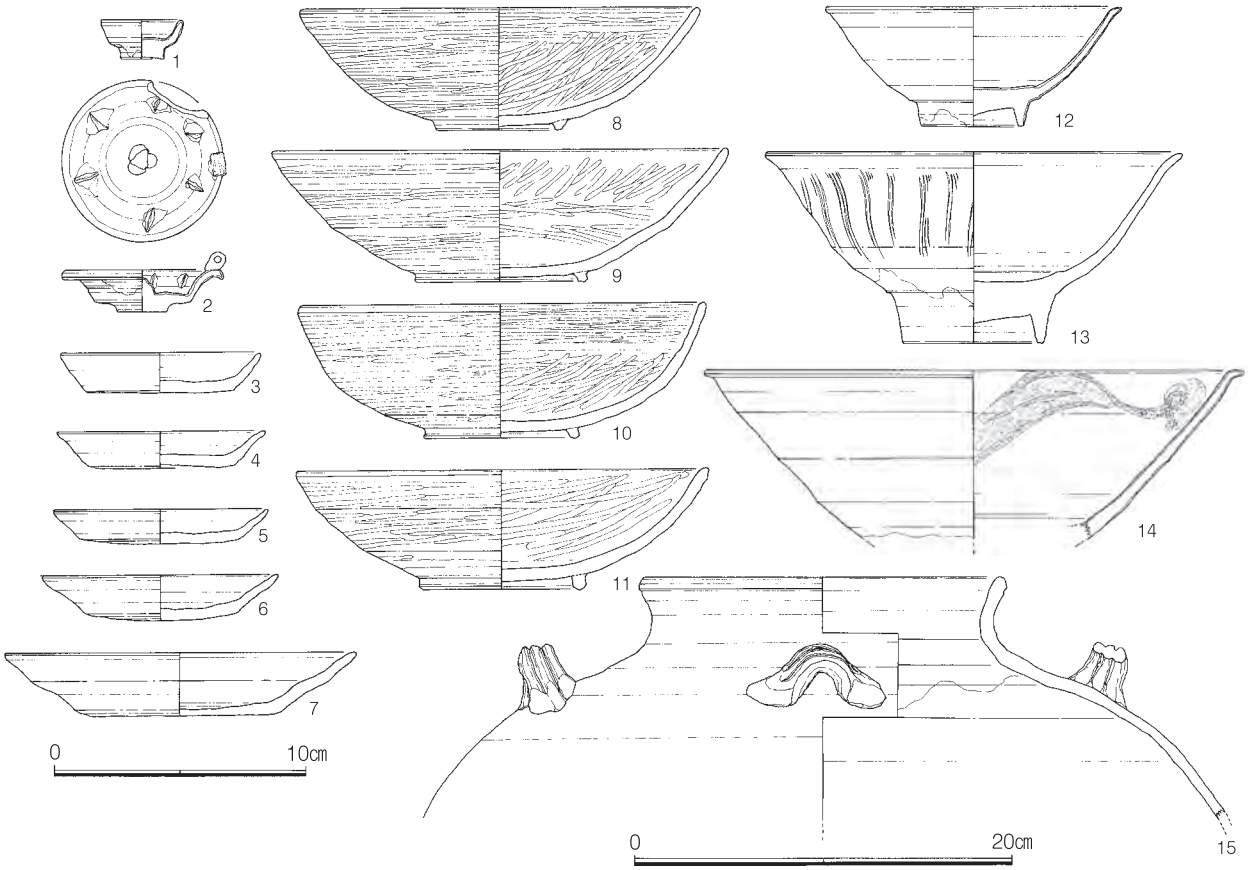


Fig.137　C 区 SE-247 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

標高 1.80 m付近まで掘り下げて井筒を確認した遺構である。井筒の桶は直径 60cm程度のもので、土圧でやや歪む。桶は下端から 20cm程度が残存するが、遺存状態は不良である。埋土から白磁・土師器坏などの遺物が出土したが細片資料である。

SE-573（Fig.138）

C 区№4 第 2 面で検出した井戸遺構で、掘方は残存する北側範囲から直径 2.50 m程度の円形の平面形が復元できる。井筒は SE-840 の井筒に切られるため痕跡の一部が確認できるにすぎない。掘方埋土からは土師器坏・白磁・中国陶器などの遺物が出土した。Fig.139 に出土遺物を示した。11 は中国陶器である。12 は白磁碗である。13 は白磁合子身である。14 は青白磁灯火器片か。

SE-574（Fig.138）

C 区№4 第 2 面で検出した井戸遺構で、標高 2.40 m前後の高さで井筒を検出した。掘方の平面形は重複が激しく確認できなかった。井筒として使用される桶は直径 70cm程度のもので、下端部 15cmの部分だけが残存していた。井筒埋土より土師器坏・白磁などの細片資料がわずかに出土した。

SE-575（Fig.138）

C 区№4 第 2 面で検出した井戸遺構で、標高 2.60 m付近まで掘り下げて井筒を確認した。井筒として使用される桶は直径 60cm程度のもので、約 30cm分が残存していた。埋土から土師器・白磁・中国陶器などの遺物が出土しているが、いずれも細片資料である。

SE-578（Fig.138）

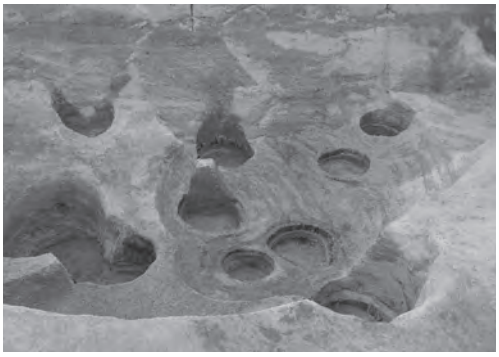
C 区№4 第 2 面で検出した井戸遺構で、検出できた範囲での掘方は、略方形を呈し検出面から深さ 50cm程度の深さで一旦平坦面となり、底面に直径 2 m前後の掘り込みが確認できる。遺物は埋土から土師器坏・白磁・青磁等が出土した。

SE-602（Fig.138）

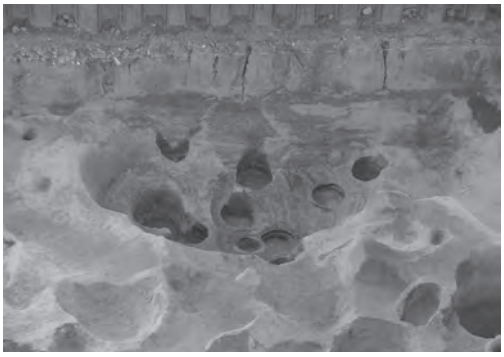
C 区№4 第 3 面で検出した井戸遺構で、井戸全体を掘り下げた標高 2.2 m付近で井筒の西端部を確認し、全体を検出した。掘方付近を近代の攪乱（SK-753）によって大きく切られるため井戸全体の形状は不明確である。検出できた井筒は直径 70cmの桶を転用したもので、検出面から 30 ～ 80cmの深さ以下で遺存していた。井戸底面の標高は 1.20 mを測る。埋土からは土師器・白磁などが出土した。

SE-786（Fig.138）

C 区№4 第 2 面で検出した井戸遺構で SE-531 に切られる。標高 1.90 m前後の高さで井筒のみを検出した。井筒は他の井戸遺構と比べ小規模なもので、直径 50cmに満たない。検出面から深さ 30cm以下で桶が確認できる。桶は土圧で楕円形に変形するが、直径 48cm前後のものが転用されており、高さ 28cm分が残存する。掘方は SE-531 東側部分で見られる扇状の部分がこれに相当するものと考えられ、直径 2.2 m前後の規模が復元できる。埋土より土師器・白磁の細片資料が出土した。



Ph.161　C 区井戸群検出状況



Ph.162　C 区井戸群検出状況

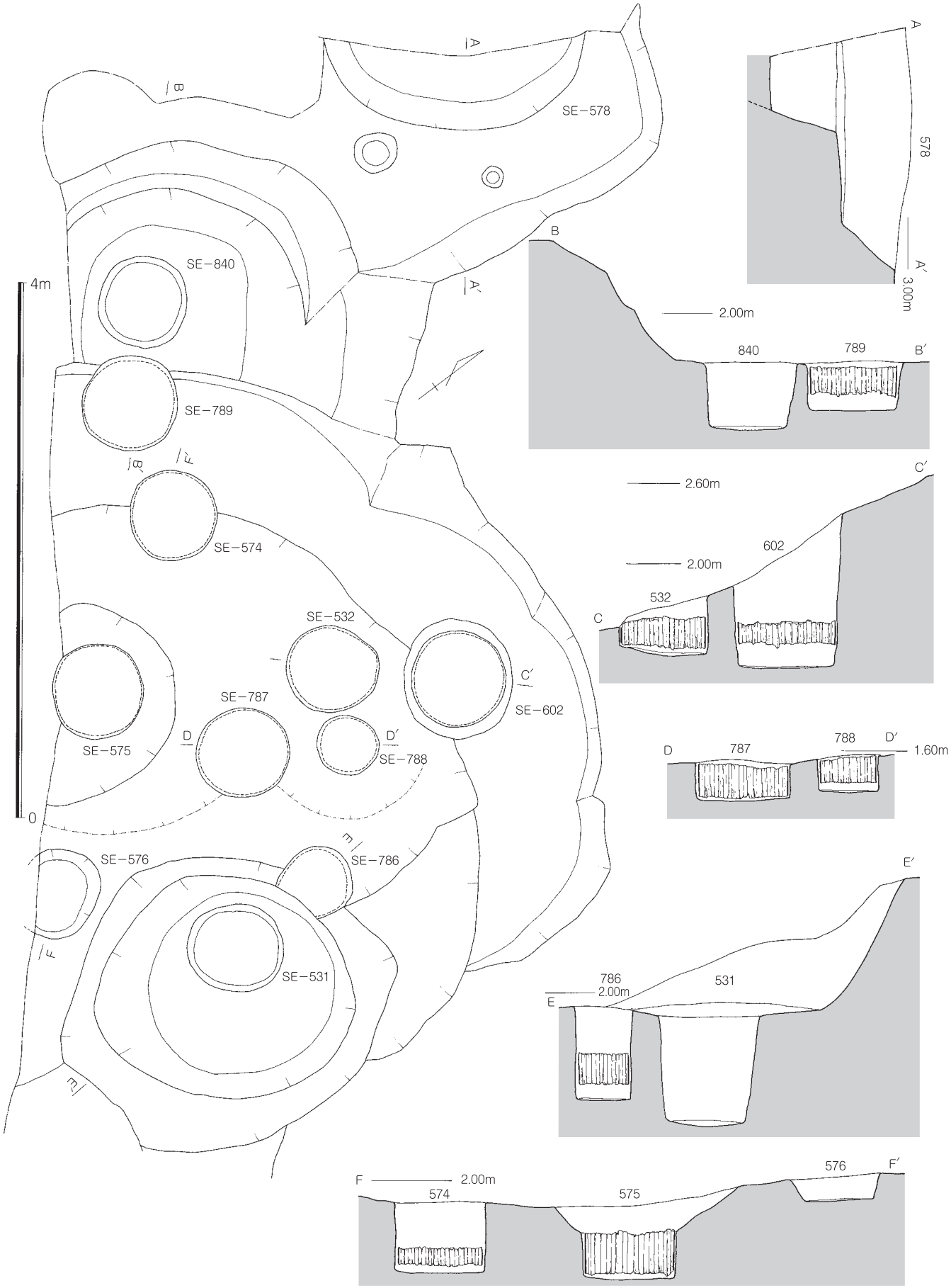


Fig.138　C区 SE-531・532・573～576・578・602・786～789・840 実測図（S=1/40）

SE-787（Fig.138）

C 区№4 第 2 面で検出した井戸遺構で井筒は直径 60cm程度の桶を転用する。高さ 30cm程度分が残存するが下端部は腐食が著しい。掘り下げの状況から SE-786・SE-532 を切るように掘削されたことが把握できた。出土遺物を Fig.139 に示した。15 は土師器埦である。16 は須恵器碗である。17 は人形頭部片である。18 は須恵器蓋である。19 は須恵器横瓶である。

SE-788（Fig.138）

C 区№4 第 2 面で検出した井戸遺構で SE-532 に先行する井戸遺構である。井筒の直径は小規模で直径 40cm程度を測る。転用される桶も小型のもので直径 40cm程度、高さ 20cm程度を測る。

SE-789（Fig.138）

C 区№4 第 2 面で一部を検出した井戸遺構で、第 3 面で井筒全体を確認した。他の井戸遺構と同様に重複が激しいため掘方は確認できなかった。標高 1.60 m前後まで掘り下げた段階で井筒全体が検出された。井筒として使用された桶は直径 60cm程度のもので、下端から 20cm程度が残存する。

SE-840（Fig.138）

標高 1.60 m付近で井筒を確認した。SE-573 とした井戸掘方ラインとほぼ重複するように掘削されており、当初は SE-573 の井筒との認識で掘り下げを行っていた。掘り下げの結果、これとは別の遺構であることを確認した。井筒は直径 60cm、検出面から底面までの深さは 50cmを測る。桶などは腐食のために遺存していなかった。土師器坏・白磁などが出土したが、いずれも細片資料である。11 基の井戸を検出したが、切り合い関係から各井戸の前後関係をまとめると次のようになる。SE-574 → SE-789、SE-788 → SE-532 → SE-787、SE-575 → SE-576、SE-786 → SE-531 → SE-576、SE-573 → SE-840、という前後関係が把握できるが、井戸群全体としての順序は判然としない。各井戸からの出土遺物より 12 世紀中頃から 13 世紀代初頭にかけて連続して営まれた井戸であろう

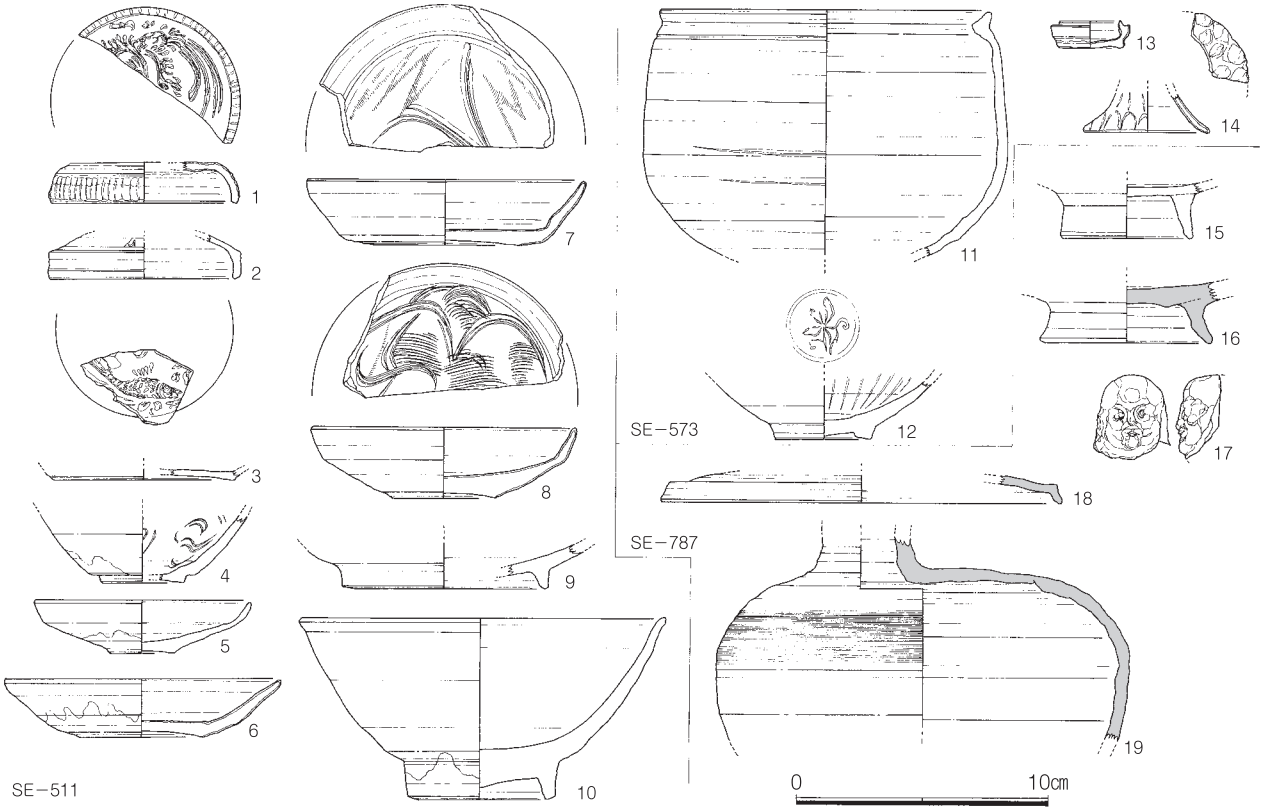


Fig.139　C 区 SE-531・573・787 出土遺物実測図（S=1/3）

SE-594（Fig.140）

C 区№3 第 2 面で掘方を検出した井戸遺構である。第 3 面で掘方全体の掘り下げを行い、底面直上で井筒直上に廃棄された礫群等を検出した。

掘方は南北にやや長い楕円形となり、長軸 1.8 m×短軸 2.4 mを測る。検出面から 1 mの深さで掘方底面の平坦面となり、底面の北側部分に井筒を据える。井筒の直径は 70cmを測り、掘方底面から深さ 70cm、標高 1.0 m付近まで掘削される。桶などは腐食のため遺存しておらず、壁面でわずかに痕跡が確認できるのみであった。

井筒の直上からは前述のように廃絶時に投棄されたと考えられる被熱した礫群・土器片等が検出される。礫は相当な高熱にさらされたのか赤変化しており、熱破砕を受けた状況のものが多く見られることから火災などの要因により、井戸を放棄した可能性が考えられた。

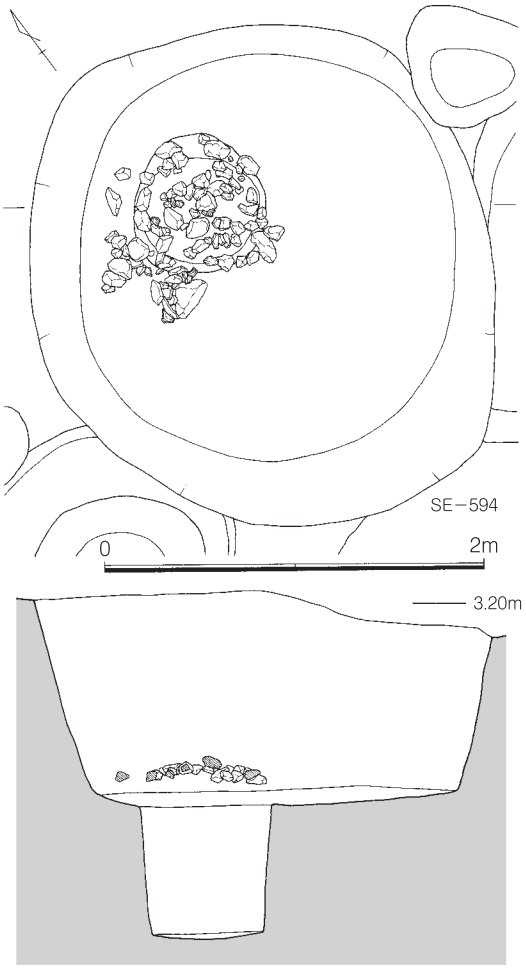


Fig.140　C 区 SE-594 遺構実測図（S=1/40）

出土遺物を Fig.142 に示した。

1 は土師器小皿である。体部はナデ調整され底部は糸切り調整される。焼成は良好で色調は褐色を呈する。

2 は土師器坏である。3 は大型の土師器坏である。直線的に開く体部を持ち、口径は 17cm、底径は 12cm、器高 4.2cmを測る。坏はいずれも底部を糸切り調整される。焼成は良好で色調は褐色を呈する。

4 は京都系土師器坏である。胎土は緻密で底部はヘラ切りされる。焼成は良好で色調は褐色を呈する。5 は中国陶器坏である。胎土は緻密で茶褐色の釉がかかる。

これらの出土遺物より、SE-594 とした井戸の時期は 12 世紀末から 13 世紀代前半期の年代が考えられる。

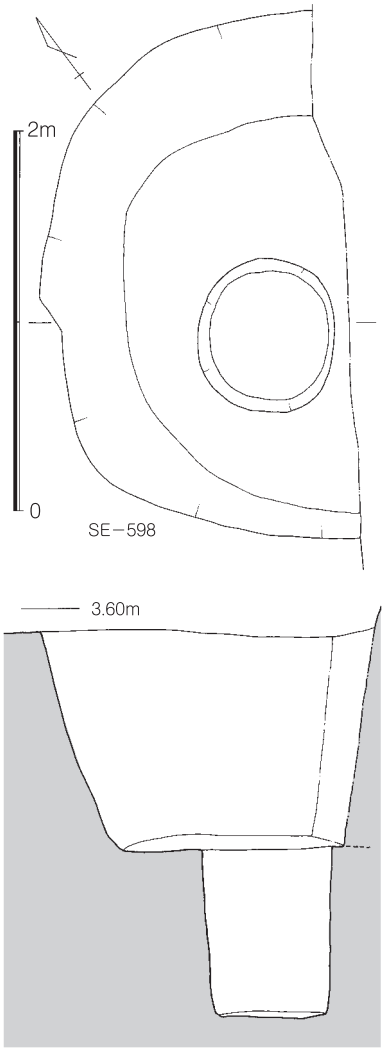


Fig.141　C 区 SE-598 遺構実測図（S=1/40）

SE-598（Fig.141）

C 区№9 第 3 面で検出した井戸遺構である。井戸掘方が調査区壁面にかかるため、北側部分のみの調査を行った。調査範囲での掘方の直径は 2.80 m前後を測り、平面形は円形を呈する。検出面の標高は 3.50 m前後で、検出面から 1.2 mの深さで平坦面となり、掘方底面の北寄りの部分に井筒を据える。井筒の直径は 70cmを測り、底面から 90cmの深さで標高 1.40 mまで掘削される。使用された桶などは腐食のため遺存していなかった。

Ph.163　C 区 SE-594 完掘状況

Ph.164　C 区 SE-594 掘り下げ状況

Fig.142 に出土遺物を示した。

6 ～ 10 は土師器小皿である。8・9 には板目圧痕が残る。11 ～ 13 は土師器坏である。

14 は押圧波状文の軒平瓦である。桶巻作りと呼ばれる技法で製作された平瓦に、瓦当部を貼り付け全体を回転させてヘラ状工具を用いて重弧文を作り出す。その後、波状に押圧を加えた後四分割して完成となる。版木を用いた技法と異なり、同笵の瓦は存在しないと言われる。側面部には分割時の工具痕が残り、上部には桶に巻いた布の痕跡が明瞭に残る。焼成は良好で色調は黒灰色を呈する。近年の研究で、この種の瓦は建物全体を覆うには出土量が絶対的に少量であり、屋敷内に祀られた御堂の屋根などの小範囲を葺くために貿易陶磁とともに持ち込まれたものである可能性が指摘されている。これらの出土遺物より 12 世紀代後半の時期が考えられる。

SE-603（Fig.143）

C 区№3 第 2 面で掘方を確認した井戸遺構で、第 3 面で掘り下げを行った。掘方は直径 2 mの円形で検出面の標高は 3.10 mを測る。検出面から 1 mの深さで掘方底面の平坦面となる。方底面の中央部に直径 70㎝の井筒を据える。井筒は掘方底面から 50㎝の深さまで掘削される。底面の標高は 1.60 mを測り、鉄分沈着が見られる褐色粗砂層まで達する。井戸枠として使用されていた桶は腐食のため遺存しておらず、底面付近の壁面にわずかに痕跡が残るのみであった。

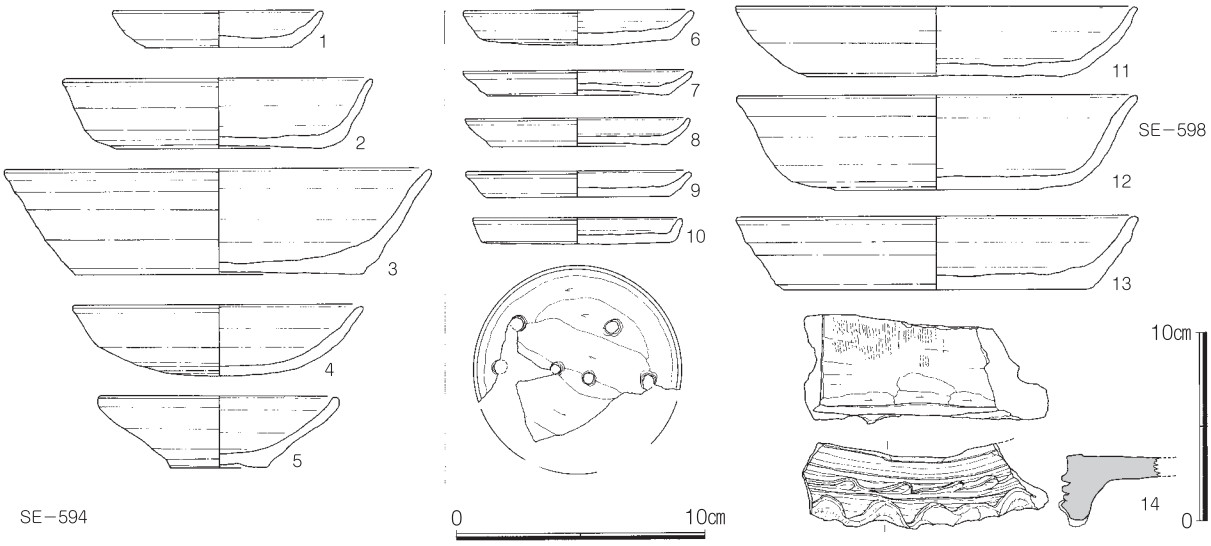


Fig.142　C 区 SE-594・598 遺構実測図（S=1/3・1/4）

出土遺物を Fig.144 に示した。

1 は高麗青磁碗である。内面見込み周辺に重ね焼きの目跡痕が残る。畳付のみ露胎とし、にぶいオリーブ色の釉で施釉する。2 は黒色土器埦である。厚く肥大する口縁端部を持ち、断面三角形の高台を貼り付ける。内外器面ともに密なヘラ磨きを施す。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

3 は白磁碗である。口縁端部をわずかに玉縁状に肥大化させる。釉調は乳灰白色を呈する。

4 は福建連江魁岐窯の青磁碗である。外面は体部下半まで施釉し、内面には片切彫りによる装飾を施す。

5 は白磁碗である。直線的に開く体部を持ち、高台中程まで施釉する。釉調は乳灰緑色を呈する。

6 は白磁坏である。口縁端部から受け部を露胎とする。下半部は欠損するが、高台がつくものであろう。

7 は中国陶器取手付片口鍋である。取手は断面八角形となり、上下に紐通しの穴が穿孔される。8 は中国陶器盤底部片である。見込みに片切彫りで装飾され、釉調は濃緑灰色となる。

これらの出土遺物より、遺構の時期は 12 世紀前半の年代と考えられる。

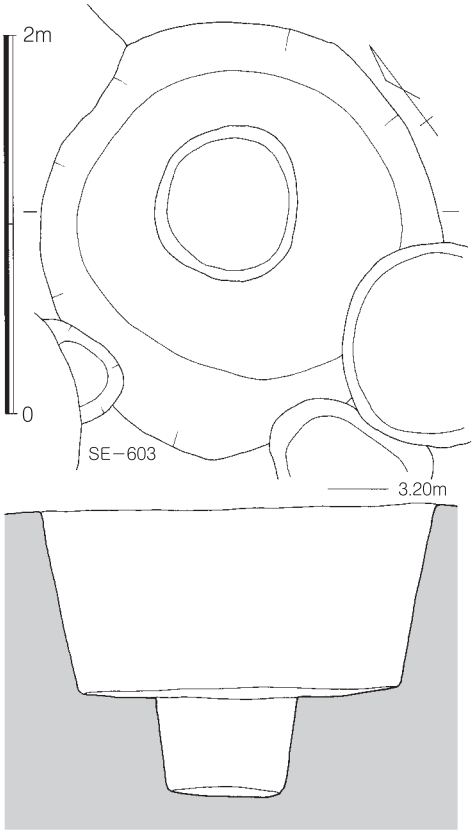
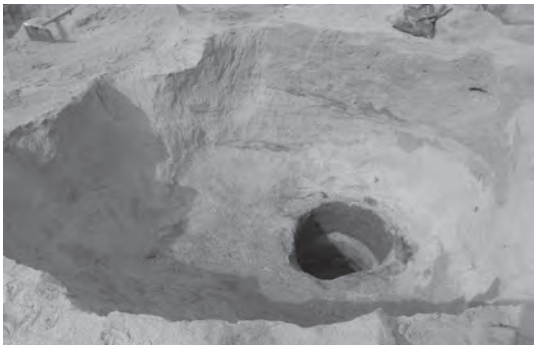


Fig.143　C 区 SE-603 遺構実測図（S=1/40）



Ph.165　C 区 SE-594

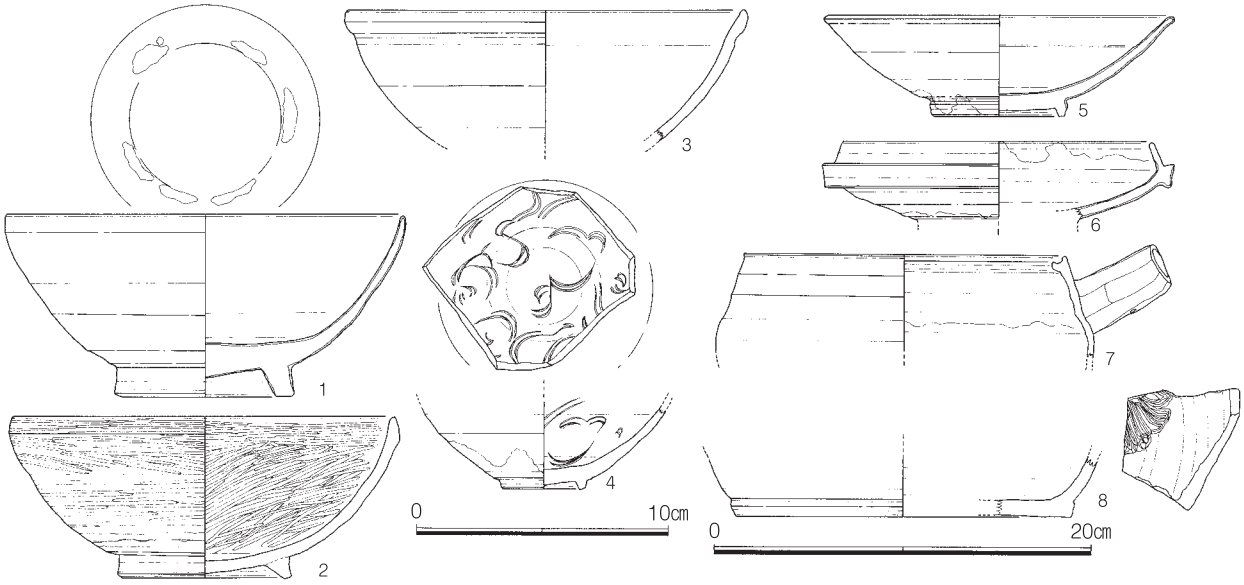


Fig.144　C 区 SE-603 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

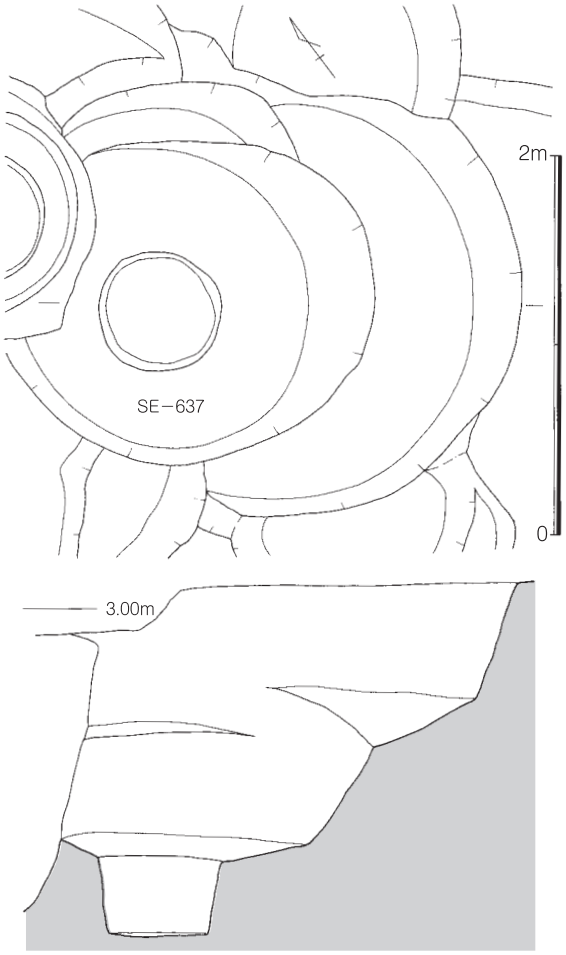


Fig.145　C区 SE-637 遺構実測図（S=1/40）

SE-637（Fig.145）

C区№6第3面で検出した井戸遺構である。北側に近世瓦井戸であるSE-80が存在しており、SE-80の掘方により北側の一部が攪乱される。検出面の標高は3.00 m前後で、掘方の平面形は南北方向に伸びる楕円形を呈する。現状で長軸2.5 m×短軸2.2 mを測る。掘り下げ時には南側に隣接するSK-636が別の井戸遺構掘方との認識であったため、60cm程度掘り下げて切り合いと井筒の検出を試みたが、直径 1.8 m前後を測る二段目の円形掘方を確認したため、段を有する楕円形の井戸として掘り下げを続けた。

二段目の掘方は直径1.8 mの円形のもので、70cm程度の深さで底面の平坦面となる。底面は直径1.1 m程度の円形となり、中央部に井筒を据える。井筒は掘方底面から深さ40cm程度まで掘削されており、鉄分沈着が見られる褐色粗砂層に達していた。底面の標高は 1.20 m前後を測る。井筒として使用された桶は腐食のため遺存していなかった。

埋土からは土師器坏・白磁・瓦器椀・中国陶器などの遺物が出土した。

出土遺物をFig.146に示した。

1は土師器坏である。全体に摩滅が進み、底面には板目圧痕のみが残る状態である。側面の観察から糸切り調整されたものと考えられる。大きく開く体部を持ち口径は14.2cmを測る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。2は瓦器椀である。3は白磁平底皿である。4は白磁玉縁碗である。5は緑釉陶器碗である。

SE-686（Fig.147）

C区№1第3面で検出した井戸遺構である。隣接してSE-745・SE-833が掘削されているため掘方の正確な形状を把握することができなかったが、東西部分の残存範囲から直径3.6 mの円形の掘方であることが分かる。検出面の標高は2.90 m前後で、検出面から1 mの深さで平坦面が検出できる。この平坦面はやや不整円形となり、西側部分にさらに一段掘り込みが検出される。この掘り込みは長軸1.8 m×短軸1.4 mの楕円形を呈し、中央部に井側と井筒が据えられる。井側には結桶を複数個体使用しており、その中央部に直径40cm程度の曲げ物を据える。井側として使用される桶は直径70cm前後のものが使用されるが、部分的に二重になる範囲が確認されており破損品を転用したか、脆弱な箇所を他の固体を使用して補強したものと考えられる。桶は高さ20cm程度分が残存する。井筒として使用された曲げ物は高さ24cm程度のもので留め具の樹皮が観察できた。井筒底面の標高は1.10 m前後を測り、鉄分沈着のみられる褐色粗砂層以下まで達していた。埋土からは白磁・土師器・耀州窯系青磁・中国陶磁などの遺物が出土した。

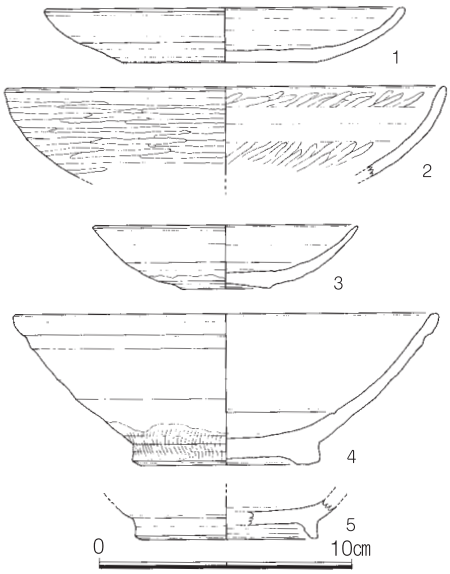


Fig.146　C区 SE-637 出土遺物実測図（S=1/3）

出土遺物を Fig.148 に示した。

1 ～ 4 は土師器小皿である。いずれも底部は糸切り調整され、2・3 には板目圧痕が残る。器壁は薄手の造りで、口縁端部が直線的に伸びるものと厚くなるものに分けられる。焼成はいずれも良好で、色調は褐色を呈する。5 は土師器坏である。底部は糸切り調整される。6 は中国陶器坏である。わずかに外反する体部を持ち、全体的に薄手の造りとなる。7 は広東産の白磁合子身である。受け部より上を露胎とする。8 は石製品である。非常に精緻な灰褐色の石材を用いて製作された筐で、内面にはケズリ痕跡が明瞭に残る。直方体の体部に入母屋の上部を乗せた構造を採るもので、蓋か本体かは残存部分からは判断できない。外面には線刻による梅花を意匠とした装飾が施される。貿易陶磁とともにもたらされたものか宋商人の私物として持ち込まれたものと考えられる。

9 は青白磁合子身である。受け部を露胎とするが以下に施釉する。釉調はエメラルドグリーンを呈する。10 は白磁平底皿である。内面に片切彫りと櫛描文による装飾を施す。11 は白磁蓋である。上部を施釉するが、下半部は露胎とする。12 は白磁小壺である。11・12 は対になる遺物であろう。13 は白磁平底皿である。14 は龍泉窯系青磁碗である。15 は白磁壺口縁部片である。21 は中国陶器黄釉盤である。22 は無釉陶器捏鉢である。井筒上層から出土したもので、井戸廃絶段階に廃棄されたものと考えられる（Ph.168 参照）。

これらの出土遺物より、この遺構の時期は 12 世紀代後半の年代が考えられる。

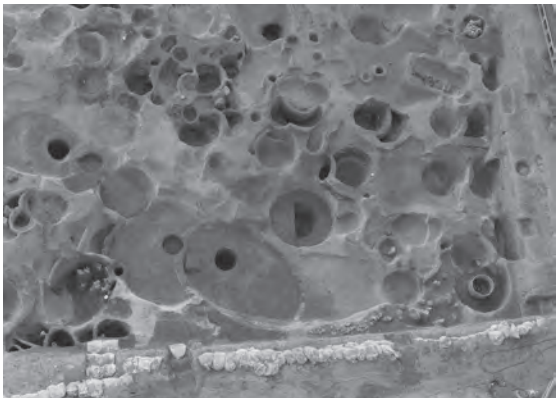
SE-745（Fig.147）

C 区№1 第 3 面で検出した井戸遺構である。SE-686 に先行する井戸遺構で、掘方の北側を大きく切られる。掘方は直径 3.0 m の円形を呈し、検出面の標高は 3.20 m を測る。検出面から 80㎝の深さで平坦面となり、底面のやや北寄りの箇所に井筒を据える。井筒の直径は 60㎝前後を測り、掘方底面から深さ 1 m まで掘削される。井筒下端部で桶の痕跡が確認できる。腐食が著しく高さ 10㎝程度分が残存するが、スポンジ状になっていた。底面の標高は 1.30 m 前後で褐色粗砂層に達する。埋土から土師器・白磁・中国陶器などの遺物が出土した。

Fig.148 に出土遺物を示した。

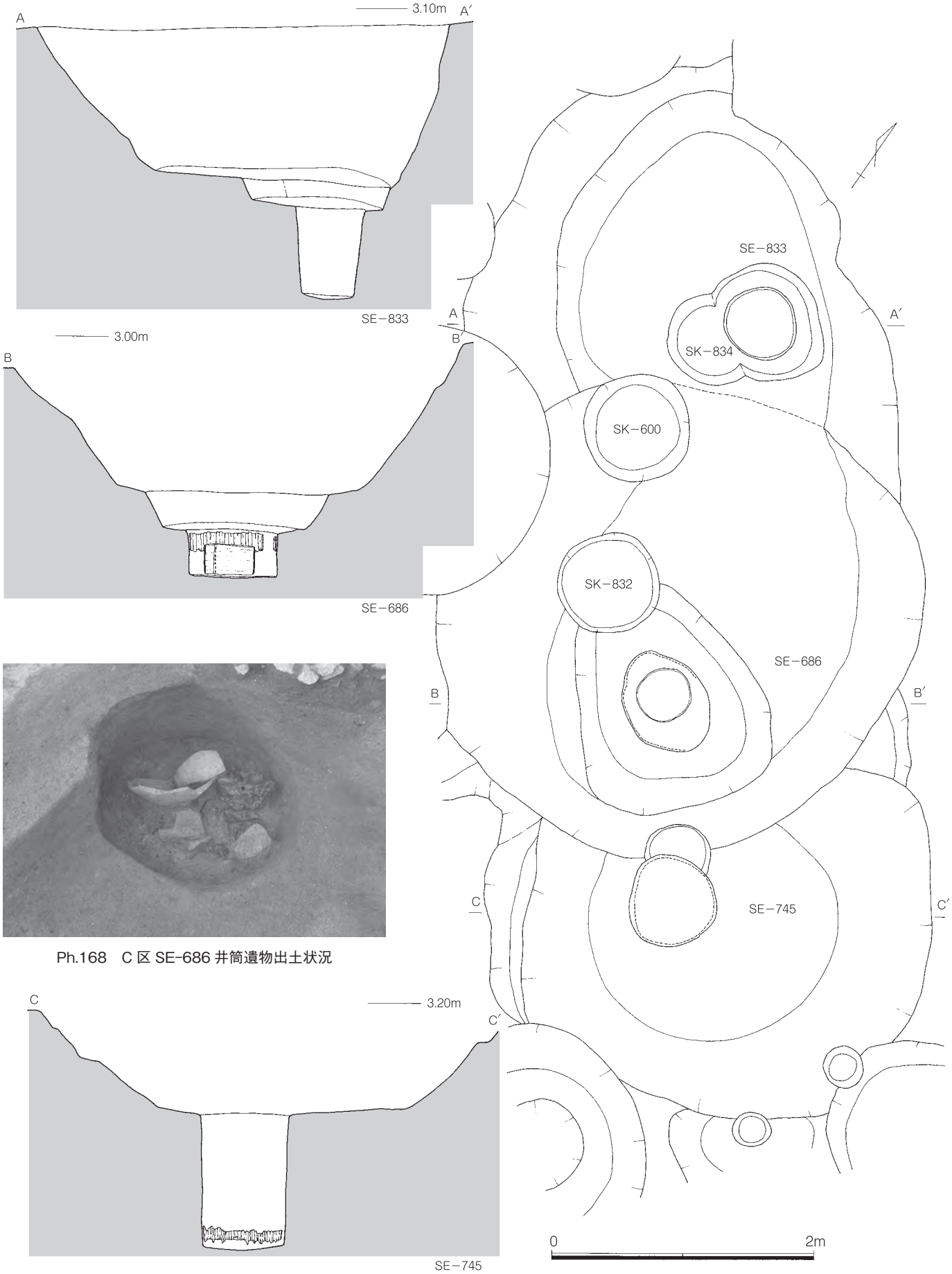
18 は青白磁の合子蓋である。19 は耀州窯系青磁碗である。20 は白磁鉢である。

これらの出土遺物よりこの井戸の時期は 12 世紀代中頃の年代が考えられる。



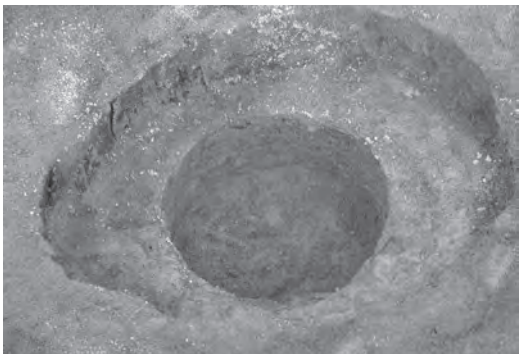
Ph.166　C 区井戸群検出状況

Ph.167　C 区 SE-686 検出状況



Ph.168　C 区 SE-686 井筒遺物出土状況

Fig.147　C 区 SE-686・745・833 遺構実測図（S=1/40）



Ph.169　C 区 SE-686 井筒検出状況

Ph.170　C 区 SE-686 井筒検出状況

SE-833（Fig.147）

C 区№1 第 3 面で検出した井戸遺構である。掘方は SE-686 に切られており、これに先行する遺構である。掘方は直径 3.0 mの円形を呈し、底面中央部に井筒を据える。検出面の標高は 3.20 m前後であるが、この遺構上に SK-601 や他の遺構が展開していたため井戸として認識できたのは掘り下げの途中である。掘方底面は検出面から 1.2 mほど掘り下げた標高 2.0 m前後の高さとなる。井筒は直径 70㎝程度の円形掘り込みの中に位置しており、直径 50㎝程度を測る。井筒として使用された桶などは腐食のため遺存していなかった。掘方底面から井筒底面までは 90㎝の深さを測る。埋土から白磁・土師器・中国陶磁などの遺物が出土した。

出土遺物を Fig.148 に示した。

16 は白磁平底皿である。体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。17 は白磁壺の蓋である。外面は施釉し、内面は口縁端部から屈曲部まで露胎とする。

これらの出土遺物よりこの井戸の時期は 12 世紀代前半の年代が考えられる。

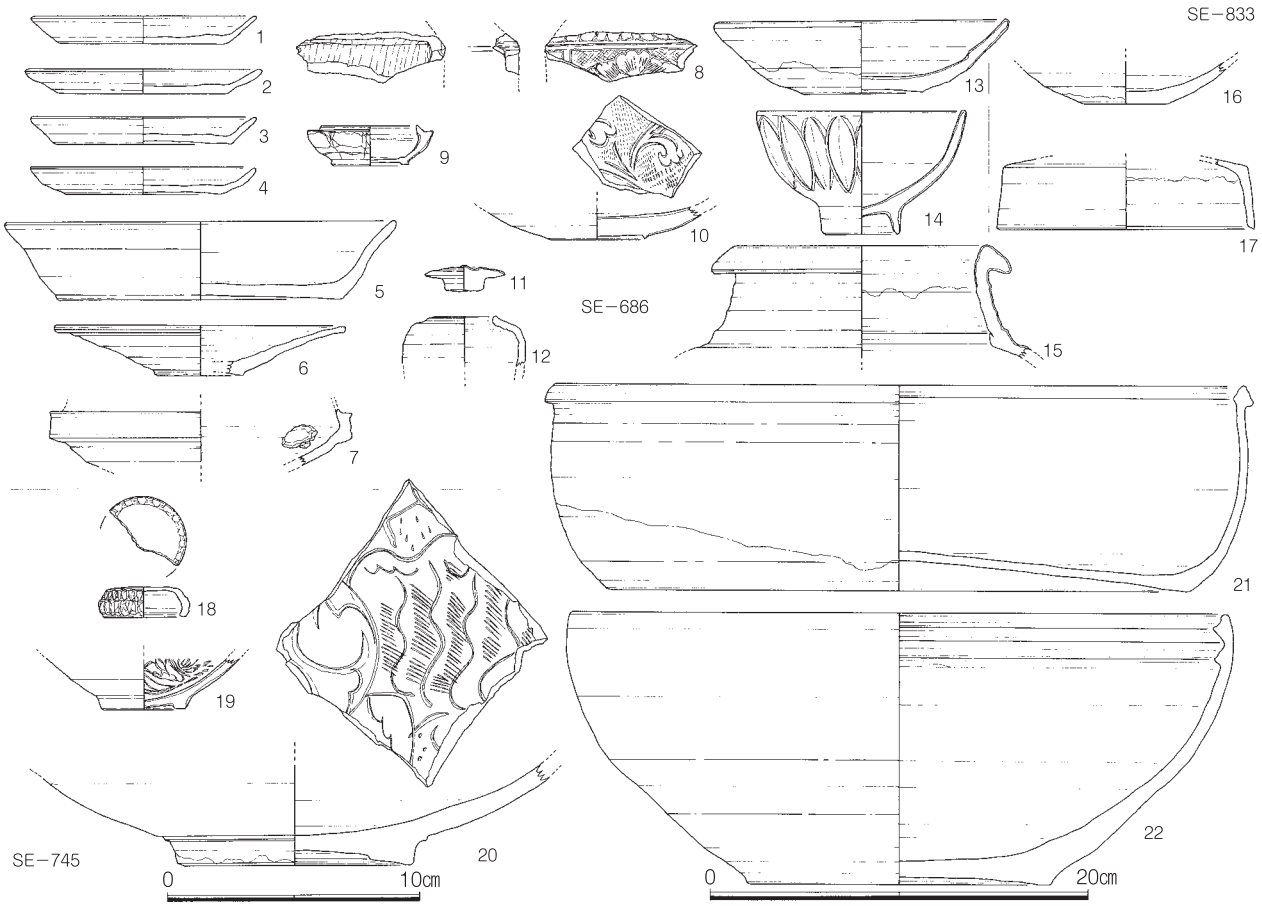


Fig.148　C区 SE-686・745・833 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

SE-740（Fig.149）

C 区№3 第 4 面で検出した井戸遺構である。第 3 面で掘方の一部を確認していたが、調査区壁面にかかるため第 4 面で改めて全体を検出し掘り下げを行った。掘方は短軸 1.5 m の楕円形を呈し、掘方底面中央部に井筒を据える。検出面の標高は 2.90 m前後であり、掘方底面までは深さ 90cmを測る。井筒は直径 60cm程度の桶を転用したものであるが、土圧のため東西方向に歪む。掘方底面から井筒底面までの深さは 90cmを測り、底面から 50cm前後の高さに桶が遺存する。桶は腐食が進み下半部の一部がスポンジ状になる。井筒底面の標高は 1.10 m を測り、褐色粗砂層上面に達していた。埋土から土師器・白磁・中国陶器などの遺物が出土した。

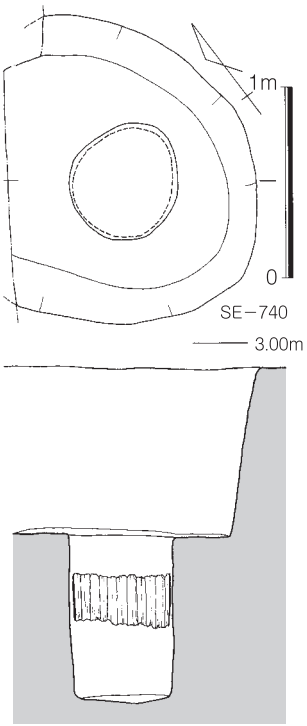


Fig.149　C 区 SE-740 遺構実測図（S=1/40）

出土遺物を Fig.150 に示した。

1 は土師器坏である。底部はヘラ切り調整され、体部内面はコテ当てにより滑らかに調整される。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。2 は白磁平底皿である。内面見込みに片切彫りで雲文が施される。外面は下半部まで施釉し、以下を露胎とする。釉調は乳灰白を呈する。

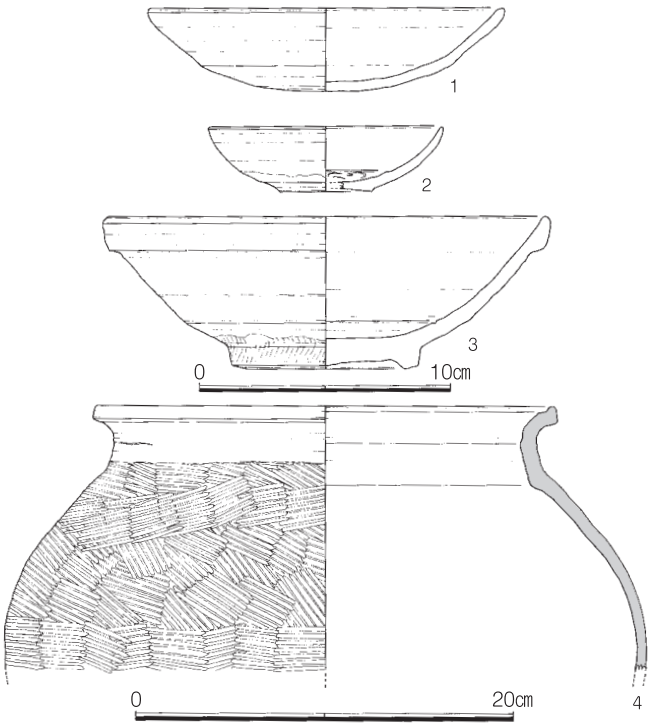


Fig.150　C 区 SE-740 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

3 は白磁玉縁碗である。高台部付近にはケズリの痕跡が明瞭に残る。

4 は東播系須恵質土器の甕である。外面胴部には並行する叩き目が明瞭に残る。

これらの出土遺物よりこの井戸の時期は 12 世紀代前半の年代が考えられる。

Ph.171　C 区第 3 面遺構検出状況

Ph.172　C 区 SE-740 井筒検出状況

SE-528（Fig.151）

D区№8第2面で検出した井S戸遺構である。検出面の標高は3.50 m前後を測る。調査区南端部での検出であり、掘方南側は調査区外に伸びる。

検出した範囲での掘方は直径2.1 mの円形を呈する。井筒の直径は90cmを測り、掘方底面から1.2 mの深さまで掘削される。井筒底面では直径70cm程度となり、使用された桶もこの程度の大きさであったと考えられる。腐食のため遺存していなかった。底面は標高1.90 m付近まで掘削されており、鉄分沈着の粗砂層以下まで及んでいる。C区で検出された井戸群と比較して掘削深度が浅いが、含水層が褶曲して存在していることを考えれば井戸として使用に堪えたのであろう。埋土から土師器・白磁・国産陶器などの遺物が出土した。

Ph.173　D区SE-528掘り下げ状況

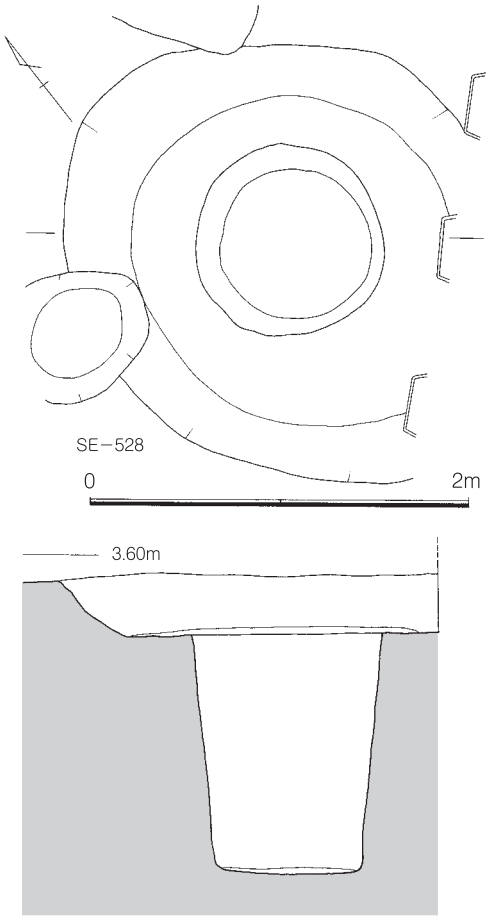


Fig.151　D区SE-272・528実測図（S=1/40）

出土遺物をFig.152に示した。

1は福建連江魁岐窯の青磁碗である。外面は体部中程まで施釉し、以下を露胎とする。体部は薄手の造りで、口縁端部でわずかに外反する。高台はケズリ出しで成形される。内面は片切彫りによる装飾が施される。

全体的に精緻な造りで、釉調は乳灰緑色を呈する。

この他には糸切りの土師器坏や白磁碗などの遺物が出土した。

これらの出土遺物より、このSE-528とした井戸遺構の時期は12世紀代中頃の年代と考えられる。

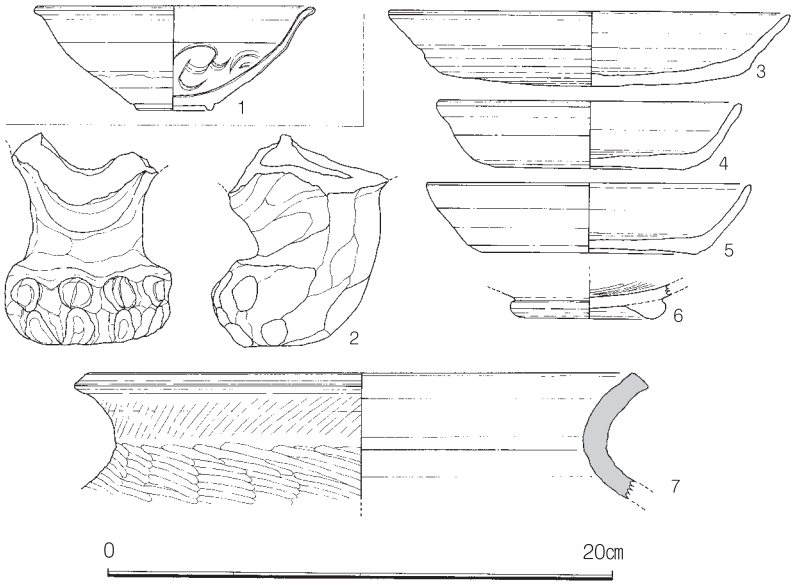


Fig.152　D区SE-272・528・600出土遺物実測図（S=1/3）

SE-600（Fig.153）

D 区№9 第 2 面で検出した井戸遺構である。この遺構周辺も濃密に土坑などが存在していたため第 3 面で掘方の掘り下げを行い、第 4 面で井筒の検出と掘り下げを行った。井戸の西半部が調査区外に位置しているため、掘り下げ時には井筒も調査区外に位置するものと予想して掘り下げを行っていたが、土層断面の清掃中に井筒を確認したため一部拡張を行って井筒の完掘を行った。検出できた範囲での井戸掘方は略方形を呈し、一辺 4.30 mを測る。検出面の標高は 3.10 m前後の高さで、検出面から 1.40 mの深さで平坦面となる。井戸掘方全体の検出を行えていないため底面のどの位置に井筒が据えられているのかは確認できないが、南北方向では中央部に井筒が据えられている。井筒は直径 70cmを測り、掘方底面から 60cmの深さで掘削される。井筒内には桶が据えられているが、全体的に腐食が進み遺存状態は不良であった。

井筒底面の標高は 1.80 m前後と比較的高い。中世以後湧水高が大きく低下していることが知られており、これに起因して桶の残存状態の不良を招いたものと考えられる。

埋土からは土師器・白磁・瓦器椀・中国陶器などの遺物が出土した。

出土遺物を Fig.152 に示した。

2 は瓦質土器火鉢の獣足である。3 はヘラ切り調整された底部を持つ土師器坏である。ヘラ切りされた底部はナデ調整が加えられ板目圧痕が加えられる。焼成は良好で色調は褐色を呈する。

4・5 は糸切りの土師器坏である。6 は土師器埦である。7 は須恵質土器壺である。頸部上には幅の広い刷毛目調整が施され、体部には並行する叩き目が明瞭に残る。焼成は良好で色調は濃灰色を呈する。

これらの出土遺物よりこの遺構の時期は 12 世紀前半頃の年代と考えられる。

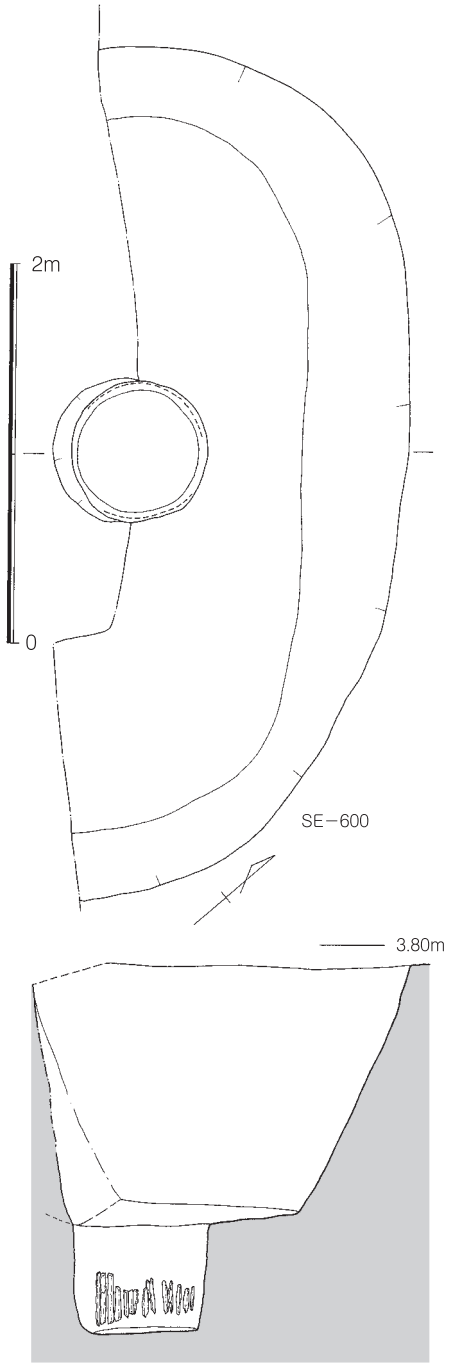


Fig.153　D 区 SE-600 遺構実測図（S=1/40）

Ph.174　D 区 SE-600 全景

SE-569（Fig.154）

D 区№7 第 2 面で検出された井戸遺構である。第 2 面遺構検出時に円形掘方が確認できたが、周囲に同様の円形土坑のプランが複数検出されたため、第 3 面まで掘り下げて改めて平面形の確認を行った。その結果井戸周辺で観察された土層の違いは遺構の平面形を示すものではなく、整地の単位と範囲を表すものであったことが確認できた。掘り下げおよび完掘作業は第 4 面で行っている。

井戸の掘方は直径 3.0 m の円形で、検出面から 1.20 m の深さで平坦面となり、底面東寄りの部分にさらに一段掘り込みを行い井筒を据える。底面上で確認された掘り込みは直径 1.4 m の円形で底面から深さ 20㎝程度の深さで掘削される。この掘り込み中央部に直径 70㎝の井筒が確認できる。井筒に転用される桶などは腐食のため遺存しておらず、壁面にわずかに痕跡が観察できるのみである。

埋土からは糸切り・ヘラ切りの土師器坏・白磁・瓦器椀等の遺物が出土した。これらの出土遺物より井戸の時期は 12 世紀前半頃の年代と考えられる。

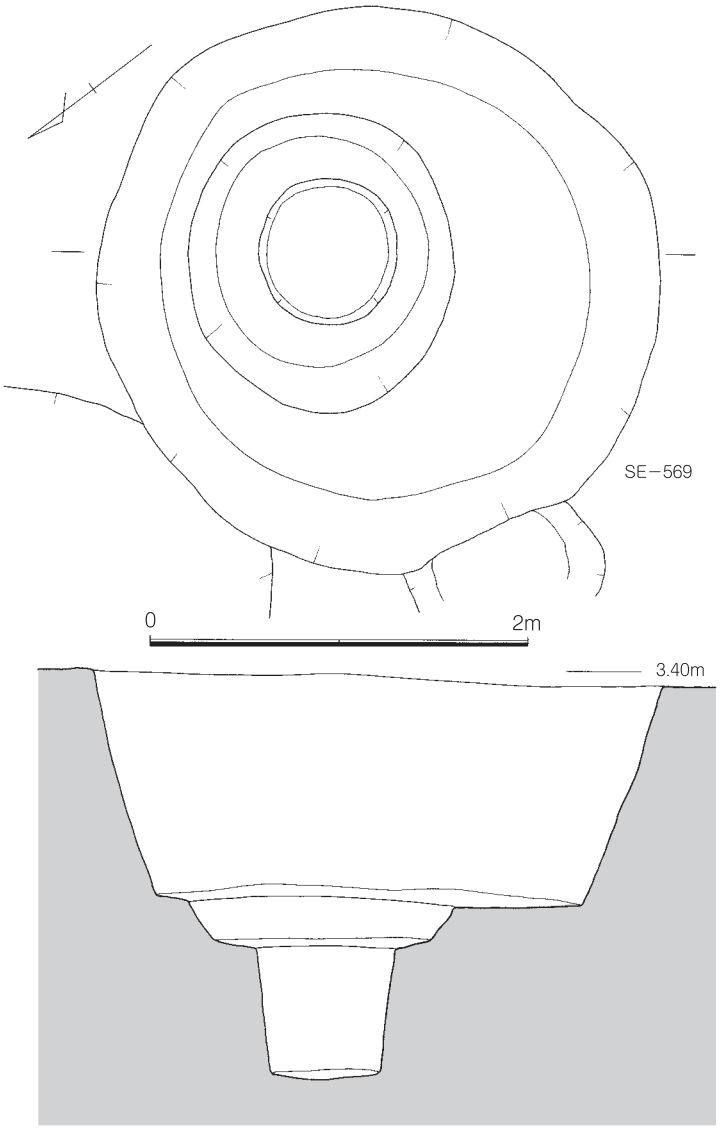


Fig.154　D 区 SE-569 遺構実測図（S=1/40）

Ph.175　D 区 SE-569 全景

Ph.176　D 区 SE-569 井筒検出状況

SE-765（Fig.155）

D 区№13 第 3 面で検出した井戸遺構である。掘方自体は第 2 面遺構検出の段階で確認していたが、周囲遺構の掘り下げ作業に支障を来す恐れが生じたため第 3 面および第 4 面で掘り下げと完掘を行った。

確認できた井戸掘方は円形で直径 2.50 m前後を測る。検出面の標高は 3.50 mを測り、検出面から 1.60 mの深さで掘方底面の平坦面となる。井筒は底面のやや北寄りの箇所に据えられており、直径 70㎝前後を測る。掘方底面から 30㎝程度の深さで掘削されるが、桶などの有機物は腐食のため遺存していなかった。

井筒底面の標高は 1.50 m前後を測り、他の井戸遺構と同様に鉄分が沈着する粗砂層に達していた。

井戸掘方埋土からは土師器・白磁・中国陶器などの遺物が出土した。

Fig.156 に出土遺物を示した。

1 は土師器小皿である。底部は糸切り調整される。焼成は良好で色調は褐色を呈する。

2 は白磁平底皿である。底部直上まで施釉し、以下を露胎とする。釉調は乳灰白色を呈する。

これらの出土遺物より井戸の年代は 12 世紀後半から 13 世紀代前半頃の時期が考えられる。

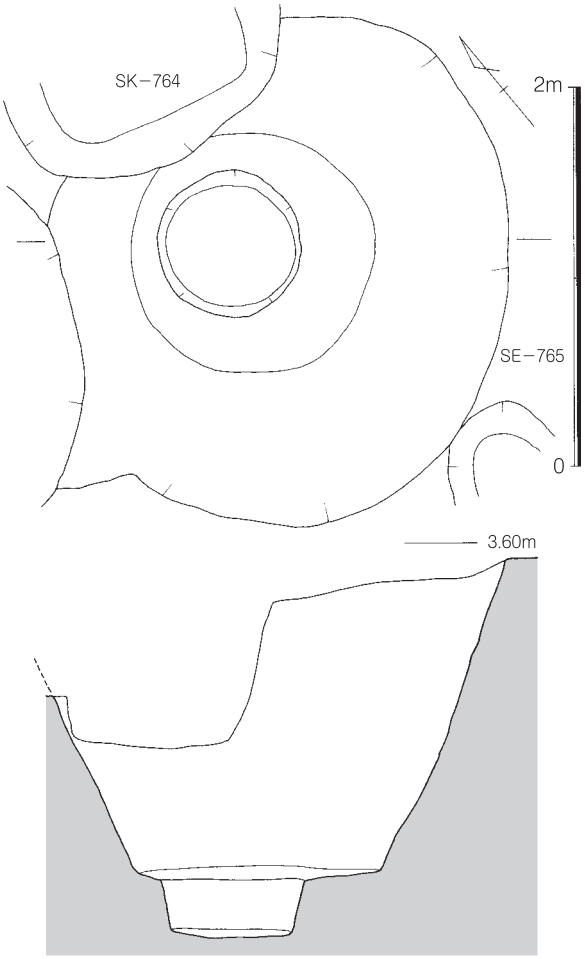


Fig.155　D 区 SE-765 遺構実測図（S=1/40）

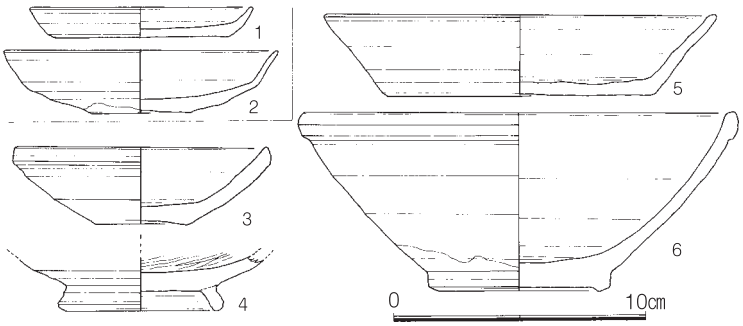
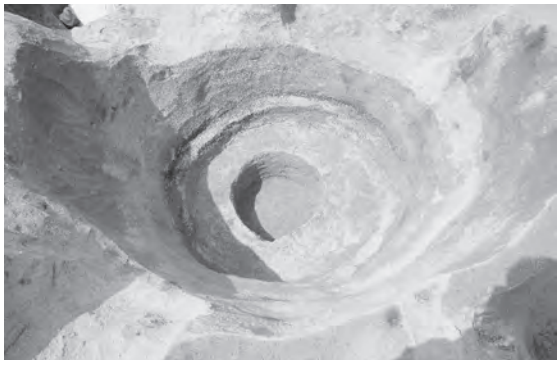


Fig.156　D 区 SE-765・863 出土遺物実測図（S=1/3）



Ph.177　D 区 SE-765 完掘状況

SE-842（Fig.157）

D 区№14 第 3 面で検出した井戸遺構である。井戸の北東部は調査区外に位置するため掘方の完掘は行っていない。井戸掘方は直径 1.70 mの円形を呈し、掘方底面中央部に井筒を据える。井筒は土圧のため楕円形に変形する。長軸 70㎝×短軸 60㎝を測る井筒は、掘方底面から 1.50 mの深さまで掘削される。井筒底面の標高は 1.20 m前後を測る。転用される桶は掘方底面から 1 mの深さ以下で残存する。桶は高さ 20 ～ 30㎝分が残存する。

この井戸遺構に直接的に関連する遺物ではないが、井戸掘方埋土内の数カ所に集中してから水銀が検出された。水銀は土砂中の数カ所に粒状の状態で検出されるため、水銀粒が確認できた範囲の土砂についてはコンテナケースで取り上げ、比重の違いを利用して取り上げを行っている。近隣で実施された博多遺跡群第 81 次調査（第 392 集）においても同様の堆積状態で水銀が検出されており、鍍金の際に使用されたものと考えられている。

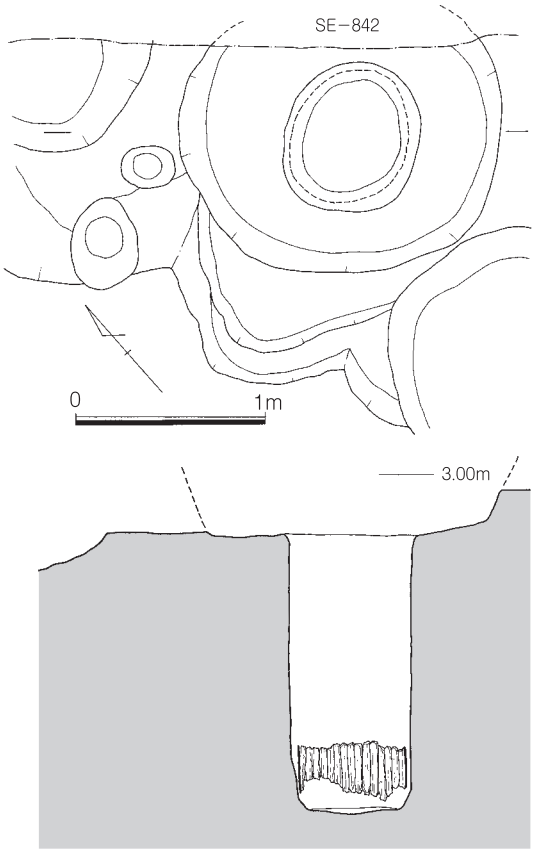


Fig.157　D 区 SE-842 遺構実測図（S=1/40）

埋土から土師器・白磁･中国陶器などの遺物が出土した。土師器坏はヘラ切りされるものが多いが、糸切りの坏と混在する。

井戸掘方と井筒埋土から出土した遺物より、井戸の年代は 12 世紀前半代の時期と考えられる。

検出された水銀は井戸廃絶後の堆積土層中に廃棄されたもので、比重の重さから井戸掘方埋土まで沈み、やや粘質のある堆積土上で溜まったものであろう。その分布状況は面的ではなく、上下方向で数カ所の集中箇所が見られたことからも分かる。

第 81 次調査で出土した水銀は約 2cc程度の量であるが、出土層位から古代に属する遺物であることが報告されている。本調査で検出した水銀は層位的に古代に遡るものではなく、13 世紀後半～ 14 世紀代に属するものと考えられる。

Ph.178　D 区 SE-842 完掘状況

Ph.179　D 区 SE-842 土層・水銀出土地点

SE-863（Fig.158）

D区№2第4面で調査を行った井戸遺構である。掘方自体は第2面の掘り下げ時に確認していたが、他の廃棄土坑等が濃密に切り合う位置にあったため、第4面で完掘作業を行った。井戸掘方の平面形は他の遺構によって大きく切られるため不明確であるが、残存範囲から略方形である可能性が考えられる。長軸4.0 m×短軸3.0 m程度の隅丸方形の掘方か。検出面の標高は3.40 m前後を測り、検出面から60cmの深さで平坦面となる。掘方底面には直径2 m程度を測る円形の掘り込みがなされ、その中央部から井筒が検出される。井筒の直径は60cmを測り、掘り込み底面からは深さ80cmまで掘削される。井筒底面の標高は1.40 m前後を測る。転用された桶などは腐食のため遺存しておらず、壁面にわずかに痕跡が残るのみである。埋土からは土師器・白磁・中国陶器などの遺物などが出土した。

出土遺物をFig.156に示した。

3は中国陶器坏である。4は黒色土器椀である。内面に炭素を吸着させる内黒のもので、内面には密なヘラ磨きを施す。5は土師器坏である。底部は糸切り調整され、板目圧痕が残る。6は白磁玉縁碗である。

12世紀初頭の時期と考えられる。

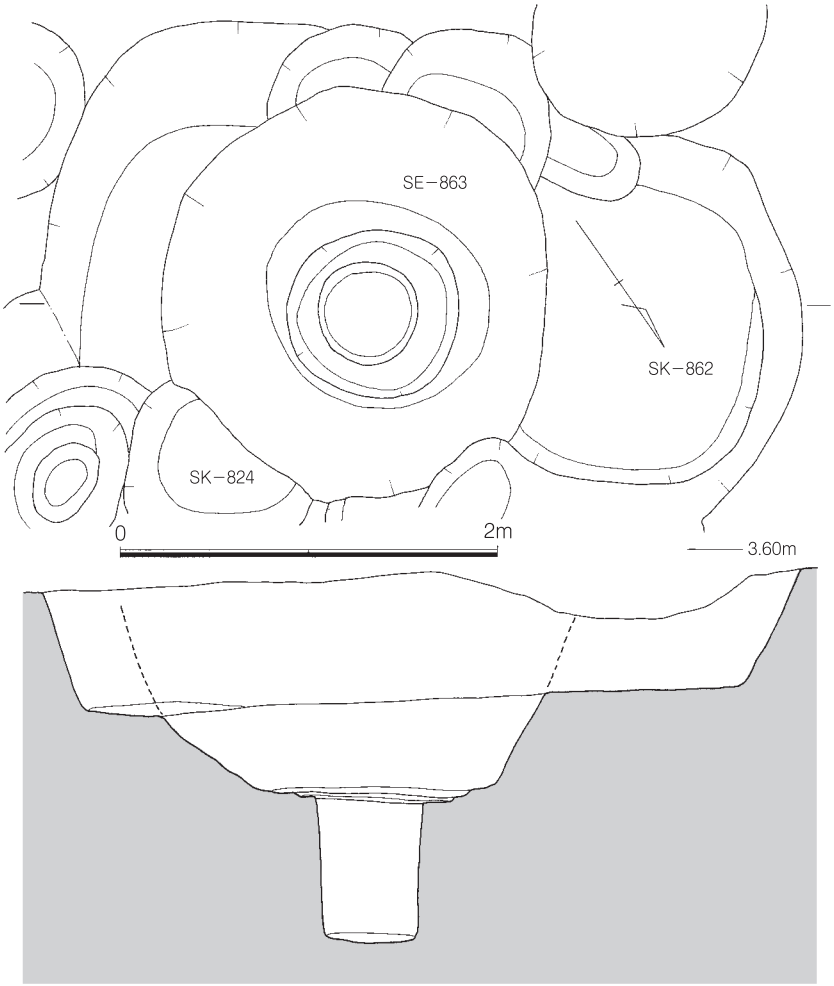


Fig.158　D区SE-863遺構実測図（S=1/40）

Ph.180　D区SE-863検出状況

Ph.181　D区SE-863完掘状況

SE-859（Fig.159）

D 区№13 第 2 面で掘方の一部を確認した井戸遺構である。この井戸遺構の南側は第 2 面から基盤層である砂丘砂層面が露出しており、この井戸付近を境に北側に緩やかに傾斜していく。井戸掘方の南側は砂層中への掘り込みとなり崩落を防止するため、第 3 面以下で掘り下げおよび完掘作業を行った。第 3 面で検出した井戸の掘方は直径 2.50 m の円形を呈し、掘方底面の北寄りの部分に井筒を配置する。検出面の標高は 3.00 ～ 3.30 m を測り、検出面から 1 m の深さで平坦面となる。井筒は直径 80㎝を測り、掘り込み底面から深さ 80㎝まで掘削される。井筒として転用される桶などの遺存は確認できなかった。井筒底面は標高 1.30 m まで掘削され、鉄分沈着のある粗砂層に達している。埋土から土師器・白磁・青磁・中国陶器などの遺物が出土した。13 世紀代の井戸か。

出土遺物を Fig.160 に示した。

1 は天目茶碗である。2 は白磁碗である。施釉は高台内まで及ぶもので福建省で生産された白磁碗である。3 は龍泉窯系青磁碗である。内面見込みに「金玉満堂」がスタンプされる。

SE-857（Fig.159）

D 区№13 第 2 面で検出した井戸遺構で、SE-859 に切られる。第 2 面で検出される井戸掘方は不整形であるが、第 3 面で検出した掘方は直径 2.40 m 程度の円形を呈する。掘方底面の北寄りの部位に井筒を据える。井筒は長軸 80㎝×短軸 70㎝の楕円形となり、掘方底面から深さ 90㎝まで掘削される。SE-859 と同様に桶などの遺存は確認されなかった。埋土から土師器・白磁・青磁・中国陶器などの遺物が出土した。

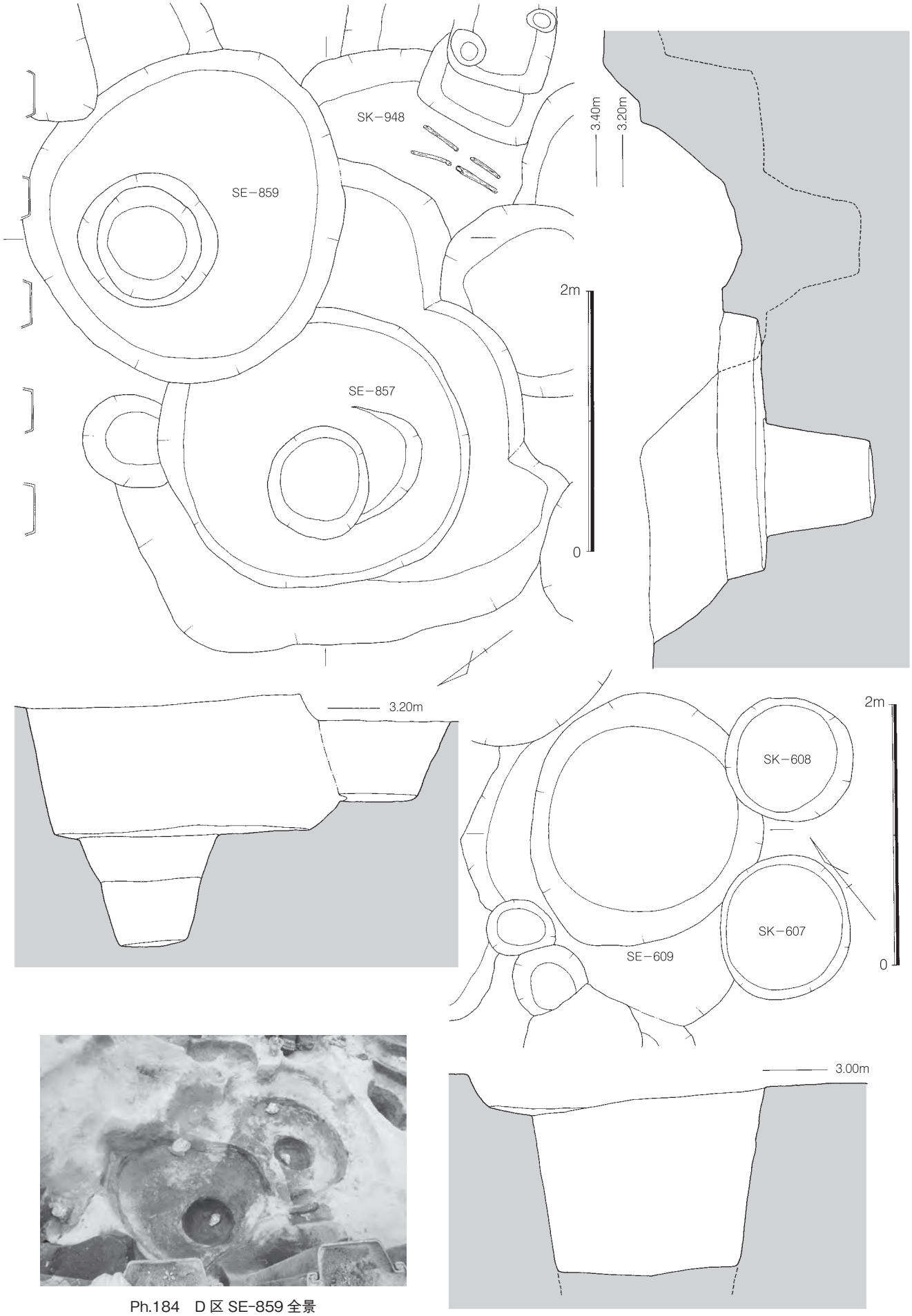
SE-609（Fig.159）

D 区№1 第 2 面で検出した井戸遺構である。掘方は直径 2 m の円形で検出面の標高は 3.00 m 前後を測る。この井戸を検出した箇所は基盤層が最も高く検出される範囲の一つであり、ある時期の砂丘頂部に位置していることが想定できる。やや締まりの弱い細砂・粗砂層の交互堆積層中に掘りこまれており、掘削中の壁面崩落の危険性が考えられたため完掘は行っていない。検出面より深さ 1.50 m、標高 1.50 m 付近まで掘り下げたが井筒などの検出はなかった。埋土からは白磁・土師器などの遺物とともに須恵器蓋などが出土した。出土遺物を Fig.160 に示した。

4 は白磁平底皿である。外面は体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。釉調は乳灰白色を呈する。5 は須恵器蓋である。周辺遺構からの混入品であろう。

Ph.182　D 区 SE-859 検出状況

Ph.183　D 区 SE-859 井筒検出状況



Ph.184　D 区 SE-859 全景

Fig.159　D区 SE-609・857・859 遺構実測図（S=1/40）

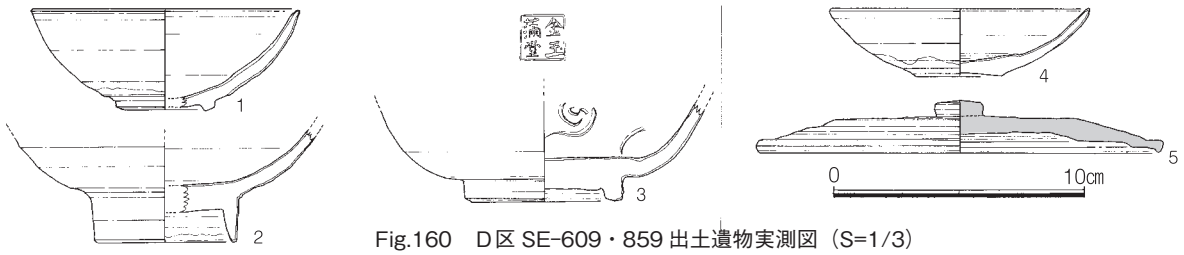


Fig.160　D区 SE-609・859 出土遺物実測図（S=1/3）

SE-907（Fig.161）

D区№5第3面で掘方の一部を検出した井戸遺構である。上面に廃棄土坑SK-240があり、この遺構完掘後に井筒の検出および完掘を行った。部分的に残る範囲から復元できる掘方は直径2.5 mの円形で、検出面の標高は3.00 mを測る。検出面から深さ80cmで平坦面となり、掘方底面の中央部に直径70cmの井筒を据える。井筒底面の標高は1.50 m前後を測り、褐色粗砂層に達する。桶などの遺存は確認されなかった。埋土中からは土師器・白磁・中国陶器盤などの遺物が出土したがいずれも細片資料である。土師器坏はヘラ切り・糸切りが混在するが、やや口径の大きいものが多くを占める。白磁は平底皿・碗が出土する。これらの出土遺物から12世紀前半の年代が考えられる。

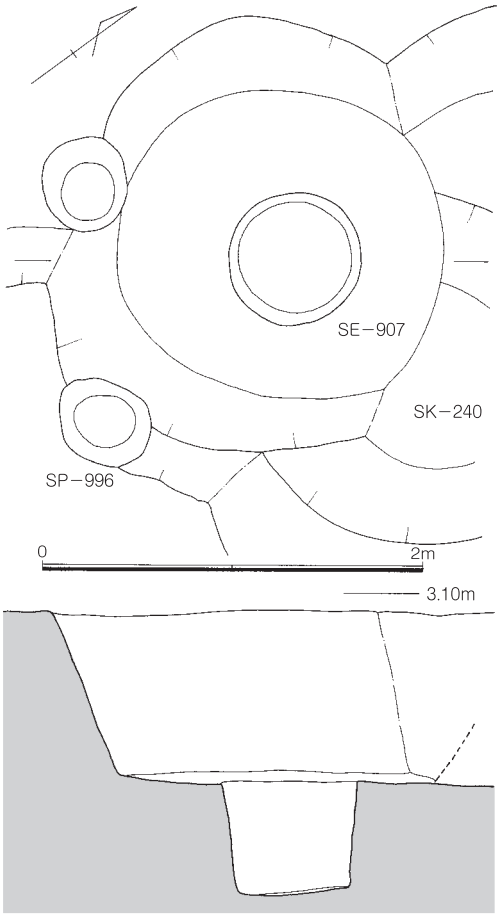
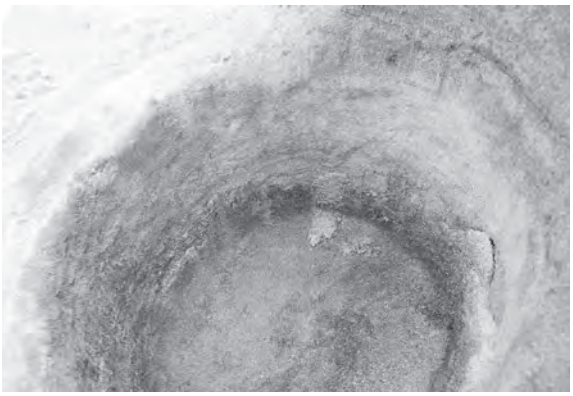


Fig.161　D区 SE-907 遺構実測図 (S=1/40)

SE-909（Fig.162）

D区№5第3面で検出した井戸遺構で、遺構の南側を近世瓦井戸であるSE-05に大きく切られる。井戸掘方の平面形は検出される範囲では楕円形を呈し、長軸2.20 m以上×短軸2.20 mを測る。検出面の標高は3.10 m前後で、検出面から深さ1.10 mで平坦面となり、掘方底面の南東寄りの箇所に井筒を据える。井筒は長軸80cm×短軸70cmの楕円形となり、掘方底面から深さ30cmの位置で桶が検出される。桶は腐食が進み高さ20 cm程度分が残存するのみである。井筒底面は標高1.30 m付近

Ph.185　D区 SE-907 検出状況



Ph.186　D区 SE-907 井筒検出状況

まで掘削されており、鉄分が沈着する褐色粗砂層に達していた。埋土からはヘラ切りの土師器坏・白磁平底皿などの遺物が出土した。

これらの出土遺物から、SE-909 とした井戸遺構の時期は 12 世紀代前半頃の年代が考えられる。

SE-999（Fig.163）

D 区№8 第 4 面で検出した井戸遺構である。遺構の北半部を SK-935 に大きく切られるため、井戸掘方は南側の一部で確認できるのみである。残存部分から想定される掘方は方形で、一辺 2.5 m程度の規模と考えられる。検出面の標高は 3.1 m付近で、検出面から深さ 1.4 m付近で一辺 80 ～ 90㎝程度の方形の底面となる。掘り下げ段階においても略方形の平面形であることが確認されている。井筒は掘方底面のほぼ中央部に据えられている。直径 50㎝を測り、掘方底面から深さ 40㎝まで掘削されている。井筒内からは有機物等の痕跡は確認されなかったが、その規模から曲げ物が使用されたものと考えられる。井筒底面の標高は 1.40 m前後を測る。

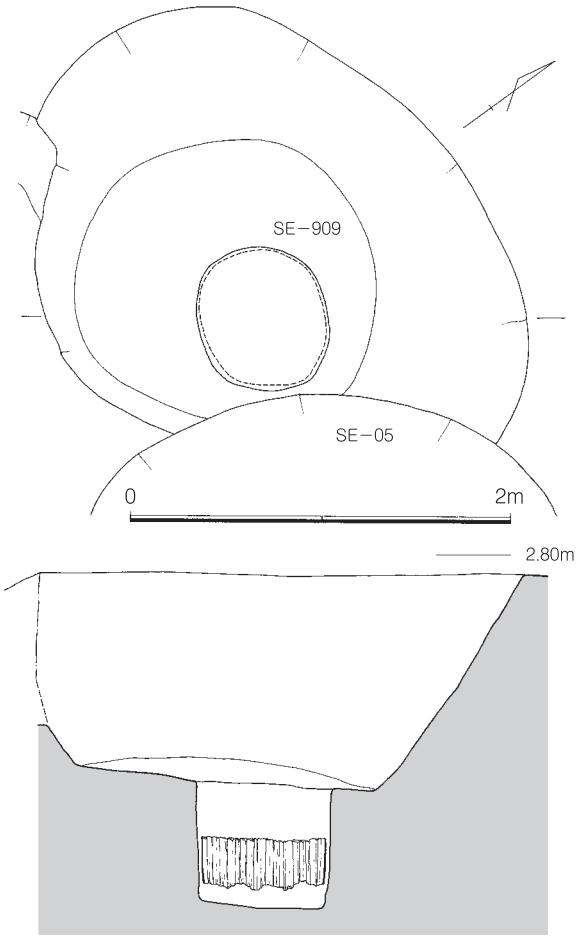


Fig.162　D 区 SE-909 遺構実測図（S=1/40）

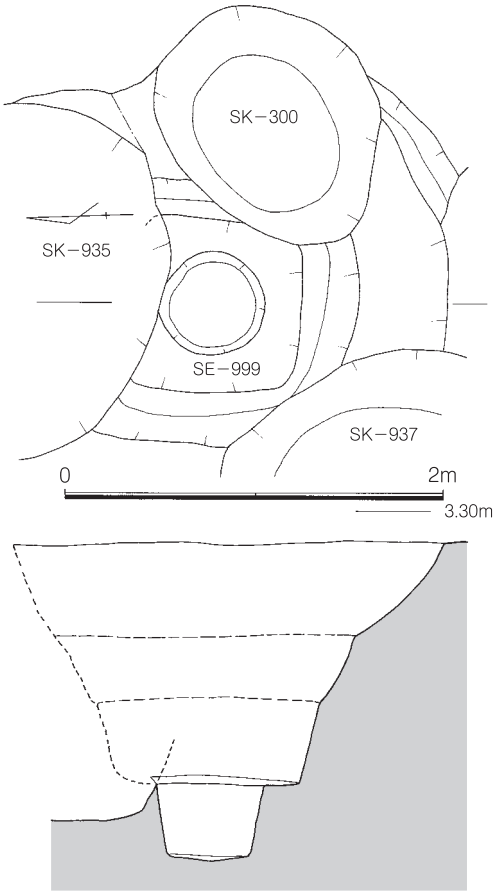
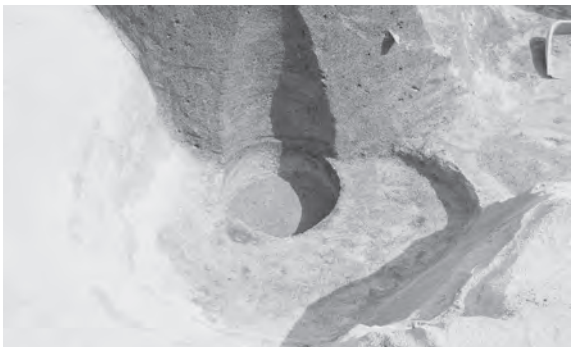


Fig.163　D 区 SE-999 遺構実測図（S=1/40）

井筒埋土からはヘラ切りの土師器坏・白磁平底皿・瓦器椀や製塩土器・須恵器などの遺物が出土した。特に掘方埋土からは須恵器碗・蓋・壺口縁部片などがまとまって出土しており、井戸掘削の際に古代の遺構を掘り抜いたものと考えられる。

これらの出土遺物よりこの井戸遺構の年代は 12 世紀代初頭頃の時期が考えられる。



Ph.187　D 区 SE-909 検出状況

Ph.188　D 区 SE-999 検出状況

b．墓

A・B 区の調査では 15 世紀代の土坑墓が多数検出されている。博多遺跡群のこれまで調査成果からは 13 世紀代までは屋敷墓と考えられる埋葬が各所で行われていたが、14 世紀以降は墓は都市の外側に営まれる傾向にあることが報告されており、少し異なる様相が見られる。

C・D・E 区においては、埋葬遺構が 2 例のみが確認できた。いずれも単独での検出であり屋敷墓と考えられる。

SK-590（Fig.164）

C 区№2 第 3 面で検出した木棺墓である。第 2 面で上面の土坑掘削中に副葬された土師器坏を検出していたが、第 2 面では平面形が全く確認できなかったため第 3 面で平面形の確認および掘り下げを行った。掘り下げの結果、墓坑底面から 10cm程度浮いた状態で木質が残存する鉄釘を検出した。これらの出土位置から長辺 160cm×短辺 50cmの棺材であったことが復元できる。埋葬主軸は N-12°-W 方向を採る。木棺内からは脛骨のみが検出され、他の部位の残存は確認できなかった。棺外から副葬された土師器坏 4 個体などが出土した。

出土遺物を Fig.165 に示した。1 ～ 4 は土師器小皿である。底部はいずれも糸切り調整される。5 は磁州窯系の絞胎土器碗である。二種類の胎土を練り込んで型造りで成形される。6 は糸切りの土師器坏である。7 は土師質土器の土鍋である。

これらの出土遺物より、この木棺墓の時期は 12 世紀後半代と考えられる。

SK-948（Ph.190）

D 区№13 第 4 面で検出した土坑墓である。遺構周辺が井戸遺構や他の土坑群により大きく攪乱

Ph.189　D 区人骨出土状況

Ph.190　D 区人骨出土状況

されているため、遺構自体の平面形を捉えることができなかったが、人骨脚部が検出されたため土坑墓と判断した。他の部位は井戸掘方などにより消失するため不明確な点が多いが、伸展葬での埋葬である。検出したのは両足の大腿骨および脛骨のみで他の部位は散逸する。掘り下げからの遺物の出土はなく時期も特定しがたいが、前述のSK-590とほぼ直交する埋葬主軸方向を採ることからほぼ同時期の埋葬遺構である可能性が考えられる。

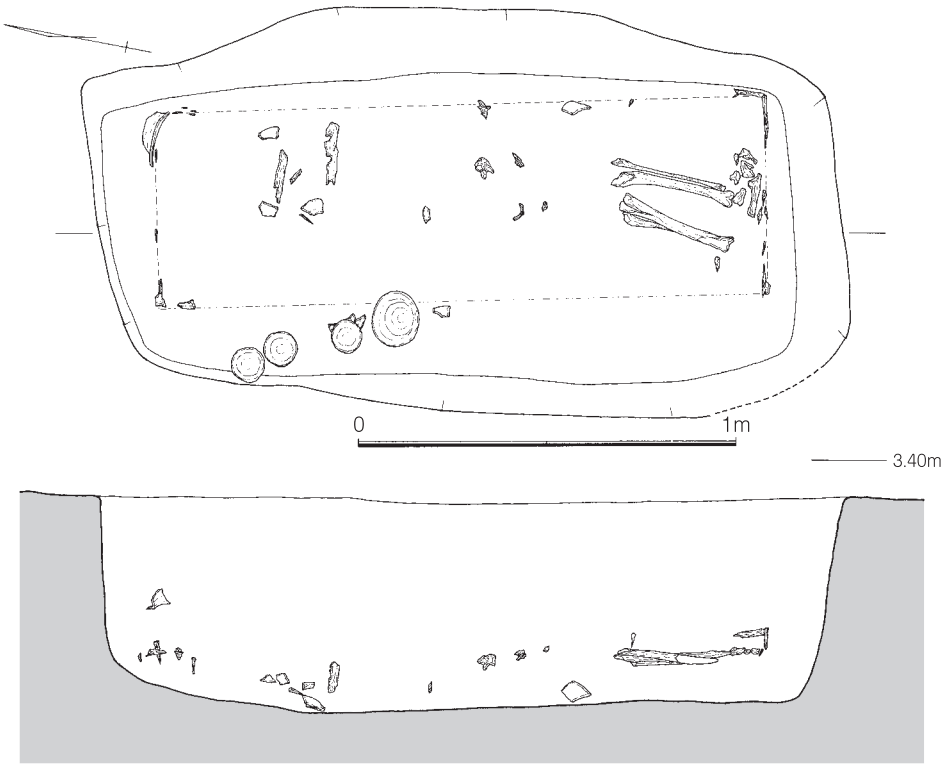


Fig.164　C区 SK-590 遺構実測図（S=1/20）

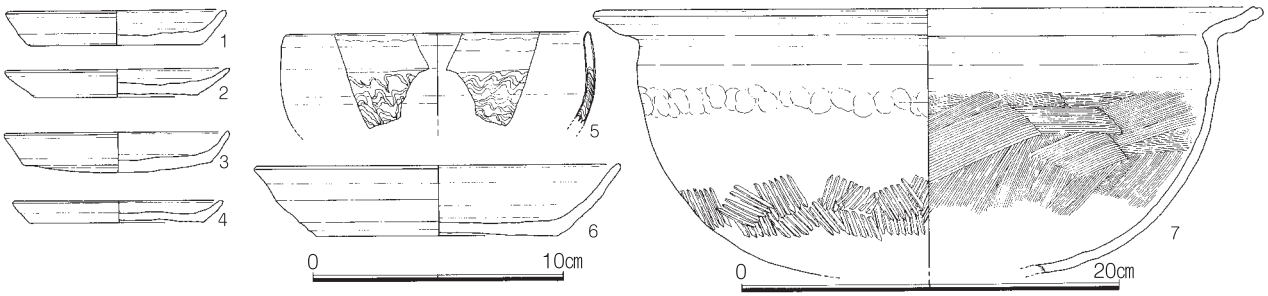
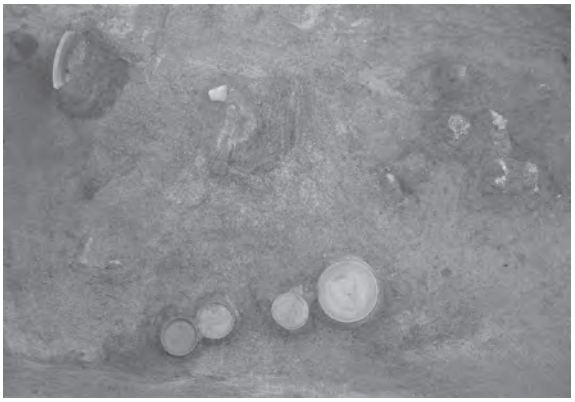


Fig.165　C区 SK-590 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

Ph.191　C区 SK-590 木棺墓



Ph.192　C区 SK-590 遺物出土状況

c．土坑・住居・溝

C・D区の調査においては非常に濃密な状況で土坑・柱穴等の多種多彩な遺構を検出した。これを全て報告するのは紙面の都合から不可能であるため、遺構面の時期が特定できるものや特に重要と判断されるものについて説明を行う。

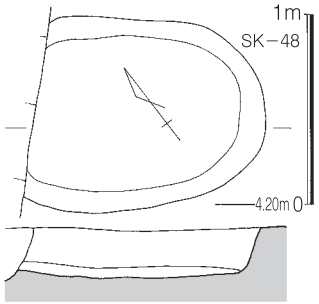


Fig.166　C区SK-48遺構実測図（S=1/40）

C区の遺構

SK-48（Fig.166）

C区№6第1面で検出した土坑である。楕円形の平面プランであるが、遺構の北側については直線的な整地作業が行われ消失する。検出された範囲での長軸は1.20 m×短軸1.00 mを測る。検出面の標高は4.10 m付近で、検出面から土坑底面までは30㎝程度の深さを測る。土坑埋土は焼土・炭化物を多く含む黒褐色粘質土で上層に土師器が集中して廃棄される。埋土から土師器・青磁・白磁などの遺物が出土した。

出土遺物をFig.169に示した。

1・2は土師器小皿である。3～5は土師器坏である。これらの土師器小皿・坏はいずれも底部が糸切り調整され、色調は褐色を呈する。

SK-105（Fig.167）

C区№7第1面で検出した楕円形土坑である。長軸1.2 m×短軸1.1 mを測り、検出面から底面までは60㎝の深さを測る。埋土は黒褐色土で炭化物を多く含む。埋土からは土師器坏・白磁などの遺物が出土する。出土遺物をFig.169に示した。8は土師器小皿である。底部はヘラ切りされ、板目圧痕が明瞭に残る。9は白磁小碗である。高台脇まで施釉される。

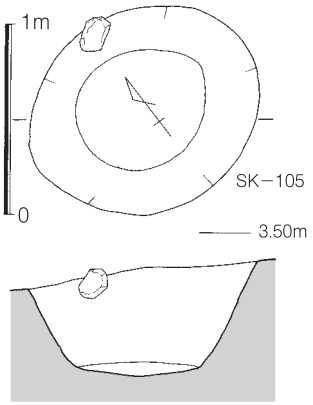


Fig.167　C区SK-105
遺構実測図（S=1/40）

SK-161（Fig.168）

C区№2第1面で検出した土坑である。直径1.1 mの円形土坑で、検出面から底面までは50㎝の深さを測る。出土遺物をFig.169に示した。6は白磁蓋である。天井部に刷毛目が放射状に施される。

SK-165（Fig.168）

C区№2第1面で検出した長方形土坑である。

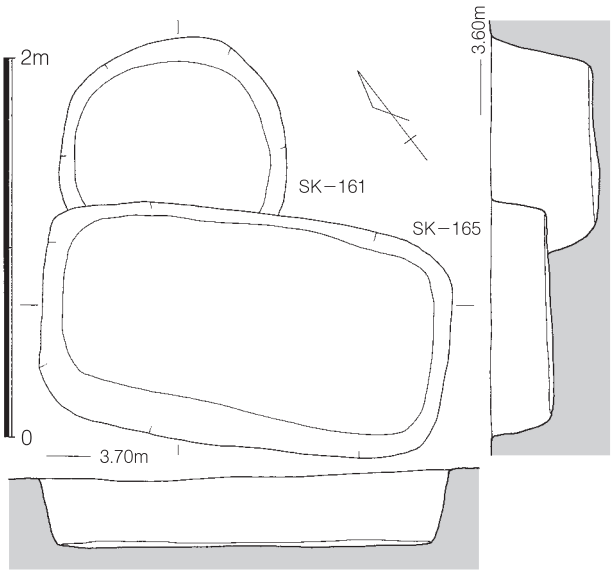


Fig.168　C区SK-165遺構実測図（S=1/40）

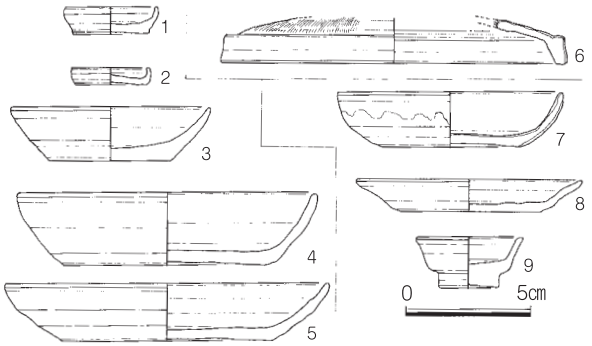


Fig.169　C区SK-48･105･161･165出土遺物実測図（S=1/3）

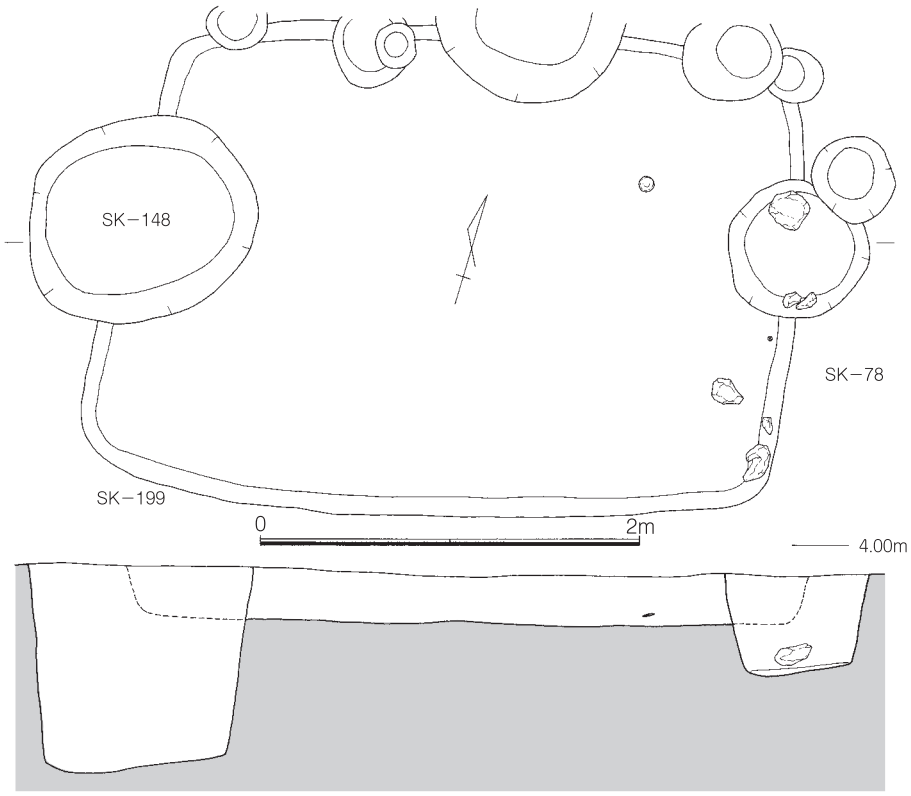


Fig.170　C区 SK-199 遺構実測図（S=1/40）

土坑壁面には薄く灰白色粘土が取り付いており、防湿または漏水防止が必要な土坑であったことが分かる。

出土遺物を Fig.169 に示した。

7は白磁平底皿である。やや大型の皿で、外面体部下半まで施釉される。

この他には土師器坏・中国陶器などの遺物が出土している。

出土遺物より 14 世紀代前半頃の年代が考えられる。

SK-199（Fig.170）

C区№2第1面で検出した長方形土坑である。長辺 3.5 m×短辺 2.6 mを測る土坑で、検出面から底面までは 25㎝前後の深さを測る。周辺に柱穴・土坑が多数検出されるが、この長方形土坑の上部構造に関連するものは確認できなかった。検出面の標高は 3.90 m前後で、遺構の埋土は炭化物を含む暗褐色土を主体とする。土坑底面からは銅鏡・銅銭・土師器坏などの遺物が出土した。

出土遺物を Fig.171 に示した。

1は銅鏡である。素文で鈕等はない。鏡面がわずかに凸面になっている。縁断面はわずかに蒲鉾状に厚くなる。直径 7.80㎝、厚さ 2㎜を測る。背面には錆が広範囲にわたって付着するが、一部に布の繊維痕が残る。収納するにあたり、布に包まれた状態であったことが推測できる。

遺構の性格上、半地下式の倉庫などの用途が想定される。この他の出土遺物から遺構の時期は、13 世紀代末頃の年代が考えられる。

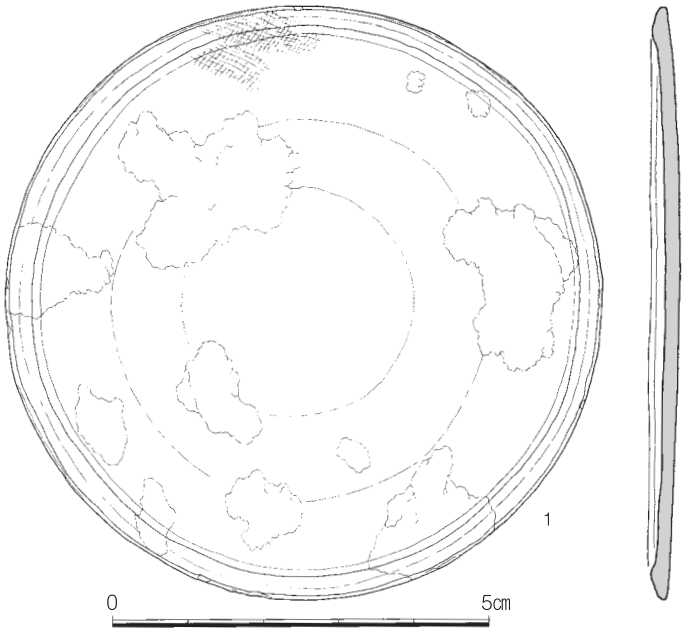


Fig.171　C区 SK-199 出土銅鏡実測図（S=1/1）

Ph.193　C 区 SK-199 銅鏡出土状況

SK-246（Fig.172）

C 区№8 第 1 面で検出した円形の廃棄土坑である。

直径 1.10 m を測り、検出面から土坑底面までは 1.20 m を測る。検出面の標高は 3.70 m 付近で、土坑の埋土は炭化物を多く含む暗褐色砂質土である。この土坑からは土師器・瓦器椀等の遺物が出土した。

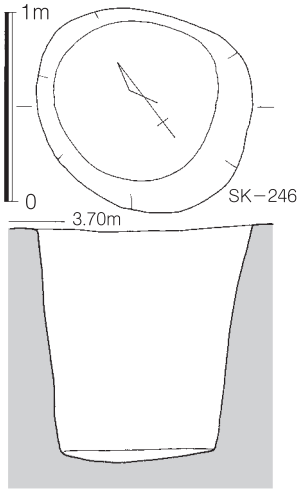


Fig.172　C 区 SK-246 遺構実測図（S=1/40）

出土遺物を Fig.174 に示した。

1 ～ 3 は土師器小皿である。1・2 は糸切りの底部を持つが、3 はヘラ切り調整される。いずれも焼成は良好で、色調は褐色を呈する。4 は白磁平底皿である。外面の体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。5 ～ 7 は瓦器椀である。5 はやや直線的に開く体部を持つもので、高台の断面形は三角形を呈する。6 は丸みのつよい椀で、高台の断面形は台形を呈する。7 は体部上部に屈曲を持つ器形で、高台断面は台形を呈する。いずれの瓦器椀も内外面ともに密なヘラ磨きを施す。焼成は良好で、色調は黒灰色～暗灰褐色を呈する。

これらの出土遺物よりこの廃棄土坑は 12 世紀代前半に属するものと考えられる。

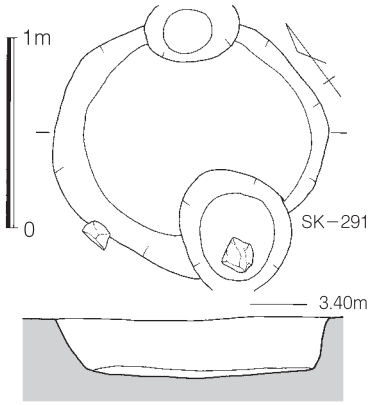


Fig.173　C 区 SK-291 遺構実測図 (S=1/40)

SK-291（Fig.173）

C 区№2 第 1 面で検出した土坑である。直径 1.30 m 前後の円形土坑で、検出面から土坑底面までは 30㎝程度の深さを測る。検出面の標高は 3.30 m 前後で、埋土は暗褐色土である。埋土から土師器・白磁・青磁・中国陶器などの細片資料が出土した。

出土遺物を Fig.174 に示した。

8 は磁州窯系絞胎土器の碗である。色調の異なる二種類の胎土を練り込み器面に幾何学的な模様を作り出す。口縁部は白色粘土のみで型造りされ、体部中程以下にマーブル模様の粘土を用いる。器面には薄く透明釉が施釉される。13 世紀代後半の遺構か。

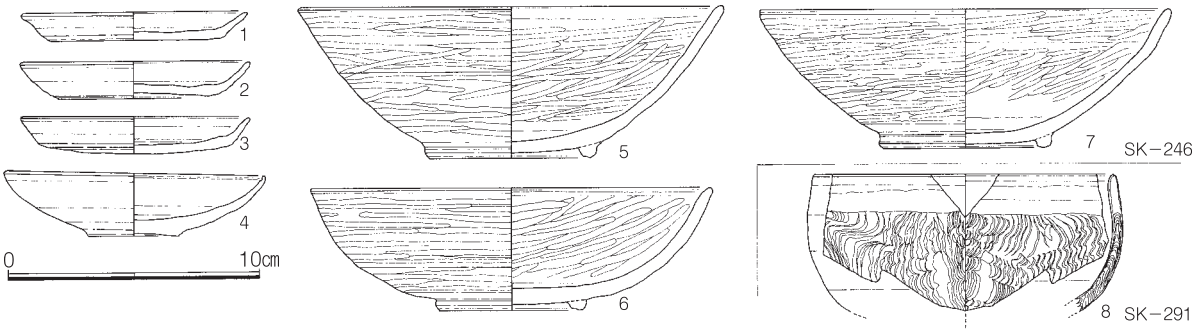


Fig.174　C 区 SK-246・291 出土遺物実測図（S=1/3）

SK-361（Fig.175）

C 区№7 第 2 面で検出した長方形土坑である。遺構の南東部は基盤層の砂丘砂層となり、北西側方向に向かい緩やかに傾斜する。検出面の標高は 3.45 m～ 3.10 m前後となる。遺構の平面形は長方形を呈し、長辺 1.90 m×短辺 1.10 mを測る。検出面から土坑底面までは 90cmの深さを測る。土坑底面も北側がやや深くなる。土坑底面四隅で柱穴等の検出が予想されたが、本土坑からは検出されなかった。埋土は暗褐色砂質土を主体とし炭化物を含む。埋土からは土師器・白磁等の遺物が出土した。

出土遺物を Fig.176 に示した。

1・2 は土師器小皿である。1 は糸切りの底部を持ち、2 はヘラ切りの底部となる。3 は糸切り調整された土師器坏である。糸切りの後底部全体をナデ調整で滑らかに仕上げる。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。5 は白磁高台付皿である。直線的に開く体部を持ち、端部でわずかに外反する。体部下半まで施釉する。5・6 は白磁玉縁碗である。7・8 は白磁碗である。内面見込み周囲を輪状に釉剥ぎする。9 は土師器坏である。底部は糸切りとし、口径 16.0cmを測る。

これらの出土遺物より遺構の時期は 12 世紀前半頃と考えられる。

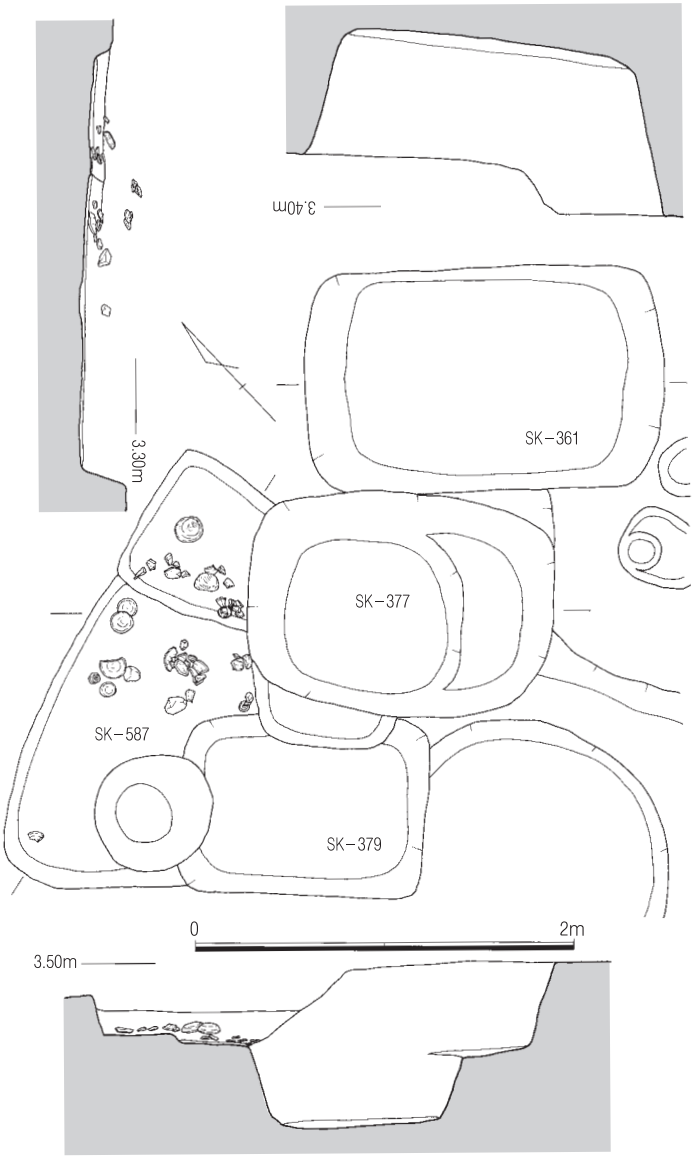


Fig.175　C 区 SK-361・379・587 遺構実測図（S=1/40）

SK-379（Fig.175）

C 区№7 第 2 面で検出した長方形土坑である。SK-361 とほぼ同一主軸を採る方形土坑で、N-53°-W の主軸方向を採る。この主軸を採る遺構は C 区第 1・2 面でみられ、SK-165・SK401 等の方形土坑が多い。

土坑の長辺は 1.30 m×短辺 1.0 mを測り、底面北側が一段深くなる。検出面から底面までは 50 ～ 90cmを測る。土坑の埋土は暗褐色砂質土で、焼土と炭化物を含む。埋土からは土師器・白磁・中国陶器などの遺物が出土した。

SK-587（Fig.175）

C 区№7 第 2 面で検出した方形土坑である。上部に試掘トレンチが掘削され、北側は SK-377・SK379 によって切られており、正確な形状を把握することが困難であるが、検出した北側隅部から長辺 2.3 m、短辺 1.0 m程度の長方形の平面プランを持つと考えられる。検出面の標高は 2.90 m前後で、検出面から土坑底面までは 20cm程度の深さとなり、遺構の上部が大きく削平されていることが分かる。土坑底面

Ph.194　C 区 SK-587 遺物出土状況

Ph.195　C 区 SK-587 遺物出土状況

には土師器坏・白磁碗・中国陶器盤などが数カ所に集中して検出される。遺物の出土状況から廃棄土坑ではなく、半地下式の倉庫としての用途が考えられる。

出土遺物を Fig.176 に示した。

10 ～ 14 は土師器小皿である。底部はいずれも糸切り調整されたもので、平均口径は 9.0cmを測る。焼成は良好で、色調は暗褐色～褐色を呈する。15 ～ 17 は土師器坏である。平均口径 16.2cmとやや大型の坏で、底部は糸切り調整される。17 は糸切り後にナデ調整が加えられる。19 は白磁玉縁碗である。体部下半まで施釉し、以下高台部までを露胎とする。釉調は乳灰白色を呈し、内面見込み周囲に沈線を巡らす。20 は中国陶器盤である。磁竈窯のもので、口縁部下に融着防止の粘土塊が等間隔に配置される。これらの出土遺物より、この遺構の時期は 12 世紀中頃の年代が考えられる。

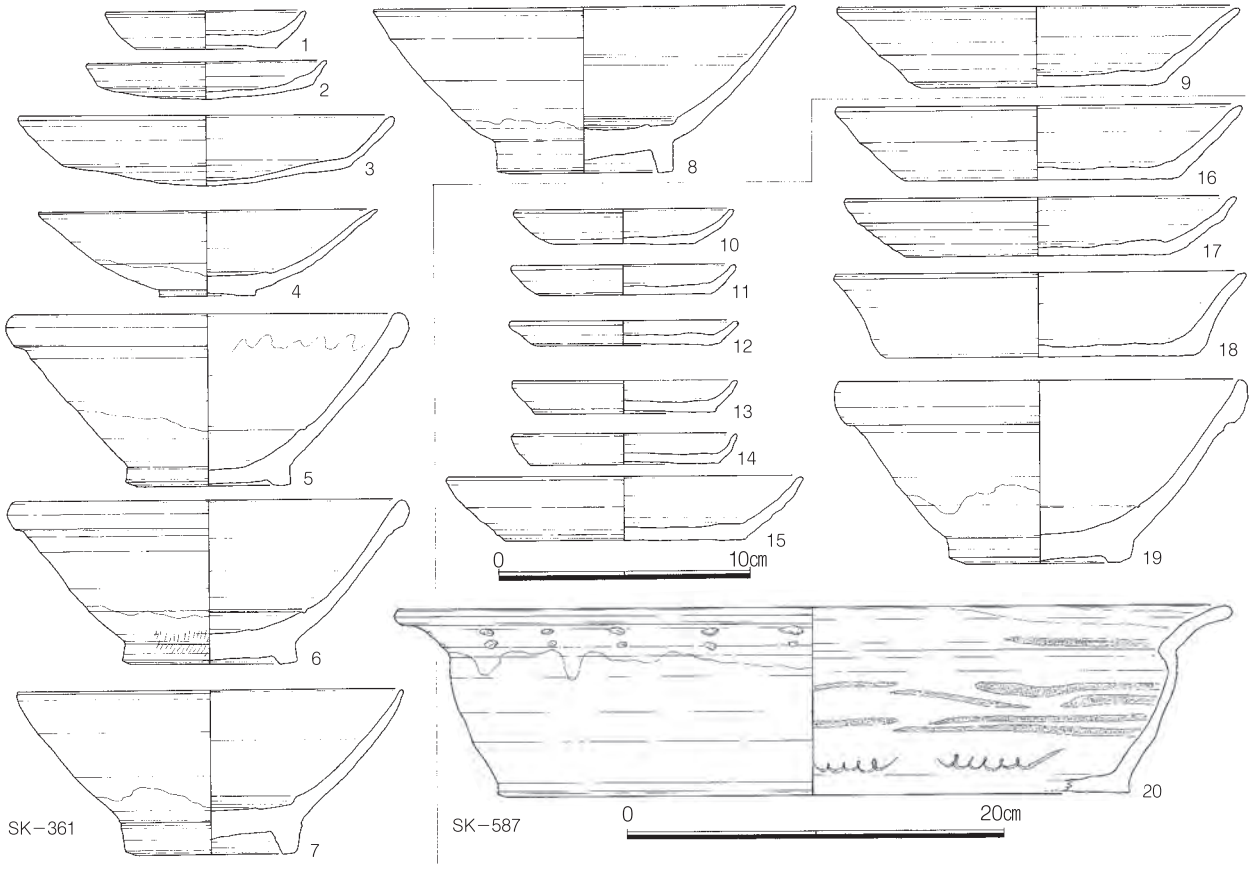


Fig.176　C区 SK-361・587 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

SK-403（Fig.177）

C 区№7 第 2 面で検出した土坑である。遺構の北側を試掘トレンチで失うが、平面形は長軸 1.6 m × 短軸 1.4 mの楕円形となる。検出面の標高は 3.30 m前後で、検出面から土坑底面までは 1.10 mの深さを測る。遺構埋土は暗褐色砂質土を主体とし、土師器･白磁･青磁等の遺物が出土する。

出土遺物を Fig.181 に示した。

1 は青白磁合子蓋である。型造りで外面は口縁部まで施釉され、内面は上半部を施釉する。

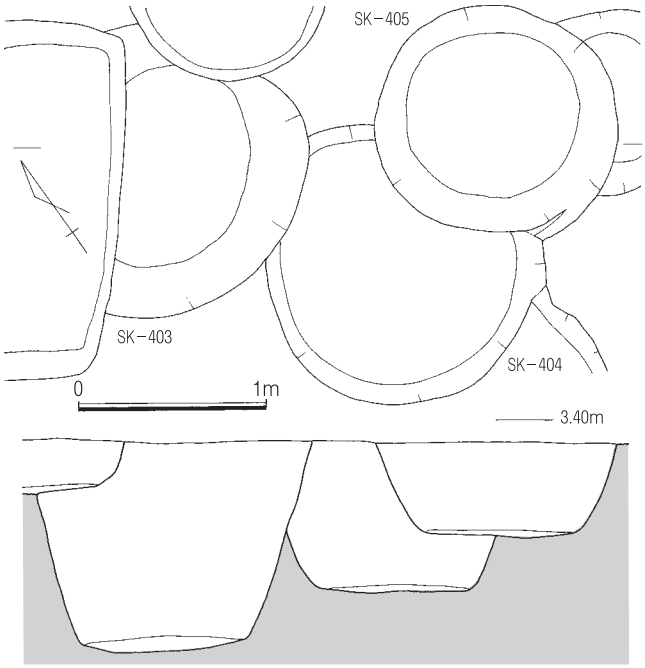


Fig.177　C 区 SK-403 ～ 405 遺構実測図（S=1/40）

SK-404（Fig.177）

C 区№7 第 2 面で検出した不整円形の廃棄土坑である。SK-403 に切られる土坑で、長軸 1.40 m前後を測る。検出面から土坑底面までは 80cm 前後を測り、底面は平坦となる。埋土からは土師器・白磁・青磁・中国陶器などが出土した。Fig.181 に出土遺物を示した。2 ～ 4 は土師器小皿である。いずれも糸切り調整された底部を持ち、色調は褐色を呈する。時期は 14 世紀前半期と考えられる。

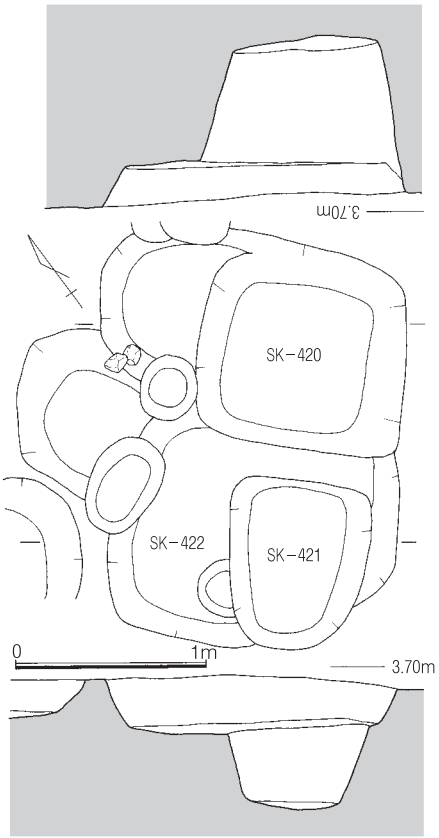


Fig.178　C 区 SK-420･421 遺構実測図（S=1/40）

SK-405（Fig.177）

C 区№7 第 2 面で検出した円形土坑である。直径は 1.2 m、検出面から底面までは 50cmの深さを測る。埋土から土師器なとが出土した。出土遺物を Fig.181 に示した。

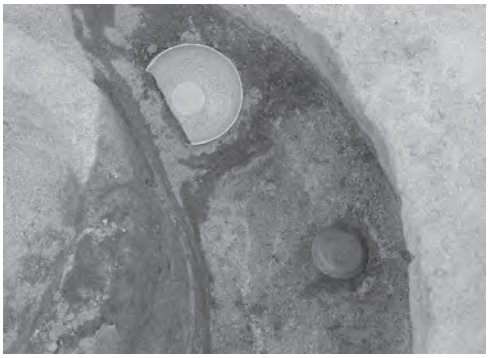
5 は土師器小皿である。6・7 は土師器坏である。いずれも底部は糸切りである。

SK-420（Fig.178）

C 区№5 第 2 面で検出した長方形土坑である。南側に一段深くなり、一辺 1 m程度の箱形となる。埋土から土師器坏の細片が出土する。出土遺物を Fig.181 に示した。11 は白磁合子身である。

SK-421（Fig.178）

C 区№5 第 2 面で検出した方形土坑である。検出面から深さ 70 cm 程度を測



Ph.196　C 区 SK-468 遺物出土状況

る。埋土からは土師器小皿等が出土する。出土遺物を Fig.181 に示す。12 は糸切りの土師器小皿である。

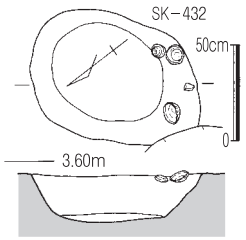


Fig.179　C 区 SK−432 遺構実測図（S=1/40）

SK-432（Fig.179）

C 区№6 第 2 面で検出した楕円形土坑である。長軸 90cmを測り、深さは 20cm前後である。埋土から土師器などが出土する。Fig.181 に示した。

8・9 は土師器坏である。いずれも底部は糸切り調整され、色調は褐色を呈する。10 は白磁小壺蓋である。

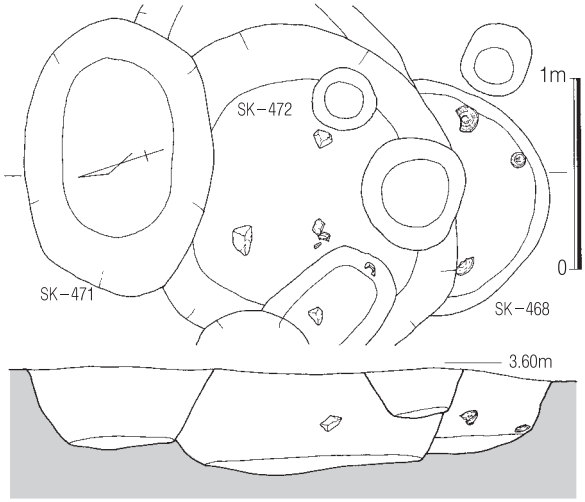


Fig.180　C 区 SK−472 遺構実測図 (S=1/40)

SK-468（Fig.180）

C 区№6 第 2 面で検出した土坑である。SK-472 に切られる土坑で円形土坑と考えられる。検出面から底面までは 40cmを測る。土坑底面から同安窯系青磁や土師器などが出土した。

Fig.181 に出土遺物を示した。

13 ～ 16 は土師器小皿である。いずれも底部は糸切り調整され、色調は褐色を呈する。17 は耀州窯系青磁碗である。外器面には片切彫りで、内面には片切彫りと櫛描文による豪奢な装飾を施

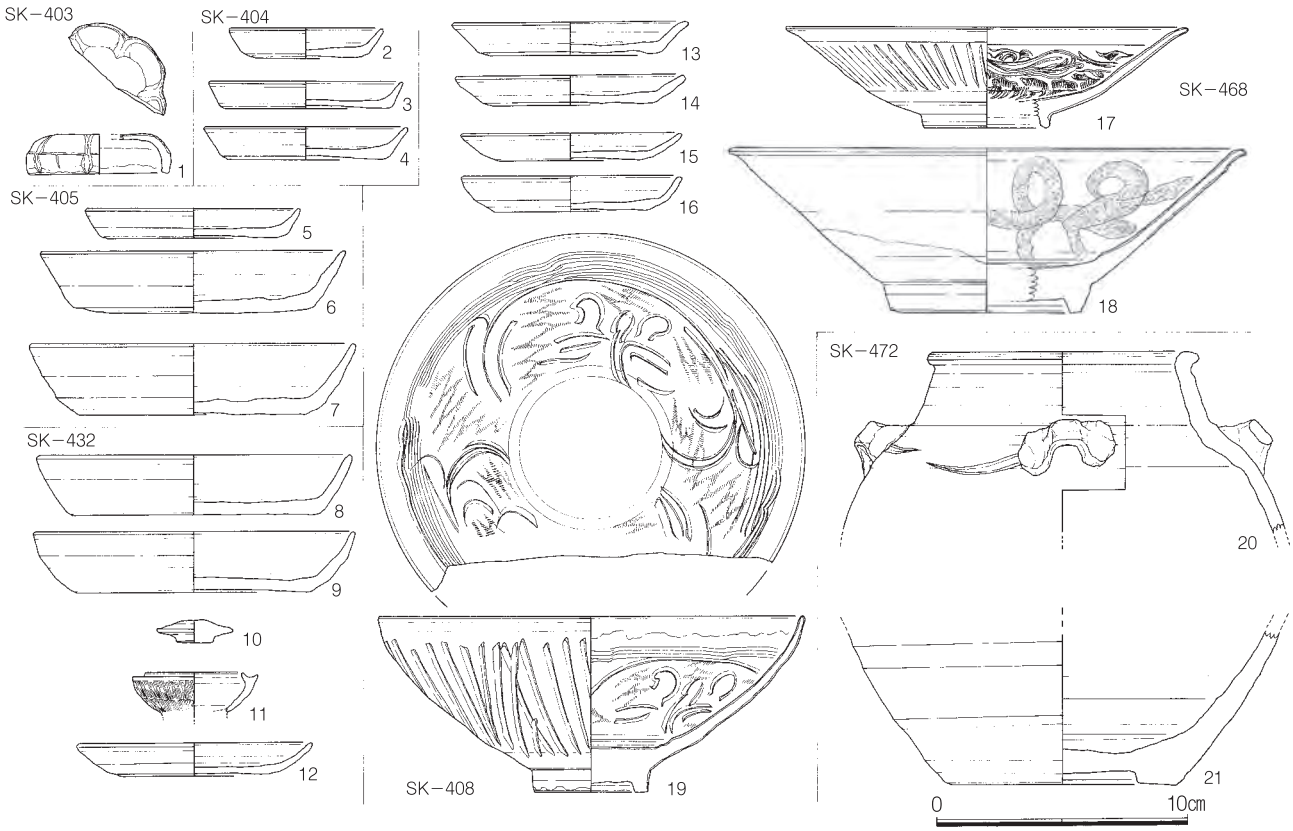


Fig.181　C 区 SK−403 ～ 405・420・422・432・468・472 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

す。釉調は発色のよいエメラルドグリーンを呈する。

18 は白磁鉄絵碗である。19 は同安窯系青磁碗である。端麗な器形で外器面には片切彫りによる装飾を施す。内器面は全周に片切彫りと櫛描文を配置する。施釉は畳付上までで、高台内は露胎とする。釉調は鈍いエメラルドグリーンとなる。

遺構の時期は 12 世紀中頃の時期が考えられる。

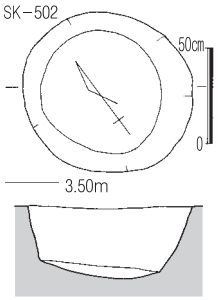


Fig.182　C 区 SK-502 遺構実測図（=1/40）

SK-472（Fig.180）

C 区№6 第 2 面で検出した楕円形土坑で SK-468 を切る遺構である。長軸 1.90 m、検出面から底面はまでは 55cmを測る。遺構埋土からは土師器・白磁・中国陶器などの遺物が出土する。

出土遺物を Fig.181 に示した。20 は中国陶器四耳壺口縁部片である。釉調はにぶい乳灰緑色を呈する。21 は同四耳壺の底部片である。この他には墨書された白磁碗などが出土する。

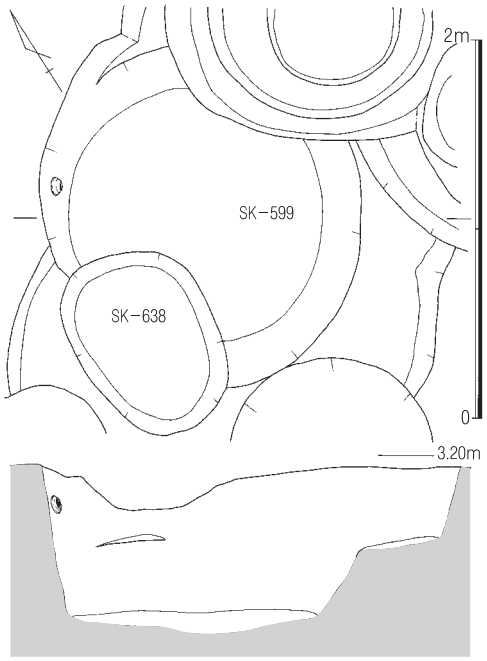
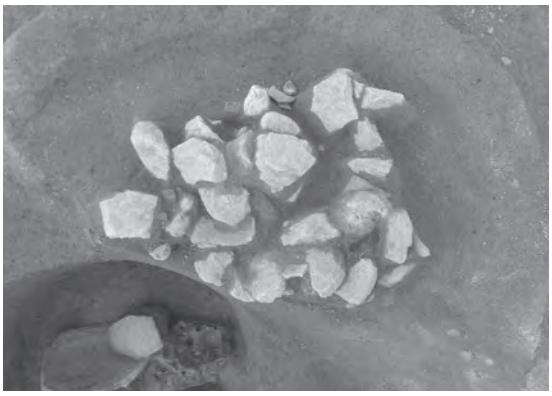


Fig.184　C 区 SK-599 遺構実測図（S=1/40）


Ph.197　C 区 SK-591 検出状況

SK-502（Fig.182）

C 区№8 第 2 面で検出した土坑である。長軸 90cmの楕円形土坑で深さは 40cmを測る。土坑埋土から土師器・白磁などの細片資料が出土する。

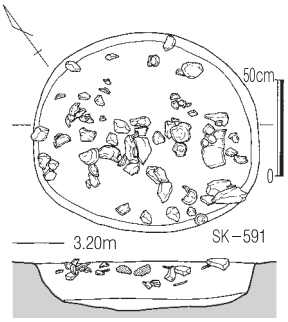


Fig.183　C 区 SK-591 遺構実測図（S=1/40）

SK-591（Fig.183）

C 区№1 第 3 面で検出した土坑である。SE-686 の掘方内から検出した土坑であり、井戸埋没後に掘削された遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸 1.2 m を測る。検出面から底面までは深さ 25cm程度を測る。遺構内には礫が大量に投棄されており、礫の間から土師器などの遺物が出土する。

出土遺物を Fig.186 に示した。1 ～ 3 は土師器小皿である。いずれも糸切りされるもので、色調は褐色を呈する。4 は青白磁合子身である。受け部を露胎とする。

5 は磁州窯系青磁の壺胴部片である。6 は同安窯系青磁碗である。内面には櫛描文と片切彫りで装飾を施す。7 は土師器坏を転用した土器錘である。円盤状に周囲を打ち欠き、中央部に糸通しの穿孔を行う。この土坑は SE-686 の井筒上に重複するように掘削されたものであり、出土遺物より 13 世紀代の時期が考えられる。

SK-599（Fig.184）

C 区№6 第 3 面で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、長軸 1.8 m×短軸 1.6 mを測る。検出面の標高は 3.25 m前後を測る。検出面から底面までは 90㎝程度の深さを測る。遺構の埋土は暗褐色砂を主体とし、下層には黒褐色砂質土が堆積する。遺構壁面に白磁平底皿が張り付いた状態で出土した。埋土からは主に土師器・白磁等が出土した。

出土遺物を Fig.186 に示した。

8 ～ 12 は白磁平底皿である。8 は直線的な体部を持つ個体であるが、これ以外は緩やかな体部を持つ。いずれも体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。12 世紀前半期か。

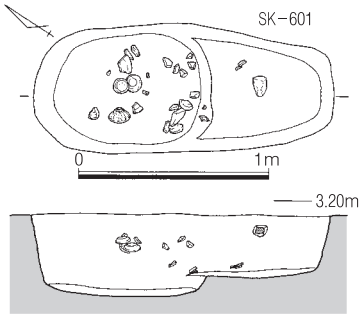


Fig.185　C区 SK-601 遺構実測図（S=1/40）

SK-601（Fig.185）

C 区№6 第 3 面で検出した長方形土坑である。SE-833 の掘方上面に掘削された遺構で、長辺 1.60 m × 短辺 0.60 m を測る。検出面の標高は 3 m前後で検出面から底面までは 40㎝程度の深さとなる。遺構埋土中には、龍泉窯系青磁碗や土師器坏などが多く含まれ、これらの土器とともに獣骨などが出土した。

出土遺物を Fig.186 に示した。

13・14 は土師器小皿である。底部はいずれも糸切り調整され、板目圧痕が残る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。15 は龍泉窯系青磁小碗である。16 は龍泉窯系青磁碗である。外器面には蓮弁文を配し、畳付直上まで施釉する。これらの出土遺物から遺構の時期は 13 世紀中頃と考えられる。

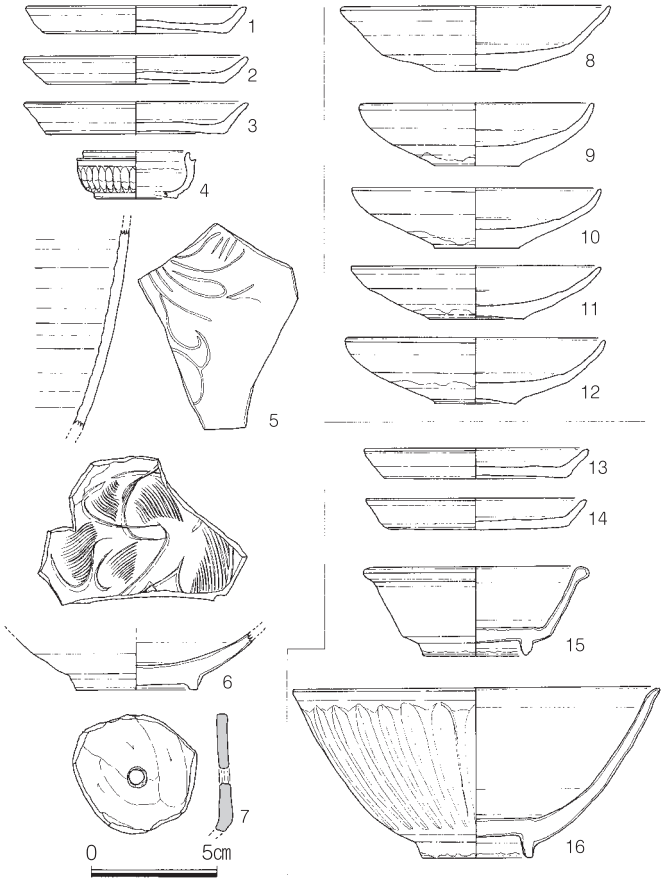


Fig.186　C区 SK-502・591・599・601 出土遺物実測図（S=1/3）

Ph.198　C 区 SK-601 遺物出土状況

Ph.199　C 区 SK-601 遺物出土状況

SK-604（Fig.187）

C 区№.2 第 3 面で検出した円形の廃棄土坑である。直径 1.30 mを測り、検出面から土坑底面までは 1.20 mの深さを測る。検出面の標高は 3 m前後を測る。遺構埋土は暗褐色砂を主体とし炭化物・焼土が混入する。遺構埋土からは土師器坏・白磁・中国陶器などが出土する。

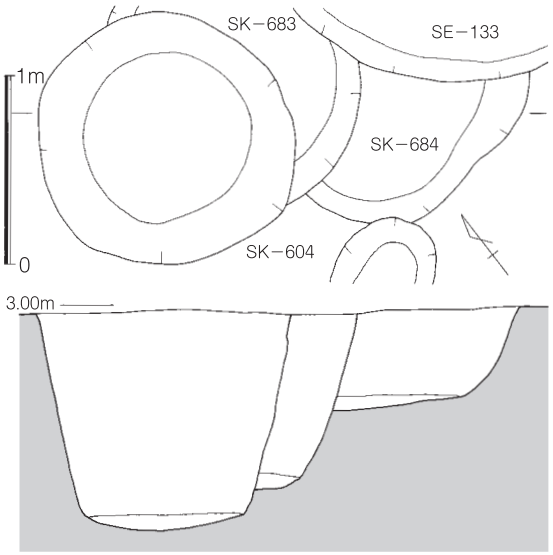


Fig.187　C 区 SK-604・684 遺構実測図（S=1/40）

Fig.189 に出土遺物を示した。

1・2 は白磁平底皿である。体部下半まで施釉し、釉調は乳灰白色を呈する。3 はヘラ切りの土師器小皿である。4 は糸切りの土師器小皿である。5 はヘラ切りの土師器坏である。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。6 は中国陶器の褐釉陶器鉢である。

遺構の時期は 12 世紀前半頃の年代と考えられる。

SK-683（Fig.187）

C 区№.2 第 3 面で検出した土坑で、遺構の大半を SK-604 に切られる。残存する範囲から直径 1.5 m程度の円形土坑に復元できる。遺構底面は標高 2.0 mまで掘削され、埋土から土師器・白磁が出土する。

出土遺物を Fig.189 に示した。

7 はヘラ切りの土師器小皿である。8 はヘラ切りの土師器坏である。

9 は白磁玉縁碗である。11 は白磁碗である。10 は青白磁合子蓋である。12 は須恵器壺である。他の遺構からの混入であろう。

これらの出土遺物より遺構の時期は 12 世紀初頭の年代が考えられる。

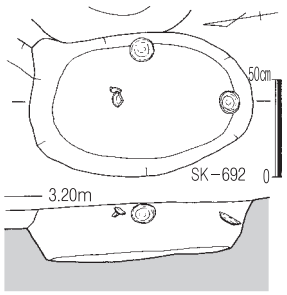


Fig.188　C 区 SK-692 遺構実測図（S=1/40）

SK-692（Fig.188）

C 区№.7 第 3 面で検出した楕円形土坑である。長軸 1.2 m × 短軸 0.6 mを測る。検出面から底面までは 25㎝程度の深さを測る。遺構埋土から土

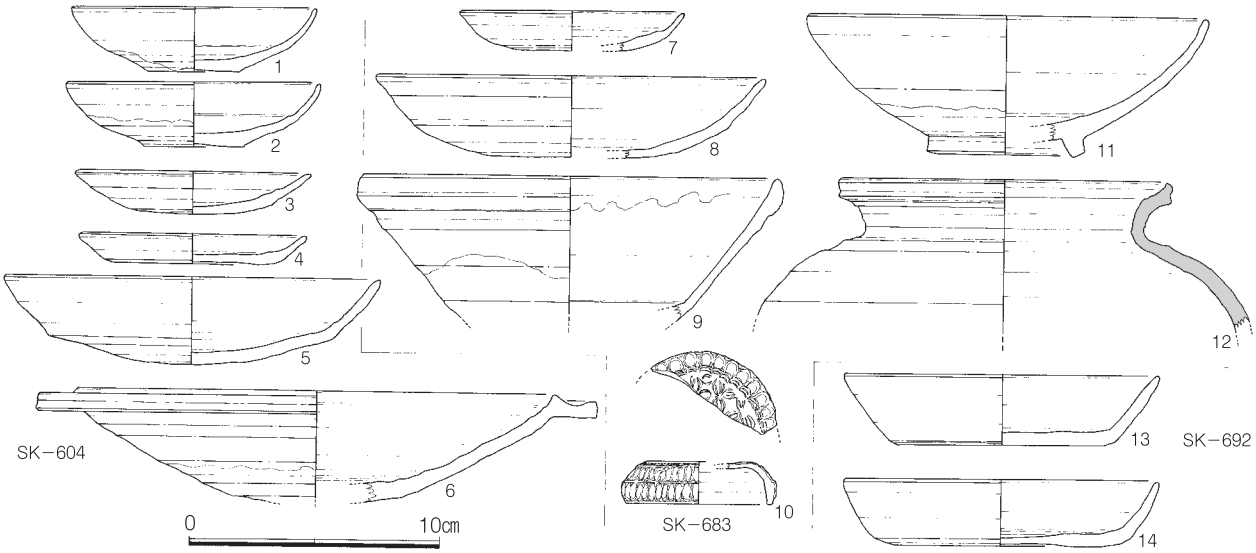


Fig.189　C 区 SK-604・683・692 出土遺物実測図（S=1/3）

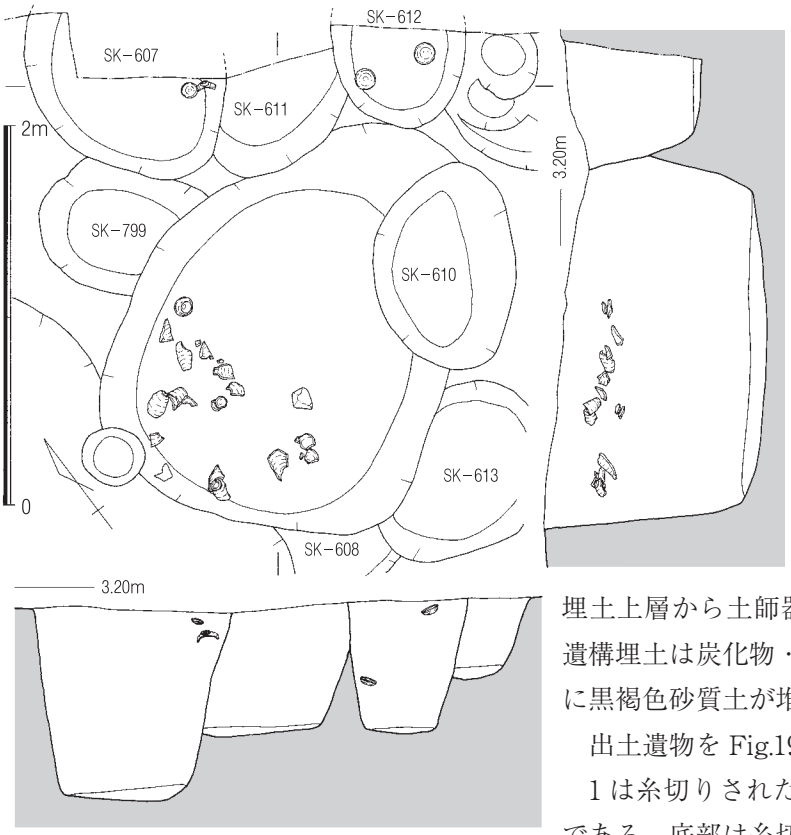


Fig.190　C区 SK-608 遺構実測図（S=1/40）

師器・白磁などが出土する。

Fig.189 に出土遺物を示した。13・14 は糸切りの土師器坏である。

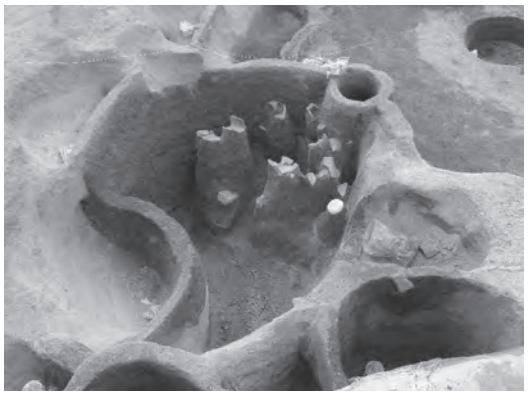
SK-608（Fig.190）

C 区№2 第 3 面で検出した楕円形の廃棄土坑である。長軸 2.2 m × 短軸 1.7 m の平面プランを採り、検出面の標高は 3.10 m 前後を測る。検出面から遺構底面までは 1.1 m の深さを測り、埋土上層から土師器・白磁・中国陶器等が出土した。遺構埋土は炭化物・焼土を含む暗褐色砂質土で、縞状に黒褐色砂質土が堆積する。

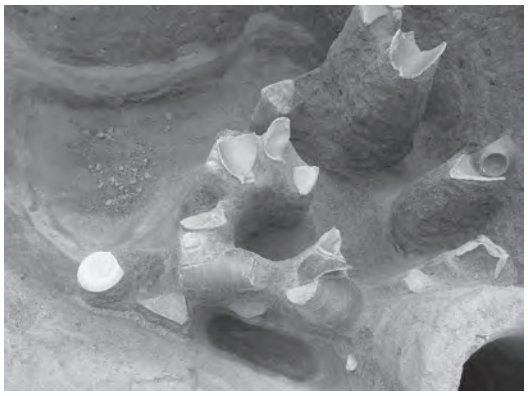
出土遺物を Fig.191 に示した。

1 は糸切りされた土師器小皿である。2 は土師器坏である。底部は糸切り調整され、体部はナデ調整される。3 は白磁平底皿である。体部下半まで施釉されるが二次的な被熱を受け、釉は溶け落ちる。内面に櫛描文が残る。4 は白磁平底皿である。5 はやや底径の大きい白磁平底皿である。6 は白磁碗である。体部は下半まで施釉される。

8 は瓦質土製品である。型作りで両手を前で合掌するポーズを取る人形で下半部には線刻で何らかの意匠が施される。8 は丸瓦である。内外面ともに布目が明瞭に残る。9 は磚である。10 は中国陶器褐釉の瓶である。この廃棄土坑からは数個体分の破片が出土している。饗宴に際して酒を酌み交わすのに使用したのであろうか。1.6 ℓ 前後の容量がある。



Ph.200　C 区 SK-608 全景



Ph.201　C 区 SK-608 遺物出土状況

Ph.202　C 区 SK-608 遺物出土状況

11は押圧波状文の軒平瓦である。側面には分割時の切断痕が残る。12は草花文を配する軒丸瓦である。8と同一個体である可能性が考えられた。11と12は同時に御堂などを葺いていたものか。

これらの出土遺物から遺構の時期は12世紀後半の年代が考えられる。

SK-607（Fig.190）

C区№2第3面で検出した土坑で、遺構東側は調査区外へと伸びる。検出した範囲では楕円形を呈する。検出から底面までは1mの深さを測る。埋土から土師器・白磁が出土した。

出土遺物をFig.191に示した。13は土師器小皿である。糸切りの底部を持つ。焼成は良好で色調は褐色を呈する。14は白磁高台付皿である。内面見込みの釉を輪状に剥ぐ。釉調は乳白色を呈する。

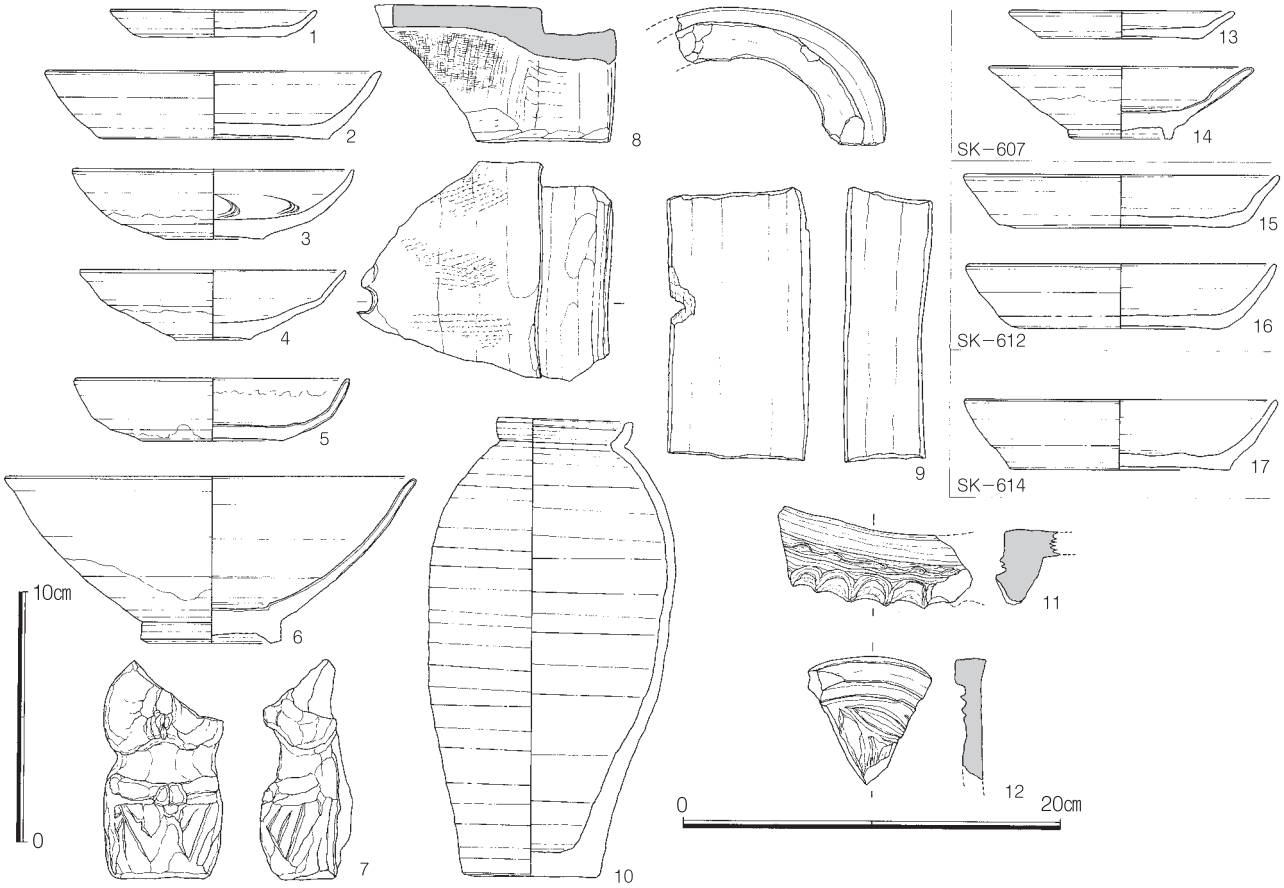


Fig.191　C区SK-607・608・612・614出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

SK-612（Fig.190）

C区№2第3面で検出した土坑である。楕円形土坑であるが遺構東側半分が調査区外に伸びるため完掘していない。検出面から遺構底面までは65cm前後の深さを測る。

出土遺物をFig.191に示した。15・16は土師器坏である。底部はいずれも糸切り調整されるもので、口径は12.4cm前後を測る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

SK-614（Fig.190）

C区№2第3面で検出した土坑である。調査区際で検出したため西側部分のみ掘り下げを行った。SK-607・SK-612に切られる土坑で、検出面から土坑底面までは70cm前後の深さを測る。遺構埋土

は黒褐色砂質土で、炭化物を含む。埋土より土師器坏などが出土した。

出土遺物を Fig.191 に示した。17 は土師器坏である。底部は糸切り調整され、体部にはナデ痕が明瞭に残る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

SK-625（Fig.192）

C 区№6 第 3 面で検出した楕円形土坑である。長軸 1.3 m×短軸 1.2 mを測り、検出面の標高は 3.40 m前後を測る。遺構は北側方向に斜めに掘削されており、遺構底面からは土師器坏などが出土した。検出面から底面までは 80cm程度の深さを測る。

出土遺物を Fig.194 に示した。1 は土師器小皿である。底部は糸切りされる。2 はヘラ切りの土師器坏である。身が深く器高 3.7cmを測る。これら出土遺物より 12 世紀前半の遺構と考えられる。

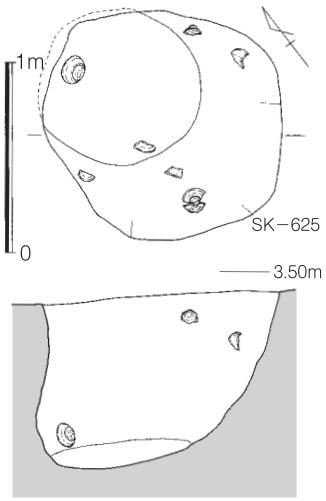


Fig.192　C 区 SK-625 遺構実測図（S=1/40）

SK-651（Fig.193）

C 区№2 第 3 面で検出した土坑である。周囲を他の土坑に切られるが、平面形は楕円形を呈する。長軸 1.0 m×短軸 0.9 mを測り、検出面から底面までは 80cmの深さを測る。遺構埋土は暗褐色砂質土で、土師器・白磁・中国陶器などが出土する。

出土遺物を Fig.194 に示した。3 は中国陶器坏である。釉調は暗茶褐色を呈する。

SK-653（Fig.193）

C 区№2 第 3 面で検出した土坑である。検出時には二つの土坑の切り合いとの認識であったが、平面の精査を行っても切り合いが検出できなかったため、長方形土坑として掘り下げを行った。長辺 90cm×短辺 50cmを測り、検出面から底面までは 70 ～ 80cmの深さを測る。土坑底面では落ち込みが二カ所で検出されたため、やはり土坑の切り合いであった可能性もある。土坑埋土は粗砂を多く含む暗褐色砂質土で固く締まる土質である。遺物は土師器・白磁などが出土したがいずれも細片資料である。

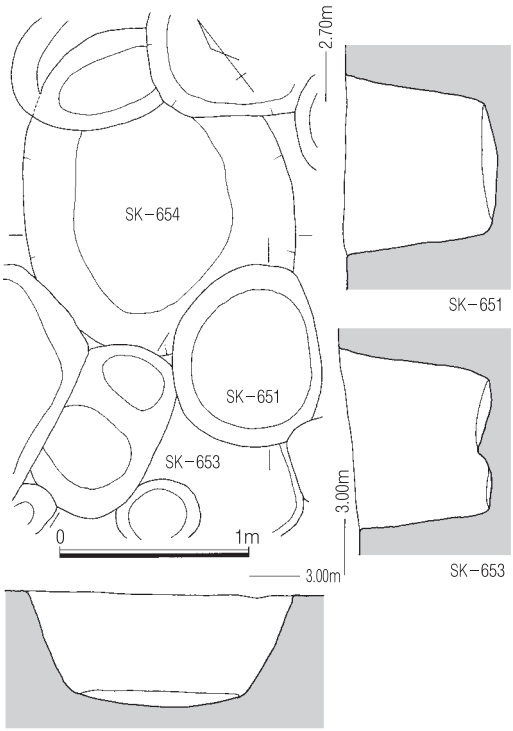


Fig.193　C 区 SK-651・653・654 遺構実測図（S=1/40）

Ph.203　C 区 SK-653 検出状況

SK-654（Fig.193）

C 区№6 第 3 面で検出した土坑である。遺構両端部を他の土坑に攪乱されるが、残存部より楕円形土坑であることが分かる。長軸 1.70 m × 短軸 1.40 m を測り、検出面から土坑底面までの深さは 60cm を測る。遺構検出面の標高は 2.90 m前後を測り、遺構上部には人頭大の礫が集中して廃棄されていた。遺構埋土はやや固く締まる暗褐色砂質土で、掘り下げ中に土師器・白磁・高麗青磁・中国陶器などの遺物が出土した。

出土遺物を Fig.194 に示した。4 は同安窯系青磁碗である。外器面には片切彫りで条線を施し、内器面には片切彫りと櫛描文による装飾を施す。5 は初期高麗青磁碗である。6 は土師器坏である。底部はヘラ切りされ、体部は強く湾曲する。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

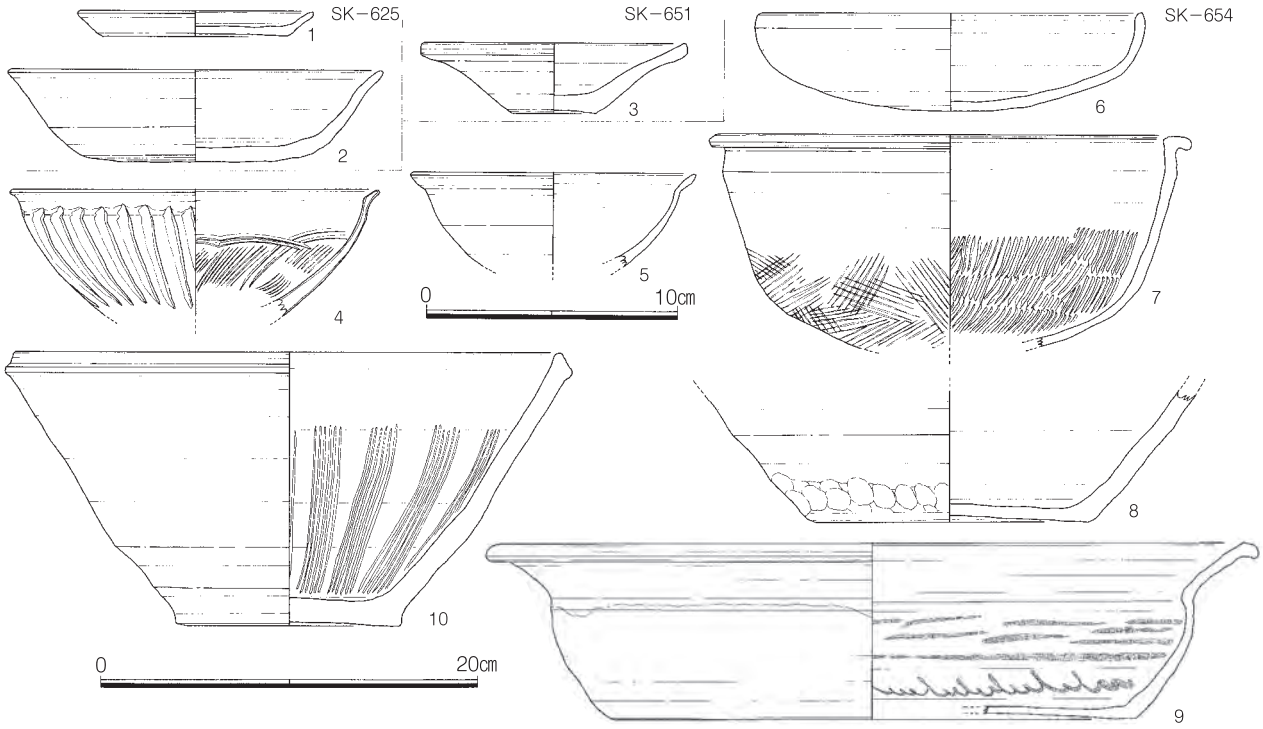


Fig.194　C 区 SK-625・651・654 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

7 は土師質土器の土鍋である。外面には煤が付着し、体部下半部には刷毛目が残る。内器面には深めに施された刷毛目が明瞭に残る。8 は須恵質土器の捏鉢である。底部付近には指頭圧痕が全周する。9 は磁竈窯の盤である。10 は土師質土器擂鉢である。

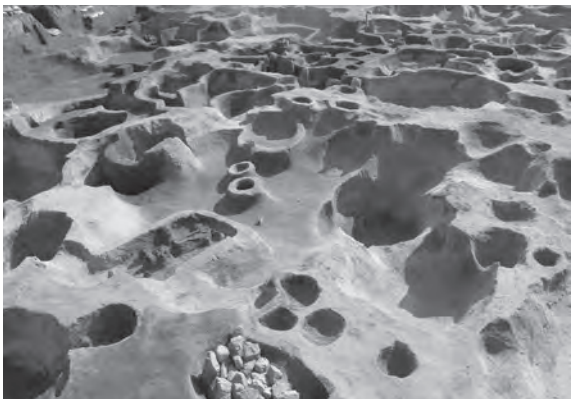
これらの出土遺物より遺構の時期は 12 世紀前半の年代と考えられる。

SK-664（Fig.195）

C 区№2 第 3 面で検出した土坑である。土坑の西側を SK-661 に切られるが、残存部から楕円形土坑であることが分かる。長軸 1.70 m × 短軸 1.00 m を測る。検出面の標高は 3.20 m前後で、土坑底面は検出面から 1 m程度の深さを測る。土坑底面北側は一段高くなり、テラス状に残る。遺構埋土は炭化物・焼土を含む暗褐色砂で、埋土からは土師器・瓦器椀などの遺物が出土した。

出土遺物を Fig.198 に示した。

1 は土師器坏である。底部はヘラ切りされ、ナデ調整で整えられる。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。2 は土師器埦である。高台の断面形は略方形を呈し、外器面には横位の密なヘラ磨きが施さ



Ph.204　C 区第 3 面遺構検出状況

Ph.205　C 区第 3 面遺構検出状況

れる。内器面はコテ当てでナデ調整される。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。3 は高麗青磁碗である。4 は高麗青磁碗で、内面見込み周囲に重ね焼きの目跡が残る。

これらの出土遺物から、遺構の時期は 12 世紀初頭と考えられる。

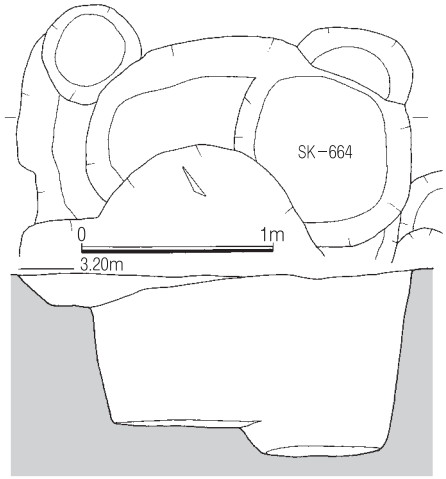


Fig.195　C 区 SK-664 遺構実測図（S=1/40）

SK-669（Fig.196）

C 区№2 第 3 面で検出した円形土坑である。直径 1.20 m を測り、土坑底面は検出面から 1.0 mの深さを測る。検出面は標高 3.10 m前後の砂層面となる。遺構埋土は炭化物を多く含む暗褐色砂で固く締まる。掘り下げ中に土師器坏・白磁などの遺物が出土した。

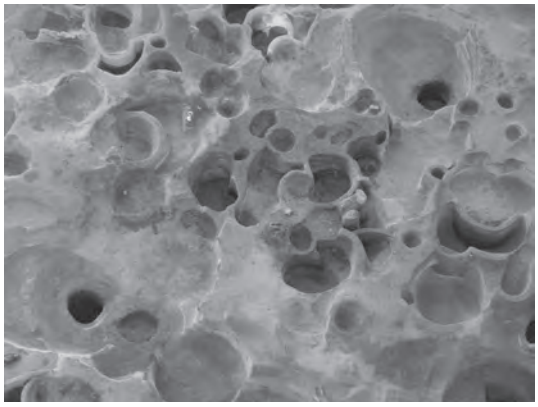
出土遺物を Fig.198 に示した。

5 は青白磁合子身である。受け部を露胎とするが、残りを施釉する。体部は型作りで、釉調はエメラルドブルーを呈する。

SK-670（Fig.196）

C 区№2 第 3 面で検出した土坑である。土坑の南側を SK-669 に切られる。長軸 1.60 mの楕円形土坑で、検出面から土坑底面までは 80㎝程度の深さを測る。遺構埋土は暗褐色砂で、縞状に黒褐色砂が堆積する。遺構埋土から土師器・白磁などの遺物が出土した。

Ph.206　C 区 SK-664 完掘状況



Ph.207　C 区第 3 面遺構検出状況

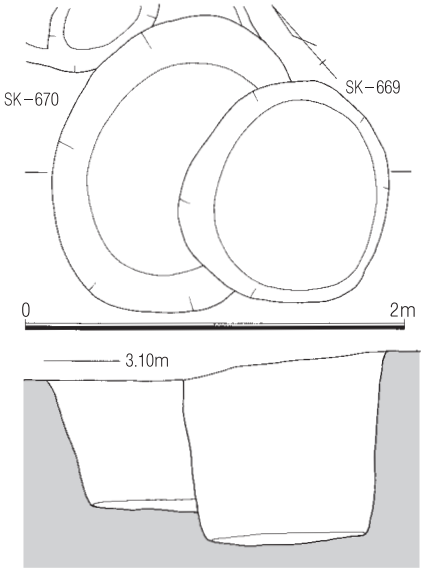


Fig.196　C区 SK-669･670 遺構実測図(S=1/40)

Fig.198 に出土遺物を示した。

6･7 は土師器小皿である。いずれも底部はヘラ切り調整され、板目圧痕が残る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。8 は白磁小壺蓋である。

SK-677（Fig.197）

C 区№1 第 3 面で検出した土坑である。近世井戸である SE-245 に北東側を切られるが、残存部分から楕円形土坑であることが分かる。長軸 1.20 m以上で、短軸は 1.0 mを測る。検出面の標高は 3.00 mで、検出面から土坑底面までは 80㎝の深さを測る。土坑底面からは瓦器椀などが出土した。

出土遺物を Fig.198 に示した。

9 は瓦器椀である。高台の断面形は三角形を呈し、外器面には横位のヘラ磨きを密に施す。10 は白磁碗である。なだらかに内傾する体部を持ち、内器面には櫛描文を施す。外面は体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。11 は白磁玉縁碗である。釉調は乳灰白色を呈する。

12 は瓦器椀である。身は深く内面には不定方向のヘラ磨きを施す。

出土遺物より遺構の時期は 12 世紀前半と考えられる。

Ph.208　C 区 SK-677 検出状況

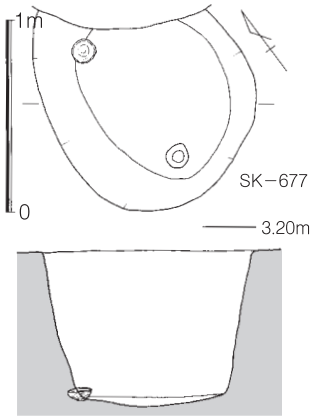


Fig.197　C区 SK-677 遺構実測図(S=1/40)

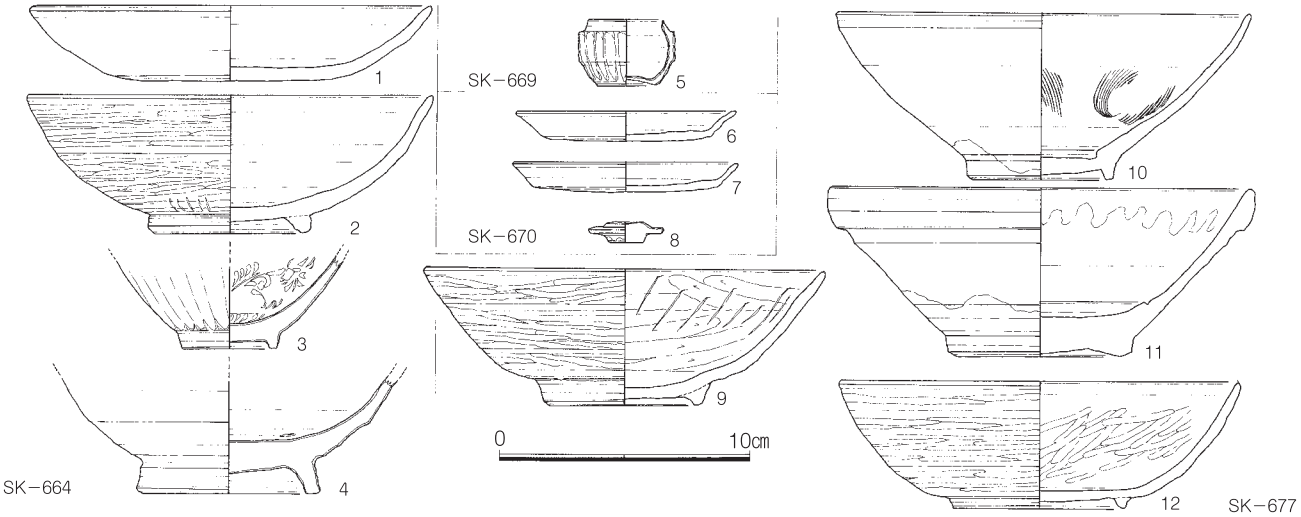


Fig.198　C区 SK-664・669・670・677 出土遺物実測図(S=1/3)

SK-671（Fig.199）

C 区№.2 第 3 面で検出した土坑である。直径 1 mの円形土坑で、検出面の標高は 3.00 mを測る。検出面から土坑底面までは 70cm前後の深さを測る。土坑埋土は炭化物を多く含む暗褐色砂である。埋土から土師器・白磁などの遺物が出土したが、いずれも細片資料である。

SK-672（Fig.199）

C 区№.2 第 3 面で検出した土坑である。SK-671 に切られる不定形の土坑で、遺構北側は調査区外に伸びる。検出面から土坑底面まで手は 70cm前後の深さを測る。埋土から土師器・白磁などが出土した。

SK-674（Fig.199）

C 区№.2 第 3 面で検出した廃棄土坑である。直径 1.40 mの円形土坑で、検出面から遺構底面までは 1 mを測る。土埋土は暗褐色砂で、上部は固く締まり炭化物が広がる。土坑埋土からは土師器・白磁・中国陶器片などの遺物が出土したが細片資料が多い。

SK-675（Fig.199）

C 区№.2 第 3 面で検出した土坑である。SK-674 に切られる土坑で、北側は調査区外へと伸びる。検出される範囲から直径 1.50 mの円形土坑と想定される。検出面の標高は 2.90 m前後で、検出面から土坑底面までは 80cmの深さを測る。埋土から土師器・白磁などの遺物が出土した。

出土遺物を Fig.202 に示した。

1 は土師器坏である。底部はヘラ切りされ、体部はナデで調整される。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。

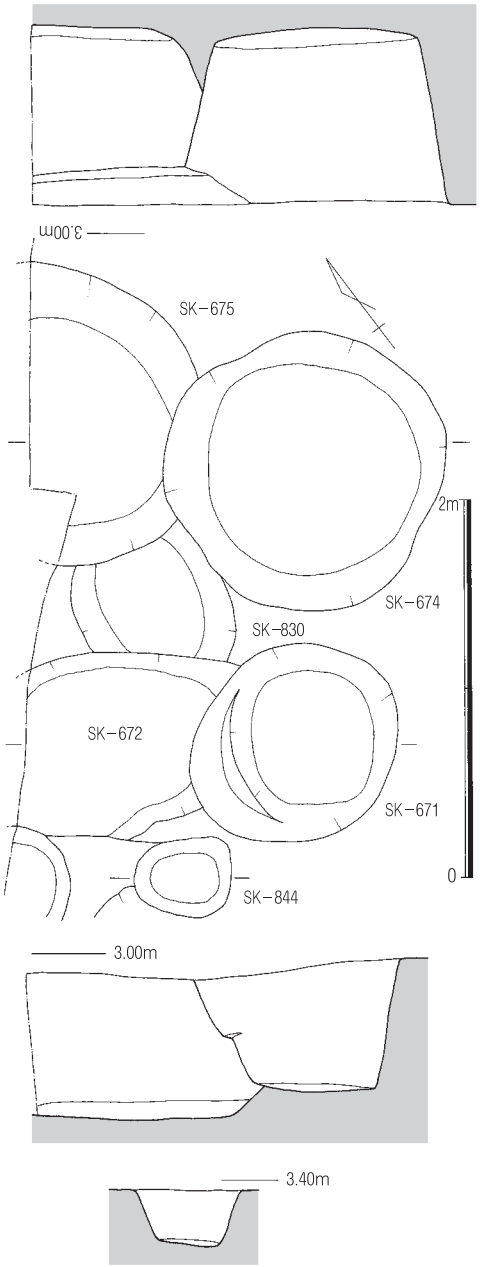


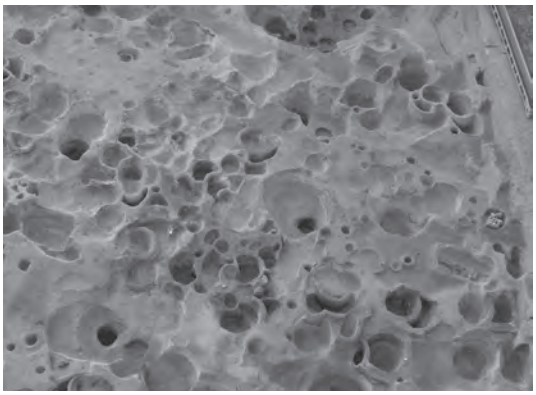
Fig.199　C 区 SK-671・672・674・675 遺構実測図（S=1/40）

SK-844（Fig.199）

C 区№.2 第 3 面で検出した土坑である。長軸 50 cm×短軸 40cmを測る楕円形土坑で、検出面から底面までは 30cmの深さを測る。土坑埋土からは土師器などの細片が出土する。

SK-679（Fig.200）

C 区№.2 第 3 面で検出した土坑である。他の土坑に切られているため、正確な平面形を把握できなかった。検出面の標高は 3.10 m前後で、底面まで



Ph.209　C 区第 3 面遺構検出状況

の深さは60cm前後を測る。土坑底面から土師器坏・白磁などが出土した。

出土遺物をFig.202に示した。

2は土師器小皿である。底部はヘラ切りされる。3は糸切りの土師器坏である。底部には板目圧痕が残る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。4・5はヘラ切りされた土師器坏である。いずれも焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。5の底部には板目が残る。6は瓦器椀である。高台の断面形は台形で、外器面には密なヘラ磨きが施される。内器面口縁部にはヘラ磨きが施され、下半部はコテ当て痕が残る。色調は黒灰色を呈する。7は白磁碗である。外面は体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。釉調は乳灰色を呈する。

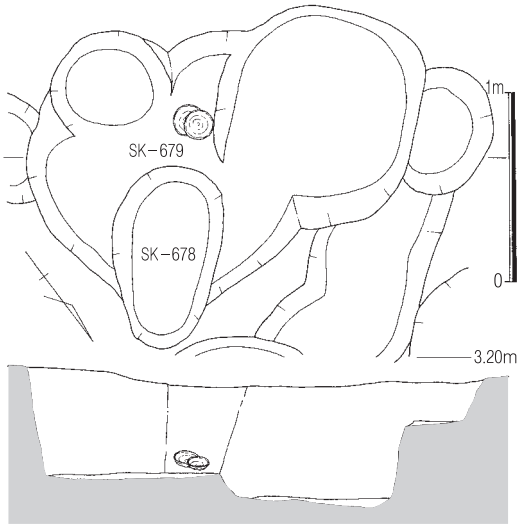


Fig.200　C区SK-679遺構実測図(S=1/40)

Ph.210　C区SK-679検出状況

これらの出土遺物より、この遺構の時期は12世紀前半頃の年代と考えられる。

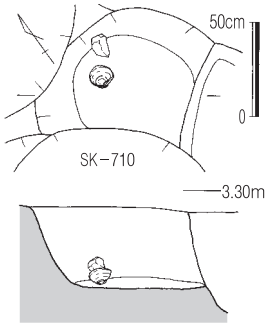


Fig.201　C区SK-710遺構実測図(S=1/40)

SK-710（Fig.201）

C区№7第3面で検出した土坑である。他の遺構に周囲を切られるため、遺構の正確な平面形は把握できない。検出面の標高は3.00 mで、検出面から土坑底面までは40cmの深さを測る。遺構の埋土は暗褐色砂で、炭化物・焼土を含む。土坑底面から龍泉窯系青磁碗や土師器坏などが出土した。

出土遺物をFig.202に示した。8は龍泉窯系青磁碗である。外器面には片切彫りで鎬蓮弁文を配する。畳付直上まで施釉する。胎土は灰色で精緻である。釉調は明オリーブ色を呈する。9は中国陶器四耳壺である。頸部下に沈線を巡らし、肩部に耳を貼り付ける。釉調は乳灰緑色で、胎土は灰白色で精緻である。これらの出土遺物より遺構の時期は12世紀中頃と考えられる。

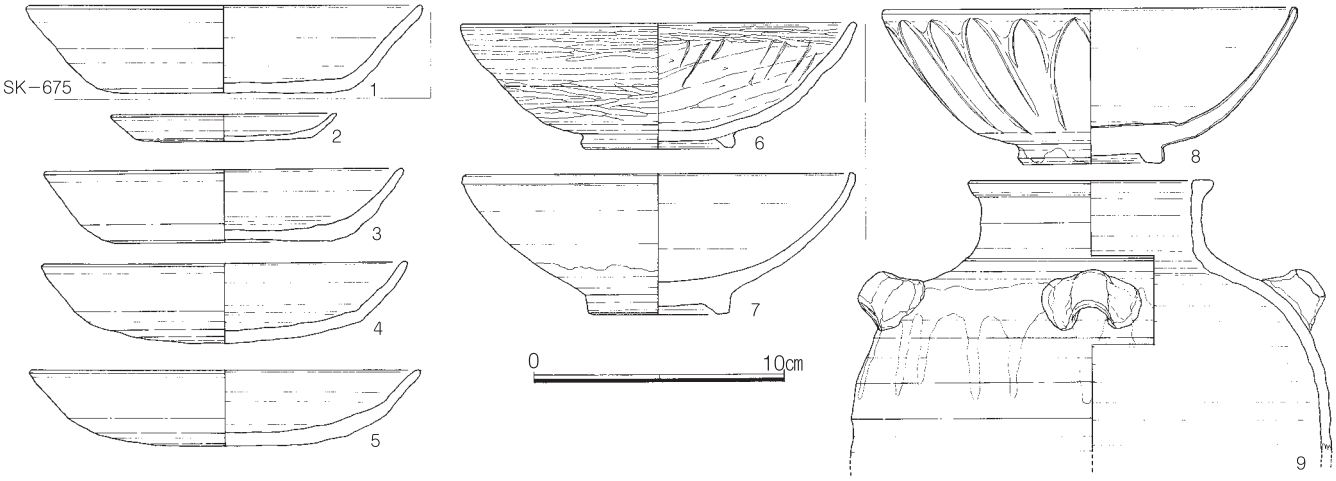


Fig.202　C区SK-675・679・710出土遺物実測図(S=1/3)

SK-728（Fig.203）

C 区№3 第 3 面で検出した土坑である。一辺 80㎝程度の方形土坑で、検出面の標高は 3.15 m前後を測る。検出面から土坑底面までは 60㎝の深さを測る。埋土から土師器小皿等が出土する。

出土遺物を Fig.208 に示した。

1 は土師器小皿である。底部はヘラ切りされ、板目圧痕が残る。

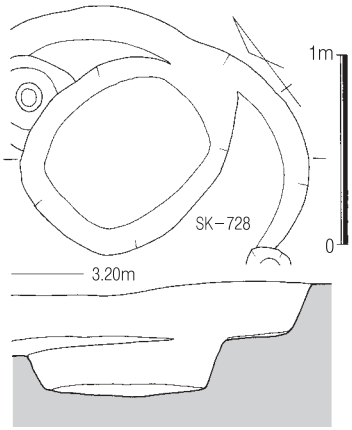


Fig.203　C 区 SK-728 遺構実測図（S=1/40）

SK-741（Fig.204）

C 区№3 第 3 面で検出した土坑である。長軸 1.2 m × 短軸 1.0 m を測る楕円形土坑である。検出面の標高は 3.20 m前後で、検出面から土坑底面までは 70㎝前後の深さを測る。SE-740 廃絶後に掘削された土坑で、埋土は暗褐色砂質土で土師器坏などの細片資料が出土する。

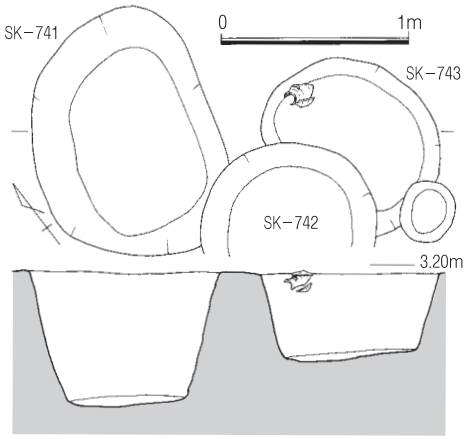


Fig.204　C 区 SK-741・743 遺構実測図（S=1/40）

SK-743（Fig.204）

C 区№2 第 3 面で検出した土坑である。SK-742 に切られる土坑で、残存部から長軸 1 m程度の楕円形土坑と判断される。検出面から土坑底面までは 50㎝程度の深さを測る。埋土上層部から中国陶器四耳壺などの遺物が出土する。

SK-776（Fig.205）

C 区№6 第 3 面で検出した土坑である。土坑上面には大量の被熱した礫や土器片が廃棄される。遺構検出面の標高は 3.20 m前後を測る。土坑の平面形は長軸 2.0 m × 短軸 1.5 mの楕円形を呈する。検出面から土坑底面までは 50㎝前後を測る。土坑の北側に一段高いテラスが検出される。埋土は炭化物・焼土を多く含む暗褐色土で、土師器・中国陶器・白磁などの遺物が出土した。

出土遺物を Fig.208 に示した。

2 ～ 4 は土師器小皿である。いずれも底部糸切り調整される。5 ～ 12 は土師器坏である。これら坏も底部は全て糸切り調整されるものである。焼成はいずれも良好で、色調は褐色を呈する。

13 は青白磁梅瓶の蓋である。口縁部のみ釉をはぎ取る。

14 は越州窯系青磁の香炉胴部片である。釉調はにぶい暗オリーブ色を呈する。

15 は福建連江魁岐窯の青磁碗である。

20 は緑釉陶器の鉢である。21 は

Ph.211　C 区 SK-776 遺物出土状況

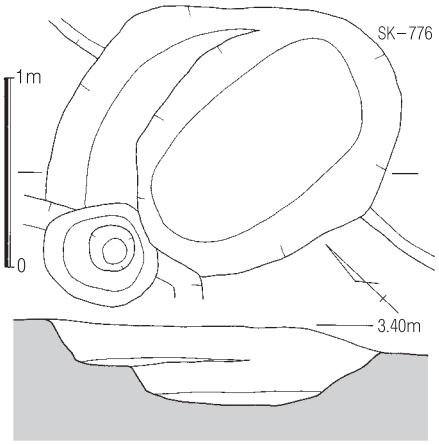


Fig.205　C 区 SK-776 遺構実測図（S=1/40）

中国陶器捏鉢である。

これらの出土遺物よりこの遺構の時期は12世紀中頃から後半代の年代と考えられる。

SK-800（Fig.206）

C区№7第4面で検出した土坑である。検出面の標高は2.70m前後で、検出面から土坑底面までは1.0mの深さを測る。土坑の平面形は長軸1.60m×短軸1.30mの楕円形を呈する。遺構は砂丘砂層面から掘削され、土層断面の観察から鉄分沈着が顕著な粗砂層を掘り抜いている。埋土からは小破片であるが、土師器蓋や土師器埦等の遺物が出土した。

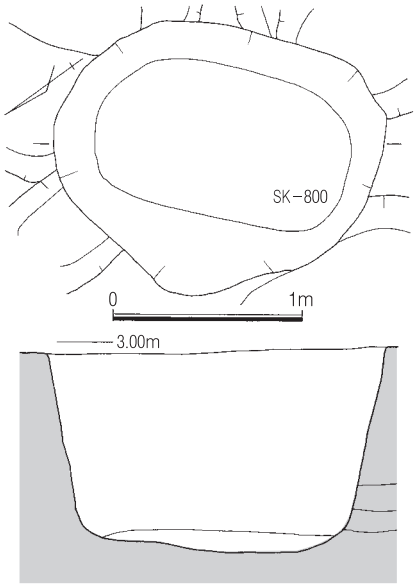


Fig.206　C区SK-800遺構実測図（S=1/40）

Fig.208に出土遺物を示した。16は土師器蓋である。天井部はヘラケズリで調整されており、体部はナデ調整される。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。胎土は褐色で精緻である。

17は土師器埦の高台部片である。高台の断面形は方形を呈する。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈する。

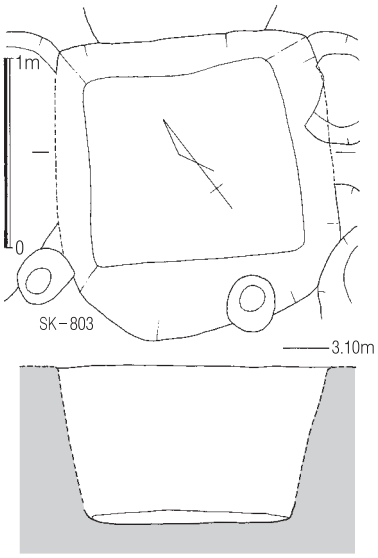


Fig.207　C区SK-803遺構実測図

SK-803（Fig.207）

C区№2第4面で検出した土坑である。他の土坑に周囲を切られるが底面の形状より、方形土坑であることが推測される。一辺1.40m前後を測り、検出面から土坑底面までは80cm前後を測る。

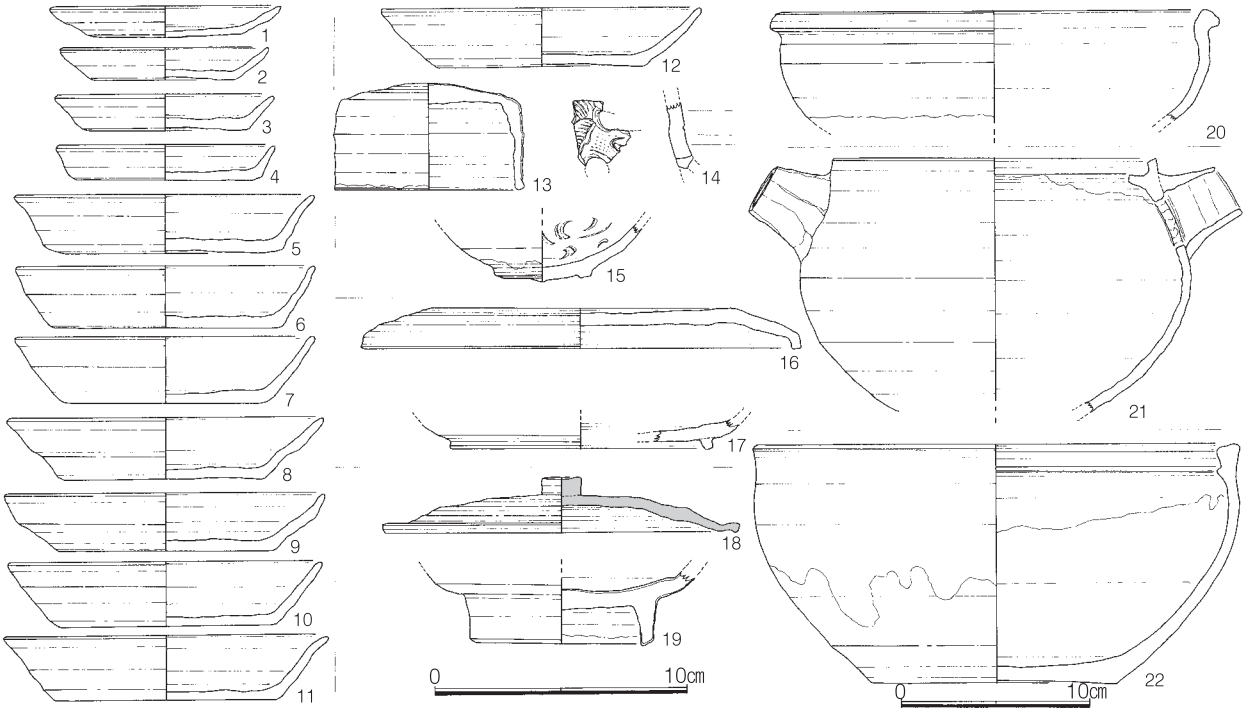


Fig.208　C区SK-728・776・800・803出土遺物実測図（S=1/3）

遺構埋土は黒色粘質土となり、埋土から土師器・白磁などの遺物が出土した。出土遺物を Fig.208 に示した。18 は須恵器蓋である。円柱形の摘みを天井部に接合する。19 は福建省産の白磁碗である。高台中程まで施釉する。釉調は乳灰白色を呈する。

これらの出土遺物から遺構の時期は 12 世紀初頭頃と考えられる。

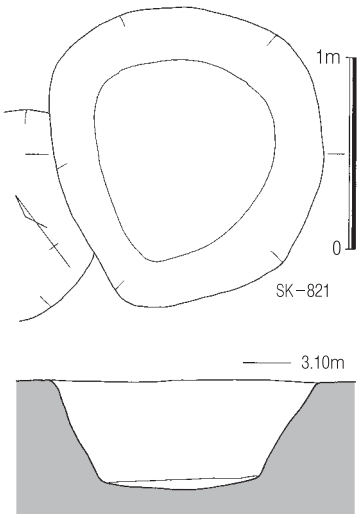


Fig.209　C 区 SK-821 遺構実測図（S=1/40）

SK-821（Fig.209）

C 区№6 第 4 面で検出した土坑である。直径 1.50 m前後の不整円形の平面形を持つ土坑で、検出面の標高は 3.00 m前後を測る。

検出面から土坑底面までは 50cm前後を測り、埋土は炭化物・焼土を含む暗褐色砂質土となる。遺構埋土からは土師器・白磁などの遺物が出土した。

出土遺物を Fig.211 に示した。

1 は土師器坏である。底部はヘラ切りされ、やや直線的に開く体部を持つ。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。2 は白磁玉縁碗である。3 は高麗青磁碗である。畳付のみ露胎とする。

これらの出土遺物より遺構の時期は 12 世紀代前半と考えられる。

SK-617（Fig.210）

C 区№5 第 3 面で検出した土坑である。長軸 1.40 m × 短軸 1.10 mを測る楕円形土坑で、検出面の標高は 3.30 m前後を測る。検出面は基盤層の褐色砂層面であり、検出面から土坑底面までは 65cm前後の深さを測る。遺構埋土は暗褐色砂質土で、炭化物を含む。遺構埋土から土師器・白磁等の遺物が出土した。

出土遺物を Fig.211 に示した。

4 ～ 7 は土師器小皿である。底部は全て糸切り調整され、6・7 には板目痕が残る。平均口径は 9.0cm前後、底径は 7.0 cm、器高は 1.0cmを平均とする。焼成はいずれも良好で、色調は暗褐色～褐色を呈する。

遺物の出土量は少ないが遺構の性格としては、廃棄土坑と考えられる。

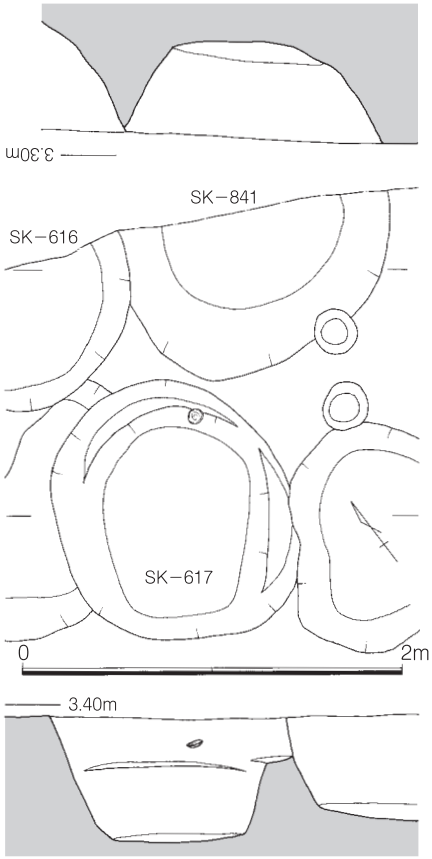


Fig.210　C 区 SK-617・841 遺構実測図（S=1/40）

Ph.212　C 区 SK-617 検出状況

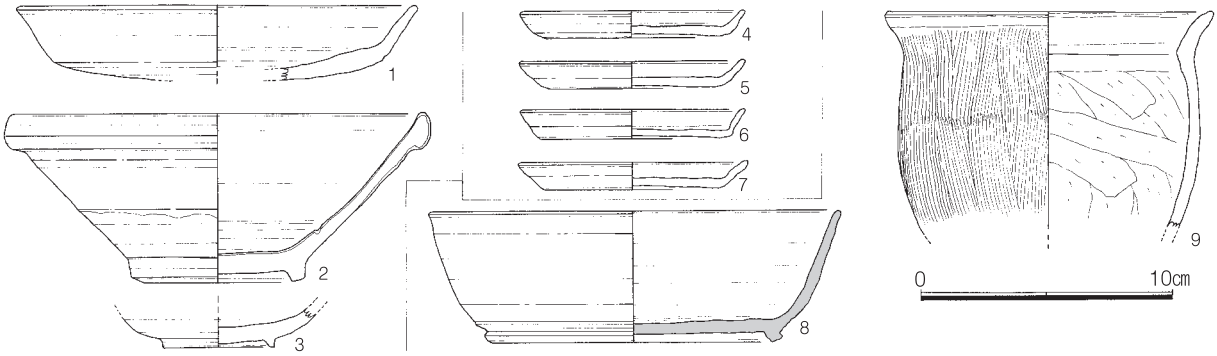


Fig.211　C区 SK-617・821・841 出土遺物実測図(S=1/3)

SK-841（Fig.210）

C 区№2 第 3 面の調査区際で検出した土坑である。遺構の東側は調査区外へ伸びる。調査区内で検出した範囲から長軸 1.40 m前後の楕円形土坑と考えられる。検出面の標高は 3.20 mを測り、検出面から土坑底面までは 50cm前後を測る。遺構埋土は暗褐色砂で、土師器・白磁とともに須恵器が出土する。遺構自体は隣接する D 区で検出される箇所であったが、D 区では SE-765 掘方が重複しており、残存部分の検出はできなかった。

出土遺物を Fig.211 に示した。

8 は須恵器碗である。高台断面形は方形を呈し、底面端部に貼り付けられる。焼成は良好で色調は灰色を呈する。9 は土師器甕である。外面には縦位の刷毛目調整を施し、内面はヘラケズリで調整する。色調は橙色を呈する。遺物自体は 9 世紀代に属する物である。

その他の遺構

C 区においては多数の土坑群を検出したが、その中においても貯蔵用と考えられる方形土坑からまとまって遺物が出土した。このような遺構から出土した遺物についての報告を行う。

SK-530（Fig.97・付図 7）

C 区№4 第 3 面で検出した長方形土坑である。一辺 1.30 m前後を測り土坑底面までは 50cm前後の深さを測る。出土遺物を Fig.212 に示す。1 は青白磁碗である。直線的な器壁は薄く、端部で外反する。畳付直上まで施釉する。2 は龍泉窯系青磁碗である。外器面には鎬蓮弁文を施す。

SK-595（Fig.97・付図 7）

C 区№4 第 3 面で検出した土坑である。C 区№2 第 3 面で検出した長方形土坑である。一辺 1.30 m前後を測り、土坑底面四隅部には土留めの板を固定するための杭痕が残る。検出面から土坑底面までは 1 m前後の深さを測る。出土遺物を Fig.212 に示した。3 は白磁碗である。11・12 は磁竈窯の褐釉陶器四耳壺である。13 は中国陶器四耳壺である。これら四耳壺は容器として銅銭や液体などを満載して持ち込まれた物であろう。

SK-694（Fig.97・付図 7）

C 区№7 第 3 面で検出した方形土坑である。一辺 50cm前後で深さは 60cm程度を測る。12 世紀前半期の廃棄土坑か。出土遺物を Fig.212 に示した。6 は白磁浅碗である。内面には片切彫りで装飾する。

7 は白磁碗である。8 は白磁平底皿である。9 は無釉陶器の坏である。10 は無釉陶器の蓋である。

SK-748（Fig.97・付図 7）

C 区№3 第 3 面で検出した楕円形土坑である。長軸 1.0 m × 短軸 0.7 m で、検出面から土坑底面までは 50㎝前後を測る。 出土遺物を Fig.212 に示す。4 は龍泉窯系青磁平底皿である。5 は白磁玉縁碗である。

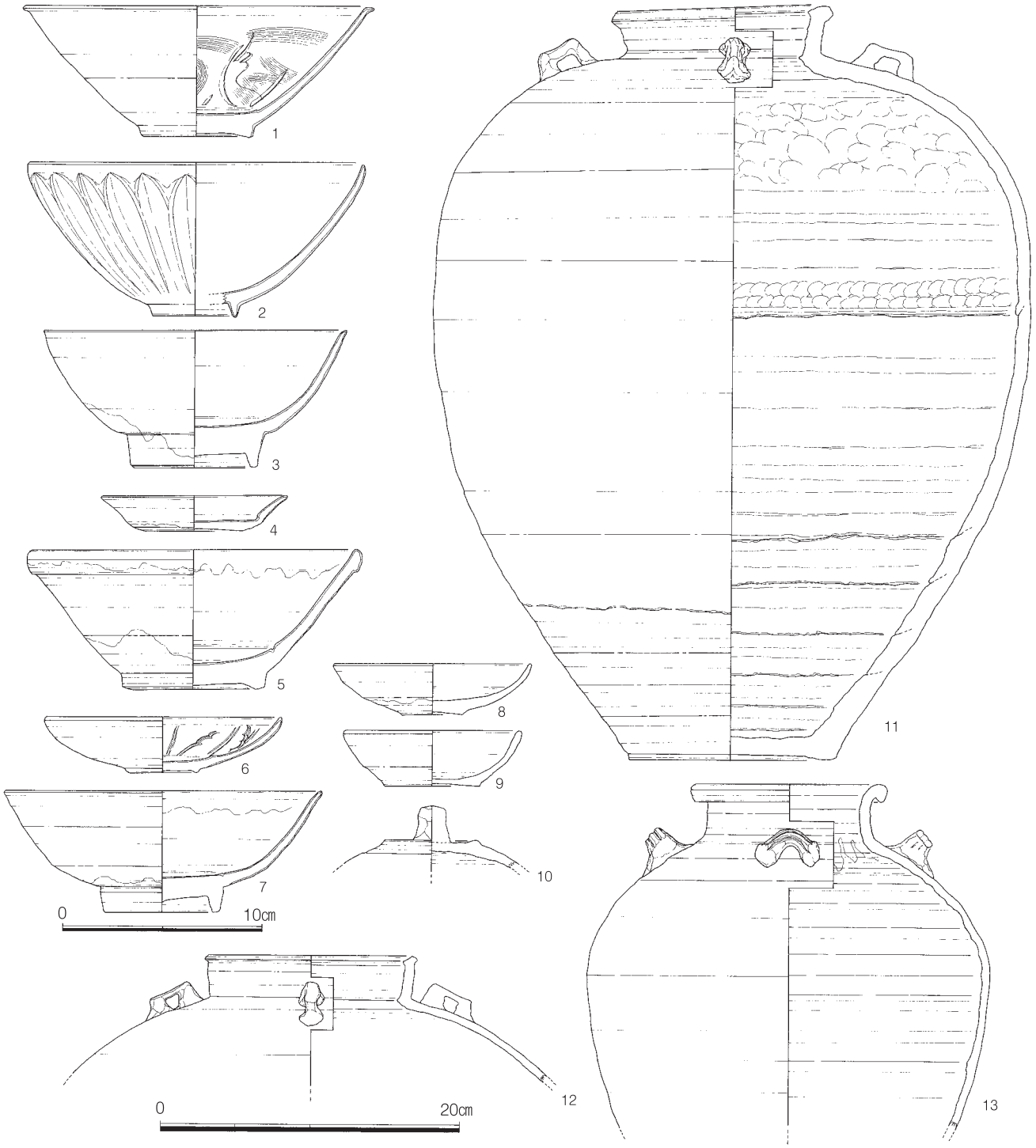


Fig.212　C 区 SK-530・590・694・748 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

D 区の遺構

SC-719（Fig.213）

D 区№.4 第 3 面で検出した方形住居である。第 2 面調査時に住居西側壁を確認していたが、住居に重複するように方形の攪乱孔が存在していたため、第 3 面で竪穴住居と確認した。用途としては住居と分類するのが正しいのか判断できない。半地下式の倉庫の下部構造である可能性も考えられる。

検出した平面形は南北に伸びる隅丸の長方形で、長辺 4.50 m × 短辺 35.0 m を測る。検出面の標高は 3.70 m前後で、検出面から底面（床面）までの深さは 50cm程度である。底面は暗褐色砂層面上で検出され、底面上で壁溝・柱穴が検出される。住居の北東側二辺には幅 15cm前後、深さ 20 ～ 25cm程度の壁溝が掘削されている。残りの二辺は底面以下まで攪乱が及ぶため確認できなかった。北西隅部をのぞく底面の四隅で柱穴が検出される。各柱穴は直径 30 ～ 40cmを測り、底面から深さ 60 ～ 80cm の深さを測る。柱穴底面で柱圧痕等を精査してみたが、検出できなかった。いずれの柱穴も壁溝を切るように掘削された状況で検出される。住居の主軸は N-30°-W 方向を採る。

住居底面上では SK-793・SK-792・SK-728 等の土坑が検出される。廃絶後に掘削されたもので、底面以下まで及ぶものがある。

埋土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土が上層に堆積し、底面直上までの下層には暗褐色砂質土が堆積する。埋土中からは土師器坏等の中世の遺物のみが出土する。

出土遺物を Fig.214 に示した。

1 ～ 5 は土師器小皿である。全て底部は糸切り調整されるもので、板目圧痕が残るものもある。焼成は良好で色調は褐色～暗褐色を呈する。6 ～ 14 は土師器坏である。これらの坏も全て糸切り調整された底部を持つもので、7・9 の底部には板目圧痕が残る。器形としては直線的に開くものと体部

Ph.213　D 区 SC-719 完掘状況

Ph.214　D 区 SC-719 検出状況

Ph.215　D 区土坑内出土馬頭骨

Ph.216　D 区第 3 面掘り下げ状況

中程で外反するもの、口縁端部で内傾するものの三種類に分けられる。焼成は良好で、色調は褐色～橙色を呈する。15 は中国陶器壺底部片である。

この他には白磁・青磁・中国陶器などの遺物が出土した。これらの出土遺物より遺構の年代は 13 世紀末から 14 世紀初頭の年代と考えられる。

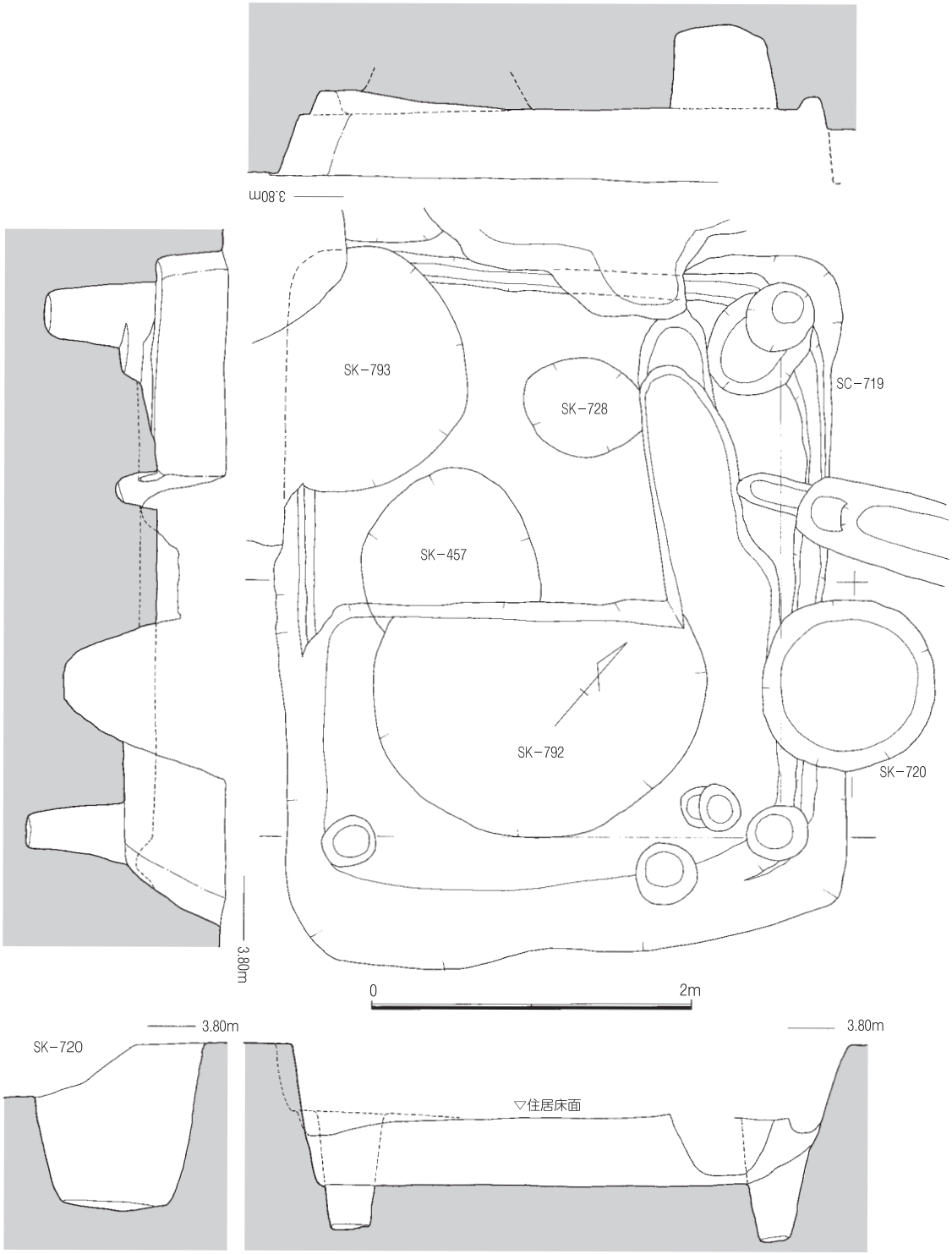


Fig.213　D 区 SC-719 遺構実測図（S=1/40）

SK-720（Fig.213）

D 区№4 第 3 面で検出した円形廃棄土坑である。SC-719 に切られる土坑で、直径 1.10 mの円形の平面形を呈する。検出面の標高は 3.70 m前後で、検出面から土坑底面までは 1.0 mの深さを測る。埋土は炭化物を多く含む暗褐色砂質土で、土師器・瓦器・白磁などの遺物が出土した。

出土遺物を Fig.214 に示した。16 は白磁玉縁碗である。体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。17 は土師器小皿である。底部は糸切り調整され、板目圧痕が残る。18 は瓦器椀である。高台断面形は台形を呈し、外器面にヘラ磨きが施される。これらの遺物より 13 世紀前半の時期と考えられる。

SK-728（Fig.213）

D 区№4 第 2 面で検出した楕円形土坑である。長軸 70cm×短軸 60cmの平面形で土坑埋土は黒褐色粘質土である。埋土から土師器などが出土した。出土遺物を Fig.214 に示した。19 は須恵器坏である。混入品である。20 は糸切りの土師器小皿である。21 ～ 23 は糸切りされた土師器坏である。

これらの出土遺物より 14 世紀代前半の遺構と考えられる。

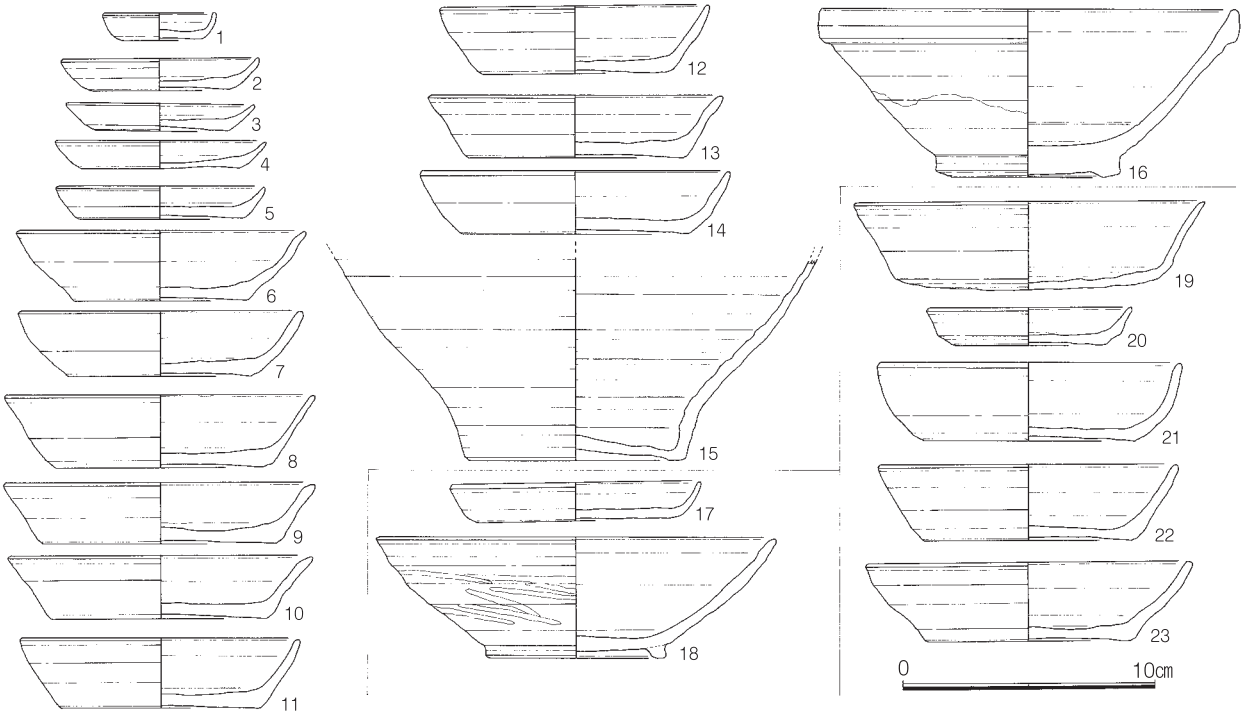


Fig.214　D 区 SC-719、SK720・728 出土遺物実測図（S=1/3）

Ph.217　D 区 SC-827 検出状況

Ph.218　D 区 SC-827 全景

SC-827（Fig.215）

D区№4第3面で検出した方形住居である。一辺2.80～3.00 mを測る方形住居で、検出面の標高は3.50 m前後である。検出面から床面までの深さは20～35㎝前後を測る。遺構埋土は暗褐色砂で、上層部は固く締まり炭化物を含む。床面上には植物生痕らしき染みが点在するが、床面四隅部には主柱穴が検出される。各柱穴は直径20～30㎝程度で、床面から深さ20～40㎝を測る。

主柱穴で結ばれるラインから内側にさらに柱穴列が検出される。上部構造が不明確であるため、この1.40 m範囲を囲む柱穴列の性格は判然としない。主軸はN-62°-E方向を採る。住居埋土からは土師器小皿・瓦器椀などの遺物が出土した。

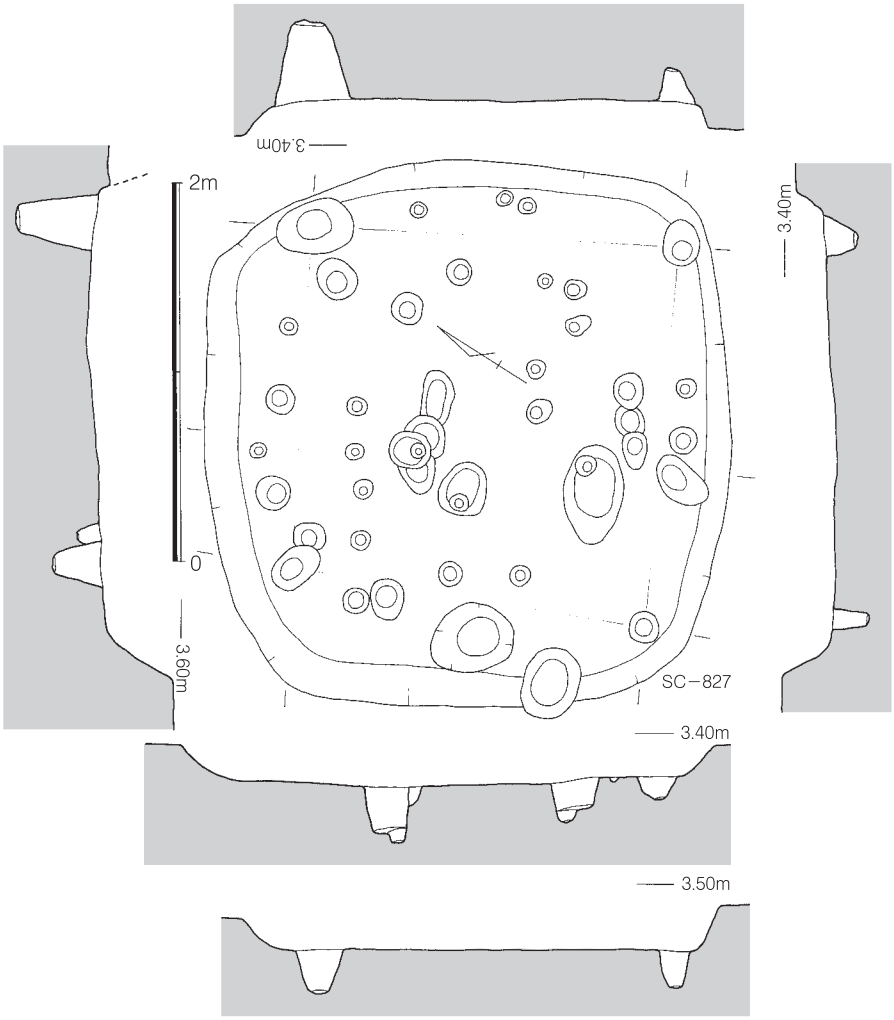


Fig.215　D区SC-827遺構実測図(S=1/40)

出土遺物をFig.216に示した。

1・2は土師器小皿である。底部はいずれもヘラ切り調整されたもので、ヘラ切り後にナデが加えられる。胎土は緻密で焼成は良好である。色調は褐色を呈する。

3は楠葉型瓦器椀である。内面の口縁部下に沈線を巡らせ内外器面ともに非常に密なヘラ磨きを施す。焼成は良好で色調は漆黒色を呈する。

4は黒色土器埦である。内面に炭素を吸着させる、いわゆる内黒の埦である。体部外面には指頭圧痕が明瞭に残り、内器面には斜格子状のヘラ磨きを施す。高台の断面形は台形となりナデつけて接合される。

これらの出土遺物よりこの住居は11世紀後半の時期に属するものであることが分かる。

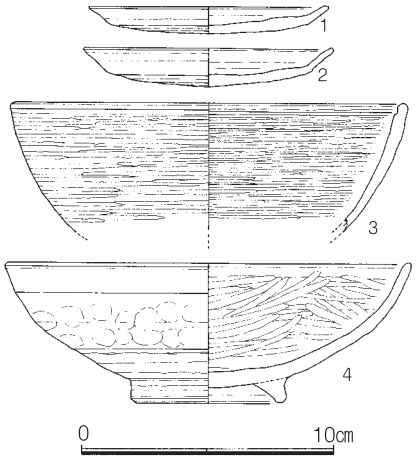


Fig.216　D区SC-827出土遺物実測図(S=1/3)

SK-02（Fig.217）

D 区№6 第 1 面で検出した楕円形土坑である。長軸 2.20 m×短軸 1.50 mを測る土坑で、検出面の標高は 4.00 mを測る。土坑上面に大量の土師器・礫が投棄されていた。遺構埋土は黒褐色粘質土で炭化物・焼土が多く含まれる。これらの遺物実測後に掘り下げを行ったところ底面南側にさらに一段深くなる範囲を検出し、掘り下げを行った。埋土は上層と同様の黒褐色粘質土であるが、下層の方が粘性がわずかに強い。

遺構上部で検出される遺物は破砕された土師器や礫が多いが、中には京都系土師器坏や白磁碗なども含まれていた。

出土遺物を Fig.218 に示した。

1 は土師器坏である。底部は糸切り調整されたのち板目圧痕が加えられる。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。2 は体部に屈曲を持つ土師器坏である。底部は糸切り調整される。

3 は白磁碗である。現広東省の窯で生産されたもので、北宋後期のものである。体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。

4 は白磁の合子蓋である。天井部に格子状の線刻を施すが摘みが付けられていたのかは欠損のため不明。被熱のため釉は溶け落ちる。

これらの出土遺物よりこの廃棄遺構は 14 世紀前半期の時期が考えられる。

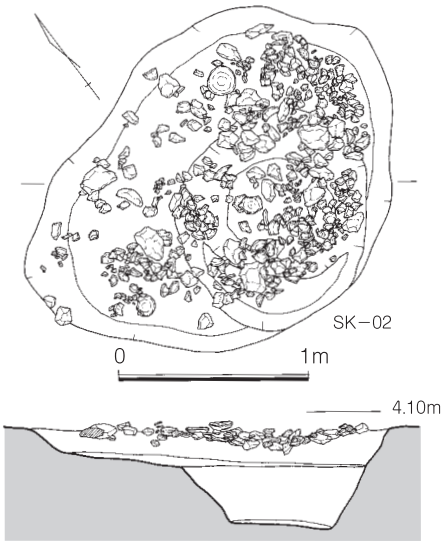


Fig.217　D 区 SK-02 遺構実測図（S=1/40）

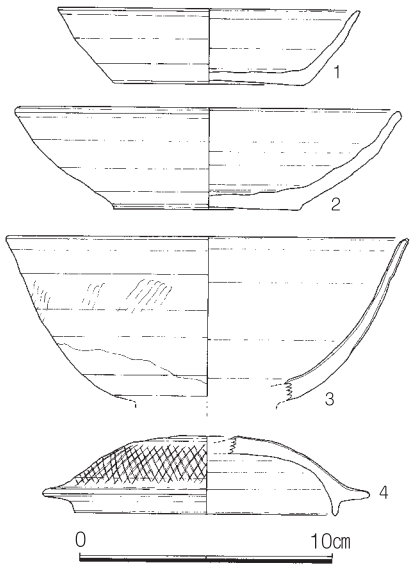
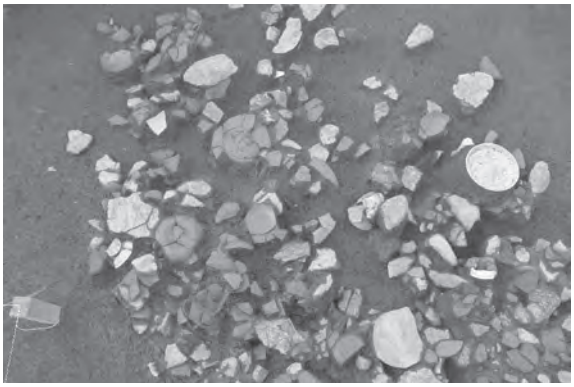


Fig.218　D 区 SK-02 出土遺物実測図（S=1/3）

SK-09（Fig.219）

D 区№3 第 1 面で検出した廃棄土坑である。平面形は長軸 1.80 m×短軸 1.40 mの楕円形を呈する。検出面の標高は 3.90 mである。遺構底面は検出面から深さ 1.15 mを測る。上層部には遺物を含まないが中層以下で大量の土師器坏等が検出された。埋土は炭化物を多く含む暗褐色粘質土で、下層は砂質が強くなる。土師器坏等の遺物は土坑南東側の壁面に沿うように廃棄されている状況が確認できる。このような出土状況から、土坑がある程度周囲からの土砂で埋没した段階で南東側から投棄されたことが分かる。

Ph.219　D 区 SK-02 検出状況



Ph.220　D 区 SK-02 遺物出土状況

埋土からは大量の土師器や白磁等の出土した。

出土遺物を Fig.222 に示した。

１は白磁高台付皿である。外面下半部まで施釉し、以下を露胎とする。内面見込み周囲の釉を輪状に剥ぎ取る。釉調は乳灰緑色を呈する。2 ～ 5 は土師器小皿である。いずれも底部は糸切り調整されるものである。小皿の平均口径は 7.2㎝、平均底径 5.0㎝、平均器高 2.1㎝を測る。焼成は良好で、色調は褐色を基調とする。6 ～ 11 は土師器坏である。小皿と同様に底部は糸切り調整されたものだけである。12 は白磁壺底部である。14 世紀初頭の廃棄遺構である。

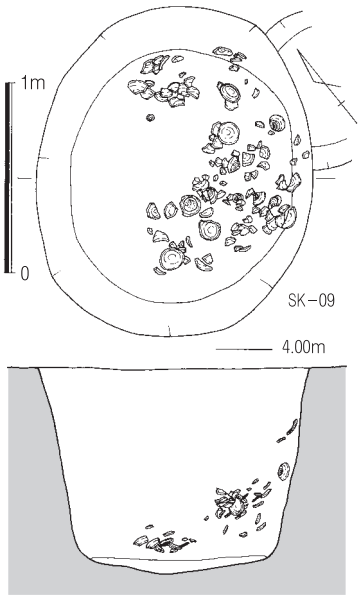


Fig.219　D 区 SK-09 遺構実測図（S=1/40）

SK-22（Fig.220）

D 区№ 7 第 1 面で検出した土師器大量廃棄土坑である。調査区北際で検出された土坑で、北側は既存建物地下室で消失していた。調査では南側部分を検出した。平面形は隅丸方形を対角線上から半裁した形状である。検出面の標高は 4.00 m を測る。土坑内には大量の土師器が廃棄されていた。埋土は炭化物・焼土を多く含む暗褐色土である。大量の土師器を取り上げた段階で下部に土坑を検出したが、同一の埋土と遺物が続いており同一遺構と判断した。

遺物の一部を Fig.222 に示した。

13 ～ 22 は土師器小皿である。底部は糸切り調整されたもので、平均口径は 8.2㎝を測る。色調は褐色～橙色を呈する。23 ～ 27 は土師器坏である。小皿同様に底部は全て糸切り調整されるものである。出土状況からは何かしらの傾向は看取できない。

14 世紀前半の廃棄遺構である。

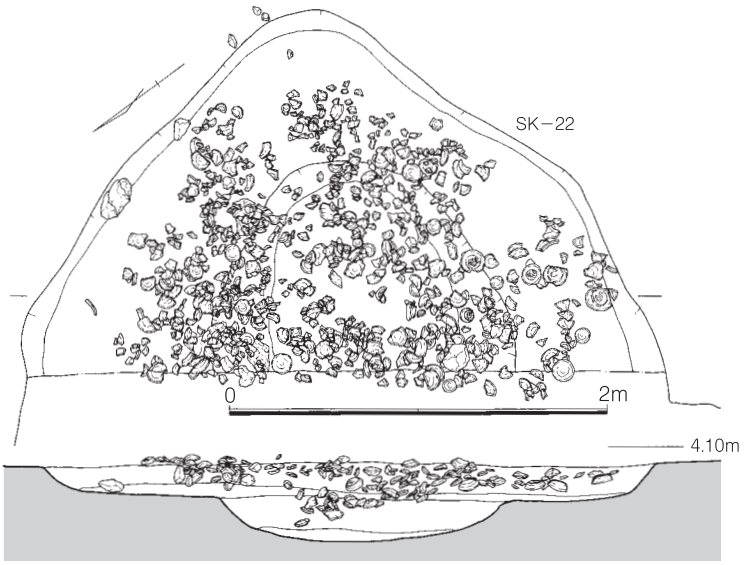
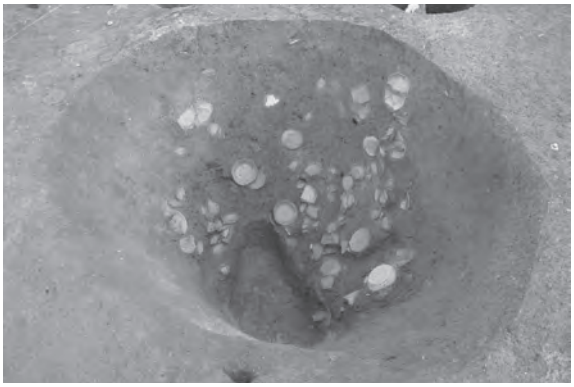


Fig.220　D 区 SK-022 遺構実測図（S= 1 /40）



Ph.221　D 区 SK-09 全景

Ph.222　D 区 SK-22 遺物出土状況

SK-26（Fig.221）

D 区№4 第 1 面で検出した廃棄土坑である。遺構南側は調査区外へと伸びるため北側部分のみを掘り下げた。調査区で検出される範囲から短軸 1.20 mの楕円形土坑であると判断される。検出面の標高は 4.00 mである。検出面から土坑底面までは 1.10 mの深さを測る。土坑埋土は黒褐色粘質土で炭化物を非常に多く含む。

出土遺物を Fig.222 に示した。28 ～ 35 は土師器小皿である。身が深い器形の小皿が多く、底部は全て糸切りされるものである。36 は土師器高台付皿である。糸切りの小皿に高台を貼り付けたもので、色調は褐色を呈する。37 ～ 40 は土師器坏である。小皿と同じく全て糸切り調整される個体で構成される。41 は白磁碗である。口縁部は波状になる。14 世紀初頭の廃棄遺構か。

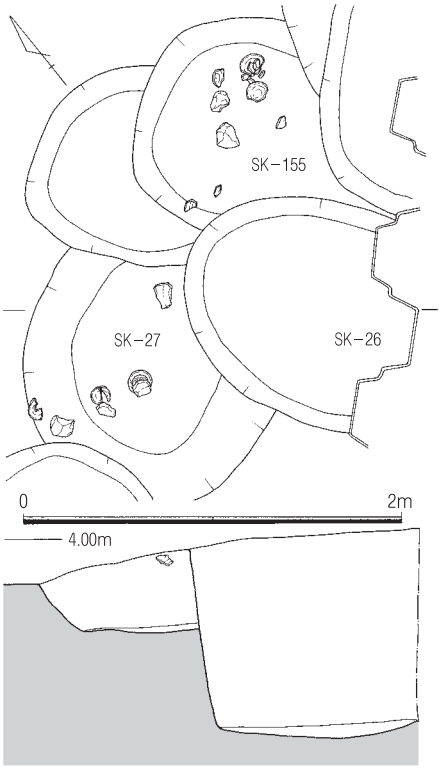


Fig.221　D区 SK-026 遺構実測図(S=1/40)

SD-21（Fig.223）

D 区№7 第 1 面で検出した土師器大量廃棄遺構である。D 区第 1 面表土掘削時から検出されていた遺構で、遺構上層部

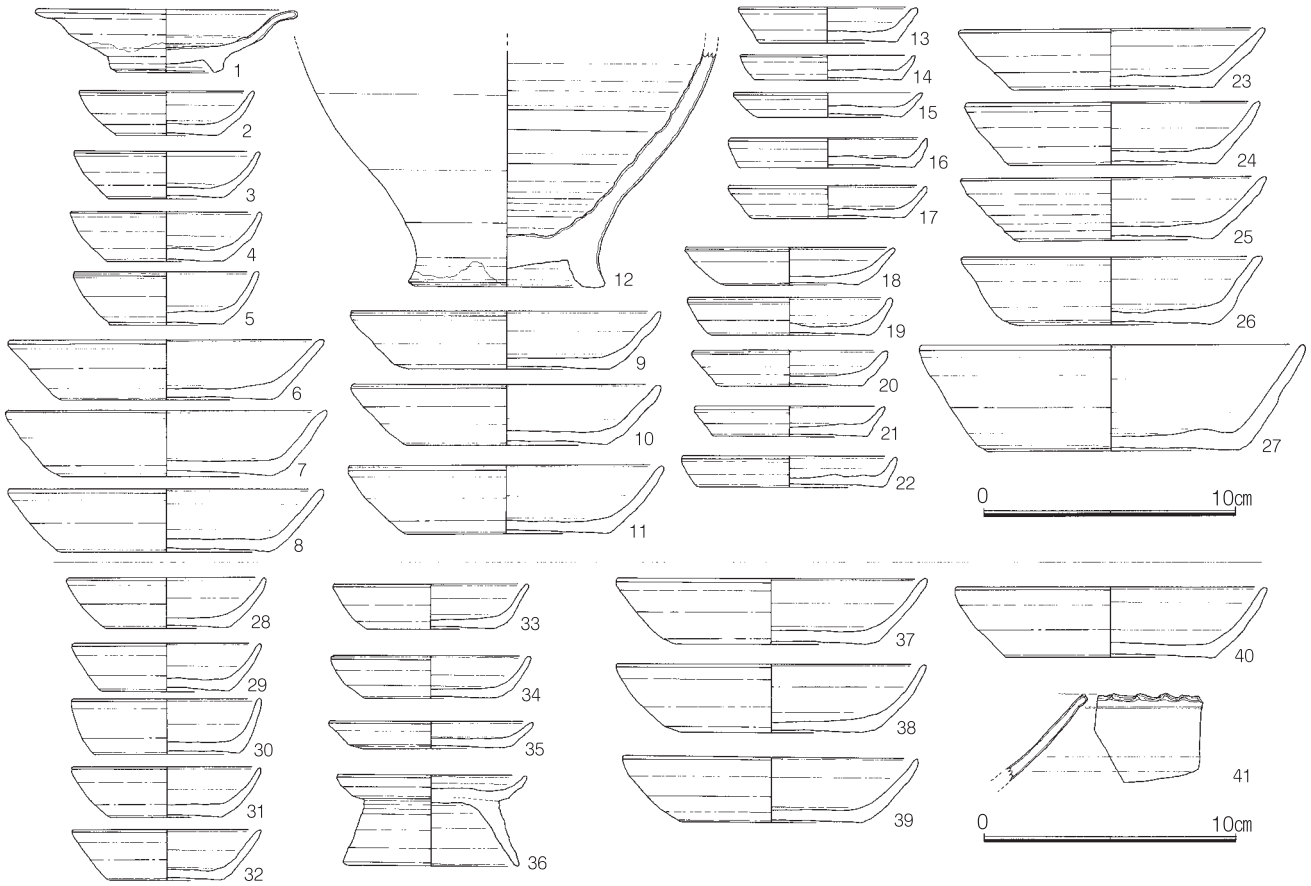


Fig.222　D区 SK-009・022・026 遺構実測図（S=1/3）

に大量の土師器が散乱した状況であった。遺構の平面形は長辺 5.70 m×短辺 2.70 mの隅丸長方形を呈する。遺構埋土は暗褐色土で焼土ブロックと炭化物が多く含まれる。出土遺物を Fig.225 に示した。1～6 は土師器小皿である。全て糸切り調整されるもので、平均口径は 8.2cmを測る。

7～18 は土師器坏である。これらも全て糸切り調整されるもので、板目圧痕を持つ個体もある。出土状況からは小皿・坏の分布に大きな違いは観察できない。

14 世紀前半の廃棄遺構であろう。

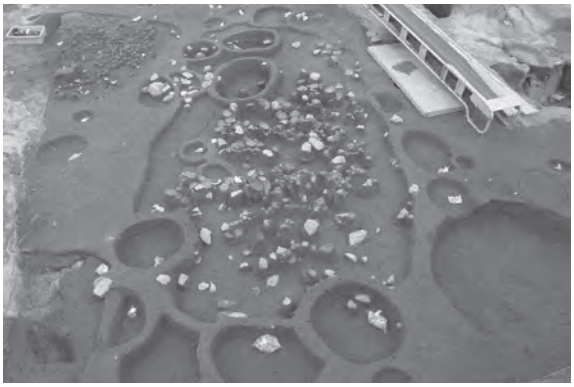
SD-24（Fig.95）

D 区第 1 面№6 で検出した溝遺構である。遺構主軸は N-76°-E 方向を採るもので、土師器坏等の遺物が出土した。Fig.225 に出土 遺物を示した。19～28 は土師器小皿である。

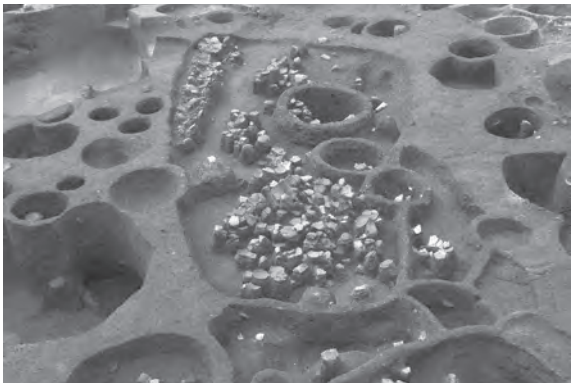
29 は都城系土師器坏である。下層からの混入である。

30～36 は土師器坏である。全個体が糸切り調整される底部を持つ。色調は褐色～橙色を呈する。

Fig.223　D区 SD-021 遺構実測図（S=1/40）



Ph.223　D 区 SD-21 検出状況



Ph.224　D 区 SD-28 検出状況

SD-28（Fig.224）

D 区№3 第 1 面で検出した土師器大量廃棄遺構である。周囲に土坑などが密に検出されるため遺構の正確な平面形を捉えられないまま掘り下げを行った。SD-21 と同様に隅丸長方形の平面形と捉えていたが、遺構の南側には列状に土師器の集中廃棄が検出され、同一の遺構であるのかは不明確である。検出面の標高は 3.90 m前後で、遺構の断面形は浅い箱形となる。下層には幅 1.50 mの溝遺構が検出され、埋土にほとんど違いが確認できなかったため同一遺構と判断し、遺物は上層・下層で分けて取り上げを行った。下層で検出された溝の主軸は SD-24 と同一で平行する。

Fig.225 に出土遺物を示した。37 ～ 46・48・49 は土師器小皿である。47 は小型の小皿である。50 ～ 61 は土師器坏である。これらの土師器は全て糸切り調整されるものである。62 は白磁小壺蓋である。63 は青白磁平底皿である。65 は白磁口禿皿で、64 は白磁平底皿である。66 は混入の須恵器碗である。67 は白磁玉縁碗、68・69 は白磁碗である。70 は瓦器椀である。71 は土師質土器捏鉢である。
これらの出土遺物より 14 世紀前半代の時期が考えられる。

Fig.224　D区 SD-028 遺構実測図（S=1/40）

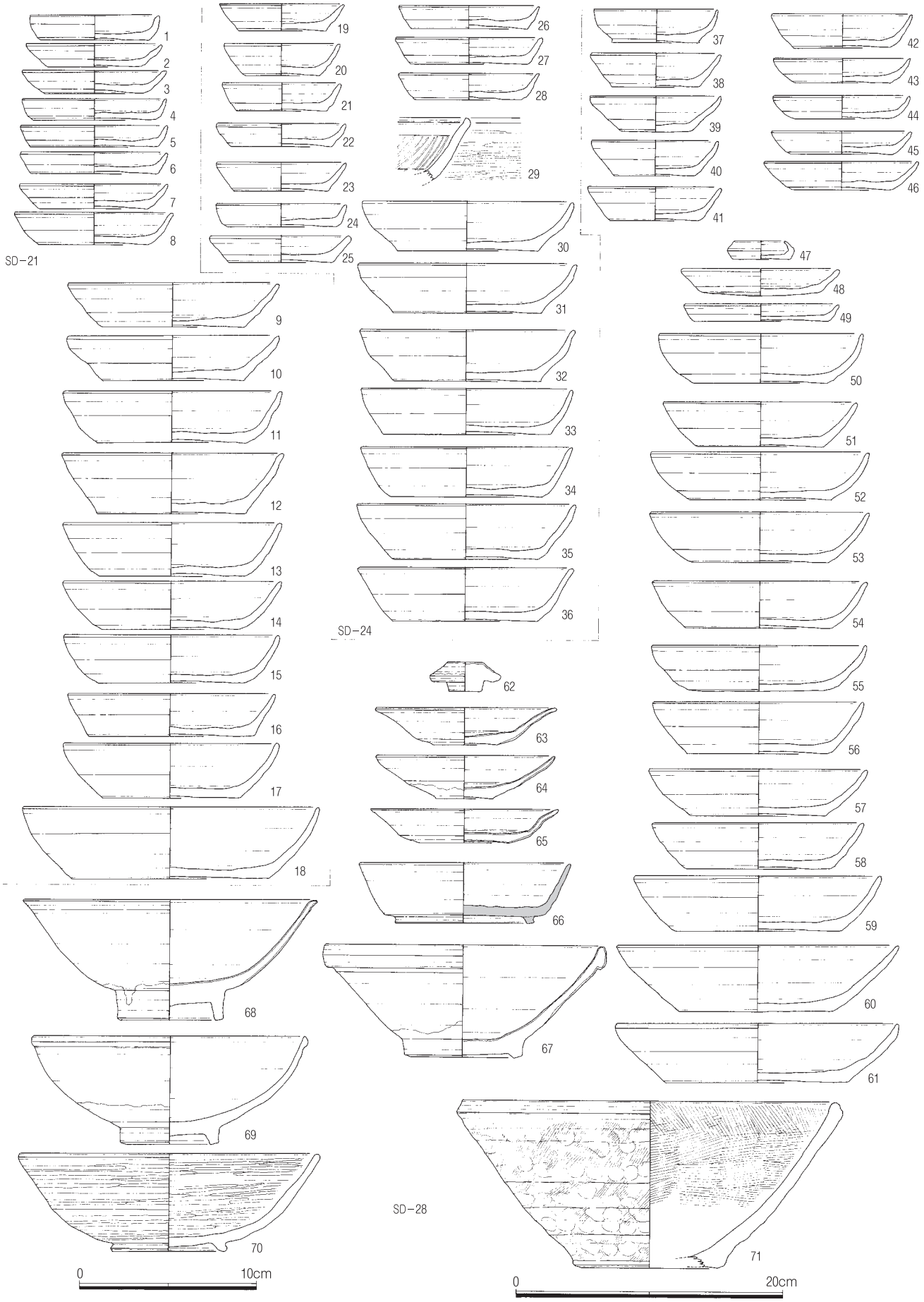


Fig.225　D区 SD-021・024・028 出土遺物実測図(S=1/3・1/4)

SK-08（Fig.226）

D 区№2 第 1 面で検出した土坑である。直径 1.20 mの円形土坑で、検出面の標高は 4.10 mを測る。埋土は暗黄褐色砂質土で、土師器・青白磁・国産陶器などの遺物が出土した。

Fig.227 に出土遺物を示した。

1 は土師器小皿である。2 ～ 4 は土師器坏である。いずれも糸切りされる。5 は白磁平底皿である。6 は青白磁高台付皿である。内面見込みに双魚文が施される。7 は須恵質土器捏鉢である。8 は土師質土器土鍋である。

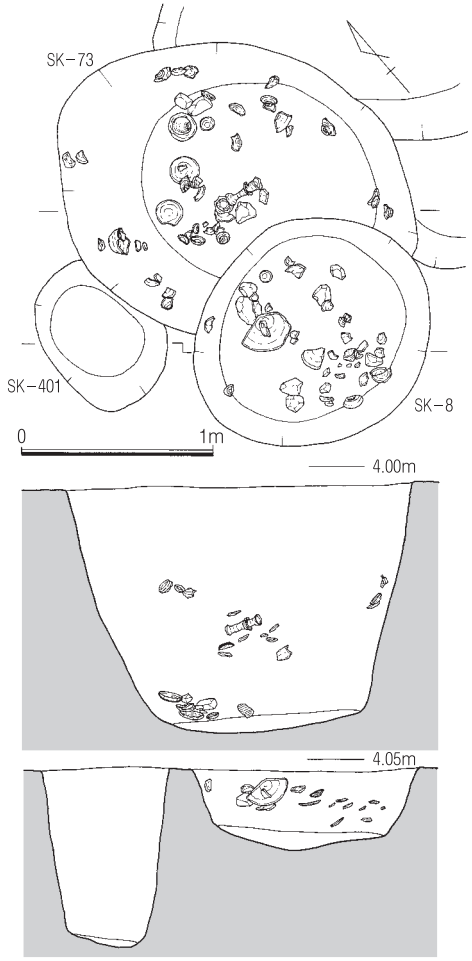


Fig.226　D 区 SK-008・073・401 遺構実測図（S=1/40）

SK-73（Fig.226）

D 区№2 第 1 面で検出した土坑である。SK-08 に切られる楕円形土坑で長軸 1.80 m × 短軸 1.60 mを測る。検出面から土坑底面までは1.30 mを測る。埋土は暗褐色砂質土・褐色粗砂層・黒褐色粘質土が交互堆積もので、中層以下で遺物が集中して出土した。

Fig.227 に出土遺物を示した。9 ～ 13 は糸切りの底部を持つ土師器坏である。平均口径は 16.4cmを測る。22 ～ 32 は土師器 小皿である。平均口径は 9.2cmを測り、全て糸切り調整される。

土師器小皿・坏ともに全て焼成は良好で、色調は褐色～橙色を呈する。15・17 は青白磁合子蓋である。16 は白磁小壺蓋である。18・19 は白磁平底皿で、33・34・36 ～ 38 は白磁高台付皿である。14・20・21 は白磁玉縁碗である。

35 は中国陶器の燭台である。下半部と受け部の一部を欠損する。胎土は灰色で精緻。釉調は乳緑灰色を呈する。39 ～ 41 は瓦器椀である。いずれも高台断面形は台形を呈する。

これらの出土遺物より、この土坑の年代は 12 世紀前半の時期と考えられる。

Ph.225　D 区 SK-73 検出状況

Ph.226　D 区 SK-73 遺物出土状況

SK-401（Fig.226）

D 区№2 第 1 面で検出した土坑である。SK-73 と SK-90 に切られる土坑で長軸 80cmの楕円形を呈する。検出面から土坑底面までは 1 mを測る。埋土は暗褐色砂で固く締まる。土師器・白磁等が出土する。

SK-10（Fig.228）

D 区№2 第 1 面で検出した楕円形土坑である。長軸 1.50 m×短軸 1.0 mを測り、検出面から土坑底面までは 80cmの深さを測る。埋土は炭化物・焼土を多く含む暗褐色砂質土で、土師器・白磁等が出土する。Fig.229 に出土遺物を示した。1 は白磁碗である。外面下半部まで施釉し以下を露胎とする。

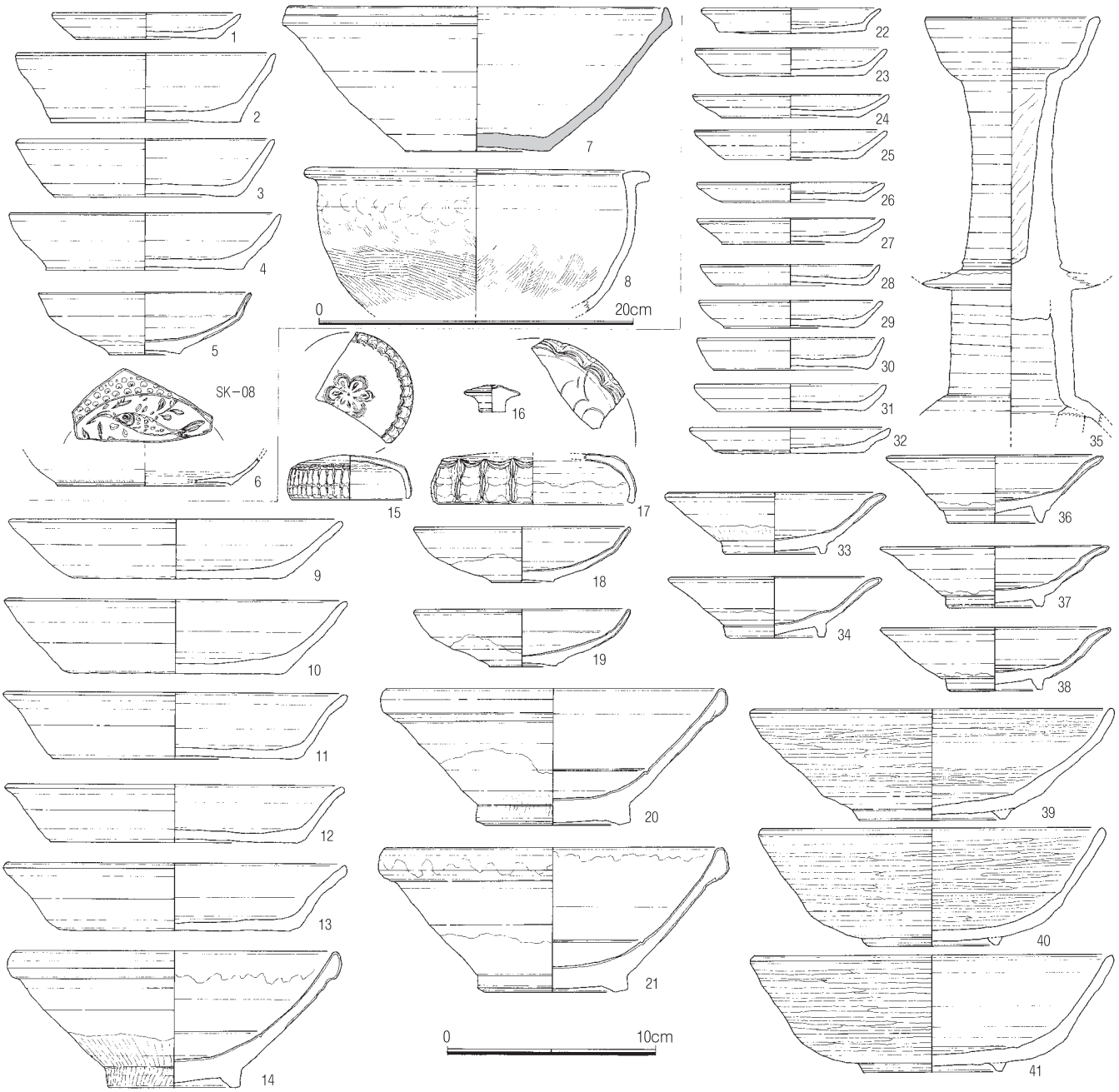
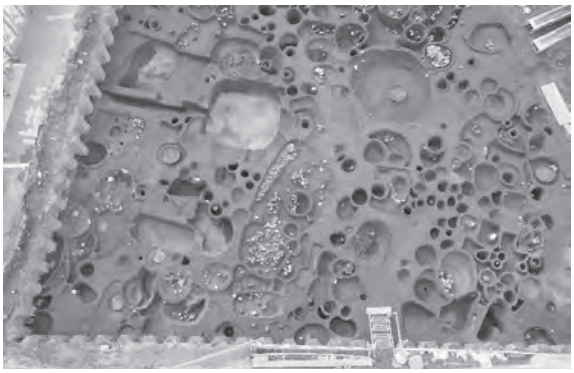


Fig.227　D区 SK-008・073 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）



Ph.227　D 区第 1 面遺構検出状況

Ph.228　D 区第 1 面掘り下げ状況

SK-95（Fig.228）

D 区№3 第 1 面で検出した土坑である。長軸 80cmの楕円形土坑で、埋土は炭化物・焼土を多く含む黒褐色土である。埋土中からは土師器等ともに青磁・鉄器などが出土する。

出土遺物を Fig.229 に示した。2 は糸切りの土師器小皿である。3 は白磁口禿皿である。5 は龍泉窯系青磁の香炉卓である。C 区 SK-65 と接合した資料である。六足の獣面を模した足を配し、体部に透かし孔を設ける。釉調は明オリーブ色で厚く施釉される。14 世紀代前半の遺構である。

SK-165（Fig.228）

D 区№2 第 1 面で検出した楕円形土坑である。検出面では長軸 2.0 m × 短軸 1.5 mを測る。検出面の標高は 3.60 mを測り、検出面から 70cmの深さで平坦面となる。この一段目の底面上で一辺 80cmの方形土坑が検出される。方形土坑底部の四隅部から杭痕等の検出はなかった。半地下式の備蓄庫か。

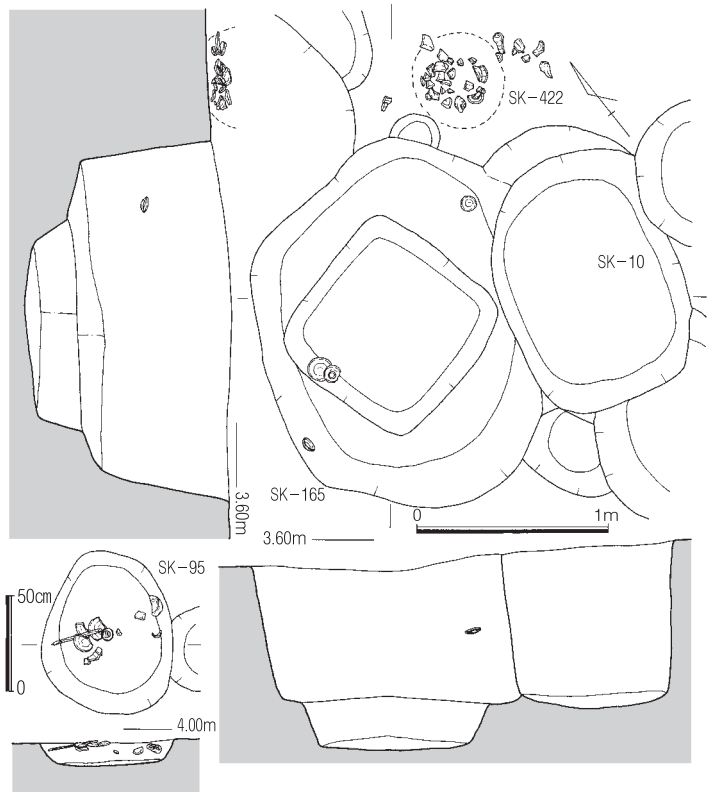


Fig.228　D区 SK-010・095・165 遺構実測図（S=1/40）

出土遺物を Fig.229 に示した。

4 は青磁碗である。畳付のみ露胎とする。6・7 は白磁合子の蓋と身である。11 ～ 22 は土師器小皿である。全て底部は糸切り調整される。

8 ～ 10 は土師器坏である。これら坏もすべて糸切りされるものである。

SK-197（Fig.230）

D 区№5 第 1 面で検出した土坑である。平面形は長辺 1.80 m × 短辺 1.00 mの長方形を呈する。遺構の主軸は N-38°-W 方向を採るもので、検出面から土坑底面までは 30cm前後の深さを測る。Fig.231 に出土遺物を示した。1 ～ 3 は土師器小皿である。いずれも底部は糸切りされる。4・5 は土師器坏である。底部は糸切りされる。

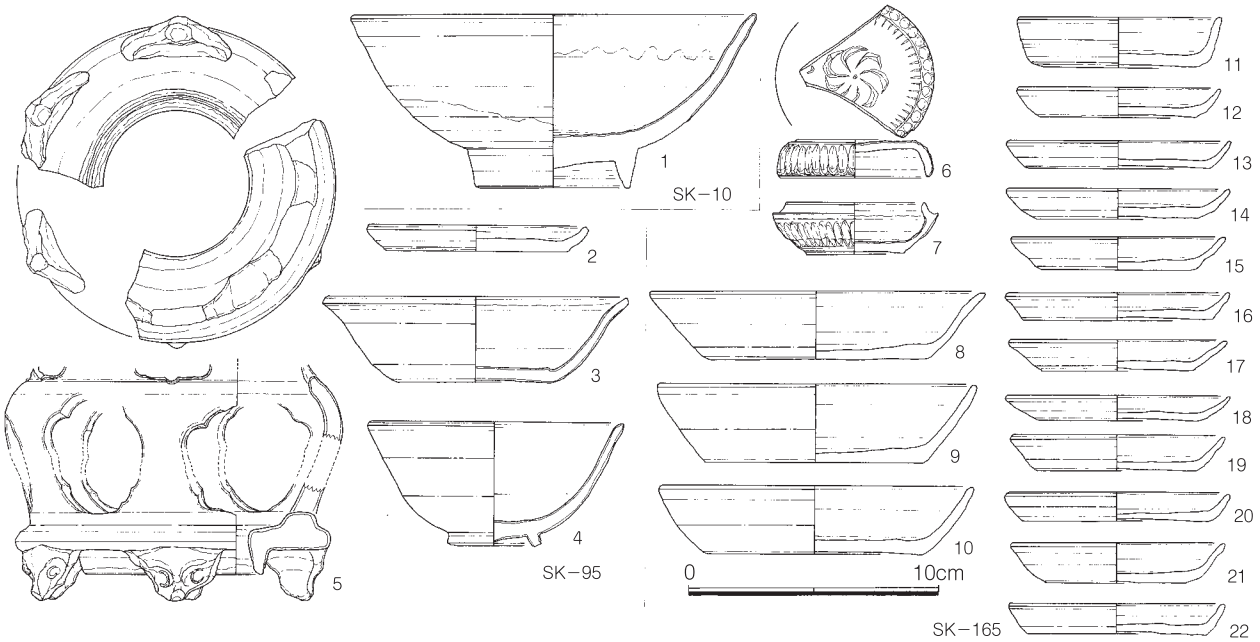


Fig.229　D区 SK010・095・165 出土遺物実測図（S=1/3）

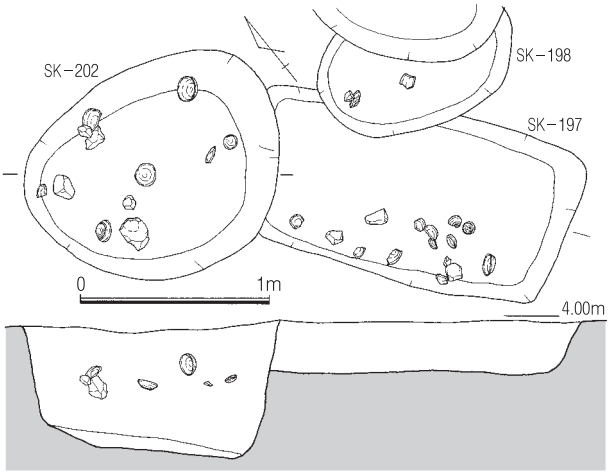


Fig.230　D区 SK-197・202 遺構実測図(S=1/40)

SK-202（Fig.230）

D区№5第1面で検出した土坑である。SK-197を切るように掘削された土坑で平面形は楕円形を呈する。検出面の標高は3.95 m前後で、遺構は70cmの深さを測る。

出土遺物をFig.231に示した。6は土師器小皿である。底部は糸切り調整される。7～11は土師器坏である。いずれも糸切り調整された底部を持つ。7は口縁部全周に煤が付着しており灯明皿として使用されている。

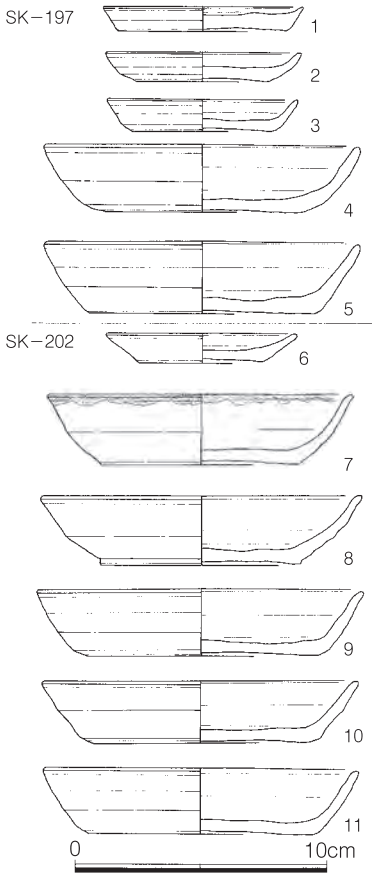


Fig.231　D区 SK-197・202 出土遺物実測図（S=1/3）

SK-229（Fig.232）

D区№5第1面で検出した方形土坑である。遺構東側は多数の土坑が切り合うため、遺構の正確な平面形は把握できないが、検出した範囲から方形土坑であることがわかる。遺構検出面の標高は3.90 m前後で、検出面から遺構底面までは80cmの深さを測る。検出された範囲から一辺3.50 m程度の半地下式倉庫の下部構造部の類であると考えられる。遺構の主軸はN-13°-Wかこれに直交する方向

である。土坑の底面はほぼ平坦となり、埋土は黒褐色粘質土と暗褐色土が交互に堆積する。上層部からは土師器坏が出土するが、出土状況からある程度埋没が進んだ段階での投棄であることが分かる。これらの土師器廃棄に混じってU字形に曲げられた刀子が出土した（Ph.231・Fig.234 下段）。

出土遺物を Fig.233・Fig.234 に示した。

1 ～ 7・9・10 は土師器小皿である。底部は全て糸切り調整されるもので、口径が 7.0cmと 9.0cmの二群に分けられる。8 は土師器高台付皿である。糸切りされた小皿に高台を貼り付ける。

11 ～ 27・29 ～ 34 は土師器坏である。底部は糸切り調整される坏のみが出土する。34 は口径 16.0 cmを測り、身が深いもので底部には板目圧痕が残る。色調は褐色を呈する。

28 は白磁平底皿である。体部下半まで施釉し以下を露胎とする。35 は白磁口禿皿である。

36 は龍泉窯系青磁の鉢である。外器面には片切彫りによる鎬蓮弁文を施す。釉調は暗オリーブ色を呈する。Fig.234-2 は刀子である。U 字形に曲げられた刀子で儀礼に用いられたものか。出土遺物

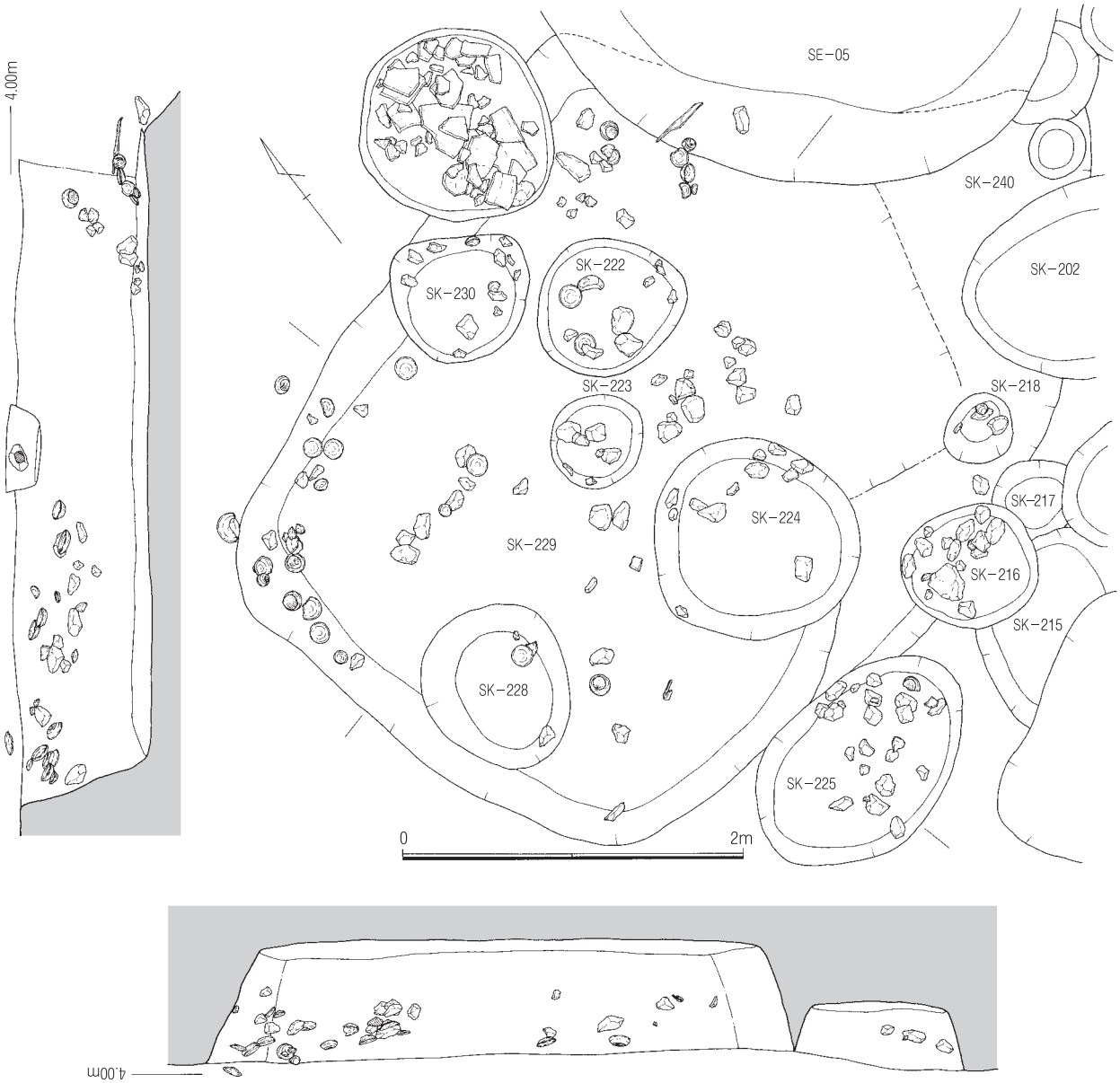


Fig.232　D区 SK-224・225・229・240 遺構実測図（S=1/40）

より遺構の時期は、14 世紀前半の年代が考えられる。

SK-240（Fig.232）

D 区№5 第 1 面で検出した土坑である。SK-229 に先行する土坑で、SK-229 底面付近で異なる主軸方向を採る方形土坑が検出されたため SK-240 として掘り下げ・遺物の取り上げを行った。遺構の主軸は N-20°-E または直交する方向を採る。遺構の大部分を近世瓦井戸 SE-05 等に切られるため正確な平面形は把握できていない。遺構埋土は暗褐色粘質土が主体で部分的に褐色砂層が薄く堆積する。埋土中から土師器・刀子・巴紋の軒平瓦などの遺物が出土した。

出土遺物を Fig.233・Fig.234 に示した。

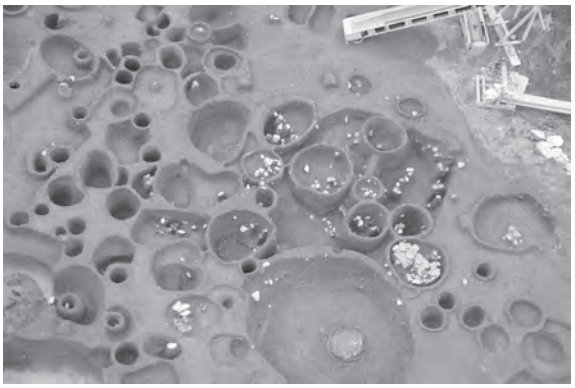
37 は京都系土師器へそ皿である。手捏ねで成形されるもので、色調は灰白色を呈する。

38・39 は土師器小皿である。底部はいずれも糸切りされる。40 ～ 58 は土師器坏である。口径・器形から数グループに分けられるが全て底部は糸切り調整されるものである。平均口径からは 12.5㎝、11.0㎝、16.0㎝の三グループに分けられる。器形も 44・58 のように直線的に開く体部を持つものと 53 のように身が深く体部の丸みがつよいものとに分けられる。53 ～ 56 は他の土師器坏と異なり色調は白色で、内面見込みに菊花文のスタンプが見られる。これらは混在して出土しており用途や産地の差異を現しているものであろう。59 は土師質の土製品である。支脚か。底部は糸切りで体部はナデ調整とヘラ磨きで調整されている。色調は褐色で焼成は良好である。60 は白磁平底皿である。

61 は瓦質土器壺口縁部片である。外器面には自然釉がかかり、ヘラ状工具突端部により刻まれた条痕が全周する。62 は須恵質土器壺である。頸部下に並行する叩き目が残る。

63 は古瀬戸陶器の柄付片口である。ほぼ完形で出土した。底部は糸切り調整され、釉調は乳緑灰

Ph.229　D 区 SK-229 遺物出土状況



Ph.230　D 区 SK-229 全景

Ph.231　D 区 SK-229 遺物出土状況・刀子

Ph.232　D 区 SK-240 遺物出土状況

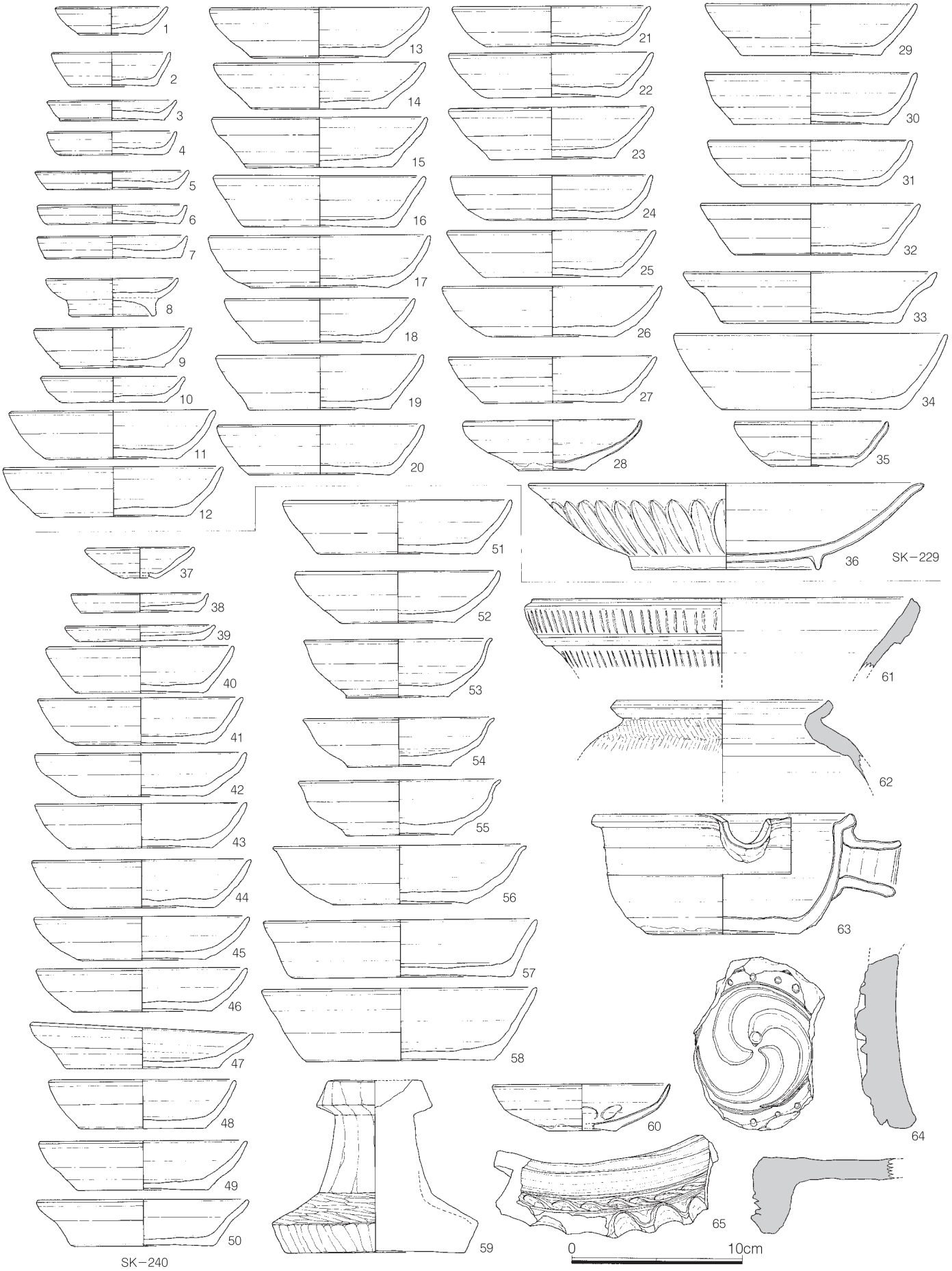


Fig.233　D区 SK-229・240 出土遺物実測図 1（S=1/3）

色を呈する。露胎部分の胎土は淡赤褐色となる。64 は巴紋の軒丸瓦である。非常に精緻に造形された軒丸瓦である。燻す前の段階であるのか、色調は褐色を呈する。65 は押圧波状文の軒平瓦である。側面は分割時の切断痕が残り平坦面となる。

Fig.234-1 は刀子である。鋒が大きく上方へ反るもので、廃棄にあたって人為的になされたものか不明確である。この遺構からは京都系土師器をはじめ多くの交易によってもたらされた遺物が出土した。この雑多さは「博多」が拠点的な貿易都市であったことを物語るものである。

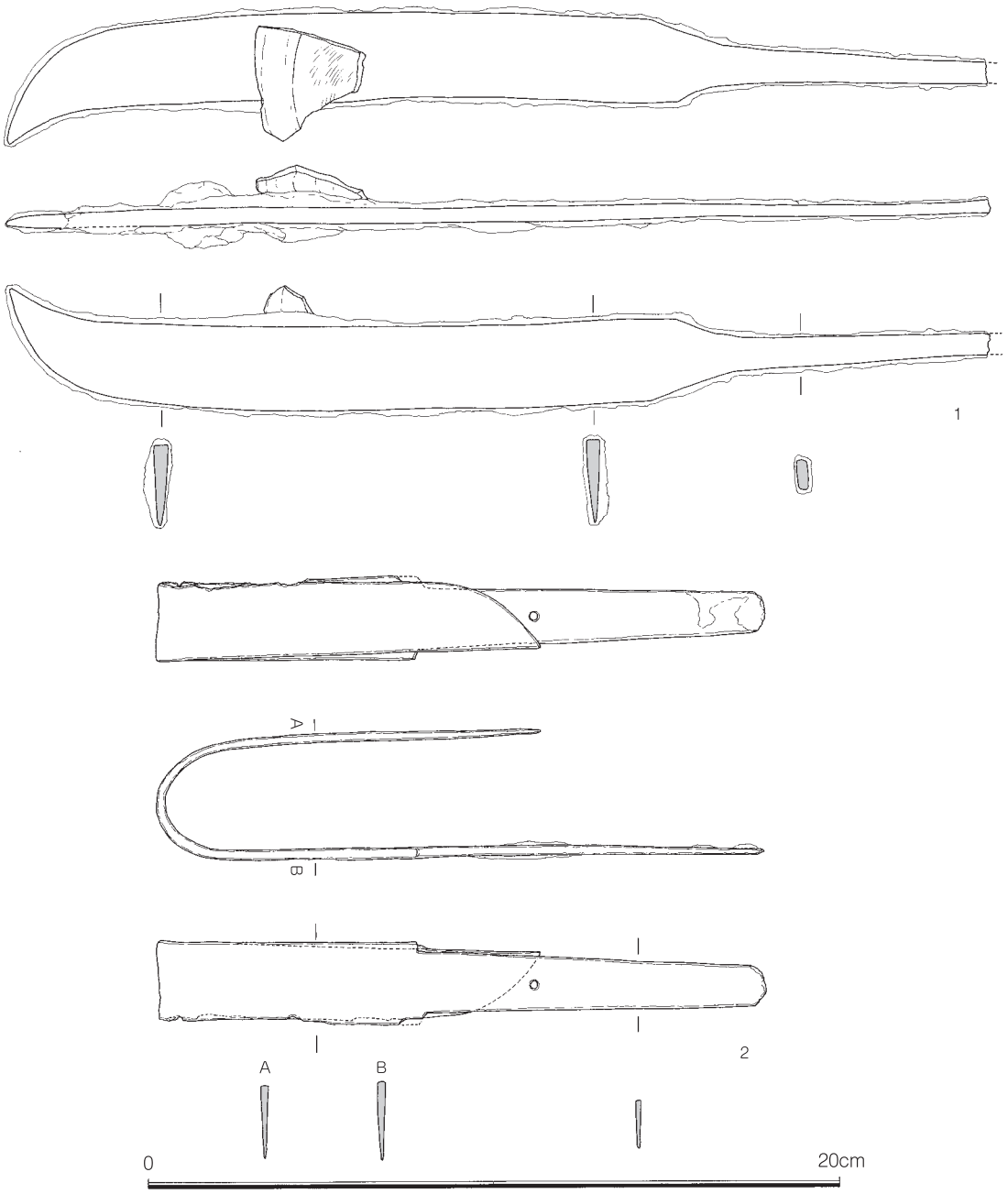


Fig.234　D区 SK-229・240 出土遺物実測図２（S=1/2）

SK-174（Fig.235）

D 区№4 第 1 面で検出した土師器廃棄土坑である。土坑南側を SK-173 とした方形土坑に切られる。長軸 1.10 mの楕円形土坑で検出面から 15cm程度の深さを測る。埋土中に土師器坏が廃棄される。

出土遺物を Fig.236 に示した。1 は京都系土師器へそ皿である。2・3 は糸切りの土師器小皿である。4 ～ 7 は土師器坏である。底部は全て糸切り調整される。14 世紀前半代の遺構である。

SK-226（Fig.235）

D 区№第 1 面で検出した円形土坑である。直径 60cmを測る円形土坑で、検出面から土坑底面までは 40cmの深さを測る。土坑内には土師器小皿・坏が十数個体廃棄される。小皿・坏ともに底部は全て糸切り調整されるものである。

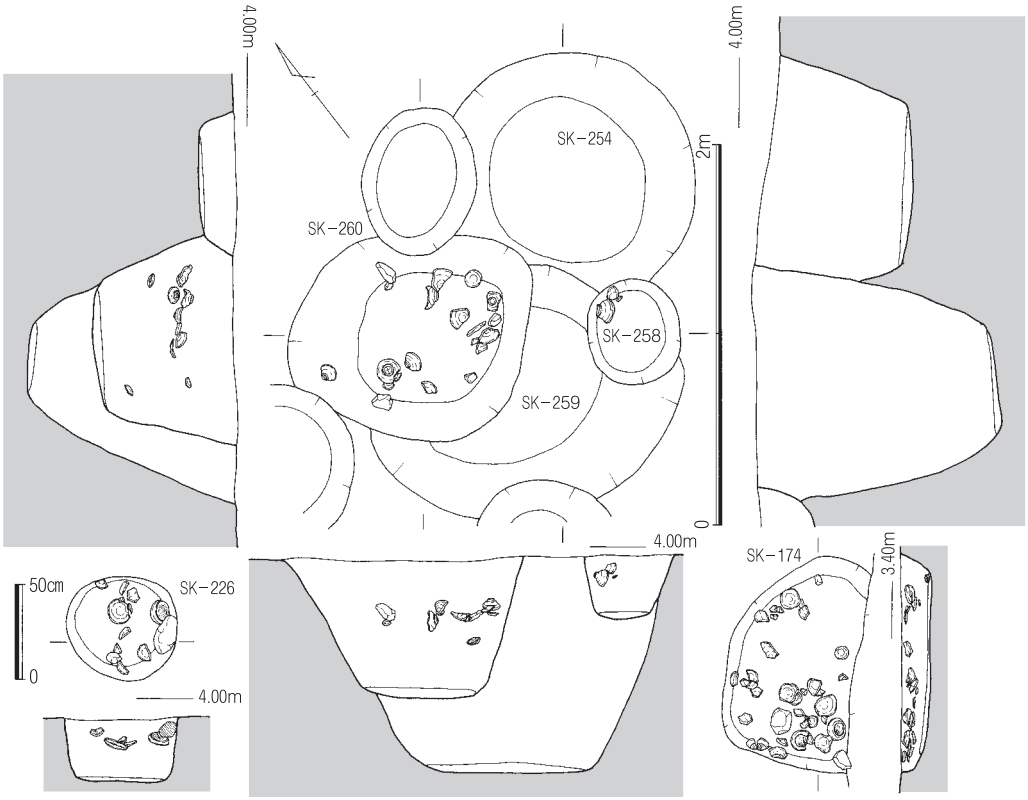


Fig.235　D区 SK-174・226・254・258 ～ 260 遺構実測図(S=1/40)

Ph.233　D 区 SK-260 検出状況

Ph.234　D 区 SK-260 遺物出土状況

SK-254（Fig.235）

D 区№6 第 1 面で検出した円形土坑である。SK-259・SK260 に切られる土坑で直径 1.30 mを測る。検出面から土坑底面までは 80cmの深さを測る。埋土は暗褐色砂質土で土師器・白磁等の遺物が出土した。

SK-258（Fig.235）

D 区№6 第 1 面で検出した直径 50cm前後の円形土坑である。30cm程度の深さで、埋土は焼土を含む暗褐色土である。上層部から白磁碗等が出土した。出土遺物を Fig.236 に示した。8 は白磁鉄絵碗である。9 は白磁平底皿である。10・11 は白磁玉縁碗である。

SK-259（Fig.235）

D 区№6 第 1 面で検出した円形土坑である。SK-260・SK-258 に切られる楕円形土坑で、検出面から底面までは 1.20 mの深さを測る。埋土から白磁碗などが出土した。

Fig.236 に出土遺物を示した。12 は白磁碗である。高台中程まで施釉され、以下を露胎とする。

SK-260（Fig.235）

D 区№6 第 1 面で検出した略方形の平面形を持つ土坑である。一辺 1.0 ～ 1.2 m程度の廃棄土坑で、検出面の標高は 3.90 m前後を測る。検出面から土坑底面までは 70cm前後の深さを測る。埋土は炭化物を多く含む暗褐色砂質土で土師器・白磁・瓦器等がまとまって出土した。

Fig.236 に出土遺物を示した。13 は白磁浅碗である。体部は口縁端部で外反する。14 は白磁玉縁碗である。玉縁は小さく、端部でやや内傾する。15 は白磁碗である。高台中程まで施釉される。釉調は乳白色を呈する。16 はヘラ切りの土師器坏である。これらの出土遺物よりこの白磁廃棄遺構は 12 世紀前半代の年代が考えられる。

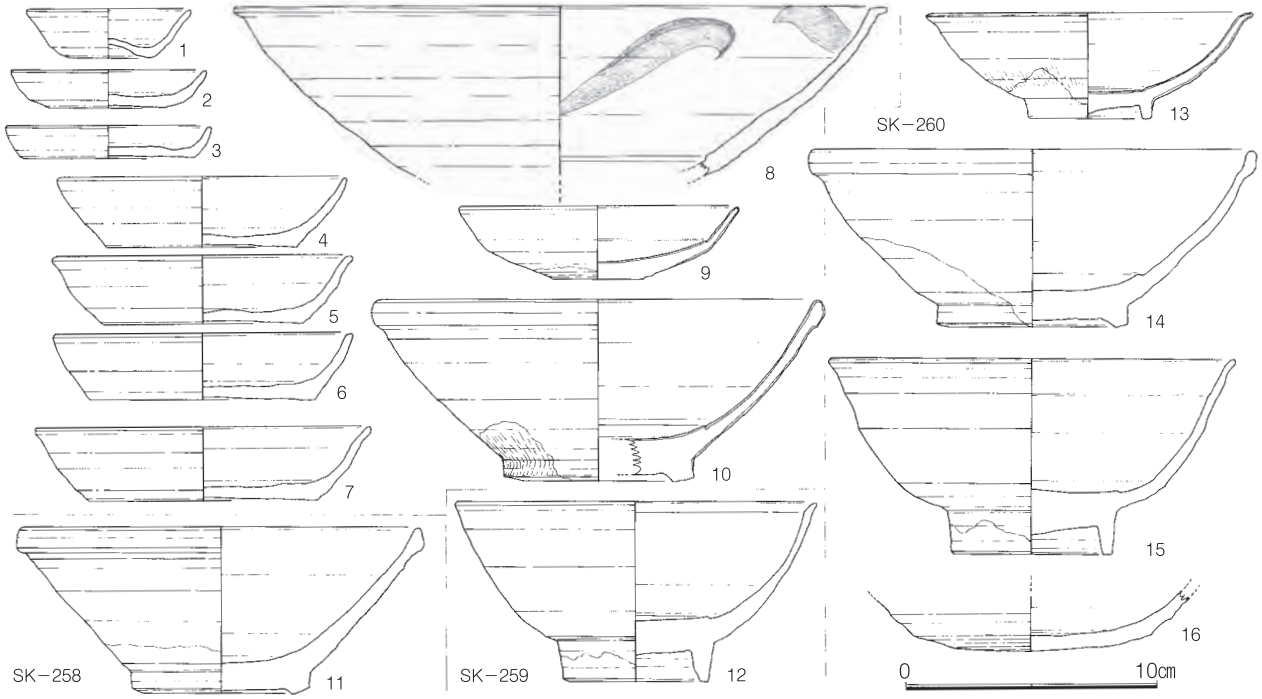


Fig.236　D区 SK-258・259・260 出土遺物実測図（S=1/3）

SK-283（Fig.237）

D区№8第1面で検出した土坑である。長辺1.3 m×短辺1.0 m程度の方形土坑で、検出面の標高は4.00 mである。土坑は深さ20㎝程度の深さで土師器・瓦器椀などの遺物が出土する。

出土遺物をFig.239に示した。1は土師器小皿である。底部は糸切りで、色調は橙色を呈する。

SK-284（Fig.237）

SK-283に切られる土坑で、長軸1.0 m程度の楕円形土坑である。土師器坏・白磁玉縁碗などの遺物が出土した。

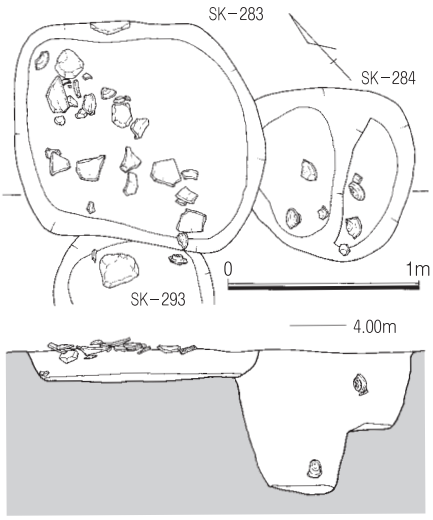


Fig.237　D区SK-283･284遺構実測図（S=1/40）

SK-342（Fig.238）

D区№10第1面で検出した円形の廃棄土坑である。東側を大きく攪乱され、西側半分のみを調査した。残存部分より直径1 m程度の円形土坑であることがわかる。検出面の標高は4.00 m前後で、検出面から土坑底面までは1.30 m前後を測る。土坑底面は基盤層の砂丘砂層面に達している。埋土は下層より暗褐色砂・黒褐色砂・暗褐色砂質土に大きく分けられる。暗褐色砂質土は焼土・炭化物を多く含み土師器・白磁等が下部大量に廃棄される。土坑の底面からは馬頭骨が出土した。出土状況から埋葬ではなく、廃棄されたものであろう。

Fig.239に出土遺物を示した。2～5は白磁碗である。2は口縁端部で内傾する器形で、体部下半まで施釉される。3はやや小振りな碗で、下半部で屈曲する体部を持つ。釉調は乳灰白色を呈する。4は直線的に開く体部を持ち、下半部まで施釉し以下を露胎とする。15は白磁合子身である。現福建省の窯で生産されたもので、やや大型の品である。受け部と体部下半を露胎とする。釉調は乳灰白緑色を呈する。これらの出土遺物よりこの廃棄土坑の時期は11世紀末頃の年代と考えられる。

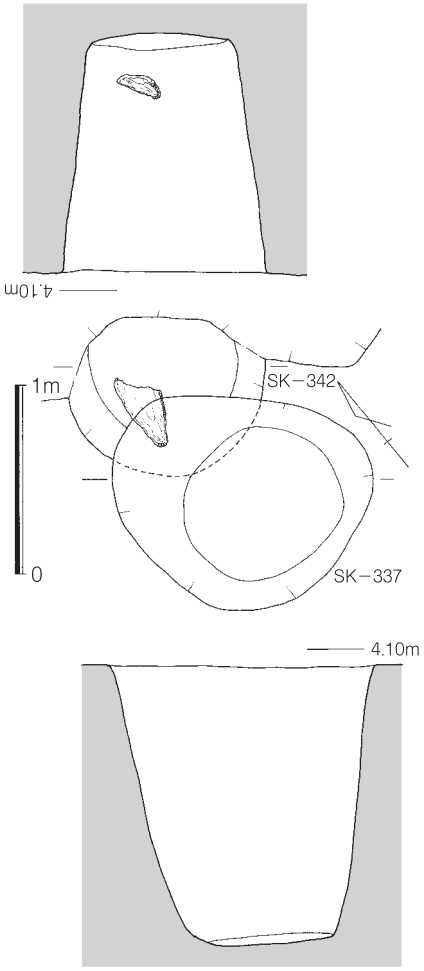


Fig.238　D区SK-337・342遺構実測図（S=1/40）

SK-337（Fig.238）

D区№10第1面で検出した廃棄土坑である。SK-342を切るように掘削される土坑で、検出面から土坑底面までは1.5 mの深さを測る。土坑内からは土師器･白磁･瓦器椀が出土した。

Fig.239に出土遺物を示した。6～8は瓦器椀である。高台断面形はいずれも台形を呈する。6･8は外面に横位のヘラ磨きが施される。内器面は斜格子状のヘラ磨きで調整される。7の外器面は刷毛目調整と指押さえで調整し、内器面はナデ調整で整える。いずれも焼成は良好で、色調は黒灰色～灰褐色を呈する。

これらの出土遺物より、この遺構の時期は12世紀前半代の

年代と考えられる。

SK-339（Fig.95）

D 区№10 第 1 面で検出した円形の廃棄土坑である。直径 90cm程度で検出面から土坑底面までは 50 cm程度の深さを測る。埋土は炭化物・焼土を含む黒褐色土で、埋土上層からは土師器・白磁等の遺物が出土した。

Fig.239 に出土遺物を示した。

9・10 は土師器小皿である。いずれも底部は糸切り調整され、10 の底部には板目圧痕が残る。焼成は良好で、色調は褐色～橙色を呈する。11 は糸切り調整された底部を持つ土師器坏である。体部は中程からやや外反し、色調は淡橙色を呈する。12 はヘラ切り底部の土師器坏である。色調は淡褐色を呈し、ヘラ切り後に板目圧痕が加えられる。13 は白磁平底皿である。14 は東播系須恵器甕である。外器面には並行する叩き目が明瞭に残る。色調は黒灰色を呈する。

これらの出土遺物より遺構の時期は、12 世紀前半代の年代と考えられる。

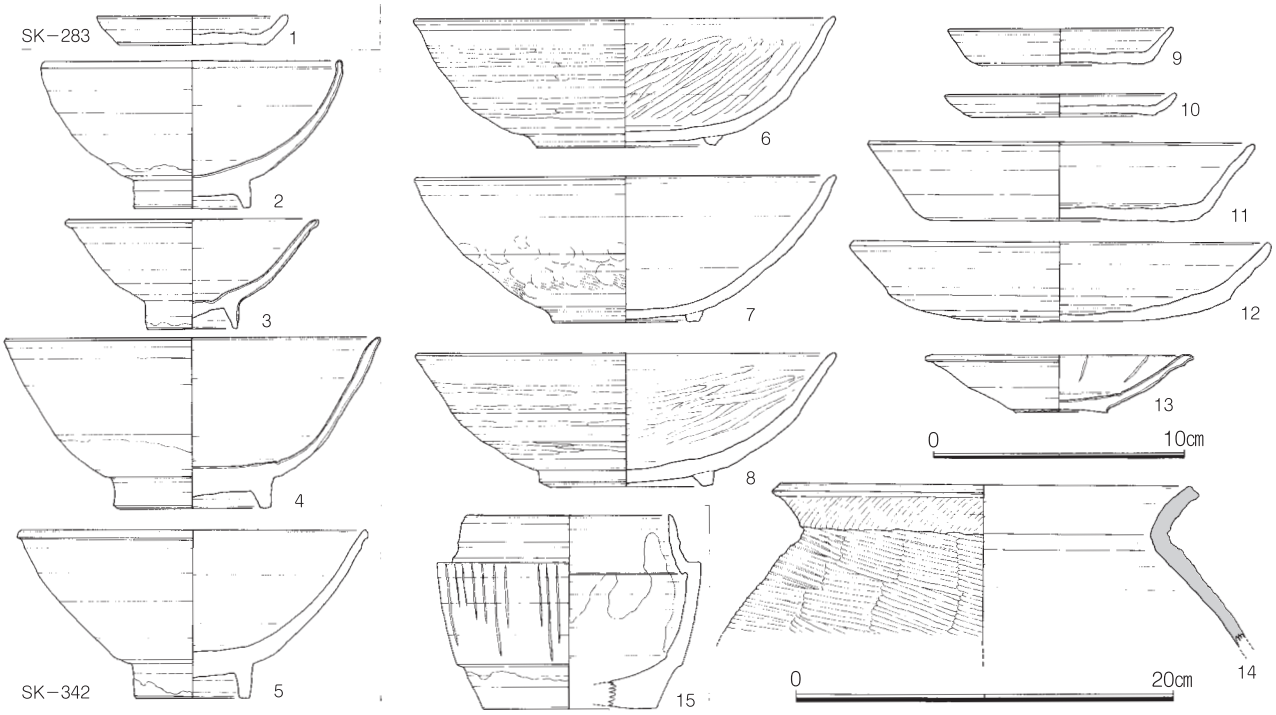
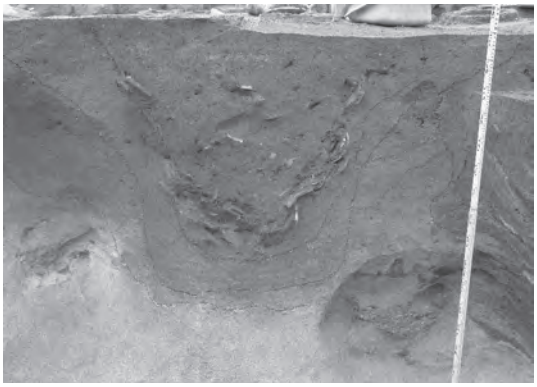


Fig.239　D 区 SK-283・337・342・339 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）



Ph.235　D 区 SK-342 土層断面

Ph.236　D 区 SK-342 馬頭骨出土状況

SK-402（Fig.240）

D 区№4 第 1 面で検出した円形の廃棄土坑である。直径 1.50 m程度の円形土坑で検出面から土坑底面では 60㎝前後の深さを測る。土坑底面は褐色砂層に達している。埋土は炭化物を多く含む暗褐色砂質土で土師器・白磁等が出土した。

出土遺物を Fig.242 に示した。1・2 は土師器小皿である。3 は土師器坏である。1・3 はヘラ切りされる底部を持つ。

Ph.237　D 区 SK-402 完掘状況

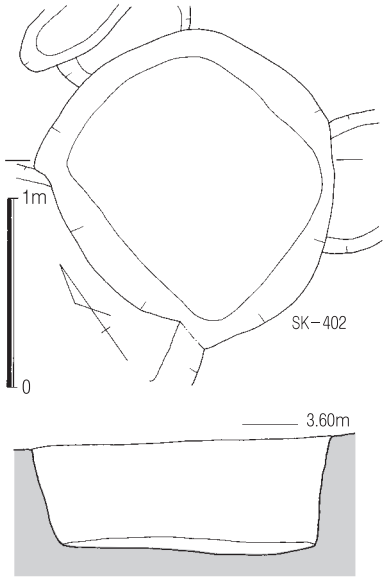


Fig.240　D区 SK-402 遺構実測図
（S=1/40）

SK-404（Fig.95）

D 区№3 第 1 面で検出した土師器廃棄遺構である。精査してみたが、遺構としての平面形は把握できなかった。廃棄位置としては SD-28 と SK-229 の延長部分であり、一連の廃棄行為の所産である可能性が考えられる。

出土遺物を Fig.242 に示した。4 ～ 9 は土師器小皿である。底部は全て糸切り調整される。焼成は良好で、色調は褐色～橙色を呈する。10 ～ 17 は土師器坏である。小皿と同様に底部は全て糸切り調整され、板目圧痕が残るものもある。焼成は良好で、色調は褐色～橙色を呈する。

SK-405（Fig.241）

D 区№3 第 2 面で検出した円形廃棄土坑である。SD-28 に切られる遺構で、直径 1.80 m を測る。遺構埋土は炭化物を多く含む黒褐色砂質土で、埋土から土師器・白磁・中国陶器などの遺物が出土した。出土遺物を Fig.242 に示した。

18 ～ 20 は土師器小皿である。底部は全て糸切り調整されるもので、18 の底部には板目圧痕が残る。焼成は良好で、

Ph.238　D 区 SK-405 検出状況

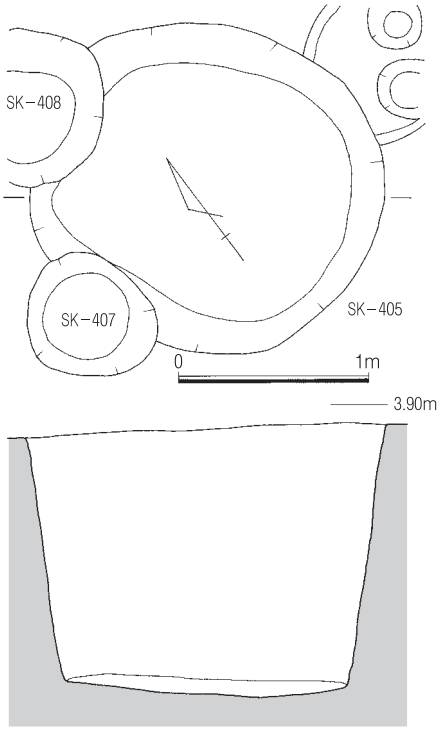


Fig.241　D区 SK-405 遺構実測図
（S=1/40）

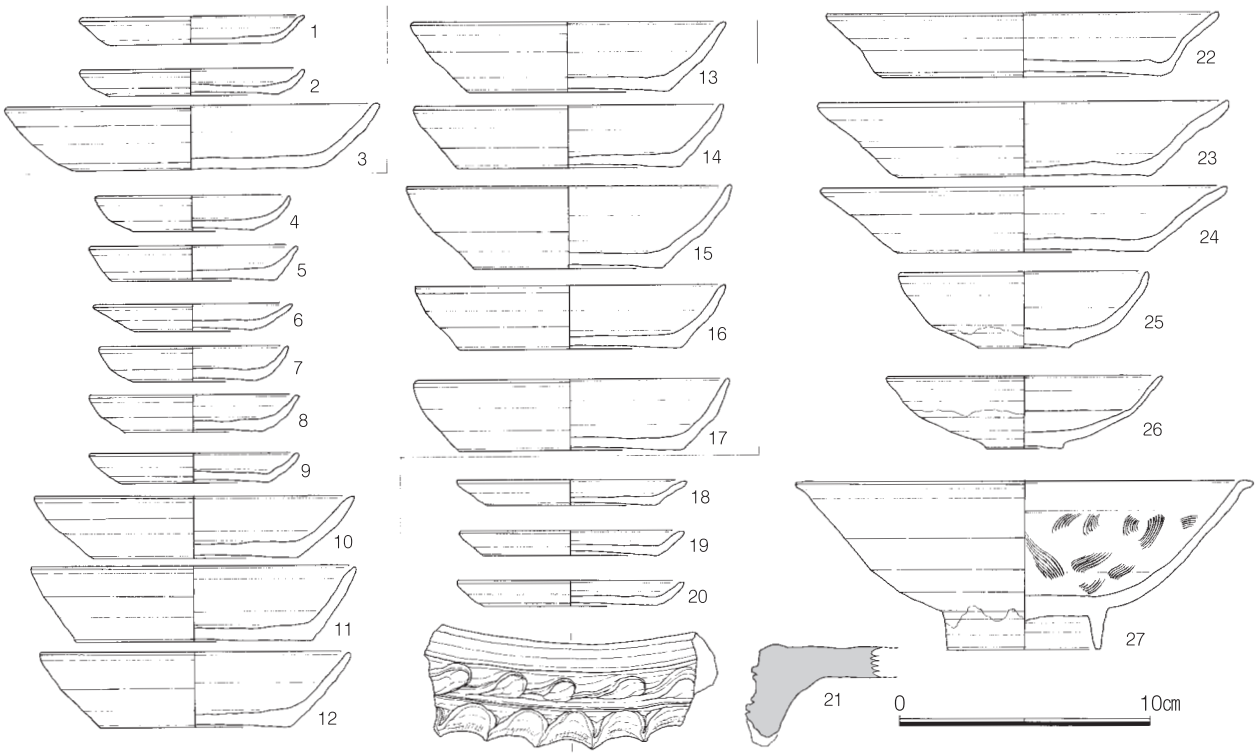


Fig.242　D区 SK-402・404・405 出土遺物実測図（S=1/3）

色調は褐色を呈する。22 ～ 24 は土師器坏である。底部は糸切り調整され、板目圧痕が残る。25･26 は白磁平底皿である。27 は白磁碗である。内器面には櫛描文が施される。

21 は押圧波状文の軒平瓦である。側面は分割時の切断面となる。出土遺物より遺構の時期は 12 世紀中頃の年代と考えられる。

SK-421（Fig.243）

D 区№1 第 2 面で検出した円形廃棄土坑である。掘り下げは第 3 面で行った。SD-28 に切られる遺構で、直径 1.60 m を測り、第 3 面検出面から土坑底面までは 60㎝程度の深さを測る。遺構埋土は炭化物を多く含む黒褐色砂質土で中層には鉄分沈着が観察できた。埋土から土師器・白磁・中国陶器などの遺物が出土した。

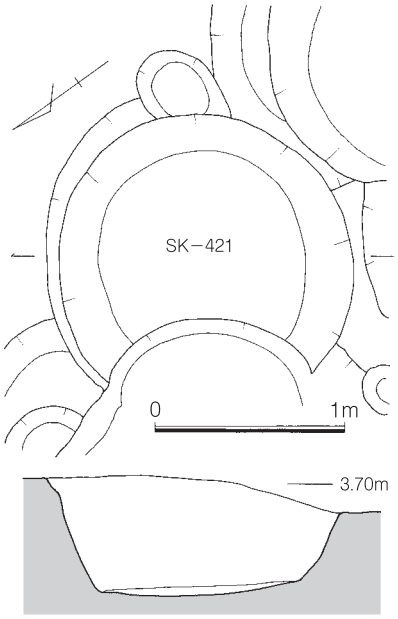


Fig.243　D区 SK-241 遺構実測図（S=1/40）

Ph.239　D 区 SK-421 検出状況

Fig.248 に出土遺物を示した。

1 は白磁平底皿である。体部下半まで施釉され、以下を露胎とする。胎土は灰白色で精緻なもので、釉調は乳灰白色を呈する。遺構の時期は 12 世紀前半代の年代と考えられる。

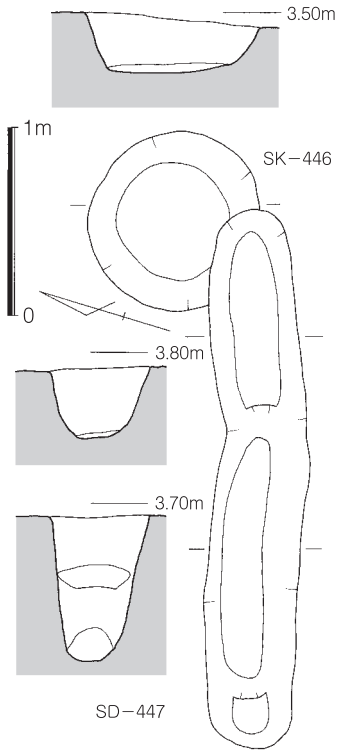


Fig.244　D区 SK-446・SD-447 遺構実測図(S=1/40)

SK-446（Fig.244）

D区№4第2面で検出した円形土坑である。直径は1.0 m程度で検出面から土坑底面までは30cm前後を測る。SD-447に切られる土坑で、埋土は上層に黒色粘質土、下層に暗黄褐色砂質土が堆積する。埋土中から土師器坏等の遺物が出土した。

Fig.248に出土遺物を示した。2は土師器坏である。底部は糸切り調整される坏で、板目圧痕が残る。口径15.4cmを測る。

SD-447（Fig.244）

D区№4第2面で検出した溝遺構で、SK-446とSC-719を切るように掘削される。上面の幅は50cm程度で、全長2.80 m分を検出した。遺構主軸はN-38°-Eの方向を採り、SD-28下層溝やSK-229として方形土坑とほぼ同一主軸を採る。溝は西側に向かって一段深くなり、検出面からは40～80cmの深さを測る。

出土遺物をFig.248に示した。3～5は土師器坏である。底部はいずれも糸切り調整されるもので、焼成は良好、色調は褐色を呈する。

これらの出土遺物より14世紀前半頃の遺構と考えられる。

SK-449（Fig.245）

D区№4第2面で検出した円形土坑である。直径は1.10 m前後を測り、検出面から土坑底面までは80cmの深さを測る。検出面の標高は3.70 m付近で、遺構面は粗砂を多く含む暗黄褐色土層面である。埋土は暗褐色砂質土で、土師器・白磁等が出土した。

出土遺物をFig.248に示した。6は土師器椀である。高台の断面形は台形で、ヘラ切りされた底部端部に貼り付けられる。内面はナデ調整で整えられている。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

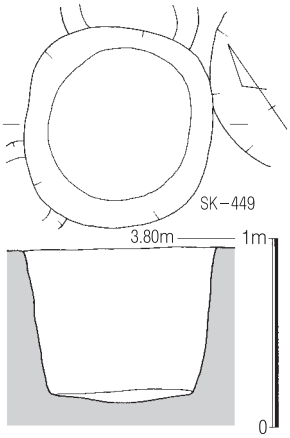


Fig.245　D区 SK-449 遺構実測図(S=1/40)

Ph.240　D区 SD-447 検出状況

Ph.241　D区 SK-446 土層断面

SK-461（Fig.246）

D 区№4 第 2 面で検出した楕円形の廃棄土坑である。長軸 1.30 m × 短軸 1.00 m を測り、検出面の標高は 3.70 m前後で検出面から土坑底面までは 70cmの深さを測る。埋土は暗褐色砂質土で、炭化物・焼土を含み上層部分は固く締まる。埋土からは土師器・白磁にともに須恵器などが出土した。

Fig.248 に出土遺物を示した。

7 は須恵器碗である。高台断面形は台形で、底部端部近くに接合される。色調は灰色を呈する。8 は土師器小皿である。底部は糸切り調整されるもので、色調は褐色を呈する。

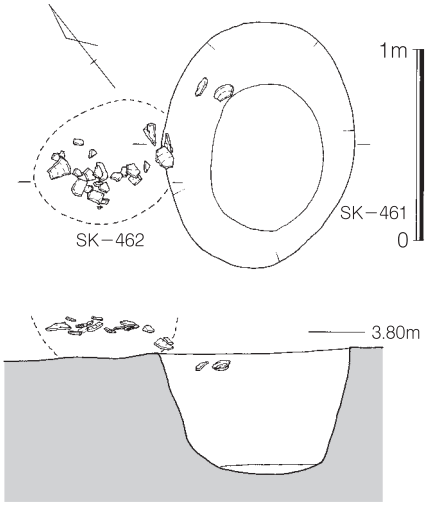


Fig.246　D区 SK-461 遺構実測図（S=1/40）

SK-467（Fig.247）

D 区№3 第 2 面で検出した円形廃棄土坑である。検出面の標高は 3.60 m前後で、検出面から土坑底面までは 40cmの深さを測る。埋土は暗褐色砂質土で、炭化物・焼土を含む。埋土から白磁・土師器が出土する。

Fig.248 に出土遺物を示した。9 は白磁碗である。口径は 15.6cmを測り、体部下半部まで施釉し、以下を露胎とする。釉調は乳灰緑白色を呈する。10･11 は白磁平底皿である。いずれも体部下半まで施釉し、以下を露胎 とする。釉調は乳灰白色を呈する。

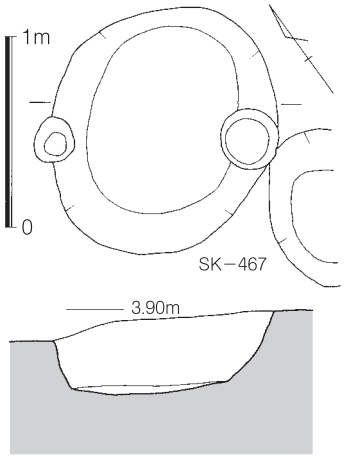


Fig.247　D区 SK-467 遺構実測図（S=1/40）

SK-490（Fig.249）

D 区№3 第 2 面で検出した廃棄土坑である。直径 1.50 m程度の不整円形で、作業通路上で検出したため第 3 面以下で完掘した。検出面の標高は 3.60 m付近で第 2 面検出面から土坑底面までは 1.30 mの深さを測る。遺構埋土は上層は黒褐色砂質土で、下層は暗褐色砂質土となる。埋土からは土師器・白磁等などが出土する。

Fig.250・251 に出土遺物を示した。

Fig.250-1 は須恵質土器壺の底部片である。胎土は緻密で、色調は灰褐色を呈する。

Fig.251-1 は鴟尾または鯱の尾びれ先端部の一部か。表面には茶褐色の化粧土が薄く残る。

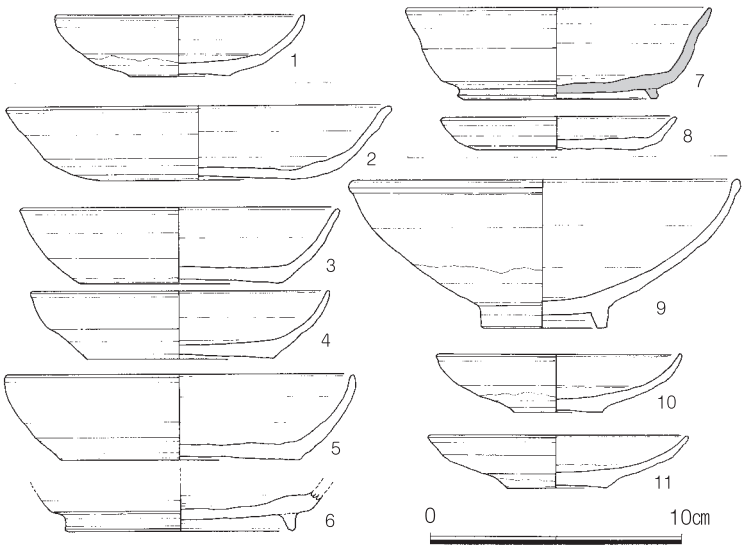


Fig.248　D区 SK-421･446･447･449･461･467 出土遺物実測図（S=1/3）

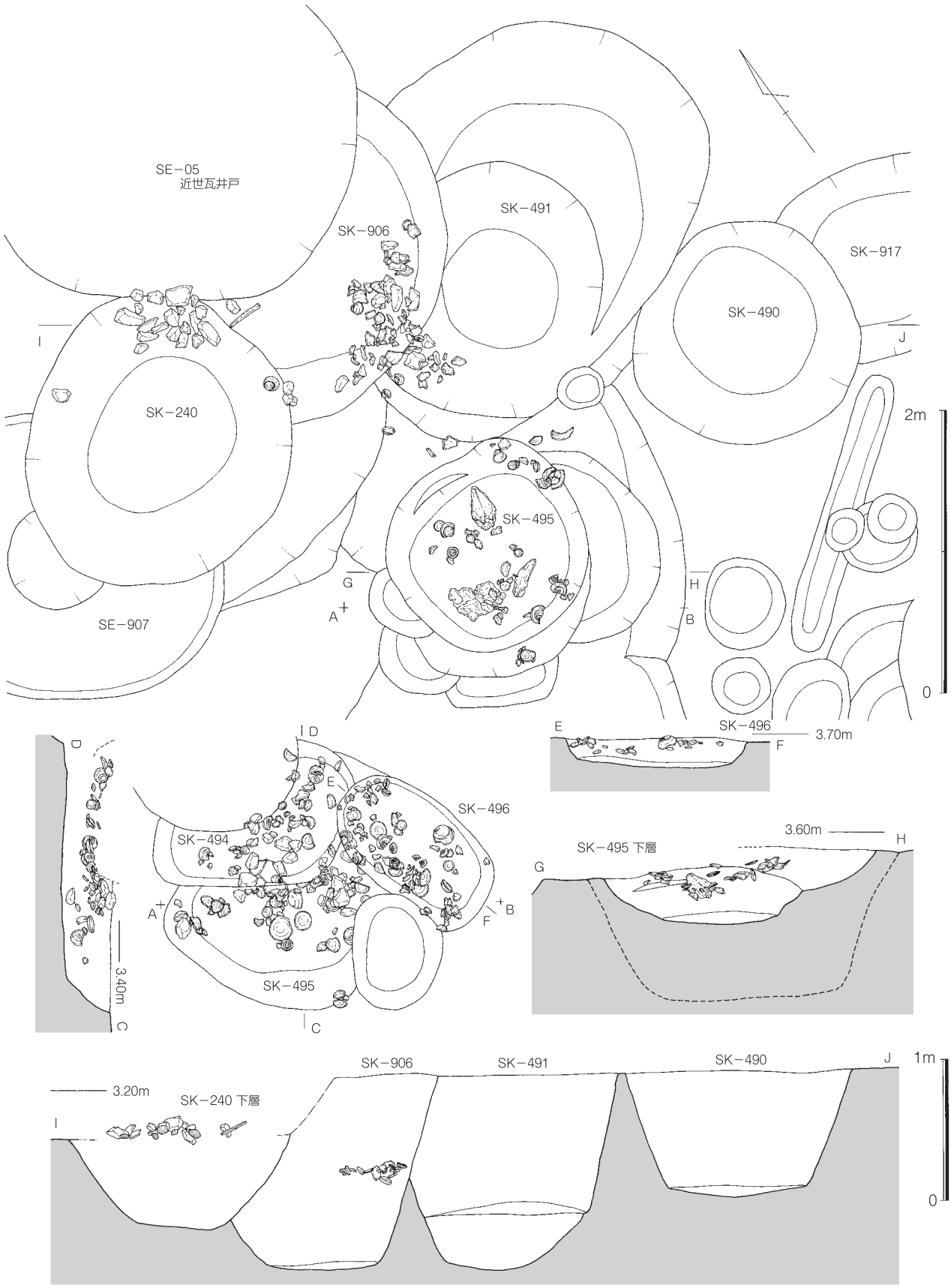


Fig.249　D区 SK-240・490・491・494 ～ 496・906 遺構実測図（S=1/40）

SK-491（Fig.249）

D 区№3 第 2 面で検出した楕円形の廃棄土坑である。第 2 面では遺構東側部分のみが確認されていたため、第 3 面で全体を検出し掘り下げ・完掘を行った。長軸 3.0 m × 短軸 2.2 m を測る。遺構の北側は SK-906 に切られる。土坑底面にはテラス状に段を有し、西側に深くなる。第 3 面検出面から底面までは 1.40 m の深さを測る。

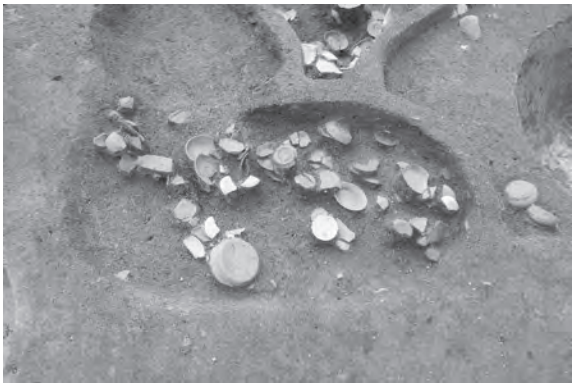
出土遺物を Fig.250 に示した。2 は須恵器坏である。他の遺構からの混入品か。3 ～ 6 は糸切り調整された底部をもつ土師器小皿である。板目圧痕が残る個体が多く、焼成は良好で色調は褐色を呈する。7 ～ 10 は白磁平底皿である。いずれも体部下半まで施釉され、以下を露胎とする。釉調は乳灰白色～乳灰緑白色を呈する。

11・12 は白磁高台付皿である。高台断面形は方形と台形を呈する。12 は内面見込みの周囲の釉を剥ぎ取る。13 は白磁蓋である。口縁部付近の釉を拭き取り、口禿とする。

14 は白磁壺口縁部である。15 は白磁碗である。内器面には櫛描文で装飾を施す。16 は糸切りの土師器坏である。復元口径 22.2㎝を測る大きなもので、焼成は良好で色調は褐色を呈する。

SK-494（Fig.249）

D 区№3 第 2 面で検出した廃棄土坑である。遺構の大半を他の土坑に切られるため、正確な平面形を把握することはできなかった。検出面の標高は 3.50 m付近で、検出面から土坑底面までは 30㎝程度の深さを測る。埋土は粗砂・炭化物を含む黒褐色質土でやや粘性がある。遺物の出土状況から浅い窪み状の段階まで埋没したのちに、投棄されたことが分かる。



Ph.242　D 区 SK-496 検出状況

Ph.243　D 区 SK-495 遺物出土状況

Ph.244　D 区 SK-495 イルカ頭骨出土状況

Ph.245　D 区 SK-906 遺物出土状況

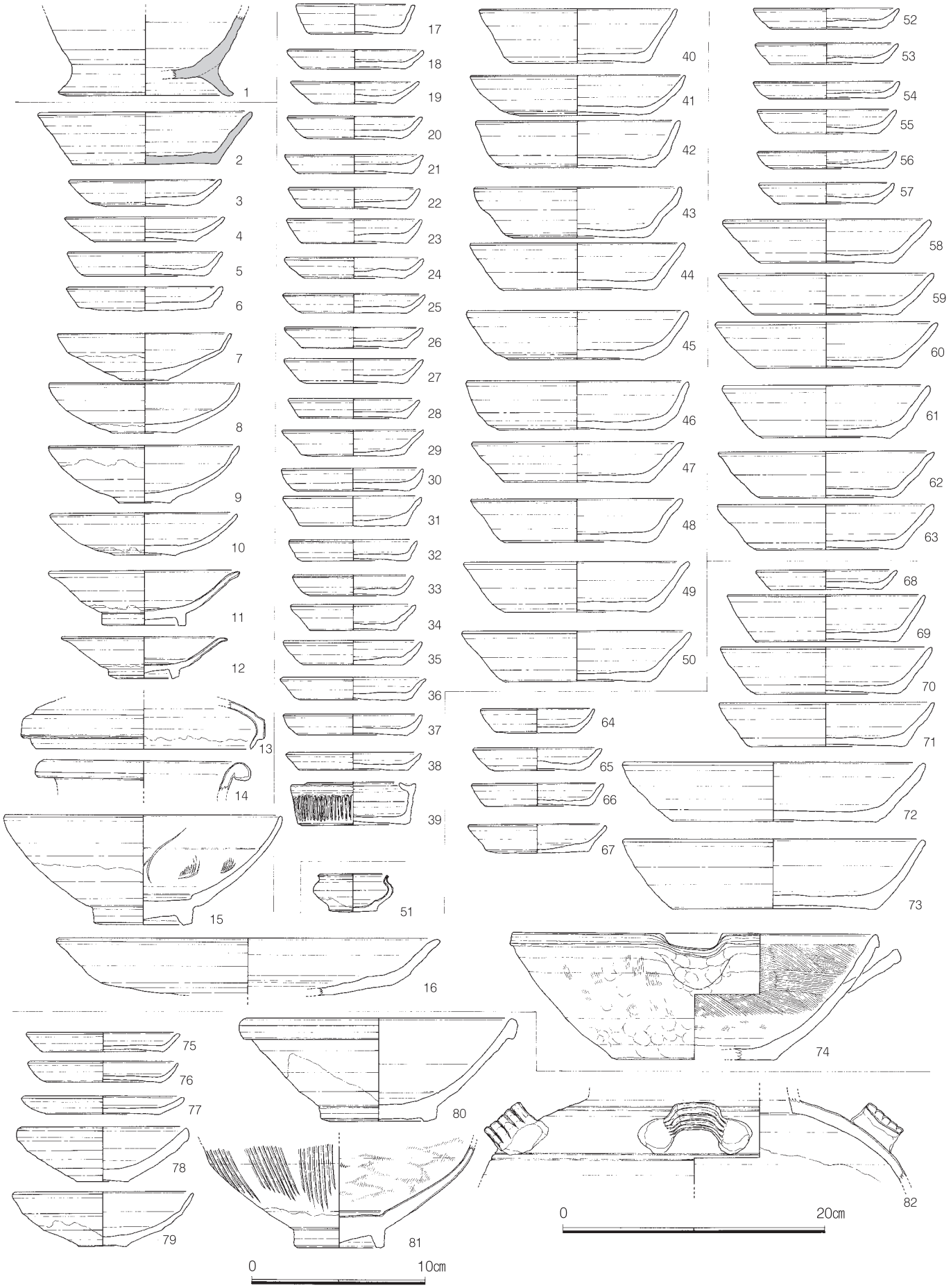


Fig.250　D区 SK-490・491・494～496・906 出土遺物実測図(S=1/3・1/4)

出土遺物をFig.250・251に示した。17～38はいずれも糸切り調整された土師器小皿である。平均口径は8.2㎝である。色調は褐色～橙色を呈する。39は中国褐釉陶器合子身である。40～50は土師器坏である。いずれも底部糸切り調整されるものである。

Fig.251-2は鬼瓦である。C区SE-598とD区SK-752の出土遺物との接合資料である。下顎部の一部と側面のみの残存で全体の形状は判然としないが、背面には丸瓦との接合部であるえぐりが見られ、側面には固定用の釘穴が穿孔されている。下顎部には牙の基底部が残り、立体的な表現がなされるものであったことが分かる。髭の表現が日本様式とは異なるため押圧波状文瓦とともに持ち込まれたものである可能性が考えられる。類例としては第145次調査（第851集）で報告された獅子瓦がある。今回の鬼瓦と同様な髭の表現がなされるもので、押圧波状文の軒平瓦とともに出土したものである。

出土地点は10ｍ程度の範囲に収まり、このような鬼瓦を設置する規模の建物が調査区付近に存在していたことが分かる。

出土遺物よりこの廃棄土坑の時期は12世紀後半の年代と考えられる。

SK-495（Fig.249）

D区№3第2面で検出した廃棄土坑である。検出時には他の土坑に切られ正確な平面形は把握できなかったが、下部は略方形の土坑となる。検出面から土坑底面までは1.10ｍ程度の深さを測る。上面には大量の土師器が廃棄されていた。前述のSK-494とした廃棄遺構も一連の廃棄遺構への投棄行為である可能性がある。

下層はやや粘性のある暗褐色砂質土が堆積しており土師器坏とともにイルカの頭骨が数個体分検出された。イルカの頭骨には明瞭な解体痕は見られないが、食材として供されたものであろう。上顎骨が幅広であることからネズミイルカの一種と考えられる。

出土遺物をFig.250に示した。

68は土師器小皿である。底部は糸切り調整されるもので、焼成は良好。色調は褐色を呈する。

69～73は土師器坏である。いずれの底部も糸切り調整される。

72・73は大型の坏で口径は17.4㎝前後を測る。

出土遺物よりこの廃棄土坑の時期は12世紀中頃の年代と考えられる。

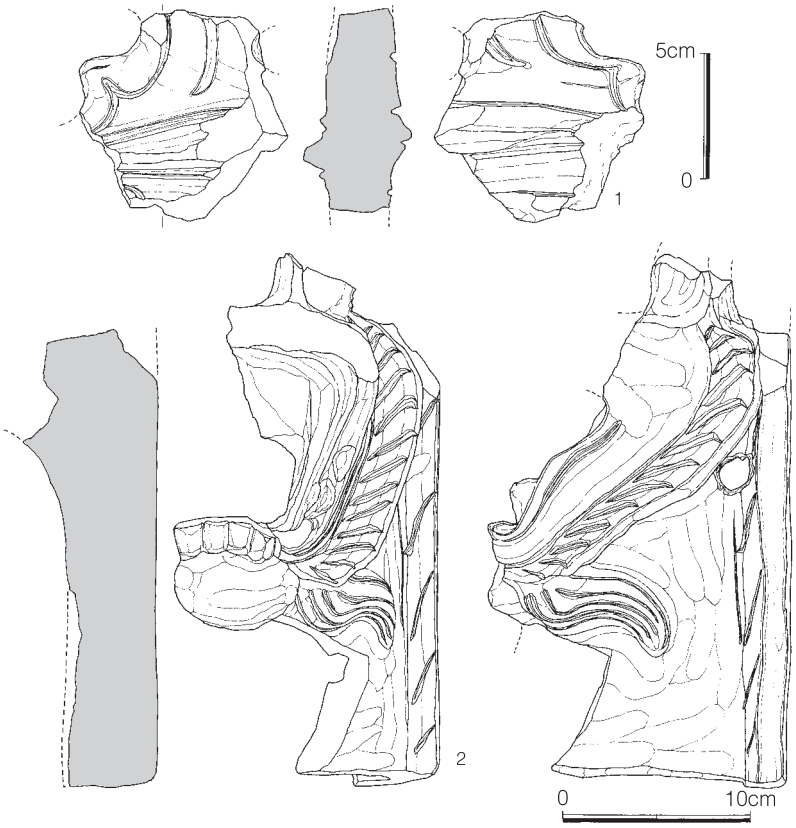


Fig.251　D区SK-490・494出土遺物実測図2（S=1/3・1/4）

SK-496（Fig.249）

D 区№3 第 2 面で検出した長方形の平面形を持つ廃棄土坑である。長軸 1.2 m×短軸 0.7 mを測り、検出面から底面までは 20㎝程度の深さである。埋土は黒褐色粘質土で、土師器が大量に廃棄される。

出土遺物を Fig.250 に示した。

52 ～ 57 は糸切り調整された底部を持つ土師器小皿である。58 ～ 63 は土師器坏である。底部は全て糸切り調整される。いずれも焼成は良好で色調は褐色を呈するものである。

これらの出土遺物より遺構の時期は 14 世紀代前半の年代と考えられる。

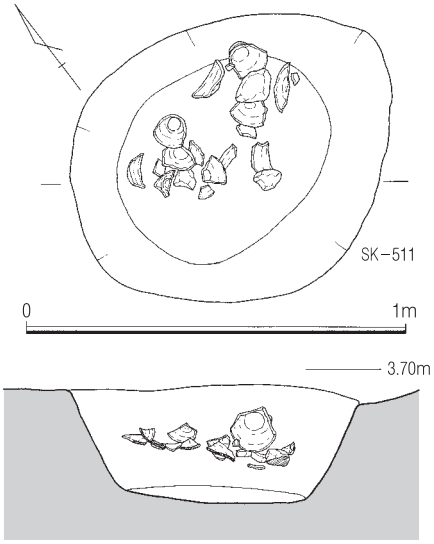


Fig.252　D 区 SK-511 遺構実測図（S=1/20）

SK-906（Fig.249）

D 区№3 第 3 面で検出した廃棄土坑である。遺構の大半を SE-05 に切られ、西側を SK-240 に切られる。検出した南側部分から円形土坑と考えられる。検出面の標高は 3.30 m付近で、検出面から土坑底面までは 1.30 mを測る。

埋土中層付近から土師器・白磁・青磁等の遺物が集中して出土する。

Fig.250 に出土遺物を示した。

75 ～ 77 は土師器小皿である。底部はいずれも糸切り調整される。焼成は良好で色調は褐色を呈する。78 は中国褐釉陶器坏である。79 は白磁平底皿である。体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。80 は白磁玉縁碗である。体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。釉調は乳灰白色を呈する。81 は同安窯系青磁碗である。外面には片切彫りで、内面には櫛描文の装飾を施す。82 は白磁四耳壺である。12 世紀後半の遺構か。

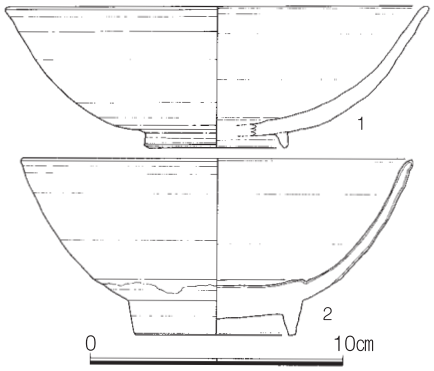


Fig.253　D 区 SK-511 出土遺物実測図（S=1/3）

SK-511（Fig.252）

D 区№5 第 2 面で検出した不整円形の土坑である。長軸 90㎝×短軸 70㎝程度を測る土坑で、検出面の標高は 3.65 m付近である。遺構埋土は粗砂を多く暗褐色砂質土で、炭化物・焼土を含む。埋土中から土師器・白磁等が出土した。

Ph.246　D 区 SK-511 検出状況

Ph.247　D 区遺構掘り下げ状況

Fig.253 に出土遺物を示した。

1 は土師器埦である。体部はナデ調整で整えられ、高台の断面形は方形を呈する。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。2 は白磁碗である。体部下半まで施釉される。釉調は乳灰白色を呈する。

出土遺物より 12 世紀初頭の遺構と考えられる。

SK-529（Fig.254）

D 区№6 第 2 面で検出した廃棄土坑である。検出時には直径 2.2 m前後の不整円形だったが 30㎝程度掘り下げて底面中央に長軸 1.4 m × 短軸 1.0 mの楕円形土坑を確認した。埋土の違いは確認できず一連の遺構として掘り下げた。中央の土坑は、一段目の底面から 1.10 mの深さを測る。埋土は暗褐色砂質土で、底面直上には黒色粘質土が堆積する。

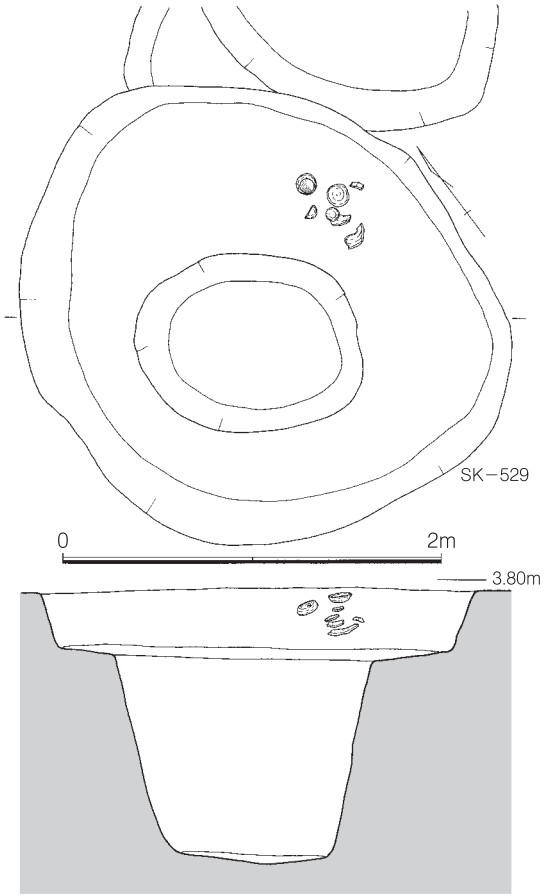


Fig.254　D区 SK-529 遺構実測図（S=1/40）

Fig.256 に出土遺物を示した。1 ～ 4 は土師器小皿である。いずれも糸切り調整された底部を持つ。

5 ～ 9 は土師器坏である。これらの坏も小皿と同様に糸切り調整された底部を持つもので、色調は褐色～橙色を呈する。

これらの出土遺物より SK-529 とした遺構の時期は 12 世紀中頃の年代と考えられる。

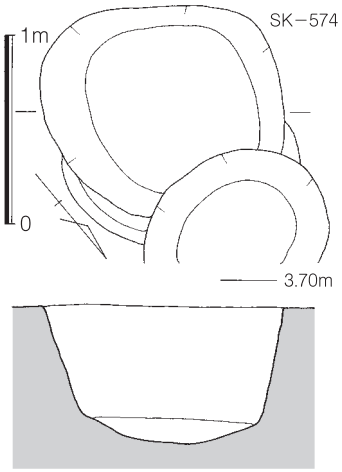


Fig.255　D区 SK-574 遺構実測図（S=1/40）

SK-574（Fig.255）

D 区№7 第 2 面で検出した土坑である。一辺 1.20 m程度の略方形の平面形を持つ土坑で、検出面の標高は 3.50 m付近である。検出した遺構面は粗砂を含む暗灰褐色砂質土層面となる。検出面から底面までの深さは 80㎝程度を測る。遺構埋土は炭化物を多く含む暗褐色砂質土で、上層は固く締まる。埋土中から土師器・白磁等が出土する。

Fig.256 に出土遺物を示した。

10 は白磁碗である。口縁端部でわずかに外反する体部を持ち、外面体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。釉調は乳灰白色を呈する。

12 世紀後半の遺構か。

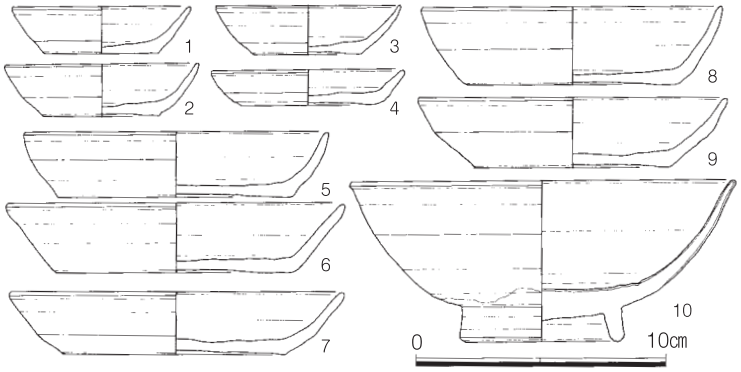


Fig.256　D区 SK-529・574 出土遺物実測図（S=1/3）

SK-538（Fig.96）

D 区№8 第 2 面で検出した土坑である。SK-539 を切る土坑で平面形は長方形を呈する。土坑西側に集中して土師器・瓦器椀などが出土する。

出土遺物を Fig.258 に示した。1 は瓦器椀である。高台断面形は長方形を呈し、外器面には指頭圧痕が残る。内器面は斜格子状のヘラ磨きが施される。胎土は灰色で緻密である。焼成は良好で色調は黒灰色を呈する。

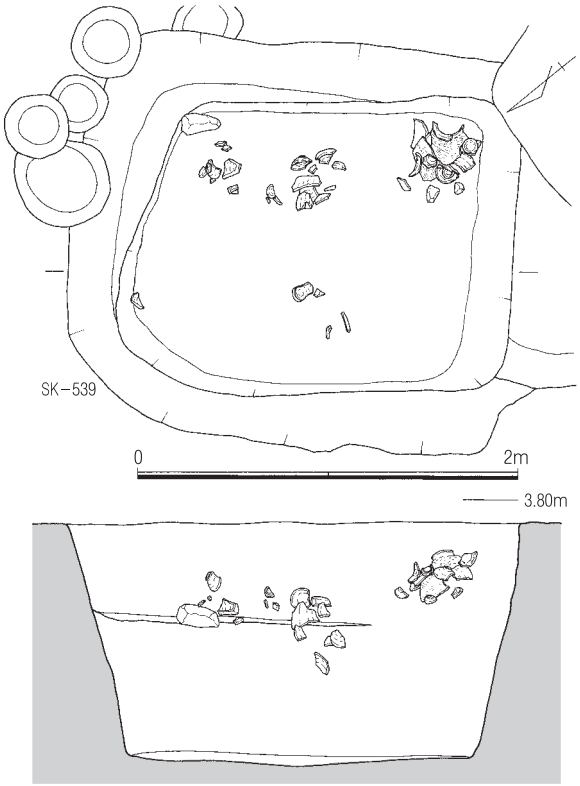


Fig.257　D 区 SK-539 遺構実測図（S=1/40）

SK-539（Fig.257）

D 区№8 第 2 面で検出した長方形の平面形を持つ廃棄土坑である。検出時には周囲に密に他の遺構が存在していたため正確な平面形を捉えられなかったが、第 3 面で長方形土坑であることを確認した。

第 2 面検出時の標高は 3.60 m付近で、検出面から土坑底面までは 1.20 m程度の深さを測る。半地下式の備蓄庫廃絶後に転用した廃棄土坑であろう。遺構主軸は N-38°-E 方向を採る。遺構埋土は粗砂を含む暗褐色砂質土で、下層には暗褐色砂が堆積する。遺構下半部は砂層中に掘り込まれており、壁面を押さえる板・杭などが存在したと考えられるが、土坑底面ではこれらの痕跡は検出できなかった。埋土上部から中層にかけて土師器･白磁･須恵質土器等の遺物が集中して出土した。

Fig.258 に出土遺物を示した。

2 は土師器小皿である。ヘラ切りされた底部に板目圧痕が残る。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。3 ～ 5 は土師器坏である。これらはいずれもヘラ切りされた底部を持つもので、焼成は良好で色調は褐色を呈する。6・7 は白磁平底皿である。8 は中国陶器褐釉小壺である。

9 は白磁碗である。口縁端部はわずかに厚くなり外反する。釉調は乳緑灰白色を呈する。10 は高麗青磁盞托である。受け皿との接合部から剥離する。蓮華座を模したもので、上面には花弁を意匠とした点を配する。釉調はオリーブ色を呈する。

Ph.248　D 区 SK-539 検出状況

Ph.249　D 区 SK-539 遺物出土状況

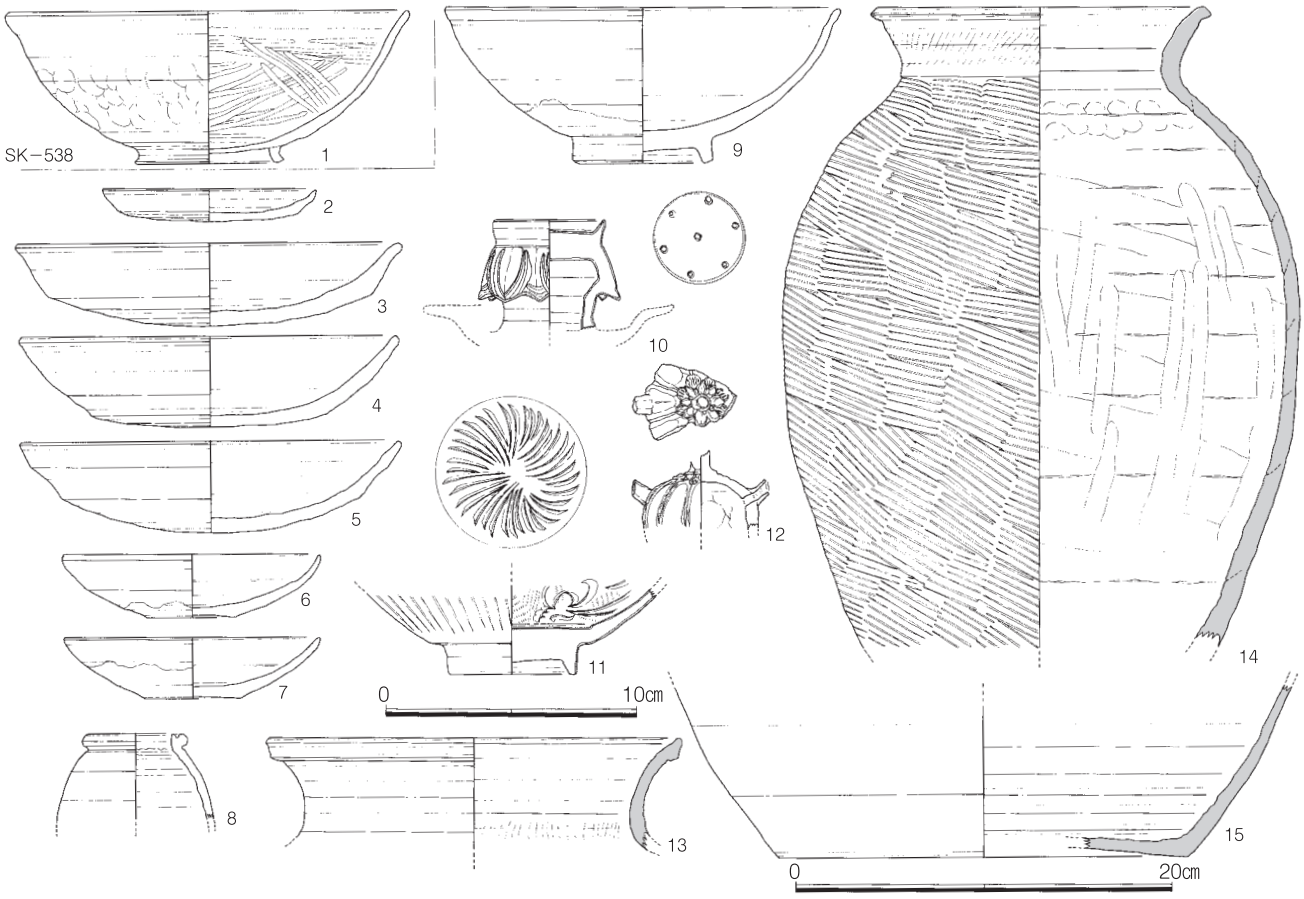


Fig.258　D区 SK−538・539 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

11 は同安窯系青磁碗である。内面見込みに放射状に片切彫りを施す。12 は白磁水注蓋である。天井部には花を模した摘みを付ける。13 は須質土器甕口縁部片である。14 は東播系須恵器甕である。底部を欠損するが、ほぼ全体が残る。外器面は並行する叩き目が明瞭に残る。輸送容器として持ち込まれたものか。15 は須恵質土器平底壺である。これらの出土遺物から 12 世紀初頭の時期が考えられる。

SK-541（Fig.259）

D 区№8 第 2 面で検出した土坑である。平面形は長軸 1.5 m 以上×短軸 1.2 mの楕円形で、検出面の標高は 3.60 m付近である。検出面から土坑底面までは 1.40 m程度の深さを測る。遺構の埋土は暗褐色砂で土師器坏が出土する。

Fig.262 に出土遺物を示した。1 ～ 3 は土師器坏である。1 は糸切り調整された坏で板目圧痕が残る。2・3 はヘラ切りされた坏で、口径は 14.8㎝、17.8㎝と大きく胎土も 1 と異なり緻密である。これらの出土遺物より、遺構の時期は 12 世紀前半と考えられる。

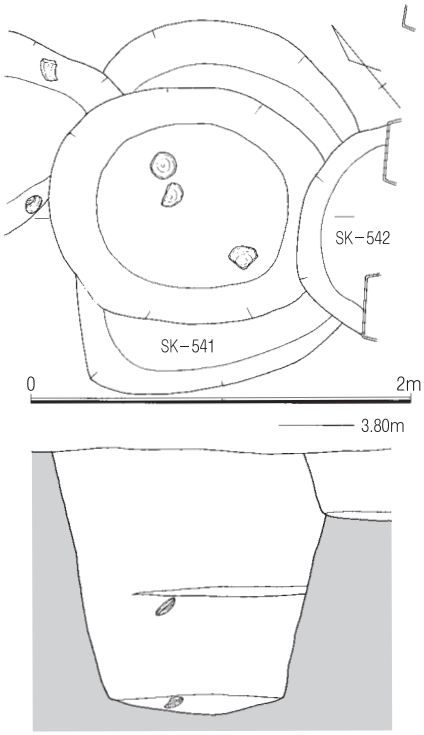


Fig.259　D区 SK−541 遺構実測図（S=1/40）

SK-606（Fig.260）

D 区№9 第 2 面で検出した土坑であるが、遺構の大半を既存建物の地下室により攪乱されているため正確な平面形は把握できない。遺構の北側側面の一部のみを検出したにすぎない。残存部分から方形土坑であった可能性が考えられる。埋土は暗褐色砂で黒色砂が縞状に混入する。遺構下層には黒褐色砂が堆積するが、この層位からの遺物の出土はない。

Ph.250　D 区 SK-606 遺物出土状況

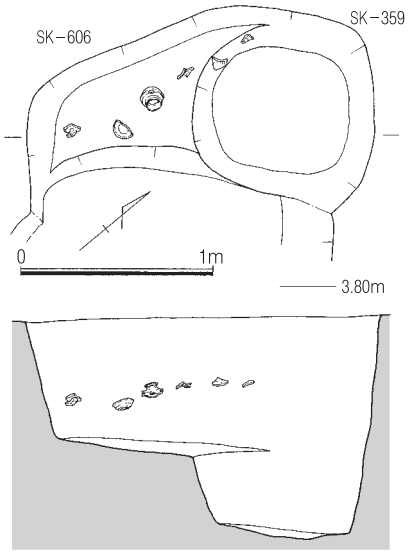


Fig.260　D 区 SK-606 遺構実測図（S=1/40）

出土遺物を Fig.262 に示した。4・5 は瓦器椀である。5 の高台内には「十」字形のヘラ記号が残る。6 は中国陶器四耳壺である。7 は土師器甑底部片である。複口式の底部で、桟基底部が残る。8 は須恵器碗である。高台の断面形は方形で大きく外反する口縁部を持つ。11 は土師器甑把手である。7・8・11 は混入か。時期は 12 世紀前半か。

SK-610（Fig.261）

D 区№3 第 2 面で検出した円形土坑である。直径 1.10 m前後を測り、検出面の標高は 3.40 m付近で遺構は 50㎝の深さを測る。土坑底面から白磁玉

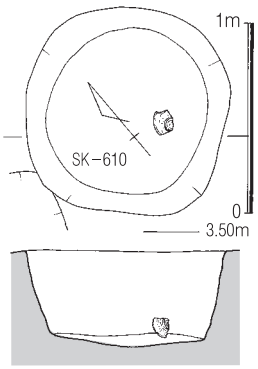


Fig.261　D 区 SK-610 遺構実測図（S=1/40）

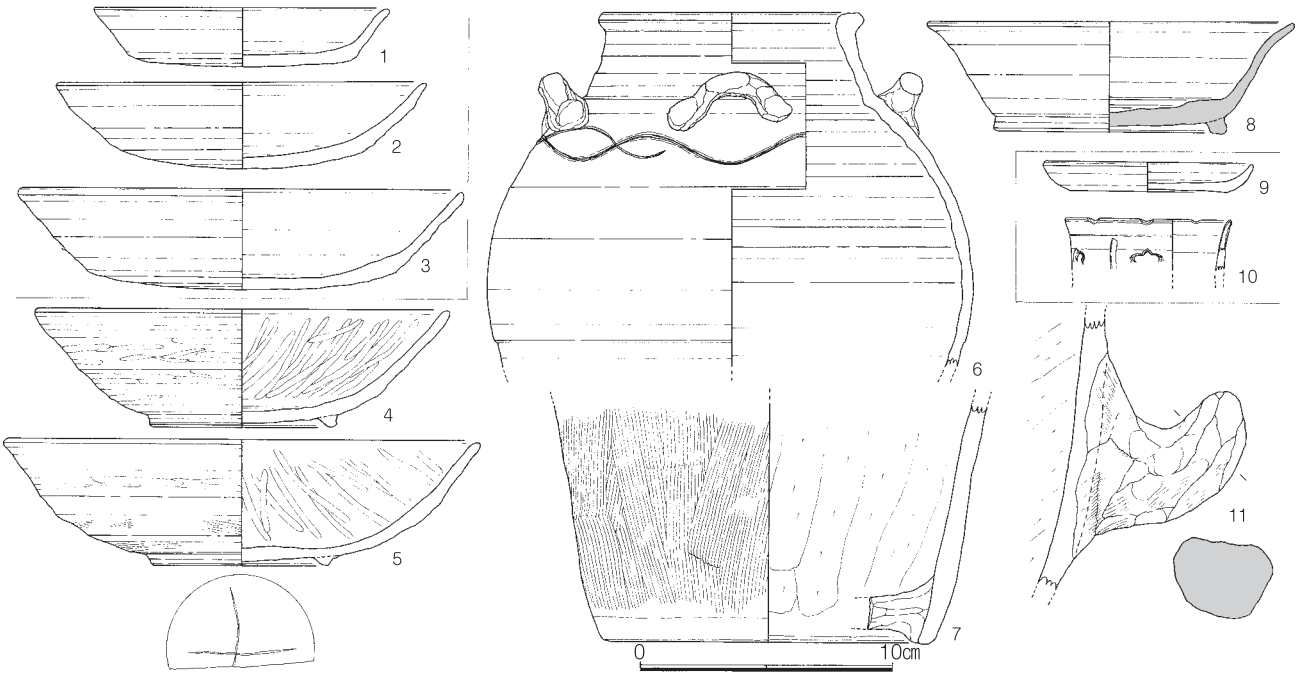


Fig.262　D 区 SK-541・606・610 出土遺物実測図（S=1/3）

縁碗などが出土した。出土遺物を Fig.262 に示した。9 は糸切り調整された土師器小皿である。焼成は良好で色調は褐色を呈する。10 は龍泉窯系青磁香炉胴部片である。口縁部のみの出土で全体形は判然としないが、体部には透かし孔が配される。

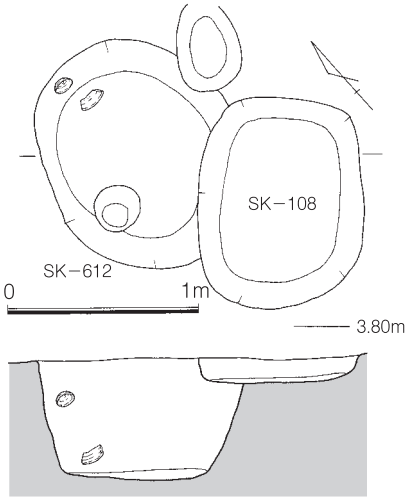


Fig.263　D区 SK-612 遺構実測図（S=1/40）

SK-612（Fig.263）

D 区№3 第 2 面で検出した土坑である。長軸 1.2 m × 短軸 1.0 mの楕円形土坑で検出面から土坑底面までは 65cm程度の深さを測る。遺構埋土は暗褐色砂で、白磁・土師器などの遺物が出土する。

Fig.265 に出土遺物を示した。

1 は白磁小壺である。口縁端部は釉が剥ぎ取られ、体部下半までは施釉される。2・3 は白磁碗である。2 は口縁端部を小さく折り返し小さな玉縁とする。いずれも体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。釉調は乳灰白色〜乳灰緑白色を呈する。10 は中国無釉陶器捏鉢である。胎土は茶褐色で緻密である。

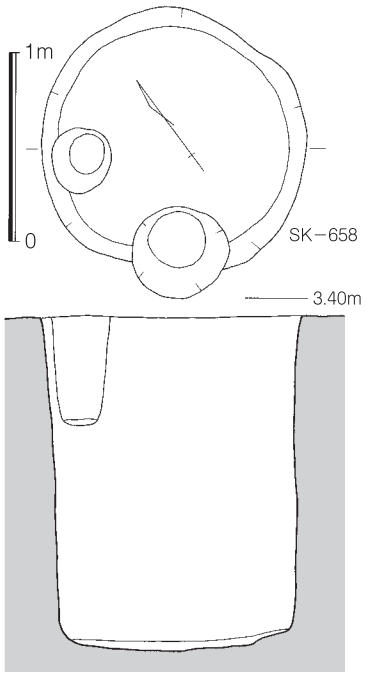


Fig.264　D区 SK-658 遺構実測図（S=1/40）

SK-658（Fig.264）

D 区№14 第 1 面で検出した円形土坑である。検出時には他の柱穴等が多く切り込んでいたため、第 2 面で掘り下げを行った。直径 1.40 m前後を測り、検出面から土坑底面までは 1.80 m程度の深さを測る。遺構埋土は上層では炭化物を多く含む暗褐色砂質土であるが下層では暗褐色砂となる。

出土遺物を Fig.265 に示した。

4・5 は土師器小皿である。いずれも底部は糸切り調整され、板目圧痕が残る。焼成は良好で色調は褐色を呈する。6 は白磁高台付皿である。釉調は乳灰白色を呈する。

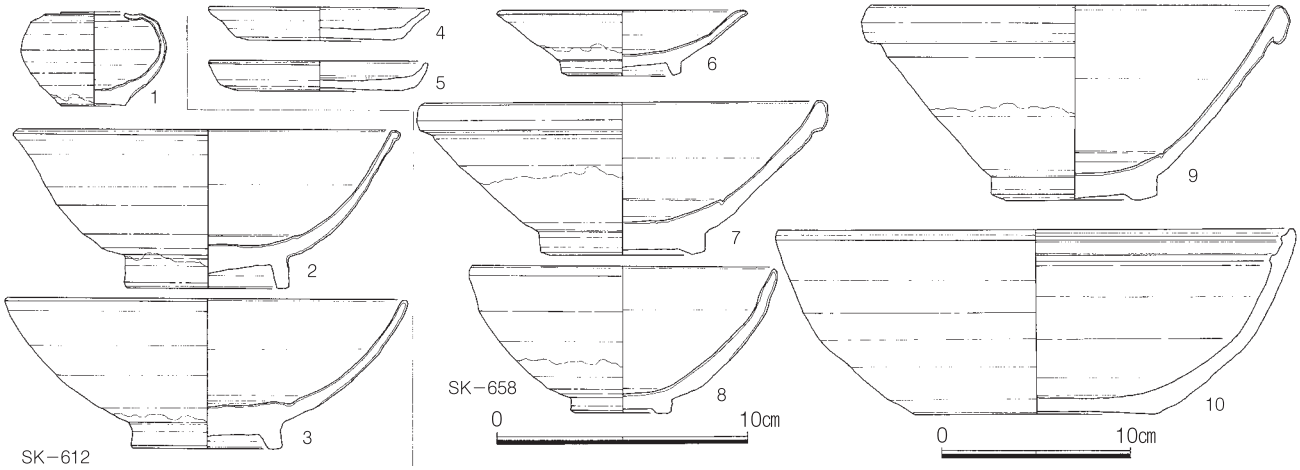


Fig.265　D区 SK-612・658 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

7・9は白磁玉縁碗である。7は外面体部上半まで施釉し、以下を露胎とする。高台径は6.4cmを測る。

8は天目茶碗である。外面は体部下半まで施釉さし、以下を露胎とする。内面には厚く施釉される。釉調は漆黒色で、胎土は灰褐色を呈する。

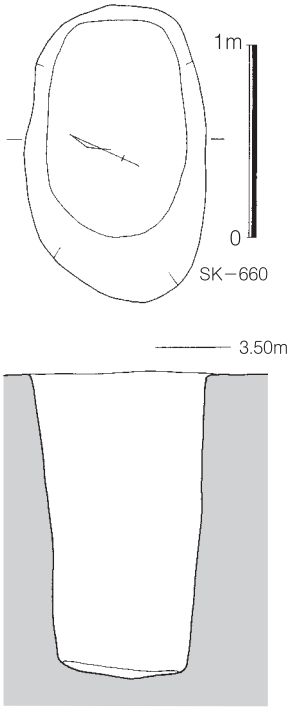


Fig.266　D区 SK-660 遺構実測図(S=1/40)

SK-660 (Fig.266)

D区№14第1面で検出した楕円形土坑である。長軸1.5 m×短軸0.9 mを測り、検出面の標高は3.40 m付近である。遺構検出面から土坑底面までは1.6 mの深さを測る。埋土は黒色粘質土をベルト状に挟み込む暗褐色砂質土で、底面付近には厚く黒色粘質土が堆積する。長軸方向での遺構主軸はN-38°-Eの方向を採る。

出土遺物をFig.267に示した。

1～6は土師器小皿である。底部はいずれも糸切り調整されるもので、5･6には板目圧痕が残る。焼成は良好で色調は褐色～橙色を呈する。7･8は土師器坏である。底部はいずれも糸切り調整される。

9は白磁合子身である。10は白磁玉縁碗である。外面体部中程まで施釉され、以下を露胎とする。釉調は乳灰白色を呈する。11は白磁碗である。体部下半まで施釉され、以下高台部を露胎とする。釉調は乳緑灰白色を呈する。12は中国陶器四耳壺である。胴部最大径が体部中程以下にあるプロポーションで、肩部に横位の耳が貼り付けられる。頸部下に屈曲部を設け、ヘラ状工具による波状の沈線を巡らせる。

これらの出土遺物より遺構の時期は12世紀中頃以降の年代が考えられる。

SK-672 (Fig.268)

D区№14第1面で検出した方形土坑である。検出面の標高は3.5～3.7 mを測り、検出面から土坑

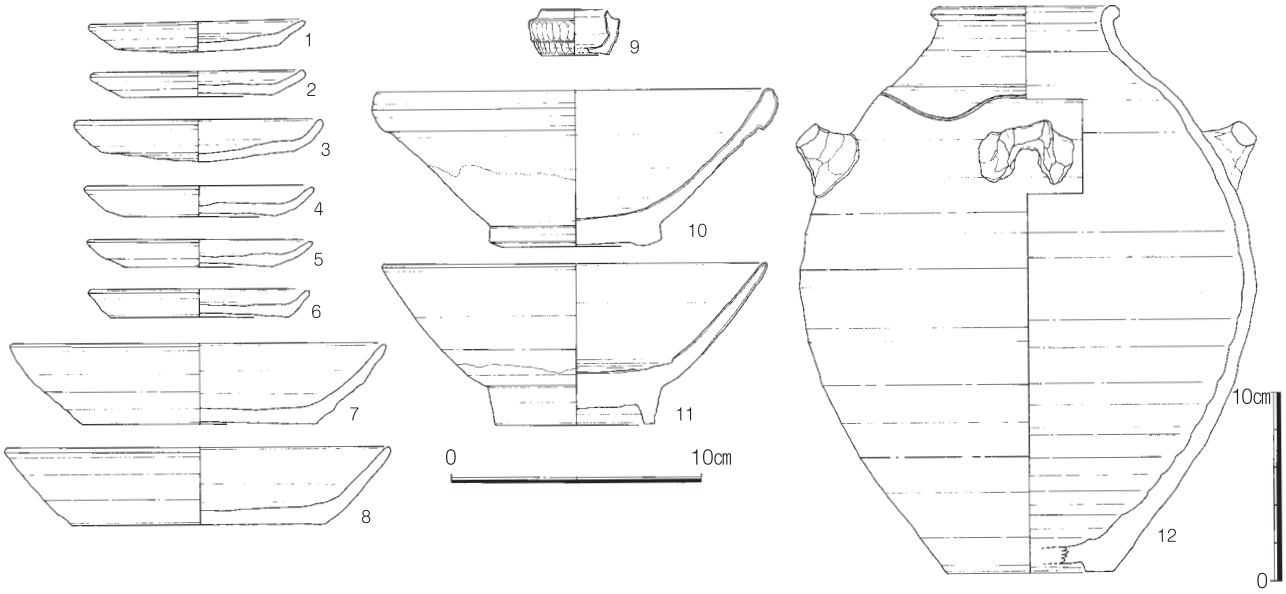


Fig.267　D区 SK-660 出土遺物実測図(S=1/3･1/4)

底面までは80cm程度の深さを測る。この遺構が検出される№14付近は遺構の大半が砂丘砂層中まで掘削されるものが多い。遺構の埋土は炭化物を多く含む暗褐色砂質土で、上層は固く締まる。埋土からは土師器・白磁などの遺物が出土した。

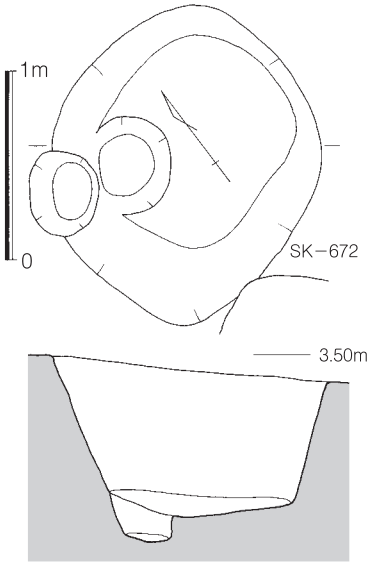


Fig.268　D区 SK-672 遺構実測図 (S=1/40)

SK-793 (Fig.269)

D区№4第3面で検出した不整円形の土坑である。第2面で調査したSC-719床面で検出した土坑で、SC-719埋没後に掘削された土坑である。遺構として検出できたのは第3面で標高3.10m付近である。本来はこれより高い位置からの掘り込みであろう。現状では長軸1.50 m×短軸130 mの楕円形状の平面形となる。底面西寄りの部分に掘り込みがあり、瓦質土器鉢などが落ち込む。埋土は黒褐色砂質土で焼土・炭化物が含まれる。埋土からは一括廃棄された土師器等が出土する。

Fig.271に出土遺物を示した。

1～11は土師器小皿である。底部は全て糸切り調整されたもので、焼成は良好で色調は褐色～橙色を呈する。12～14は土師器坏である。底部は全て糸切り調整され、色調は淡橙色を呈する。

遺構の時期は14世紀前半代と考えられる。

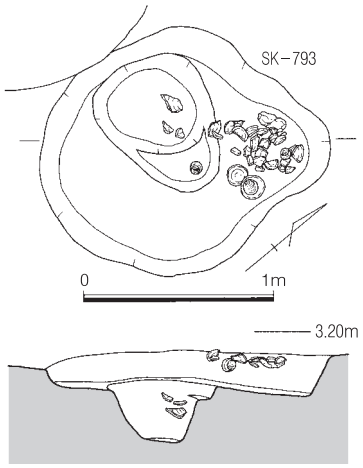


Fig.269　D区 SK-793 遺構実測図(S=1/40)

Ph.251　D区 SK-660 検出状況

Ph.252　D区 SK-672 検出状況

Ph.253　D区 SK-793 遺物出土状況

SK-825（Fig.270）

D 区№13 第 2 面で検出した楕円形土坑である。土坑北側は SK-642 に切られる。検出段階では平面形は不明瞭であったが、掘り下げた段階で楕円形土坑内に土器が廃棄されている状況が確認できた。長軸 1.7 m以上×短軸 1.1 mを測る。検出面の標高は 3.30 m付近で、検出面から土坑底面までは 25cm程度である。埋土は暗褐色砂質土で、遺物とともに鉄滓が含まれる。

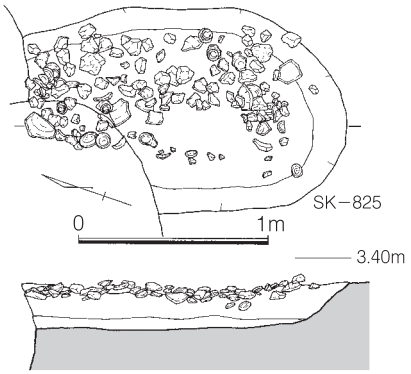


Fig.270　D 区 SK-825 遺構実測図（S=1/40）

出土遺物を Fig.271 に示した。

15 ～ 17 は土師器小皿である。底部はいずれも糸切り調整されるもので、焼成は良好で色調は褐色を呈する。18・19 は土師器坏である。底部は糸切り調整されるもので、19 の底部には板目圧痕が残る。

20・21・22 は白磁口禿皿である。20・21 は口縁端部が外反する器形である。いずれも口縁端部の釉を拭き取り、口禿とする。体部は底部直上まで施釉し、底面は露胎とする。釉調は乳灰白色～乳緑灰白色を呈する。23 は白磁碗である。口縁端部で外反する体部を持ち、釉調は乳灰白色を呈する。

24 は龍泉窯系青磁碗である。内面見込みにスタンプで装飾を施す。これらの出土遺物より遺構の時期は 14 世紀前半の年代と考えられる。

Ph.254　D 区 SK-825 検出状況

Ph.255　D 区 SK-1005 検出状況

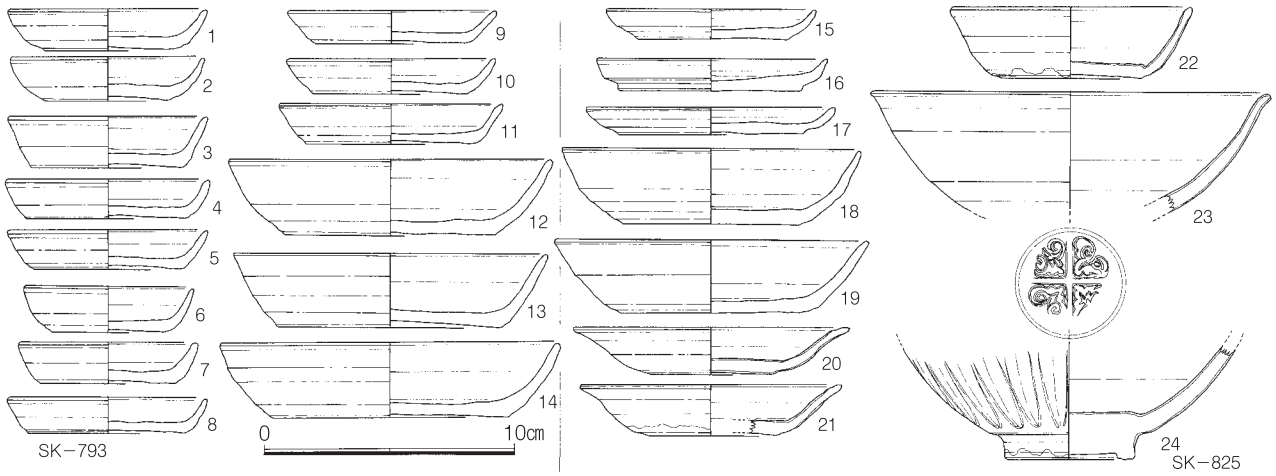


Fig.271　D 区 SK-793・823 出土遺物実測図（S=1/3）

SK-839（Fig.272）

D区№15第3面で検出した円形の廃棄土坑である。直径1m前後を測る。検出面の標高は2.80m付近で、検出面から土坑底面までは60cm程度の深さを測る。遺構埋土は暗褐色土で炭化物・焼土を多く含む。土師器・白磁等が出土した。

SK-841（Fig.272）

D区№15第3面で検出した円形土坑である。直径1.40m前後を測り、検出面から土坑底面までは80cmの深さを測る。埋土は黒褐色粘質土で白色粗砂が多く含まれる。土師器・白磁・瓦器椀などの遺物が出土した。

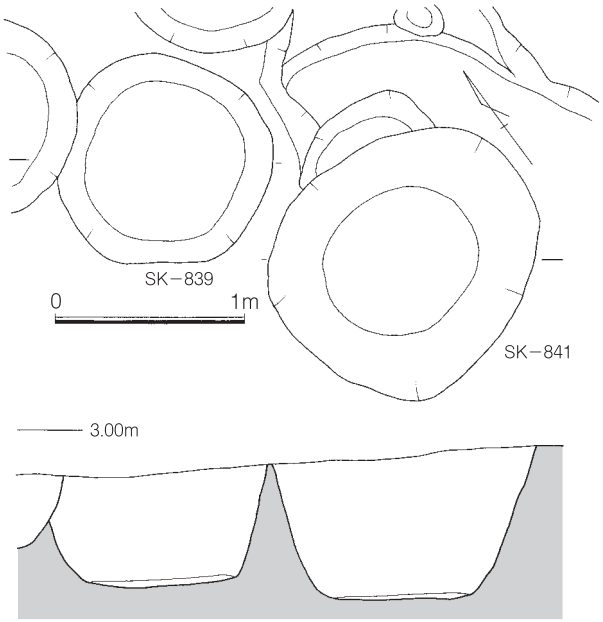


Fig.272　D区 SK-839・841 遺構実測図（S=1/40）

Fig.274に出土遺物を示した。1は土師器高台付坏である。ヘラ切りされた底部に高台を貼り付ける。2は瓦器椀である。高台断面は台形を呈する。内外面ともにヘラ磨きが施される。3は白磁玉縁碗である。4～6は土師器小皿である。底部はいずれも糸切り調整され、板目圧痕が残る。12世紀中頃の遺構である。

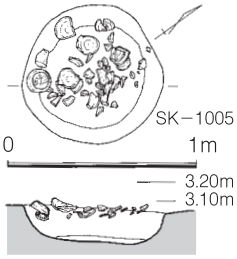


Fig.273　D区 SK1005 実測図（S=1/40）

SK-1005（Fig.273）

D区№7第4面で検出した円形土坑である。D区の北側壁面にかかる遺構で壁面清掃中に検出した。土層断面の観察から第2面からの掘り込みであることを確認した。第4面検出時での直径は70cm程度を測り、底面までは20cm程度の深さである。埋土は暗褐色砂質土で土師器が廃棄される。

出土遺物をFig.274に示した。7・8は土師器小皿である。底部はいずれも糸切り調整されるもので、色調は褐色を呈する。9～15は土師器坏である。底部は全て糸切り調整されるもので、色調は淡橙色を呈する。16は中国無釉陶器片口注口である。胎土は茶褐色を呈し、手捏ねで成形された把手が貼り付けられる。

これらの出土遺物より、この遺構の時期は13世紀後半の年代と考えられる。

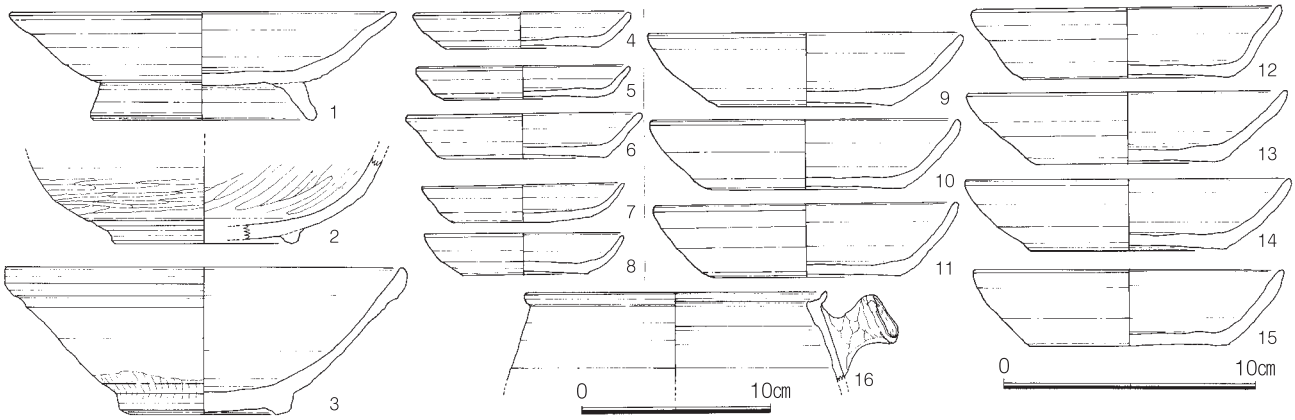


Fig.274　D区 SK-841・1005 出土遺物実測図（S=1/3・1/4）

その他の出土遺物（Fig.275 ～ 281）

C・D・E 区の調査では大量の多種多彩な遺物が出土した。これまで遺構出土遺物として報告できなかった遺物について、重要と思われるものについて報告を行う。なお、出土遺構・器種については表を参照していただきたい。

13 は天目茶碗である。釉調は漆黒色で体部下半まで施釉し、以下を露胎とする。18 は磁州窯系の絞胎土器碗である。マーブル模様の胎土で型造りの碗である。透明釉が施釉される。本調査において数個体分が出土している。29 は無釉陶器の合子蓋である。32 は青白磁の合子身である。高台内に「上」の字が線刻される。

34 は広東白磁印花文小壺である。35 は龍泉窯系青磁束口碗である。外面には片切彫りで蓮弁文を施し、空隙を櫛描文で飾る。博多遺跡群内においても出土例は少ない。44 は白磁香炉の装飾である。

59 は福建省の白磁碗で、高台内まで施釉される。12 世紀初頭の遺物である。63 は景徳鎮青白磁の方形皿である。内面には雷文を全周させる。非常に薄手の造りで、底部直上まで施釉し、底面は露胎とする。69 は瓦質土器の火鉢胴部片である。

83 は青白磁碗である。菊花を模したもので、型作りで成形される。85 は白磁の方形皿である。100 は青白磁合子蓋である。111 は銅製鈴である。C 区第 3 面で検出した SE-746 から出土したものである。114 は青白磁小壺である。115 は龍泉窯系青磁の蓋の摘みである。接合部から剥落したものか。
126 は緑釉陶器鉢である。帯状の粘土で耳を造り、口縁直下に貼り付ける。127 は無釉陶器の捏鉢である。

140 は耀州窯系青磁碗である。大きく外反する体部を持つ碗で、内面には片切彫りと櫛描文で装飾を施す。147 は青白磁の口禿皿である。内面見込みに片切彫りによる装飾を施す。

152 は白磁合子である。蓋と身が融着した状態で出土したものでセット関係がよく分かる。

156 は高麗青磁碗である。162 は耀州窯系青磁碗である。畳付のみ露胎とする。12 世紀前半代の遺物である。174 は中国陶器の磁竈窯黄釉鉄絵盤である。口縁部下に粘土塊が等間隔で並ぶ。175 は褐釉陶器の瓶である。C 区 SK-608 周辺で出土したもので、この土坑の遺物か。

176 は京都系土師器へそ皿である。14 世紀前半代の遺物である。198 は青白磁の合子蓋である。

199 は古瀬戸の卸皿である。215 は白磁小壺蓋である。216 はミニチュア土器である。手捏ねで成形される。

218 は福建連江魁岐窯の青磁碗である。体部は薄手の造りで体部下半まで施釉し以下を露胎とする。12 世紀前半の遺物である。223 は白磁梅瓶蓋である。

231 ～ 238 は D 区 SK-334 とした土坑から出土した遺物である。土師器は小皿・坏ともに糸切り調整されるものである。238 は白磁小碗で、内面見込み周囲の釉が輪状に剥ぎ取られる。12 世紀中頃の遺構であろう。255 は白磁高台付皿である。玉縁状の口縁を持つ皿で、12 世紀前半の遺物である。

265 は漳州窯系青磁碗である。外器面は片切彫りで装飾される。273 は白磁鉢である。内面見込み周囲に櫛描文を配する。274 は青白磁の四耳壺である。肩部に横位の耳が貼り付けられる。

299 は土師質土器土鍋である。外面下半は刷毛目で調整され、内器面はナデ・刷毛目で調整される。器面全体に煤が付着する。

Fig280-300 ～ 319 は D 区 SK-935 から出土した遺物で、300 は京都系土師器小皿である。口縁を端部で折り返すもので、色調は淡褐色を呈する。土師器小皿・坏はヘラ切りのものが圧倒的に多いが、糸切りの小皿もわずかに混在する。311・312 は白磁高台付皿であるが、高台の形状が全く異なるものである。319 は青白磁碗である。出土遺物より遺構の時期は 11 世紀末と考えられる。

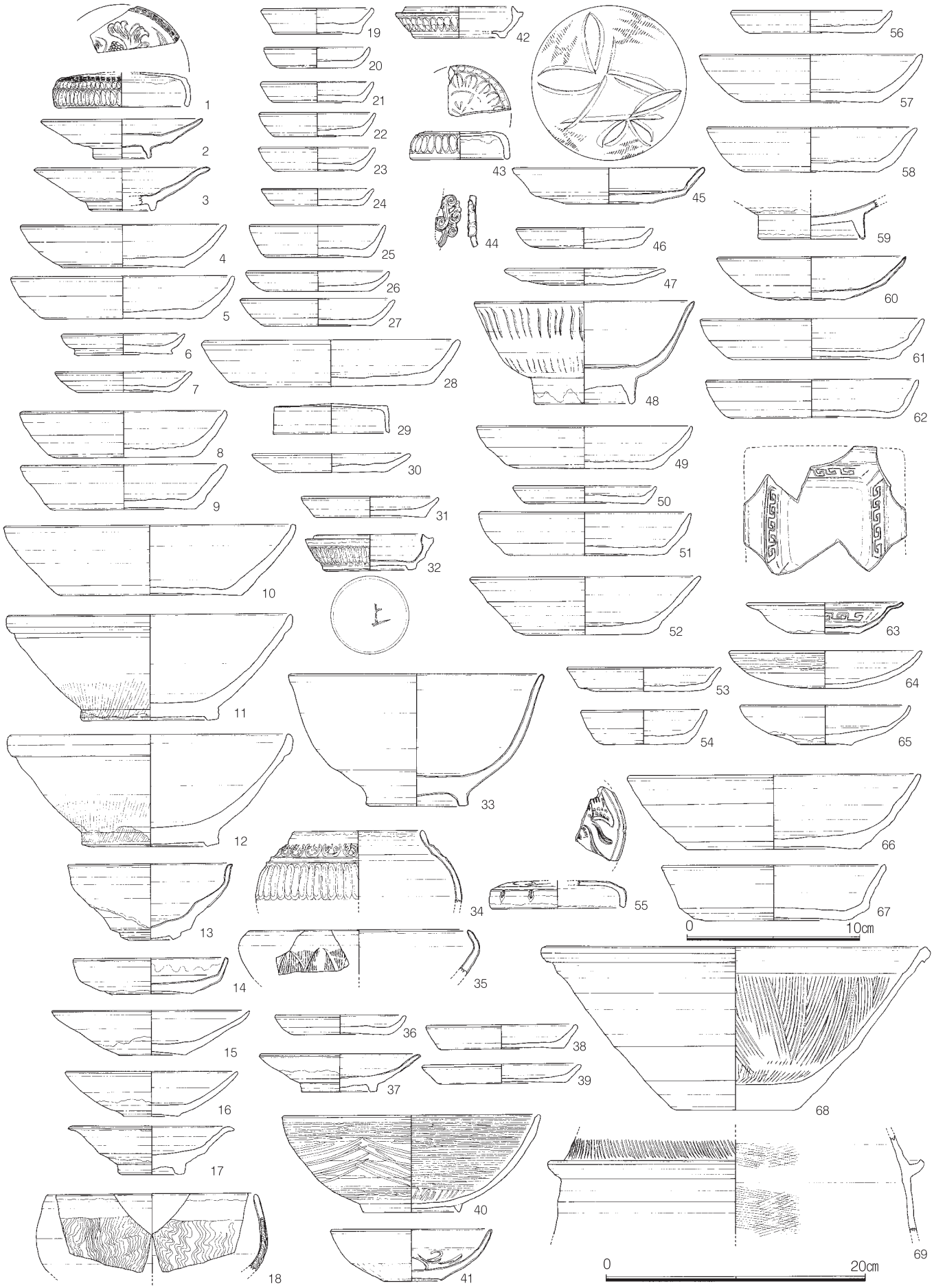


Fig.275　C・D区その他の出土遺物実測図　中世（1）（S=1/3・1/4）

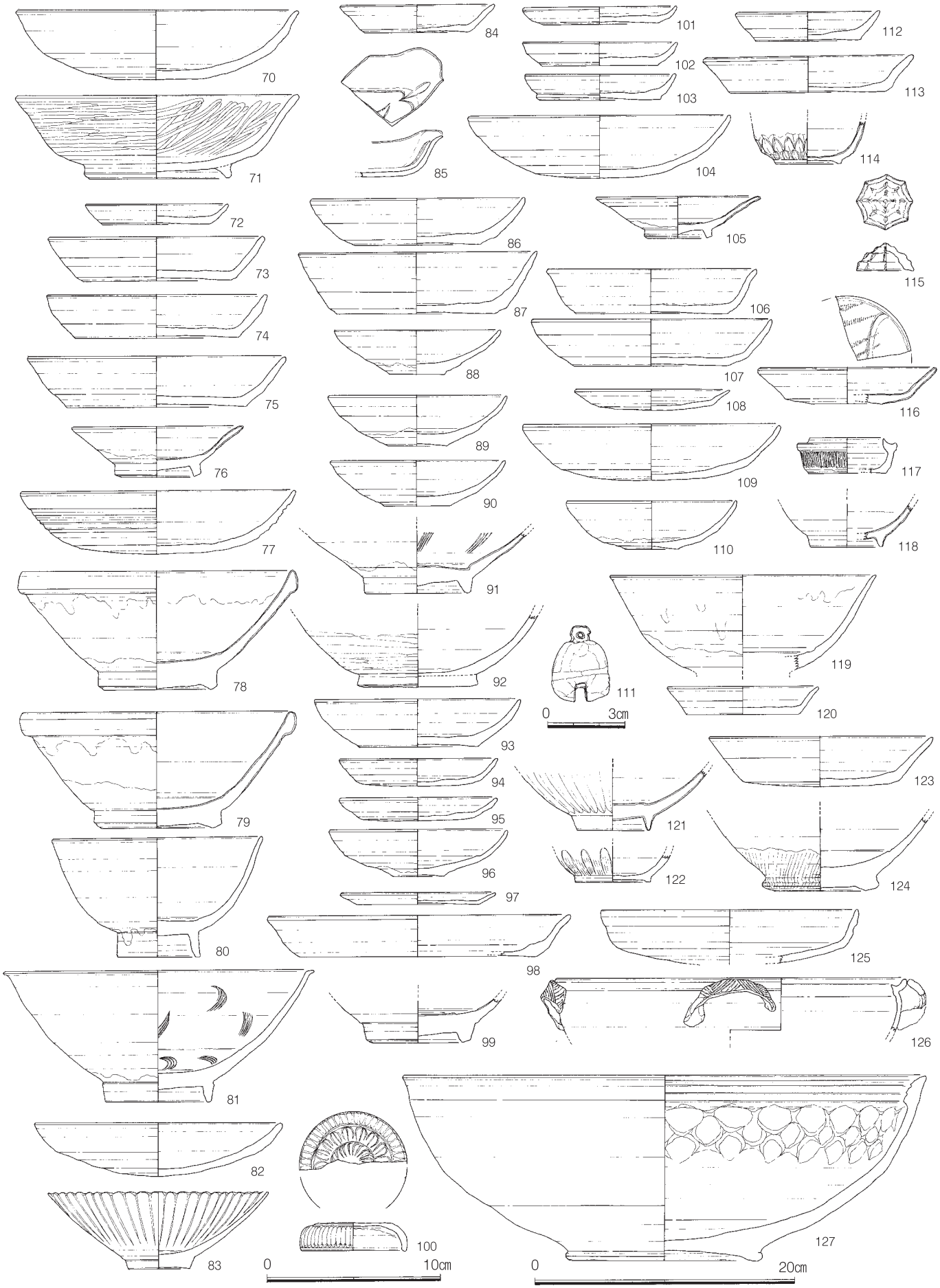


Fig.276　C・D区その他の出土遺物実測図　中世（2）（S=1/2・1/3・1/4）

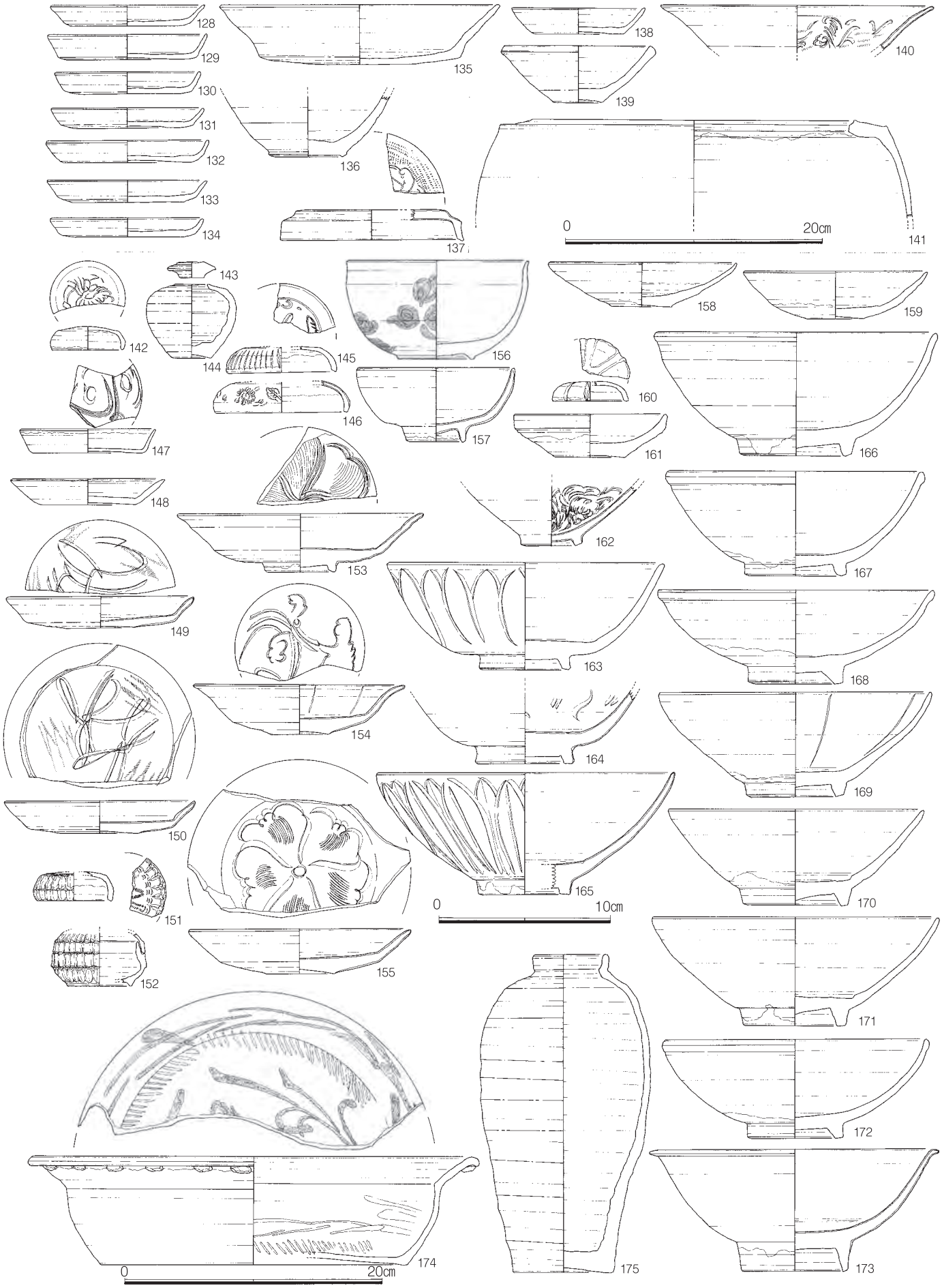


Fig.277　C・D区その他の出土遺物実測図　中世（3）（S=1/3・1/4）

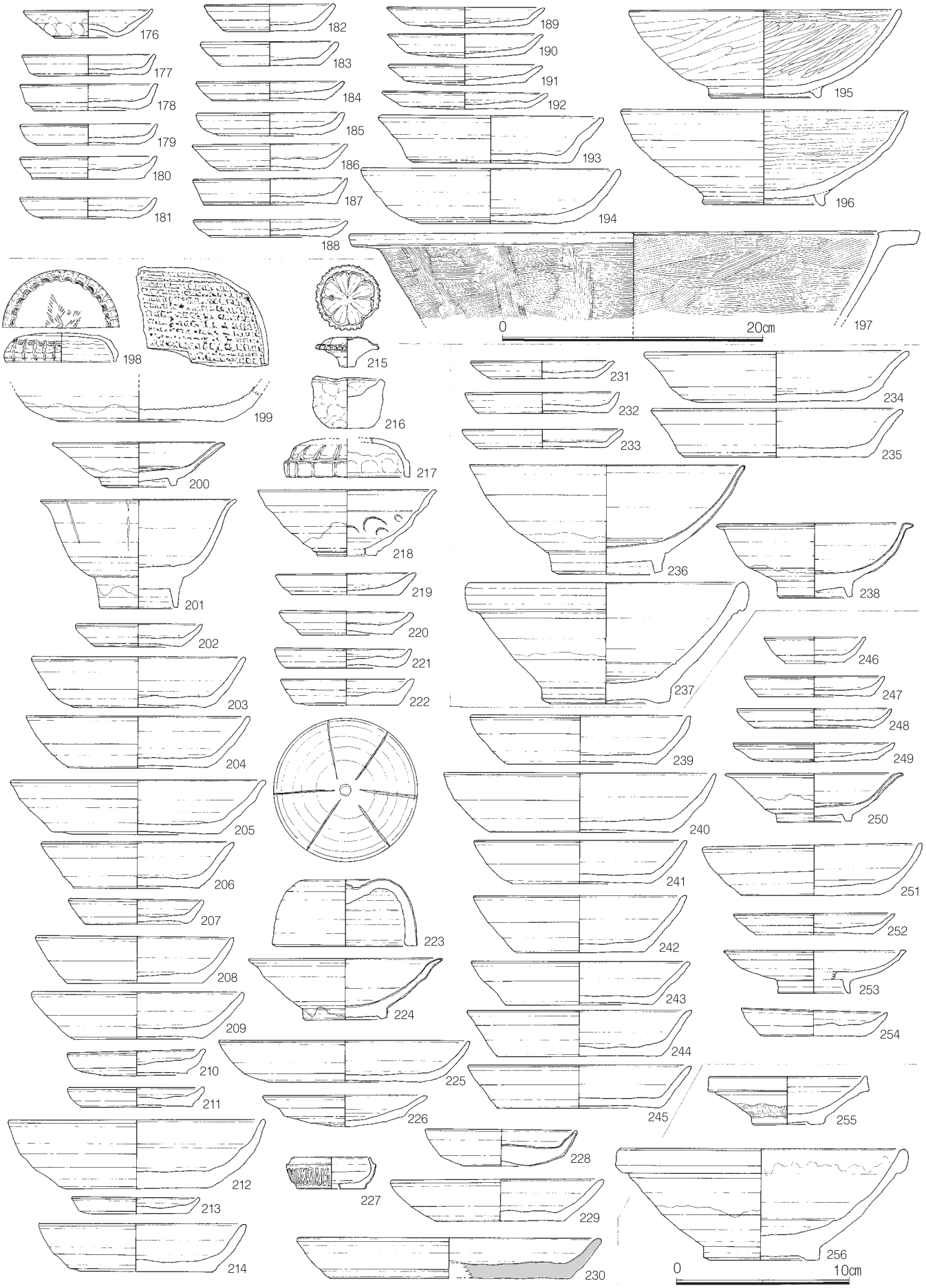


Fig.278　C・D区その他の出土遺物実測図　中世（4）（S=1/3・1/4）

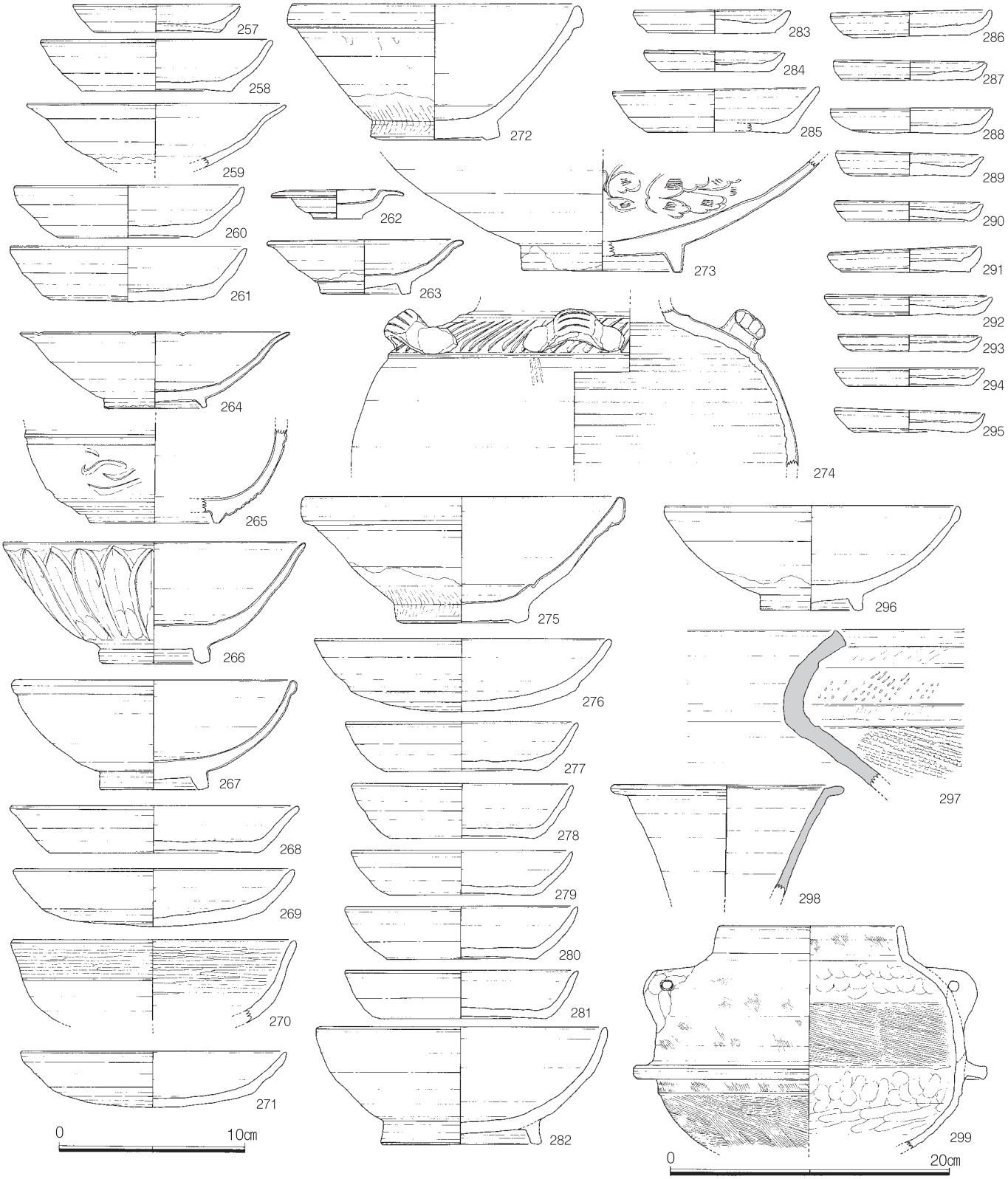


Fig.279　C・D 区その他の出土遺物実測図　中世（5）（S=1/3・1/4）

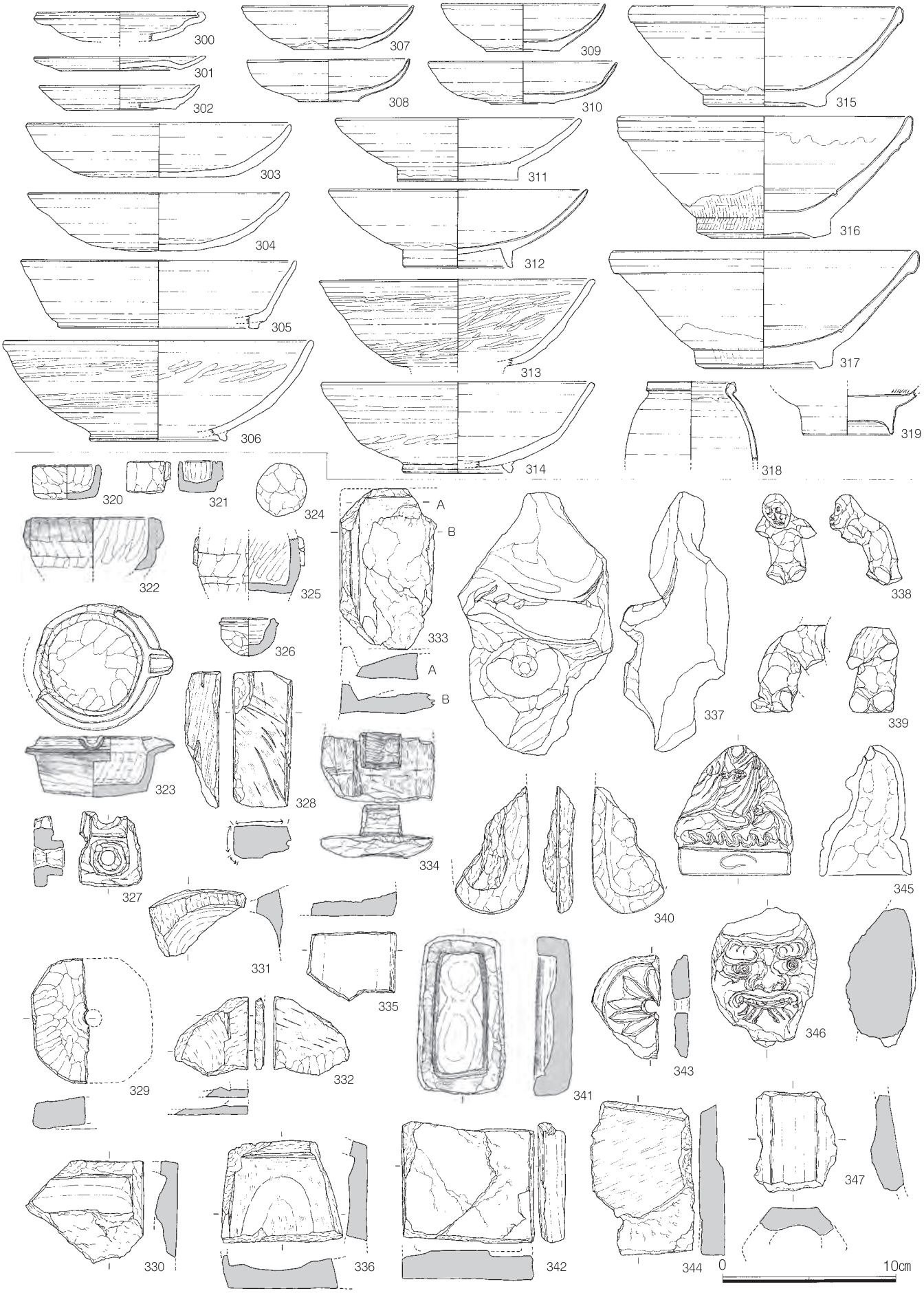


Fig.280　C・D 区その他の出土遺物実測図　中世（6）（S=1/3）

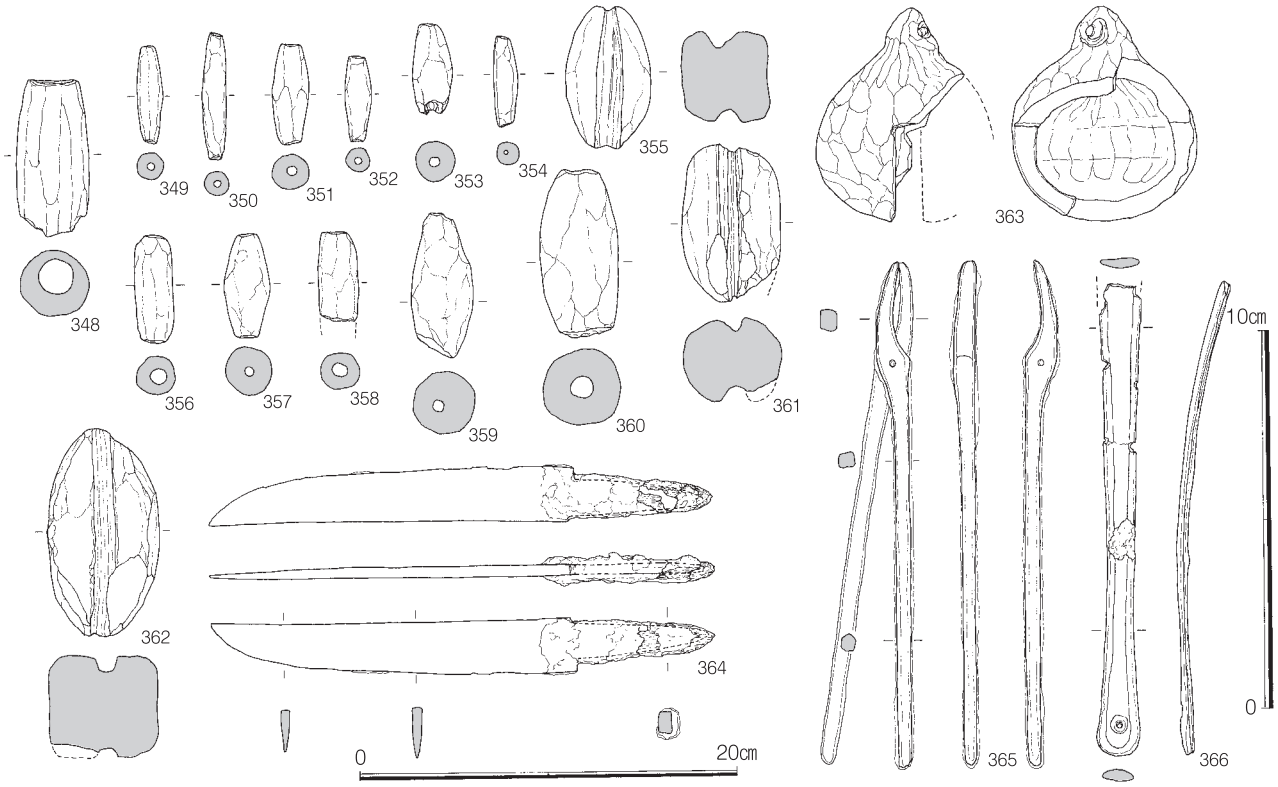


Fig.281　C・D 区その他の出土遺物実測図　中世（7）（S=1/2・1/3・1/4）

今回の調査では多くの石器・石製品が出土した。滑石製品は石鍋片が多く出土している。石製品としては砥石が多く見られる。

320・321 は滑石製ミニチュア容器である。器面には加工痕が明瞭に残る。322 は滑石製の小型石鍋で、外面には全面に煤が付着しており実際に使用されていたことが分かる。323 は滑石製の片口石鍋である。鍔部付近には厚く煤が付着する。326 は滑石製ミニチュア容器である。直径 3cm程度で用途不明である。329 は滑石製紡錘車である。平面形は六角形を呈し、側面は面取りされる。

328・330 ～ 333・335・336・341・342 は硯である。333 は山口県産の赤間石を使用する硯である。341 は海部周囲に明瞭に墨痕が残る硯である。筆についた余分な墨をここで調整したものか。

硯は破片で出土するものが多く、全体の形状が把握できるものは数少ない。336 は砂岩系の石材が使用されたもので、残存部より風字硯と考えられる。これらの硯は出土遺構から 12 世紀前半から 15 世紀代の年代のものであることが分かる。

337 は鬼瓦片である。部分的な出土であるため全体の形状は判然としない。右目と眉の突起部分か。338 は手足が欠損する猿の土製品である。339 は須恵質土製品で、犬の胴体部か。

345 は博多人形である。頭部は別体の差し込み式で、体は型造りの貼り合わせで成形され、手には独鈷を持つ。内面には指頭圧痕が残る。346 は土師質の行者面である。347 は土師質の土製品である。六角柱の形状に復元できる。

348 ～ 362 は土錘である。363 は土鈴である。364 は刀子である。柄部には木質が残る。365 は鍛冶道具である。366 は銅製の扇子の骨である。

その他の出土遺物　観察表 1

報告番号	区	出土遺構	器種	器形
1	C	SK-005	青白磁	合子蓋
2	C	SK-005	青白磁	高台付皿
3	C	SK-005	白磁	高台付皿
4	C	SK019	土師器	坏(糸切り)
5	C	SK019	土師器	坏(糸切り)
6	C	SK021	土師器	小皿(糸切り)
7	C	SK026	土師器	小皿(糸切り)
8	C	SK026	土師器	坏(糸切り)
9	C	SK026	土師器	坏(糸切り)
10	C	SK026	土師器	坏(糸切り)
11	C	SK039	白磁	碗
12	C	SK039	白磁	碗
13	C	SK043	陶器	天目茶碗
14	C	SK049	青白磁	平底皿
15	C	SE－70	白磁	平底皿
16	C	SE－81	白磁	平底皿
17	C	SE－81	白磁	高台付皿
18	C	SK－137	絞胎土器	鉢・磁州窯系
19	C	SK113	土師器	小皿(糸切り)
20	C	SK087	土師器	小皿(糸切り)灯明皿
21	C	SK087	土師器	小皿(糸切り)灯明皿
22	C	SK087	土師器	小皿(糸切り)
23	C	SK087	土師器	小皿(糸切り)灯明皿
24	C	SK087	土師器	小皿(糸切り)灯明皿
25	C	SK087	土師器	小皿(糸切り)
26	C	SK087	土師器	小皿(糸切り)
27	C	SK087	土師器	小皿(糸切り)
28	C	SK087	土師器	坏(糸切り)
29	C	SK-95	無釉陶器	蓋
30	C	SK099	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
31	C	SK225	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
32	C	SK225	青白磁	合子身
33	C	SK194	白磁	碗
34	C	SK203	広東白磁	印花文小壺
35	C	SK232	龍泉窯系青磁	束口碗
36	C	SK242	土師器	小皿(糸切り)
37	C	SK560	白磁	高台付皿
38	C	SK－567	土師器	小皿(糸切り)
39	C	SK－567	土師器	小皿(糸切り)
40	C	SK561	楠葉型瓦器	椀
41	C	SK561	白磁	平底皿
42	C	SE245	白磁	合子身
43	C	SE245	白磁	合子蓋
44	C	SK087	白磁	装飾部具
45	C	SE245	同安窯系青磁	平底皿
46	C	SK298	土師器	小皿(ヘラ切り)
47	C	SK321	土師器	小皿(ヘラ切り)
48	C	SK343	白磁	碗
49	C	SK348	土師器	坏(糸切り)
50	C	SK431	土師器	小皿(糸切り)
51	C	SK431	土師器	坏(糸切り)
52	C	SK454	土師器	坏(糸切り)
53	C	SK484	土師器	小皿(糸切り)
54	C	SK501	土師器	小皿(糸切り)
55	C	SK127	景徳鎮青白磁	合子蓋
56	C	SK349	土師器	小皿(糸切り)
57	C	SK349	土師器	坏(糸切り)
58	C	SK349	土師器	坏(糸切り＋板目圧痕)
59	C	SK386		
60	C	SK399	白磁	平底皿
61	C	SK402	土師器	坏(糸切り)
62	C	SK402	土師器	坏(糸切り＋板目圧痕)
63	C	SK402	青白磁(景徳鎮)	方形皿
64	C	SK510	瓦器	小皿(糸切り)
65	C	SK541	白磁	平底皿
66	C	SK512	土師器	坏(糸切り＋板目圧痕)
67	C	SK518	土師器	坏(糸切り)
68	C	SK087	陶器	擂り鉢
69	C	SK052	瓦質土器	火鉢
70	C	SK596	土師器	坏(ヘラ切り)
71	C	SK597	瓦器	椀
72	C	SK626	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
73	C	SK626	土師器	坏(糸切り)
74	C	SK626	土師器	坏(糸切り＋板目圧痕)
75	C	SK629	土師器	坏(糸切り＋板目圧痕)
76	C	SK630	白磁	高台付皿
77	C	SK639	土師器	坏(ヘラ切り)
78	C	SK639	白磁	碗
79	C	SK639	白磁	碗
80	C	SK649	白磁	碗
81	C	SK655	白磁	碗
82	C	SK663	土師器	坏(ヘラ切り＋板目圧痕)
83	C	SK663	青白磁	碗
84	C	SK673	土師器	小皿(ヘラ切り)
85	C	SK690	白磁	方形皿
86	C	SK693	土師器	坏(糸切り＋板目圧痕)
87	C	SK693	土師器	坏(糸切り＋板目圧痕)
88	C	SK693	白磁	平底皿
89	C	SK695	白磁	平底皿
90	C	SK696	白磁	平底皿

報告番号	区	出土遺構	器種	器形
91	C	SK701	白磁	碗
92	C	SK709	土師器	埦
93	C	SK718	土師器	坏(糸切り＋板目圧痕)
94	C	SK721	土師器	小皿(ヘラ切り)
95	C	SK721	土師器	小皿(ヘラ切り＋板目圧痕)
96	C	SK722	白磁	平底皿
97	C	SK793	土師器	小皿(ヘラ切り＋板目圧痕)
98	C	SK793	土師器	坏(糸切り)
99	C	SK793	白磁	碗
100	C	SK707	青白磁	合子蓋
101	C	SE746周辺	土師器	小皿(糸切＋板目圧痕)
102	C	SK746	土師器	小皿(糸切り)
103	C	SK746	土師器	小皿(糸切り)
104	C	SK727	土師器	坏(ヘラ切り)
105	C	SE747周辺	白磁	高台付皿
106	C	SK762	土師器	坏(糸切り)
107	C	SK762	土師器	坏(糸切り)
108	C	SK813	土師器	坏(ヘラ切り＋板目圧痕)
109	C	SK813	土師器	小皿(ヘラ切り＋板目圧痕)
110	C	SK813	白磁	平底皿
111	C	SE-746周辺	銅製鈴	
112	C	SK777	土師器	小皿(糸切り)
113	C	SK777	土師器	坏(糸切り＋板目圧痕)
114	C	SK777	青白磁	合子身(茶壷)
115	C	SK777	龍泉窯系青磁	摘み(蓋？)
116	C	SK778	同安窯系青磁	平底皿
117	C	SK778	中国陶器	合子身
118	C	SK806	高麗青磁	碗
119	C	SK806	白磁	碗
120	C	SK835	土師器	小皿(糸切り)
121	C	SK835	龍泉窯系青磁	碗
122	C	SK835	白磁	小壷
123	C	SK835	土師器	坏(糸切り)
124	C	SK835	白磁	碗
125	C	SK702	土師器	坏(ヘラ切り)
126	C	SK702	緑釉陶器	鉢？
127	C	SK702	無釉陶器	捏鉢
128	C	SK839	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
129	C	SK839	土師器	小皿(糸切り＋ナデ)
130	C	SK839	土師器	小皿(糸切り)
131	C	SK839	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
132	C	SK839	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
133	C	SK839	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
134	C	SK839	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
135	C	SK839	土師器	坏(糸切り＋板目圧痕)
136	C	SK843	？	碗
137	C	SK839	龍泉窯系青磁	蓋
138	C	SK843	土師器	小皿(糸切り)
139	C	SK843	中国陶器	坏
140	C	SK843	耀州窯青磁	碗
141	C	SK843	中国陶器	無頸壷(黄釉薬)
142	C	1面下掘り下げ	青白磁	合子蓋
143	C	2面下掘り下げ	中国陶器	蓋
144	C	1面下掘り下げ	中国陶器	小壷
145	C	2面下掘り下げ	青白磁	合子蓋
146	C	2面下掘り下げ	青白磁	合子蓋
147	C	1面下掘り下げ	青白磁	口禿小皿
148	C	1面下掘り下げ	白磁	口禿皿
149	C	1面下掘り下げ	同安窯系青磁	平底皿
150	C	1面下掘り下げ	青白磁	平底皿
151	C	2面下掘り下げ	青白磁	合子蓋
152	C	2面下掘り下げ	白磁	合子(蓋＋身癒着)
153	C	2面下掘り下げ	同安窯系青磁	高台付皿
154	C	1面下掘り下げ	龍泉窯系青磁	平底皿
155	C	1面下掘り下げ	同安窯系青磁	平底皿
156	C	2面下掘り下げ	高麗青磁	碗
157	C	2面下掘り下げ	龍泉窯系青磁	碗
158	C	2面下掘り下げ	白磁	平底皿
159	C	2面下掘り下げ	白磁	平底皿
160	C	2面下掘り下げ	青白磁	合子蓋
161	C	2面下掘り下げ	白磁	平底皿
162	C	1面下掘り下げ	耀州窯青磁	小碗
163	C	1面下掘り下げ	龍泉窯系青磁	碗
164	C	1面トレンチ(カクラン)	龍泉窯系青磁	碗
165	C	2面下掘り下げNO．5	龍泉窯系青磁	碗
166	C	2面下掘り下げ	白磁	碗
167	C	2面下掘り下げ	白磁	碗
168	C	1面下掘り下げ	白磁	碗
169	C	2面下掘り下げNO．6	白磁	碗
170	C	2面下掘り下げ	白磁	碗
171	C	2面下掘り下げ	白磁	碗
172	C	1面下掘り下げ	白磁	碗
173	C	1面下掘り下げ	白磁	碗
174	C	1面下掘り下げ	中国陶器(磁竈窯)	盤
175	C	2面下掘り下げNO．5	褐釉陶器	瓶
176	C	1面下掘り下げ	京都系土師器	へそ皿
177	C	NO．11壁面	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
178	C	NO．11壁面	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
179	C	NO．11壁面	土師器	小皿(糸切り)
180	C	NO．11壁面	土師器	小皿(糸切り)

その他の出土遺物　観察表２

報告番号	区	出土遺構	器種	器形
181	C	西側トレンチ	土師器	小皿(糸切り)
182	C	2面下掘り下げ	土師器	小皿(糸切り)
183	C	2面下掘り下げ	土師器	小皿(糸切り)
184	C	2面下掘り下げ	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
185	C	2面下掘り下げ	土師器	小皿(糸切り)
186	C	2面下掘り下げ	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
187	C	2面下掘り下げ	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
188	C	3面下掘り下げNO．9	土師器	小皿(糸切り＋板目圧痕)
189	C	2面下掘り下げ	土師器	小皿(ヘラ切り＋板目圧痕)
190	C	2面下掘り下げ	土師器	小皿(ヘラ切り＋板目圧痕)
191	C	2面下掘り下げ	土師器	小皿(ヘラ切り＋板目圧痕)
192	C	2面下掘り下げ	土師器	小皿(ヘラ切り＋板目圧痕)
193	C	2面下掘り下げ	土師器	坏(糸切り＋板目圧痕)
194	C	2面下掘り下げ	土師器	坏(ヘラ切り)
195	C	2面NO．11砂層	瓦器	椀
196	C	2面下掘り下げ	瓦器	椀
197	C	1面下掘り下げ	土師質土器	捏ね鉢？
198	D	SK77	青白磁	合子蓋
199	D	SK25	古瀬戸	卸皿
200	D	SK90	白磁	高台付皿
201	D	SK90	白磁	碗
202	D	SK171	土師器	小皿・糸切
203	D	SK171	土師器	坏・糸切
204	D	SK171	土師器	坏・糸切
205	D	SK171	土師器	坏・糸＋板
206	D	SK188	土師器	坏・糸切
207	D	SK203	土師器	小皿・糸切
208	D	SK203	土師器	坏・糸切
209	D	SK205	土師器	坏・糸切
210	D	SK217	土師器	小皿・糸切
211	D	SK217	土師器	小皿・糸＋板
212	D	SK222	土師器	坏・糸切
213	D	SK241	土師器	小皿・糸切
214	D	SK241	土師器	坏・糸＋板
215	D	SK77	白磁	小壺蓋
216	D	SP175	ミニチュア土器	鉢
217	D	SK244	青白磁	合子蓋
218	D	SP247	連江魁岐窯青磁	碗
219	D	SK250	土師器	小皿・糸＋板
220	D	SK250	土師器	小皿・糸切
221	D	SK250	土師器	小皿・糸切
222	D	SK263	土師器	小皿・糸切
223	D	SK271	白磁	四耳壺蓋
224	D	SK278	白磁	高台付皿
225	D	SK320	土師器	坏・糸切
226	D	SK320	土師器	小皿・ヘラ切
227	D	SK900	土師器	坏・糸切
227	D	SK425	白磁	合子身
228	D	SK463	龍泉窯系青磁	平底皿
229	D	SK464	土師器	坏・糸切
230	D	SK199	須恵器	皿・ヘラ切
231	D	SK334	土師器	小皿・糸切
232	D	SK334	土師器	小皿・糸切
233	D	SK334	土師器	小皿・糸切
234	D	SK334	土師器	坏・糸＋板
235	D	SK334	土師器	坏・糸＋板
236	D	SK334	白磁	碗
237	D	SK334	白磁	玉縁碗
238	D	SK334	白磁	小碗
239	D	SK361	土師器	坏・糸切
240	D	SK361	土師器	坏・糸切
241	D	SK397	土師器	坏・糸切
242	D	SK397	土師器	坏・糸切
243	D	SK397	土師器	坏・糸＋板
244	D	SK397	土師器	坏・糸＋板
245	D	SK397	土師器	坏・糸切
246	D	SK376	土師器	小皿・糸切
247	D	SK365	土師器	小皿・糸切
248	D	SK382	土師器	小皿・糸切
249	D	SK382	土師器	小皿・ヘラ切
250	D	SK396	白磁	高台坏皿
251	D	SK400	土師器	坏・糸切
252	D	SK420	土師器	小皿・糸＋板
253	D	SK443	白磁	高台付皿
254	D	SK457	土師器	小皿・糸切
255	D	SK413	白磁	高台付皿
256	D	SK413	白磁	碗
257	D	SK458	土師器	小皿・糸切
258	D	SK458	土師器	坏・糸切
259	D	SK458	天目茶碗	
260	D	SK517	土師器	坏・糸切
261	D	SK517	土師器	坏・糸＋板
262	D	SK628	中国陶器	褐釉陶器・蓋
263	D	SK655	白磁	高台付皿
264	D	SK601	越州窯系青磁	碗
265	D	SK601	潮州窯系青磁	碗
266	D	SK613	龍泉窯系青磁	碗
267	D	SK618	白磁	碗
268	D	SK628	土師器	坏・糸＋板
270	D	SK760	瓦器	碗
271	D	SK795	土師器	坏・ヘラ
272	D	SK437	白磁	椀
273	D	SK475	白磁	鉢
274	D	SK601	青白磁	四耳壺

報告番号	区	出土遺構	器種	器形
275	D	SK795	白磁	玉縁碗
276	D	SK817	土師器	坏・ヘラ切
277	D	SK900	土師器	坏・糸切
278	D	SK820	土師器	坏・糸切
279	D	SK820	土師器	坏・糸切
280	D	SK820	土師器	坏・糸切
281	D	SK820	土師器	坏・糸切
282	D	SK826	黒色土器	碗(内黒)
283	D	SK493	土師器	小皿・糸切
284	D	SK501	土師器	小皿・糸切
285	D	SK501	土師器	坏・糸切
286	D	2．5面下掘り下げ	土師器	小皿・糸切
287	D	2．5面下掘り下げ	土師器	小皿・糸切
288	D	2．5面下掘り下げ	土師器	小皿・糸切
289	D	2．5面下掘り下げ	土師器	小皿・糸切
290	D	2．5面下掘り下げ	土師器	小皿・糸切
291	D	2．5面下掘り下げ	土師器	小皿・糸切
292	D	2．5面下掘り下げ	土師器	小皿・糸切
293	D	2．5面下掘り下げ	土師器	小皿・糸切
294	D	2．5面下掘り下げ	土師器	小皿・糸切
295	D	2．5面検出	土師器	小皿・糸切
296	D	SK932	白磁	碗
297	D	SK932	須恵質土器	壺
298	D	SP973	須恵器	高坏脚部か
299	D	SK607	土師質土器	土鍋
300	D	SK935	京都系土師器	小皿
301	D	SK935	土師器	小皿・ヘラ切
302	D	SK935	土師器	小皿・糸切
303	D	SK935	土師器	坏・ヘラ切
304	D	SK935	土師器	坏・ヘラ切
305	D	SK935	須恵器	碗
306	D	SK935	瓦器	椀
307	D	SK935	白磁	平底皿
308	D	SK935	白磁	平底皿
309	D	SK935	白磁	平底皿
310	D	SK935	白磁	平底皿
311	D	SK935	白磁	高台付皿
312	D	SK935	白磁	高台付皿
313	D	SK935	土師器	埦
314	D	SK935	瓦器	椀
315	D	SK935	白磁	玉縁碗
316	D	SK935	白磁	玉縁碗
317	D	SK935	白磁	玉縁碗
318	D	SK935	中国陶器	小壺
319	D	SK935	青白磁	碗
320	C	1面下掘り下げ	滑石製ミニチュア容器	
321	D	SK935	滑石製ミニチュア容器	
322	D	SK405	滑石製ミニチュア容器	
323	D		滑石製ミニチュア容器	
324	C	1面下掘り下げ	瓦玉	
325	D	1面下掘り下げ	滑石製ミニチュア容器	
326	C	SK36	滑石製ミニチュア容器	
326	C	1面下掘り下げ	硯	粘板岩
327	C	SK604	滑石製スタンプ状製品	
328	D	SK09	砥石	褐色砂岩
329	D	2.5面遺構検出	滑石製紡錘車	六角形
330	D	SK25	硯	暗小豆色砂岩
331	D	SD21	硯	粘板岩
332	C	1面下掘り下げ	硯	
333	D	SK02	硯	赤褐色粘板岩
334	D	SK541	滑石製スタンプ状製品	
335	C	SK511	硯	砂岩
336	C		硯	粘板岩
337	C	西側トレンチ	鬼瓦	
338	C	SK113	土製品	猿
339	C	1面下掘り下げ	須恵質土製品	犬？(胴部)
340	C	SK361	滑石製スタンプ状製品	
341	C	SK604	硯	
342	C	SE80	硯	灰色粘板岩
343	C	1面下掘り下げ	須恵質土製品(瓦質)	花？
343	C	SK203	朝鮮白磁	印花文小壺
344	C	SE745	石製品	粘板岩
345	C	SE070	土製品	博多人形
346	C	SK087		行者面
347	C	1面下掘り下げ	土師質土器	用途不明
348	C	SK186	土製品	土錘
349	C	SK436	土製品	土錘
350	C	2面下掘り下げ	土製品	土錘
351	C	SK235	土製品	土錘
352	C	SK650	土製品	土錘
353	C	2面下掘り下げ	土製品	土錘
354	C	SK113	土製品	土錘
355	D	2．5面下掘り下げ	土製品	土錘
356	C	SE070	土製品	土錘
357	C	2面下掘り下げ	土製品	土錘
358	C	1面下掘り下げ	土製品	土錘
359	C	2面下掘り下げ	土製品	土錘
360	C	3面下掘り下げ	土製品	土錘
361	C	1面下掘り下げ	土製品	土錘
362	C	2面下掘り下げ	土製品	土錘
363	C	SK052	土製品	土鈴
364	C	SK716		刀子
365	D	SK606	鉄製品	鍛冶道具
366	C	1面下掘り下げ	銅製品	扇子骨

（四）その他の出土遺物

a．ガラス・ガラス製作関連遺物（Fig.282 ～ 284）

第 172 次調査では調査区のほぼ全域にわたってガラス製品や坩堝等の製作関連遺物が出土した。その総数は 300 点以上となるが、この中でも重要と思われる製品･関連遺物 118 点について報告を行う。ガラス製品の多くは小玉（ビーズ）であり、ほとんどが巻き付けによって製作されている。色調は青色系が多いが、エメラルドグリーンの鮮やかな発色の小玉も見られる。

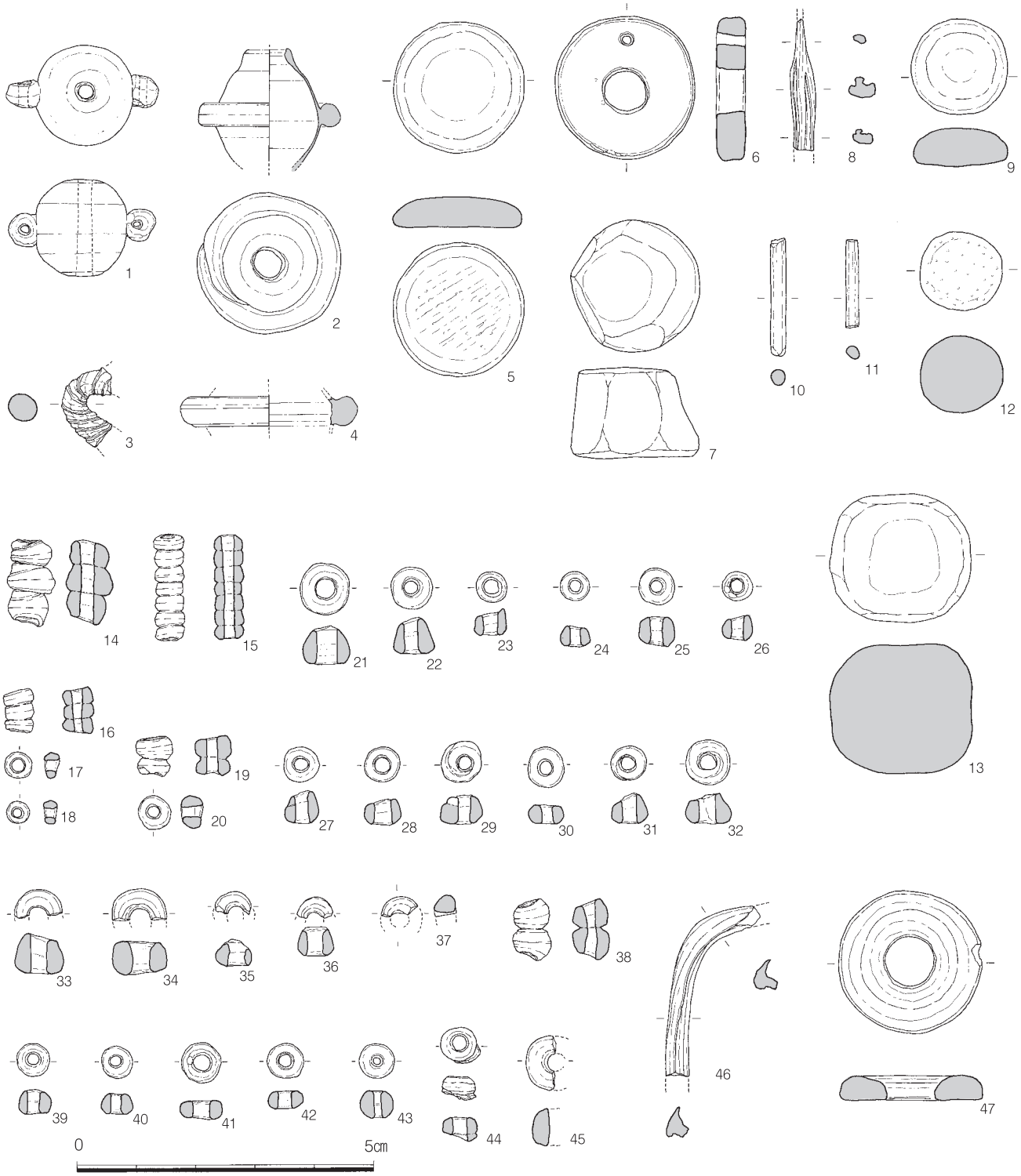


Fig.282　その他の出土遺物実測図　ガラス（1）

各ガラス製品・ガラス製作関連遺物の出土遺構や器種については表を参照されたい。

1はガラス製仏具と考えられる。大小のガラス玉を融着させたもので孔は方向を違える。2・4はガラス製容器である。第85次調査や隣接する第79次調査で類似した形状のガラス容器が出土している。これらは本体が1㎜も満たない薄さで、球形の胴部を持ち棒状の素材を輪状に巻き付ける。3はガラス容器の取っ手か。 14～16はガラス玉の製作工程を示す資料である。心棒に巻き付けられた状態で分割・研磨される前の遺物である。ガラス小玉は6㎜前後と9㎜前後の二群の大きさに分けられる。

59はガラス製容器の摘みか。幾重にもガラス素材をねじり込んだ形状となり、上面は円形に成形する。60は容器の取っ手か。青色系の色調を呈し、器面には小さな突起が配される。87は楕円形のガラス製品で短辺方向に孔が設けられる。

91～118は坩堝として使用された中国無釉陶器水注である。内外面にガラスが付着し、被熱により器面は変質しているものが多い。付着したガラスは一部鮮やかな発色のエメラルドグリーンを呈するが、ほとんどが風化のため乳褐色に変色する。出土した坩堝は無釉陶器水注を転用したものがほとんどで、坩堝専用に作られたと考えられる厚手のものは出土していない。遺構としては検出されなかったが、本調査区内に製作工房が存在していたことは確実であろう。

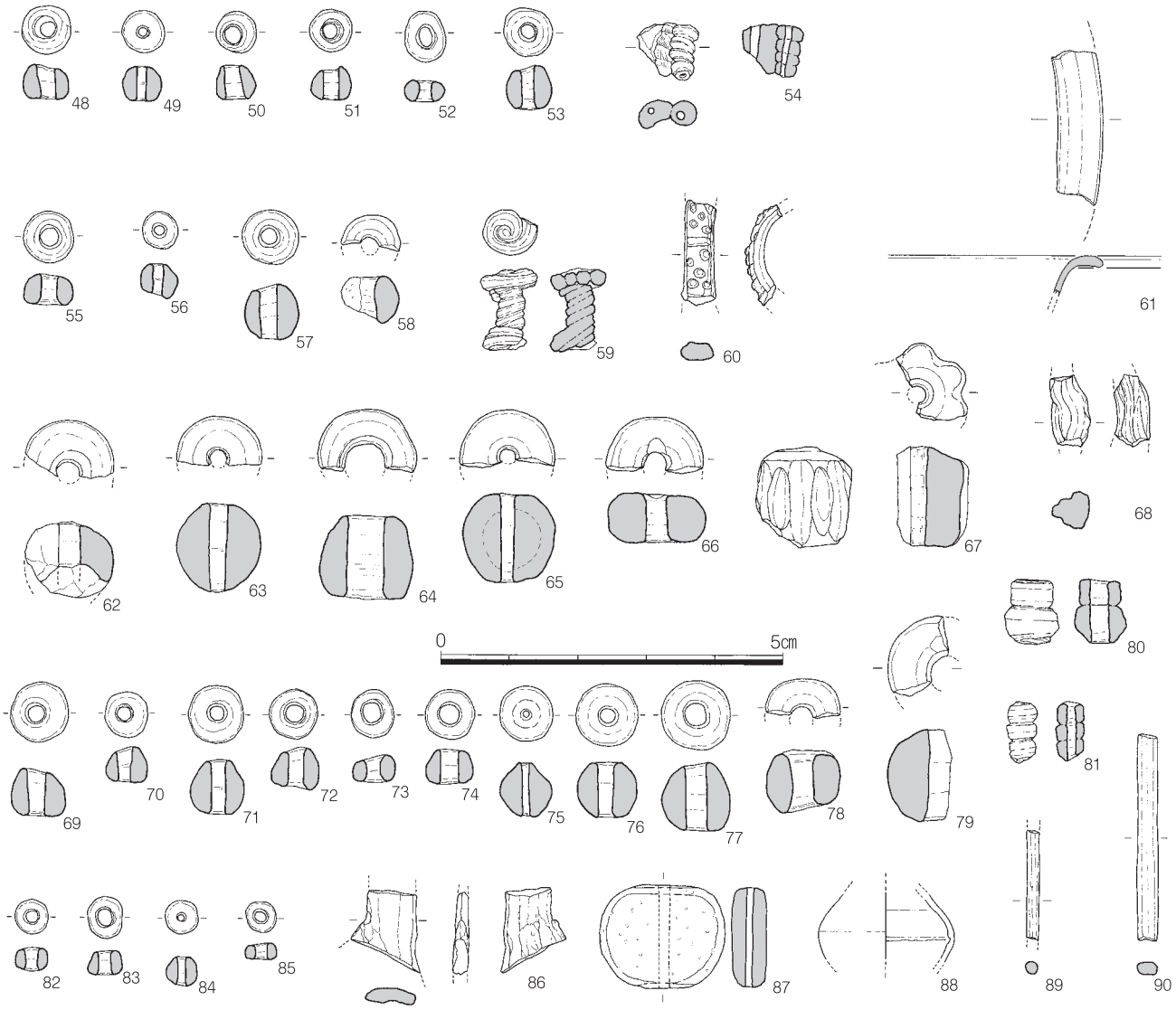


Fig.283　その他の出土遺物実測図　ガラス(2)

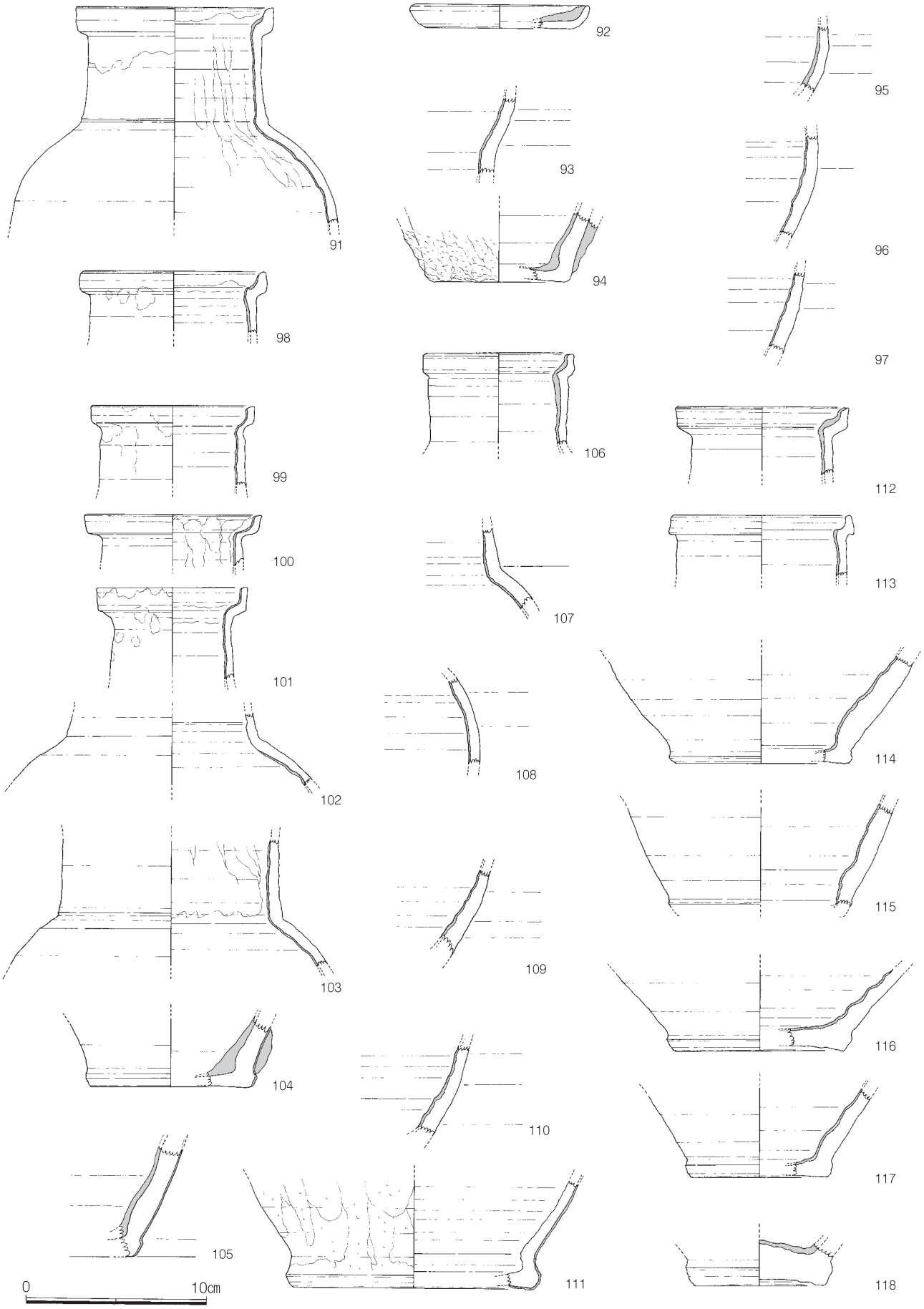


Fig.284　その他の出土遺物実測図　ガラス(3)

製品

番号	出土遺構			器形	製作技法(玉類のみ)	色調	分析結果
1	A1区	2面	No.1 S-032	丸玉(装飾付)	巻き付け・熔接	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
2	A1区	2面	No.3 P-301	容器蓋	―	淡緑色半透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
3	A1区		No.3遺構検出	不明装飾	―	白色	磁器?
4	A1区	2面	SK-303	容器蓋	―	淡緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
5	A1区	2面	SD-254	円盤(おはじき状)	―	淡緑色～白色	カリウム鉛ガラス
6	A2区		撹乱42	円盤(壁状)	―	青色-半透明　一部白色	カリウム鉛ガラス?
7	A区		撹乱31	不明塊	―	緑色-半透明	ソーダ石灰ガラス
8	A1区	2面	No.3	未製品？	―	緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
9	A区	2面	No.4 SK-368	円盤(おはじき状)	巻き付け？	白色	カリウム鉛ガラス
10	A1区	2面	No.3 SD-240	棒(素材？)	―	淡緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
11	A1区	2面	SD-240	棒(素材？)	―	緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
12	A区		撹乱13	球状	不明	緑色-半透明	ソーダ石灰ガラス
13	A区		北東トレンチ	不明塊	不明	緑色-半透明	ソーダ石灰ガラス
14	A区	4面	No.1	連玉(3ヶ)	巻き付け	緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
15	A区	2面	No.3 S-362	連玉(7ヶ)	巻き付け	淡緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
16	A1区	2面	No.1 SD-264	連玉(3ヶ)	巻き付け	淡緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
17	A1区	2面	No.1 SD-264	小玉	巻き付け	淡緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
18	A1区	2面	No.1 SD-264	小玉	巻き付け	淡緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
19	A2区	3面	No.1 SK-312	連玉(2ヶ)	巻き付け	白色　灰色	カリウム鉛ガラス
20	A2区	3面	No.1 SK-312	小玉	巻き付け	白色　灰色	未分析
21	A区	3面	No.2 SK-388	小玉	巻き付け	緑色-半透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
22	A2区	2面	No.6	小玉	巻き付け	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
23	A1区	2面	No.1	小玉	巻き付け	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
24	A1区	2面	SK-134南脇	小玉	巻き付け	淡緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
25	A1区	2面		小玉	巻き付け	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
26	A区	4面	No.1(No.2)	小玉	巻き付け	淡緑色-不透明　一部灰色	カリウム鉛ガラス
27	A1区	2面	No.3遺構検出	小玉	巻き付け	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
28	A区	2面	No.5 SK-265	小玉	不明	白色	カリウム鉛ガラス
29	A2区	3面	No.15	小玉	巻き付け	淡緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
30	A区	2面	No.3 S-362	小玉	巻き付け	緑色-不透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
31	A1区	2面	No.3 P-301	小玉	巻き付け	白色	カリウム鉛ガラス
32	A区		排土	小玉	巻き付け	緑色-半透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
33	A1区	2面	No.1 SD-264	小玉	巻き付け	白色	カリウム鉛ガラス
34	A区		埋甕5堀方	小玉	巻き付け	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
35	A区	2面	No.2 S-364	小玉	巻き付け	淡緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
36	A1区	2面	No.11	小玉	巻き付け	淡緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
37	A区	2面	No.4 SK-368	小玉	巻き付け	緑色-不透明　白色	カリウム鉛ガラス
38	B区	2面	No.2 P-462	連玉(2ヶ)	巻き付け	淡緑色-透明	カリウム鉛ガラス
39	B区	2面	No.1 SD-009	小玉	巻き付け	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
40	B区	2面	No.1 SD-009	小玉	巻き付け	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
41	B区	2面	No.3	小玉	不明	白色　一部黒色	カリウム鉛ガラス
42	B区	1面	No.1 P-388	小玉	巻き付け	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
43	B区	2面	No.1	小玉	巻き付け	白色	カリウム鉛ガラス
44	B区	1面	No.2 SD-379	小玉	巻き付け	淡緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
45	B区	2面	No.2	小玉	不明	白色	カリウム鉛ガラス
46	B区	3面	No.1	未製品?	引き伸ばし	淡緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
47	B区	2面	No.3 SD-007	有孔円盤	―	白色	カリウム鉛ガラス
48	C区		SK-311	小玉	巻き付け	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
49	C区		2面下掘り下げ	小玉	巻き付け	緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
50	C区		SK-598	小玉	巻き付け	淡緑色-透明	カリウム鉛ガラス
51	C区		1面下掘り下げ	小玉	巻き付け	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
52	C区		1面下掘り下げ	小玉	巻き付け	灰橙色-不透明	カリウム鉛ガラス
53	C区		1面下掘り下げ	小玉	不明	灰緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
54	C区		SK-361	未製品(連玉溶着)	巻き付け	緑色-透明　一部赤色	カリウム鉛ガラス
55	C区		1面下掘り下げ	小玉	巻き付け	灰緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
56	C区		SK-781	小玉	巻き付け	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
57	C区		1面下掘り下げ	小玉	巻き付け	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
58	C区		SK-596	小玉	不明	淡緑色-不透明　白色	カリウム鉛ガラス
59	C区		1面下掘り下げ	未製品?	巻き付け	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
60	C区		表土	不明(指輪?)	引き伸ばし？後	青色-透明	カリ石灰ガラス?
61	C区		2面下掘り下げNo.5	容器	不明	緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
62	C区		SK-247	丸玉	不明	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
63	C区		1面下掘り下げ	丸玉	不明	淡緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
64	C区		1面下掘り下げ	丸玉	巻き付け	半透明	カリウム鉛ガラス
65	C区		SK-604	丸玉	不明	透明　一部白色	カリウム鉛ガラス?
66	C区		SK-405	丸玉	不明	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
67	C区		SK-405	梔子玉	不明	緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
68	D区		SK-755	未製品?	不明	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
69	D区		1面下掘り下げNo.3	小玉	巻き付け	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
70	D区		SK-532	小玉	不明	薄緑色-半透明	カリウム鉛ガラス

博多遺跡群第 172 次調査出土ガラス・ガラス製作関連遺物一覧 1

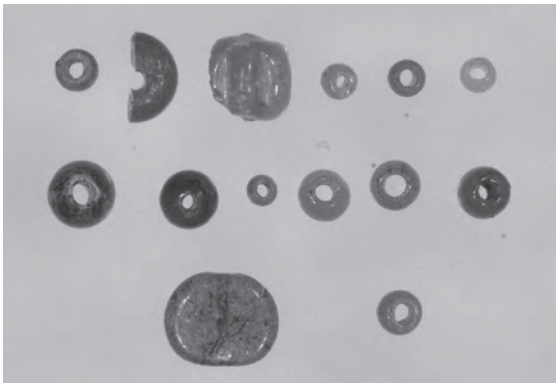
71	D区	SK-336	小玉	巻き付け	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
72	D区	廃棄土坑No.9、10	小玉	不明	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
73	D区	SK-359	小玉	不明	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
74	D区	2面下掘り下げNo.9、10	小玉	巻き付け	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
75	D区	2面下掘り下げNo.6	小玉	巻き付け	白色-不透明	カリウム鉛ガラス
76	D区	SK-073	小玉	巻き付け	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
77	D区	SK-673	丸玉	不明	緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
78	D区	1面下掘り下げ	丸玉	不明	緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
79	D区	SK-28下層	丸玉	不明	青色-不透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
80	D区	SK-259	連玉(2ヶ)	巻き付け	緑色-不透明　灰色	カリウム鉛ガラス
81	D区	SD-24下層	連玉(3ヶ)	巻き付け	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
82	D区	2面下掘り下げNo.15	小玉	巻き付け	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
83	D区	SE-338	小玉	巻き付け	淡緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
84	D区	2.5面下掘り下げ	小玉	不明	淡緑色-半透明	石英?
85	D区	廃棄土坑No.9、10	小玉	巻き付け	淡緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
86	D区	1面下掘り下げNo.5	未製品?	不明	淡緑色-半透明	カリウム鉛ガラス
87	D区	SK-935	平玉	不明	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
88	D区	SK-337	容器？	不明	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
89	D区	SK-337	棒(素材?)	―	緑色-透明	カリウム鉛ガラス
90	D区	SK-495	棒(素材?)	―	淡緑色-不透明	カリウム鉛ガラス

加工具

番号	出土遺構		器形	部位	付着ガラスの色調	分析結果
91	A1区	2面 SK-244	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	肩～口縁部	緑色-半透明　白色	未分析
92	A2区	2面 No.14遺構検出	土師器坏(糸切り？)転用ガラス取瓶		緑色-不透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
93	A2区	SK-147	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	胴部	緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
94	A区	2面 No.3 S-274	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	底部	緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
95	A1区	2面 No.1	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	胴部	緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
96	A1区	2面 No.1	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	胴部	緑色-半透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
97	A1区	2面 No.1	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	胴部	緑色-半透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
98	A区	3面 No.12 SD-213	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	口縁部	白色	カリウム鉛ガラス
99	C区	1面下掘り下げ	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	口縁部	白色	未分析
100	C区	1面下掘り下げ	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	口縁部	白色	カリウム鉛ガラス
101	C区	1面下掘り下げ	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	口縁部	白色	未分析
102	C区	2面下掘り下げ	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	肩部	淡緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
103	C区	SE-133	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	肩部	緑色-透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
104	C区	SK-599	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	底部	白色	カリウム鉛ガラス
105	C区	SK-599	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	底部	淡緑色-半透明　白色	カリウム鉛ガラス
106	D区	SK-935	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	口縁部	淡緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
107	C区	SK-599	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	肩部	白色	カリウム鉛ガラス
108	C区	SK-599	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	胴部	白色	カリウム鉛ガラス
109	D区	SK-935	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	胴部	白色-光沢	カリウム鉛ガラス
110	C区	2面下掘り下げ	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	胴部	緑色-不透明	カリウム鉛ガラス
111	D区	1面下掘り下げ	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	底部		未分析
112	D区	SK-932	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	口縁部	白色	カリウム鉛ガラス
113	D区	SK-073	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	口縁部	緑色-半透明　一部白色	カリウム鉛ガラス
114	D区	SK-935	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	底部	白色-光沢	カリウム鉛ガラス
115	D区	SK-935	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	底部	淡緑色-不透明　白色光沢	未分析
116	D区	SK-073	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	底部	白色	カリウム鉛ガラス
117	D区	SP-045	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	底部	黒色-光沢　一部白色	カリウム鉛ガラス
118	D区	SK-382	中国製無釉陶器水注転用ガラス坩堝	底部	緑色-半透明　一部白色	カリウム鉛ガラス

博多遺跡群第 172 次調査出土ガラス・ガラス製作関連遺物一覧２

Ph.256　ガラス小玉製作工程遺物



Ph.257　C・D 区出土ガラス製品

博多遺跡群第 172 次調査出土のガラス関連資料について

比佐陽一郎（文化財整備課）
石井千絵里（埋蔵文化財センター）

１．はじめに

博多遺跡群では、中世の都市遺跡として知られ、その時代を中心に多種多様な生活痕跡が発見されるが、その中には装飾品としてのガラスや、加工に関する遺物も含まれている。今回報告の 172 次調査は博多遺跡群の中でも大規模調査に位置づけられ、ガラス製品や加工具が多数出土している。

考古資料のガラスは、近年、理化学機器を用いた材質調査によって、その成分に時代や地域的な特徴のあることが明らかにされてきている（肥塚 2003）。福岡市では平成 11 年度に蛍光 X 線分析装置が導入されて以来、保存科学の立場からガラスの調査研究を進めている第一人者である肥塚隆保氏の指導を受けながら、市内出土資料の調査を進めてきた。今回も、172 次調査出土ガラス関連資料について、その歴史的位置付けを目的として、調査を行った。分析は微小領域用のエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置を用い、完全非破壊による定性分析で行っており、得られた各元素ピークの強弱からガラスの種類を推定している。

２．ガラス製品

全体の結果は一覧表に示している。分析では、ガラスの主成分である珪素の他に、ほとんどの資料で鉛が特徴的なピークとして検出されており、鉛珪酸塩系のガラスに分類される。同時にカリウムが検出されるものも多く、これらは、博多という中世の都市遺跡という場所柄、中世ガラスを代表するカリウム鉛ガラスと見られる。この種のガラスは中国宋代に開発されたクリスタルガラスの一種で（肥塚 2003）、日本では平安時代後期頃から見られるようである。中にはカリウムのピークがそれほど強くなく、カルシウムが強めに現れるものもあるが、これは観察結果とも合わせると風化による影響と見るのが妥当であろう。172 次の調査地点は、博多遺跡群を構成する 3 つの砂丘の最も陸地側に当たり、ここでは弥生時代に遡る生活痕跡も認められている。鉛系のガラスには鉛バリウムガラスや鉛ガラスといった、弥生時代など古い時代に流通するタイプもあり安易な判断は危険であるが、今回分析を行った資料では、弥生、古墳時代に遡るものは含まれていないようである。

カリウム鉛ガラスと判断される資料では、玉類の他に小型容器の蓋と見られるもの（№.2）がある。色調は淡い青緑色で、器壁が 1mmに満たない非常に薄手のガラスで作られている。よく似た形状の資料は、容器本体とセットになったものが 79 次調査で見つかっている。色は黄緑色である。この資料では鉛同位対比分析が行われ、中国華南産との結果が得られている。また蓋だけは 85 次や 115 次、118 次、など数カ所で類例が見られる。

中央に孔を持つ小型の青色円盤（№.6）は、大きさは別にして形が中国古代の玉器である璧に似ている。中央の孔とは別に円盤部分にも小孔を持つ。この様な資料は 31、35、71、90 次などに類例が見られ、色は青の他に乳白色がある。佐藤一郎氏は、中国に類例が求められることから、宋人が護符として用いたものとしている（佐藤 2008）。

鉛系のガラス以外では、ナトリウムを含み、カルシウムが検出される資料が数点認められ、これらはソーダ石灰ガラスと考えられる。この種類は弥生～古墳時代に普遍的に見られるが、ここでのソーダ石灰ガラスは、形がビー玉状や大型の裁頭円錐形など古い時代のものとは考えにくく、出土も撹乱

からである。近現代の工業ガラスもソーダ石灰ガラスが多く、新しい時代の資料であろう。

他に、カリウムが強く、一見すると弥生時代に盛行するカリガラスのチャートに見えるが、同時にカリガラスにはあり得ないほどカルシウムが強めに検出されるものもある。これらは詳細な検討はしていないが、江戸時代のガラスとされるカリ石灰ガラスの可能性が考えられる。172 次の資料中では、湾曲した細い板状の製品（№60）がこれに該当する。これは半透明の青色で、湾曲した外側の面に微細な突起が作られている。よく似た資料が春日市の須玖岡本遺跡で出土し、指輪とされている（平野 2001）。こちらの資料は弥生後期の所産であり、博多の資料の一時カリガラスを疑ったが、やはりカルシウムが強く、また亜鉛が検出されていることもあり、新しい時代の資料と考えるべきであろう。

完成品の他に形のいびつな資料や連玉が何かと溶着したようなものが数点見られる（№8、46、54、59、68 など）。これらは加工時に生じた断片や失敗品などと考えられ、以下に触れる坩堝との関係で捉えるべき資料である。

3．ガラス加工具

ガラスを加工する際に溶解に用いたと考えられる「坩堝」が、破片数にして 28 点、また土師皿に溶けたガラスが付着したものが 1 点出土している。土師皿はたまたま付着したとも見えるが、何らかの道具と捉えるのであれば、溶けたガラスをすくい取るといった用途が思い浮かぶ。

坩堝は過去、博多や、周辺の箱崎、吉塚（祝町遺跡）、そして大宰府などで類例が見つかっているが、特に博多では 172 次を含め 18 箇所の調査地点で確認されており、数の多さが際だっている。中国製の陶器水注を転用したタイプ（I 類）と、胴部と頸部の形状は水注に似ていながら注ぎ口や把手を有さず、器壁も分厚く大粒の砂粒を多く含むタイプ（II 類）の二種類が見られる。I 類は更に、無釉盤口水注と呼ばれる型式（a 類）と、褐釉水注（b 類）の二種類に細分される。今のところ、II 類は I 類を真似て、坩堝専用に作られたと推測している。一つの調査地点で多くの個体が出土する場合、両者が共存する状況も見られるが、172 次調査では全て Ia 類である。二種類の型式はあるものの、平坦な底部を有する卵形に膨らんだ胴部に、ややすぼまった頸部が付き、口縁に段を有する形状は共通しており、画一的な形状を呈する。これらの形態的特徴が、坩堝としての用途に直結したものであることを示していると思われる。これまで炉跡など加工に関わる遺構そのものは確認されておらず、使用状況は明らかではない。しかし、資料に残された被熱などの痕跡から推測するならば、口縁から数 cm を残して熱による器体の変色が認められ、口だけを出して、炉の中などに入れて加熱した状況が窺える。水注の転用は、口が内部の観察を阻害しない程度にすぼまり、溶けたガラスが空気に触れにくくする効果を期待したものとも考えられる。

また 172 次の資料にも見られるが、他にも 59 次や 147 次出土の資料で、破断面や胴部の表面まで溶けたガラスが付着している資料がある。今のところこれらは I 類に限定される。陶器は胎土に砂粒を含み、磁器よりは高温加熱に耐えやすいとはいえ、元々坩堝として作られたのでは無いことから、作業中に破損することも多かったのであろう。

この坩堝を用いて作られた製品であるが、内部に残された付着ガラスは、風化や変質を免れたものを見ると、青～緑に限られるようである。172 次の出土例も色の濃淡はあるものの、ここから逸脱するものは見られない。博多で出土する玉類やその未製品には、青～緑色系統の色調が多く、候補の一つとなり得る。しかし、やはり溶解のための容器以外に、成形のための道具類が出土していない（確認できていない）現状では、色調と材質（ガラスの種類）から推測するしかなく、それ以上の追求はできない。その中で、59 次、62 次出土の資料では鉛同位対比分析が行われ、対馬の対州鉱山との結

果が得られており（山崎ほか 1995）、ガラス原料の出自を考える上での一つの手掛かりとなっている。

資料の年代であるが、共伴遺物が確認できる場合、その多くは 12 世紀代の年代を示しており、使用された期間も中世という広い時代幅で見れば限定的といえる。

最後に、博多遺跡群内での出土地点を細かく見てみたい。発見される場所は、いずれも博多浜に限定されるが、これは 12 世紀という時期的なものも関与しているであろう。小片のみの出土地点まで含めれば散在しているように見えてしまうものの、ある程度数がまとまって出土する場所からは、数カ所の集中地点が浮かび上がる。一つは 115 次調査地点を中心とする店屋町南東端部分＝①で、３列ある砂丘の真ん中、砂丘２の中央付近に当たる。次が 62 次調査地点を中心とする、砂丘２の付け根付近、御供所町南西端＝②。もう一つが祇園町の 50 次調査地点とその周辺で、最も南の砂丘１西側＝③になる。それぞれの地点は 200 ～ 500m ほどの距離がある。今回の 172 次調査地点は、②と③の間、やや②よりであるが、②と同じ範疇で考えられるのか、独立しているのかは、現時点では判断する材料がない。また、時期的に限定されるといいながらも 100 年程度の時間幅はあり、各地点が併存していたのか、時期ごとに場所を移していたのかも、今後検討すべき課題の一つである。

４．おわりに

今回、172 次調査出土のガラス関連資料を調査し、製品に関しては、カリウム鉛ガラスの優位性が改めて確認された結果となった。そして、多くの坩堝破片の出土は、これらガラス製品の出自に関わる資料としても注目されるものである。

博多を含めた福岡平野では、弥生時代に「奴国」に関連すると見られる場所でガラス加工の痕跡が見つかって以後、古墳～平安前期の間は姿を消してしまう。それが 12 世紀になると、「突如」、博多遺跡群にガラス加工技術が現れるのである。しかし、これも 100 年程度で消え去り、それ以後、都市の繁栄と裏腹にガラスづくりの痕跡は見られなくなる。12 世紀末以降、博多では聖福寺をはじめとする大規模寺院の開山などがあり、金属加工については仏具の製作などにおいて、その痕跡が認められるのに対し、ガラスも荘厳装飾に欠かせない部品でありながら、完成品は出土するものの製作技術が継承されないのは非常に不可解である。

また 12 世紀のガラス加工技術も、坩堝についていえば、ある時期、博多でガラスの加工が行われているという事実以外、「誰が」、「何のために」、「何を」といった部分が今ひとつ明確になっていない。その中で類例だけがただ増えていく状況は何とも忸怩たる思いではあるが、博多という国際都市の中では、技術移転という観点からも大きなテーマであり、今後も注目して見ていきたい資料である。

［参考文献］

肥塚隆保 2003「日本出土ガラスの考古学的研究－古代ガラス材質とその歴史的変遷－」『考古科学の総合的研究 研究成果報告書』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター

佐藤一郎 2008「博多居留宋人が遺したもの」『福岡市博物館研究紀要』第 18 号　福岡市博物館

平野芳英（編）2001『ガラスのささやき　古代出雲のガラスを中心に』島根県立八雲立つ風土記の丘

山崎一雄・肥塚隆保・白幡浩志 1995「博多遺跡群第 62 次調査で出土した無釉壺破片に付着した緑色ガラスの化学分析値と鉛同位対比」『博多 48 －博多遺跡群第 62 次調査の概要－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 397 集　福岡市教育委員会

（※博多遺跡群の各報告書については、紙幅の関係上割愛した）

b．墨書土器（Fig.285 ～ 300）

第 172 次調査では 507 点以上の墨書土器が出土した。隣接する第 79 次調査においても 500 点以上の墨書土器が出土したことが報告されており、本調査と併せると 1000 点以上の墨書土器が博多濱南部域の一角から出土したことになる。博多遺跡群調査全体では現在数千点以上を数えるが、その数割が本調査地点付近に集中している。墨書された土器は須恵器・土師器・白磁・青磁・中国陶器・国産陶器・礫など多岐にわたる。出土地点の傾向としては A・B 区から約 120 点、C・D・E 区から 390 点近く出土する。390 点の内約 100 点が遺構面の掘り下げ時に出土したものであるが、絶対量として調査区南側の範囲から多く出土したことが分かる。遺構別としては廃棄土坑・溝遺構から出土するものが多く、数点がまとまって出土する状況も見られる

出土した墨書土器の内、8 点が朱墨で墨書されたものである。「＊」や「一」、「六」等の数や記号を記したもので、積荷の仕分け作業の際に目立つように朱墨が使用されたのか。

多くの墨書土器の内、31 点が古代の時期に属するものである。これまでの博多遺跡群で行われた数々の調査で 70 点前後の出土が報告されているが、中世の墨書陶磁器とは墨書の意味合いが異なり、これだけの数量の墨書土器がまとまって出土したことは古代の博多における調査地点付近の性格を考える上で重要な資料である。これらの墨書土器は須恵器碗高台内・蓋天井部や土師器埦・高坏に記されたもので、「三宅」や「長」など官衙施設や官人階級の存在を強く示唆する遺物も出土している。判読不能なものが多いが「房」「廣宣」「弐」「十」「三」等の墨書が読める。

中世の時期に位置づけられる墨書土器では白磁碗高台内に墨書されるものが圧倒的に多い。欠損や汚れのために判読不能なものが多いが、「綱」「林」「房」等の墨書が見られる。また花押と考えられる同一の墨書が数点以上出土しており、これらの墨書土器は 12 世紀前半の遺構から多く出土する傾向が見られ、唐房の宋商人の居宅にて使用・廃棄されたものと考えられる。

出土した墨書土器の出土遺構・器種・読みについては表を参照されたい。

博多遺跡群第 172 次調査出土墨書一覧 1

報告番号	区	面	遺構	種類	器形	墨書内容	備考
1	A区		SE-447	須恵器	杯蓋	三宅	外面に墨書
2	C区		SE-532	須恵器	蓋	□	外面
3	D区		SK-10完掘	須恵器	坏	長	底面
4			SK-10完掘	土師器	高坏	十	坏底部
5			SK-254	須恵器	碗	花・絵画	高台内
6			SK-426	須恵器	坏・ヘラ切	記号	高台内
7			1面下掘り下げ	須恵器	碗	□	高台内
8	C区		SK-348	須恵器	坏	□	底面
9			SK-841	須恵器	碗	□□	底面
10			SK-376	須恵器	碗	□	高台内
11	D区		SD-21	須恵器	碗	□	高台内
12			1面遺構検出	須恵器	坏・ヘラ切		底面
13			SK-229	須恵器	坏・ヘラ切		底面
14			SK-336	須恵器	碗	□	底面
15			SK-753	須恵器	坏・ヘラ切	□	底面
16			SK-721	須恵器	碗	弐	高台内
17			SK-860	須恵器	坏	国	底面
18	C区		1面下掘り下げ	須恵器	碗	□	高台内
19			SK-461	須恵器	坏	□	底面
20	D区		SK-947	須恵器	蓋	□	天井部
21			SE-897	須恵器	蓋	□	天井部
22			SE-897	土師器	坏・ヘラ切	二	底面
23			SP-351	須恵器	坏・ヘラ切	朱墨	底面
24			SK-396	須恵器	坏		底面
25			2.5面下NO.1・6	須恵器	坏	新□	底面
26			SK-856	須恵器	碗	□□□	高台内
27			SK-463	須恵器	坏		底面
28			2.5面遺構検出	須恵器	碗	房	高台内
29			SK-721	須恵器	碗	正	高台内
30			SE-863	須恵器	坏・ヘラ切	□□	底面
31			2面下NO.7	土師器	埦	廣宣	高台内
32	A区	2面	SD007	白磁	碗	不明	
33			SD007	白磁	高台付皿	徐	高台アーチ状の抉り
34		1面	SD157	白磁	皿	不明	
35		2面	SD213	白磁	碗	僧or綱の　略字。	
36		2面	SD240	同安系青磁	碗	陳の一部	土師器溜
37		2面	SD240	白磁	平底皿	不明	
38		2面	SD240	白磁	碗	佛。	
39		2面	SD240	白磁	平底皿	花押。	
40		2面	SD240	白磁	碗	恒近。	
41		2面	SD264	陶器	壺	不明	
42		2面	SD264	白磁	皿	不明	
43		2面	SD264	白磁	皿	林	
44		2面	SD264	白磁	小碗	七。	
45		2面	SD264	白磁	碗	不明	

報告番号	区	面	遺構	種類	器形	墨書内容	備考
46	A区	2面	SD264	白磁	碗	綱の略字。	瓦玉
47		2面	SK131	白磁	碗	万十。	
48		1面	SK25	龍泉窯系青磁	碗	不明	
49		1面	SK81	白磁	碗	十or大。	
50			SK131	白磁	碗	不明	高台脇体部
51			SK131	同安系青磁	平底皿	不明	
52		2面	SK131	白磁	皿	不明	
53			SK132	白磁	碗	不明	
54		2面	SK135	白磁	碗	□花押。	
55		2面	SK138	白磁	碗	李綱	
56			SK135	黄釉鉄絵陶器	盤	□記。	
57		2面	SK135	陶器	壺	永。	土師器溜
58		2面	SK138	白磁	碗	謝	
59			SK009	白磁	碗	不明	
60		2面	SK147	青白磁	平底皿	不明	
61		2面	SK147周辺	白磁	平底皿	不明	
62		2面	SK147周辺	白磁	平底皿	記号。	
63		2面	SK147	白磁	碗	不明	
64		2面	SK147	白磁	碗	丁□。	
65		2面	SK168	白磁	四耳壺	不明	
66		2面	SK228	白磁	碗	十九。	
67		2面	SK253	白磁	碗	不明	瓦玉
68		2面	SK259	白磁	碗	記号。	
69		2面	SK288上面	白磁	碗	貼	「安置する」の意
70			SK312	黒釉磁	碗	不明	黒定
71		2面	SK313	白磁	碗	不明	
72		3面	SK390	白磁	碗	林花押。	
73		2面	SK168	白磁	碗	不明	
74		2面	SK168	白磁	碗	不明	高台脇にも墨書有り
75		2面	SK168	白磁	碗	不明	
76			SK393	白磁	碗	不明	
77		3面	SK422	白磁	碗	程。	
78		4面	SK521	白磁	碗	陳綱	瓦玉
79		2面	SK168	白磁	碗	不明	
80		2面	SK174	龍泉窯系青磁	碗	不明	
81		4面	SK509	白磁	碗または鉢	李	瓦玉
82		4面	SK509	白磁	小碗	綱司	瓦玉
83		1面	P061	白磁	壺	周□	瓦玉
84		4面	P669	白磁	高台付皿	不明	
85			井戸5	白磁	碗	林花押。	
86			井戸7	白磁	高台付皿	花押。	
87		3面	遺構外	青白磁	碗または鉢	王□	瓦玉
88		1面	遺構外	土師器	皿	絵。	内外面に墨書
89		3面	遺構外	唐津焼	高台付皿	大	
90			拡張部	青磁	碗	花押。	

報告番号	区	面	遺構	種類	器形	墨書内容	備考
91		3面	遺構外	同安系青磁	碗	不明	
92		2面	遺構外	白磁	高台付皿	十or王»	
93		2面	遺構外	白磁	高台付皿	林花押»	
94		2面	遺構外	白磁	高台付皿	不明	
95		2面	遺構外	白磁	碗	不明	
96		2面	遺構外	白磁	碗	花押»	
97			SE149	白磁	碗	謝□»	瓦玉
98			拡張部	白磁	浅碗	花押»	
99		2面	遺構外	白磁	平底皿	不明	
100			東トレンチ	白磁	平底皿	不明	
101		2面	遺構外	白磁	碗	不明	
102	A区		SE219本体	白磁	平底皿	揚or楊»	灯明皿
103			SE219	白磁	碗	陳□	
104		2面	遺構外	白磁	碗	不明	瓦玉
105		2面	遺構外	白磁	碗	不明	
106			東トレンチ	白磁	碗	不明	
107		3面	SE437	白磁	碗	□花押»	
108		2面	遺構外	白磁	碗	草書不明	瓦玉・B25と筆跡同じ
109		1面	攪乱19	同安系青磁	碗	不明	
110		1面	遺構外	龍泉窯系青磁	碗	太	
111		1面	近世攪乱	白磁	高台付皿	錢綱	
112		1面	攪乱2	白磁	碗	僧□□»	
113	A・B区		排土中	天目	碗	王	
114		3面	SD007	京都系土師器	皿	不明	
115		3面	SD007	青白磁	碗	不明	
116		2面	SD007＋SD379	白磁	皿	不明	
117		2面	SD007＋SD379	白磁	皿	不明	
118		3面	SD007	白磁	皿	不明	
119	B区	2面	SD007＋SD379	白磁	八角杯	不明	
120		2面	SD007	白磁	碗	不明	
121		2面	SD007	白磁	碗	不明	瓦玉
122		2面	SD007	白磁	碗	花押»	瓦玉
123		2面	SD007上層	白磁	碗	九綱»	
124		2面	SD007＋SD379	龍泉窯系青磁	碗	不明	

報告番号	区	面	遺構	種類	器形	墨書内容	備考
125		3面	SD007	龍泉窯系青磁	碗	礻□	
126		2面	SD379	白磁	皿	不明	
127		3面	SD357	白磁	碗	丁綱五十口内	
128			SD379	黄釉鉄絵陶器	盤	大»	
129		2面	SD379	天目	碗	林	
130			SD379	陶器	鉢	大□	
131		2面	SD379	白磁	皿	不明	
132		3面	SD379	龍泉窯系青磁	碗または鉢	一□	
133		2面	SD379	白磁	碗	不明	
134		2面	SD379	白磁	碗	花押»	
135		2面	SD379	白磁	碗	不明	墨書？
136		2面	SD379	白磁	碗	不明	
137		2面	SD379	白磁	碗	不明	
138		3面	SK416	白磁	高台付皿	林綱or花押	
139		3面	SD412	陶器	盤口壺	花押»	
140		1面	SK346	青白磁	碗	花押»	瓦玉
141	B区	3面	SD412	白磁	皿	五or王	
142		2面	SK378	古代土師器	皿	大	
143		3面	SK378	白磁	碗	不明	
144		2面	SK378	朝鮮陶器	碗	花押»	瓦玉
145		4面	SK527	白磁	小碗	花押»	
146		3面	SE498	白磁	高台付皿	記号○丶»	
147		3面	SK416	白磁	碗	九郎置　or四十	
148			SK417	白磁	碗	不明	
149		1面	遺構外	褐釉磁	碗	綱司	
150		1面	遺構外	白磁	皿	花押»	
151		2面	遺構外	白磁	小碗	丁綱»	
152		1面	遺構外	白磁	碗	綱の略字	
153		1面	遺構外	白磁	碗	不明	
154		1面	遺構外	白磁	碗	草書不明	B18と筆跡　同じ
155		2面	遺構外	白磁	碗	林□	
156		2面	遺構外	白磁	碗	陳	
157		2面	遺構外	白磁	壺	綱の略字の一部»	
158	A区	2面	遺構外	白磁	碗	林□	
159	B区	1面	遺構外	龍泉窯系青磁	小碗	荘花押»	

報告番号	区	面	遺構	種類	器形	墨書内容	備考
160			SK005	白磁	高台付皿	□	高台内
161			SK040	白磁？	高台付皿	十	高台内
162			SK067	土師器	坏(糸切り)	□	底面
163			SE081	白磁	平底皿	白	底面
164			SK087	土製品	土鈴	□	外面
165			SK087	土製品	土鈴	□	外面
166			SK087	土製品	土鈴	□	
167			SK087	白磁	高台付皿	六	高台内
168			SK194	陶器？	高台付皿	一	高台内
169			SK199	白磁	碗	一	高台内
170			SE245	白磁	小碗	□	高台内
171			SE245	白磁	平底皿	六	底面
172			SK294	同安窯系青磁	平底皿	□	底面
173			SE080	国産陶器	盤	○にH	底面
174			SE247	白磁	玉縁碗	朱墨:＊	高台内
.175			SE247	白磁	碗	朱墨:一	高台内
176			SE247	白磁	碗	□	高台内
177			SK309	白磁	碗	西南	高台内
178			SK343	白磁	碗	□	高台内
179			SK350	白磁	碗	□□	高台内
180			SK321	白磁	平底皿	古□	高台内
181			SK363	陶器	天目茶碗	月	高台内
182			SK382	白磁	碗	□	高台内
183			SK391	中国陶器	盤	□	底面
184			SK395	白磁	碗	□	高台内
185			SK419	白磁	碗	□	高台内
186			SK404	中国陶器	盤	□	底面
187			SE598	中国陶器	盤(底部片)	□	底面
188			SK468	白磁	碗	白	高台内
189			SK472	白磁	碗	□	高台内
190			SK511	白磁	碗	上	高台内
191	C区		SE532	白磁	碗	□	高台内
192			SK573	白磁	碗	孫綱	高台内
193			SK590	同安窯系青磁	平底皿	□	底面
194			SE594	同安窯系青磁	平底皿	□	底面
195			SK596	白磁	小碗	周	高台内
196			SE598	中国陶器	蓋	□	天井部
197			SE598	中国陶器	盤(底部片)	□	底面
198			SE598	白磁	碗	□□	高台内
199			SE598	白磁	碗	□□	高台内
200			SE598	白磁	碗	□	高台内
201			SE598	白磁	碗	衣？	高台内
202			SK617	白磁	碗	井	体部下半
203			SK605	土師器	坏	王	底面
204			SK624	陶器	天目茶碗	□	高台内
205			SK625	白磁	碗	□	高台内
206			SK625	白磁	高台付皿	十	高台内
207			SK674	同安窯系青磁	碗	□	高台内
208			SK673	中国陶器（褐釉）	壺	西	高台内
209			SK625	白磁	平底皿	三	底面
210			SK682	陶器	天目茶碗(高台部)	□	高台内
211			SK661	白磁	碗	十	高台内
212			SK654	白磁	平底皿	□	底面
213			SK664	白磁	碗	杯□	高台内
214			SK680	龍泉窯系青磁	碗	朱墨:一	高台内
215			SK677	陶器	天目茶碗	□	高台内
216			SK677	同安窯系青磁	碗	花押	高台内
217			SK679	白磁	高台付皿	□	高台内
218			SK688	龍泉窯系青磁	平底皿	□	底面
219			SK690	白磁	壷(底部)	□	高台内
220			SK706	白磁	碗	□	高台内
221			SE745	白磁	碗	□	高台内
222			SK713	土師器	埦	□	高台内

報告番号	区	面	遺構	種類	器形	墨書内容	備考
223			SK721	白磁	碗	□	高台内
224			SK786	白磁	碗	花押？	高台内
225			SE786	同安窯系青磁	平底皿	□	底面
226			SE786	同安窯系青磁	平底皿	□	高台内
227			SK797	白磁	碗	六	高台内
228			SK814	白磁	碗	□	高台内
229			SK839	白磁	高台付皿	□	高台内
230			1面遺構検出	白磁	高台付皿	□	高台内
231			1面遺構検出	白磁	小碗	王□	高台内
232			1面遺構検出	白磁？	壷	□	高台内
233			2面NO.4掘り下	白磁	碗	供	高台内
234			1面西側トレンチ	白磁	高台付皿	郭□	高台内
235			NO. 5・6カクラ	白磁	碗	林□	高台内
236			1面下掘り下げ	同安窯系青磁	平底皿	□	高台内
237			1面下掘り下げ	同安窯系青磁	碗	□	高台内
238			1面下掘り下げ	同安窯系青磁	碗	告？	高台内
239			1面下掘り下げ	同安窯系青磁	碗	朱墨:六	高台内
240			1面下掘り下げ	白磁	高台付皿	□	高台内
241			1面下掘り下げ	白磁	高台付皿	□	高台内
242			1面下掘り下げ	白磁	高台付皿	□	高台内吾
243			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□	底面
244			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□	底面
245			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□	底面
246			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□	底面
247			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□	底面
248			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□	底面
249			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□	底面
250			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□	底面
251			1面下掘り下げ	白磁	碗	□汁	高台内
252			1面下掘り下げ	白磁	碗	九？	高台内
253			1面下掘り下げ	白磁	碗	朱墨・□	底面
254	C区		1面下掘り下げ	白磁	碗	一	高台内
255			1面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
256			1面下掘り下げ	白磁	碗	□	底面
257			1面下掘り下げ	白磁	碗	斗□？	高台内
258			1面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
259			1面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
260			1面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
261			1面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
262			1面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
263			1面下掘り下げ	白磁	碗	一	高台内
264			1面下掘り下げ	白磁	碗	建？	高台内
265			1面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
266			1面下掘り下げ	白磁	碗	□済	高台内
267			1面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
268			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	公？	底面
269			2面下掘り下げ	白磁	高台付皿	□	高台内
270			2面下掘り下げ	白磁	碗	安□	高台内
271			2面下掘り下げ	白磁	高台付皿	□	高台内
272			2面下掘り下げ	白磁	碗	三	高台内
273			2面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
274			1面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
275			1面下掘り下げ	龍泉窯系青磁	平底皿	□	底面
276			1面下掘り下げ	龍泉窯系青磁	碗	□	高台内
277			2面下掘り下げ	白磁	碗	一	高台内
278			2面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
279			2面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
280			2面下掘り下げ	白磁	碗	下	高台内
281			2面下掘り下げ	白磁	平底皿	□	底面
282			2面下掘り下げ	白磁	平底皿	方	底面
283			2面下掘り下げ	白磁	平底皿	□	底面
284			2面下掘り下げ	白磁	平底皿？	□	底面
285			2面下掘り下げ	須恵質土器	坏？壷？	□	底面

報告番号	区	面	遺構	種類	器形	墨書内容	備考
286			SK002	白磁	碗	□	高台内
287			SE05	龍泉窯系青磁	碗	□	高台内
288			SK006	同安窯系青磁	平底皿	上	底面
289			SX28	白磁	平底皿	正	内面
290			SK010完掘	白磁	碗	三□	高台内
291			SK10	白磁	浅碗	□□	高台内
292			SK10	土師器	坏	□	底面
293			SD21	白磁	碗	□□	高台内
294			SD21	白磁	平底皿	□	底面
295			SK023(NO.10)	白磁	碗	綱	高台内
296			SD24	土師器	坏・糸切		底面
297			SD24	瓦質土器	獅子頭		
298			SK025下層	同安窯系青磁	碗	□□	高台内
299			SX28	白磁	碗		側面
300			SX28	白磁	碗	□	高台内
301			SX28	土師器	坏・糸切	条線	底面
302			SX28	土師器	坏・糸＋板	条線	内面
303			SD028最下層	龍泉窯系青磁	碗	上	高台内
304			SK044	中国陶器	壺	鄭□	底面
305			SK58	土師器	小皿・糸切		底面
306			SK70	同安窯系青磁	碗	□□□	高台内
307			SK073	陶器	天目茶碗	□	高台内
308			SK073	白磁	高台付皿	五	体部下半
309			SK073	白磁	高台付皿	□	高台内
310			SK073	白磁	平底皿	白	底面
311			SK073	白磁	平底皿	□	底面
312			SK073	白磁	碗	林立	高台内
313			SK073	土師器	坏	□	側面
314			SK73	白磁	碗	条線	高台内
315			SK73	白磁	碗	□	高台内
316			SK83	白磁	浅碗	□□	高台内
317			SK118	白磁	碗	り	高台内
318			SK114	白磁	小碗	佛	高台内
319			SK122	白磁	碗	□□	高台内
320			SK138	白磁	碗	林□	高台内
321			SK139	中国陶器	鉢		側面
322			SP141	土師器	坏・糸切		内面
323			SK156	土師器	坏(ヘラ切)	分□□□	底面
324			SK188	白磁	碗	信房	高台内
325			SP221	須恵質土器	鉢	条線	側面
326			SK229	白磁	平底皿	□	底面
327			SK229	白磁	碗		高台内
328			SK229	龍泉窯系青磁	碗	□	高台内
329			SK229下層	白磁	壷	最□□	底面
330			SK240	同安窯系青磁	平底皿		底面
331			SK173	同安窯系青磁	碗	白	高台内
332			SK188	白磁	碗	□	高台内
333			SK225	中国陶器	盤		底面
334			SK229	白磁	碗	□	高台内
335			SK229	白磁	碗		高台内
336			SK229	龍泉窯系青磁	碗	二	高台内
337			SK229	龍泉窯系青磁	碗	□	高台内
338			SK240	龍泉窯系青磁	碗	記号	高台内
339			SK240	龍泉窯系青磁	碗		高台内
340			SK291	白磁	碗	□□	高台内
341	D区		SK322	青白磁	平底皿	□	底面
342			SK322	白磁	碗	朱墨	高台内
343			SK401	天目茶碗		下	高台内
344			SK401	白磁	高台付皿	□□	高台内
345			SK405	白磁	平底皿	徐	底面
346			SK284	白磁	瓜型壷	□□	底面
347			SK334	白磁	碗	□	高台内
348			SK334	中国陶器	壺	□	底面
349			SK401	白磁	平底皿		底面
350			SK337	白磁	碗	□	高台内
351			SK382	白磁	平底皿	三□	底面
352			SK382	白磁	碗	花押	高台内
353			SK393	白磁	碗	信之	高台内
354			SK402	白磁	平底皿	上	底面
355			SK402	白磁	碗	十	高台内
356			SK413	白磁	碗	了	高台内
357			SK405	白磁	碗	九□	高台内
358			SK415	白磁(青白磁)	碗	九□	高台内
359			SK429	白磁	碗	□□	高台内
360			SK467	中国陶器	碗		側面
361			SK488	白磁	平底皿	白	底面
362			SK489	白磁	平底皿	□	底面
363			SK490	白磁	碗	□	高台内
364			SK491	白磁	碗	□□	高台内
365			SK491	白磁	碗	□□	高台内
366			SK431	土師器	坏・ヘラ切		底面
367			SK494	龍泉窯系青磁	碗	□	高台内
368			SK502	白磁	碗	上	高台内
369			SK511	白磁	碗	□□	高台内
370			SK511	白磁	碗		高台内
371			SK517	白磁	碗	□	高台内
372			SK461	白磁	碗		高台内
373			SK494	土師器	坏・ヘラ切	□	底面
374			SK539	白磁	碗	□	高台内
375			SK539	土師器	坏・ヘラ切		底面
376			SK539	白磁	玉縁碗		高台内
377			SK539	白磁	碗	□□	高台内
378			SK539	白磁	碗	容□	高台内
379			SK539	白磁	碗	□	高台内
380			SK541	白磁	小碗	の	高台内
381			SK541	白磁	碗	□□	高台内
382			SK461	白磁	高台付皿	□□	高台内・側面
383			SK578	白磁	碗	亘	高台内
384			SK541	白磁	平底皿	□	底面
385			SK583	青白磁	碗	□□	高台内
386			SK541	土師器	塊(山茶塊)	十	側面
387			SK606	同安窯系青磁	碗	上	高台内
388			SE609	白磁	高台付皿	□	高台内
389			SE609	白磁	碗	□□	高台内
390			SE609	土師器	坏・糸切		底面
391			SK612	白磁	平底皿	□□	底面
392			SK612	白磁	高台付皿	□□	高台内
393			SE616	中国陶器	茶入	□□□	底面
394			SK617	白磁	平底皿	□□	底面
395			SK658	土師器	坏・糸切		底面
396			SK643	白磁	碗	初□	高台内

報告番号	区	面	遺構	種類	器形	墨書内容	備考
397			SK655	白磁	碗	房	高台内
398			SK658	白磁	壷	□	高台内
399			SK752	白磁	碗	上・□□	高台内・側面
400			SK642	白磁	碗	楚	高台内
401			SK642	土師器	坏・ヘラ切	丁	底面
402			SK658	白磁	碗	□□	高台内
403			SK658	白磁	平底皿	□	底面
404			SK752	同安窯系青磁	碗	□	高台内
405			SE616	陶器	植木鉢	七□	底面
406			SK628	白磁	碗	□	高台内
407			SC719	土師器	坏・糸切	□	底面
408			SC719	土師器	坏	□	内面
409			SC719	土師器	坏・糸切		内面・外面
410			SE751	白磁	碗	□	高台内
411			SE751	白磁	平底皿	□	底面
412			SE751	白磁	碗	□	高台内
413			SK753	白磁	平底皿	□	底面
414			SK753	白磁	碗	□	高台内
415			SK660	白磁	碗	□□	高台内
416			SK716	白磁	壷	□	底面
417			SK743	白磁	小碗	白	高台内
418			SK733	龍泉窯系青磁	平底皿	□	底面
419			SE751	白磁	碗	朱墨	高台内
420			SE751	白磁	碗	□	高台内
421			SK754	白磁	碗	□	高台内
422			SK754	白磁	高台付皿	□	内底部
423			SE754	白磁	碗	□	高台内
424			SK755	同安窯系青磁	碗	房	高台内
425			SK780	白磁	碗	□□	高台内
426			SK755	白磁	碗	□	高台内
427			SK795	白磁	碗	□	高台内
428			SK755	白磁	碗	□	高台内
429			SK756	白磁	平底皿	□□	底面
430			SK756	白磁	碗	□綱	高台内
431			SK768	白磁	碗	丁	高台内
432			SK757	青白磁	小碗	□白	高台内
433			SE850	白磁	碗	□	高台内
434			SK852	白磁	平底皿	房	高台内
435			SK856	白磁	碗	□	高台内
436			SK795	白磁	碗	□	高台内
437			SK795	白磁	碗	千□	高台内
438			SK847	白磁	碗	□□	高台内
439			SE863	青白磁(白磁)	皿？	白	高台内
440			SE863	白磁	小碗	□	高台内
441			SK901	白磁	平底皿	十	底面
442			SC940	土師器	塊	□	高台内
443			SE863	白磁	碗	□□	高台内
444			SK859	青白磁	高台付皿	福	高台内
445			SK921	瓦器	坏・ヘラ切	右	底面
446			SK929	白磁	碗	□□	高台内
447			SE964	礫			外面
448	D区		1面NO.9カクラ	土師質土器	壷		側面
449			1面遺構検出	土師器	小皿・糸切	三	底面
450			SE863	白磁	平底皿	□□	底面
451			1面遺構検出	土師器	坏(糸切り)	□	底面・側面
452			1面遺構検出	中国陶器	盤	綱	底面
453			1面遺構検出	土師器	坏・糸切	□	底面
454			1面遺構検出	同安窯系青磁	碗	□	高台内
455			1面遺構検出	白磁	高台付皿	房	高台内
456			1面遺構検出	白磁	平底皿	□□	底面
457			1面遺構検出	白磁	平底皿	□	底面
458			1面遺構検出	白磁	平底皿	□濠	底面
459			1面遺構検出	白磁	平底皿	上	底面
460			1面遺構検出	白磁	碗	正綱	高台内
461			1面遺構検出	白磁	碗	□	高台内
462			1面遺構検出	白磁	碗	十	高台内
463			1面遺構検出	白磁	碗	一	高台内
464			1面遺構検出	龍泉窯系青磁	碗	花押	高台内
465			1面下掘り下げ	青白磁	平底皿	□	底面
466			1面下掘り下げ	天目茶碗		□	高台内
467			1面下掘り下げ	土師器	高坏	□	内底部
468			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□□	底面
469			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	花押	底面
470			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	花押	底面
471			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□□	底面
472			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□	底面
473			1面下NO.5	白磁	碗	□	高台内
474			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□□	底面
475			1面下掘り下げ	白磁	平底皿	□□	底面
476			1面下掘り下げ	白磁	碗	□□	高台内
477			1面下掘り下げ	白磁	碗	二	高台内
478			1面下掘り下げ	白磁	碗	□	高台内
479			1面下掘り下げ	白磁	碗	三	高台内
480			1面下掘り下げ	白磁	碗	□□	高台内
481			1面下掘り下げ	白磁	碗	上	高台内
482			1面下NO.5	白磁	碗	□ロ	高台内
483			1面下掘り下げ	龍泉窯系青磁	碗	□	高台内
484			1面下NO.1・3	白磁	碗	九綱	高台内
485			1面下NO.1・3	白磁	碗	の	高台内
486			1面下NO.3	白磁	碗	李□	高台内
487			1面下NO.5	白磁	碗	□	高台内
488			2.5面遺構検出	白磁	高台付皿	□	底面
489			1.5面遺構検出	白磁	碗	□	高台内
490			1.5面遺構検出	白磁	碗	□	高台内
491			2面下褐色砂層	白磁	碗	□	高台内
492			2面下掘り下げ	白磁	碗	宗	高台内
493			2面下掘り下げ	白磁	碗	京	高台内
494			2.5面遺構検出	白磁	平底皿	正	底面
495			2.5面下掘り下げ	白磁	碗	白□	高台内
496			2.5面遺構検出	白磁	碗	李□	高台内
497			2.5面遺構検出	白磁	碗	□	高台内
498			2.5面下NO.1・4	龍泉窯系青磁	碗	朱墨	高台内
499			2.5面下NO.1・5	白磁	碗	富	高台内
500			SK-18掘り下げ	白磁	碗	李□	高台内
501			SK-18掘り下げ	同安窯系青磁	碗	□□	高台内
502			SK-34	白磁	壷	置	高台内
503	E区		SK-35	白磁	碗	□□	高台内
504			1面遺構検出	白磁	碗	□	高台内
505			1面遺構検出	白磁	碗	□	高台内
506			1面遺構検出	白磁	碗	□	高台内
507			1面遺構検出	白磁	碗	□	高台内

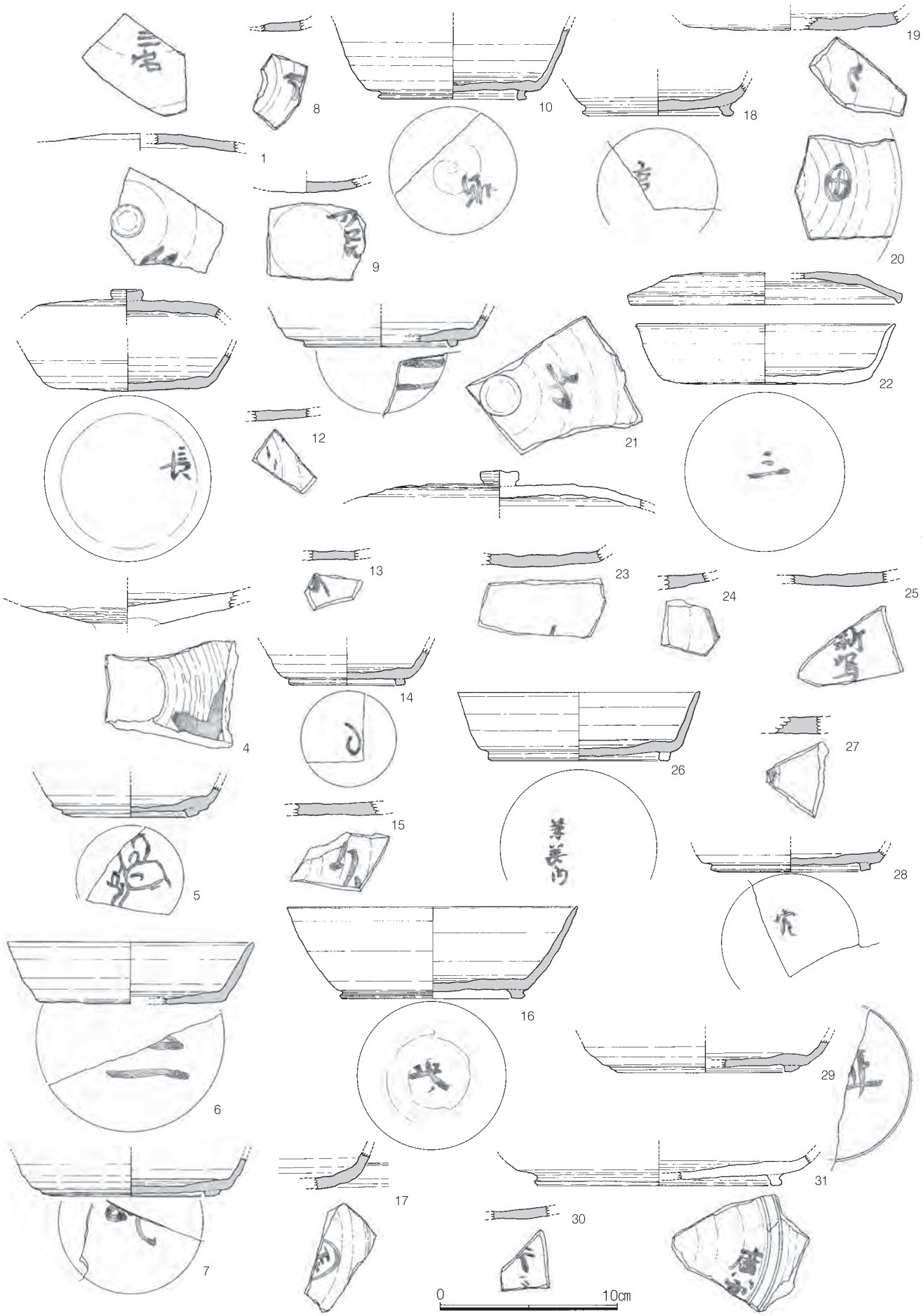


Fig.285　墨書土器実測図・古代

Fig.286　墨書土器実測図・中世 1

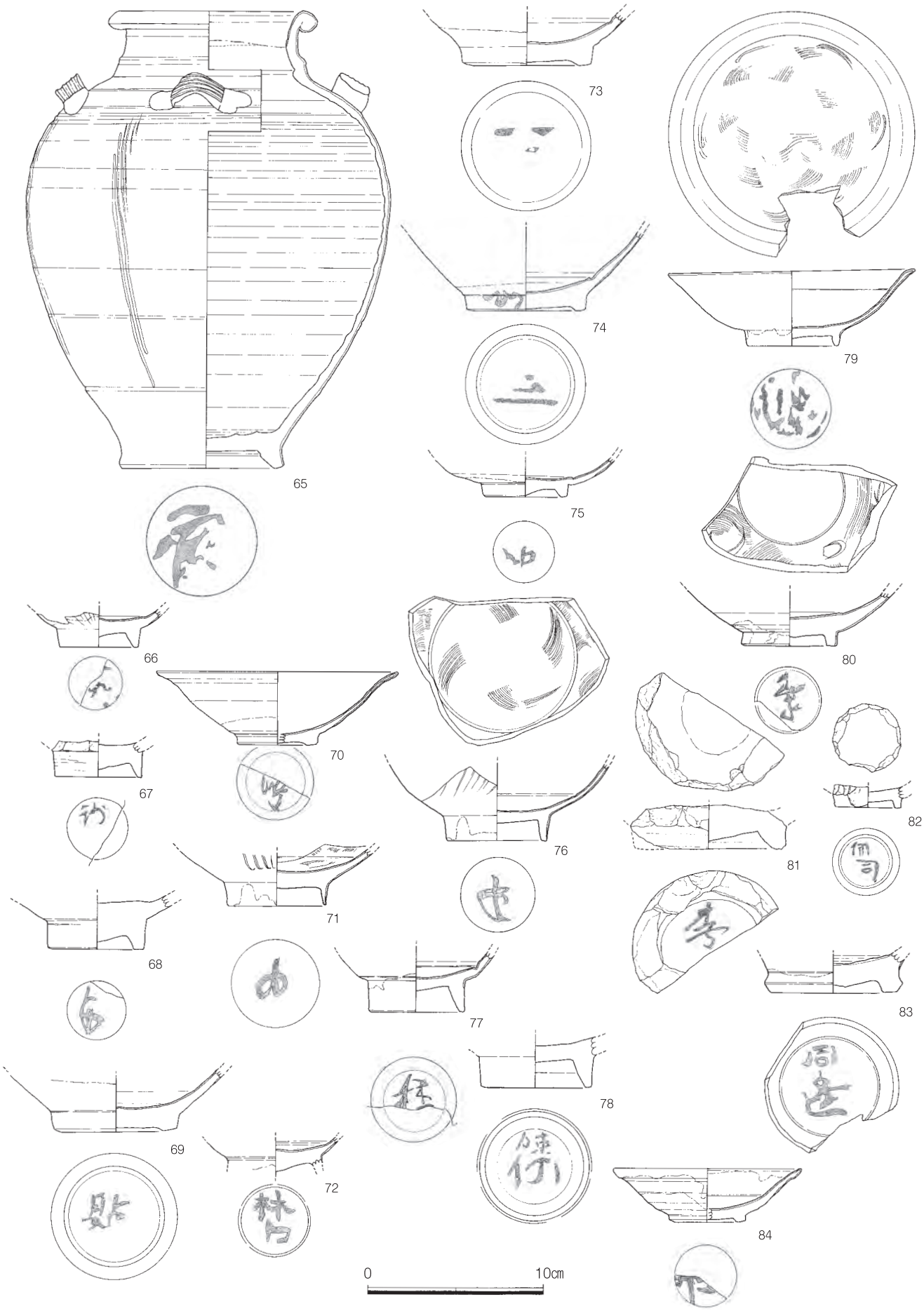


Fig.287　墨書土器実測図・中世２

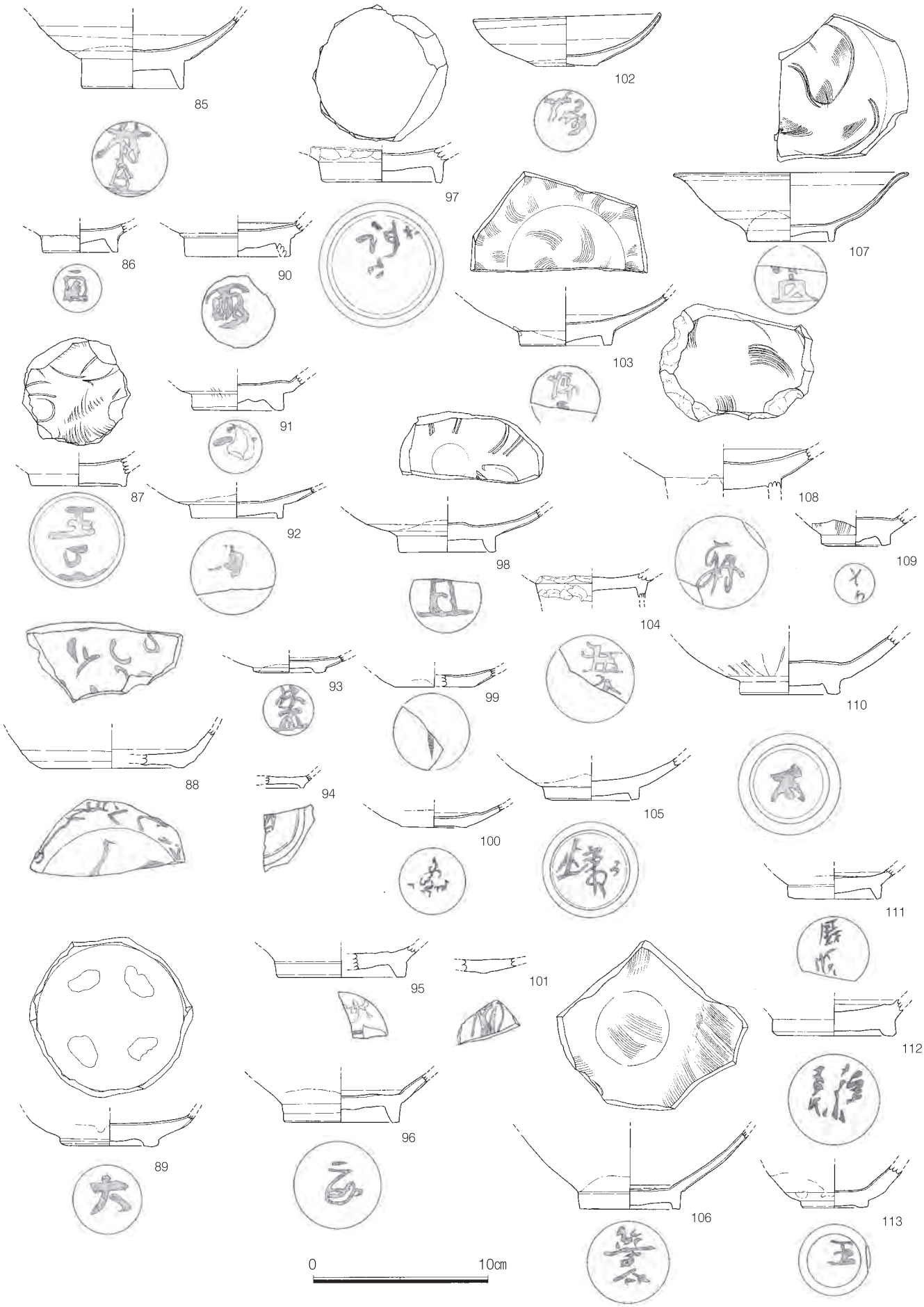


Fig.288　墨書土器実測図・中世３

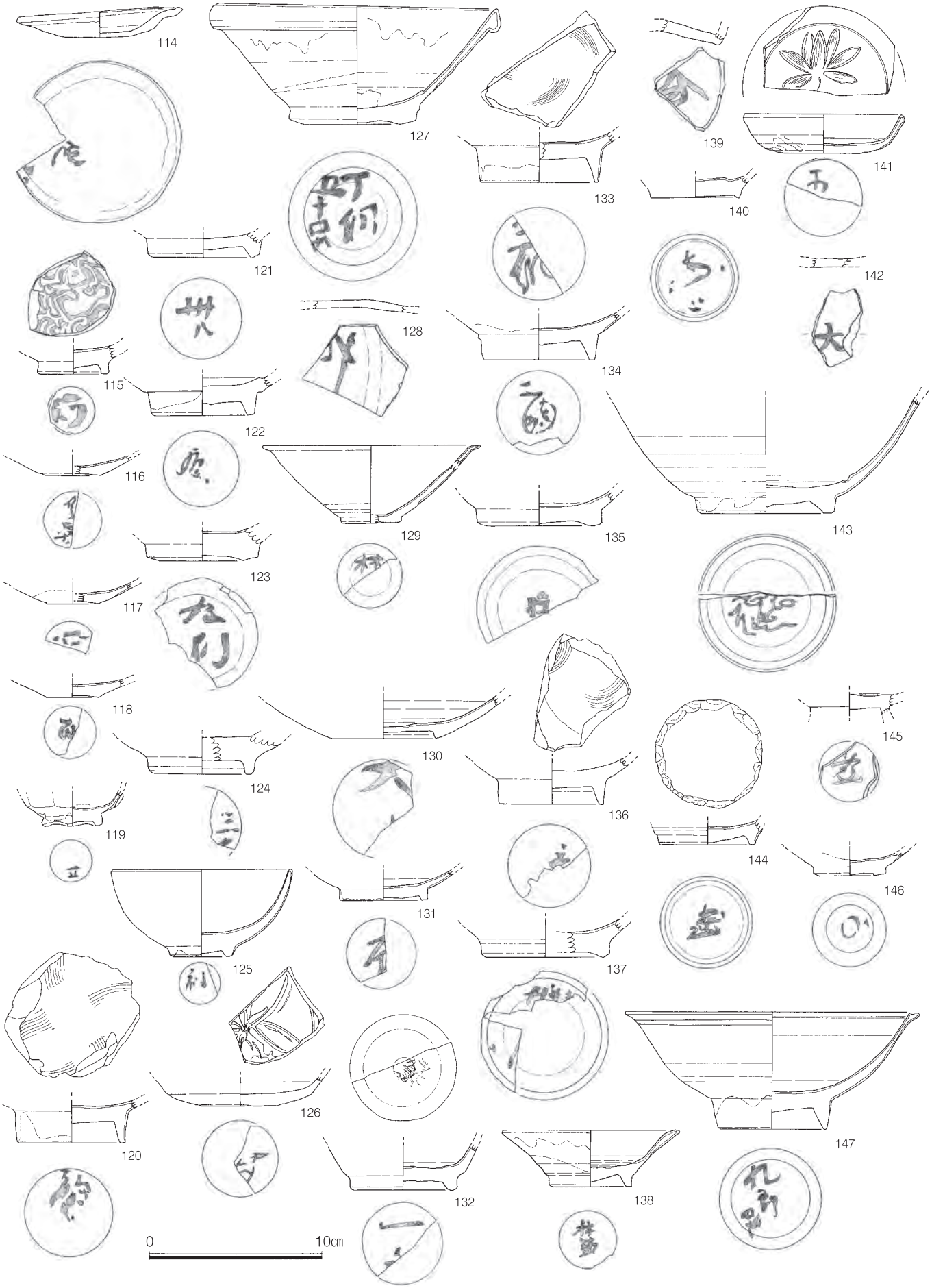


Fig.289　墨書土器実測図・中世４

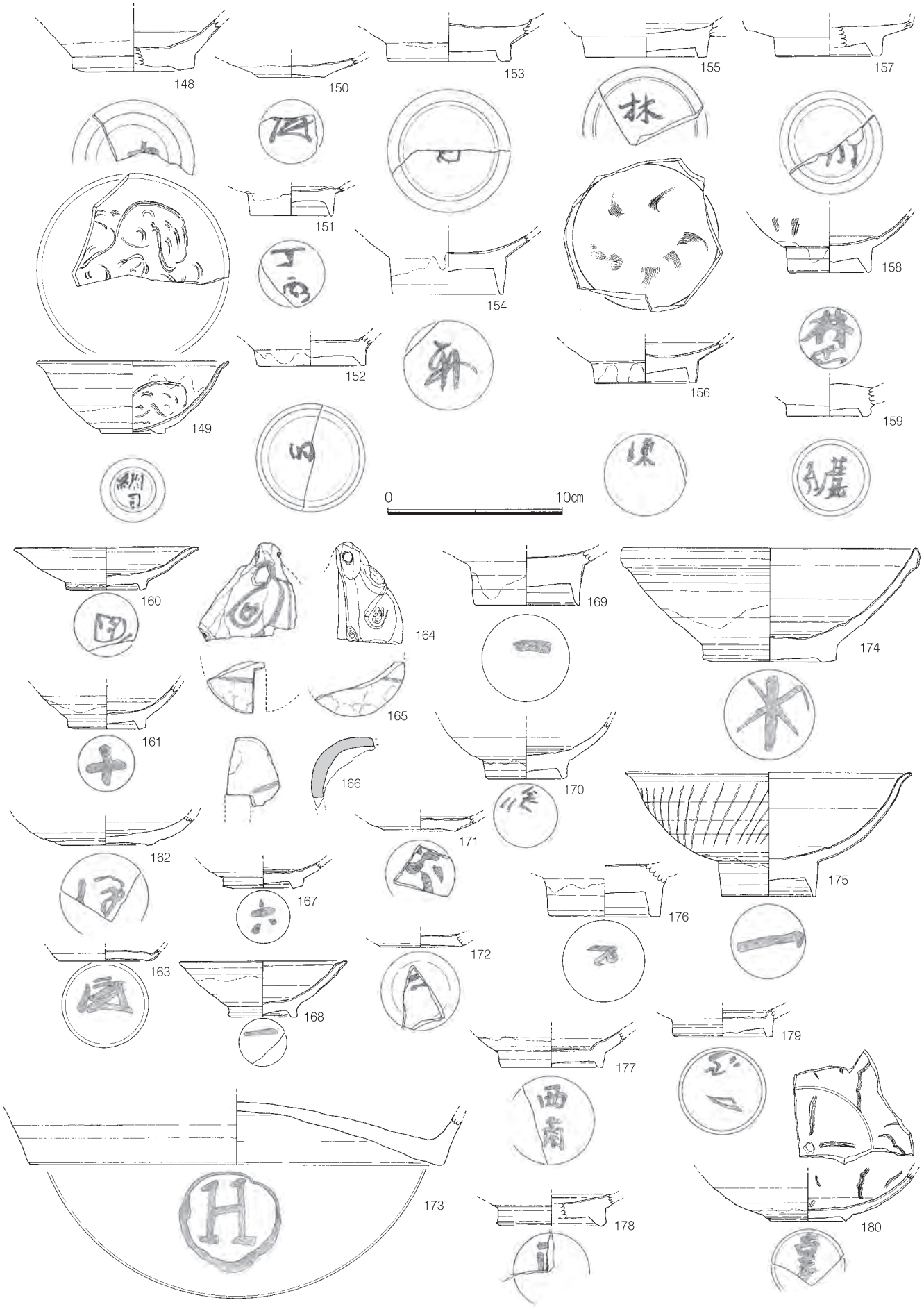


Fig.290　墨書土器実測図・中世 5

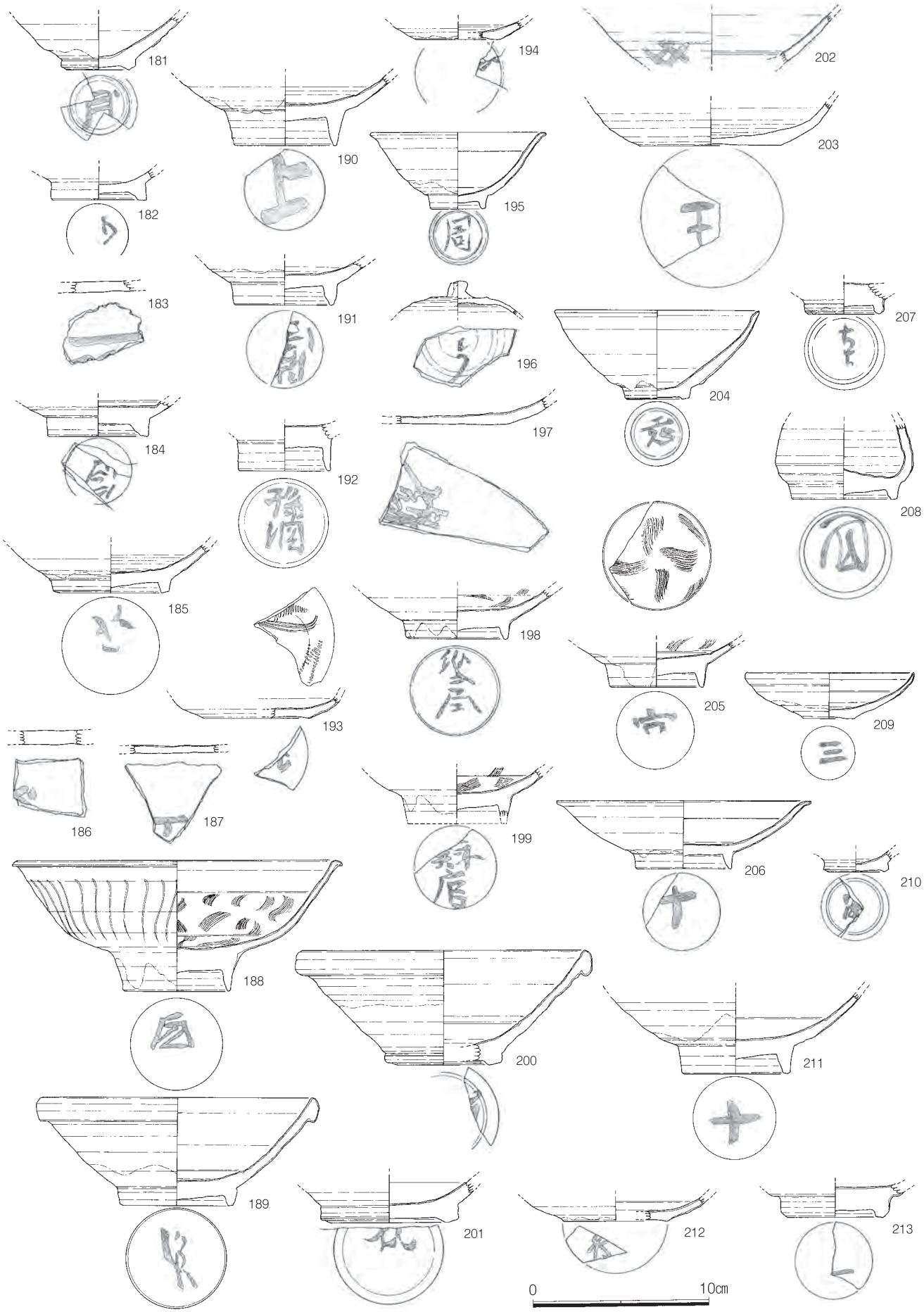


Fig.291　墨書土器実測図・中世６

Fig.292　墨書土器実測図・中世７

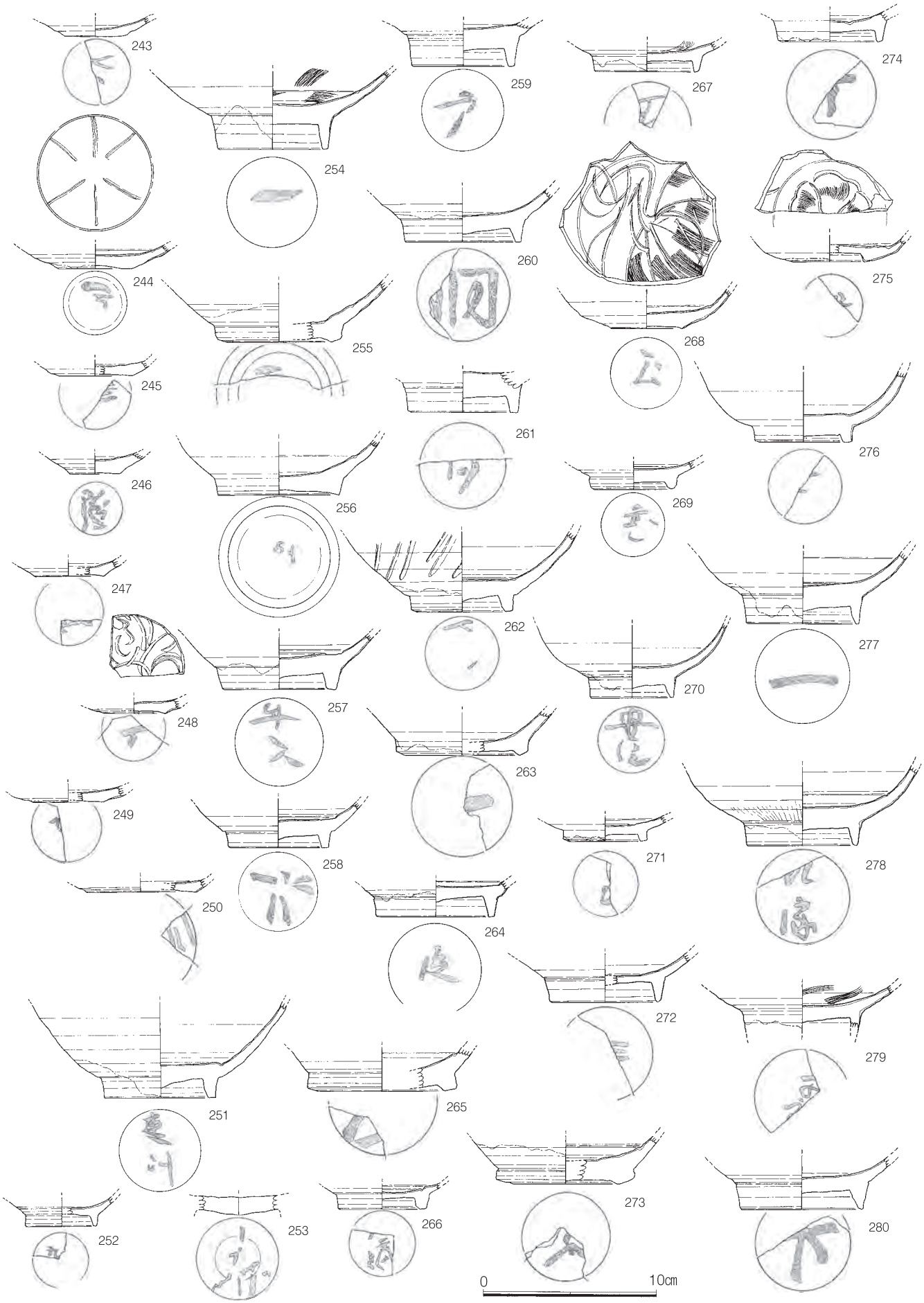


Fig.293　墨書土器実測図・中世８

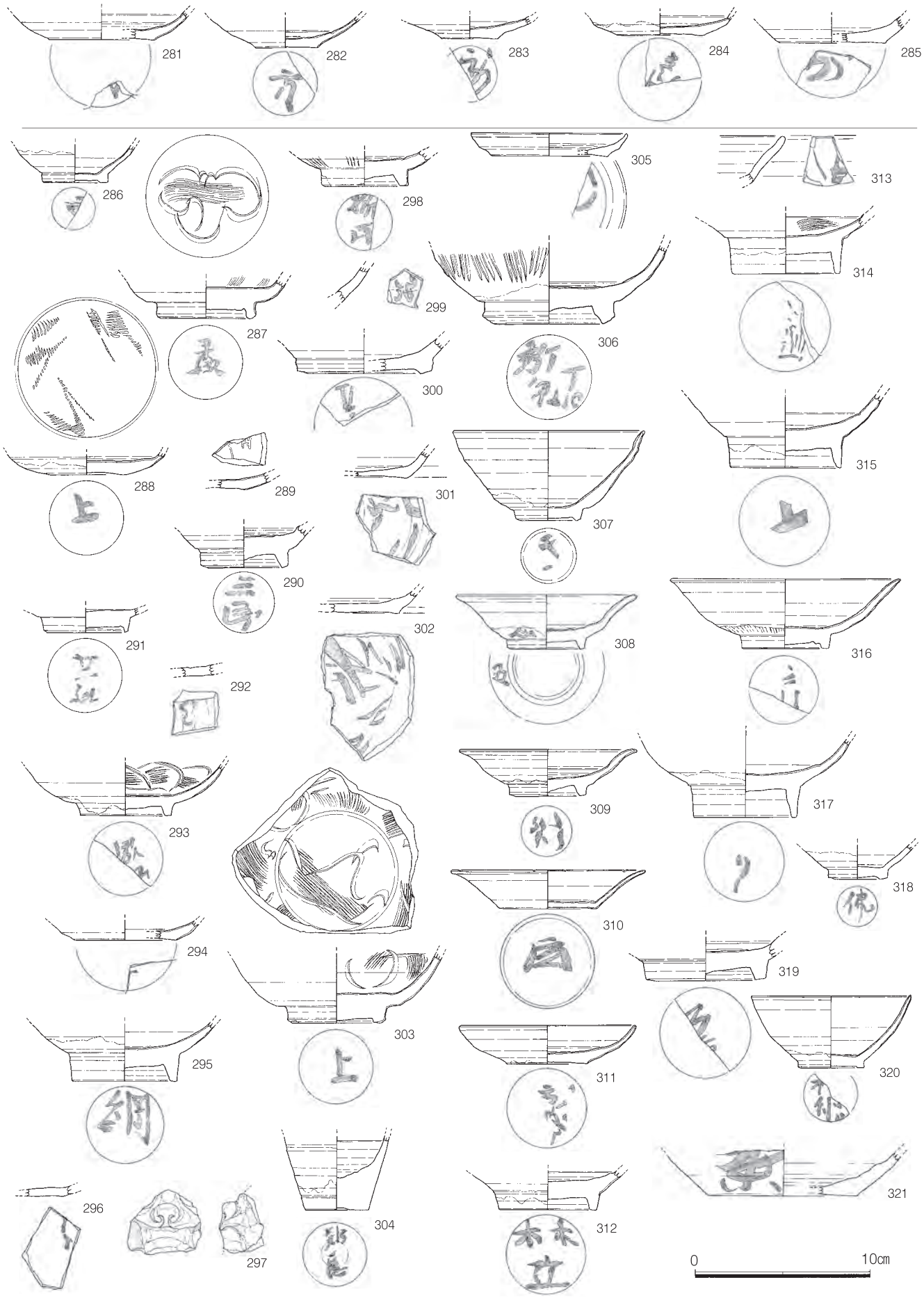


Fig.294　墨書土器実測図・中世９

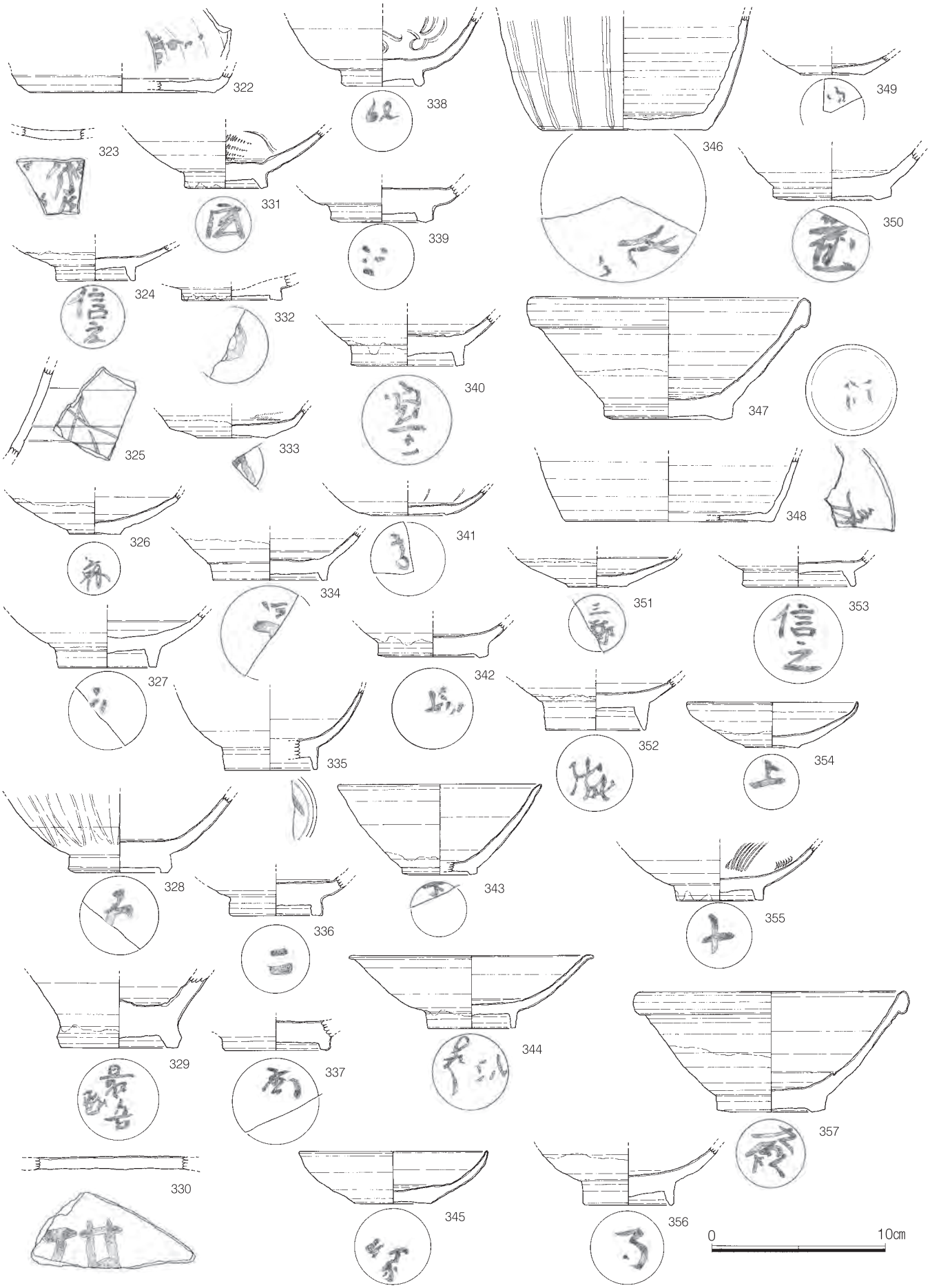


Fig.295　墨書土器実測図・中世 10

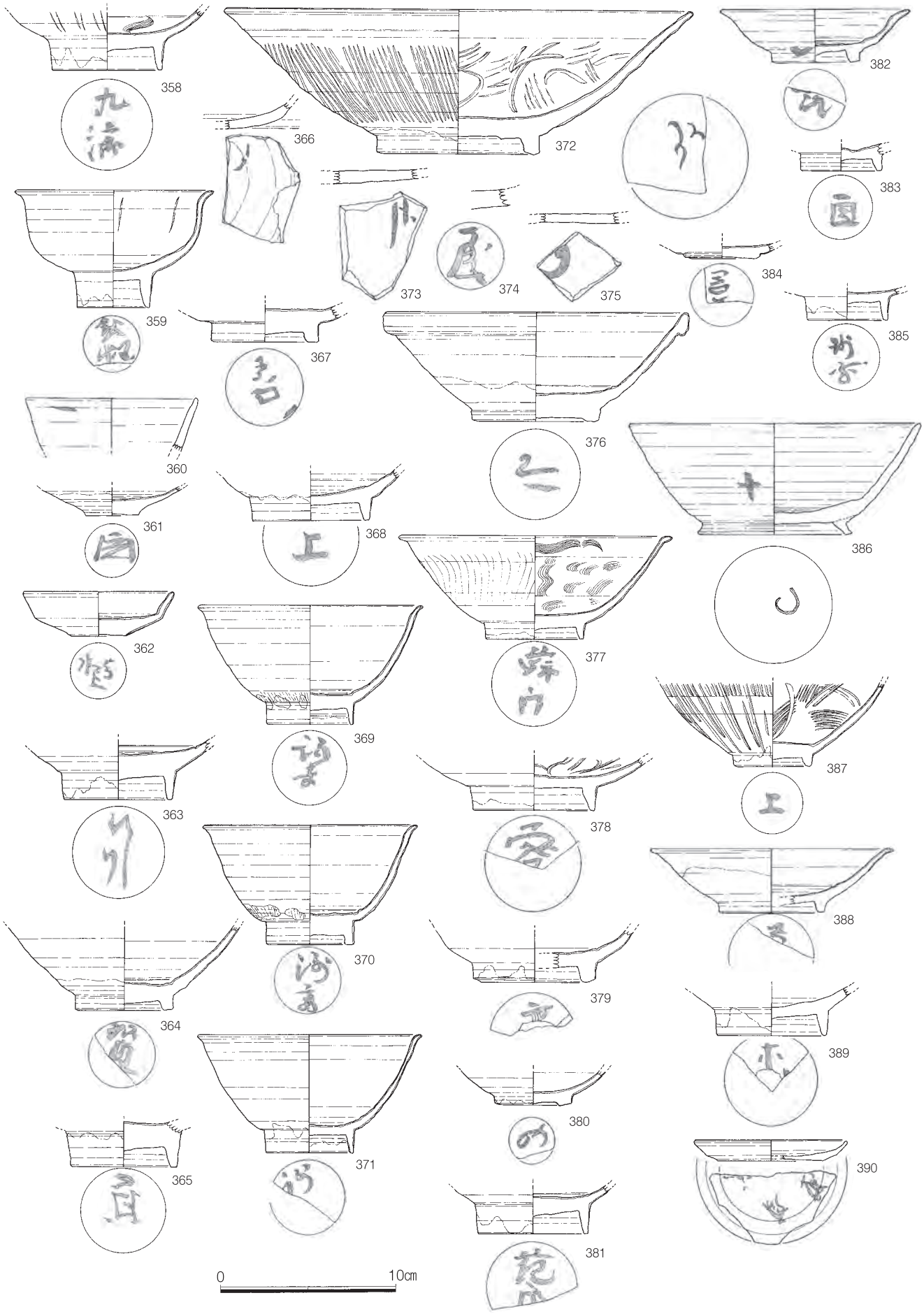


Fig.296　墨書土器実測図・中世 11

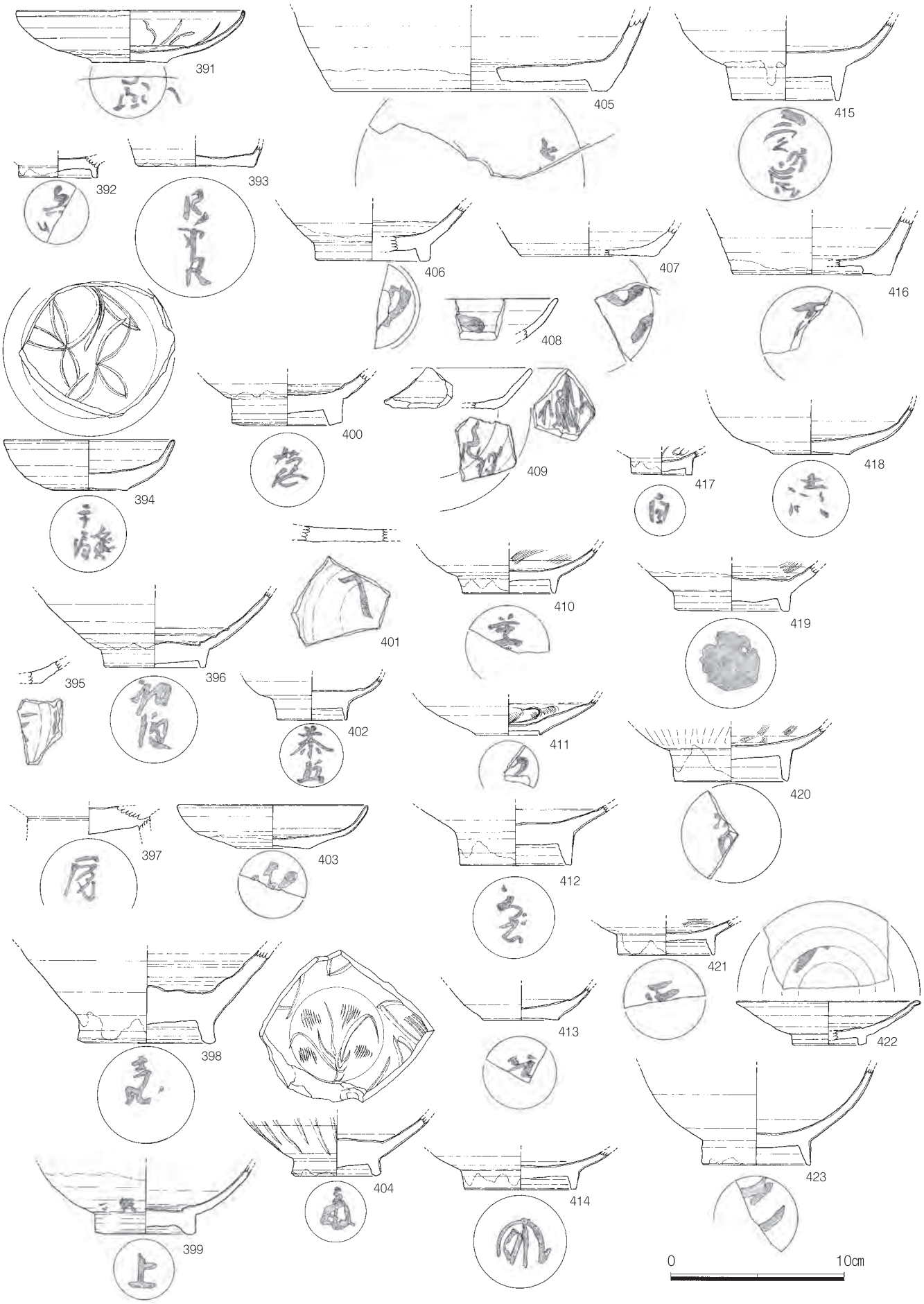


Fig.297　墨書土器実測図・中世 12

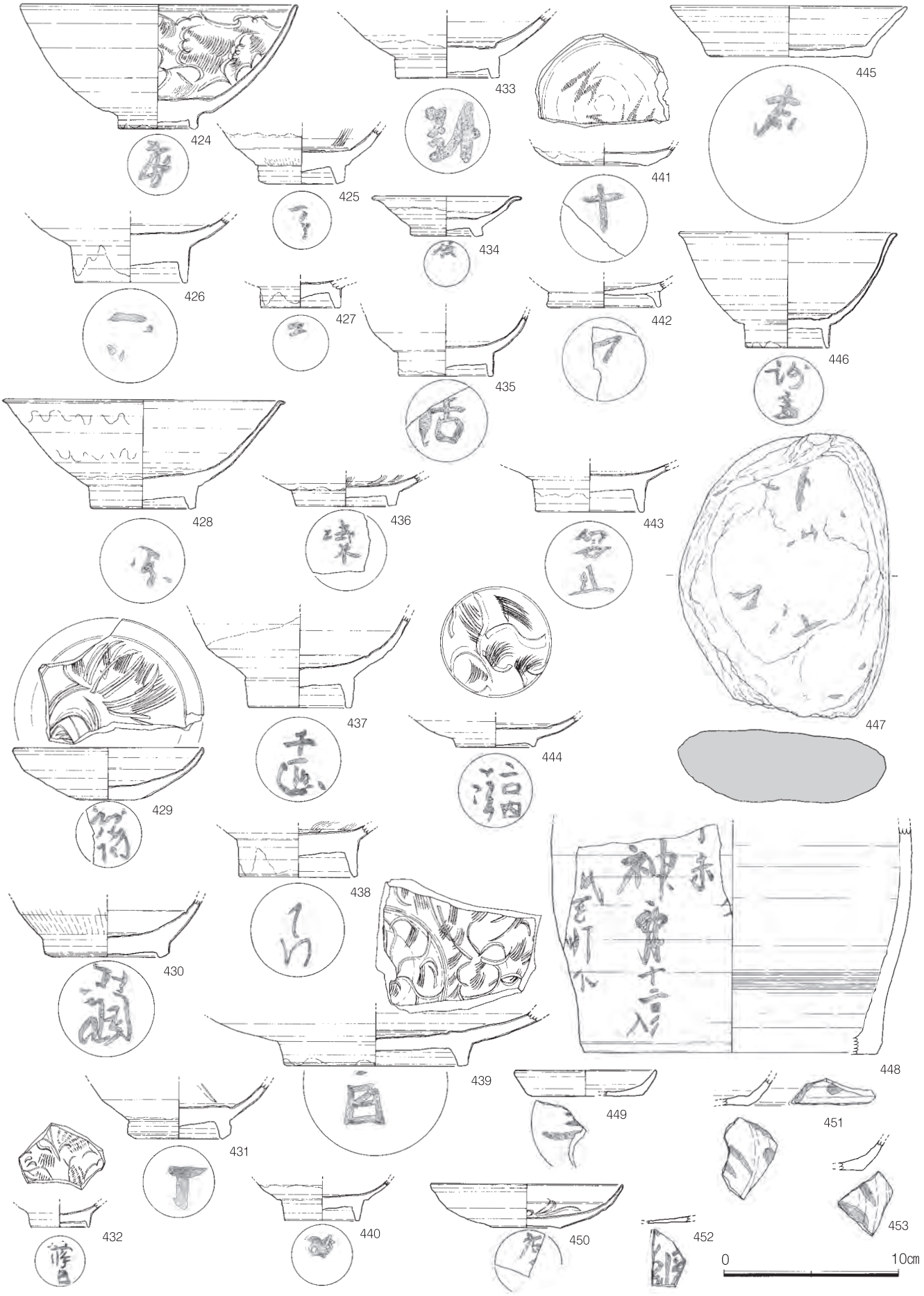


Fig.298　墨書土器実測図・中世 13

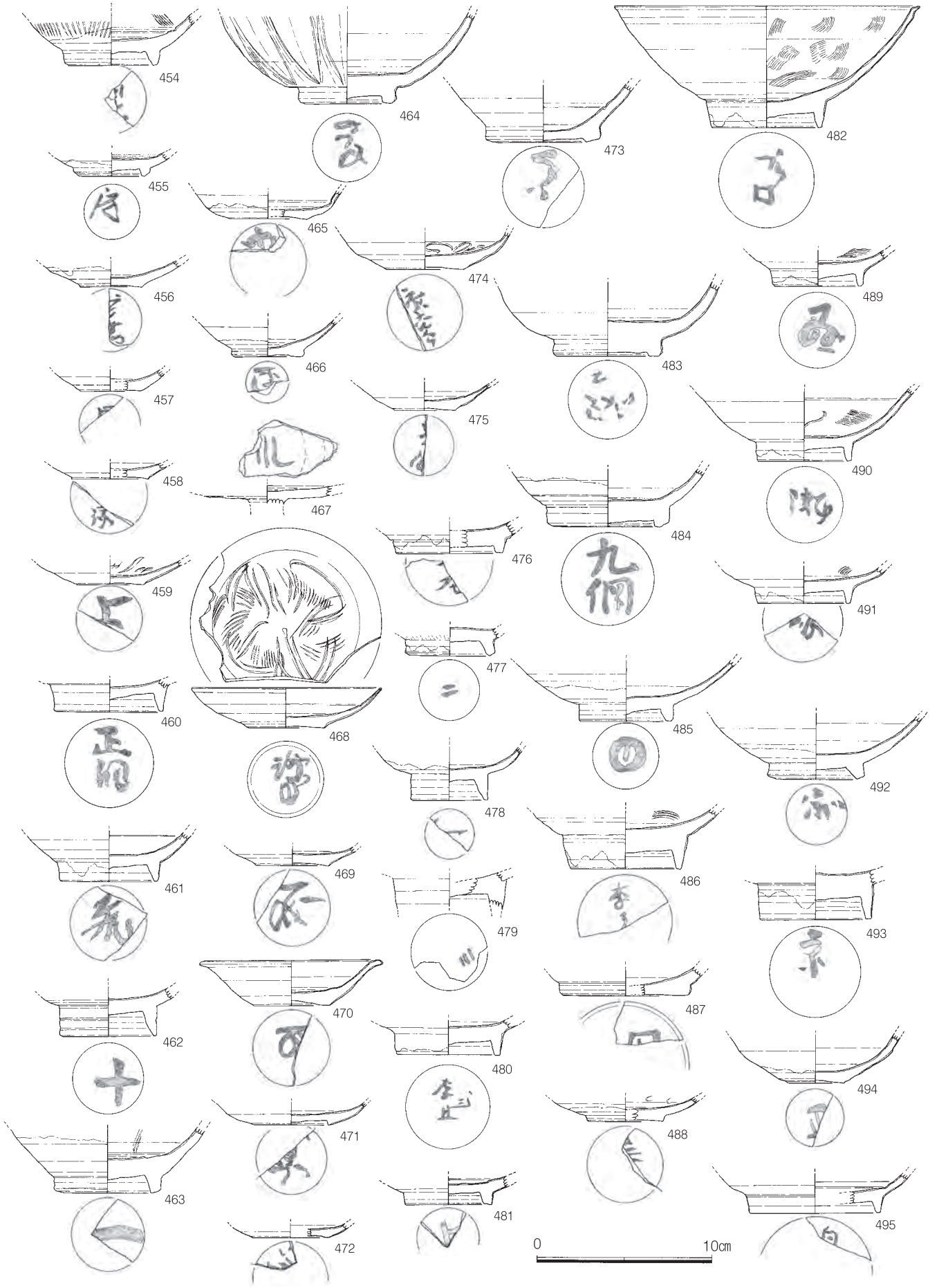


Fig.299　墨書土器実測図・中世 14

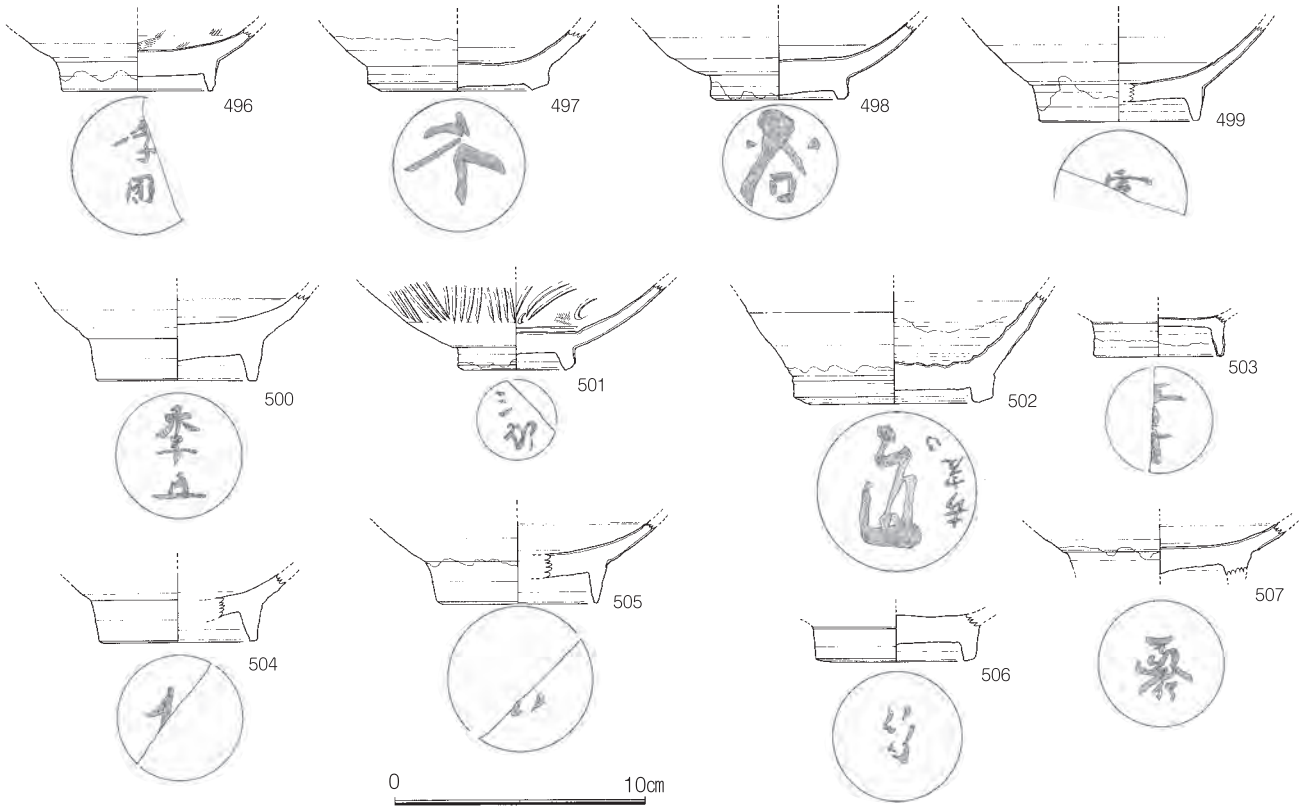
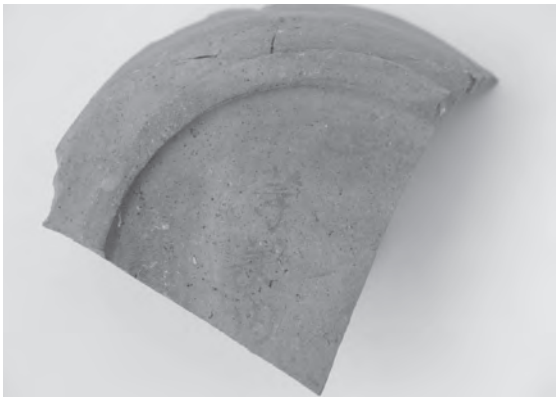


Fig.300　墨書土器実測図・中世 15

第 172 次調査では多くの墨書土器が出土したが、この中でも「安置する」の意味を持つ「置」や「貼」等の墨書が多く見られる。貿易陶磁器として流通した際に「博多」という貿易拠点で「留め置く」という意味で記されたのか興味深い資料である。

第三章で検討を行っているが、博多遺跡群内でこれまで古代の時期と考えられる墨書土器が出土地点を集成しているが、傾向として博多濱の北側から北西海岸部、南側に弧を描くような分布範囲を持つことが分かる。国指定史跡である「聖福寺」境内の範囲での調査事例はわずかであるが、これまでに 220 次以上の発掘調査が行われており、この傾向は古代の人々の動きと遺構の在り方を考える上で重要な知見であろう。



Ph.258　墨書須恵器（Fig.285-26）

Ph.259　墨書陶磁器（Fig.300-502）

c．銅銭

第172次調査では、総数296枚の銅銭が出土した。調査区別の出土数の内訳としてはA・B区から148枚、C・D・E区から148枚の銅銭が出土している。遺構別の出土状況を見るとA・B区では屋敷墓と考えられる土坑墓から副葬銭として14枚の銅銭が出土している。この他ではSD-007とした溝からの出土が目立つが、この他の銅銭の多くは遺構面の掘り下げ時に出土したものである。

C・D・E区では同一遺構から複数枚の銅銭が出土することは稀で、多くは単独で出土するか、遺構面の掘り下げ時に出土したものである。第172次調査からの備蓄銭の出土はない。

次に各調査区での種類別の出土状況を見ると、A・B区では37枚の寛永通寶が出土しており、出土総数の25%を占める。対してC・D・E区では13.5%の寛永通寶の出土となる。

出土した銅銭の鋳造王朝別の構成を見てみると、北宋銭が140枚で全体の47%を占め、南宋銭は出土数1枚で0.3%にすぎない。明銭は出土数12枚で4.0%、唐銭6枚で2.0%、寛永通寶の割合は22%程度となる。注目される銅銭としては皇朝十二銭の1枚である延喜通寶が出土した。

寛永通寶以外で出土枚数が一番多い銭種は皇宋通寶（北宋1038年初鋳）で20枚が出土し、全体の内6.7%を占める。次いで元豊通寶（北宋1078年初鋳）で19枚の6.4%、熙寧元寶（北宋1068年初鋳）17枚の5.7%、元祐通寶（北宋1086年初鋳）15枚の5.0%の順となり、この4種で全体の23%を占める。このような出土状況や銅銭の構成の傾向は博多遺跡群の他の調査成果とほぼ同様のもので、特に目立った点は見られない。遺構面の掘り下げ時に出土した銅銭の多くは、整地土層中に含まれていたものと考えられる。

出土遺構や銅銭の時期については、特に傾向はなく、多くが遺失銭という状況である。

西暦別出土銅銭一覧表

銭貨名		西暦	王朝名	初鋳年	枚数	銭貨名		西暦	王朝名	初鋳年	枚数
開元通寶		621	唐	武徳4年	4	元豊通寶		1078	北宋	元豊元年	18
		※1 960	南唐		1		折二				1
乾元重寶		758	唐	乾元元年	1	元祐通寶		1086	北宋	元祐元年	15
延喜通寶		907		延喜七年	1	紹聖元寶		1094	北宋	紹聖元年	4
唐国通寶		959	南唐	中興2年	1	元符通寶		1098	北宋	元符元年	3
宋元通寶	※1	960	北宋	建隆元年	1	聖宋通寶		1101	北宋	建中靖国元年	4
太平通寶		976	北宋	太平興国元年	2	崇寧重寶	当十銭	1103	北宋	崇寧元年	5
淳化元寶		990	北宋	淳化元年	1	大観通寶		1107	北宋	大観元年	4
至道元寶		995	北宋	至道元年	3	政和通寶		1111	北宋	政和元年	5
咸平元寶		998	北宋	咸平元年	2		折二銭				1
景徳元寶		1004	北宋	景徳元年	3	宣和通寶		1119	北宋	宣和元年	2
祥符元寶		1009	北宋	大中祥符元年	3		折二銭				1
祥符通寶					2	嘉定通寶		1208	南宋	嘉定元年	1
天禧通寶		1017	北宋	天禧元年	3	洪武通寶		1368	明	洪武元年	4
天聖元寶		1023	北宋	天聖元年	7	永楽通寶		1408	明	永楽6年	8
景祐元寶		1034	北宋	景祐元年	4	寛永通寶	(古)	1636	江戸	寛永13年	40
皇宋通寶		1038	北宋	寛元元年	20	寛永通寶	(新)	1668		寛文8年	17
至和元寶		1054	北宋	至和元年	2	寛永通寶	※2	1636			10
至和通寶					1	無文銭					2
嘉祐通寶		1056	北宋	嘉祐元年	3	雁首銭					1
嘉祐元寶		1056	北宋	嘉祐元年	2	近代銭					11
治平元寶		1064	北宋	治平元年	1	解読不能					54
熙寧元寶		1068	北宋	熙寧元年	17					出土総数	296

※1 初鋳年不明、西暦は、日本出土銭総覧による
※2 (新)(古)の区別が、つかなかった寛永通寶

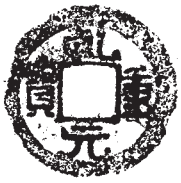
遺構別出土銅銭一覧表

区	面	遺構	番号	出土地点	銭番号	銭貨名	判読	枚数	備考
A区	1面	SE	5	本体		寛永通寶		1	
		SK	3		NO.1	永楽通寶		1	
					NO.2	永楽通寶		1	
					NO.3	皇宋通寶		1	
					NO.4	永楽通寶		1	
					NO.5	永楽通寶		1	
A区NO.7	2面	SD	7		NO.1	元祐通寶		1	
					NO.2	元豊通寶		1	7枚銹着
						元祐通寶		1	
						祥符元寶		1	
						皇宋通寶		1	
						天聖元寶		1	
						熙寧元寶		1	
						天禧通寶		1	
A区	1面	SP	10			崇寧重寶		1	当十銭
		SK	100			雁首銭		1	
	2面	SK	131			寛永通寶		5	(古)
						寛永通寶		1	
		SK	134			元祐通寶		1	
		SK	142		NO.1	□欠寧元□欠	熙寧元寶	1	
					NO.2	□□□□		1	
					NO.3	元祐通寶		1	
					NO.4	咸平元寶		1	
A区	2面	SK	147	白磁溜り		皇宋通寶		1	
A区NO.18	2面	SK	159			元豊通寶		1	
A区	2面	SE	160	本体		解読不能		1	
		SK	174			解読不能		1	
		SD	192			祥符通寶		1	
		SD	211	上面		近代銭		1	
				下層		□欠祐元寶	嘉祐元寶	1	
		SD	212			□□□□		1	
A区NO.13	2面	SD	213			宣和通寶		1	
A区NO.14				下面溝		洪武通寶		1	
A区	2面	SK	223			紹聖元寶		1	
						洪武通寶		1	墓
						□□□□		2	
		SK	230			永楽通寶		1	墓　副葬銭
						□□□□		1	墓　副葬銭　繊維付着
						□□□□欠□欠		2	墓　副葬銭　2枚とも繊維付着
		SK	231			無文銭		2	副葬銭　1枚磨輪銭〃
					2-1	□□□□		1	副葬銭
						□□□□欠□欠		1	副葬銭
					2-2	至和通寶		1	副葬銭
						解読不能		1	副葬銭
A区NO.4	2面	SD	240			至道元寶		1	
A区NO.4						皇宋通寶		1	
A区NO.3				B群		□□□□		1	
A区NO.1　②		SD	264		NO.60	□□元寶		1	
A区		SK	303			祥符元寶		1	
	3面	SK	324			□□□□欠□欠		1	
				北東トレンチ		至道元寶		1	
				撹乱　13		天聖元寶		1	
						皇□欠□欠寶	皇宋通寶	1	
						熙寧元寶		3	
						永楽通寶		1	
						寛永通寶		2	(古)
						□欠永通寶	寛永通寶	1	
						近代銭		1	
						□□□□		2	
				撹乱　28		寛永通寶		1	(新)
				撹乱　32		寛永通寶		1	(新)
				撹乱　34		寛永通寶		1	(新)
				撹乱　42		嘉祐元寶		1	
						寛永通寶		19	(古)
						寛永通寶		1	(新)背面『文』
						□□□□		1	
				表土撹乱		近代銭		1	1銭　×8年
	1面			遺構検出	NO.1	天禧通寶		1	
					NO.2	紹聖元寶		1	
					NO.3	大觀通寶		1	
A区NO.1	2面					熙寧元寶		1	
A区NO.3						開元通寶		1	
A区NO.3						乾元重寶		1	当十銭
A区NO.3						宋元通寶		1	
A区NO.3				遺構検出		皇宋通寶		1	
A区NO.3						聖宋元寶		1	
A区NO.6						景祐元寶		1	
A区NO.6						元祐通寶		1	
A区NO.7						嘉祐通寶		1	
A区NO.1	2面			遺構検出面		永楽通寶		1	
A区NO.2				遺構面		洪武通寶		2	
A区NO.4				遺構検出		至和元寶		1	
A区NO.6						景徳元寶		1	
A区NO.6						元豊通寶		1	
A区				遺構面		聖宋元寶		1	
	1面			撹乱		寛永通寶		2	(古)
	2面下			掘り下げ		崇寧重寶		3	3枚とも当十銭
A区NO.9				拡張部検出面		政□欠□欠寶	政和通寶	1	
A区				拡張部		寛永通寶		1	
				表土掘削		寛永通寶		1	(古)
				表土掘削		寛永通寶		2	(新)
A区NO.1	3面			掘り下げ		元祐通寶		1	
B区NO.4	1面	SD	7			永楽通寶		1	
						唐国通寶		1	
B区NO.5						□□□□		1	
B区		SP	339			熙寧元寶		1	
B区NO.4		SD	345			紹聖元寶		1	
B区NO.1	2面	SK	378			解読不能		1	
B区	2面					元豊通寶		1	
					NO.1	□□□欠□欠		1	
					NO.5	元豊通寶		1	折二銭
					NO.6	元豊通寶		1	
B区NO.1	3面	SD	412			皇宋通寶		3	
	2面			遺構検出		嘉祐通寶		1	
						□□□欠□欠		1	
						解読不能		3	
B区NO.3						皇宋通寶		1	
B区NO.4						天聖元寶		1	
				試掘		寛永通寶		1	背面『文』
						近代銭		1	1銭　大正11年

区	面	遺構	番号	出土地点	銭番号	銭貨名	判読	枚数	備考
C区		SK	2			近代銭		1	1銭 大正9年
		SK	3			大観通寶		1	
		SK	4			□□□□		1	
		SK	20			□(欠)符□(欠)□(欠)		1	篆書の元符通寶ヵ
		SK	43			近代銭		1	
		SK	48			大観通□(欠)	大観通寶	1	
		SK	60			宣和通寶		1	折二銭
		SK	77			皇宋通寶		1	2枚銹着
		SK	77			政和通寶		1	
		SE	80			□(欠)□(欠)元寶		1	
		SK	87			寛永通寶		1	(古)
		SK	113			□□□□		1	
		SK	165			元祐通寶		1	模鋳銭ヵ
		SK	199			大観通寶		1	
		SK	201			政和通寶		1	
		SK	216			政和通寶		1	折二銭
		SK	227			寛永通寶		1	(古)
		SK	241			政和通寶		1	
		SK	484			□□□□		1	
		SK	658			元□(欠)通寶		1	
	3面	SK	777			祥符通寶		1	2枚銹着
	3面					天禧通寶		1	
	4面	SK	843			景徳元寶		1	
	3面	SE	745 周辺			□□(欠)□(欠)寶		1	
	3面					□□□(欠)□(欠)		1	
	1面			トレンチ		寛永通寶		1	(新)
				西側トレンチ		崇寧重寶		1	当十銭
				トレンチ撹乱		寛永通寶		1	(古)
						寛永通寶		3	(新)
						寛永通寶		3	
						近代銭		1	
				西側トレンチ撹乱		寛永通寶		1	(古)
						寛永通寶		1	(新)
						寛永通寶		2	
				表土		寛永通寶		1	
						近代銭		1	1銭　昭和6年
						近代銭		1	100円　昭和45年
						元豊通寶		1	
						□(欠)祐通(欠)	元祐通寶	1	
				遺構検出		寛永通寶		1	(古)
						□□□(欠)□(欠)		1	
	1面下			掘り下げ		太平通□(欠)	太平通寶	1	
				掘り下げ		淳化□(欠)寶	淳化元寶	1	
				掘り下げ		祥符元寶		1	
				掘り下げ		皇宋通寶		2	
				掘り下げ		熙寧元寶		3	
				掘り下げ		元豊通寶		1	
				掘り下げ		□(欠)豊通□(欠)	元豊通寶	1	
				掘り下げ		元祐通寶		3	
				掘り下げ		紹聖元□(欠)	紹聖元寶	1	
				掘り下げ		元符通寶		1	
				掘り下げ		聖宋元寶		1	
				掘り下げ		宣和通寶		1	
				掘り下げ		寛永通寶		2	(古)
				掘り下げ		寛永通寶		3	(新)　1枚背面『文』
				掘り下げ		□□(欠)□(欠)□(欠)		1	
				掘り下げ		解読不能		5	
C区 NO.5～6	2面下			掘り下げ		皇宋通寶		1	
C区	2面下			掘り下げ		元豊通寶		1	
				掘り下げ		元符通寶		1	
				掘り下げ		政和通寶		1	
				掘り下げ		寛永通寶		1	(古)
				掘り下げ		寛永通寶		1	(新)
				掘り下げ		近代銭		1	
D区	1面	SK	9			元豊通寶		1	2枚銹着
		SK	9			元祐通寶		1	
		SK	22			□(欠)□□(欠)□		1	
		SK	22			□(欠)豊□(欠)□(欠)	元豊通寶	1	
		SD	24			元豊通寶		2	2枚銹着
		SD	24			□□□□		3	熱による融着ヵ
		SK	50			□(欠)道元□(欠)	至道元寶	1	
		SK	56			□(欠)□(欠)通寶		1	
		SK	57			景祐元寶		1	
		SK	57			嘉定通寶		1	背面『十二』
		SK	143			熙寧元寶		1	
		SK	173			□□元寶		1	
		SK	196			□□□□		1	
		SK	197			□□□□		1	
		SK	225			咸平元寶		1	
		SK	231			元豊□(欠)□(欠)	元豊通寶	1	磨輪銭
		SK	231			寛永通寶		1	(古)
		SK	240			熙寧元寶		1	
		SK	240			□(欠)符□(欠)□(欠		1	元符通寶ヵ
		SK	240			□□□□		1	大型銭
		SK	259			天聖元寶		1	
		SK	259			皇宋通寶		1	
		SK	259			熙寧元寶		1	
		SK	271			皇宋通寶		1	
	2面	SK	405			嘉祐通寶		1	
		SK	461			皇宋通寶		1	
		SK	570			熙寧元寶		1	
		SK	612			天聖元寶		1	
		SK	617			熙寧元寶		1	
		SK	617			□□□寶		1	
D区NO.13	2面	SK	628			解読不能		1	
D区	3面	SK	653			開元通寶		1	
		SK	700			開元通寶		1	南唐　(篆書)
		SK	700			□□□□		1	
		SK	794			□(欠)祐通□(欠)	元祐通寶	1	
		SK	797			開元通寶		1	
		SK	911			□(欠)宋□(欠)寶	皇宋通寶	1	
		SK	934			近代銭		1	5円　昭和24年
		SK	994			元祐□□	元祐通寶	1	
	1面			遺構検出		開元通寶		1	
	1面					景祐元寶		1	
D区NO.14	1面			検出		至和元寶		1	
D区NO.15	1面					天聖元寶		1	
	1面					□宋□寶	皇宋通寶	1	
D区	1面下			掘り下げ　SD21周辺		景徳元寶		1	
D区NO.6	1面下			24下層		□□(欠)□(欠)□(欠)		1	
D区NO.3	1面			トレンチ下層		太平通寶		1	
D区NO.4	1面下			撹乱		寛永通寶		1	
D区NO.1.3	1面下			掘り下げ		治平元寶		1	
	1面下					寛永通寶		1	
D区NO.3	1面下					天聖元寶		1	
D区NO.8	1面下					聖宋元寶		1	
D区NO.15	1面下					皇宋通寶		1	
	1面下					元豊通寶		2	
	1面下					□祐通□	元祐通寶	1	磨輪銭
	1面下					元符通寶		1	
D区	1面下					景祐元寶		1	
	1面下					寛永通寶		1	(新)
D区NO.2	2面					元豊通寶		1	
D区NO.1	2面下			2．5面検出		元豊通寶		1	
D区NO.2	2面下					熙寧元寶		1	
D区NO13.14	2面下			掘り下げ		熙寧元寶		1	
E区				遺構検出		延喜通寶		1	皇朝十二銭
							出土総数	296	

□は、文字の有無は、確認できるが、判読不能
□(欠)は、欠損

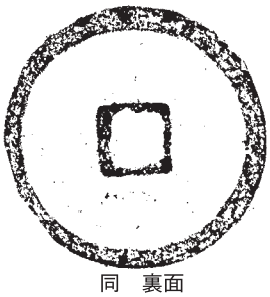
宋元通寶
A1区2面No.3



乾元重寶
A1区2面No.3

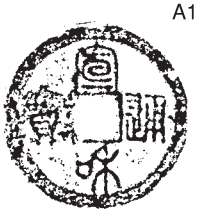
同　裏面

崇寧重寶
A1区2面下掘り下げ



同　裏面

洪武通寶
A2区2面No.14　SD-213下層

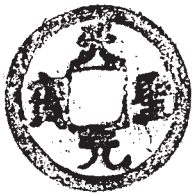


宣和通寶
A2区2面No.14　SD-213下層

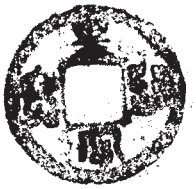
天禧通寶
A2区No.7　SD-007

熈寧元寶
A区　攪乱13

熈寧元寶
A2区No.7　SD-007

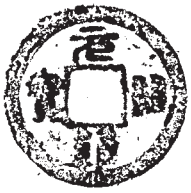


天聖元寶
A2区No.7　SD-007

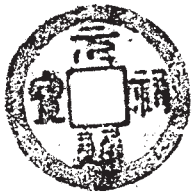


皇宋通寶
A2区No.7　SD-007

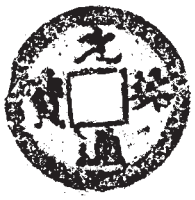
元祐通寶
A1区2面　SK-134



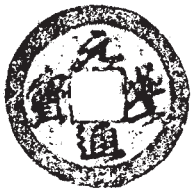
元祐通寶
A2区No.7　SD-007



元祐通寶
A2区No.7　SD-007

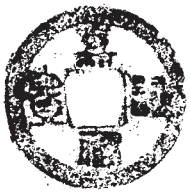


元祐通寶
A区　3面No.1掘り下げ



元豊通寶
A2区2面No.6遺構検出

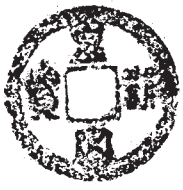
聖宋元寶
A2区2面遺構面



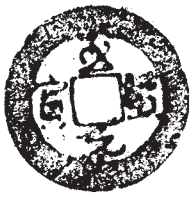
嘉祐通寶
A2区2面No.7

景祐元寶
A2区2面No.6

祥符元寶
A1区2面SK-303

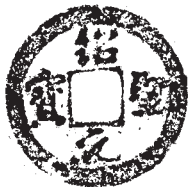


皇宋通寶
A1区2面No.3



至道元寶
A1区2面No.4　SD-240

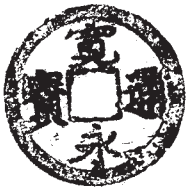
大観通寶
A区1面　銅銭No.3



紹聖元寶
A区1面　銅銭No.2

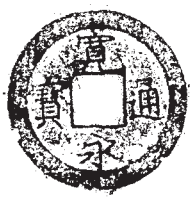
皇□□寶
A区　攪乱13

至和元寶
A1区2面No.4遺構検出



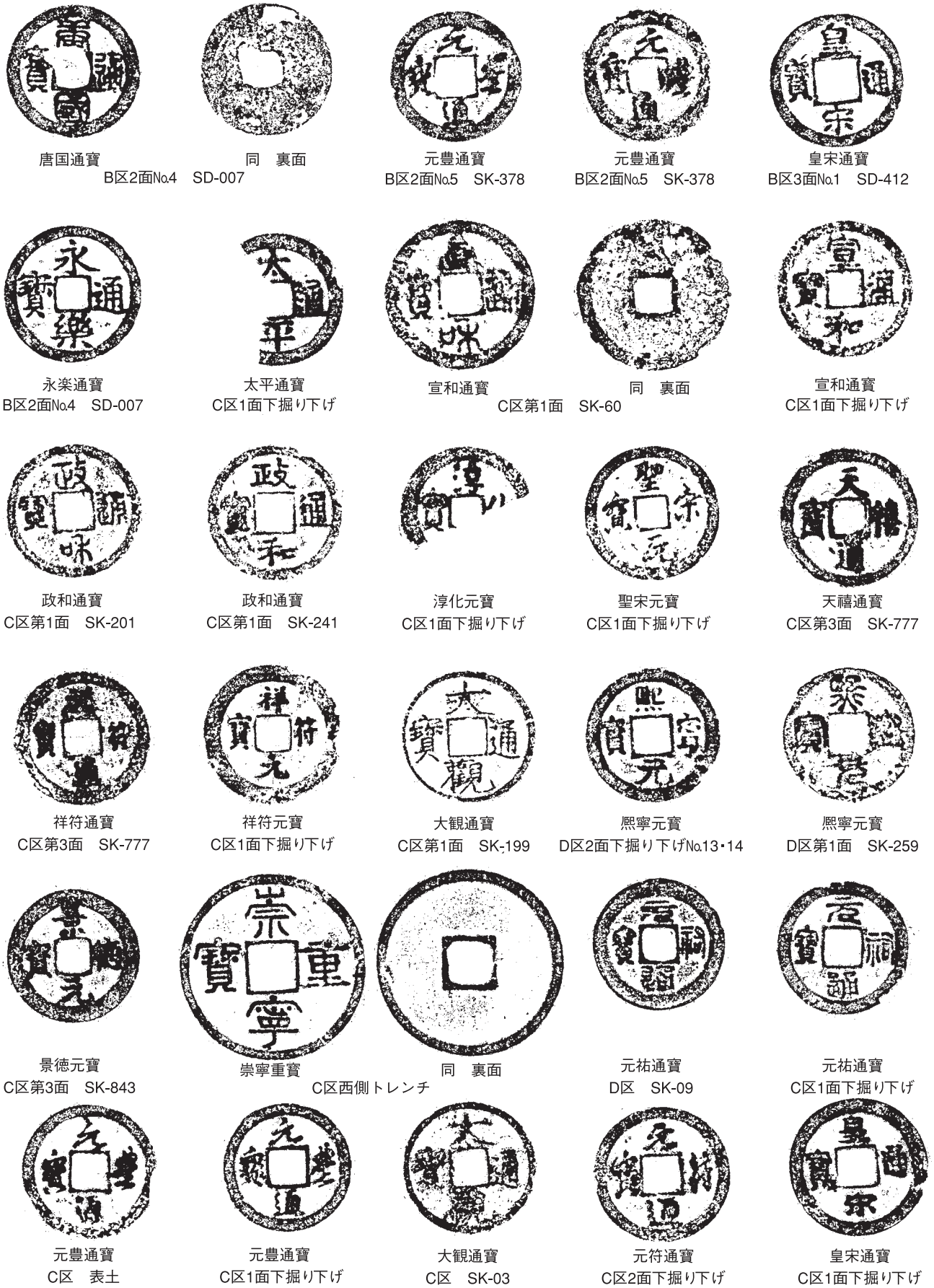
寛永通寶（古）
A2区　攪乱42

寛永通寶（古）
A2区　攪乱42



寛永通寶（新）
A2区　攪乱28

Fig.301　銅銭 1



唐国通寶
B区2面No.4　SD-007

同　裏面

元豐通寶
B区2面No.5　SK-378

元豐通寶
B区2面No.5　SK-378

皇宋通寶
B区3面No.1　SD-412

永楽通寶
B区2面No.4　SD-007

太平通寶
C区1面下掘り下げ

宣和通寶

同　裏面
C区第1面　SK-60

宣和通寶
C区1面下掘り下げ

政和通寶
C区第1面　SK-201

政和通寶
C区第1面　SK-241

淳化元寶
C区1面下掘り下げ

聖宋元寶
C区1面下掘り下げ

天禧通寶
C区第3面　SK-777

祥符通寶
C区第3面　SK-777

祥符元寶
C区1面下掘り下げ

大観通寶
C区第1面　SK-199

熈寧元寶
D区2面下掘り下げNo.13・14

熈寧元寶
D区第1面　SK-259

景德元寶
C区第3面　SK-843

崇寧重寶

同　裏面
C区西側トレンチ

元祐通寶
D区　SK-09

元祐通寶
C区1面下掘り下げ

元豐通寶
C区　表土

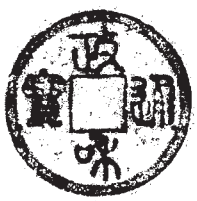
元豐通寶
C区1面下掘り下げ

大観通寶
C区　SK-03

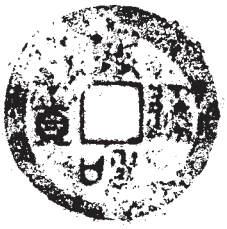
元符通寶
C区2面下掘り下げ

皇宋通寶
C区1面下掘り下げ

Fig.302　銅銭２



政和通寶
C区2面下掘り下げ

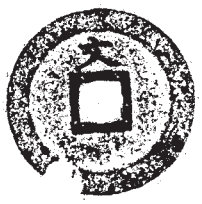


政和通寶

同　裏面

C区　SK-216

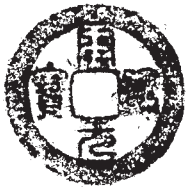
寛永通寶（新）



同　裏面

C区1面下掘り下げ

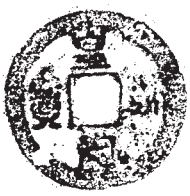
寛永通寶（古）
C区　SK-87



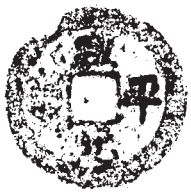
開元通寶
D区　SK-700

治平元寶
D区1面下掘り下げNo.1・3

皇宋通寶
D区第1面　SK-259

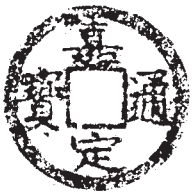


皇宋通寶
D区1面下掘り下げNo.15

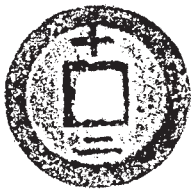


咸平元寶
D区　SK-225

景祐元寶
D区第1面遺構検出

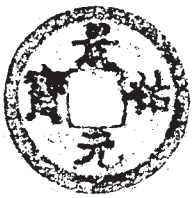


嘉定通寶

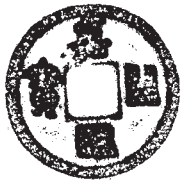


同　裏面

D区　SK-57

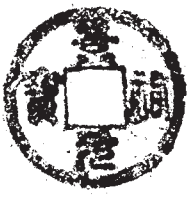


景祐元寶
D区　SK-57



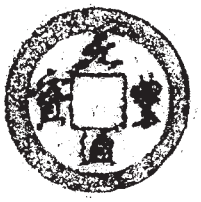
嘉祐通寶
D区第2面　SK-405

元豊通寶
D区　SK-09



景祐元寶
D区1面下掘り下げ

元豊通寶
D区　SK-231



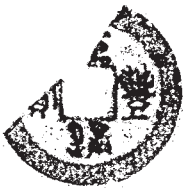
元豊通寶
C区2面下掘り下げ

聖宋通寶
D区1面下掘り下げNo.8

至和元寶
D区第1面遺構検出・No.14

元符通寶
D区1面下掘り下げNo.8

天聖元寶
D区第1面　SK-259

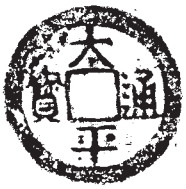


元豊通寶
C区1面下掘り下げ

天聖元寶
D区　SK-612

天聖元寶
D区1面下掘り下げNo.3

天聖元寶
D区第1面遺構検出・No.15



太平通寶
D区1面No.3トレンチ下層

延喜通寶
E区遺構検出

Fig.303　銅銭３

第三章　まとめ

以上簡単ではあるが、各調査区の検出遺構、出土遺物についての説明を行ってきた。最後に第172次調査のまとめを行いたい。

＜まとめ＞

調査対象面積2540㎡は近年の都市部における発掘調査では類を見ない大規模な面積であり、各時代毎に設定した遺構面は4面であるため、延べ調査面積は約8500㎡に及ぶ。

遺構・遺物の初現としては弥生時代前期後半の土坑・土器であり、博多遺跡群内の調査として弥生時代前期後半の遺構が初めて確認された。中期以降の集落が博多濱南部域に広く展開することは知られているが、博多遺跡群内の初現期には博多濱南側砂丘列西部が活動領域として選択されていたことが判明した。弥生時代終末期から古墳時代にかけては甕棺墓や木棺墓のみが確認されたが、周辺の調査成果から広範囲な集落の一部であることが分かる。

古代の時期には大溝に区画された集落が展開する。調査区東側で想定される南北・東西方向を主軸方向に採る遺構群「官衙域」の主軸とは異なるものであるが、これに規制される街区が中世期まで存続していることが確認された。このような古代から中世まで連続する主軸方向を採る区画・町割りが存続している地点は博多遺跡群内では数地点で確認されており、古代以来の街区が維持・存続される何らかの規制などの背景が存在していた可能性が考えられる。

中世前半期は濃密な密度で遺構群が展開する段階であり、白磁廃棄遺構や多くの井戸遺構・廃棄土坑群が検出された。この時期には多種多様な貿易陶磁器が宋商人の手によって博多に持ち込まれており、本調査においても磁州窯系絞胎土器碗・高麗青磁卓等の博多遺跡群においても珍しい遺物が出土するなど、博多が「国際貿易都市」であったことを如実に物語る。

14世紀前半期にはこれまでの町割りとは連続しない主軸方向を持つ遺構群が現れる。大量の土師器が廃棄された土坑・溝が規則的に検出され、これに伴う遺物として三ツ鱗紋の線刻を持つ土製品や「鎌倉」的な嗜好を持つ青磁類などが出土する。

14世紀後半以降は南側のC･D区では第79次･第178次調査の成果と同様に忌避された土地となったのか遺構は全く見られない状況となる。これに対して北側のA・B区は溝で区画された屋敷地となり土師器廃棄遺構や土坑墓が15世紀以降も引き続き存続する。この屋敷地を区画する溝遺構は16世末に実施された太閤町割へと連続するもので、「市小路」とともに太閤町割りの基幹となる。近世段階となると、現代まで続く町割りが再び調査区全体に及び以後400年間町並みは営々と連続する。

以下に各時代の調査成果を簡単にまとめをおこなう。

ａ．弥生時代

前述のように第172次調査での遺構・遺物の初現は弥生時代前期後半の土坑であり、博多遺跡群内でも最も早い段階の遺構となる。博多遺跡群で検出される弥生時代の遺構と遺物の分布状況は砂丘地形の形成が大きく関連している。Fig.304には博多遺跡群の占地する砂丘地形と弥生時代前期の集落遺跡の位置関係を示した。各砂丘列の形成は寒冷期の海退作用が大きく影響していることが知られているが、博多遺跡群の占地する各砂丘列は河川堆積物と海流による堆積作用により、他の博多湾岸で形成される砂丘列よりも大規模なものとなっている。各砂丘列の形成年代は砂丘1（博多濱南側砂丘）

が縄文時代晩期中頃の黒川式段階、砂丘２（博多濱北側砂丘列）が弥生時代前期末前後、砂丘３（息浜）が９世紀頃と考えられる。形成初期の段階では海からの風濤や潮汐作用により地形は大きく変化しており、安定した環境となるのは砂丘前面に風濤からの障壁が形成された後となる。極相が変化し居住可能となるのは、前列の砂丘がある程度形成された段階以後となる。砂丘１では黒川式土器の出土が知られているが、遺構の初現は本調査で検出された弥生時代前期後半の土坑であり、これと符合する。砂丘２に活動の痕跡が認められるのは弥生時代後期後半であり幾分早い印象を受けるが、これは砂丘西側前面に同時期に形成された砂丘列が障壁の役割を果たしたためで、砂丘西側の一部が先駆けて利用可能な環境に変化したためと考えられる。砂丘２全域に遺構が展開するのは８世紀後半の時期となる。砂丘３も同様に砂丘南側背面部の一部が安定した環境となり、９世紀代には墓域として利用が開始されている。一般的に砂丘最前列が活動領域として取り込まれるのは15世紀前後と言われている

Fig.304　砂丘地形の生成と遺跡分布図　S=1/50000

が、これまでの調査より 11 世紀代には確実に遺構が営まれていることが判明している。これは埋立による居住空間の拡大を目指した積極的な活動の成果と、前面の海浜部が河川堆積物により遠浅になったためと考えられる。

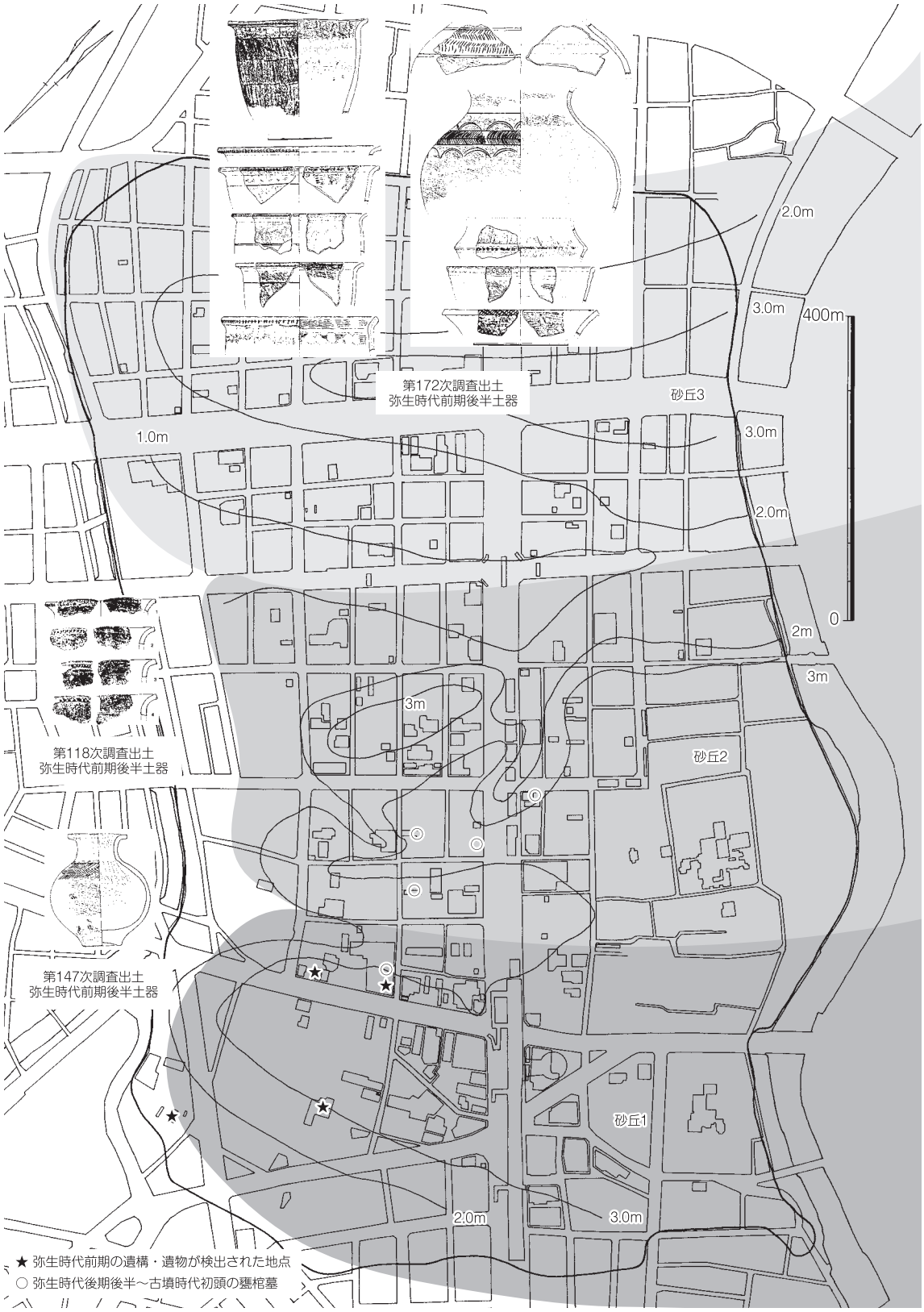


Fig.305　砂丘地形と博多遺跡群内遺構配置図　弥生時代前期後半の遺構･遺物と後期後半～古墳初頭の甕棺墓の分布図　S=1/8000

御笠川と那珂川河口付近に最初に形成された砂丘１西半部に弥生時代前期後半の遺構・遺物が検出されるのは、御笠川上流に位置する那珂・比恵遺跡群と板付遺跡への石器素材流通経路の中継点の一つとして選択・利用された結果と考えられる。博多湾岸では縄文時代後晩期から黒曜石石核等の石材が交易によって広く移動していることが知られている。本調査地点は海浜部からはやや奥まった位置となるが、石器製作工房と考えられる土坑等や石器未製品も検出されており、石材から石器素材へ荒加工し、上流部の遺跡へ流通させる加工施設としての役割を担っていた可能性が考えられよう。砂丘１南側の後背地は水田経営が可能な低湿地であるが、現在のところこの範囲での水田遺構などは検出されておらず、生活基盤を何に遺存していたかは定かではないが、内陸部から海浜部への進出はこのような石材や物品の交易を主目的としたものであったことが想定できる。2000 年以上続く「博多」の歴史はやはり交易から始まるのであろう。

中期から後期の段階には砂丘２が居住可能な環境に変化し始めるが、大規模な集落は砂丘１東半部を中心として形成され、砂丘１を南北方向に分断するように甕棺墓の列埋葬が行われる。弥生時代終末期から古墳時代初頭においても集落は引き続き砂丘１東半部を中心に全域に拡大するが、この時期の甕棺墓の分布状況を Fig.305 に示した。砂丘１から離れて砂丘２の縁辺部に単独埋葬で点在する状況が見られる。弥生時代中期の段階では甕棺墓は集落内に列埋葬され、集落と墓域が明確には分離していないが、終末期以降は墓域は砂丘海浜部を選択して営まれていることが、検出された甕棺墓の出土地点から知ることができる。この時期前後に墓域が明らかに集落から分離されたことが分かる。

b．古代

第 172 次調査では、古代の時期の遺構として集落とこれを画する溝を検出した。これらの遺構は出

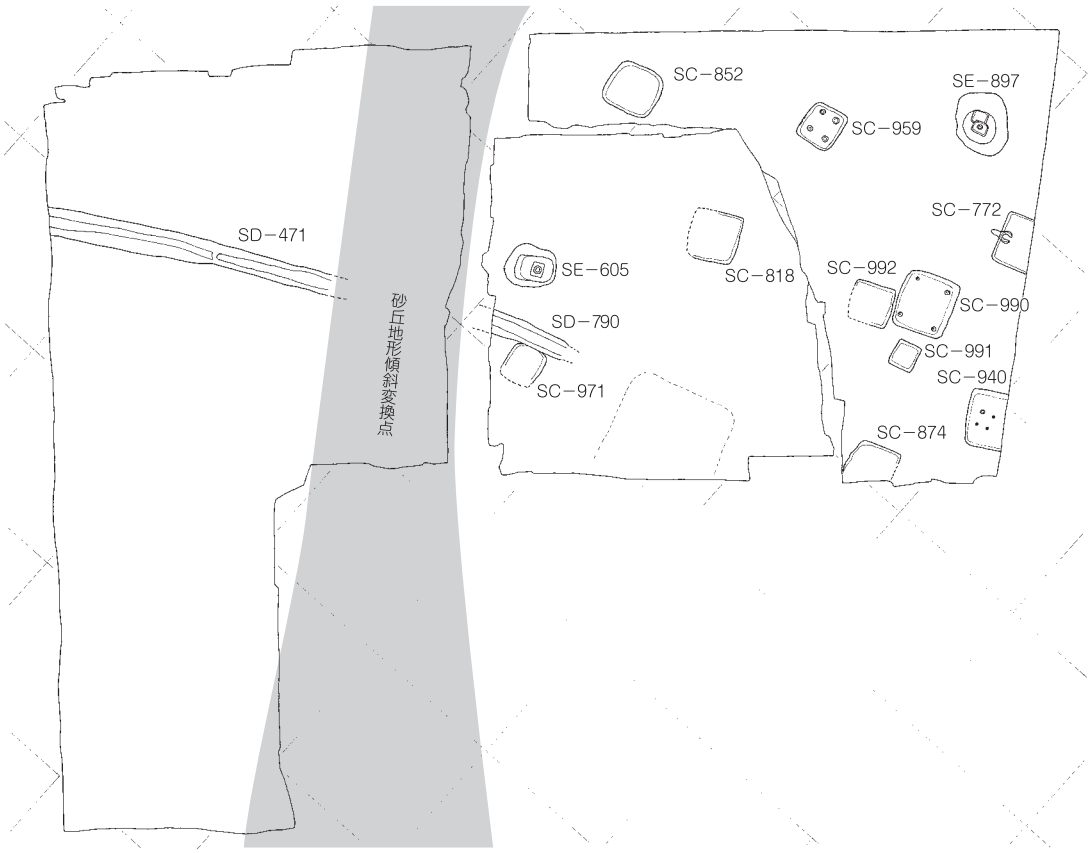


Fig.306　第 172 次調査　古代遺構配置図　S=1/500

土遺物から8世紀後半から9世紀前半の時期と考えられ、主軸方向をN-30°-W前後の方向を採るものが多く、調査区東側で検出される「官衙域」で検出される遺構群とは異なる主軸方向を採る。検出される住居は列状に配置されており、これに伴って井戸遺構が設置されるなど整然とした集落像が復元できる。A・B区とC・D区を画する溝付近には、この段階で何らかの区画が存在していたのかは確認できないが、この範囲にある傾斜変換線は古代の溝（A区SD-471とC区SD-790）と直交する位置関係にあり、地形に影響を受けて成立した区画であった可能性も考えられる。

Fig.307に周辺調査成果から古代の時期の遺構を示した。第172次調査地点の東側には東西・南北方向の主軸を基本として整備された「官衙域」と考えられる区画が存在する。この官衙域は約1町四方の範囲で復元されており、この範囲内では地形を考慮しない正方位の主軸を採る溝が多数検出されている。同時期に他の地点でも広範囲に及ぶ区画が存在していたことが想定されている。博多濱中央部から北側では現在の町割りに近い主軸を採る「集落域」と考えられる区画があり、博多濱西部域ではN-23°-W前後の主軸方向を採る「港湾域」とされる区画が存在していたと考えられる。これらの区画は古代の時期に現れ14世紀前半まで部分的に存続していることが判明しており、13世紀末から14世紀初頭に道路が整備されるまで永く「博多」の町並みを象徴するものであったと考えられる。区画は各々の地形に則して整備され、基軸となる直線的な溝等により規制されたものであるが、その分布範囲は「官衙域」と異なり必ずしも方形ではなく、各区画の接合点付近では両者は複雑に入り組んでいる状況が見られる。第172次調査で検出された集落は、古代の段階では「港湾域」の基軸に近い方位での整備が行われているが、銅製巡方や石帯、墨書須恵器、皇朝十二銭等の一般集落とは異なる遺物が出土しており、その性格には不明確な点が多く残る。このような特殊遺物の出土にはどのよ

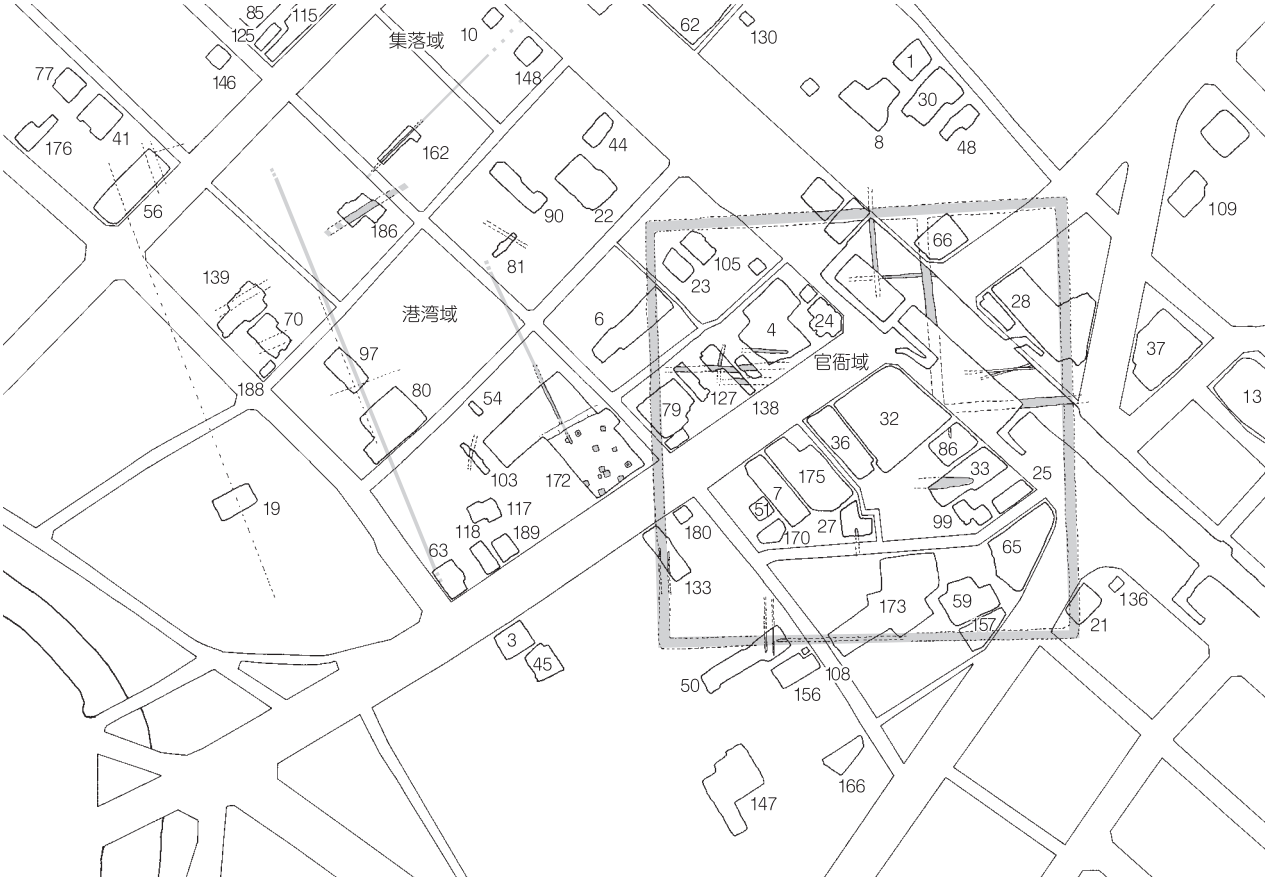


Fig.307　周辺遺構配置図・古代　S=1/4000

うな傾向が見られるのか。Fig.308 に博多遺跡群内で出土した官人階級の存在を示す遺物の出土地点を示した。巡方や丸鞆等の銅製帯金具は博多濱の広範囲に出土するが、「官衙域」周辺に多く集中する傾向が見られる。1 点のみ砂丘 3（息浜）南側の第 119 次調査地点で出土している。8 世紀後半の時期に属するもので副葬品として埋葬されたものであり、八花鏡・須恵器碗とともに出土した。

銙帯の使用禁止に伴って普及したとされる石帯の分布状況を見るとやはり「官衙域」での出土が多いが、「集落域」での出土数もこれに類するものとなる。砂丘 2 に遺構が大きく展開する 9 世紀の段階は博多遺跡群西側の丘陵上に設置された鴻臚館が隆盛を迎えた時期である。外交施設から貿易拠点と変容した鴻臚館に仕えた官人達の家族もここに居を構えたのだろうか。

皇朝十二銭の分布状況も銅製帯金具と同様に「官衙域」周辺に比較的多く集中する傾向が見られるが、「集落域」とされる砂丘 2 の前面付近でもまとまって出土している。

古代に属する墨書土器の出土は中世の墨書土器と異なり、博多遺跡群においても 100 点程度と出土数は多くはない。しかしながら「長官」や「佐」等の官人の役職を表すものが出土しており、このような階層や識字層の存在を示す重要な資料である。その出土地点の分布状況を見ると博多濱のほぼ全

博多遺跡群内出土帯飾り一覧

番号	遺跡	器種	遺存状況	材質	平面形	透孔(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	かがり孔	出土遺構	調査番号	報告書
1	博多17次・20次	蛇尾	底板付	青銅	偏D形	―	2.1	2.1	0.1	鋲3	包含層	8324	118集
2	博多22次	丸鞆	半欠	玉髄	D形	―	2.7	-	0.7	3	3層中	8327	118集
3	博多22次	蛇尾	底板のみ	滑石	長方形	―	2.6	3.0	0.1	鋲孔3	SK625	8327	118集
4	博多22次	丸鞆	未製品	石(黒色)	O形	―	3.0	4.0	1.0	なし	M346	8327	118集
5	博多31次	丸鞆	完形	石(緑色)	D形	―	1.9	2.9	0.4	3	SK01	8606	150集
6	博多39次	丸鞆	未製品	石(黒系)	D形	―	1.6	2.4	0.7	なし	包含層	8806	229集
7	博多39次	蛇尾	裏金具	青銅			2.3	2.3	0.1			8806	229集
8	博多62次	巡方	完形	滑石(黒色)	正方形	―	3.5	3.8	0.7	4	A区4面	8963	397集
9	博多62次	丸鞆	鋳型	滑石	D形	長方形(1.9×0.5)	3.2	3.8	0.5	―	B区トレンチ	8963	397集
10	博多62次	丸鞆	底板無し	青銅	D形	長方形(1.7×0.6)	1.5	2.3	0.2	鋲3	A区3面下	8963	397集
11	博多79次	巡方	完形	青銅	正方形	長方形(1.5×0.3)	2.4	2.5	0.4	鋲4、裏留板	包含層	9259	447集
12	博多80次	丸鞆	半欠	石(緑色)	D形	―	2.4	―	0.3	2＋	包含層	9309	448集
13	博多80次	巡方	半欠	ガラス	長方形	―	―	3.6	0.4	3＋(貫通)	包含層	9309	448集
14	博多85次	巡方	一部欠損	石(白～淡緑)	正方形	―	3.7	4.1	0.7		包含層	9433	522集
15	博多85次	巡方	一部欠損	石(白～淡緑)	長方形	長方形(欠損)	―	―	0.5	4	包含層	9433	522集
16	博多85次	丸鞆	未製品	滑石	D形	―	1.6	3.2	0.6	1＋	包含層	9433	522集
17	博多85次	丸鞆	未製品	滑石	D形	―	1.0	1.6	0.5	―	包含層	9433	522集
18	博多119次	巡方	一部欠損	青銅	正方形	長方形(2.1×0.3)	2.5	2.8	0.2	鋲4	包含層	9941	668集
19	博多147次	巡方	一部欠損	青銅	D形	長方形(1.6×0.7)	2.2	1.7	0.1	3＋	包含層	0426	892集
20	博多147次	丸鞆	完形	青銅	長方形	長方形(1.7×0.5)	2.6	1.6	0.1	3	包含層	0426	892集
21	博多172次	巡方	完形	石	方形	長方形					土坑	0705	本報告
22	博多172次	巡方	完形	青銅	方形	長方形					包含層	0705	本報告
23	博多180次	巡方	完形	青銅	長方形	長方形				2	包含層	0754	1045集
24	博多186次	巡方	一部欠損	青銅	長方形	長方形				裏留板	井戸	0863	1090集
25	博多築港線2次	蛇尾	底板付	青銅	長D形		3.7	3.2	0.1	鋲4	5面	8331	184集
26	博多築港線2次	巡方	一部欠損	石(蛇紋岩)	正方形	長方形(1.6×0.5)	3.1	3.3	0.6	4	3B面下	8331	184集
27	博多築港線2次	巡方	半欠	石(白～淡緑)	正方形		―	3.4	0.6	1＋	4面下	8331	184集
28	博多築港線2次	丸鞆	完形	石(斑、青・黒)	山形	長方形(1.9×0.2)	2.5	3.6	0.6	3	3面下	8331	184集
29	博多築港線4次	丸鞆	底板無し	青銅	D形	長方形(1.6×0.6)	1.3	2.0	0.1	鋲3	3・4面	8527	205集
30	博多築港線4次	蛇尾	底板無し	青銅(黒漆塗)	偏D形	―	2.4	2.4	0.3	鋲3	3・4面	8527	205集
31	博多築港線4次	巡方	1/3欠損	石(白色)	正方形	長方形(2.3×0.2)	2.5+	3.6	0.5	2＋	SP2712	8527	205集
32	博多店屋町工区	巡方	完形	石(白系)	長方形	―	2.1	2.3	0.4	2	SD2(5)	7725	105集
33	博多店屋町工区	巡方	一部欠損	蛇紋岩(白系)	正方形		3.2	3.4	0.5	4(貫通)	SK235	7725	105集

域で出土しているが、「港湾域」・「集落域」では海浜部に近い範囲に集中している状況が見られる。第 172 次調査では約 30 点の墨書須恵器等が出土したが、これはこれまでの出土総数の約 30% を占める割合であり、「三宅」や「長」等の墨書が見られることは注目される（Fig.285 参照）。

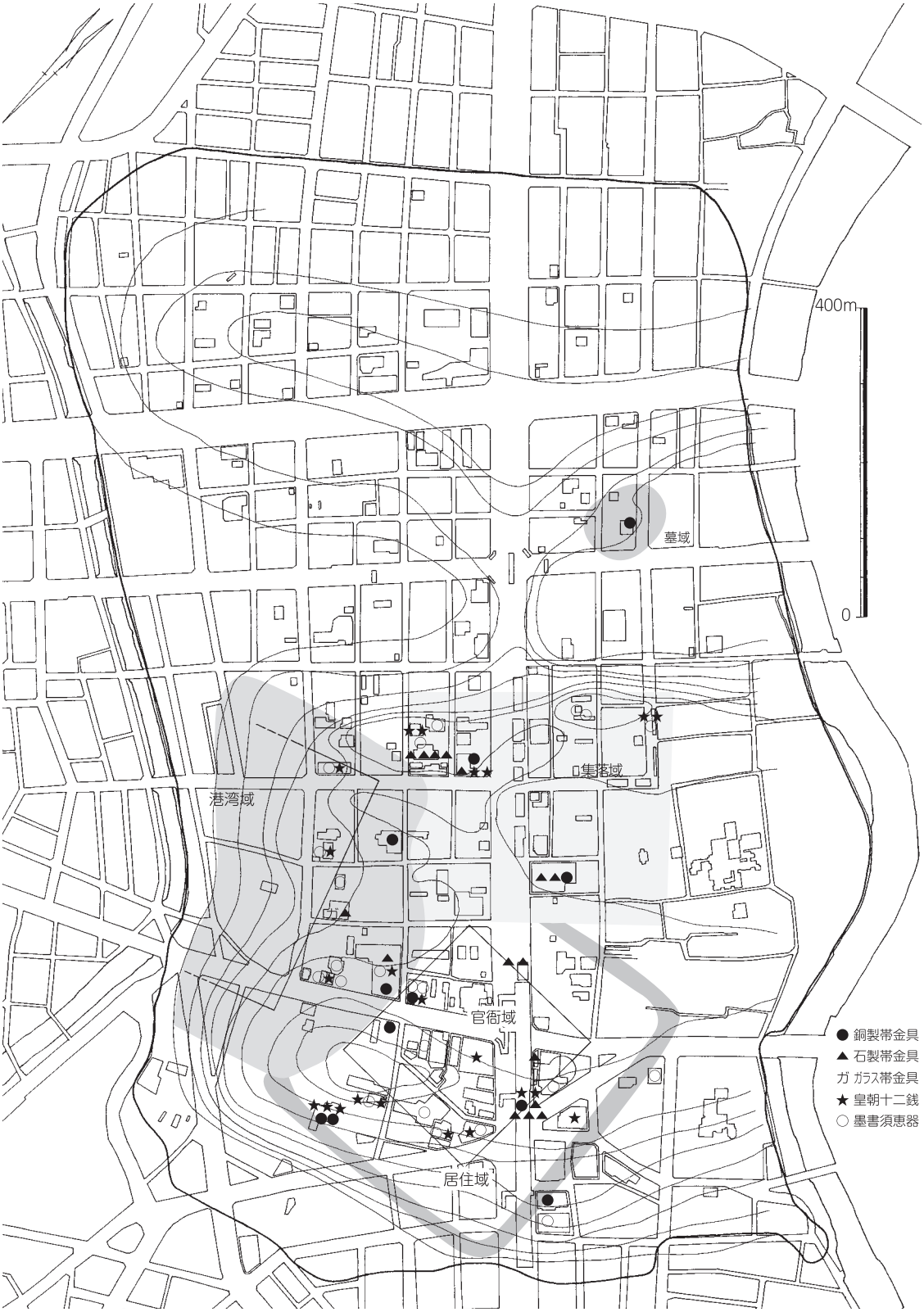


Fig.308　博多遺跡群内帯金具等出土地点配置図　S=1/8000

このような特殊遺物の出土状況や遺構の配置状況から第172次調査で検出された古代集落の性格を考えてみると、「官衙域」に設置された鴻臚館の支所に仕えた官人階級の居住地である可能性を考えて大過ないものと考えられる。また、港・官衙・集落が一体となって機能的かつ規格的な区画配置を採る様子から古代の「博多」は広義での都市として評価されよう。

c．中世

中世前半期は鴻臚館の廃絶により、貿易拠点としての機能が「博多」に移され最も繁栄する時期である。これまでの調査成果とこれに基づく研究により、「博多」に貿易に大きな役割を果たした宋商人の居住地である「唐房」が存在していたことが明らかにされている。その所在範囲は前述の「港湾域」を中心とした博多濱西部域とされており、本調査地点もこれに含まれる。

11世紀後半の遺構としては竪穴住居が検出されたが遺構密度としては薄く、廃棄土坑等の遺構群が濃密に展開するのは12世紀前半頃である。この時期の遺構は調査区全域で検出され、白磁破砕品が大量に廃棄された土坑や東播系須恵器・白磁碗が収納された半地下式土坑等の遺構とともに、便所遺構・大量の井戸遺構が所狭しと掘削されている。これらの遺構群からは建物配置やその区画を示す情報を得ることはできないが、三連土坑を使用した便所遺構や木棺墓から概ね町割の主軸は古代に引き続きN-30°-W前後の方位を採っていたことが分かる。本調査区付近は唐房と日本人居住地が入り組んで混在していたためか、C・D区では12世紀代の土坑墓・木棺墓が検出された。12世紀後半は宋商人居住区が拡大する時期であり、確かにこれ以降の墓は15世紀代になるまで調査区内では検出

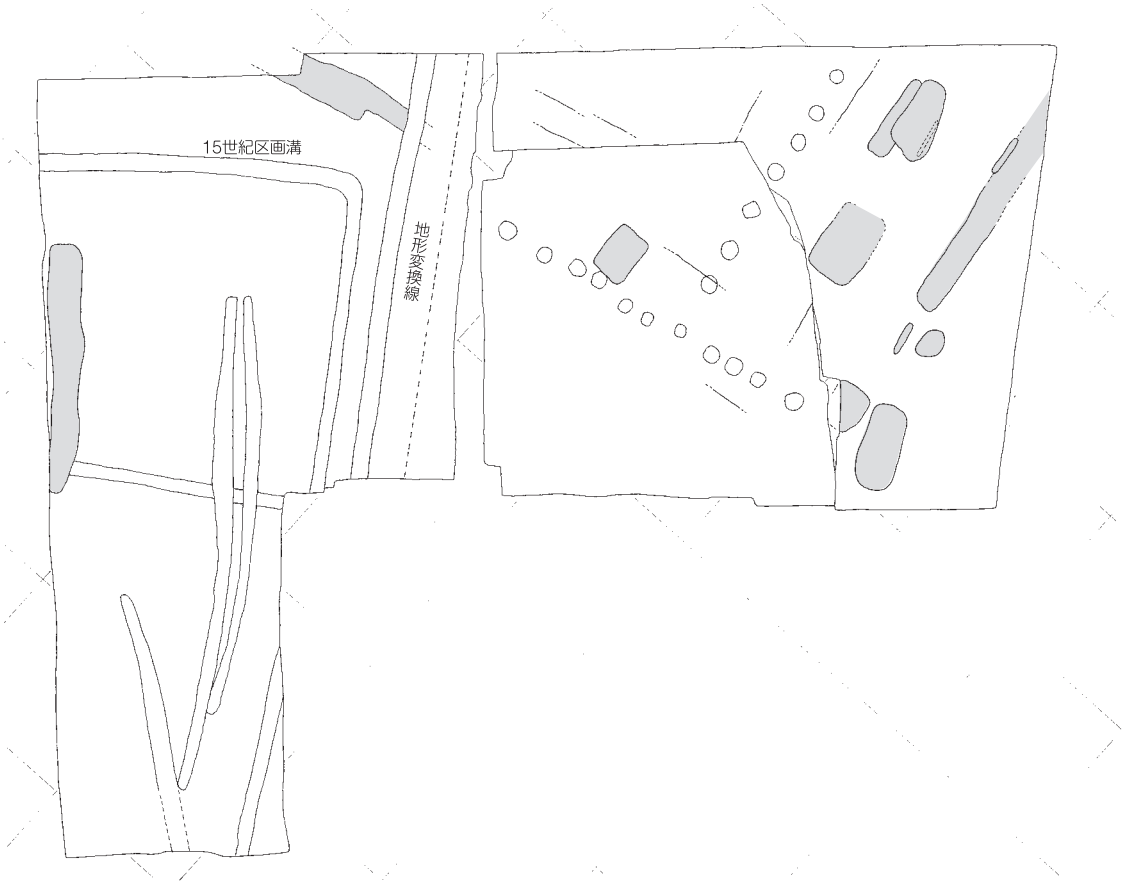


Fig.309　第172次調査　中世遺構配置図　S=1/500

Fig.310　周辺遺構配置図・中世　S=1/4000

されない。13 世紀に属する遺構は 12 世紀代に比べ減少する。これは唐房の拡大が沈静化し、日本人との混住が進んだことを示すものであろうか。井戸は相変わらず掘削されるが、大型の廃棄土坑は減少する。一方、掘立柱建物は増加しており永く存続した町屋の一角になったと考えられる。

唐房と宋商人の存在を示す遺物としては、多種多彩な貿易陶磁器類と押圧波状文瓦が挙げられる。国内の遺跡においても貿易陶磁の多様さは群を抜く博多遺跡群であるが、本調査ではこれまでの調査ではあまり見られなかった遺物が出土している。磁州窯系絞胎土器碗や高麗青磁盞托、中国陶器燭台や翡翠釉陶器等は他の遺跡では見ることのない遺物であり、交易商品としてではなく唐房で使用する調度品として持ち込まれたもので、石製筐は貴重品を入れる宝石箱のような用途で使用されたのであろう。遠い異国の地に居を構え、これらの遺物に囲まれて彼の地に思いをはせたのであろうか。
押圧波状文瓦は中世日本では見られない様式の瓦であり宋商人の手によって持ち込まれたものである。これらの瓦とともに出土する鬼瓦や獅子瓦も該期の国産様式のものとは髭等の表現・造形が大きく異なっており、押圧状文瓦と同じ屋根を葺いたものであろう。これらの瓦は建物屋根全体を葺くには出土量は少なく、現在は庭に建てられた先祖を祀る御堂などに使用されたものと考えられている。

13 世紀末から 14 世紀前半にかけて「博多」には鎮西探題が設置され、都市の景観は徐々に変化し始める。聖福寺と櫛田神社を結ぶ道路遺構を初端として長方形街区を形成する道路網が整備され中世後半期の都市景観が成立するのである。この時期の遺構としては大量の土師器が廃棄された溝・土坑がＤ区を中心に検出された（Fig.309 参照）。これらの遺構はこれまでの街区主軸とはやや異なる方位を採るものが多く、他の遺構とは異質な状況を見せる。N-76°-E 前後の主軸方向を採るこれらの遺構群は、調査区全体の東側範囲のみで検出される。この他これらの遺構群とほぼ同主軸で掘削される土坑群が検出されている。直径１ｍ前後の円形土坑が直線的に並ぶもので、検出時にはわずかな出土遺物から 12 世紀代の廃棄土坑群との認識であったが、これらの遺構配置図からは一連の遺構（掘立柱塀や築地塀下部構造か）を構成する大型の柱穴列である可能性が考えられる。また、遺構ではないがこの主軸方位に沿うように切られる整地土層が数カ所の範囲で確認されており溝・土坑・塀で規格的に配置された施設の存在が 14 世紀初頭の段階に想定できる。

14 世紀初頭の本調査地点付近を考える上で鎮西探題の所在は避けて通れない問題である。鎌倉時代後半期の「博多」に大きく影響を与えた鎮西探題は、これまでの調査成果・文献資料から砂丘１の櫛田神社と馬場新町（現在の祇園交差点付近）を結ぶ線上が所在位置として推定されている。鎮西探題は 13 世紀末に成立し、14 世紀前半に滅亡するまでの短期間のみの存在であるが、この間の元応２年（1320）に鎮西探題を含む博多一帯が失火により炎上し、文庫に収蔵されていた多くの文書とともに施設の大半が焼失している。再建後の元弘３年（1333）には菊池武時による鎮西探題襲撃が発生し、探題館は未焼失だったが周辺は再び被災する。同年５月には鎮西探題が滅亡し探題館とともに焼失する。

鎮西探題館は、これまでの発掘調査からはこれに該当する遺構の検出例はないが、文献からその施設と構造が復元されている。建築物としては探題館本体である奉行所、付随する文書保管施設である文庫があり、いずれも博多炎上時と滅亡時に二度焼失している。門は東門・南門がの存在が文献より知られるが、北門・西門について記述はないものの存在していたものと考えられる。外側には施設の性格上、築地塀・土塁や溝・堀などが設置されたと考えられる。これらに関わる遺構として発掘調査で把握できるのは溝等の外郭施設などに限られる。

周辺で実施された第 79 次調査や第 178 次調査の成果から、14 世紀前半まで存続する遺構群がこの

Fig.311　博多遺跡群内区画配置図・中世後半　S=1/8000

時期を境に断絶し、都市空間の中では異質な耕作地となっている状況が報告されている。本調査のD区も同様の状況であり、14世紀代前半の廃棄遺構群を最後に遺構は断絶し再び生活空間として利用されるのは16世紀代になってからである。このような状況は鎮西探題で繰り広げられた惨劇を目撃した人々が、廃絶後の土地を忌避したためと考えられており、鎮西探題の所在をこの範囲に求める根拠の一つとなっている。前述の14世紀前半代のみ展開するN-76°-E方向の主軸を持つ遺構群の分布状況をFig.310に示した。同様の主軸を採る遺構は第172次調査東側の第138次調査地点まで確認できる。両調査地点で検出される遺構から約70ｍ程度の範囲内で、これらの遺構群が存在するものと考えられる。鎮西探題全体の規模や区画を示す文献資料はないが、主要な施設とこれに付随する諸施設のほかに犬射馬場が存在する。犬射馬場は武芸の場であると同時に刑場として使用されていたおり、ある程度の面積が必要とされる。これらの施設を合わせると鎮西探題全体では大規模な範囲が想定されるが、このような大規模で画一的な区画はこれまでの調査では検出されていない。これは探題館等の主要施設のみを旧来の区画を刷新した新しい区画に基づいて造営し、付随する諸施設などは旧来の街区に従って整備したモザイクのような複合施設であったためと考えられる。

鎮西探題の位置を探し求める上で櫛田神社は重要な指標となる。鎮西探題と櫛田神社は文献より近接して存在していたことが知られているからであり、その所在位置は創建以来大きく変わることはないとされる。再建に際して現在の社殿方向へ変更されているが、往時は社殿が海側に南面していたことが文献上の記述から推測される。A区で検出された溝からは櫛田神社銘の瓦が出土しており、本調査地点はある時期の神社領域に非常に近接していたことが分かる。

14世紀前半代の博多遺跡群で確認されている遺構の主軸を抽出・模式化してFig.311に示した。この段階では博多濱中央部付近は道路網により長方形街区が整備され整然とした都市景観が見られるが、それ以外の範囲では古代以来存続する旧来の区画が踏襲されている。このような状況の中、この14世紀前半代に突如として出現する区画が2つ確認できる。

一つは前述の本調査地点から東側にかけてみられるもので、もう一つは本調査地点西側で確認できる現在の国体道路と近い主軸方向を採る区画である。この区画は「港湾域」の区画東側に南北方向に長い分布範囲を見せるもので、主に溝遺構がこの主軸方向を顕著に示す。第118次調査で検出された第024号遺構は浅い溝遺構で、14世紀前半代の時期とされる。大量の土師器坏（約2.3t）が廃棄されており、鎮西探題を巡る饗宴の際に使用・廃棄された残滓であると報告されている。このような廃棄遺構は博多遺跡群内の他の調査地点においても11世紀代より見られるが、鎮西探題の設置により「鎌倉的な饗宴＝かわらけ廃棄儀礼」の習慣が「博多」に持ち込まれたことが、博多遺跡群内での土師器廃棄遺構の検出例の増加をもたらしたとされる。

第3次調査と第103次調査で確認されている同方向の溝は約1町間隔を測るものであり、遺構の存続時期が14世紀前半代の短期間に絞られること、それ以前の区画を示す遺構とは主軸を違えることなどから鎮西探題全体を構成する区画の一つとしての役割が想定できよう。なお、この区画は鎮西探題廃絶後も15世紀代以降も存続して継承されている。A・B区で検出される溝がその主軸方向を踏襲しており、16世紀末の太閤町割の基幹軸となったのは偶然ではなく、以後現代までその痕跡を見ることができる。前者が断絶し後者が存続するのは主要施設と付随施設に伴うものであったことを示すのであろう。以上のことから鎮西探題は本調査地点と第79次調査地点を含む範囲に主要施設を配し、全体は約2町程度の範囲内に諸施設を配したものであったことが想定できる。

鎮西探題に縁の深い北条氏の家紋である三ツ鱗紋を刻む土製品や鎌倉的嗜好の見られる青磁香炉などの出土遺物からも本調査地点が鎮西探題館の一角であったことを指し示す資料といえよう。

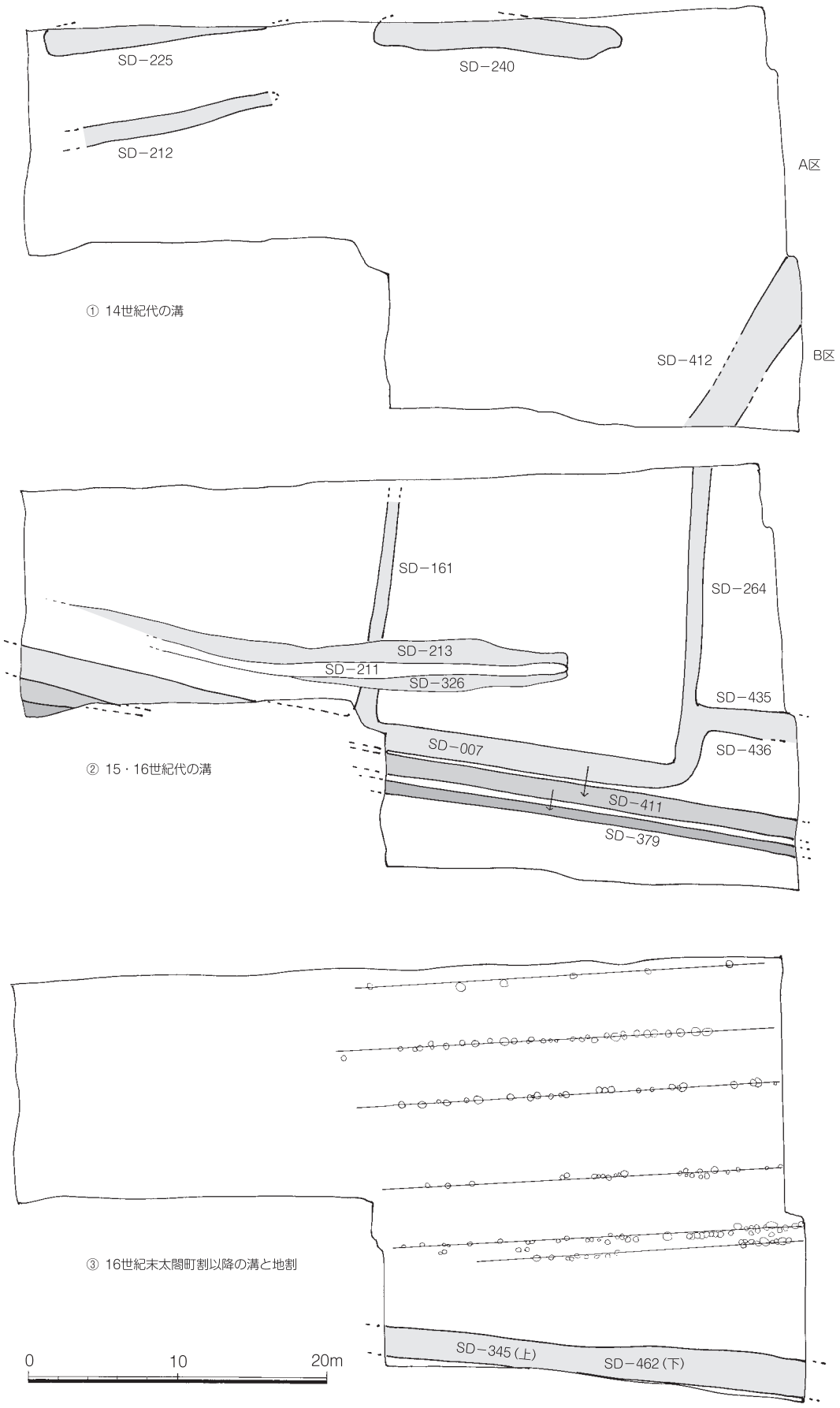


Fig.312　A・B 区中世溝・地割の変遷模式図

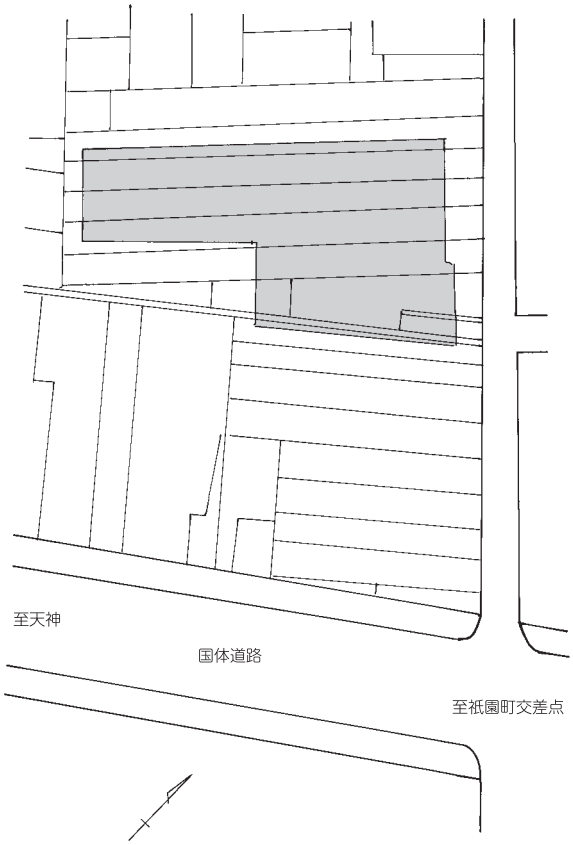


Fig.313　地籍図とA・B区の位置（約1/1000）

今後の調査やこれまでの調査成果の再検討から鎮西探題の実像がより明らかにされることを期待したい。

A・B区中世溝・地割の変遷

A・B区は砂丘に挟まれた谷部分に位置し古代・中世前期の町筋を示すみぞは1条見られるのみであるが、14世紀代に至って若干の溝が見られるようになる（Fig.312-①）、方向の異なる溝があって、また類似する方向を持つ溝も連続性を持たず､町筋を示すとまではいえない。

①に時間をおいて、②段階では15~16世紀の遺構群を中心とする｡埋没段階で多量の陶磁器、瓦、礫が廃棄された10条ほどの溝が縦横に検出された。これらの溝には作り替えなど数次にわたる変遷がみられるものもあり、街区の変遷を知る上で好資料である。 溝のうちSD007はSD264とB区内でほぼ直角に繋がり、ある区画の東隅を示していたが、後この区画の北東溝SD264は廃止され、SD007は南東側に移動し直線的な溝SD411に作り替えられ、さらにSD379に作り替えられ、さらに③の太閤町割段階でSD462、SD345に代わるという一連の流れが見て取れる。A区北東半分とB区で中世末の太閤町割を示す柱穴（柵）列5条が検出された。この柱穴列と溝は現在の地籍図（Fig.313）と完全に一致し、また繰り返し杭列は作り替えられ、溝もSD345は長期の使用により厚く酸化鉄が沈着するなど、現在の町割りが太閤町割を長期にわたって忠実に踏襲されていることがわかる好資料である。柱穴列間の間口は2間、3間半、2間半と狭く、まさに短冊形を呈している。溝SD345と南側の区画は海側柱穴列と若干方位に違いがあるが、B区の部分が常に地形変換線として意識され続けたという地形上の理由によるものであろう。

博多遺跡群第 172 次調査における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

Ⅰ．自然科学分析の概要

博多遺跡群 172 次調査の発掘調査では、便所と推定される遺構 2 基（SX546、SX433）が検出された。そこで、これらの遺構が便所か否かを検証するために、トイレ遺構分析（花粉分析、寄生虫卵分析、種実同定）、昆虫分析、リン・カルシウム分析を行った。分析対象は、SX546（11 世紀末～ 12 世紀初頭）の糞層とその周辺土壌、および SX433（11 世紀末～ 12 世紀初頭）の土壌の計 3 試料である（リン・カルシウム分析は SX546 の 2 試料）。

Ⅱ．花粉分析および寄生虫卵分析

1．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生･環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。また、同時に寄生虫卵分析を行うことで、生活域の確認や人糞施肥の有無、あるいはトイレ遺構を確認することも可能である。なお、花粉や寄生虫卵などの有機物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2．方法

花粉・寄生虫卵の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）試料から 1 ㎤を採量
2）0.5％リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎
3）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す
4）25％フッ化水素酸を加え 30 分静置（2・3 度混和）
5）水洗後サンプルを 2 分する
6）2 分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す
7）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製
8）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。なお、基本的に花粉分析はアセトリシス処理を施したプレパラート、寄生虫卵分析はアセトリシス処理を施していないプレパラートについて行った。

花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

3．花粉分析結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 12、樹木花粉と草本花粉を含むもの 2、草本花粉 15、シダ植物胞子 2 形態の計 31 である。分析結果を表 1 に示し、花粉数が 100 個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属－ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、セリ亜科、ヒルガオ、タンポポ亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

1) SX546

糞層では、ほとんどが草本花粉であり、アブラナ科が卓越し、アカザ科－ヒユ科、イネ科、ナデシコ科が伴なわれる。樹木花粉ではスギ、マツ属複維管束亜属、ハシバミ属、コナラ属コナラ亜属がわずかに出現する。

糞層周辺では、ほとんどが草本花粉であり、アブラナ科が卓越し、イネ科、アカザ科－ヒユ科、タンポポ亜科、ヨモギ属が伴なわれる。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、スギ、シイ属－マテバシイ属などが低率に出現する。

2) SX433

ほとんどが草本花粉であり、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科、イネ科（イネ属型を含む）が優勢で、ソバ属、ヨモギ属などが伴われる。アブラナ科とアカザ科－ヒユ科は、花粉の集塊が認められる。

4．寄生虫卵分析結果

(1) 分類群

出現した寄生虫卵は、回虫と鞭虫の 2 分類群である。分析結果を表 1 に示し、1㎤中の寄生虫卵数を図 2 に示す。以下に各寄生虫卵の特徴を記載する。

1) 回虫　Ascaris（lumbricoides）

回虫は世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられ、卵には受精卵と不受精卵がある。遺跡の堆積物の分析では、堆積年数や薬品処理のため、受精卵と不受精卵の区別は不明瞭である。卵の大きさは 80 × 60 μm程度と比較的大きな虫卵であり、楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18 日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。

2) 鞭虫　Trichuris（trichiura）

鞭虫は世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。卵の大きさは 50 × 30 μm程度で、レモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の

栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、3～6週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

(2) 寄生虫卵群集の特徴

1) SX546

糞層および糞層周辺では、寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

2) SX433

寄生虫卵が1200個/㎤と比較的高い密度で検出された。ほとんどが回虫卵であり、鞭虫卵もわずかに認められた。寄生虫卵は、分解が進み表面の蛋白膜がほとんど残っておらず破片も多い。

5．考察

(1) SX433

11世紀末～12世紀初頭とされるSX433では、回虫卵が比較的多量に検出され、鞭虫卵も認められた。寄生虫卵の密度は堆積物1㎤あたり1000個以上であり、金原（1992）の基準により便所ないし糞便の堆積物であるとみなされる。回虫と鞭虫は、どちらも中間宿主を必要とせず、虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。寄生虫に起因する回虫症や鞭虫症は、腹痛を主とする消化器病症がおこり、多数寄生の場合は症状が重い。

花粉群集では、アブラナ科が多く、アカザ科－ヒユ科、イネ科（イネ属型を含む）、ソバ属が伴われる。このような花粉組成から、自然植生の可能性は低いと考えられ、遺構の周囲ないし内部の閉鎖された環境が反映されていると考えられる。アブラナ科についてはアブラナ（菜種）などが花芽を含めて食べられ、アカザ科－ヒユ科は花序ないし果実序が薬用となる。また、イネ属型（イネ）とソバ属については、これらが食用とされていたことを示している。

(2) SX546

11世紀末～12世紀初頭とされるSX546の糞層と糞層周辺では、寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。花粉群集の特徴はSX443と同様であることから、同遺構についても便所もしくはそれに類似する遺構である可能性が示唆される。

寄生虫卵については何らかの要因で分解された可能性が考えられるが、寄生虫卵は排卵のタイミングや採取箇所などにより検出されない場合もあることから、より多くの試料について分析を行うことが望まれる。

文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学．新版臨床検査講座，8，医歯薬出版，p.9-55.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－．奈良国立文化財研究所，p.14-15.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学．考古学と自然科学，2，同成社，p.151-158.

金原正明（2004）寄生虫卵分析．環境考古学ハンドブック，朝倉書店，p.419-429.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13,p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.

Ⅲ．種実同定

１．はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

２．方法

以下の手順で、種実の抽出と同定を行った。

1）試料 500㎤に水を加えて泥化

2）攪拌した後、0.25㎜の篩で水洗選別

3）双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数

同定は種実の形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

３．結果

(1）分類群

樹木 1、草本 4 の計 5 分類群が同定された。分析結果を表 2 および図 3 に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

シマサルナシ　Actinidia rufa Planch. ex Miq.　種子　マタタビ科

暗褐色ないしやや紫色を帯びる茶褐色で、楕円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分布する。種皮はやや厚く堅い。マタタビ、サルナシに比べ表面の穴が大きく深い。長さ 2.15㎜×幅 1.17㎜、長さ 2.24㎜×幅 1.20㎜。

〔草本〕

イネ　Oryza sativa L.　炭化穎（破片）・炭化果実（完形・破片）　イネ科

穎は黒褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。長さ 4.59㎜×幅 2.78㎜、長さ 4.53㎜×幅 2.91㎜。

黒色で長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

アワ　Setaria italica Beauv. 炭化果実　イネ科

茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。長さ 1.30㎜×幅 1.35㎜。

タデ属　Polygonum　炭化果実　タデ科

黒褐色で頂端の尖る卵形を呈す。断面は扁平、表面には光沢がある。長さ 2.40㎜×幅 2.22㎜。

シソ科　Lamiaceae　果実

白褐色で球形を呈し、下端にへそがある。長さ 2.06㎜×幅 1.92㎜。

(2）種実群集の特徴

1）SX546

糞層および糞層周辺では、イネの炭化果実が比較的多く、アワ、タデ属の炭化果実も認められた。

2）SX433

シマサルナシの種子が多量に検出され、イネの炭化穎、タデ属とシソ科の炭化果実も認められた。

４．考察

SX433 では、シマサルナシの種子が多量に検出された。シマサルナシは食用にもなる有用植物である。寄生虫卵分析の結果と考え合わせると、食用とされたものの種子が糞便とともに排泄された可能性が考えられる。

栽培植物では、SX546 でイネとアワの炭化果実、SX433 でイネの炭化穎が検出された。その他の分類群では、人里植物のタデ属やシソ科が認められた。これらの種実類は、何らかの形で周囲から遺構内に混入したものと考えられる。

文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣　出版，p.131 － 139.
南木睦彦（1991）栽培植物．古墳時代の研究第４巻生産と流通Ⅰ，雄山閣出版株式会社，p.165 － 174.
吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル No.355，ニューサイエンス社，p.2 － 14.

Ⅳ．昆虫化石

１．はじめに

遺跡の堆積物に残存する昆虫化石の群集の構成や組成を調べることで、過去の植生や人為による自然改変などを明らかにすることができる。また、昆虫固有の生活環境を調べることで、遺構の性格を推定することも可能である。

２．方法

以下の手順で、昆虫の抽出を試みた。

1）試料を観察しながら水を加えて放置
2）篩の上で水洗しながら選別
3）肉眼および双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数

３．結果

分析の結果、昆虫化石はいずれの試料からも検出されなかった。

文献

森勇一（1994）石川県金沢市戸水Ｃ遺跡の井戸中から産した昆虫群集について．石川県立埋蔵文化財センター年報，14，石川県立埋蔵文化財センター，106-111.
森　勇一（1996）第２トレンチ３号井戸から産した昆虫群集．高崎市文化財調査報告書（第 145 集）下中居条里遺跡，都市計画道路下中居矢中線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1），高崎市教育委員会，123-127.

Ⅳ．リン・カルシウム分析

１．はじめに

土壌中に含まれるリンやカルシウムの起源としては、土壌の母材、動物遺体、植物遺体などがあり、遺跡の生活面や遺構内には遺体、排泄物、代謝物、食物残渣、燃料灰などに由来するリンやカルシウ

ムが蓄積している。カルシウムは一般に水に溶解しやすいが、リンは土壌中の鉄やアルミニウムと強く結合して難溶性の化合物となるため、土壌中における保存性が高い（竹追、1993）。このようなリンやカルシウムの性質を利用して、墓状遺構などにおける生物遺体（人骨など）の確認、および生活面や遺構面の確認などが試みられている。

２．分析方法

リン分析は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム分析は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法で行った（土壌標準分析・測定法委員会 ,1986）。以下に、その手順を示す。

試料 1.0g をケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸（HNO_3）約 5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）約 10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。また、別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg /g）とカルシウム含量（CaOmg /g）を求めた。

３．分析結果

リン・カルシウム分析結果を表 3 に示す。一般に、未耕作地の土壌中におけるリン酸含量は 3.0mg /g 程度であり、耕作地では 5.5mg /g 以上である（川崎ほか，1991，天野ほか，1991）。また、カルシウム含量は一般に 1 ～ 50mg /g であり（藤貫，1979）、含量の幅がリン酸よりも大きい傾向にある。農耕地では、施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の影響を確認するのは困難である。このため、比較試料（遺物・遺構外の試料）との対比を行う必要がある。

分析の結果、SX546 の糞層におけるリン酸含量は 11.42mg /g であり、糞層周辺の 8.84mg /g よりも比較的高い値である。また、糞層におけるカルシウム含量は 10.64mg /g であり、糞層周辺の 8.72mg /g よりも比較的高い値である。

以上の結果から、SX546 には何らかの要因によってリン酸やカルシウムが蓄積されており、とくに糞層には両者が比較的多く蓄積されていると考えられる。

文献

天野洋司・太田健・草場敬・中井信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編．土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発，p.28-36.

川崎弘・吉田澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編．土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発，p.23-27.

竹迫 紘（1993）リン分析法．第四紀試料分析法２．研究対象別分析法．日本第四紀学会編．東京大学出版会，p.38-45.

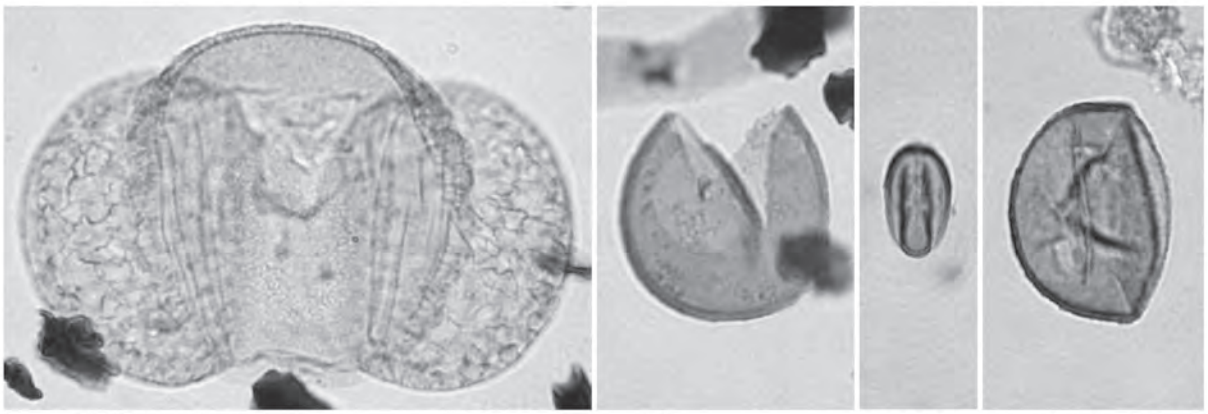
土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．博友社，354p.

藤貫正（1979）カルシウム . 地質調査所化学分析法．52，p.57-61.

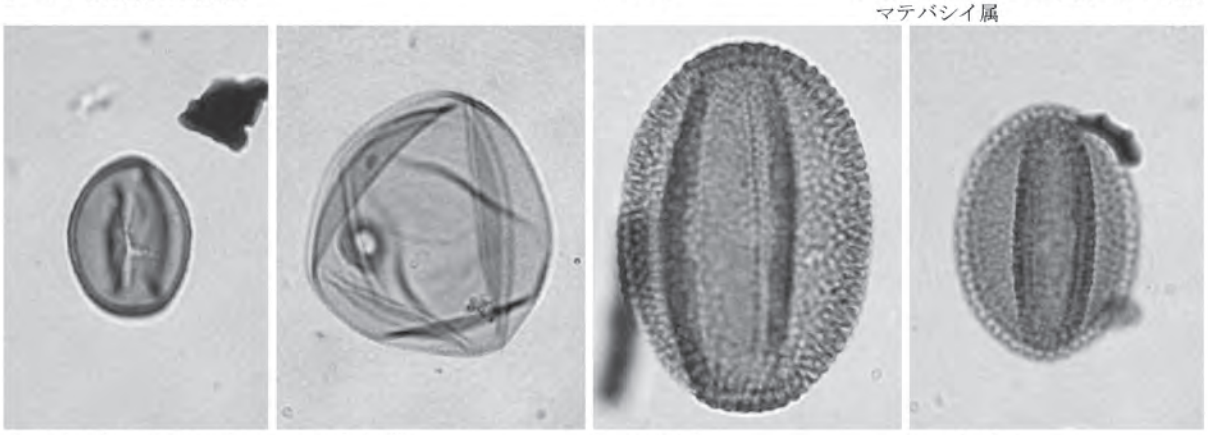
表１　博多遺跡群 172 次調査における花粉・寄生虫卵分析結果

分類群		SX546		SX433
学名	和名	糞層	糞層周辺	
Arboreal pollen	樹木花粉			
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	1	8	3
Cryptomeria japonica	スギ	2	7	1
Alnus	ハンノキ属		1	
Betula	カバノキ属			1
Corylus	ハシバミ属	1		
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属		11	1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	1	1	1
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属			1
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ			1
Zanthoxylum	サンショウ属		1	
Ilex	モチノキ属			1
Oleaceae	モクセイ科			1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科			3
Leguminosae	マメ科		1	1
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	9	14	88
Oryza type	イネ属型			6
Cyperaceae	カヤツリグサ科			3
Polygonum	タデ属			1
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節			1
Rumex	ギシギシ属			1
Fagopyrum	ソバ属			9
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	15	18	153 ＊
Caryophyllaceae	ナデシコ科	8	4	2
Ranunculus	キンポウゲ属			1
Cruciferae	アブラナ科	166	173	338 ＊
Apioideae	セリ亜科			1
Calystegia japonica	ヒルガオ			1
Lactucoideae	タンポポ亜科		6	
Artemisia	ヨモギ属	2	6	3
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子			1
Trilate type spore	三条溝胞子	1		
Arboreal pollen	樹木花粉	5	29	11
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		1	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	200	221	608
Total pollen	花粉総数	205	251	623
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	5.6 ×10^2	7.3 ×10^2	4.2 ×10^4
Unknown pollen	未同定花粉	1	2	1
Fern spore	シダ植物胞子	1		1
Helminth eggs	寄生虫卵			
Ascaris(lumbricoides)	回虫卵			166
Trichuris(trichiura)	鞭虫卵			1
Total	計			167
Helminth eggs frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の寄生虫卵密度			1.2 ×10^3
Digestion rimeins(?)	消化残渣（？）	(-)	(-)	(+)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(++)	(++)

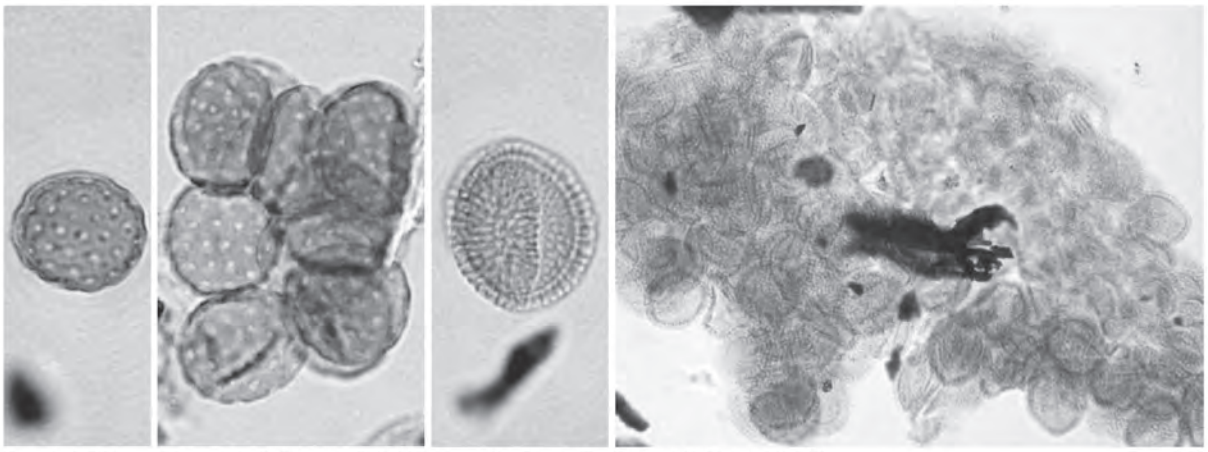
＊:集塊



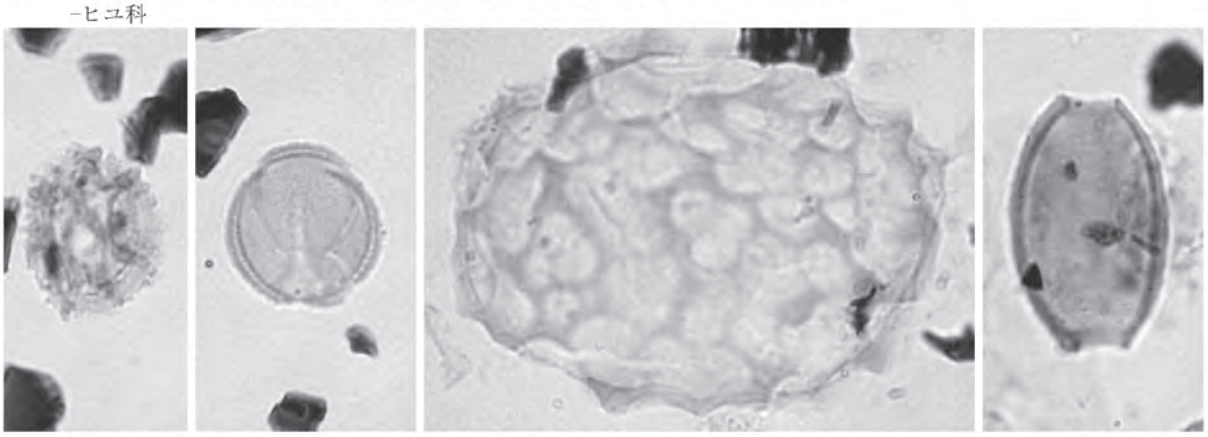
1　マツ属複維管束亜属　2　スギ　3 シイ属-マテバシイ属　4 コナラ属コナラ亜属



5 コナラ属アカガシ亜属　6　イネ属型　7　ソバ属　8　ソバ属



9　アカザ科-ヒユ科　10　アカザ科-ヒユ科集塊　11　アブラナ科　12　アブラナ科集塊



13 タンポポ亜科　14　ヨモギ属　15　回虫卵　16　鞭虫卵

1-11、13-16 ━━ 10μm、12 ━ 10μm

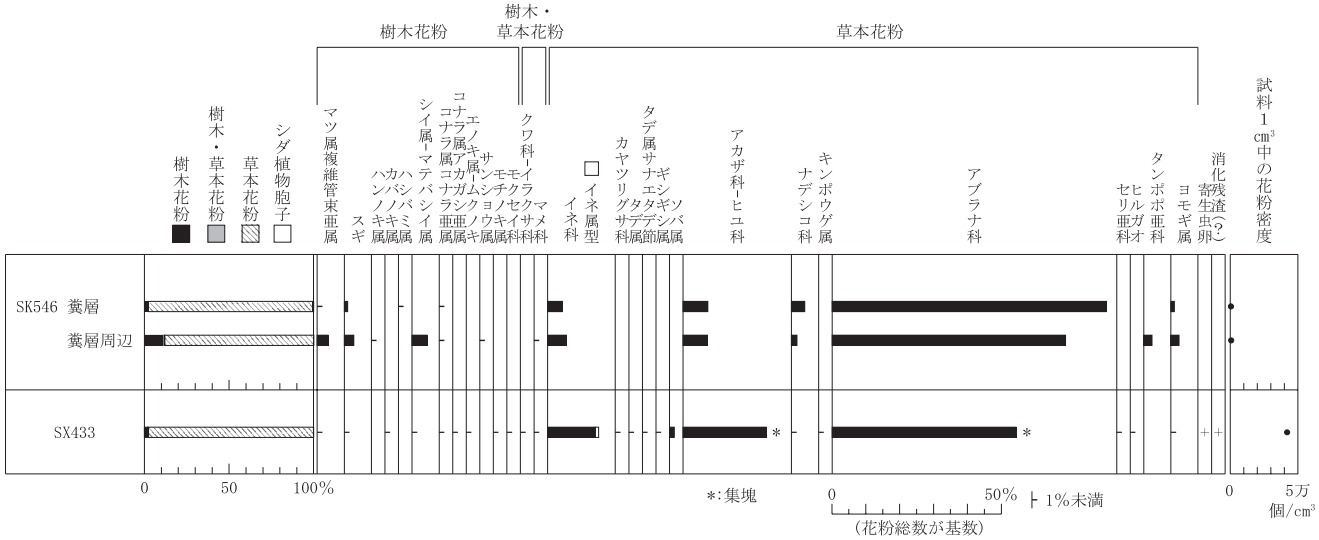


図１　博多遺跡群 172 次調査における花粉ダイアグラム

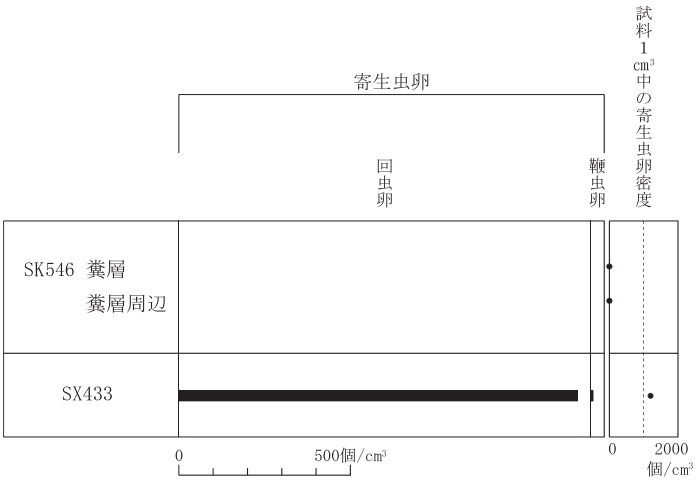


図２　博多遺跡群 172 次調査における寄生虫卵ダイアグラム

分類群		部位	SX546		SX433
学名	和名		糞層	糞層周辺	
Arbor	樹木				
Actinidia rufa Planch. ex Miq.	シマサルナシ	種子			247
		(破片)			153
Herb	草本				
Oryza sativa L.	イネ	炭化穎(破片)			1
		炭化果実		6	
		(破片)	3	11	
Setaria italica Beauv.	アワ	炭化果実		1	
Polygonum	タデ属	果実	1	1	1
Labiatae	シソ科	果実			1
Total	合　計		4	19	403

(500cm³中0.25mm篩)

表２　博多遺跡群第 172 次調査における種実同定結果

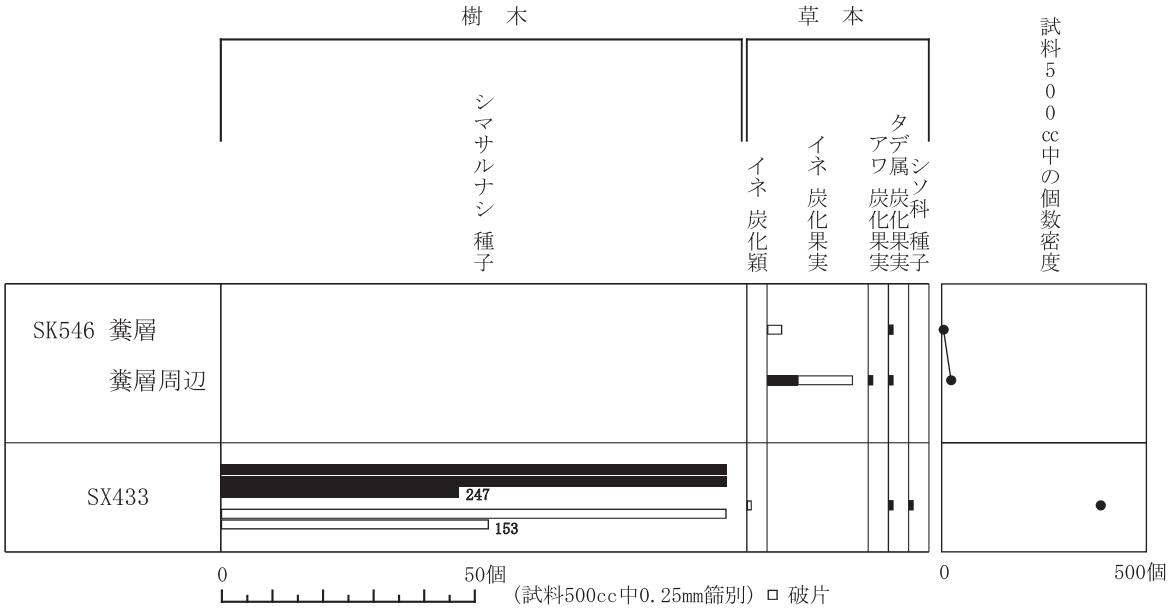
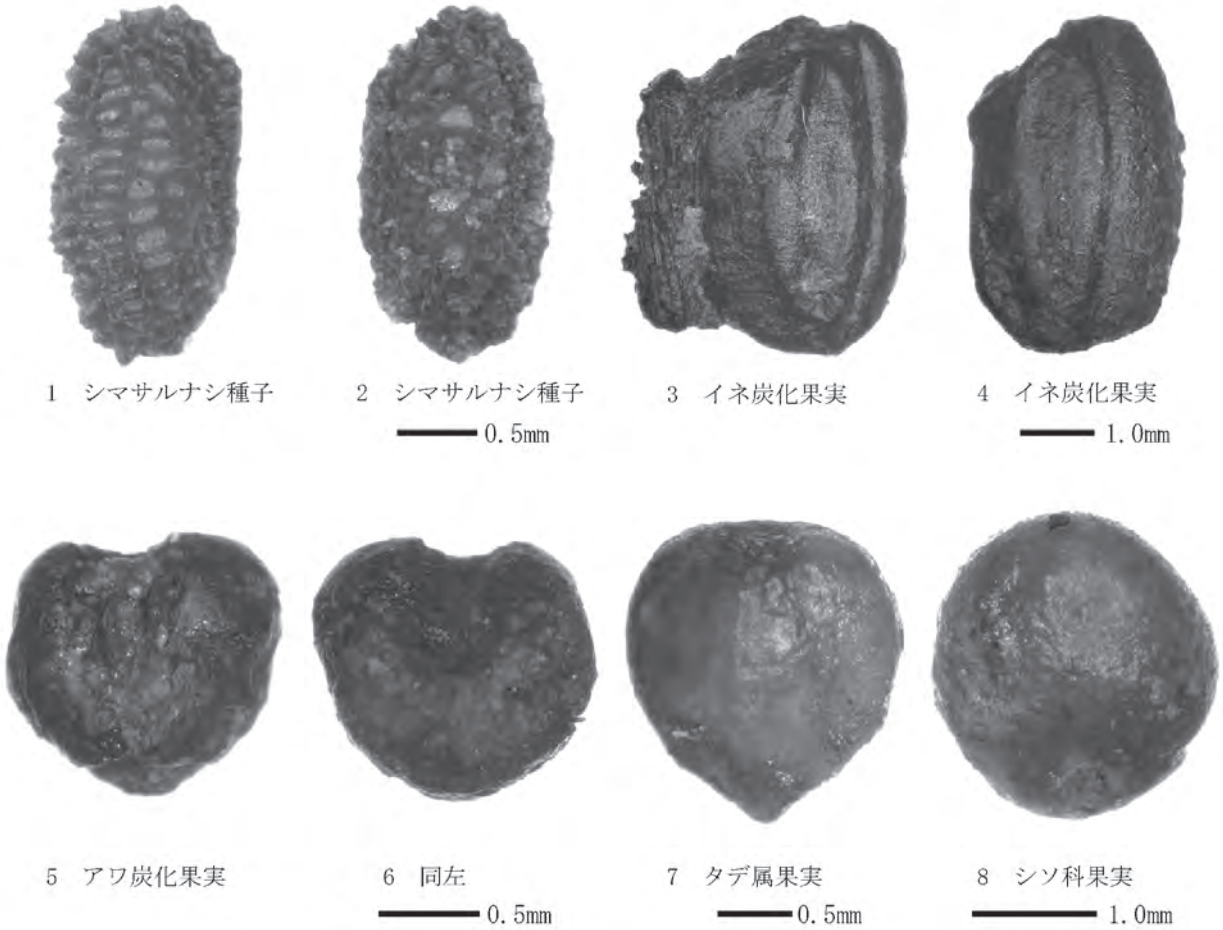


図3　博多遺跡第 172 次調査における種実ダイアグラム

博多遺跡群第172次調査の種実



試　　料	P2O5(mg/g)	CaO(mg/g)
SX546 糞層	11.42	10.64
SX546 糞層周辺	8.84	8.72

表３　博多遺跡群 172 次調査におけるリン・カルシウム分析結果

Ⅴ．まとめ

SX546（11 世紀末～ 12 世紀初頭）および SX433（11 世紀末～ 12 世紀初頭）について自然科学分析を行った。その結果､SX433 については回虫卵などの寄生虫卵が比較的多量に検出されることから、便所および糞便の堆積物と判断された。

花粉分析では、各試料ともアブラナ科が多く検出され、アカザ科－ヒユ科、イネ科（イネ属型を含む)、ソバ属なども認められた。アブラナ科についてはアブラナ（菜種）などが花芽を含めて食べられ、アカザ科－ヒユ科は花序ないし果実序が薬用となる。また、イネ属型（イネ）とソバ属については、これらが食用とされていたことを示している。

種実同定では、SX433 からシマサルナシが多量に検出された。シマサルナシは食用にもなる有用植物であり、寄生虫卵分析の結果と考え合わせると、食用とされたものの種子が糞便とともに排泄された可能性が考えられる。

SX546 については、寄生虫卵は検出されなかったが、花粉群集の特徴が SX433 と同様であること、種実同定で栽培植物のイネとアワが認められること、リン・カルシウム分析でリン酸やカルシウムの蓄積が認められることから、同遺構についても便所である可能性が考えられる。

博多遺跡群第 172 次調査ＳＫ－ 433・546 出土の魚骨について

山崎純男・奈良崎和典

博多遺跡群第 172 次調査 A 区の SK － 433、SK － 546 からは水洗選別により植物種子に混じって相当数の魚骨が出土している。以下、魚骨について検討する。

SK － 433 から出土した魚骨には次のものがある。

1、ニシン科（イワシ科）　*Clupeidae sp.*
2、ボラ科　*Mugililidae sp.*
3、アジ科　*Carangidae sp.*
4、タイ類　*Sparidae sp.*
5、ハゼ科　*Gobiidae sp.*
6、不明種
7、その他

魚骨の内訳はニシン科（イワシ科）の場合、脊椎骨 88 点、0.607g がある。脊椎骨高は最少 1.2mm、最大 3.9mm、遺存状態の良好な 20 個体の平均は 2.55mm である。ボラ科は脊椎骨 3 点、0.040g がある。脊椎骨高 2.5mm 前後である。アジ科は脊椎骨 31 点、稜鱗 1 点、0.358g がある。脊椎骨高は最小 2.8mm、最大 6.4mm、遺存状態の良好な 10 点の平均は 4.6mm である。タイ類は歯 2 点、0.058g がある。ハゼ科は脊椎骨 12 点、上顎骨（左）1 点、0.12g がある。脊椎骨高は最少 1.7mm、最大は 3.2mm、平均 2.36mm である。不明種は咽頭骨 1 点、0.015g で淡水魚と考えられる。その他、肩甲骨等があるが種の同定はできない。ウロコは種は同定できないが 19 点、0.05g がある。

SK － 546 から出土した魚骨には次のものがある。

1、ニシン科（イワシ科）　*Clupeidae sp.*
2、ウナギ科　*Anguillidae sp.*
3、アジ科　*Carangidae sp.*
4、タイ類　*Sparidae sp.*
5、コチ科　*Platycephalidae sp.*
6、ハゼ科　*Gobiidae sp.*
7、その他

魚骨の内訳はニシン科（イワシ科）の場合、脊椎骨 39 点、0.21g がある。脊椎骨高は最少 1.8mm、最大 3.4mm、遺存状態の良好な 10 個体の平均は 2.53mm である。ウナギ科は脊椎骨 5 点、0.058g がある。脊椎骨高 3.0mm 前後である。アジ科は脊椎骨 23 点、0.358g がある。脊椎骨高は最小 3.4mm、最大 5.9mm、遺存状態の良好な 10 点の平均は 4.34mm である。タイ類は脊椎骨 9 点、歯 3 点、0.199g がある。脊椎骨高は 3.0 ～ 5.0mm とばらつきがみられる。コチ科は脊椎骨 6 点、0.095g がある。脊椎骨高は 3.0 ～ 5.0mm とばらつきがある。ハゼ科は脊椎骨 34 点、0.136g がある。脊椎骨高は最少 1.3mm、最大 2.9mm、遺存状態の良好な 10 個体の平均 2.29mm である。その他，種不明の脊椎骨 32 点、0.219g がある。

両土坑から出土した魚類は種がほぼ共通していて、いずれも小魚である。遺構が便槽であれば未消化の骨が残ったものと考えられる。

報　告　書　抄　録

書　　名	博多 135　はかた 135		
副　書　名	博多遺跡群第 172 次調査報告		
巻　　次			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第 1086 集		
編集者名	池崎譲二・本田浩二郎		
発行機関	福岡市教育委員会		
所　在　地	〒 810-8621　福岡市中央区天神 1-8-1　TEL 092-711-4667		
発行年月日	2010（平成 22）年 3 月 23 日		
調査期間	2007. 05. 28 ～ 2008. 05. 16		
調査面積	2535㎡		
調査原因	オフィスビル建設		
所収遺跡名	博多遺跡群　はかたいせきぐん		
所　在　地	福岡県福岡市博多区冷泉町 63 番地		
市町村コード	40130	遺跡番号	0121
北　　緯	33°35′37″	東　　経	130°24′45″
種　　別	集　落	主な時代	弥／古／古代／中世／近世
主な遺構	井戸／竪穴住居／土坑／区画溝／甕棺墓・木棺墓・土坑坑坑墓／便所遺構／柱穴		
主な遺物	弥生土器／古式土師器／土師器／須恵器／貿易陶磁器／国産陶器／銅銭石器／鉄器／青銅製品／水銀／人骨／獣骨		
特記事項	博多遺跡群内において初めて弥生時代前期後半の遺構を検出した。古代の集落を確認した。鎮西探題に関わる遺構群・遺物を検出した。		

博　多　135

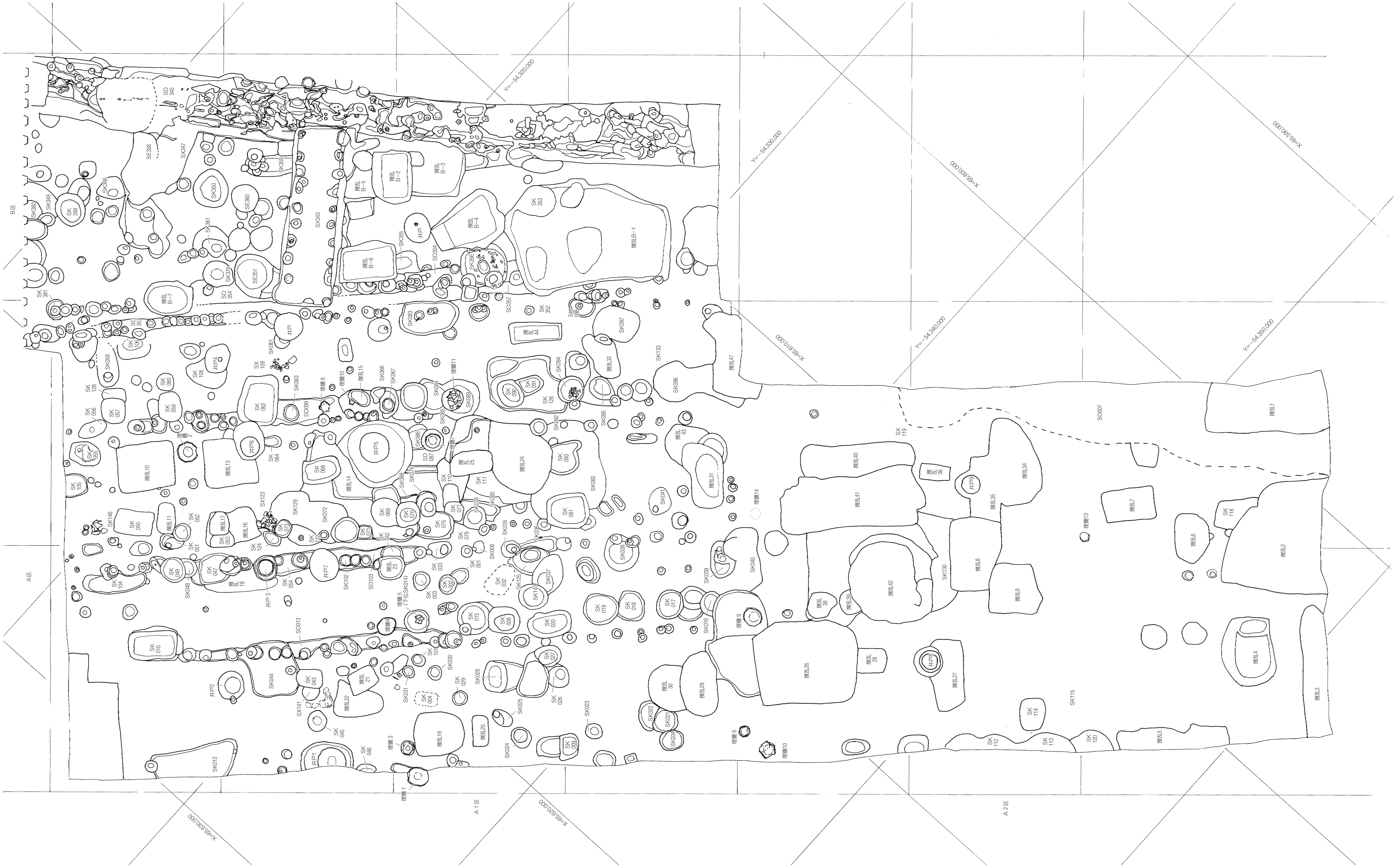
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1086 集

博多遺跡群第 172 次調査報告

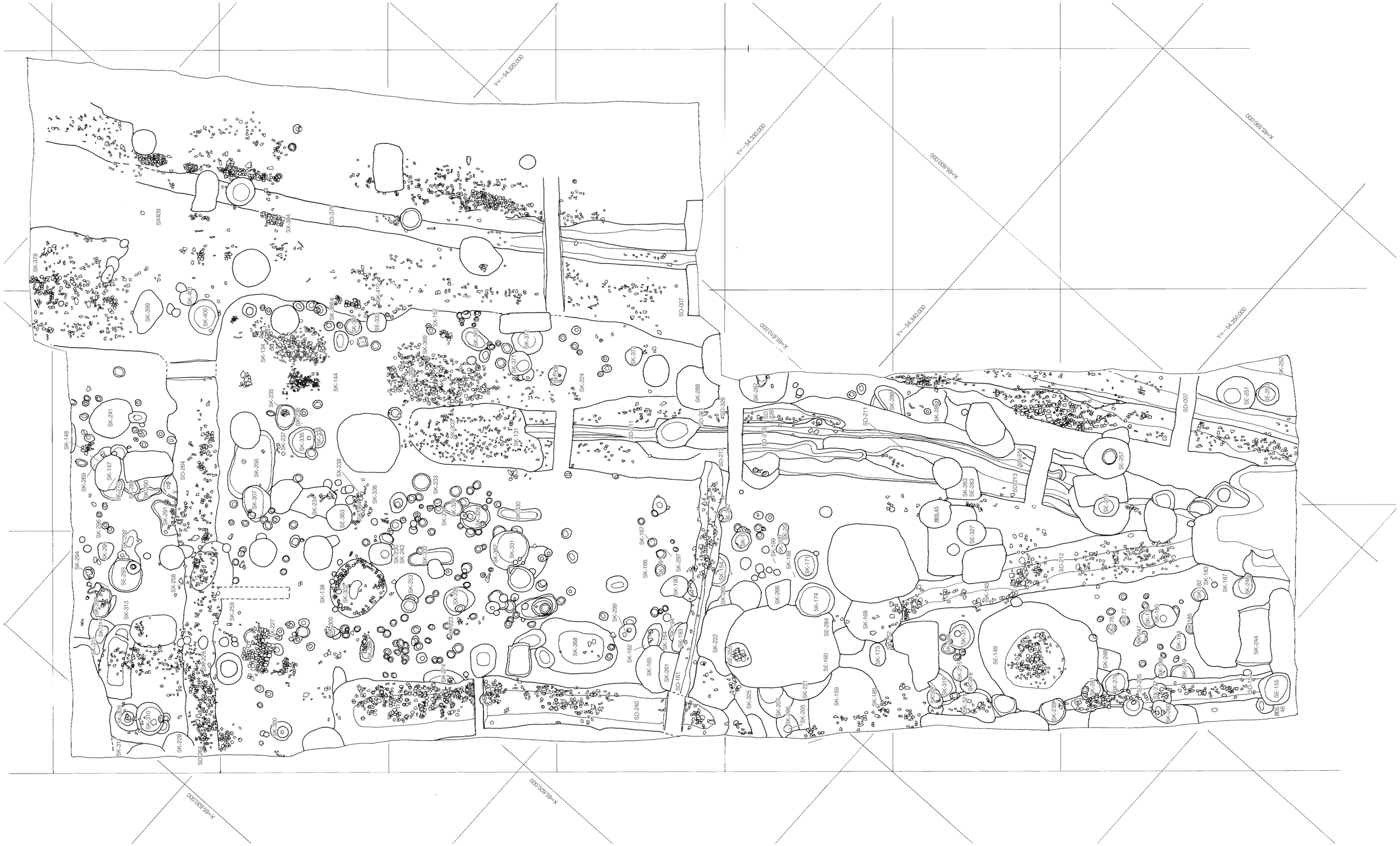
2010 年 3 月 23 日発行

発　行　福岡市教育委員会

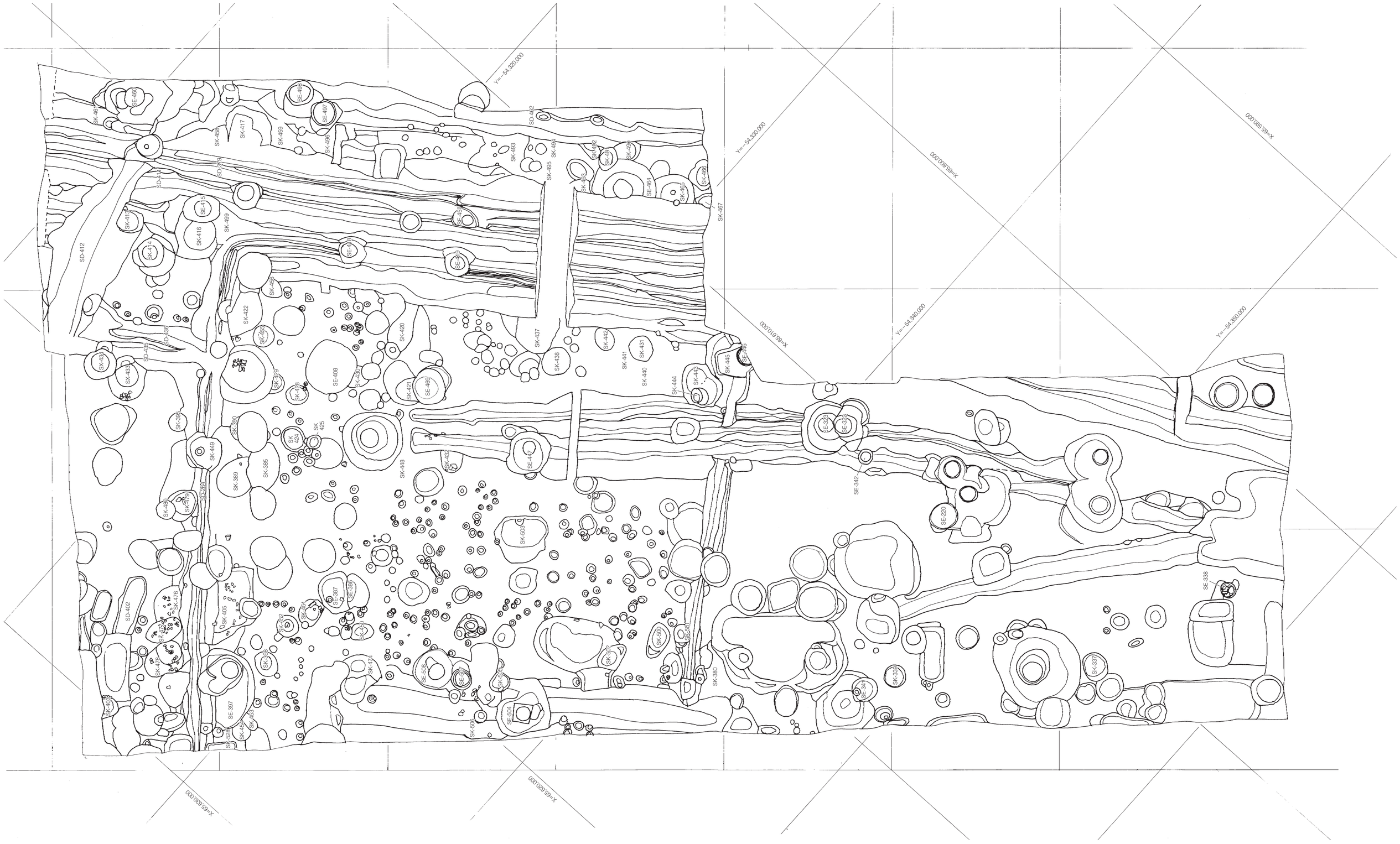
印　刷　株式会社 博巧印刷



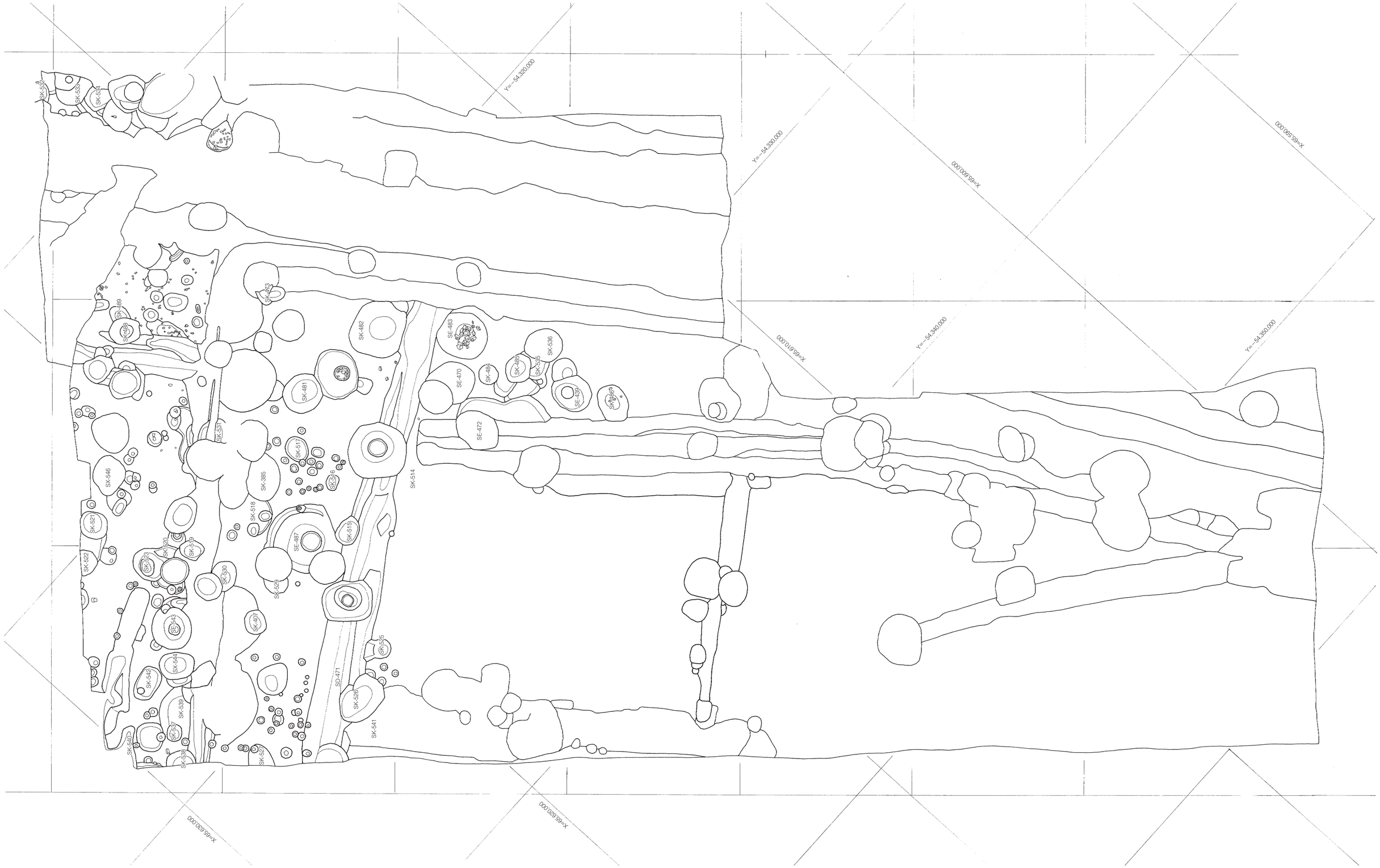
付図１　博多遺跡群第172次調査　Ａ・Ｂ区第１面遺構配置図（S＝１／100）



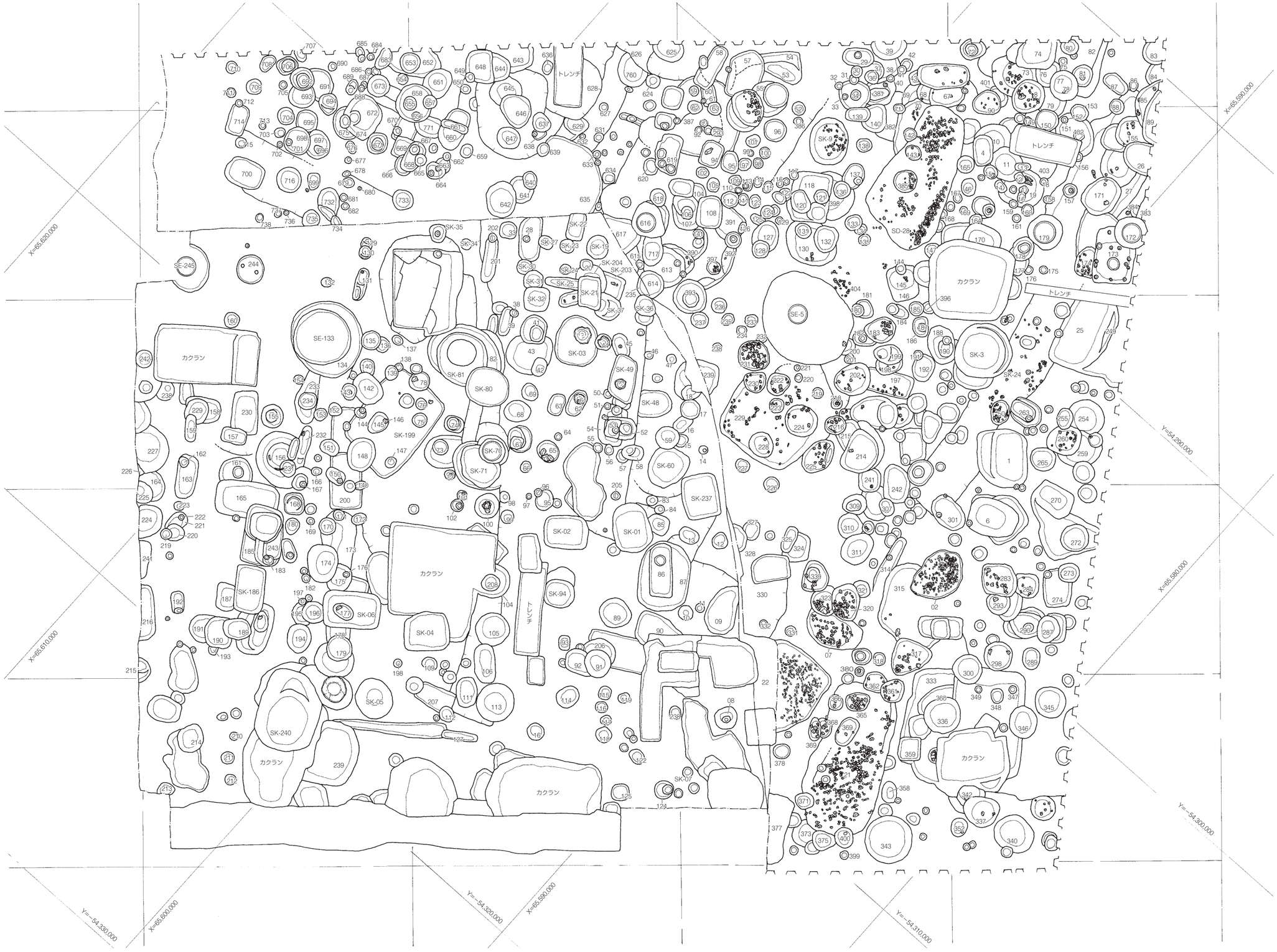
付図２　博多遺跡群第172次調査　Ａ・Ｂ区第２面遺構配置図（S＝１／100）



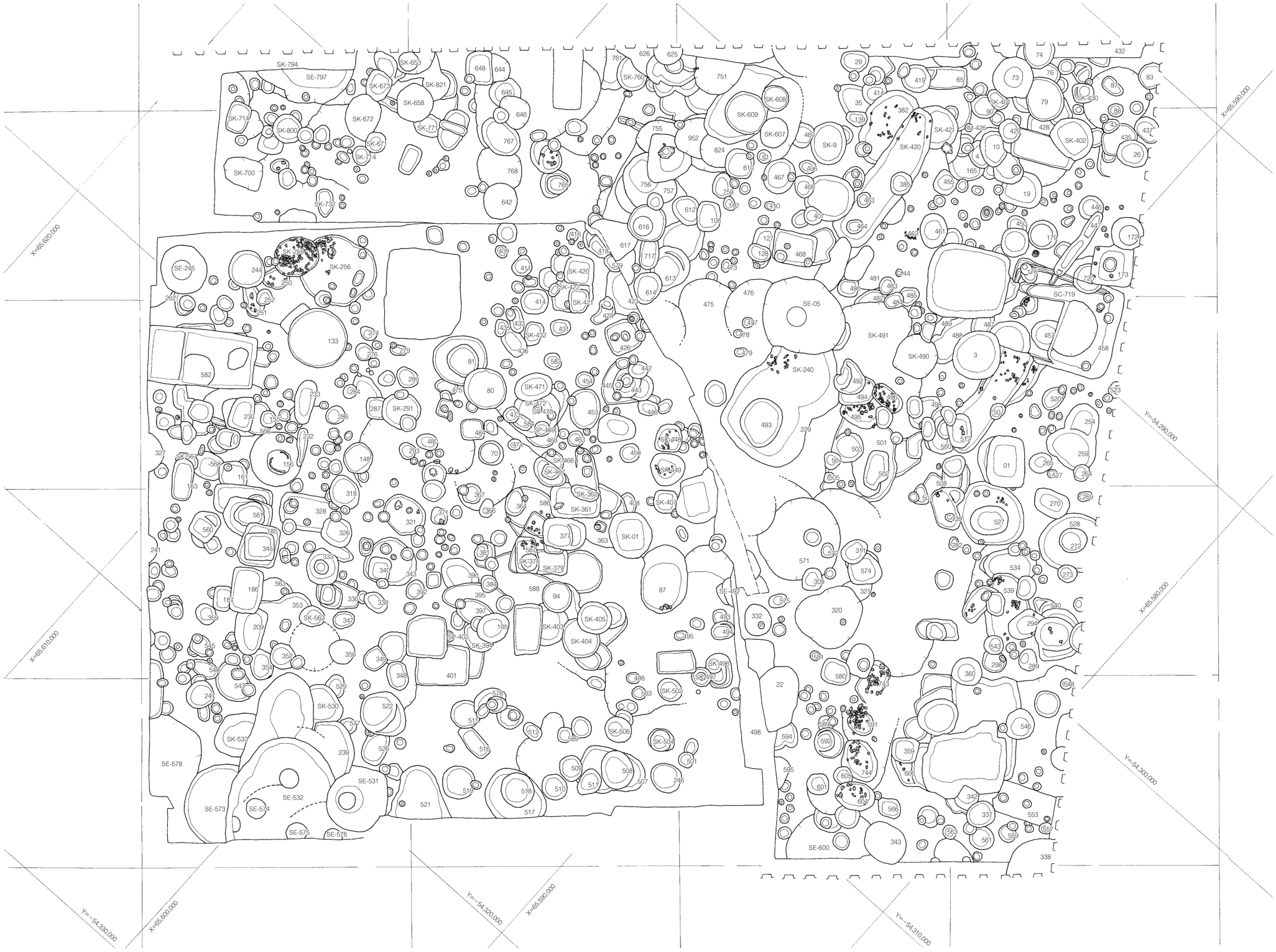
付図３　博多遺跡群第172次調査　Ａ・Ｂ区第３面遺構配置図（S＝１／100）



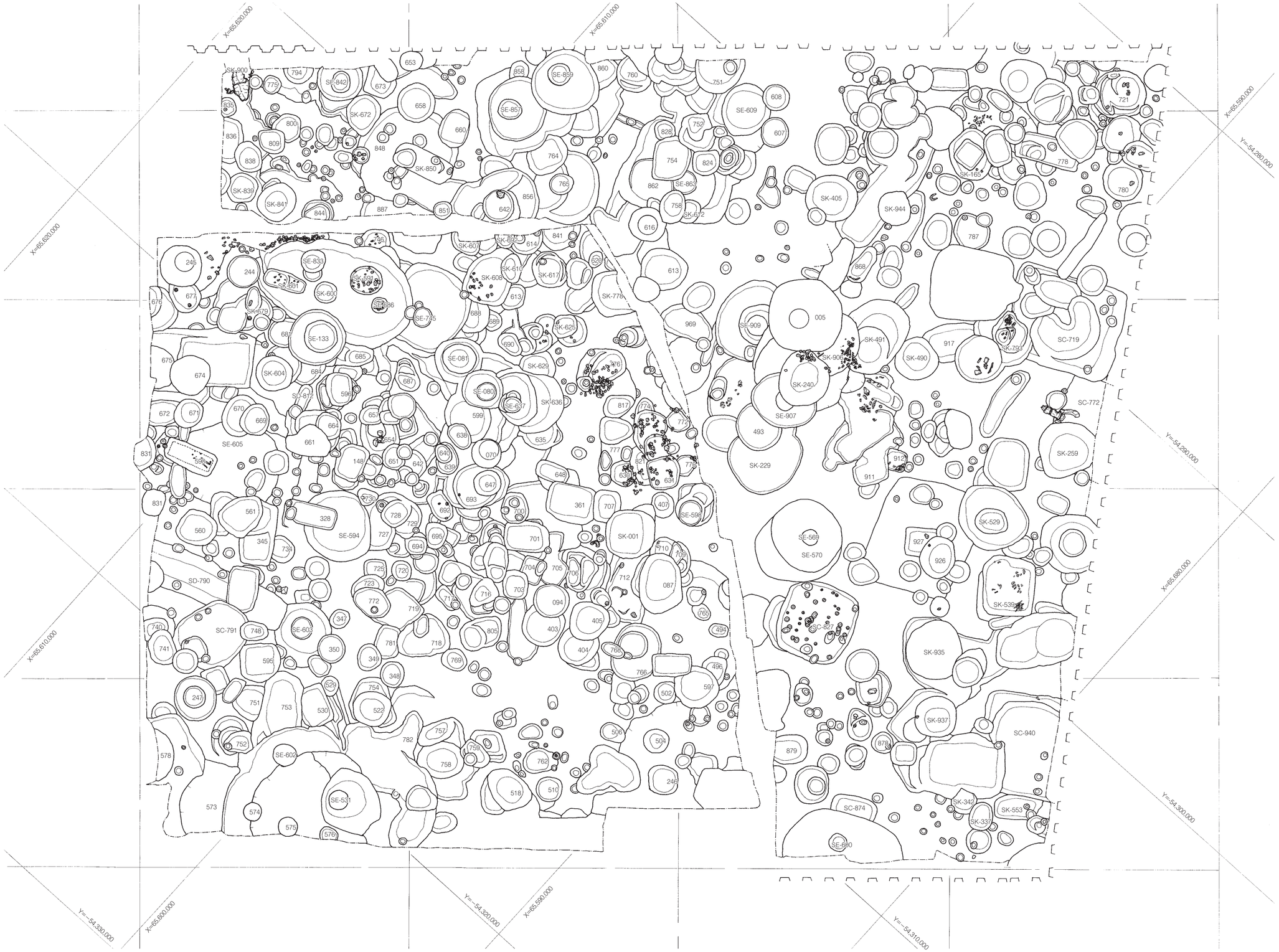
付図４　博多遺跡群第172次調査　Ａ・Ｂ区第４面遺構配置図（S＝１／100）



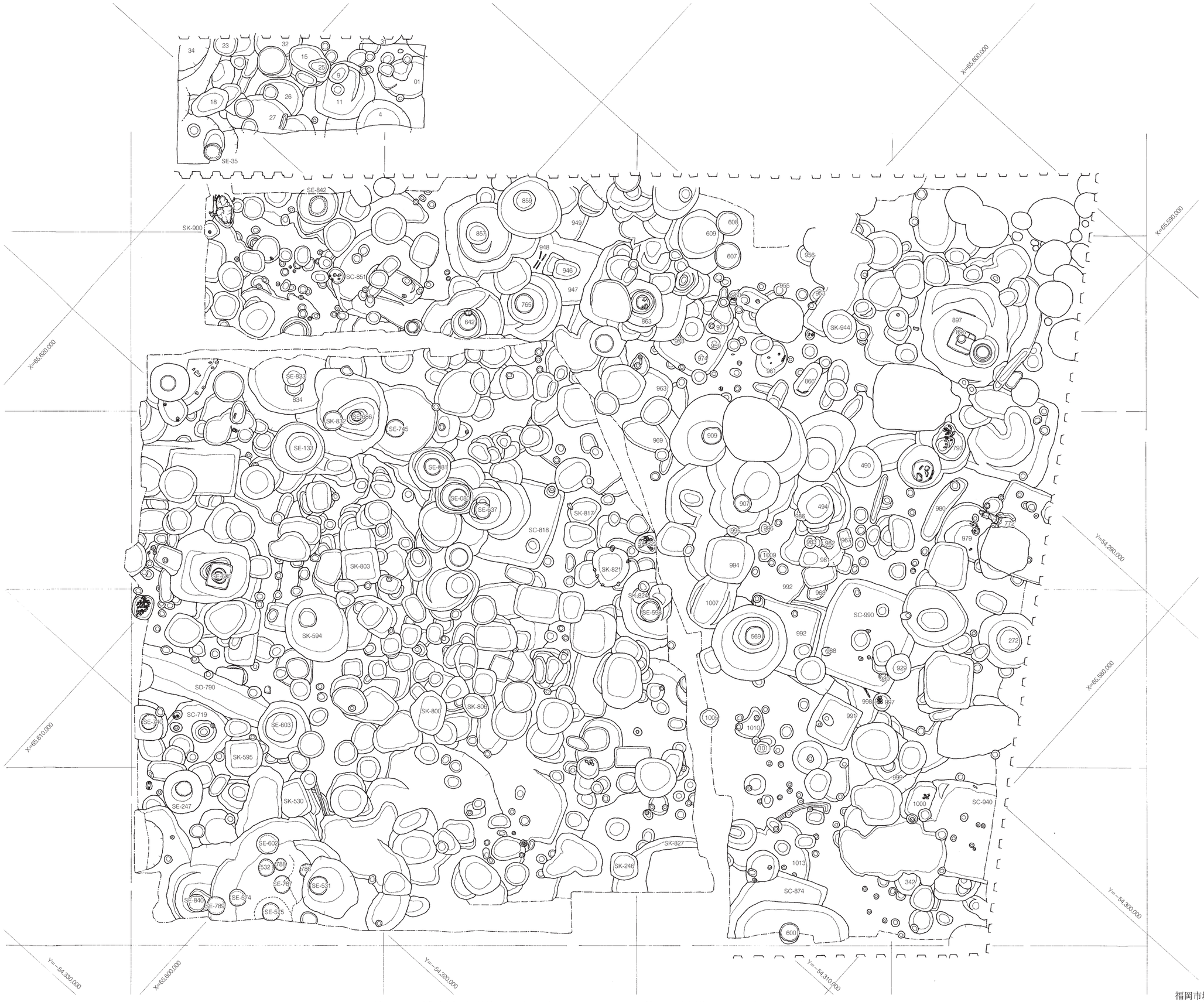
付図５　博多遺跡群第172次調査　Ｃ・Ｄ・Ｅ区第１面遺構配置図（S＝１／100）



付図６　博多遺跡群第172次調査　Ｃ・Ｄ・Ｅ区第２面遺構配置図（S＝１／100）



付図７　博多遺跡群第172次調査　Ｃ・Ｄ・Ｅ区第３面遺構配置図（S＝１／100）



付図８　博多遺跡群第172次調査　Ｃ・Ｄ・Ｅ区第４面遺構配置図（S＝１／100）